夜天のウルトラマンゼロ

滝川剛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜天のウルトラマンゼロ

【Ｎコード】
Ｎ６９６６Ｍ

【作者名】
滝川剛

【あらすじ】
Ｍ７８星雲、光の国出身『ウルトラマンゼロ』
第９７管理外世界在住『八神はやて』
本来決して出会う筈の無かった少年と少女の物語。
ウルトラマンゼロに襲いかかる魔の手。流れ着いた先で出会ったのは孤独な少女。２人の出会いがもたらすものとは…？
夜天のウルトラマンゼロ始まります。

※無印前から始まります。初期は殆どゼロとはやてのへっぽこ地球

日記です。
あらすじ変えました。只今A'ｓ編です。
感想制限はありません。
ただ今ちまちま修正中です。

プロローグ（前書き）

小説を一度も書いたことの無いドシロウトですので、至らない所が盛りだくさんあります。しゃれにならない位…

頑張りますので、どうか生暖かく見守ってください。

さて、このお話は公開前の映画『ウルトラマンゼロＴＨＥ　ＭＯＶＩＥ』の後の話となってます。

しかし映画の内容はあらすじ位しか分からないので、妄想で勝手に設定作ってます。
映画と比べて矛盾が絶対に出ると思われるのでどうか許して下さい。

後ウルトラマン関係に詳しくない方にも判る様に書いて行きたいのでよろしくお願いします。

プロローグ

それは突然の一撃だった。

『ウルトラマンゼロ』目掛けて、必殺の一撃が放たれたのだ。

ウルトラマンゼロは旅の途中であった。

別次元の宇宙に逃げ延びた『カイザーベリアル』を追い、ベリアルの組織した銀河帝国の軍団に仲間達と戦いを挑んだ。

ついにベリアルを倒したゼロは、その宇宙に留まり仲間達と『ウルティメイト・フォース』を結成、新たな『宇宙警備隊』を立ち上げた。

それからも様々な敵を倒し、警備隊も軌道に乗せる事が出来た。

自分の役目は終わったと感じたゼロは、自分を鍛え直すべく仲間達に別れを告げ、１人武者修行の旅に出ていた。

その時を狙われたのである。迫る死の一撃。だがそれでむざむざやられるゼロではない。

『野郎ぅっ！』

驚異的な反射神経と身体能力で、とっさに体をひねり何とか致命傷を避ける。

並みのウルトラ戦士なら今の一撃で死んでいただろう。何故ならその攻撃は、『ゼロスラッガー』に因るものだったからだ。

『ゼロスラッガー』とは、ゼロの頭部に備わっている2本の宇宙ブーメランで、あらゆる物を切り裂くゼロの必殺技の一つである。

ゼロを脅かす程のパワーで、同じ武器が使えるのは唯1人！

『貴様っ！まだ生きてやがったのかぁっ！？』

驚くゼロの前に立ちふさがるのは、凶々しい橙色と漆黒の体に、ゼロとまったく同じ姿をした戦士。

『ダークロプスゼロ』であった。

ベリアル銀河帝国で製造された『ダークロプスタイプ』のプロトタイプ。

『ディメンジョン・コア』なる強力なエネルギーで時空間をも移動し、量産型とは比べものにならない戦闘能力を誇る巨大機動兵器だ。

以前多次元宇宙でぶつかり合い、辛くも破壊する事が出来たが、その戦闘力パワーはゼロと互角以上であり、同じ武器能力を持った強敵である。

最悪のタイミングであった。此処に至るまで激しい修行の連続に、無法者の宇宙人船団と一戦交えて来たばかりで、エネルギーは残り少ない。勝ち目は少なかった。

今の体力では逃げるのも難しい。最もゼロに逃げるつもりなど欠片も無かった。

負けん気が強く、敵に背を向けるのなど我慢出来ないのだ。この辺りは修行が足りないらしい。

『行くぜぇっ！！』

ゼロは頭部のゼロスラッガーを両手に構え、高速でダークロプスに突っ込んだ。

ダークロプスも、『ダークロプス・スラッガー』を手にし迎え打つ。

数十メートルの巨人同士の激突は凄まじい。

スラッガー同士が打ち合わされると、込められたエネルギーが激しくスパークし、その斬撃の嵐は空間をも切り裂かんとする。

超高速の剣劇だ。一見互角に戦うゼロだが、じりじりと押されつつあった。

『チィッ！』

焦るゼロ。このままでは確実に先にエネルギーが尽きてしまう。胸の『カラータイマー』が点滅を始めていた。

一瞬ゼロの意識がタイマーに向いてしまう。ダークロプスはその隙を見逃さなかった。

ダークロプス・スラッガーの凄まじい斬撃の嵐がゼロに襲い掛かる。

『ぐわあああああっ！！』

全身を斬撃の乱舞が襲う。鋭い刃に切り裂かれ、ゼロの身体が火花を上げた。

『くそったれえっ！！』

苦し紛れに振り回したスラッガーが、ダークロプスの胸部を掠め、警戒したロプスは一旦後ろに退がった。機械であるダークロプスの戦闘は冷徹そのものだ。それに乗じて辛うじてゼロも距離を取る。

（ちくしょう…！）

ゼロは心の中で悪態を吐いた。ダメージは酷く、エネルギーも残り僅かだ。このままでは確実に殺られる…

（一か八かだ！）

彼は覚悟を決めた。スラッガーを握り直し、再びダークロプスに斬撃を放つ。

ゼロと体色以外のもう一つの相違点、赤く光る単眼目掛けて刃を振り下ろした。

漆黒の巨人はスラッガーで難なく斬撃を受け止め、素速く後退する。だがそれはゼロには想定内だ。

その隙にゼロは残りのエネルギーを全てつぎ込む。一発勝負に出る様だ。

『喰らいやがれぇぇっ！！』

ゼロはスラッガーを構え、一気にダークロプスに突撃した。その身体が凄まじいスピードで、掻き消すように見えなくなる。
初速で音速を遥かに超えていた。

『ゼロスラッガー・アタック』敵に高速で突撃し、二本のスラッガーで敵を切り裂く必殺技の一つである。
しかし無謀であった。この状況でそんな大技が当たるのであろうか？
高速で迫るゼロに、ダークロプスは素早く体を横に逸らし攻撃を避ける。完全に動きを見切られていた。

だがゼロの狙いは次にあった。すれ違い様にダークロプスの顔面を狙い、最後のエネルギーを込めて額の『ビーム・ランプ』から破壊光線『エメリウム・スラッシュ』をぶち込んだ。

緑色の閃光が無音の宇宙空間を明るく照らす。
しかしゼロの動きを読んでいたダークロプスは、スラッガーでエメリウム・スラッシュを跳ね返してしまった。

最後の力を振り絞った攻撃をかわされたゼロは、絶対絶命だ。

勝利を確信した漆黒の巨人は、止めとばかりに死神の鎌と化した

鋭い一撃を横殴りに繰り出した。しかし…

『掛かったな！！』

ゼロのしたり声と同時に、ダークロプスの腹部を銀色の長大な槍が深々と貫いていた。

『ガアアアアッ！？』

絶叫を上げるダークロプス。その赤く輝く単眼がゆっくりと消えて行く。致命的な損傷を内部メカに受けたようだ。

ダークロプスを倒した銀の槍は形を変え、ゼロの右腕へと戻りブレスレットの形を成した。

『ウルトラ・ゼロ・ブレスレット』様々な力を秘めている万能武器である。

威力が大き過ぎる『ウルテイメイトブレスレット』の代わりに、新たに精製したものだ。

エネルギーの消費とは関係無く使用する事が出来る。しかし今の疲れ切った体で使っても、容易くかわされてしまうとゼロは考えた。

そこで残りのエネルギー全てをダミーの攻撃に回し、ブレスレットの一撃に掛けたのだ。

失敗すれば一巻の終わりだったが、彼は見事に賭けに勝ったのだ。
さすがにゼロの戦闘センスはずば抜けていた。

しかし身体はもう限界だった。巨体を維持出来ない程に…その時である。機能を停止した筈のダークロプスの目に光が灯った。

《只では死なんぞっ！貴様も道連れだっ！！》

ダークロプスが両腕を振り上げ、ゼロに良く似た合成音声で叫んだ。
ゼロに向け機能停止寸前の体で、胸部の『ディメンジョン・コア』を稼働させる。体内からせり出した、胸部の巨大なレンズ部分が青白い光を放った。

『しまったっ！？』

ゼロが気付いた時には既に遅かった。巨大レンズが光を放つ。目も眩む凄まじい閃光であった。

《果てまで吹き飛べ！ウルトラマンゼロォォォッ！！》

次の瞬間周りの空間を揺るがして、強烈な光の竜巻がゼロを襲った。

相手を別次元に吹き飛ばす、ダークロプスゼロの最終兵器『ディメンジョン・ストーム』だ。

『うおおおおおおっ！？』

凄まじい光の渦の中、なす術も無くゼロは光の竜巻に飲み込まれ、その姿はこの世界から完全に消え失せてしまった…

つづく

プロローグ（後書き）

戦闘シーンは　難しいですね…　こんなんで　読んでる人　わかるか　心配です　もっと上手く書けるようになりたいですさて次は　２人の出合いです

第1話　ひとりぼっちの地球人とM78から来た男や

日本の何処かに在る、某県の海沿いの一都市『海鳴市』海と山に囲まれた風光明媚な所である。
その閑静な住宅街の一角に、かなりの大きさの立派な邸宅があった。

しかし大きな外観に関わらず、中はひっそりと静まり返っている。
その邸宅の広いリビングで、夜も遅いというのに電気も点けず、少女が1人ポツンと佇んでいた。
少女以外に人気は無い。広い邸宅内は人の気配が無い事も相まって、寂寥感さえ漂っているようだった。

少女は小学中学年程の年齢に見える。栗色のショートカットの髪に、黄と赤の髪留めをそれぞれワンポイントに付けた、穏やかな表情の可愛らしい少女だ。

足が不自由らしく車椅子に乗っている。何処となく儚げな雰囲気が彼女にはあった。

少女は天涯孤独だった。両親を早くに亡くして以来、ずっと1人で生きてきた。

せめて学校にでも行ければ、少しは違っていたかもしれないが、少女は原因不明の病気で歩く事が出来ず、今は学校も休学中だった。
通っていた時も休みがちだったので、仲の良い友人もいない。

クラスメートも、自分という人間が居たという事すら覚えているか怪しいものである。

少女『八神はやて』は、自分がいつのまにかマイナス思考に陥っていたのに気づき、苦笑いを浮かべた。

彼女は頭も良く、逆境にも負けない強さを持っているが、まだ小学生なのだ。心が折れそうになる時もある。

特に8歳の誕生日に、人気の無い静まり返った広い家で1人の時は…

はやては温もりの無い、薄暗い室内を見渡してまた考えてしまう。私はこのまま、一生1人きりなんだろうかと…？

自宅と病院、図書館を往復する以外にあまり外出もしない日々。車椅子の少女が1人気軽に外を出歩くには、日本という国はまだまだ障害が多い。

自然行動範囲は狭まり、他者との接触も減って行く。

自分の障害の事で、どうしても気後れしてしまうのも否めない。悪循環であった。

このまま行けば、何を成す事も無く誰にも必要とされず、誰にも愛されずに忘れ去られ、この家と共に1人朽ち果てて行くのではないか…

そんな殆ど恐怖に近い考えが浮かび、堪らない寂寥感が小さな体を押し潰そうとする。

負の思考のループに迷い込んでしまった様だ。

「あれ……？」

知らないうちに涙が滲んでいた。誰も見ている者など居ないというのに、少女はやては慌てて涙を拭う。哀しい習性だった。

1人にも関わらず強がってしまう。そうでもしないと、孤独感に負けてしまいそうになる時があるのだ。やはりまだ8歳の子供なのである。

はやては車椅子を動かし、庭に面したサッシをカラリと開ける。ともかく気分を切り替えたかった。

このまま落ち込むと、大好きな本を読んで物語世界に浸るぐらいでは、とても復活出来そうにない。

そんな事を鬱々と考えながら車椅子を進めようとした時、はやてはふと頭上に淡い光を感じた。

ハッとして夜空を見上げると、宝石を散らしたような一面の星空から、妙な姿をした人影がふわりと降りて来る所だった。

その人は空から降りて来ました。

最初目の錯覚かと思たんですが、間違いなくその人は空に浮いて

いました。

怪我をしとるんか、ふらついているように私の前にゆっくりと降り立ち、そのまま庭にうずくまってしまいました。

何か胸の辺りで赤い光がチカチカ光ってるんが見えます。

間近で見ると鉄仮面のような顔に、鎧に覆われた胸に肩、それに赤と青色に色分けされた体。

『星の騎士』そんな言葉が頭に浮かびます。一見着ぐるみかと思たんですが、直ぐ違うと分かりました。

顔や鎧も見た事もない光沢を放っていて、えらく生々しいです。まるでその部分も体の一部の様に、生きているように見えました。

赤と青の体も何か着ているというより、体そのものという感じです。

この人はこういう体をしているんやなあ…などと呑気に思ってしまいました。

私は怖くないんやろか?思てたより冷静な自分に驚きます。

怖いとか怪しいとかの感情は、不思議と浮かんで来ませんでした。

キラキラ瞬く綺麗な星空から降りて来る姿が、何かのおとぎ話の一場面みたいに見えて、見とれてしまったせいかもしれません。

それに星空から降りて来たなんて、星の王子様みたいやないですか…?何て思うんは乙女チック過ぎやろか…?

そんなちょっと恥ずかしい事を考えとったんですが、その人がエ

ライ辛そうに見えたので、心配になった私はとりあえず声を掛けてみようと思いました。

するとその人が、急に眩しく光り出しました。そしたらその人の姿があっという間に変わって行きます。

まるで映画の逆回しみたいに、銀の顔がぼやけて行きます。

光が消えた後には、傷だらけの１５、６歳位の男の子がうずくまっていました。

男の子はやっと顔を上げました。そこで初めて私に気付いたらしいです。切れ長の目が鋭い感じの、整った顔立ちの男の子でした。

民族衣装っぽい服がまた似合っとる。浮き世離れしたイケメンさんやなあ…と興味深く鑑賞してしまいました…

すると男の子は私を見て、目がまん丸になります。

ああ…この人こんな表情も出来るんやな可愛いなあ…なんて思っとったら、あっ、脂汗凄いかいとるわ相当焦っとる。

悪い事したかなあ?でも、ここ家の庭やし…

あっ、この人今必死で言い訳考えとる。分っかりやすい人やなあ…

おっ?ヨロヨロやのに立ち上がった。無理せんでええのに。

「すまん!見なかった事にしてくれ!」

男の子は地面にぶつかるくらいの勢いで、頭を思いっきり下げて来ました。
結局何も思いつかんで開き直ったようです。私は悪いとは思っても、堪えきれず大爆笑してまいました。

何とか次元振を抜けられたか…もうエネルギーが保たねえ…

『ダークロプス』に吹っ飛ばされた後、次元の狭間を流されていた俺は、運のいい事に元の世界の地球の、すぐ近くに出る事が出来たらしい。

記録映像で見た事のある、青く輝く美しい惑星が目に入る。お袋が住んでいた星…

いけねえ…ボーっと見入ってしまった。もう頭も上手くまわらねー限界だぜ…地球に降りてエネルギーを最小限に抑える形態にならねえと…

俺は大気圏を超え、地球の濃い大気の中に突入した。独特の香りがする。
ふと懐かしさを感じるのは、俺の中の地球人の血が反応しているせいかもしれない。
だがじっくり感慨に耽っている暇は無かった。『カラータイマー』

がもう限界を告げている。

地球に入った事で更にエネルギーを急激に消耗してしまったようだ。話には聞いていたが、なかなかにキツイ。

俺は身体のサイズを本来の４９メートルの大きさから、人間サイズに縮小した。

もう本来の大きさを保つ事すら出来ない。クラクラする頭で、やっと地上に降り立った俺は、最後の力を振り絞って、自らのＤＮＡを組み換える。

この間は『ラン』の体を借りたが、今はその余裕も無え…

自分に混じっている地球人の遺伝子を構築、人間としての俺に変化した。

妙な感覚だ。ランの身体を借りた時とはまた違った感じがする。

俺自身が人間と言う生命体になっているのだ。

言ってみればウルトラマンゼロが、人間として生まれていた場合の姿と言う訳である。

まあ…細かい事はいいとして、無事変身は完了。助かった…これでエネルギーがチャージ出来るまで人間に紛れて…

などと思いながら顔を上げると、目の前に不思議そうな目でこっちを見ている、１人の地球人がいた…

俺は絶句してしまった…

やっちまった？やっちまったのか俺ぇっ！？

地球に来たその日に正体ばれるなんて、不動の新記録作ってどー

すんだよ！誰も破れねぇよ！

物凄く焦った俺は、混乱する頭で必死に打開策を考えた。何とかこいつを誤魔化して立ち去る。これしかねえな…

俺は懸命に上手い言い訳を考えた。スラッガーが落ちそうになる位に考えた（今は載ってないが…）脳細胞が煙を上げる位に…

しかし無情にも霞みが掛かった俺の頭には、何１つ良い考えが浮かばない…

考えてみりゃ戦いと修行のみに明け暮れていた俺に、そんな気の利いた事言える訳がねえ。

俺は開き直る事にした。地球人は殆どがいい人ばかりだそうだし、俺も半分地球人だ信じよう！

「すまん！見なかった事にしてくれ！」

俺は自分なりに、目一杯誠意込めて頭を下げたのだが…おい！こいつ大爆笑してんじゃねえかよ！？

つづく

第1話　ひとりぼっちの地球人とM78から来た男や（後書き）

ゼロが　おまぬけになってしまいました…　はやての関西弁は関西の人でないので　怪しいです

第2話　地球（料理）いただきます！や

はやての爆笑が収まったところで、ゼロはヤケクソ気味に

「ばれちまったもんは、しょうがねえ！そうだ俺はウルトラマンだ！」

「ウルトラマン…？」

はやては首を傾げた、分からないという顔だ。そこでゼロはおかしいと感じた。

はやての反応もそうだが、家の様子や周りの街並みが古すぎる。

これでは以前、記録で見たはるか昔の地球ではないか？タイムスリップ？いや、それならば、はやてがウルトラマンの事を知らないのはおかしい。

「おい、あんた、じゃあこの世界は怪獣もいないのか？」

「ええ？　…そんなん、お話の中だけのもんでしょう？」

ゼロはがく然とした。ここはマルチパースの全く別の地球だ。『ディメンジョン・ストーム』により、無数に有る別の世界に流されてしまったのだ。

故郷が存在する世界でも、ラン達が居る世界でも無い全くの別世界。

ウルトラマンのこの身でも、帰るのはほぼ絶望的だった…

その事実の前に、最後に体を支えていた気力が尽きた。

そしてゼロの意識は途絶えた…

ゼロはそのまま、はやての前にがくりと倒れ込んだ。

「あかんって、こないなとこで倒れたら、せめて家ん中に入り」

はやてはほとんど意識が無いゼロを何とか立たせ、家の中に入らせる。

片手で手を引き、もう片方で車椅子を動かすので大変だ。

何とか居間のソファーに寝かせる事ができた。

大丈夫かと顔をのぞき込むと、気持ち良さげに寝入っている。思わずはやては笑ってしまった。

さて…と、一息ついたはやては、これからどうしようかと考える。

怪我をしているみたいだから、救急車か石田先生に連絡した方が…

石田先生とは、はやての主治医で、何かと気にかけてくれる優しい女医さんである。

（でも…この人何か普通やないし…ひょっとして調べられて正体が

ばれたら困るかもしれへんなあ…）

はやては考えた末、怪我の程度を調べてみる事にした。着ていた民族衣装に似た服をまくってみる。

体中痣だらけだった、切り傷すり傷もある。

内出血している所もあったが思ったより深い傷は無い、倒れたのはよっぽど疲れていたからしい。

安心したはやては救急箱を持ってきた。

効くかどうかは分からないが、今やれる範囲で打ち身の薬を塗り絆創膏を貼っておいた。

後は明日この人が起きてからにしよう…

はやては気持ち良さげに寝ているゼロに、毛布を持ってきてかけてやる。

一通りの事をやり終えたはやても休む事にする。部屋に戻りベットに入った。

（この家に私以外の人が寝とるのなんて、何年振りやろう…父さん母さんがお星様になってから初めてやな…）

はやてはとても安らかな気持ちになるのを感じた。

考えてみればとてつもなく怪しい人物なのだが、はやては悪い人では無いと確信していた。

あの姿を見られた時の焦り方、本当にまずかったのだろう。足の不自由な子供1人、どうとでも出来たろうに…

そんな考えは欠片も頭に浮かばない様子で、正面きって頼んできたのだ。

それもふざけて言ったのでは無く、あなたを信じます、という真っ直ぐな心が籠もっているのが感じられた。

それなのについ、それらも含めてとても可愛らしかったので、つい笑ってしまった。

（明日謝ろう…）

はやてはゆっくりと眠りに落ちていく、最後に頭に浮かんだのは…

（誕生日プレゼント…なんやろか…）

という思いだった…

ゼロはリズミカルな音と何やらいい匂いで目を覚ました。

爽やかな日の光がさしこんでいる、朝になったようだ起き上がるゼロ。

「痛っ！」

体が痛む、しかし昨日よりかなりましだった。回復してきているのだろう、

「あっ堪忍な?起こしてしもた?」

ゼロは声がした方を見る、キッチンで包丁片手に食事の支度をしているはやてがこちらを振り返る。

「いや…」

ぼそりと答える。どうやらこの子に助けられたようだ。傷の手当てもしてある。

「すまねえな、その足で大変だったろ…」

ゼロは、はやての足に気づいて礼を言う

「慣れたもんやから気にせんどいで…」

にっこり笑って、はやては車椅子を操作してこっちにやって来た。

「もうすぐご飯が出来るけど、その前に傷の手当ての続きをせんと…」

そう言って救急箱を取り出す。ゼロは手を振り、

「いや、もう大丈夫だ…」

と慌てて言うが、はやては首を振り、救急箱を開け、

「あかん、まだ背中とかは手つかずやし、ばい菌入ったらどないするんですか？」

看護師さんが聞き分けの無い患者にする様に語り掛け、塗り薬片手にゼロに詰め寄るはやてだったが、ふと思い当たり、

「ひょっとして、普通の薬は効かんとか？私余計な事を？」

青くなるはやてを見かねて、ゼロはフォローしてやる。

「そんな事あ無えよ、今の体は人間としての俺の体だ、何しろ半分は地球人の血が混じってるから、この体は完全に人間だ、薬も効くぜ」

それを聞いたはやては安心したのかホッとした表情になった。

「ええと…ほなら今薬塗りますよ…と？」

はやてどうやら名前を呼ぼうとしたが、まだ名前を聞いてないのに気付いたらしい。ゼロが自己紹介してやる。

「俺の名前はゼロだ、ウルトラマンゼロ」

「私ははやて、八神はやて言います。よろしゅうゼロさん」

はやては嬉しそうにぺこりと頭を下げた。

ゼロの背中に薬を塗りながらはやては、興味津々で尋ねる。

「ゼロさんは、どういう人なんですか…？」

「簡単に言うと宇宙人だ…」

ゼロは、自分が別の世界から来た異星人である事、その世界の地球では数多くの怪獣や宇宙人が現れ大変な事、それらから地球を守る為ウルトラマンが派遣されていた事を話した。

正体も見られてしまったし、ウルトラマンも居ない世界では構わないだろうと、開き直ったのだ、ほとんどやけくそである。

「向こうの世界って、そないな事になっとるんですか…」

はやては好奇心で、目を輝かせて聞き入っている。

「で…色々あって、ここに来てしもて、帰れんようになったゆう事ですか…」

はやてから改めて、今の状況を言われると、なかなか悲惨な状況である。

深刻になっていると

「ググ～！」

と大きな音が鳴り響いた。ゼロが慌てて立ち上がる。

「なんだ？いまの音！俺の腹から聞こえてきたぞ！？」

驚くゼロに、はやてはクスリと笑いながら、

「お腹の虫、ゼロさんおなかすいたんやね～」

その言葉を聞いて、青くなるゼロ。

「腹のなかに虫がいるのか！？バカな…知らないうちに、『ノコギリン』でも入ったっていうのか！？」

ちなみに『ノコギリン』というのは、『帰ってきたウルトラマン』に出てきた、クワガタ型の昆虫怪獣で、身長５０メートルある。って入るかい！そんなん。

未知の感覚に、さすがに冷静さをなくすゼロであった。

「あの～一人で盛り上がってる所、悪いんやけど…」

クスクス笑っていたはやてだが、さすがに見かねて、

「おなかの虫いうのは物の例えや、ゼロさんの体がごはんを食べたいいう、信号を出しとるんやよ」

「そ…そうなのか…？」

只の生理現象と分かって、ほっとするゼロ。

「本当に分からないんやね…」

かえって感心してしまうはやてである。見ていて飽きないなと思う。

「仕方ねえだろ…人間としての俺になったのは、今回が初めてなん

だからよ…」

幾分拗ねた口調になるゼロ。負けん気の強い彼が、こう立て続けに動揺している姿を見られるのは、かなり凹むものだった。

はやては、そんなゼロににっこり笑いかけ

「ええやないですか、何でも初めては、ええもんですよ。じゃあ初めてのごはん食べましょ」

何やらいい匂いと、はやてに急かされゼロはテーブルに座る。テーブルには見事なまでの、これぞ日本の朝食という感じの料理が並んでいた。

出し巻きたまごに、焼き鮭、ほうれん草のおひたし、筑前煮、焼き海苔に豆腐とワカメの味噌汁に炊きたてのご飯。

見事な日本の朝食だが、それだけではない。

焼き鮭はあらかじめ骨を抜いておき、ご飯も少し柔らかめに炊いてある。

弱っていたゼロの体の事を考えて作られた料理だ。筑前煮も何か張り切ってしまって、早く起きて朝作ったものである。

作った人の人柄が伝わる料理だった。

はやてに食べ方を教わりながら、恐る恐る食べてみる…

「うめえ！」

思わず口に出していた。

「これが食べるって事かあ！」

基本光エネルギーで生きているウルトラマンのゼロにとって、初めての食事である。ぎこちない食べ方だが、次々と料理を空にしていく。

途中詰め込みすぎてむせたが、はやてからお茶をもらいすぐさま食べるのを再開する。

そしてはやてが念のため、多めに炊いたご飯やおかずもすべて食べ尽くしていた。

はやてはそんなゼロを見て、とても嬉しそうに頬を染める。

「口にあったようで良かったわ」

「ああ、すげーうまかった。それに…何か懐かしいような気がしたな…」

「懐かしい…ですか…？」

意外そうなはやてに、ゼロはしみじみと感慨深げに、

「ここは日本だろ？俺は日本語しか地球の言葉知らねえし、俺のお袋は、はやてと同じ日本人だって聞いてっから…何か合うんじゃねえか…？」

「へえ…そっ…そうなんや…」

はやては、えらく照れくさそうだが、気を取り直すように、

「ゼロさんは、これからどないしはるんです？」

と聞いてみた。ゼロは腕を組んで考え込み、

「正直　さっぱりだ…仕方ねえから、どっかの山にでも…」

「そんなら、このまま家に居ればいいやないですかっ？」

ゼロが喋ってる途中で、はやてが割り込んで来た。

「それが一番ええですよ、何にしても住む所は必要やし、第一ゼロさんお金だって持って無いやろ？その点、うちは父さんの友達が遺産の管理をしてくれて、食うには困らんし、ゼロさんの１０人位養える余裕があるんやっ」

ゼロに喋らせるスキを与えず、一気にまくし立てた。
ゼロは一気にたたみかけられ、目を白黒させる。

「でもよ、ウルトラマンが居ない世界じゃあ、俺ってすげえ怪しくねえか？辞めた方が…」

「ゼロさんは怪しくなんか無いし、いい人や、私には分かる…」

はやては短い間ではあるが、ゼロの人となりを理解していた。
そして何より、この人と暮らせたら嬉しいだろうなと感じていた。
それに誕生日に現れたゼロを、亡くなった両親からの贈り物のような気がしたのだ…

そんなはやての心の内も知らずゼロは感動していた。

（こんなに、見ず知らずの俺を心配してくれるとは…やっぱり地球人は優しいんだな…）

などと素直に思っていた。ウルトラ戦士の中で、例外的にやんちゃで一番口が悪い彼だが、基本的に人がいいのだろう。

「分かった世話になる…よろしく頼むはやて」

その言葉を聞いた、はやての顔が花が咲いたように明るくなった。

「こちらこそ…よろしゅうゼロさん」

とても嬉しそうに深々と頭を下げるはやてにゼロは困った様に頭をかき、

「そんな改まんなよ、名前もゼロでいい」

顔を上げたはやては、人差し指を額にあて少し考え込む、

（さすがに呼び捨ても何やし…さん付けも他人行儀やし…あっ！）

思い付いたはやては、幾らか照れくさそうに、

「ほなら…ゼロ兄って呼んでええ…？」

「おうっ構わねえぞ、俺達ウルトラ族には兄弟てのは、特別な意味が…」

「そっち兄やないよ、あくまで年上の人への呼び方や」

「そ…そうか…」

はっきりそう言われて、少々凹んでしまうゼロだった。

はやては、つい兄妹を否定するような事を言ってしまい、ゼロがしょんぼり気味になったのを見て心が痛んだが、そのままにしておく事にした。

何となく、ゼロに妹として見られるのが嫌だったから…

こうして2人の生活が始まった。

つづく

第2話　地球（料理）いただきます！や（後書き）

映画とかでは母親不明のゼロですが
このお話の中ではアンヌ隊員が母親という設定になっています。
実際の所アンヌ隊員が母親じゃないと、地球に来る前に結婚していてゼロも生まれていたのに
ほっぽって現地妻のアンヌとラブラブだったなんて事に…
たとえ地球に来る前に奥さんが死んでいたとしても、やっぱりゼロをほっぽったうえ、一度も親だと名乗ってない外道セブンになるのでは…
誰が見たいんだ！そんな昼メロ話！

という訳でこのお話のゼロはアンヌ隊員の子供です
計算すると、多分、千歳前位かなと、
映画でも非常に若いとなってましたので地球人だと１５、６歳くらいとしてます。

第3話　決戦！（嘘）海鳴大学病院や

次の日、ゼロの傷は、ほぼ塞がっていた。
感心するはやて、

「凄いなあ、もう治りかけとる。うん、これならお風呂に入ってさっぱりした方がええよ」

「オフロ？」

ゼロは不思議そうに聞く。

「分からんか…え～と、体の汚れを落として疲れをとる所や」

ゼロはそれを聞いて納得顔をする。
はやてに案内されて風呂場に行ったが、どうすれいいかわかない。

「はやて、どうすればいいんだ？」

ウルトラ族は、体の汚れやリフレッシュに、『プラズマ・シャワー』という光の粒子を浴びる位なので、入浴というものがちょっとピンと来ないのだ。
そんなゼロに、はやては使い方や入り方を一から教える。

「ああ、だいたい分かった。ちょっと面白そうだ。」

たちまち覚えてしまった様だったので、安心して台所に行き夕食の後片づけをする。

今日もゼロは、たっぷり食べた。見ていて嬉しくなる見事な食べっ振りである。

（誰かと食べるのは楽しいなあ）

思わず顔がほころぶはやてだった。

片づけも終わり、一息つく事にする。

この間借りてきた本を、少し読んで見ようとページをめくる。

とても面白くつい読み耽っていた。

気が付くと、2時間近く経っていた。

「しもたっ、もうこんな時間やゼロ兄？」

そこではやては、ゼロの姿が見えない事に気付いた。

「ま…まさか…」

いや～な予感がして、大急ぎで浴室に向かう。扉を開くと熱気が凄い、

「ゼロ兄！？」

そこには、見事に茹で上がっているゼロの姿があった…

はやての声に反応して顔を向ける。

「ち・地球の…お風呂とやらは…なかなか気持ちいいな…だが…これしき俺には軽いぜ！フハハハ…」

と…どう見てものぼせている男は、そうのたまった…

「かんにんなゼロ兄。初めてやから、私が気い付けなあかんかったのに…」

頭に氷嚢を乗せて、ソファーにぐってりしているゼロに、はやては申し訳なさそうにうつむく。

ゼロは体を起こし、きまり悪そうにして

「いや…そのな…俺も途中で、やばいかなと思って出ようとしたんだが、何か、負けた様な気がして、つい…な？」

はやては吹き出してしまった。

「もう…お風呂は我慢する所やないで、ゼロ兄はしゃあないなあ。」

笑いながらも、この後しっかり注意しておくはやてだった。

地球生活2日目のゼロはまだ、こんな感じである。

さて、ゼロが八神家に来てから、さらに3日が過ぎた。
その間、はやてから日常に必要な事や、一般常識を教えてもらっていたのだ。
一通りの常識（少し怪しいのだが…）を身につけた所で、はやては外に出てみようと提案した。
知識だけより、経験も大事だと思ったのだ。
何しろゼロの地球に対する知識は、『えらく厳しい格闘技の師匠』に『ちょっと天然気味の先輩』から聞いていた話に、記録映像位なので色々間違っていたり、偏っていたりしているのだ。
はやての車椅子を押しながら、とりあえず図書館目指して出発する。
あまりに故郷と違うので、キョロキョロしてしまう

（まるで、おのぼりさんやな…）

そんなゼロを見て、おかしくなるはやて、
しばらく行った所で、ゼロの様子が変な事に気づく。
どうも車が通るたびに異常に警戒しているのだ。

「ゼロ兄?確かに車には気いつけた方がええけど、そこまで緊張せんでええよ」

はやては、声をかけるが、ゼロは緊張を解かず、

「いや…師匠に聞いたんだが、車ってのは恐ろしいもんで、どこまでも追われて、ひき殺されそうになった。車というのは怖えって、さんざん聞いたからな！
はやてももっと気をつけねえと、危ねえぞ！」

大真面目な顔で言った。
ゼロの言う師匠とは『ウルトラマンレオ』の事である。
レオが地球で戦っていた時とある敵に敗れた、その敵に勝つ為の技を編み出せと命令されたレオは、延々と車に追い回され、ひき殺されそうになるという地獄の特訓を受けたのだ。
レオはちょっとトラウマになったようである。
ちなみに命令を出したのもレオを車で追い回していたのも、ゼロの父親なのだが…
理由を一通り聞いたはやては、

（ゼロ兄…それって絶対からかわれとるよ…）

と心の中でのみ、突っ込んでおいた。

いちいちカルチャーショックを受けながらも、図書館にたどり着いた。
紙の記録が珍しいゼロは、興味深そうだ。
はやてに言われた本を大量に持って来て、勉強用の机に置く、百貨辞典や社会の仕組みに関するもの、歴史書地理などの分厚い本ばかりである。
はやてはゼロの横について

「とりあえず、基本的なやつをピックアップしてみたんや。

ネットもいいんやけど、数も多いし色々ありすぎて混乱しそうやから、まずは基本から行ってみよ」

しかし、凄い分量である。
だが、ゼロは気にした風もなく読み始めた。
どんどんページをめくるスピードが上がっていく
やがてその速度は、ただページをめくっているだけの速さになった。
辞典クラスの本の山が、瞬く間に読破されていく。
さすがにウルトラマン、知能指数はとんでもない。
何しろ最初に地球に来た時、日本語が話せるだけで読み書きもできなかったのを1日でマスターしてしまった位なのだ。
その後も本を読みまくり、数時間で数百冊の本を読みきった…

だいたい、一週間ほど図書館に通い、はやてにも教わって、とりあえず日常生活を送れる様になった。

それから1ヶ月、季節は夏に入っていた。
今日は今までの特訓の成果を試す日である。
海鳴大学病院に行きはやての主治医、石田先生にあいさつをするのだ。

「へえ～海外留学していた親戚の子なんだ？」

石田先生は驚いた顔で言う。はやては天外孤独だと思っていたからだ。

「モロボシ・ゼロです。よろしく…」

真面目くさって、あいさつするゼロである。

「しかし、凄いわね。外国の学校を飛び級で進んで、１５才で大学を卒業…それを機に日本に帰って来て、はやてちゃんの現状を知り一緒に住む事になったと？」

「はい、それが一番かと、父は南米の奥地で採掘関係の仕事をしていて、当分帰って来れないので」

嘘っぱちの経歴を内心冷や汗もので話すゼロ。
横ではやてが、がんばってと目で励ます。
もっとも、この経歴は調べられても困る事は無い、
ゼロはその超能力を使い、本物の書類を手に入れているからだ。
簡単に言うと、自分をデータ化して関係各所のデータベースに侵入し、新しく戸籍と経歴を作ったのだ。
名字は、父セブンが地球で名乗っていたモロボシを使い、名前はゼロをそのまま使う事にした。
ちなみにゼロの嘘くさい経歴は、はやてが決めた。
最初色々考えたのだが、めんどくさくなったゼロは、もうニートでいいと言ったら、はやてがこの流れだと、某天然女子高生ギタリストと同じだから駄目と謎の理由で却下された…
で、今の経歴で決定したのは、

「ラノベに出てくる人みたいで、なんかええよね」
だそうである。

そんな事も知らず石田先生は、ゼロの手をガッチリ握って

「良かったわ！モロボシ君の様な親戚がいてくれて…
いくらしっかりしていても、はやてちゃんはまだ小学生だもの…心配だったのよ。
はやてちゃんをよろしくお願いね！」

「は・はい、頑張りますっ」

石田先生の勢いに返事をする。
この先生本当にいい人なのだろう、

「はやてちゃんも良かったわねっ」

「はいっ、とても！」

はやては、心の底から返事をした。

診察室、今ゼロは石田先生と向かいあっていた。
はやては別室で検査中である。

「モロボシ君、はやてちゃんの病気は原因不明の神経性マヒなの」

石田先生の表情には、悔しさがにじんでいた。
原因不明などという言葉を使わねばならない、自分の無力さを痛感しているのだろう。

「原因不明ですか…」

ゼロは心が重くなるのを感じた…が、気を取り直し

「足のマヒ以外は、大丈夫なんですか?今のところ、他は健康そのものですが…」

石田先生は少し考え、

「大丈夫だとは思うけど…原因不明の事もあるし…楽観はできないの…
だからモロボシ君には、はやてちゃんの支えになって欲しいのよ」

ゼロは支えになって欲しいと言われ、少し困惑する。

何しろ今支えられているのは、どう考えても自分の方である。衣食住から、地球での生きていく術まではやての世話になっているのだ、そんな自分が支えになどなれるのか?ゼロはそう思ったが… 石田先生は話を続ける。

「はやてちゃん…ご両親と死に別れてから、ずっと1人だったでし

ょう…

病気のせいで、学校にも満足に行けない…そんな境遇なのにつらい事悲しい事を、１人で抱えこんで、大丈夫って笑う子なのよ…」

石田先生は長い間、はやての主治医として接してきただけに、その性格をよく分かっていた。

「でもね…最近、モロボシ君が来てから、はやてちゃん本当に楽しそうに笑うのよ、

前は、笑っていても、どこか儚げだったのに…」

ゼロは、心の底から楽しそうに笑うはやてしか見た事がなかったので意外だった。

石田先生は、ゼロの目を見つめ

「だから、何も特別な事をしなくてもいいから…　はやてちゃんの傍に居てあげて…」

「分かっぜ！先生！」

即答していた。

自分が居るだけではやてが元気になるのなら、お安い御用だった。

ただ、勢いつきすぎて素の喋り方になってしまったが…

その夜、検査やらで疲れたのか、少しグッタリしているはやてと風呂に入る。
ゼロが最初に風呂でのぼせて以来、そうなってしまったのだ。
はやてはそれが楽しいらしく、ゼロは地球ではこれが当たり前だと説得され、普通に入ってはやての背中を流している。
もっとも、後になって本当の事を知り青くなった上に、後々まで悩まされる事になるのだが…それは、また後のお話である。

風呂から上がり、寝る支度をして、はやてを抱きかかえ部屋のベッドに寝かせる。
そこでゼロは昼間、石田先生から聞いた話を思い出す。

「はやて、少し足を見させてもらうぞ」

はやては、不思議そうにする、

「ええけど…？」

ゼロははやての足をそっと押さえ、透視してみる。
今の体はほとんどの超能力は使えないが、透視位は出来る。
しかし、よく分からなかった。
一見異常は無さそうなのだが、少しおかしい様な気もする。結局ゼロに分かったのは、自分にも分からないという事だけだった。

「ゼロ兄？」

真剣なゼロを見て声をかけるはやて、ゼロは透視を辞め、

「ああ…悪い、何か分かるかと思ったんだが…駄目だった。すまねえな、役に立てなくて」

いささか、落ち込んでしまう。
そんなゼロの服の裾をはやてが握った。

「何言うてるんや、ゼロ兄には感謝してるんや…」

微笑むはやて、

「そ、そうか…じゃあ、お休みだ。またなっ」

何となくこそばゆいものを感じ、部屋を出る事にする。
名残惜しそうにはやても手を離した。

「おやすみゼロ兄…」

はやてはもう、　うとうとしている。
そっと部屋を出て行こうとするゼロの目に、一冊の妙な本が映った。
かなりの年代物らしい、中央に宝石をあしらった十字の鎖で封をしている様だ。
何か引っかかるものを感じたが、特に何も無いようなので、ゼロは

部屋を後にした。

はやての部屋にあった一冊の本。
それこそが、『第一級ロスト・ロギア』
《闇の書》であった…

つづく

第3話　決戦！（嘘）海鳴大学病院や（後書き）

ゼロがどんどんへたれになっていきます。早く変身させてかっこいい所を見せたいものですが…

次回で、無印前の　お話は、終わります。

第４話　海鳴の雪や

とある管理局が
《第９７管理外世界》と呼ぶ、平行宇宙の地球にウルトラマンゼロが流れついてから、４ヶ月が過ぎた。
季節は１０月に入り、夏の暑さも落ちついてすごしやすい気候である。
涼やかな秋の空気の中で、ようやく色付いてきた木々が気持ち良さげに揺れている。

ここは海鳴市の中心から数十キロ離れた山の中、人が入れそうもない森の中にポッカリと広場がある。
たまに森の中に偶然こんな場所が出来る事がある、そんな場所であった。

「破ァッ！！」

そんな中を烈迫の気合いが響いていた。
その広場の中央にゼロが居た。
ウルトラマン形態をとって、（人間サイズ）訓練をしている様だが、いつもと姿が違って見える。どうやら鎧の様な物を着こんでいるのだ。
ゼロが身に付けている鎧は
《テクターギア》
という物で、頭部と上半身、腕部をすっぽり覆い、関節部にはワザと負担がかかるように仕掛けがしてある。
防御力を高める為というよりは、訓練の為のギブスであり、重さも

相当なものだ。
人間が着けた場合、重さで圧死してしまうだろう。
ゼロは体の鍛錬の為にテクターギアをよく使っている。
以前、ウルトラの国を追放され、Ｋ７６星でレオ兄弟にしごかれていた時は四六時中着けていたものだ。
この時は自分の意思では脱げなかった事もあり、ゼロは早く外しやがれと散々文句を言っていたのだが、結局また使っている所を見ると、結構気にいっているのだろう。
そんなゼロをはやては、少し離れた倒木に座って見学している。
この場所はゼロが偶然見つけた場所で、訓練によく使っているのだ。
今回は、はやてに一度訓練を見せて欲しいと頼み込まれ、朝早くはやてを抱えて飛んで来たのだ。（その時はやては大喜びだった）

で、今は興味津々でゼロの訓練を見ている。
ゼロは今、空手の型をしている所だ。
型の中に攻撃、防御全てが含まれていて、コンビネーションの練習にもなる。
空手は師匠のレオ譲りで得意にしているのだ。
しかしそのスピードは、人間の比ではない。凄まじい風斬り音が鳴り、回し蹴りの衝撃波で数十メートル先の大木が震える。
かと思うと、まるでワイヤーアクションの様に空中で回転し、次の瞬間一気に数十メートルジャンプして、蹴りを放つ
足が、空気との摩擦で赤熱化する程の一撃。
そして同時に音速を超え、
［ドオオーンッ］
というソニック・ブームの轟音が山中に木霊した。

訓練を終え、人間形態に戻りはやてからタオルと飲み物を受け取る。
そんなゼロに、はやては目を輝かせる。

「凄いわゼロ兄～CG無しの本物や～、ホンマに超人なんやなあ」

ちょっと照れるゼロである。
飲み物を飲み、一休みする。すると、はやてがカメラを取り出した。

「ゼロ兄、ここは景色もええし写真撮ろ、おじさんにも送ろ思うし」

「ああ…親父さんの友達で、援助してくれてる人だったか…」

ゼロは何度か聞いた話を思い出す。

「会った事は無えんだったか？」

「うん…会った事は無いんや、外国暮らしやし」

気にした風も無い、ゼロはカメラをセットし、はやての隣に座る。
カメラに向かいながら、

（おじさん、ありがとな…はやての事気にかけてくれて…）

そう、まだ見ぬ人物に心の中で礼を言った…

数日後、ゼロはコンビニに買い物に来ていた。
足りなくなった物の買い出しを頼まれたのだ。
その時、たまたま手にした雑誌の記事を見て固まってしまった。その記事には、

〝人間のクズ、ヒモ男の実態〟

とあり、ゼロは人間のクズか…どういう人間なんだろうと続きを読む。

〝女性に生活資金から、全ての金銭面の補助を受け、働かずに暮らしている人間のクズ、死ね！〟

「……」

顔が引きつるのを感じながらも、続きを読む。

〝ヒモの定義、自分の住居を持たず、女の家に転がり込んでいる。働いていない〟

ゼロは、雑誌を手にしたまま傾いてしまっていた。

（こいつは…どう考えても俺の事だよな!?　そうだよな!?）

心の中で叫ぶ、そして何だか落ち込んでしまった。

（やべえ、何かこのままじゃ駄目な気がする…これじゃあウルトラマンゼロじゃなく　ヒモトラマンゼロだ…。）

混乱してしまい、そんなしょうもない事を考えいる。

「このままじゃ、いかん!」

ゼロは何とか立ち上がると、ダッシュで店を出て行った。
その後姿を、他の客達が可哀想な人を見る目で見ていた…。

「はやて、俺はヒモだな?ヒモだよな!?」

買い物から帰るなり、訳の分からない質問をするゼロに、ぽかんとするはやて、

「ゼロ兄、いったい何の話や?全然話が見えへんのやけど…」

そう言いながら、作っていた物をさりげなく隠す。

「あっあれだ、働かないヒモだ！」

それを聞いてはやては、ピンときた。
どうやら、また変な事を知って自分がヒモだと勘違いしたのだな…
と　はやては、おかしくなる。
たまにゼロは変な勘違いをする。まあ全然違う環境なのだから、無理も無いのだが…
はやては、そんなゼロを可愛いと思ってしまう。
まあそれは置いといて、誤解を解いてあげる。

「ゼロ兄はヒモさんなんかや、あらへん。今、家の事沢山やってもろてるやない？」

ゼロは今、かなり家の仕事をしている。
はやては足が不自由なので、今までは週何回かハウスキーパーを頼んで洗濯や掃除などをしてもらっていたのを、全てやっているのだ。

「だからゼロ兄は、何も気にする事は無いんよ？　お小遣いだって、そのお礼みたいなモンや」

「そ…そうか…ヒモじゃねえんだな…」

安堵の表情を浮かべるゼロ。

（そんなに気にする事あらへんのに…）

ちょっと寂しいはやてである。

はやてに入れてもらったお茶を飲みながらゼロは、

「そういや、もうクリスマス関係のモンを売り出し始めてたな…。
そんなに大掛かりな祭りなのか？」

はやては、にっこり笑って

「人にもよるんやけど…みんな祝うんや、今年は張り切って準備せんと」

はやては、とても気合いが入っている様だ。
何しろ誰かとクリスマスを祝うなど久しぶりなのだ。石田先生が食事に連れて行ってくれた時もあったが、仕事の都合でいつもという訳にはいかなかった。
だから今の、はやては気合いが入っている。
そんなはやてに、ゼロは気になっていた事を尋ねる。

「地球って宗教が重要だよな？　それで戦争になっちまったりしてるみてえだし…なのに日本て他の宗教の行事を平気で祝うんだよな

…テキトーなのか？」

異星人の素朴な疑問だった。
他の国と比べても、こう節操の無い国は無い。
はやては少し考え、

「適当というより、おおらかなんやないかな？　日本に入ってきたら、もう仲間やみたいな感じで。喧嘩になるよりよっぽどええよ、何しろ日本には百万人の神様がおるから、今さら増えても気にしないんやない？」

さすが読書家のはやてである。小学生の意見とは思えない。
ゼロも、何だかそっちの方が楽そうでいいなと思った。

次の日、とりあえずクリスマスの知識を一通り覚えたゼロは、クリスマスプレゼントなる物が大事だという事が分かった。
それは子供が何より楽しみにしている正にクリスマスの花形であると。
サンタクロースに関しては、はやてに聞いた所

「私の所には長い事来てくれへんな…」

と寂しそうに笑うので、後でサンタ締めると誓いながら。

（よし！なら俺がクリスマスプレゼントをやればいいんだな！）

という結論に達した。

さて？どんなプレゼントがいいのか…　と悩むゼロ。

こういう場合は、本人には秘密にするものだという位、分かっている。

プレゼントに関する事は、光の国と変わらないなと思い。

こうなれば自分で考えるしか無い…。

買い物ついでに、商店街などを見て回るゼロなかなか、これ！というのが見つからない。

「はやての欲しがりそうな物か…　ぬいぐるみ？本？　犬が飼いたいとか聞いた気がするが…　そういうのはプレゼントじゃ無えし、第一　はやてと相談しねえと駄目だし…」

ブツブツ言いながら歩いていると、アクセサリーショップを見かけた。

覗いて見ると、ガラスケースの中のペンダントが目に入った。

それは、金色の十字架をかたどったペンダントだった。

はやての部屋にある、鎖が掛かった本の表紙のデザインに似ている。

「これだっ！」

ゼロは一目見て即決した。これ以外はもう考えられない！

そう思いながら、値札を見る。

「……」

財布を取り出し、中を確認した。

「…無念なり……」

足りなかった様だ。

ガラスケースの前で、しばらく考え込む、かなり高い物らしい。

（どうすっか…足りない分は、はやてから貰うか？）

そんな風に考えていたゼロの頭の中で、ヒモを持ってラインダンスを踊りながら手招きする、スーパーなサイヤ人の人や、金髪つんつん頭の英雄王が浮かんだ。

その意味は分からなかったが、あっちに行ってはいけないという事だけは分かった。

携帯電話も買って貰ったばかりである。（買って貰ったのか…）

「よし！金を稼いで、こいつをはやてにプレゼントしてやらあっ！」

そう決意するのだった。

ゼロは、色々調べた上で、はやてにバレない、短い時間で稼げる、自分で日にちを選べるという、いささか虫のいいバイトを探してみ

る事にした。
意外にも、仕事内容はキツイが結構いいバイト先がある。
体力には自信がある、こうしてゼロのバイト生活が始まった。

昼間などはいつもどうり、家の仕事をこなし、はやてが図書館や病院に行っている間にバイトに行く、
時には、夜中にやっている仕事をこなしたりする。（戸籍上未成年なので、書類はいじくった。）
そんな日々が過ぎて、クリスマスまで後１０日、目標金額までもう少しというある日。

ゼロは、図書館にはやてを迎えに来ていた。
はやての車椅子を押し、家に帰る。

「ゼロ兄ィ、何か最近疲れとらん?今も疲れた顔しとるよ。」

はやてが心配して声を掛ける。
何故なら、今のゼロの顔が疲れまくった表情をしていたからだ。

「いや…近道しようとしたら、また迷っちまってな…」

とりあえず、ゼロはそう言っておく。

「なあんや、また迷ったん?気ィ付けなあかんよ」

はやては、しょうがないなあと苦笑する。
今までも何回もあったからだ。
人間よりもはるかに知能指数が高いゼロだが、コンピューターではないので忘れる事もあるし、行った事のない所は当然分からない。
それに本人の性格上早く着きたくて、近道しようと適当な道に入ってしまい帰れなくなるのだ。
せっかくの頭脳が台無しである。
しかし今日の理由は違った。
体力に自信はあるので体がキツイ訳では無い、原因は今日のバイトである。
割のいいバイトだった、2時間座っているだけで数万になる結婚式の出席者代理という変わった仕事で、居心地の悪さを我慢すれば楽なものだったのだが…
式の途中新郎のモトカノ達が大挙して押しかけ（6人）、更には新郎の父と新婦の母の不倫が発覚し地獄絵図と変してしまった。（あの後どうなったのか考えたくもないゼロである。）
だが楽しそうに笑う、はやての顔を見て

（もう少しだ！）

と自分を奮い立たせるゼロだった。

クリスマス・イブ当日、2人はクリスマスの買い物に商店街に来ていた。

予約していたケーキをとりに行き、パーティー料理の材料を買い込む。
はやてはよほど楽しいのか、朝からテンションが高い。

沢山の買い物袋を抱えたゼロと、膝にケーキを乗せたはやては、帰路につく。
歩きながら、飾り付けはどうするだの料理はどうなど、はやては段取りに余念がないようだ。

そんなはやての前を、白いものが舞い落ちる。

「雪や…」

「これが雪か…　綺麗なもんだな…」

空から、はらはらと雪が舞い落りてくる。

初めて見る雪にゼロも、しばし見とれる。

「今年は、ホワイトクリスマスや…　さあ、ゼロ兄帰って準備や、家に帰ろ」

はやての声で我に帰ったゼロは、先に進み出したはやてを追った。

家に戻った2人は、早速準備を始める。
ゼロが飾り付けとツリーを準備し、はやては腕によりをかけて鳥の丸焼きなどのクリスマス料理を作った。

はやてが張り切り過ぎて、料理の量がハンパない事になってしまったが、ゼロはペロリと食べてしまった。
そんなゼロを見て満足気に笑うはやて。

「本当に、ゼロ兄には食べさせ甲斐があってエエなあ…」

食後のケーキを食べながら、しみじみと言うはやて。

「はやての料理がすげえ、うまいからいくらでも入るんだよ」

そう言いつつ本日、4切れ目のケーキを食べるゼロである。

「そ…そんな…うまいんやから…ゼロ兄は…」

真っ赤になるはやて、しかし気を取り直して、後ろに隠してあった袋を取り出した。

「ゼロ兄にクリスマスプレゼントや」
と綺麗なリボンをかけた包みを差し出した。
「す…すまねえな…」
ちょっと焦るゼロ、ようやく買えたプレゼントを、いつ渡すかタイミングが掴めずにいた上に、はやてにプレゼントを渡す事で頭がいっぱいで、自分が貰うとは夢にも思っていなかったのだ。
「開けてみて、ゼロ兄」
はやてに促され、包みを開ける。中には赤と青のツートンカラーのマフラーと手袋が入っていた。アルファベットで〔ＺＥＲＯ〕の文字も入っている。
「はやて…　これ、はやてが作ったのか?」
明らかに、ゼロをイメージして編まれたものだ。
（そういや、前に何か隠したりしてた事があったな…）
あの辺りから、編み始めていたのだろう。
はやては、顔を赤くして。

「あ…あんまり上手く出来なかったんやけど…ゼロ兄まだ、寒いのとか慣れとらんから…」

しどろもどろになる。

「ありがとな、はやて…　作るの大変だったろ…　俺は最初から、はやてに世話かけてばっかりだな…」

「何言ってるん?世話なんてかけられとらんよ、そんなん難しくも無かったし…　気にせんどって」

慌てて何でもないかの様に言うはやて。
そんな様子を見て

（そう、はやてはこういう子なんだよな…」

何だか温かい気分になった。
自然に、テーブルの下に隠していた包みを取り出していた。

「はやてにクリスマスプレゼントだ。」

驚きながらも受け取るはやて

「あ…ありがとうゼロ兄っ。」

満面の笑みを浮かべる。
そんな、はやてに開けてみろと促す。

「うわあー　綺麗やなあ…　あっ、この形って…。」

「ああ、はやての部屋にある本みたいなペンダントだろ?何か、はやてが気に入るかと思ってな。」

はやてはペンダントをそっと取り出し、愛おしそうに触りながら

「でも、これって高かったんやないの?とても良いものに見えるんやけど…。」

そこで、はやては思い当たった。
最近のゼロの行動などで、これをどうやって買ったのかが想像出来た。

「…ゼロ兄こそ無理したんやろ…?」

ゼロは、イタズラがばれた時の子供の様な顔をして

「いやな…　どうしても、プレゼントは自分で稼いだ金で買ってやりたかったんだよ…」

はやては、ペンダントを両手でしっかりと握りしめ、顔を伏せ

「こんなん反則や…」

と呟いた後、黙ってしまった。

その後も、はやては黙ったままだった。
ゼロが話しかけても元気が無い、何かまずったのだろうか？
あきらめて寝室に引っ込もうとした時、はやてがやって来た。
俯いたままで、ゼロの服の裾を握り

「今日はゼロ兄といっしょに寝てエエ？」

「ああ、構わねえぞ」

怒らせちまったか？と思っていたので、ホッとし即答した。

ゼロのベッドの中はやては、まるで母親に甘える赤子の様にゼロの胸に顔をうずめていた。
手にはゼロに貰ったペンダントを、しっかりと握りしめたままだ。
ゼロも元気の無いはやての好きにさせておく事にした。

しばらく無音の時間が流れる。雪も積もってきたのだろう、外からの音もまるで聞こえない…
しばらくしてから、はやては口を開いた。
消え入りそうな声で

「…ゼロ兄は…居なくならないよね……」

「？」

はやては続ける。

「…父さん母さんみたいに…急に居なくなったりせえへんよね…？」

声が震えていた。
（そういう事か…）ゼロにも分かった。大事な人達を全て無くし、たった1人で生きてきた少女の思いを…。
ずっと1人だったはやてに、思いがけず家族が出来た。

ゼロとの日々は、はやてにとって宝物以上のものなのだ。

しかし、それを素直に受け入れるには、あまりにはやては不幸慣れしていた。

だから幸せである程、無くなるのではないかと恐れるあまり、怖くなってしまったのだ。

ゼロの胸で震えるはやての頭を優しく撫でてやる。

「ばかやろう、俺の寿命がどれだけあると思ってやがるんだ…」

言葉は相変わらず乱暴だが、温かみが伝わる声に顔を上げるはやて、ゼロの普段は見せない優しい瞳が見てる。

「はやてが、ばあちゃんになって死ぬ時もこうしていてやるよ…だから安心しろ、ずっと隣にいる」

それは誓いであった。

今まで故郷に帰れるのなら帰ろうと思っていたゼロだが、この優しい少女を1人置いて行く事は出来ない、この子を必ず守り抜くと心に誓った。

「ありがとう…　ゼロ兄……。」

はやては、またゼロの胸に顔をうずめ、しっかりとしがみつく。
ゼロもしっかりと抱きしめてやる。

（ゼロ兄の匂いがする…　あったかいなあ…）

気が付くと、涙が溢れていた。

雪が降りしきる無音の世界の中、はやてはいつの間にか眠っていた…。

その部屋は、かなりの広さがあった。
調度品があまり無い所を見るとどこかの高官の執務室の様にも見える。
その部屋には、テーブルを囲んで４人の男女が座っている。
そしてテーブルの上には、一通の手紙と添えられた写真が置かれていた。
白髪に髭を蓄えた初老の男が、対面に座っている若い男に問いかける。

「では、君はこの少年がそれ程危険だと言うのかね？」

若い男は答える。

「はい…　この少年は本来、この世界に存在してはならない者…
まさか《闇の書》の主の所に居るとは…」

若い男は沈痛な面持ちで言う。

「それじゃあ、あたしらに今出来る事はないのかい？」

初老の男の後ろに立っている、２人のよく似た女性の片割れが聞く。

「はい今の所は、しかし…　このまま行けば　《闇の書》覚醒の前
に一波乱あるかもしれません…」

分かった君の言う通り、今は静観しよう　孤門君」

初老の男は、若い男にそう呼びかけた。

つづく

第４話　海鳴の雪や（後書き）

次回から、無印編開始です。

第5話　無印編　緑の恐怖や（前書き）

ポイントを入れて下さった方々、お気に入り登録して下さった方々、ありがとうございます。
どうせ俺なんかに誰も入れちゃくれねえよと腐りかけていたので、ただ感激です。

さて今までリリカルなのはというより、ウルトラマンゼロのへっぽこ地球日記みたいになってましたが、無印編突入です。

「夜天のウルトラマンゼロ無印編、始まりますぅ」

第5話　無印編　緑の恐怖や

その日、次元間を航行中の貨物船が謎の爆発を遂げた。
ただ1人の生存者は、何が起こったのか分からないとの事だったが、
爆発の炎と煙の中に、赤い一つ目を見た気がするとの証言をした…。

それから数日後…。

4月に入り季節は春、穏やかな朝日が八神家に射し込んでいる。
そんな気持ちの良い朝なのだがゼロは浮かない顔で歯を磨いていた。
はやてが気がついて、

「ゼロ兄どうかしたん?」

と、尋ねる。
ゼロは何とも微妙な顔をしながら、口を濯ぎ終え、はやての方を見。

「いや…　昨日から、たまに誰かの声が聞こえる気がするんだ…
距離があるのか弱いのか、何言ってるのかも解らねえんだが…」

何とも歯がゆそうに言う。どうもスッキリしないのが嫌なのだ。

「ゼロ兄の持っとる力で分からんの?」

はやてはゼロの能力を知っているだけに、不思議そうだ。
ゼロはどう説明したらいいか少し考え…こういう説明事は苦手なのだ。

「…何つったらいいか…　俺達は普通テレパシーで話すのが当たり前で…　そっち方面なら　いいんだが、聞こえて来た声はそれとは別系統らしくて良く分からなかったんだ…
変身すりゃ一発なんだが、この姿の時は人間と変わらねえからな」

昨日は途中でその事に気付き、変身しようとした時には、もう声は聞こえなくなっていた。

「まあ…　今は何も聞こえねえから、どうしよも無えや」

はやては目を輝かて

「じゃあこの世界にも、超能力みたいな力を持っとる人がおるって事やない？」

と興味津々の様子だった。
この時の話はここで終わったのだが、気になったゼロは大方の見当を付けて様子を見に行く事にした。
色々歩き回り、異変が無いか調べていた所、
大規模な事故があったという事で立ち入り禁止になっている区間を

見つけた。
ゼロは眉をひそめる、電信柱が何本も倒れ、塀やアスファルトがズタズタになっている所もある。

「少し気ぃ付けといた方が良さそうだな…」

ゼロは呟いた。

それから数日が過ぎた。
あれから声が聞こえることもなく、特に事件が起こるでもなかった。
その日、ゼロははやてと繁華街に来ていた。
天気も良く、絶好の外出日よりだったので、散歩にでも行くか？とゼロが提案した所、はやてが

「じゃあ今日は、ゼロ兄とデートやな」

と言い出したので、繁華街に来たのだ。
はやての見たかった映画を見、あちこち見て回る。
休日で人通りは多かったが、ゼロも慣れたもので巧みにはやてをエスコートする。
まだ色々地球の知識には穴があるが、はやてと暮らしてきたおかげで、バリアフリー関連は完璧なゼロである。
はやても最初はゼロの保護者みたいな感覚があった様だが、今ではゼロに甘える様にもなってきていた。
クリスマスの日、ゼロに本音を晒して以来、素直に甘えられる様に

なったのだ。
あの日、ゼロに言われた言葉が余程嬉しかったのだろう。
今の2人は、どこから見ても仲睦まじい兄妹である。
ただ、顔が似ていない事と、片方の思いに微妙に女成分が含まれているのだが…もう片方は朴念仁というにもはばかられる程の宇宙人なので気付く訳も無い。
考えてみれば、クリスマスの日にはやてに掛けた言葉は、ほとんど愛の告白なのだが気付いてはいない。
人間の顔を見慣れていなかったゼロははやてが相当な美少女で、後数年もすれば華やかに成長するであろうという事も分かってはいない。
今はひたすら、はやての側に有る事を心掛けるゼロである。
そんな微妙な食い違いがある2人だが、楽しくデートを満喫していた。

そろそろいい時間になってきた事と、はやてが疲れてきたので、家路に着く事にする。
人通りの無い細い路地の中を、はやての車椅子を押しながら進むゼロ、

その時ゼロの超感覚が危険を察知した。

「はやて！気を付けろ！何かが来る！！」

はやてに注意を促す。
はやては訳が分からず、ポカンとしてゼロを見た。

「ゼロ兄、何かって…　？」

はやてが声を掛けた瞬間だった。
突如、強い揺れが2人を襲った。立っていられない程の強烈な揺れだ。

「きゃあああーっゼロ兄ぃーっ！？」

はやてが恐怖の悲鳴を上げる、ゼロは必死ではやてを押さえる。
周りのアスファルトが砕ける、そしてアスファルトを突き破って巨大な木の根が現れた。
うねる様に2人に進んでくる、

「ゼッゼロ兄ぃっ！？」

はやては恐怖の余り、失神寸前でゼロにしがみつく、

「大丈夫だ、はやて！」

ゼロは、はやてにそう言うと、内ポケットから変身用特殊グラス《ウルトラゼロ・アイ》を取り出し、両目に装着した。
スパークと共にゼロの体がウルトラマンとしての肉体に再構成される、銀色に輝やく顔にプロテクター、赤と青のボディー、『ウルトラマンゼロ』の出現である。
巨大な木の根が迫る、ゼロははやてを車椅子ごと抱え、一気に空に

飛び上がった。
はやてが「ひゃあああっ！」と叫ぶ。その2人を追うかの様に触手の様な根が迫る。
ゼロは進路を塞ぐ根に額から、破壊光線『エメリウム・スラッシュ』を発射し、軽く首を振る。
光が横一文字に走り、行く手を阻んでいた根は炭化、消滅した。
無事に巨大樹の根を避けて、上空に出る事が出来たが、地上は酷い有り様だった。
「…酷い、何でこんな事になっとるんや…？」

はやては上から街を見下ろし、絶句する。
街一面に巨大な大木群が建物を破壊しながら、増殖していくのだ。
まるで、怪獣映画の一場面である。

「はやて、一旦安全な所まで飛ぶぞ」

ゼロははやてを抱えて巨大樹から離れる。
安全だと思われる場所まで飛び、ちょうど公園を見つけたので、人気の無い建物の影に降り立つ

「はやて、ここなら安全だ。この辺りには、あのでかい木の根は届いてない」

はやてを降ろし、安心させる。
そこでゼロは腰を落とし、はやての目線に合わせると、

「はやて、逃げ遅れた人が結構いるみてえだ。俺は今から助けに行

って来るが、大丈夫か？」

と尋ねる、はやてはにっこりと笑い、

「私は全然、平気や心配せんでゼロ兄、それより早く助けに行かんと」

と気丈にふるまう、恐ろしい体験をしたのだ。本当は1人にはなりたくないだろうに…それを分かってゼロは、はやての頭を撫でてやる。

はやては目を閉じ、ゼロの手の感触を確かめる様にする。

「はやて、悪いな…行って来る」

はやては目を開けて、しっかりとゼロの目を見る。

「ゼロ兄、頑張ってな…　気ぃ付けて」

ゼロは、宙に浮かびながら

「おうっ！待ってろ、すぐに片付けて来るぜ」

そう言うと、巨大樹のある方向目指し一直線に飛ぶ。

高速飛行であっという間に現場に舞い戻ったゼロはその超感覚で逃げ遅れた人々の位置を探る。
近くで、増殖する根に追われ逃げ惑う家族連れを見つけた。
ゼロはすぐさま向かい、根を『エメリウム・スラッシュ』でなぎはらう。
光線が一閃すると、そこにあった根は瞬くまに消滅する。
家族連れはゼロの姿に驚くが、それ所ではないのだろう、指示に従い逃げて行く。
次に巨大樹の枝や根に捕らわれている人々の所に急ぐ、
ゼロは、頭部の『ゼロスラッガー』を投擲した。
脳波によりコントロールされている『スラッガー』は巧みに人を避け、人々を拘束している根のみを切断しゼロの元に戻る。
その後も逃げ遅れた人々を、その力をフルに使い救助活動を続けた。

「これで大丈夫だな…」

一息つくゼロ、骨折していた者もいたが、深刻な重傷を負った者はおらず、全ての人々を救助する事が出来た。
この状況では警察消防も手が出し様が無い、ゼロがいなければ死者が出ていただろう。

「後は、こいつらだな」

ゼロは飛び上がり、巨大樹に向かう。

巨大な樹木達は不気味に蠢めき、更に成長しようとしている様に見えた。

ゼロは、巨大樹に向かいながら内部を透視して弱点を探る。

（これだけ、でけえとな…　巨大化して焼き払うか…　ん?）

ゼロの目にエネルギーが集中している部分が映った。それに子供が2人

「あそこが中心か、それに子供がいる…取り込まれたのか?待ってろよ!）

急ごうとしたその時、桜色の光が飛んで来て巨大樹に命中した。

「何だ?誰かが攻撃したのか?」

ゼロは攻撃が来た方向を見る、かなりの遠方からの様だ。

「こ…こりゃあ…」

ゼロは気付く、桜色の光を受けた巨大樹が一斉に崩れていくのだ。まるで溶けるかの様に、

崩れ去る巨大樹の中から青く光る物体と子供2人が現れる。青く光る物体は攻撃が来た方向に飛んで行く、しかし気を失っているらしい2人の子供は、そのまま地上に落下して行く

「やばい！！」

ゼロは一気に飛行速度を最大にした。

「間に合えええっ！」

落下まで後数十メートル、あの高さから落ちたら死ぬか大怪我だ。

「うおおおおおっ！！」

ゼロは両手を伸ばす。

地上まで後、数メートルという所で2人をキャッチする事に成功した。ギリギリであった。

2人を地面にそっと寝かせる、はやてより少し上位の男の子と女の子だ。

怪我は無い様だ安心するゼロ、巨大樹の方を見ると崩壊が更に進んでいた。

（これで終わりか…）

そう思い掛けて、さっきの攻撃の事を思い出し、そちらの方向を睨む

「どこのバカだ！考え無しに撃ちやがって！！」

怒るゼロ、危うくこの2人を殺し掛けた攻撃主を一発ぶっ飛ばして

やらないと気が済まなかった。
早速、攻撃が飛んで来た方向に向かった。

その頃、その攻撃をした人物はビルの屋上に居た。
人物というか、まだ子供である、はやてと同い年位の可愛いらしい少女だ。
茶色がかった髪を短めのツインテールにし、どこかの学校の制服を改造したかの様な赤いリボンに白い服を纏って妙な形の杖を持っている。
そして隣には、フェレットによく似た小動物が心配そうに少女を見ている。
少女は酷く落ち込んだ顔をしていた。
街の有り様を見て、更に表情を暗くする。

「私のせいだ…」

少女は呻く様に言った。

「私、気付いていたのに……あの子が持ってるのに…なのに気のせいだって思っちゃって…」

それを聞いたフェレットは慌てて

「なのはのせいじゃないよ！僕がもっとしっかりしてなきゃいけなかったのに、なのはにばかり無理をさせたから…」
フェレットも力無く、うなだれる。
少女と会話をしている所を見ると、只のフェレットではないのだろう。
なのはと呼ばれた少女は更に声を暗くし

「…ユーノ君…　もしかしたら誰か…　死んじゃったり…」

「てめえらか！考え無しの馬鹿やろうは？危なく2人死ぬ所だったぞ！！」

少女の声を遮る、バカでかい声が響いた。
ビクンッとする1人と1匹、
見ると怖そうな目付きをした銀マスク姿の人物が拳を振り上げて空に浮かんでいた。

ーつづく

第5話　無印編　緑の恐怖や（後書き）

最初、無印編はすっ飛ばしてＡｓ編と思ってたんですが原作を見ると、思ったより事件が大きく、ウルトラマンが自分の住んでいる世界が滅びそうなのに気付かないのは不自然だという事で無印も入れる事にしました。
つじつま合わせが…

第６話　あなたはだあれ？や（前書き）

読んでいただき、誠にありがとうございます。
何とか良い文章を書ける様がんばります。

では第６話です。

第6話　あなたはだあれ？や

攻撃の主を探して、発射地点と思われる辺りを飛ぶゼロの目に、ビル屋上で何かを構えている人影と、その影に寄り添う小さな影が映った。
どうやらこいつで間違い無いらしい。
ゼロは出会い頭に一発かますべく、人影に怒鳴った。

「てめえらか！考え無しの馬鹿やろうはっ？危なく2人死ぬ所だったぞ！！」

そして、ひっぱたいてやろうと
（本気で殴ったら死ぬので）
腕を振り上げた所で目に入ったのは、
ビックリして泣きそうになっている。はやてと同い年位の少女と、
固まっている小動物だった。

「…今、撃ったのは、ひょっとしてお前なのか？」

ゼロは一応尋ねる、撃ってきた距離と方向から、場所に間違いない上に、少女と小動物から妙な力を感じる。
間違いなく、さっきの砲撃はこの子だなと確信するが…
一発かましてやろうと、勢い込んできたゼロは、まさか子供相手にかましてやる訳にもいかず、振り上げた手のやり場に困った。
しばらく唖然としていた1人と1匹だが、ゼロの剣幕に呑まれたの

か、

「ごめんなさいっ」

と、同時にツインテールの頭と、小さな頭がピョコンと下がる。

「…分かればいい、その2人は俺が助けたし、他も全員無事だからな。人死にが出なくて良かったぜ…」

思ったより素直な子達だったので、ゼロは状況を説明してやった。
自分のせいで墜落死する所だった2人の事を聞いた時は、真っ青になっていたが、
ゼロのお陰で、みんな助かった事を聞き、安堵のあまりへたり込んだ。
よほど思い詰めていたのだろう。
しばらく動けない様だったが、心配して駆け寄るユーノに大丈夫と笑い掛け、へたっていた足に力を込め、少女は立ち上がり、ゼロに深々と頭を下げた。

「ありがとうございました。私のせいで皆さんに迷惑を掛けたのに…　助けて貰って」

そこで少女は、深呼吸をして息を整え。

「私は、高町なのはと言います。この子は友達のユーノ君です。」

フェレットも小さい頭をピョコンと下げ

「ユーノ・スクライアですありがとうございました。」

と礼を述べる。しゃべっている訳ではなく、頭に響いてくる。
テレパシーの様なものを、使っているのだろう。
ゼロはこの感覚に覚えがあった。
以前聞いた声の主は、このユーノというフェレットだったのだなと思い当たる。

などと感慨に耽っていると、少女なのはは、おそるおそる

「あの…　良かったら、名前を教えて貰ってもいいですか？」

と聞いて来たので、ゼロは一度言ってみたかったセリフを言う、

「Ｍ７８星雲から地球の平和を守る為にやって来た、ウルトラマンゼロだ」

と、少しかっこつけて言ってみた。
実情は地球に遭難して来ただけで、小学生の女の子に養われている、

『へっぽこウルトラマン』
なのだが、お互いの為に黙っとく事にするゼロである。（子供の夢は大事にしねえとな…汗）
なのはは驚いて「凄い正義の宇宙人さんなんだ」と憧れの目で見つめ、
ユーノも宇宙人を見た事が無いのか、なのはより熱心に憧れの目で見ながら、ゼロの周りをチョロチョロしていた…。

そんなこんなで、ゼロは、なのはとユーノから、話を聞く事にした。
事情が分からない事にはどうしようもない。
ユーノが話始める。
ユーノはここは違う世界、『ミッドチルダ』という別次元の世界から来た魔法使いで、遺跡の発掘を生業にしており、その際に掘り出した『ジュエルシード』という危険な石が２１固、搬送中の事故で、海鳴市一帯にばらまかれてしまった。
責任を感じたユーノは、単独でこの世界に降り、被害が出る前に、回収しようとして失敗。
怪我をした所をなのはに助けられ、それから一緒に『ジュエルシード』集めをしていたという事を話した。
ゼロは、疑問に思った事を聞く

「その、『ジュエルシード』とやらは、どれ位、危ねえんだ？」

ユーノは少し迷った。
正体の知れない相手にしゃべっていいものか迷ったのだろう、
だが人の命を救い、それをないがしろにしてしまう所だった自分達を叱りつけたゼロに失礼だと思ったユーノは、正直に話す事にした。

「『ジュエルシード』は周りの生物の願いを叶えるんです。でも、とても不安定で、周りの生物を取り込んですぐ暴走してしまうんです。
あの木は人間が発動させてしまったので、あれほど大きくなりました。
人間の願いが一番強いですから…」

ユーノは無残な姿になった街並みを見て言った。
そしてなのはは、自分がジュエルシードを持っていた少年に気付きながらも、気のせいだと思い込んだ為に『ジュエルシード』を発動させてしまった。全て自分が悪いと言い
ユーノは自分が無理をさせたせいだと、互いに譲らず、
最後には自分の方が悪い合戦みたいになってしまっていた。

「そこまでだ！」

さすがに収集がつかなくなったのでゼロが止める。
なのはとユーノに口を挟ませずに

「両方悪い！ユーノお前は1人で来たのが、まず間違いだ。
何人かで来ていれば、こんな状況にはならなかったろう？
そういう、責任感てやつは嫌いじゃねえが、結局なのはに負担を掛けちまったな…」

こういう仲裁は苦手ながらも、懸命に言葉を続けるゼロ

「で、なのはは、覚悟が足りなかった様だな…手伝いたいってのは、悪かねえが、甘かったな…」

思い当たったのか、なのはとユーノは目を伏せた。

「悪かった所は分かったな？じゃあ、過ぎた事をガタガタ言うの終わりだ。後はこれからどうすっかだけだな？」

励ましがこもった
ゼロの声に、なのはとユーノは顔を上げる。
ゼロは、このまま放って置くと、自己嫌悪に陥るだけだと思ったのだ。
話を聞いていて、この2人がいい奴らだと分かっていた。
ユーノは、自分の責任でもないのに、他の人々に迷惑が掛からない様に、見知らぬ世界で1人『ジュエルシード』を集めようとした。
なのはは、困っていたユーノを助けたくて『ジュエルシード』集めを手伝っている。
そんな2人を気に入ったゼロは、自己嫌悪に陥るよりも、至らなかった点を自覚させ、更に、そこからどうすべきか、考えられる様に、ワザと2人の悪かった所を指摘したのだ。
どうやら上手くいった様で、2人の目に輝きが、戻ってきた。ゼロは慣れない事をしたので、少々くたびれた。
以前のゼロなら、考えられない事だが、色々あって成長したのだろう。

「で…続けるのか？」

ゼロは訪ねる。

なのはとユーノは、頷いた。

さっきの顔とは違う、前に進もうとしているのだろう。

しっかりした自分なりの答えを出せるのは、もう少し掛かるだろうが、心配ないだろう。ゼロはそう思った。

「手伝いは、いるか？　まあ魔法とやらは専門外だから、役には立たんだろうが…」

と、協力を申し出たが、とりあえず2人でやってみるとの事だった。

ユーノの怪我も回復し、前ほどなのはに負担は掛からないという事と、なのはが凄まじい魔法の才能を持っているので、『ジュエルシード』の収集が、さほど難しくないので、という事だった。

話を聞く限り、専門家の2人に任せた方が良さそうである。

ゼロには『ジュエルシード』を、なのは達の様に封印して安全に確保する事が出来ない、

下手に『ジュエルシード』で、怪物化した相手に、光線をぶち込もうものなら大惨事になりかねない。

それにゼロは、最後までやり遂げたい。という2人の気持ちも大事にしてやりたかった。

自分でも、そうするだろうと思ったからだ。

最後に、ユーノは

「それでも、僕らの手に負えない様な時には…　手伝ってもらっていいですか？」

と、しっかりした口調で頼んできた。　ゼロは即答する。

「ああ、いつでも呼びな、ユーノが前やったみてえに呼べば、行ってやる」

ドンっと、胸を叩いて請け負った所で（そろそろはやてを迎えに行かないとな）と思ったゼロは、戻る事にする。

「じゃあな、なのは、ユーノ、無理すんなよ」

そう言って、空に浮かぶゼロに、なのはが声を掛ける。

「ウルトラマンさんは、どこに帰るんですか？」

子供らしい好奇心から聞いたのだろうが、本当の事は言えないので

「衛星軌道の辺りに留めてる宇宙船だ。あばよっ」

と適当な事を言って、２人と別れた。

ゼロは、はやてと別れた公園に向かう手前で一旦、人目の無い場所に降りて、人間形態をとり、走って公園に入る。
はやては、元の場所から動かずに待っていた。心配そうに、ゼロの飛んで行った方向を、凝視している。

「はやてーっ」

ゼロが声を掛ける、それを認めたはやての表情が明るくなる。

「ゼロ兄ぃーっ！」

そう叫ぶと、車椅子で突っ込んで来た。　慌てているのか最高速度だ。
少々、みぞおちを打ちながらも受け止める。

「は…はやて、危ねえだ…」

ゼロは、言い掛けた言葉を止める。
はやてはゼロのお腹に顔をうずめ、手を腰に回し、しっかりと、しがみついていた。肩が震えている。
ゼロは、頭を撫でてやる。

「すまねえ、遅くなっちまった」

はやては顔をうずめながら、何度も頷いた。

周囲が橙色に染まり、遠くからサイレンの音が微かに響く夕暮れの中、ゼロは、はやての震えが収まるまで、ずっとこうしていようと思った…。

ーーー

それを聞いて赤くなるはやてだが、ゼロがデートの正確な意味を分かって言っているかは、はなはだ怪しい。

「…でも、あれだけの事があったのに、亡くなった人が居らんで、ホンマに良かったわ。ゼロ兄のお陰やね？」

はやては、テレビを見て笑い掛ける。

テレビでは、巨大樹災害の中で、逃げ遅れた人々を超人的な力で1人残らず救い、巨大樹を倒した、謎の超人の話題で持ちきりである。

「いや…　木を倒したのは、俺じゃないんだが…」

決まり悪そうに言うゼロ、あんな異常な状況下で人助けをしたので、巨大樹もゼロが倒したと勘違いされてしまったらしい。

「ああ…　なのはちゃんて、子やったね」

はやてが、おかしそうに言う。

昨日帰ってから、なのは達の事を、全部話しておいたのだ。

色々な体験をして疲れていたはやてだが、

自分と同い年位の少女が、魔法使いをやっているという話を聞いて、

目を輝かせ
ええなぁ、私も魔法少女やってみたいわ～としきりに羨ましがっていた。

「ああ、魔法とやらの天才らしい、最近まで普通の子供だったのに、あんなでけえ木を消しちまうんだからな」

3杯目のご飯をわしわし食べながら、感想を言う。

「それに、何かあったらゼロ兄が居るしな」

はやては、頼もしそうにゼロを見る。キラキラである。
昨日の事もあり、今日のはやては、少しはしゃぎ気味だ。
ゼロは、その視線にちょっと照れくさそうだが、勤めて平静を装い

「ま…まあ、そうだな…いざとなったら行ってやるが…あいつらだけでも大丈夫だと思うぜ。
見所のある奴らだったからな…」

と言いつつ、本日4杯目のご飯のおかわりを頼んだ。

ーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

それから数日後、
満月の光が淡く降り注ぐ、夜の森の上空を、２人の魔法少女が駆けていた。
１人は、白い衣装を纏い、金色の魔法デバイス『レイジングハート』を持つ『高町なのは』である。
もう１人は金色の髪に、周りの景色と同じ黒い衣装を纏い、同じく黒いデバイスを持った、なのはと同じ位の年齢の少女だ。
なのはと同じく『ジュエルシード』を集めるのが目的であり、敵対関係にある。
訳も分からず戦いたくは無かったなのはは、話し合いを望んだが、黒衣の少女は拒否、戦闘になった。
ユーノも今、森の中で、黒衣の少女の使い魔の女獣人と戦っている。
なのはは、砲撃魔法『ディバインバスター』を射出、桜色の光が一直線に黒衣の少女に向かう。少女も攻撃魔法『フォトンランサー』を繰り出す、電光の槍が『ディバインバスター』を迎え撃った。
ぶつかり合った２つの魔法攻撃が対消滅し、月光のみの夜の森を明るく照らす。
しかし黒衣の少女は、なのはの一瞬の隙をついて、上空からの奇襲を掛けた。
黒いデバイス『バルディッシュ』を『サイスフォーム』電光の刃の鎌に変化させ、一気になのはの首筋目掛け振り下ろした。

「！！」

なのはの首筋数センチの所で、電光の刃が止められていた。
殺す気が無いのか、いつでも殺せるという余裕なのか…
どちらにせよ、なのはには、対応できなかった。
完全な敗北である。

戦利品としてジュエルシードを手に、使い魔と共に去って行く黒衣の少女。
なのはは、その後ろ姿に呼びかける。

「あなたの…あなたの名前を教えて！」

黒衣の少女は、少しだけ振り返り、寂しげな瞳で

「フェイト…フェイト・テスタロッサ…」

と名乗り、闇の中に消えて行った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

フェイト達が去り、なのはとユーノが失意の内に、宿泊している旅館に重い足を引きずりながら帰った後。
近くの茂みの中から、男が出て来た、
まだ若い、黒いジャケットに黒いジーンズという、全身黒ずくめの

スタイルだ。顔は、ゼロに似ている、ゼロがもう少し成長し、荒んだ生活を送らせたら、この様な感じになるのではないか、という感じの青年である。
ゼロに似た、鋭く端正な顔でニヤリと笑う、凄惨な笑みだ。
どうやら青年は、先ほどの戦闘の一部始終を見ていたらしい、

「餌に釣られて、出て来たな…まあ、予定通りか、『闇の書』の主の方も『奴』が転がり込んだお陰で覚醒が早まりそうだしな…」

青年は楽しげに呟く、その様子がやけに凶々しい。
どこかが、壊れている様な狂気があった。

「ゲームは楽しくないとな。なあ?ゼロ!面白くしてやるよ!」

闇の中、青年の姿が変わってゆく、漆黒と橙色の体色に、ゼロと同じ姿、暗闇に光る『2つ』の赤い目。
『ダークロプスゼロ』であった。

つづく

第6話　あなたはだあれ？や（後書き）

え～、お気づきの方も居られるでしょうが、サブタイトルはウルトラシリーズから取ってます。
ですから、第3話のタイトルはエヴァからでは無く、ダイナから取ってます。
何となく気になったので、報告します。

第7話　赤い靴はいて…なかったねや（前書き）

収まりきらなかったので次回に跨ぎます。

第7話　赤い靴はいて…なかったねや

とある午後の昼下がり、『ウルトラマンゼロ』こと、モロボシゼロは困っていた…
今日はやては、夕方まで検査があるので、その間足りない物の買い出しに出かけたのだが、またしても道に迷ってしまったのである。
こいつ只の方向音痴じゃね?
という言葉が聞こえてきそうだが、ゼロにも言い分がある。
今まで飛んで移動をしていた奴が、ある日から地上を歩いて移動しなければならなくなった。
そんな奴が空を飛んでいた時の癖が抜けず、目的地に向かうのについ変な近道（道に関係なく直進）をし、却って訳が分からなくなるのをどうして責められよう!
と思うゼロだが今の所、賛同者は1人もいない…
そんなしょうも無い事を考えながら、ふと気が付くと、まったく人気が無い廃棄された工場区画に入り込んでいた。

「……」

ここまで迷ってしまえば上等である。
もはや自分がどの辺に居るのかも定かでない、道を尋ねようにも人っ子一人いない…
ゼロの額に青筋が浮かんだ。

「だあああっ!やってられるか!ごちゃごちゃしやがって!!」

天を仰ぎ吼えるゼロ、ついにぶち切れた様だ。
猛然と走り出す。絶対に人に見られない場所に向かう為である。
頭に来たゼロは、変身して飛んで帰るつもりなのだ…
思い切り、能力の無駄遣いもいいとこなのだが、ぶち切れた頭にはそんな事も思い当たらない。うまい具合に、周りが塀に囲まれている廃棄物置き場だったらしい場所を見つけた。
よっしゃあとばかりに飛び込み、内ポケットから『ウルトラゼロ・アイ』を取り出し、装着しようと構えたゼロの目の前に

金色のブローチの様な物を掲げ、何かぶつぶつ言っている。はやてと同い年位の金髪の少女が立っていた。

思わず固まるゼロ、まさかこんな所に人が居るとは思ってもみなかったので焦る。

（あ…危ねえ～！危うく、人前で変身する所だったぜ…）

それでも最悪の事態は避けられたので、ホッと胸を撫で下ろす。
只でさえ、
『正体バレた記録ぶっちぎりＮＯ－１』
の道をひた走る身としては、これ以上のポカは避けたい所なのだから。
しかし目の前の少女も、何故か危なかったという表情をしている気がしたが、気のせいだと思ったゼロはこれ幸いと道を尋ねる事にする。

「悪い、道を教えてもらいたいんだが」
「…すいません、道を教えて欲しいんですが…」

2人の声がダブった。2人共、迷子だった…
ゼロの表情が迷子の子犬の様になる。

「プッ…」

金髪の少女『フェイト・テスタロッサ』は整った顔を、いつも通りの少し寂し気な無表情のまま、思わず吹き出してしまった。

その日フェイト・テスタロッサは、使い魔である、獣と少女の2つの姿を持つ『アルフ』と共に『ジュエルシード』の探索を続けていた。
途中で二手に別れたまでは良かったが、この世界に来て日が浅いフェイトは道が分からなくなってしまった。
『念話』という魔法を介しての通信を使えば、アルフはすぐ来てくれるだろうが、迷子になった自分が少し恥ずかしく、このまま探索を続ける事にした。
アルフとは精神的にリンクしているのでその内来てくれるだろう。
そう思って人気の無い廃工場に入る。
人工知能搭載で、会話も可能な『インテリジェンス・デバイス』『バルディッシュ』を起動しようとした時、少年が凄い勢いで駆け込んで来た。
そして、何か妙な眼鏡をかざした所で目が合った。
そのフェイトよりいくらか上の年齢の少年は、酷くギョッとした様だ。まるで、絶対見られてはならない所を見つけられた様に。

まあそれはフェイトの方も同じで、危うくバルディッシュを変形させるのを見られる所だった。
それに比べれば、少年の方は見られても大した事は無いだろう。
犯罪関係の人間？それで人が居たことに驚いたのかも…　という事も考えられたが、少し目つきが鋭い位で悪意みたいなものは感じられない。

（…誰も居ないと思った所に私が居たから、驚いただけか…）

フェイトはそう判断した。
今まで、あまり他人と接した事の無い彼女は気詰まりだったので、道でも聞いて早くこの場を立ち去ろうと思い声を掛けた。

「…すいません、道を教えて欲しいんですが…」「悪い、道を教えてもらいたいんだが」

見事にハモった。
どうやら少年も迷子だったらしい。
その事と、迷子の子犬の様な表情になった少年の顔に、不覚にもフェイトは吹き出してしまった。

フェイトは真っ赤になった、頭から湯気が出そうな程に。
初対面の相手を笑ってしまったからだ。根が真面目な彼女はどうしたらいいか分からず、意味不明なポーズをとりアタフタしてしまう。
もうこの場所にいるのに耐えられなくなったフェイトは、

「…ごめんなさいっ、失礼します」

とゼロに頭を下げ、駆け出した。が膝に力が入らずカクンッと地面に座り込んでしまった。

「えっ…何…？」

体の不調に焦るフェイト。
こちらの世界に来てから、彼女はほとんど休まずに『ジュエルシード』の探索を続けて来た。
食事もほとんど採っていない、気持ちに余裕が無いからだ。
少しでも早く『ジュエルシード』を集めたいフェイトは、今日も体力を消耗する『探索魔法』を何度も使用しており、急に走り出した事で足に来てしまったのだ。

（…体力の使いすぎ…？こんな事じゃ母さんに……）

フェイトは自分の不甲斐なさを呪うが、すぐには立ち上がれない。

「おいっお前、大丈夫か？」

ゼロが駆け寄る。
フェイトはそんなゼロに

「…大丈夫です。何でもありません…」

と何でも無い風を装うが、地面にへたり込んだままでは説得力は無い。

「何言ってやがる、お前顔色悪いぞ、ちゃんと飯食ってるのか？」

ゼロはそう言いつつ、フェイトを抱え上げた。

「…えっ？…あの…」

フェイトの顔がまた赤くなる、お姫様抱っこというヤツである。
そんなフェイトの恥ずかしさも気にせず、ゼロは彼女を座らせるのにちょうど良さそうな所まで運び、座らせる。

「ちょっと、見せてみな」

と言うとフェイトの手を握った。
フェイトはさっきから赤くなりっぱなしである。
ゼロは手を握る事で、彼女の体調を超感覚でチェックする。

「お前、疲れ過ぎだ。飯もほとんど食ってねえな？このままだと体壊すぞ」

と言った。
フェイトにも分かってはいるのだが、張り詰めた状況では食欲も無

く、探索では無理を重ねてしまう、悪循環である。
そんな事をつらつらと考えていたフェイトに

「ちょっと、じっとしてな」

と言ってフェイトの手を両手で包み込んだ。
真面目くさった顔で

「今から呪いを掛けてやろう」

と、とんでもない事を言い出した。
ええーっと青くなるフェイトだったが、ゼロは「あれっ？」という
感じで首を傾げ

「ああ…悪い間違えた。おまじないってヤツだった…」

間違いに気付いて、照れながら訂正する。
そして目をつむり無言になった。
フェイトは何だか分からない、この世界に魔法は存在しないはずな
のだが
そう思っていた彼女の体内に、何か温かいものが流れ込むのを感じ
た。

（…何だろう…とても温かい…魔法とは違う…？）

魔法でも治癒魔法はあるが、ゼロのそれは別物である。
自分の生命エネルギーを送り、生体活動を活発化させる。『ウルト
ラマン８０』が使った『メディカルパワー』の縮小版といった所だ。

はやての足の回復の助けになればと、人間体でも使える様に練習していたのだ。
おかげで疲弊したフェイトの体は、元気を取り戻していく。
（…力が湧いてくる…この人は何者だろう…？魔力は感じないのに…）
フェイトは初めての感覚に戸惑いながらも、とても安らぎを感じていた。
体の回復、リラックス、この効果で当然起こる自然の欲求は仕方ない事である。

「グゥー」

見事にフェイトのお腹が鳴った。

「！！？」

フェイトの顔が今日一番に真っ赤になる、耳まで真っ赤だ。
ゼロに恥ずかしい所ばかり見せてしまっているので無理はないのだが

「よしっ、いい音だ。しっかり飯食うんだぞ」

そう言って握っていた手をポンっとたたいて笑う。
くったくのないゼロの笑顔を見て、何だかホッとしたフェイトは、恥ずかしさも気にならなくなった。
その時だ、ゼロの後ろの方から高速で迫る影があった。

「フェイトぉおおおおおおっ！！」

その影はあり得ない速度で走って来ると、そのままの勢いで強烈なドロップキックをゼロ目掛けて仕掛けた。
ゼロはとっさに避けようとしたが、避けるとこの子に当たる！と思い、結局モロに背中に食らってしまった。
衝撃で数メートル吹っ飛ばされるが、ゼロは素早く起き上がり怒鳴った。

「てめえっ！いきなり何しやがる！！」

「うるさいよ！それはこっちのセリフさ、あんた変質者って奴ね？ただじゃおかないよ！！」

怒りに燃える目でゼロを睨むのは、肉感的な体に露出の多い服を着た野生味あふれる少女だった。
少女の名は『アルフ』少女と獣の2つの姿を持つ、フェイトの使い魔である。
どうやら、ゼロがフェイトによからぬ事をしていると勘違いしたらしい。
対してゼロは、一瞬変質者の意味が分からなかったが、テレビなどで見たのを思い出し、ブチ切れた。

「…ふ…ふざけんな！誰が変質者だ！俺は下半身、裸じゃねえぞ！！」

それも変質者には違いないが、微妙にハズレだ。
その言葉を聞いたアルフは誤解を更に深め、顔を怒りで真っ赤にする。

「お前！下半身裸って、殺す！！」

牙の様な歯を剥き出し、一触即発状態だ。
その時フェイトが割って入り、アルフを抑えた。

「アルフ駄目…勘違いしないで、この人は私を助けてくれたんだよ…」

「えっ？」

フェイトの言葉に目を丸くするアルフだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ごめんなさいっ！」

アルフは地面に頭がつきそうになるほど、頭を下げた。いきさつを聞いたアルフは反省しきりである。
フェイトを助けてくれた人物に、問答無用でドロップキックをかました上に変質者呼ばわり、もう頭を上げられないアルフだった。
散々なゼロであったが、潔く謝られた上にアルフが本当にフェイト

を思っているのが分かったので、許す事にした。
これがゴツい男とかだったら、許さん！とか思っただろうが、１７才位の少女でフェイトと姉妹の様にしているのを見ると（姉妹か？とゼロは思う）まあ、いいか…と思った。

フェイトとアルフは何どもお詫びをし、ゼロも気にすんなという事で２人と別れる。
まだ頭を下げている２人に片手を上げ、じゃあなと背を向けた所で、まだ道に迷ったままなのを思い出した。

（あのドロップキック女なら、道知ってるか？）

と思い、振り向くとドロップキック女ことアルフが、へたり込んで情けない声を出していた。

「フェイト～駆けずり回って、もう限界だよ～何か食べて帰ろうよ」

ゼロはその様子を見て、
（こいつも、あの子と同じ無理して頑張ってるみてえだな…しっかり食えよ）

と微笑ましくなった。
フェイトも少しおかしそうにアルフに手を貸し

「…そうだね…何か食べて帰ろうか…」

と言う、アルフは意外そうな顔をするも嬉しそうに立ち上がる。

「珍しいね、フェイトがそんな事言うなんて、よし何かおいしい物食べよう！」

そう言うと、ポケットを探るアルフだが、あれっ？という顔をする。

「ごめん～お財布忘れてきたみたい、フェイトはお金持ってるかい？」

と聞くが、フェイトは首を振る。

「…私も、今日は持ってきてないよ…」

ええ～っという顔をするアルフ、その時タイミングよく

「ぐぐぐ～っ！」

「グーッ」

２人のお腹がタイミング良く鳴った。

見かねたゼロは２人に歩み寄り、

「お前ら腹減ってんな?袖すりすりするのも何かの縁だ。付いて来な、飯ぐらいおごってやるよ」

と微妙に間違った、ことわざで、ぶっきらぼうに言った。

フェイトとアルフはビックリした顔をする、アルフは慌てて

「そんな…悪いじゃないのさ、あたしにあんな事されたのに…」

ゼロは微笑し、

「地球人は、困っている奴は助けるもんだろ?当たり前のこった、気にする事は無えよ」

ゼロははやての事を思う、途方に暮れていた自分に手を差し伸べてくれた優しい少女の事を…
彼女から貰ったものを、誰かに分けるのも悪くない。そう思った。

「取って置きの店に連れて行ってやるよ、さあ行くぜ!」

と2人を促す。
フェイトとアルフは、ゼロの強引さと負い目とで押し切られ、2人

してゼロについて行く。
しばらく歩くと、ふいにゼロは振り向いて、

「で…ここは何処だっけ？」

と照れくさそうに言った。
フェイトとアルフは心の中で、

（残念だ……）

と思ったとか、思わなかったとか。

つづく

第7話　赤い靴はいて…なかったねや（後書き）

ウルトラマンゼロの映画情報がちらほら流れてきました。
何か想像と随分違ってます。
昔の円谷ヒーローがリニューアルされて出演、ゼロの仲間になって、
一緒に怪獣軍団や量産型ロボット軍団と戦うらしいです。
いやあ、映画楽しみですね！

第8話　ミロガンダが秘密や（前書き）

何か、まだ『ウルトラマンゼロのへっぽこ地球日記』みたいになってますが、そろそろ激闘編になる！…かもしれません。

第8話　ミロガンダが秘密や

アルフに道を聞いたゼロは、勇んで2人を連れて店に向かう。
その後ろを、何でこうなったんだろう?という顔でついて行く、フェイトとアルフ。
今回は他の人が一緒なので、ちゃんとした道順を行くゼロである。
以前はやてと出掛けた時に、迷いまくって以来そうする様にしているのだ。
お陰で、無事目当ての店に着いた。
その、少々古びた小さな店は、『羅亜麺、無双麺』という、何かゴツい当て字と、日本語として変じゃね?みたいな看板を掲げている。
そんな店だが、知る人ぞ知る隠れた名店で、その味は正に無双である。
道に迷って偶然この店を見つけたゼロは、あまりの美味さに絶句し、すぐさまはやてを連れて行ったものだ。
2人を促し、店内に入る。
昼時をとっくに過ぎているので、客はまばら、狭いが小綺麗な店内である。
カウンター席に座る3人。
フェイトとアルフは、珍しいのかキョロキョロしている。
ゼロは、勝手が分からない2人の替わりに注文してやる。
えらく背が高く、筋肉質でラーメンの丼の様な頭にヒゲというインパクト絶大な店長は、鋭い眼光で「注文確認」と言うと、鮮やかな手際でラーメンを作る、とてもいい匂いが漂う。
醤油系には馴染みの無い2人でも、充分食欲を誘われる。
シンプルな醤油ラーメンが、3人の前に置かれた。
店長にフォークを貸して貰い、ゼロに食べ方を教わった2人は恐る恐る食べてみる。

「…おいしい…」

「こりゃあ、いけるねぇ！」

アルフは景気よくすすり込み、フェイトもゆっくりながら、しっかり食べている。
どうやら気に入った様だ。
食べながらアルフがフェイトに、「ドッグフード入れたら、もっと美味しくなるよ～」などと言って、フェイトに注意される。
ゼロの耳に、そんな会話が聞こえた気がしたが、いくら何でも聞き違いだと思った。
アルフは元が狼なので、味覚が少しアレである。
しかし、本当にやった日には、ゼロと店長にクロスボンバーを食らうであろうから、止めた方がいいだろう。

アルフは、スープまで飲み干し、フェイトも麺を全部食べた。
2人は、既に食べ終っていたゼロにお礼を言う。

「…ごちそうさまでした。ありがとうございます」

「ごちそうさま、いやあ～あんたいい人だねえ～、ありがとうね」

ゼロは、照れくさそうに

「よせよ、困った時はお互い様だ」

と、そっぽを向くゼロに、フェイトは、

「お名前を教えて貰えますか？私は、フェイト・テスタロッサといいます」

「私は、アルフっていうんだ」

ゼロは2人に向き直り

「ゼロだ。モロボシゼロ…」

まだ照れているゼロを見て、何だかほっこりした気持ちになる、フェイトとアルフだった。

普通だったらこんな状況、下心を疑ってしまう所だが、2人はゼロという少年に、打算や人間特有の生臭さを全く感じなかった。口調や態度は乱暴なのに、まるで人では無いかの様なゼロに、自然心を許してしまう2人だった。

異郷に頼る者も無い身では、なおさらだったかもしれない。

ようやく照れから立ち直ったゼロは、何の気無しに、

「フェイトもアルフも随分がんばってるみてえだが、何かの用事で此処に来たのか？」

と尋ねる。フェイトは、少し考え、

「…母さんの用事で、ちょっと…」

と、言ったのを聞いたアルフは慌てるが、フェイトは目で「これ位、大丈夫」と合図する。
嘘が苦手な事もあるが、何となくこの人に嘘を吐きたくないなと思ったのだ。
ゼロも特に立ち入った事も聞かず、

「お前ら、親孝行だな…母さんもきっと自慢に思ってるぜ…」

と、しきりに感心していた。

そろそろ、はやての検査が終わる頃なので、2人に別れを告げる。
頭を下げるフェイトにゼロは、紙切れを渡した。
？という顔をするフェイトに、

「俺の携帯の番号だ。何か困った時にはいつでも掛けてきな」

ゼロは、2人に笑って言う。
何となく、危うい感じがする事と、母親の話をした時にフェイトが、とても淋し気な表情をしていたのが気になり、放っておけなかったのだ。

フェイトはその紙を、両方の手のひらでしっかり握ると、

「…ありがとうございます…」
と少し、淋し気ながらも笑みを浮かべた。

ゼロと別れて、また『ジュエルシード』探しに出掛ける2人。
何となく足取りが軽かった。
アルフは、思い出し笑いをし、

「面白い子だったね～あんな人間いるんだ…」

上機嫌だ。ゼロとの出会いが、今にも折れそうな位に張り詰めていたフェイトの心に、良い方に働いたのを感じたのだ。

「…そうだね…見ず知らずの私達を気に掛けてくれて…」

フェイトは、ゼロから貰ったメモを見る。

（…連絡する事は、無いだろうけど…）

そう思いながらも、まるで宝物の様に、しっかりと胸に抱くフェイトだった…

―――――――

「この間は自己紹介出来なかったけど…私はなのは、高町なのは、私立聖清祥大附属小学校三年生！」

なのはは、フェイトと何度かぶつかり合う内に、知りたいと思った。
この子の事を、
何故、そんな淋しそうな目をしているのかを、
しかし、そんな思いとは逆に、フェイトはなのはに襲いかかる。
応戦するしかないなのは。
それでもなのはは、フェイトに言葉を送る。

「同じ目的同士、ぶつかり合ったりする事になるのは、仕方ないかもしれないけど…だけど、何も分からないままぶつかり合うのは、私嫌だ！」

なのはの正直な心の叫びだった。
続けてフェイトに思いのたけをぶつける。

「私が『ジュエルシード』を集めるのは、それがユーノ君の探し物だから、元通り集め直さなくちゃいけないから、私はそのお手伝いで…でも、ある人に言われたの、覚悟が足りなかったなって…」

フェイトと打ち合いながらも、話す事を止めないなのはは、必死だった。

「色々考えて私決めたの、自分の意志で集めるって、自分の暮らし

てる町や、周りの人に危険が降りかからない為に、これが、私の理由！」

なのはの真摯な言葉に、フェイトは一度目を閉じ、その口が動く。

「…私は……」

「フェイト！答えなくていい！！」

その時、アルフの声が響いた。
フェイトは、ハッとする。
ユーノと対峙していたアルフは、狼の姿で更に叫ぶ。

「優しくしてくれる人達の所で…ぬくぬく甘ったれて暮らしてる様なガキンチョに、何も教えなくていい！！」

アルフは、許せなかった。
理由も、何もかも…恵まれた人間にしか言えないセリフを吐く奴を…少なくとも今のアルフには、そうとしか思えない。
再び『バルディッシュ』を構えるフェイト、なのはも応戦するしかない。

その時だった。
２人の戦闘で、宙に浮いたままになっていた『ジュエルシード』が

突然、発動した。
!?と驚く、なのはとフェイト。確かに封印した筈なのに、
見ると、発動して空に向けて一直線に光を発する『ジュエルシード』
をいつのまにか現れた、巨大な緑色の物体が吸収している所だった。
驚くユーノ、

「そんな、結界内に侵入された?あんな巨大なものが?馬鹿な全然
気がつかなかったなんて!?」

その緑色の物体は、不気味な唸り声の様な音を発し、更に巨大化し
ていく。
『ジュエルシード』の影響だろう、その体長は優に、１００メート
ル近くある。
棘の無いサボテンを、無理やり捻くりまわしたかの様な異形、上部
の頭の様な大きな膨らみ部分に、黄色く発光する一つ目のごとき穴
がある。
それは、この世界に存在しない筈のもの。『ジュエルシード』によ
って、パワーアップした。

『怪奇植物グリーンモンス』

だった。
一旦、戦闘を中止した2人は『グリーンモンス』に攻撃を開始する。
なのはの『ディバインバスター』フェイトの『サンダースマッシャ
ー』金色と桜色の光が同時に命中した。

「えっ?」

「…これは…？」

フェイトとなのはは、驚く。
『グリーンモンス』は、２人の攻撃を吸収、更に一回り大きくなったのだ。
ユーノとアルフも、この状況に驚いている。
ユーノは、その巨体を小さな体で見上げ、

「そんな！魔法攻撃を吸収して、自分のものにしてしまうなんて、そんな話聞いた事がない！」

と混乱するが、すぐ気を取り直し、上空のなのはに向かって叫ぶ、

「駄目だ、なのは！そいつは魔法攻撃を吸収して、自分の力にしてしまうんだ！攻撃しちゃいけない！」

それを聞いたなのはは、どうしたらいいか分からず、混乱してしまう。

「ど、どうすればいいのユーノ君？それじゃあ、どうしよも無いよ～」

オロオロするなのはに、困惑するフェイト。

『グリーンモンス』は、元々エネルギーを吸収してしまう特性がある。
『初代グリーンモンス』も攻撃を吸収し、人間サイズから数十メートルまで巨大化してしまった事がある。
『ジュエルシード』を取り込んだ事もあり、魔法攻撃にも相性が良いのだろう。
とりあえず、『グリーンモンス』から、距離をとろうとした時、
『グリーンモンス』が、また不気味な吼える様な音を出し、中央の光る開口部から、緑色の液体を霧状に噴出した。
周辺が緑色に染まる程だ。
フェイト、なのは達の視界も緑色で見えない。

「な…何?体が…痺れる…」

「…こ…これは…!」

近くに居たフェイトとなのはは、緑色の霧を吸い込んで、同時に体に変調をきたした。体の自由が効かなくなり、魔法による浮遊を維持出来なくなった2人は、地上に落下していく。
『グリーンモンス』の麻酔ガスだ。
その威力は、『初代ウルトラマン』を昏倒させる程強力である。
フェイトとなのはは、とっさに魔法で防御したのだが間に合ず、吸い込んでしまった。

「なのはァァッ!」
「フェイトォォォ!」

ユーノとアルフが同時に、それぞれ、なのはフェイトの落下地点に走り出す。
しかし、ユーノ達も少しガスを吸い込んでしまい、いつもより体が重い。
それでも気力を振り絞り、何とかユーノとアルフは、なのは達を確保する。
しかし、ガスを吸い込んで走り回ったので、麻酔ガスがユーノの小さな体を蝕む、もう動けなかった。
アルフも同様で、フェイトを背で受け止めたまま、アスファルトに倒れ込んでいる。
『グリーンモンス』が轟音を上げ、近付いてくる、絶体絶命の状況だ。

「…駄目だ…このままじゃ…みんなやられる…」

ユーノは、動かない体で、懸命に最後の希望に望みを託す為、力一杯、四方に向けて念話をとばす。
あんな化け物、彼でも駄目かもしれないと思うが、今のユーノには彼しか頼れる者は居ない。

「…ゼ…ゼロさん…ウルトラマンゼロさん…お願いです…た…助けて下さい！」

だが、無情にも『グリーンモンス』は、すぐ近くまで迫っていた。
ユーノは、必死で動かない体にむち打ち、倒れて動かないなのはに這いよるが、もう動けない

（なのはごめん、もう駄目だ！）

その時だった。
凄まじい轟音が響き、『グリーンモンス』が吹き飛んだ。
ユーノ達の反対側のビルに突っ込み、ビルがガラス細工の様に粉々になり、粉塵が舞う。
ユーノは、何が起こったのかと懸命に首を上げた。

そこには、拳を突き出した巨人が立っていた。
身長数十メートルはある天を突く威容、銀色の顔とプロテクター状の上半身に、赤と青の体、頭部に二本の角の様な突起。
ユーノは思った。（…ま…まさか、この姿は…）

その時、ユーノの頭に声が響いた。

「ユーノ、待たせたな！」

この声は！ユーノは間違いないと思った。

『ウルトラマンゼロ』
只今、参上であった。

つづく

第8話　ミロガンダが秘密や（後書き）

何故、グリーンモンスなのかと言いますと、無印に木の関係の怪物が二回出てきたのと、なのは達と相性の悪そうな怪獣という事で、マイナーなグリーンモンスにしてみました。
メジャーどころだけど、あんまり強くない奴だとなのは達に倒れてしまう恐れがあったので…
という訳でした。

第9話　大爆発！捨て身の魔導師2人や（前書き）

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。
今回少し長めです。

第9話　大爆発！捨て身の魔導師2人や

ＰＭ８：５３
海鳴市中丘町　八神家

今ゼロは、夕飯の後片付けやその他の雑用を終え、リビングにて、はやてとお茶をたしなみながらテレビを見ていた。

「ん…？」

ゼロは何かを感じ取り、首を傾げた。
はやてはそれに気付き、怪訝そうに

「ゼロ兄どうかしたん？」

と声を掛ける。
ゼロは難しい顔のまま、はやての方を向き、

「今、声が聞こえた様な…？今の感覚というか、今のやりとりにも覚えが…」

その時、ゼロの頭の中に悲痛なユーノの声が聞こえた。
息も絶えだえの苦しそうな…

《…ゼ…ゼロさん…ウルトラマンゼロさん…お願いです…た…助けて下さい！》

ゼロは即座にソファーから、立ち上がった。
ビックリして、持っていたカップを取り落としそうになるはやて。

「はやて、ユーノから連絡が来た、かなりヤバい様だ。助けに行ってくる！」

言うが早いが、ポケットから2つ折りにしていた『ウルトラゼロ・アイ』を取り出し、両目に装着した。

「デュワッ！」

掛け声と共に、閃光の中ゼロの体は瞬く間にウルトラマンに変貌する。

はやては変身したゼロを見上げ、信頼の籠もった眼差しで送り出す。

「がんばってな、ゼロ兄、行ってらっしゃいっ」

ゼロはそのつり上がった光る目ではやてを見つめ、力強く頷いた。

「行ってくるぜ！」

と言うと、その場所からかき消す様に姿を消した。

テレポーテーションで、八神家の上空に出たゼロは、ユーノの声がする市街地に、マッハの速度で駆けつける。
その様子を見ている者が居れば、空気との摩擦で真っ赤になった楕円形のフィールドに包まれ、高速で飛行するゼロの姿が見えただろう。

数秒と掛からず、市街地上空に着いたゼロは、広い範囲に張られている異相空間に向かう。

（あれが結界ってやつか…どう入る？ぶち壊して無理矢理入るか…？）

ゼロは力押しを考えたが、結界内部で巨大な影を感じ取る。

（駄目だ、何かデカイ奴がいやがる。結界は壊すとやべえ、そうなると…）

考えていたゼロの頭にユーノの声が響いた。

《なのはごめん、もう駄目だ！》

もう一刻の猶予も無い！ゼロは結界に突入した。

（結界内に強制テレポートだ、何とかなんだろう！！）

「うおりゃあああああっ！！」

ゼロは突っ込みながら、強制テレポートを敢行する。
結界の境界前で、その姿が消えた。

結界内では、怪物がユーノ達を踏み潰さんとしていた。
その時、何とか侵入に成功したゼロが現れる。

「ユーノ、なのは、危ねえっ！野郎おおおおおおっ！！」

ゼロは、怪物に殴りかかりながら、巨大化する。
人間サイズから、身長４９メートルの巨人に、本来のサイズに戻ったのだ。
そのまま怪物に、強烈な正拳突きを叩き込む。
怪物は吹き飛び、ビルに激突した。
粉々になったビルの破片と粉塵が舞い上がる。
ゼロは、ユーノ達のの前に立ち、

《ユーノ、待たせたな！》

と呼びかける。
そして怪物の姿を確認したゼロは驚いた。

（あ、あれは確か、グリーンモンス？馬鹿な！何で此処に俺の世界の怪獣が居やがる！？）

混乱するが、大体の状況は分かった。
ユーノ達は、グリーンモンスの麻酔ガスにやられたのだろう。
ゼロはユーノとなのはに、『メディカルパワー』を照射した。
光が2人の体を包むと、ユーノは体が動く様になっているのに気付いた。
小さな四肢を踏ん張って、立ち上がるユーノに

《とりあえず応急処置だ。後は魔法で何とかなるか？》

《大丈夫です。これ位回復すれば、後は僕の回復魔法で充分です。…所でゼロさん、その姿は？》

ユーノは、なのはに回復魔法を施しながらもっともな質問をした。
知り合いが巨人になって現れたら、誰だって驚くだろう。
ゼロは、親指で自分を指すと、

《俺の本来の大きさは、元々こっちなんだよ》

と、久々の巨大化で少しすっきりした感じのゼロは言う。
ユーノは、（さすが、宇宙人だ…）と感心するやら呆れるやらだ。
ビルの下敷きになったかと思われた、グリーンモンスが怒り狂ったかの様に、瓦礫を跳ね除けながら立ち上がった。

その時フェイトとアルフは、グリーンモンスが突っ込んだビル近くの路上で動けないでいた。
そこにグリーンモンスの弾き飛ばした数十トンはある瓦礫が降って来た。

（何ぃ！他にも人が居たのか！？）

それに気付いたゼロは、地面を揺るがしながら猛然とダッシュした。
フェイト達の盾になり、数十トンは有りそうな瓦礫を背で受け止める。
フェイトとアルフは、その光景に驚いていた。
体が動かない上に巨大な瓦礫、もう駄目かと思った時に突如、巨人が現れて自分達を助けたからだ。
（…こ…これは、何…？）

（な…何なのさ…こいつは…？）

ゼロも、路上に倒れている少女と狼を見て驚く、

（なっ？フェイトじゃねえか！何で、こんな所に居る！？）

驚きながらも、瓦礫を離れた場所に投げ飛ばす。
数十トンは有る瓦礫は、唸りを上げてデパートに命中し半壊させた。
ゼロは２人を見下ろし、

（フェイトとあの狼から、なのは達と同じものを感じる。あいつら魔法使いだったのか…）

そう判断したゼロは、2人に『メディカルパワー』を照射する。
そうしている内に、グリーンモンスがこちらに向かって来た。ゼロは2人から離れ、グリーンモンスを誘導しながら、

《とりあえず、それで動けるはずだ。後は魔法で何とかしろ！》

そう言いつつ、グリーンモンスと対峙する。
アルフは、少女の形態をとり、フェイトを抱え距離をとりながら、

《誰だか知らないけど、礼は言っとくよ》

と言い、建物の影に隠れるとフェイトの解毒を始めた。

ゼロはそれを視界の隅で捉え、

（あいつ…アルフだったのか）

と思ったが、今は目前の敵に集中する。
グリーンモンスが、腕の様な触手を振り上げゼロに襲いかかる。

素早くバックステップして回避する、グリーンモンスの触手がゼロの後ろにあった大型マンションに振り下ろされる。
一撃で瓦礫の山と化す、凄まじいパワーであった。『ジュエルシード』を吸収したせいだろう、以前のグリーンモンスと比べて、ケタ違いのパワーだ。
百メートルはある大きさでも素早く動く、バックステップしたゼロに体当たりを仕掛ける。
ゼロは不意を突かれ吹っ飛ばされた、商店街に仰向けに倒れ込み建物が瓦礫の山と化す。
倒れたゼロに更に襲いかかるグリーンモンス、

「なめるなあっ！！」

瓦礫を除けて立ち上がったゼロは、グリーンモンスの突撃を受け止めた。
ゼロの足元のアスファルトが衝撃で砕ける、グリーンモンスの巨大な体が、半分ほどの大きさのゼロに受け止められていた。
「調子に乗ってんじゃねえぞ！このニョゴニョゴ野郎がああああっ！！」

ゼロは、グリーンモンスの巨体を頭上まで持ち上げると、そのままの勢いでビル街目掛けてぶん投げた。
勢いに乗ったグリーンモンスは、ビルをなぎ倒しながら吹っ飛び、街中に数百メートルの更地を作った。

その頃ユーノの治療を受け、かなりの回復をしたなのはは、その様子を見て、

「凄いね…ウルトラマンさん、あんな大きくなれるんだ。さすが宇宙人さんだね～」

と感心していた。

ユーノは、宇宙人だからで納得するの？と思いながらも、結界が保つか心配になった。

一方のフェイトは、アルフの治療でほぼ体調を回復していた。

なのはと比べて戦闘経験が豊富なフェイトは、防御魔法を使うのが早く、吸い込んだガスの量も少なくて済んだのだ。

「…あの大きな人は誰なんだろうね？」

立ち上がったフェイトは、ゼロとグリーンモンスの戦いを見てアルフに尋ねる。

「助けてくれたみたいだけど…あのオチビちゃん達の知り合いなのかね…？」

アルフも困惑している、異世界から来た彼女達も巨人が居るなどとは聞いた事が無い。

「…アルフ『ジュエルシード』は、あの怪物が吸収したんだよね…？あれは一体何なんだろう…？」

フェイトがアルフに尋ねる。アルフは、困った様に眉をひそめ、

「あいつ、『ジュエルシード』のせいで怪物になったんじゃ無く、元々の怪物だったみたいだよ。いきなり現れてさ、それ位しかあたしには分からないよ…」

2人は視線を、ゼロとグリーンモンスの戦いに戻した。

吹っ飛んだグリーンモンスを追ってゼロが、色の無い街を地響きを立てて走る。

グリーンモンスは、叫び声の様な音を発して立ち上がり、開口部から緑色の麻酔ガスを噴出した。

たちまち、周囲が緑色に染まる。

（チィッ！結構効きやがる！だが！！）

ゼロは構わず緑色の霧に突っ込んだ。

グリーンモンスに肉迫すると共に、素早く透視能力で『ジュエルシード』の位置を探り当てる。ゼロは、空手の抜き手の要領で、グリーンモンスの体に右手の手刀を突き刺した。

「ゴアオオオオオッ！！」

グリーンモンスが苦しげな音を出す。
ゼロは、その植物とカタツムリを合わせたような、気色悪い体内から青く光る『ジュエルシード』を引きずり出した。
緑色の体液が、血の様に飛び散る。

「こいつを頼む！」

そう言うと、『ジュエルシード』を放り投げた。
『ジュエルシード』はちょうど、なのは達とフェイト達が居る場所の真ん中に落ち、地上1メートル程で静止した。

『ジュエルシード』を抜かれたグリーンモンスは幾分小さくなったが、それでもゼロより大きい位だ。フェイト、なのはの魔力を喰らったのでまだパワー充分である。
だがゼロは、

「これで容赦する必要は無えな！この野郎ぉ！！」

グリーンモンスの頭？を下から蹴り上げた。
よろける所に続け様、強烈な突きを嵐の様に叩き込む。
明らかにグリーンモンスの動きが鈍る。
トドメとばかりに放ったチョップが、光の壁に遮られた。

「バリヤーだと？」

グリーンモンスが体の前面に、魔法障壁を展開したのだ。
先ほど、フェイト、なのはから吸収した力を利用したのだろう。

「面白れえ！なら、こいつを受けてみな！！」

ゼロは、左腕を水平に伸ばした。
光線技の予備動作だ。体内のエネルギーが集中していく、
そしてゼロは、両腕をＬ字形に組んだ。

「食らいやがれっ！！」

目も眩む光の奔流が、Ｌ字形に組んだ右腕から発射された。
『ワイドゼロショット』
ゼロの必殺光線の一つだ。
光の束がグリーンモンスのバリヤーに命中し、紙の様に安々とバリヤーをぶち抜きグリーンモンスに降り注いだ。
その体は、あっという間に燃え上がり、断末魔の音を上げる間も無く炭化し崩れ去る。
一撃で怪獣６体以上を消し去る威力だ、バリヤー位では防げる訳も無い。
全開で撃つとユーノの心配通り、結界を打ち抜くかもしれないのでパワーは抑えてある。
久々の巨大化での戦闘を終えたゼロは、人間サイズに縮小し、なのは達の元に向かった。

その頃、フェイトとアルフはゼロの取り出した『ジュエルシード』の元に急いでいた。

「フェイト大丈夫なのかい？まだ完全に抜けきってないだろう？」

アルフが心配して声を掛けるが、

「…これ位…平気だよ、それより早く『ジュエルシード』を…」

そう言って、飛行魔法の速度を速めた。

一方のなのは達も『ジュエルシード』の回収に向かおうとしたのだが、なのはが回復しきっておらず、出遅れてしまった。
ゼロは、フェイトとなのはが『ジュエルシード』を巡って争っているのを知らなかったので、結果フェイトに有利に働いた。

先に『ジュエルシード』にたどり着いたフェイトは、すぐに『バルディッシュ』で、再度封印を試みる。
その時だった。
どこからか、光が『ジュエルシード』に撃ち込まれた。

「！？」

「フェイトォッ！！」

その光が当たった『ジュエルシード』はドクンッと脈動し、光の余波で『バルディッシュ』に亀裂が入り、破損してしまった。
今の光は、強力な破壊光線だったらしい。

「誰だっ！？」

アルフが、光線の飛んで来た方向を探るが、影も形も無い。
次の瞬間、『ジュエルシード』が青い光を放ち、それが一気に広がったかと思うと天を貫く光の柱が発生し、大爆発を起こした。
ジュエルシードが光線のエネルギーで暴走を起こしたのだ。衝撃で跳ね飛ばされるフェイトとアルフ、近くまで来ていたなのは達とゼロにも衝撃波が襲いかかる。
物理的な爆発では無い様だが、衝撃波でなのは達は吹き飛び、ゼロも吹き飛ばされない様踏ん張る。
一旦吹き飛ばされたフェイトだが、破損したバルディッシュを見て悲しそうにし、労る様に装飾品に戻すと、まだ光を発している『ジュエルシード』に向かった。
そして一気に、両手で押さえ込んだ。
それを見たアルフが、

「フェイト！駄目だ、危ない！！」

止める様呼びかけるが、フェイトは止めようとはしない。
その時ゼロとなのは達も駆けつけ、その光景に唖然とする。
フェイトは無理やり素手で封印を試みる。本来なら高エネルギー故

に、とても素手では触れられない為にデバイスを使って行っていた事を素手でやろうというのだ、無茶である。
『ジュエルシード』はフェイトの手の中で、激しく輝いている。

「止まれ…止まれ…止まれ…」

必死で押さえ込むフェイト、
手の肉が破け、血が流れた。
見かねたなのが近寄ろうとするが、アルフが立ちふさがる。
邪魔は許さないという強い意志で、
ゼロにはどうする事も出来ないが、邪魔をしてはいけない気がした。
フェイトは懸命に封印を施していた。
やがて祈る様に膝を着く。

「止まれ…止まれ…止まれ…止まれ…」

その姿は、まるで何かに必死の祈りを捧げる殉教者の様であった。
フェイトは最後の魔力を振り絞り、低く叫んだ。

「止まれっ！」

祈りが届いたかの様に青い光が弱くなっていく、
そして光が完全に止んだ。
フェイトはそのまま力尽き、崩れ落ちた。
地面に倒れる前にアルフがしっかりと支える。

フェイトを抱き上げ、なのは達を睨むアルフ、
少しだけ悲しげな表情になった後、跳躍しビルに飛び移ると闇の中に姿を消した。
なのはとユーノは黙って見送るしかなかった、完全に呑まれていたのだ。
ゼロは状況が分からないので、ポカンとするだけだが、

「お前の言っていた、母さんの用事ってのはこれだったのか…？」
と呟いた。

―――――――――――――――――

「そんで、そのフェイトちゃんとなのはちゃんとで、『ジュエルシード』を巡って争っとったんか…」

驚くはやてである。
八神家に帰って来たゼロは、リビングで帰りを待っていたはやてに、一通りを話している所だ。
あの後、２人から今までのいきさつを聞いたゼロは、

「よし、次会ったら話を聞いてみようぜ」

と提案したのだが、なのは暗い顔をして、

「でも…フェイトちゃん、話し合うだけじゃ言葉だけじゃ何も変わらない…伝わらないって…」

といささかへこみ気味で、ユーノは乗り気ではない。
そんな2人にゼロは、

「だったらよ、事と次第によっちゃ『ジュエルシード』も渡してやるし、集めるのも手伝ってやるって言うのはどうだ?これなら訳を話す気にもなるんじゃねえのか?」

と言い出し、なのはとユーノを絶句させた。

「な、何言ってるんですか!そんな事出来ませんよ~!」

と反対していたユーノだが、

「さっきのフェイト、お前も見ただろう?何か、深い事情があるんじゃねえのか?例えば、親の命が掛かってるとかよ…」

ゼロは、よほどの理由が有るんじゃないかと力説する。

さすがに、母親の事は言えなかった。自分を信頼して話してくれたのだろうから。
なのは賛成し、ユーノは迷っていたが、フェイトの必死さを見た事もあり、悪用するおそれと納得出来る理由が無ければ渡さないという事で、とりあえず話だけはしてみようと決まったのだ。

「はやてはどう思う？」

こういう方面は苦手なゼロは、はやての意見を聞く。
なのはとフェイト、２人が争うのを見たくなかったゼロは、つい思ったままを口にしてしまったので、本当に良かったのか自信が無い。
小学生に相談事を持ちかけるウルトラマンというのもシュールだが…
はやては少し考え、

「やってみる価値は有ると思うわ、ゼロ兄は間違ってないと思うで、訳ありやようやし…」

はやてに言われてホッとする。
何か、なのはもユーノもゼロを尊敬してるらしく、後から勢いで言ってしまったと言えず困っていたのだ。

「じゃあ、そっちはまず話をしてみるとして…後は…」

「ゼロ兄が居た世界から来たらしい怪獣と、『ジュエルシード』を暴走させた犯人の事やね？」

はやてが先を越して言う、

ユーノによると、あの暴走は誰かが『ジュエルシード』に膨大なエネルギーを注入されたせいらしいのだ。
その結果、小規模ながら次元振が発生した。
ユーノは『ジュエルシード』がそんな事になるとは思っていなかったので驚いていた。

「ゼロ兄から聞いた話からすると、誰かが結界の中に入り込んで怪獣の入ったカプセルみたいな物を開けて、『ジュエルシード』を暴走させて逃げたゆう事やね?」
ゼロは腕組みをして首をひねる。

「そいつは一体何がしてえんだ?俺の居た世界から来たのは間違い無さそうだが『ジュエルシード』を奪う気なら、簡単に奪えただろうに…」

訳が解らんといった感じのゼロである。

「…ん~違うやろか…?」

何か思い当たった様なはやてに、ゼロは、

「何だ?思いついたなら、言ってみろよ」

「う~ん、何となくなんやけど…その場を引っ掻き回して喜んどる気がするんよ、愉快犯みたいな…せやけど何か酷い悪意みたいなもんを感じる気がするわ…」

聡明なはやては鋭く物事をとらえていたが、漠然といずれ自分の元にその底知れぬ悪意がやって来る気がして、ゾッとした。

ゼロとの相談を終えたはやては、ベッドに入っていた。
色々な事を聞いて興奮しているのか、なかなか寝付けない。
暗い部屋の中、自然頭に浮かぶのはさっきの話の事だった。
その中でも、なのは、フェイト、自分と同い年位で魔法使いをしている2人の少女の事が浮かぶ。

（…私も、なのはちゃん、フェイトちゃんみたいに魔法が使えたらええのに…）

ふと、そう思った、ゼロははやてに何でも話してくれて、相談もしてくれる。
それがはやてには嬉しい、しかし相談相手にしかなれない自分が歯がゆくもあった。

（私が魔法使いやったら、相談だけやなくてゼロ兄のお手伝いが出来るんやけどな…）

その時はやては、自分が魔法使いだったら…と強く思っていた。
魔法の存在を知り、魔法使いになりたいと願う…

それは本来なら、もう少し後に起こる筈の出来事…

それを早めるのに充分だった…

突如、はやては光を感じた。
光の方向を見ると、いつも大事にしている鎖で縛られた本が紫色の光を発していた。
はやては混乱する、次の瞬間、部屋全体が光に反応するかの様に揺れ動いた。
恐怖の余り、はやては声も上げられない。
その目の前で本が紫色の光を発しながら、ゆっくりと浮かび上がる。
その金の装飾が施されている表紙が、まるで生きているかの様に脈打ったかと思うと、本を縛っていた鎖が弾け飛んだ。
そしてはやての頭の中に

『封印を解除します』

という無機質な女の声が響いた。

「ゼロ兄ぃーっ！！」

はやては絶叫していた。

第9話　大爆発！捨て身の魔導師2人や（後書き）

原作より早いですが、次回より『あの人達』が登場です。
バレバレですね

第１０話　ヴォルケンリッター参上！や（前編）　（前書き）

読んで下さってる皆さん、ありがとうございます。
タイトルでモロバレですが『ヴォルケンリッター』登場です。

第１０話　ヴォルケンリッター参上！や（前編）

はやての部屋

紫色の光で染まった部屋の中、その本がゆっくりとはやての方に降りて来た。
はやては後ずさり、少しでも離れようとする。
その時、本の表紙に付いている十字の紋章が輝やき、

《Ａｎｆａｎｇ》（起動）

とさっきの無機質な声が聞こえたかと思うと…

「ふあああっ？」

はやては目を疑った。
自分の胸の辺りから、光り輝く玉の様なものが出て来たのだ。
その光の塊ははやての体を離れ、浮遊している本に吸い込まれるかに見えた。
その瞬間、目を開けていられない程の強い光が発せられた。

「ひゃうんっ？」

たまらず、目を腕で庇うはやて。

光が弱くなっていくのを感じ、彼女は目を開けた。
先ほど自分から抜け出た光の玉が浮いている。

（一体これは何やの…？）

そう思ったはやては自分の目の前に誰かが居るのに気付き、ギョッとした。

いつの間に現れたのか、紫色の光る魔法陣を背に４人の男女が片膝を立て、臣下の礼をとるかのごとく跪(ひざまづ)いている。

先頭で跪いている、桜色の髪をポニーテールでまとめた、成人前位の女性が頭を下げ、はやてに話し掛ける。

「闇の書の起動を確認しました…」

その後ろに控えていた金髪の成人女性が続く、

「我ら『闇の書』の収集を行い、主(あるじ)を守る守護騎士にてございます」

続けて、獣の耳を持ち浅黒い肌をした大柄な男性が

「夜天の主の元に集いし雲…」

最後に、赤い髪をおさげにした、はやてより幼い少女が、

「『ヴォルケンリッター』何なりと命令を…」

はやての混乱は、頂点に達した。

その少し前、部屋で休もうとしていたゼロは、妙な感覚に襲われていた。

その時、

「ゼロ兄ぃーっ！！」

はやての叫び声が聞こえてきた。

「はやてっ！？」

ゼロは布団を跳ね除け、はやての部屋に向かう。

はやての部屋のドアの隙間から、異様な光が漏れているのを見たゼロはすぐさまドアを開けた。

「はやてぇっ！どうしたぁっ！？」

そのまま部屋に飛び込もうとしたが、何かに弾き返された。

「何ぃっ？どうなってやがる！？」

見ると、紫色の光の壁の様なものが張ってあり、外部からの侵入を拒んでいる。

「野郎っ！待ってろはやて！！」

ゼロは『ウルトラゼロ・アイ』を　装着し、ウルトラマン形態をとると、力任せに紫色の壁に突っ込んだ。

強引に光の障壁をぶち抜き、部屋に飛び込む。

そこでゼロは、室内に見知らぬ男女が居るのを見付けた。

「何だ貴様ら！はやてに何をした！？」

明らかに不法侵入の４人に、怒りを爆発させ身構えるゼロ。
対して４人の方も臨戦の構えをとる。ポニーテールの女は、首から下げていたペンダントを長剣に変化させ、切っ先をゼロに向ける。

（こいつら、魔導師か！？）

ゼロは、フェイト達と同系統の力を４人に感じる。

「貴様こそ何者だ？見た事も無い奇怪な奴…主を狙って来たのか！？」

静かな怒りを声に滲ませる。
不審者に奇怪な奴呼ばわりされたゼロは激怒する。
知られていない世界では、ウルトラマンも不審者扱いである…

「ふざけるな！俺ははやての家族だ！！」

「信用出来ん、お前が我らをたばかろうとしていないと誰が言える！」

即座に否定されてしまった。
どうも話がかみ合わない、まずゼロははやての無事を確認しようとする。

「おいっ、はやて大丈夫か?何もされてねえか!?」

返事が無い…

「ねえ、ちょっとちょっと…」

その時少女の声が聞こえた。
赤毛の少女がベッドの上に乗り、はやてを覗き込んでいる。
ポニーテールの女はゼロから目を離さずに、

「何をしているヴィータ、主の前で無礼は許されん…」

と注意するが、少女ははやての顔を覗き込み、

「こいつ気絶してる様に見えんだけど…」

はやては目をぐるんぐるんさせ、口を引きつらせたまま気絶していた。

「嘘っ!?」

金髪の女が焦った声を出す。
４人の注意がはやてに向いた時、ゼロははやてに駆け寄っていた。

「しまった！」

不意を突かれた形になった４人は慌てるが、ゼロはもうはやてを抱き起こしていて、手が出せない。
ゼロは４人に構わずはやての様子を見る。
ショックを受けたらしく意識が無い。
病院に連れて行った方が良いと判断したゼロは、はやてをベッドの毛布でくるむと、そのまま抱え上げた。
４人の男女がその前に立ちふさがる。
ポニーテールの女が剣を構え、

「主を何処に連れて行くつもりだ…放して貰おうか…」

切れ長の目に殺気を込めて言い放つ。
ゼロは六角形の目の光を強め、怒鳴った。

「うるせえ！勝負なら後でしてやる。今ははやてを病院に連れて行く方が先だ！！」

そう言うとはやてをお姫様抱っこし、４人を押しのけて駆け出した。

「チイッ、追うぞ！あれでは手出しできん！」

ポニーテールの女が後を追う、他の3人も後を追った。

その後しばらくして「深夜の路上を何かを抱えて時速百キロで走る、光る目の怪人と、寒い中それを追う、剣やらゲートボールのスティックやらを振り回す薄着の男女」という都市伝説が広まったらしいが、あまりに馬鹿馬鹿しかったのか、すぐ廃れたそうな…

海鳴大学病院に着いたゼロは変身を解き、当直だった石田女医にはやてを見て貰った。

あの4人もついて来ている。

此処が医療施設であり、ゼロがはやてに危害を加えるつもりが無いのは分かった様だが、それでも気は抜いていない。

しかしそれはゼロも同じであり、この正体不明の4人に対し警戒する。

病院の中で人目もあり、戦いにこそならなかったが、はやての寝ている病室の中、火花を散らし無言でにらみ合う5人だった。

日付が替わり、次の日の朝はやては目覚めた。

ベッドの傍にいた石田女医が声を掛ける。

「はやてちゃん良かったわ…何ともなくて、びっくりしたわよ、昨日夜中に、ゼロ君がはやてちゃんを担ぎ込んで来た時は」

ホッとした様子の石田に、はやては少し困ったような笑顔を見せる。
どうやら昨日の夜に倒れたらしい、変な夢を見た気がするが…

「えっと…すんません」

心配を掛けたお詫びを言う。
そんなはやてに石田も笑いかけるが、顔を近づけ眉を寄せると小声で

「で…誰なの？あの人達は…」

後ろを指差して、うさん臭そうに言った。
何の事か解らず、石田が指差した方向を見ると、

「ああっ！」

驚くはやて、昨日部屋に現れた４人が立っていた。
その隣にはゼロが居て、ポニーテールの女性との睨み合いと、はやての様子見とを交互にしている。
はやてが気が付いたので、

「はやて、大丈夫か？」

と声を掛けてきた。
ゼロと一緒に数人の男の看護士が、４人を監視している様だ。
その視線の中、金髪の女性は不安げにし、獣耳の男性は動ぜずに堂々としており、赤い髪の少女はチラチラとはやての方を見ている。

「どういう人達なの？この寒いのに何か変な格好してるし、言ってる事は訳分かんないし、ゼロ君も何か要領を得ない返事しかしないし…どうも怪しいわ」

石田は明らかに不審者を見る目で４人を見る。
４人共、肩むき出しの薄いピッタリした、妙なボディースーツを着てる上、男性には獣耳に尻尾まで付けていて、たいへん目立っている。
ちなみにゼロは、そのまま出て来たので寝巻きである。
ゼロは、彼らが何か仕出かさないか見張っていた。
下手に騒ぎ立てないのは、この４人に暴れられると困るからだ。
はやてに危害を加える心配は無さそうだが、正体が分からないのではやてが起きるまで保留にしている。
様子見で一晩この状態だ。

はやては、昨日の事が夢じゃなかったのかと実感したが、どうにも困ってしまい、

「あ～、え～と…何と言いましょうか…」

しどろもどろになってしまう。
そんなはやての頭の中に、

《御命令を頂ければ、お力になれますが…》

女性の声が聞こえた。
びっくりするはやて、見るとゼロと睨み合いをしていたポニーテールの女性の様だが、

《いかが致しましょう…》

はやては、未知の感覚に驚く。
ポニーテールの女性はそんなはやての心中を察し、

《思念通話です。心で御命令を念じて頂ければ…》

説明してくれた。
色々と混乱するはやてだが、持ち前の聡明さと、ゼロのお陰で常識外の事に耐性が出来ていたのか、直ぐに立ち直る。

素早く考えをまとめたはやては、ポニーテールの女性に向かって念じた。

《ほんなら、命令と言うかお願いや、ちょう、私に話合わせてな?》

ポニーテールの女性は、意外な言葉を聞いたかの様だが、

「はい…」

と返事をした。
一方のゼロは、当人同士の念話は聞き取れず、何やってんだ?という顔をする。

以前ユーノの念話を聞き取れたのは、ユーノが助けを求める為に、無作為に念話を飛ばしたせいである。当人同士だと電話の様に、相手にしか聞こえないものらしい。
はやては石田に、

「え～と…石田先生、実はあの人達、私らの親戚で…」

「親戚ぃ!?」

「親戚だと!?」

石田ははやてに向き直り驚いた。
ゼロは声を掛けようとするが、はやてに「お願いや話を合わせて」という表情をされ黙る。

「遠くの祖国から、私達が今2人だけやと知って様子見に来てくれたんです。そんで、びっくりさせよ思って仮装までしてくれてたのに…私がそれにびっくりし過ぎてもうたと言うか…
それにゼロ兄が怒ってしもて…その…そんな感じで…なあ?」

どんどん後半部分が苦しくなったが、はやてはそう説明した。
それに合わせて金髪の女性と、ポニーテールの女性が、

「そうなんですよ～」

「その通りです…」

話を合わせる。
石田はまだ疑わしそうにし、ゼロに話を振る、

「ゼロ君、本当なの？親戚って…」

「ちっ、こんな奴ら…痛でっ！」

ポニーテールの女性がゼロの足を踏み、話を合わせろと睨みつける。
後で覚えてやがれよと思いながらも、

「そ…そうなんですよ石田先生、コイツらやりすぎやがって…」

無理矢理話を合わせた。
石田は４人を見てまだ唸っているが、はやては引きつった笑いを浮かべて誤魔化すしかなかった。

これ以上ボロが出ない内にと、はやてを連れ、逃げる様に病院を出たゼロ達は、八神家に戻った。

はやての部屋に集まった６人、少し窮屈だ。

ゼロは、腕組みして４人を見張る。
彼女達は、はやてに向かって片膝をついて指示を待つ家来といった風だ。
車椅子に乗せて貰ったはやては、例の本を手に取り、

「そうかあ…この子が『闇の書』いうんやったんやね…物心ついた時には棚に在ったんよ。綺麗な本やから大事にはしてたんやけど…」

今、はやてとゼロは４人から説明を受けていた所だ。
彼らは『闇の書』と呼ばれる、遥か昔に造られた魔導書の魔法プログラムの人工生命で、『闇の書』の魔力収集と主の守護をするのが使命である事。

『闇の書』は様々な魔力を収集する事が出来、６６６ページ分を完成させれば、持ち主は絶大な力を振るえるという事を聞いた。
はやては、まじまじと『闇の書』を眺め、

「それで…私が何代目かの主に選ばれたいう事やね？」

「その通りです。…所で主…」

ポニーテールの女性が、はやてに何やら聞きたげなのに気付き、

「何や？」

ポニーテールの女性は、腕組みして立っているゼロに目を向け、

「その男は一体何者ですか？魔力反応も無いにも拘わらず、凄まじい力を感じました。主の部下でしょうか？」

「何言っとるんや、ゼロ兄は私の大切な家族や！」

はやてには珍しく、少し強めの調子だった。
ゼロをそんな目で見て欲しくなかったのだろう。
次の瞬間４人は、いっせいにゼロに向かい跪(ひざまず)いた。

ポニーテールの女性が頭を下げ、

「主の家族の方とは信じられず、数々の無礼な振る舞い…主を守る使命故、命こそ差し出せませんが、いかような罰でもこの私が！」

心底申し訳ないと悔恨の表情だ。
ゼロはいきなり謝られ、肩すかしを食った気分だ。
この後勝負着けてやる！と意気込んでいたので、拍子抜けである。
こう正面から謝られては怒るに怒れないし、ゼロも根が善人なので許す事にした。
それに、ゼロには気になる事もあった。
４人の目が、最近出会った少女を思わせたのだ。
母親の事で寂しそうな目をしていた子を…

「分かった分かった…もういい、だから頭をあげろ」

しかしポニーテールは納得しない、

「それでは私の気が済みません、今にして思えば…主の為に行動していた貴方に剣を向け、足を踏んだ上に悪口雑言の数々…許される事では…」

考えてみればゼロもかなり酷い事をされている。それもやったのは、全部このポニテであるが…

「だから、もういいっ！お前らも、はやてを守ろうとしてやった事だろ？だからもう無し！終わりだ！」

ゼロは両手で×印を作って、止める様に言うが…

その後もゴネるポニテを、はやてと2人で何とかなだめた。コイツ、クソ真面目だな…とゼロは思う。

一段落着いたところで、

「自己紹介がまだやったね？私は、八神はやてや」

「俺は、モロボシ・ゼロ、別の世界から来た異星人だ」

さすがに彼女達も、異星人を見たことが無いらしく驚いている。

気を取り直し４人も名乗る。
ポニーテールの女性が、

「剣の騎士『シグナム』」

赤毛の少女が、

「鉄槌の騎士『ヴィータ』」

金髪の女性が、

「湖の騎士『シャマル』」

獣耳の男性が、

「盾の守護獣『ザフィーラ』」

「Ｍ７８からの使者『ウルトラマンゼロ！』」

とゼロが締めた…

「……」

部屋の中を気まずい空気が流れた…

台無しである。

ゼロは皆の冷たい視線の中、頭をかき、

「…いや…流れ的に、俺もやった方がいいかなあー、と思って、つい…」

誰もそんな事、望んでいなかった様である…

「ともかくや…」

場の空気を切り替えるべく、はやてが声を出す。
今のは無かった事にされた様だ。
車椅子を動かし、小物入れの引き出しを開け探し物をしている様だ。

「あった」

探し物はすぐ見つかったらしく、それを持って車椅子で4人の前に来ると、

「一つ、分かった事がある…」

4人は、顔を上げる。

「『闇の書』の主として、守護騎士みんなの衣食住、きっちり面倒

を見なあかんいう事や。なあ、ゼロ兄？」

ゼロも、はやての性格は知っているので驚きはしない。

「まあ…そういう事だな…今日から家族って訳だ」

苦笑しながら答えた。

そんなはやてを大した子だなと、嬉しく思うゼロである。

はやては続けて、

「幸い住む所は有るし、料理は得意や。みんなのお洋服買うてくるから、サイズ計らせてな？」

そう言うとメジャーを出した。

そんな2人を見て、呆気にとられるシグナム達だった。

時間は昨日の夜に戻る。

海鳴市に隣接する遠見市の住宅街に、ひときわ大きな高級マンションがあった。

フェイトとアルフの、この世界での住居である。

生活するのに最小限の物しか置いていない、ガランとした灯りもつけない広い部屋。

その中でぽつんと置かれたソファーに座り、フェイトは『ジュエルシード』封印の際に負った、傷の手当てをアルフから受けていた。
手の傷はかなり酷い…その手に包帯を巻くアルフ。

「…痛っ…」

声を上げてしまうフェイト、アルフは慌てて謝る。
フェイトは微笑んで、

「…平気だよ、ありがとう…明日は母さんに報告に戻らないといけないから…早く直さないとね…傷だらけで帰ったら、きっと心配させちゃうから…」

アルフは、複雑な顔になってしまう。

「心配するか？あの人が…」
「…母さんは不器用なだけだよ…」

フェイトはアルフに言い聞かせる様に話す。

「報告だけなら、あたしが行って来れればいいんだけど…」

アルフは、あまりフェイトの母親に良い感情を持っておらず、フェ

イトがあまり母親に近づかない方がいいと思っている様だ。

「…母さんは、アルフの言う事あんまり聞いてくれないもんね…」

フェイトは包帯を巻いた手を伸ばし、アルフの頬を触る。

「…アルフは、こんなに優しくていい子なのに…」

アルフは照れて赤くなる。照れ隠しにワザと元気に振る舞い、

「まあ…明日は大丈夫さ、こんな短期間でロストロギア『ジュエルシード』を４つもゲットしたんだし、誉められこそすれ叱られる様な事はまず無いもんね」

アルフの言葉に頷くフェイト

「…そうだね」

その表情には、少しだけ明るさが浮かんでいた。

つづく

第１０話　ヴォルケンリッター参上！や（前編）　（後書き）

やっぱり一回で終わらなかったので次回に続きます。
テレビでゼロの映画の宣伝が始まっていました。
いやあ～こんな早くやるもんなんですね。
これでしばらくテレビで宮野さんのゼロの声が聞けるでしょう。

第11話　ヴォルケンリッター参上！や（後編）（前書き）

読んで下さっている皆さんありがとうございます。
書くことが多くて長くなってしまいましたが後編です。

第11話　ヴォルケンリッター参上！や（後編）

八神家

シグナム達のサイズを計り終わったはやては、ゼロと買い物に出掛けた。
４人は、あの妙な格好なので留守番である。

デパートなどを回り必要な服を選ぶ、コーディネートははやて任せだ。
シグナム達のイメージで服を選ぶはやては楽しそうである。なかなかセンスがいい様だ。
女性用下着売り場でじろじろ見られるゼロだが、気付かないのはご愛嬌だろう。

帰り際のゼロは、服の紙袋や食材のビニール袋を大量に抱え、はやても膝の上に沢山の袋を載せてひいこら言いながら帰宅した。

「みんなーっ、ただいまー」

「帰ったぞー」

声を掛けてリビングに入った2人は、女性陣3人と、青い毛並みをした大きな犬?が居るのに気付いた。
はやては目をキラキラさせて、

「うわあ～犬や～大きいなあ～可愛いなあ～この子どうしたん?」

よほど犬が好きと見え、見知らぬ大きな犬に近寄り頭をなでている。
その犬が口をきいた。

「ザフィーラです、主(あるじ)」

はやてはびっくりする。

「ど…どないしたんや、ザフィーラその格好は?」

「私は、守護獣です。狼がもう一つの姿…こちらの方が落ち着くので…」

狼の姿だが、あくまで渋く喋るザフィーラである。
アルフと同じ、獣の姿の方が本来の姿なのかもしれない。
はやては感激している様だ。

「うわあ~前から犬飼いたかったんよ~あははははっ」

ザフィーラを撫でくりまわしている。
狼だと言っているのだが…それを見てゼロは、

(ザフィーラめ、早くも犬ポジションに収まりやがったな~)

と女性比率がいきなり上がった八神家で、
(これじゃあ、実質男は俺1人になっちまう)
と思い、仲間に裏切られた気がして少し淋しいゼロだった。

はやては早速、買ってきた服を広げた。
シャマルは喜んで、どれにしようか悩んで色々合わせている。

シグナムはあまり気にしない質なのか即決して、さっさと着替え始める。
ヴィータははやてに手伝ってもらい、もじもじしながら服を選んでいる。

その途中、はやてはある事に気付いた。
後ろの方で、さも当然といった顔で部屋の中に居座るゼロに。

「ゼロ兄ぃ～何しとるん～？」

いつも温厚なはやての額に青筋が浮き、笑顔なのに何だか怖い…

「えっ？他人だと犯罪だけど、家族だといいんじゃねえのか？第一、はやては…」

「私はいいんやO．K出してるやろ？でも親しき仲にも礼儀有りや、許可を貰わん限り家族でも見たらあかんで」

それも理屈だが、微妙にズレている上に、聞き捨てならないセリフが混じっていた気がする…

「なるほど！そういうものか、お前ら悪かったな、すぐ出て行くぜ」

ゼロは皆に謝ると、即座に部屋を出て行った。
はやては、シグナム達に振り向き、

「みんな、ごめんな、ゼロ兄まだ常識にあちこち穴があるんよ～」

と、すまなそうに言う、シグナム達は「はあ…」
と気の抜けた返事をするしかなかった。

ようやく身支度を整えた女性陣。
美人揃いなので、オシャレな服に着替えたシグナム達は非常に華やかである。

ザフィーラはというと、シグナム達がせっかく主が買って来て下さったのだからと服を着る様言ったのだが、このままでいいと獣の姿を解かなかった。
はやてがザフィーラの獣形態を、いたく気に入っているせいもあり、基本今の姿を通すつもりらしい。

一段落した所で、はやてがみんなに、

「みんな、ご飯の前にお風呂に入って、さっぱりしてくるとええよ」

とお風呂を進めるが、シグナム達は「主より先に入るなど恐れ多い、お先に」と譲らなかった。
はやては、（気にする事あらへんのに…）と思ったが、食事の支度もあるので今回はお言葉に甘える事にした。

「じゃあゼロ兄、先に入ってご飯の支度しよ」

「ああ、分かった」

そう言うと、当然の様にはやてを連れて浴室に向かおうとするゼロ

に、シグナムが鋭く声を掛けた。

「ゼロ殿！少し待って貰えないだろうか？」

ゼロは振り向いて、顔をしかめ、

「俺の事は呼び捨てでいいぞ、敬語も無しだ。柄じゃねえから痒くなっちまう…」

「そうか…分かった。そうさせて貰おう…では無い！主はやてと一緒に入る気か？」

シグナムの質問に、ゼロは「何を言ってるんだ？」という感じで、

「そうだけどよ…それがどうかしたのか？」

シャマルがシグナムの隣に来て、

「それは、普通に駄目だと思うんだけど…」

「へっ…？」

目が点になるゼロに、シグナムが、

「兄妹ではあるまいし、年齢的にもまずいと思うぞ？」

追い討ちをかける様にヴィータが、そっぽを向きながら、

「…ずっと一緒に入ってたのかよ…犯罪ってヤツだろ、それ…」

「犯罪ぃっ！？」

可哀想な程衝撃を受けるゼロ。
この際、ゼロの年齢が見た目より遥かに上であっても認めては貰えないだろう。
慌てて、はやてを見る。
はやては下を向いたままで顔が見えない。

「…おい、はやて…？」

恐る恐る声を掛けると、はやては顔を上げ、

「バレてもうたみたいやね～」

と照れ笑いした。
ゼロは血の気が引く音というのを初めて聞いた気がした。

「はやて～っ、地球じゃ当たり前だって言ってたじゃねえか～っ！！」

ゼロの叫び声が、八神家に響いた。

それでもはやては「今まで一緒やったから、いいやないの」と食い下がったが、結局皆に止められ、ゼロと入るのを諦めた。
しかし（まあ…後で何とでもなるやろ）と何やら独り言を言っていた様だが…

それならという事で、はやては戸惑うヴィータと「私がお世話します」と手を上げたシャマルを連れて浴室に向かった。
一方ゼロは、部屋の隅っこに座り込んで落ち込んでいた。
その様子があまりに哀れだったので、ザフィーラが声を掛ける。

「気にする事は無いだろう…主に悪気は無かったろうし、ゼロはまったく違う世界にいて知らなかったのだから…」

ゼロは顔を上げ、ザフィーラの顔を見ると、肉球でぷにぷにの前足を握り、

「ありがとよ、ザッフィーッ！」

「ザッフィー…？」

獣の顔で微妙な表情になるザフィーラだった。
その様子を見ていたシグナムは、

「破廉恥な…主はやてはまだ幼い、早すぎる…いくら知らなかったとはいえ…その…何だ…」

と顔を赤らめてブツブツ言っている。
ゼロには何の事か、さっぱり分からなかった。

気を取り直したゼロは、風呂から上がったはやてと、みんなのご飯の支度を始めた。

「量が多いから張り切らんとな、ゼロ兄」

「おうっ！任せな」

はやてもゼロも張り切っている。
はやてに学び、今やなかなかの料理人となったゼロは、気合いを入れ6人分の食材を高速で切っていく。
はやても車椅子ながら、無駄の無い動きで調理を進める。
それに対し、シグナム達は戸惑っていた。
主にこんな事をさせていいものか？と…はやてに座って待っている様に言われ、リビングのソファーに座るが、落ち着かない様子だった。

6人分の料理がテーブルに並べられていた。
大皿に盛られた筑前煮に、刺身に茶碗蒸しなどの和食料理だ。

まずみんなに日本の料理を食べさせたいと、はやてが決めたのだ。
いつもの2人分の3倍は量があるので、テーブルが満杯である。
5人はテーブルに着き、ザフィーラは床で犬用の大きな器に同じ物を貰う。
ザフィーラはこの方がいいそうだ。

「さあできた、食べようか、いただきます」

「いただきます」

はやてが手を合わせて言うと、ゼロも手を合わせ言う。
シグナム達も見よう見まねで続いた。
みんな遠慮がちというか、かしこまっている様だが、ヴィータが恐る恐る筑前煮に箸を付け食べてみる。
おおっ、という表情をし、照れくさそうに次々と料理を食べ始めた。
シャマルとシグナムも、そんなヴィータを見て笑みが浮かぶ、はやてを見ると嬉しそうだ。
ゼロは、バクバク食べながら、

「はやての料理は美味いだろ～？残すんじゃねえぞ」

と上機嫌だ。みんな美味しそうに食べているのが嬉しいらしい。
ザフィーラはマイペースでしっかり食べている。
ヴィータが遠慮がちにお茶碗を出し、

「おかわり…」

と言って来たので、ゼロは超特盛りで分けてやり、ヴィータは目を白黒させた。
しっかり食べてしまったヴィータだが…
ゼロは、ようやく笑顔を見せ始めたシグナム達を見て、

（あの2人も、今頃笑えてりゃいいんだが…）

何故か、フェイト達の事が気になった。

ーーー

衣にマントを着た四十絡みの女だった。
女は、静かだが狂気さえ感じさせる口調で、フェイトに語りかける。

「これは…余りにも酷いわ…」

先ほどからの虐待で服は裂け、全身傷だらけのフェイトは力無く謝っている。

「…はい、ごめんなさい…母さん…」

母さんと呼ばれた女は、フェイトに近寄り、力無くうなだれた顎に手をかけ自分の方を向けさせると、

「いいフェイト…あなたは私の娘、大魔導師『プレシア・テスタロッサ』の一人娘…不可能な事などあっては駄目、どんな事でも成し遂げなければならない…」

フェイトは黙って聞くしかなかった、自分の不甲斐なさを責めながら…
そして、また虐待が始まる。

その奥の間の巨大な扉の前で、締め出されたアルフが耳を押さえてうずくまっていた。

「何なんだよ…一体何なんだよ！あんまりじゃないか！！」

無力感に打ちひしがれているしか出来ない。

（あの女の…フェイトの母親の異常さと、フェイトに対する酷い仕打ちは、今に始まった事じゃないけど…今回のはあんまりだ！）

アルフは考えを巡らす。

（一体何なんだ？あの『ジュエルシード』は、そんなに大切な物なのか？何に使う気なんだ…？）

まだ、フェイトの悲鳴は続いている…

プレシアは、鞭だけでは飽き足らなくなったのか、鞭の柄をフェイトの鳩尾に突き込んだ。

「げほっげほっ！」

たまらず咳き込むフェイト、余りにも酷い仕打ちだった。

「…ごめんなさい…ごめんなさい母さん…」

涙と涎で顔をクシャクシャにしながら、フェイトはひたすら謝り続けた。

プレシアは、苛立ちを隠そうともせず、

「次元振まで起こしてしまって…管理局が嗅ぎつけるわ…どういう事なの？」

フェイトは虚ろな目で答える。

「…誰かが…わざと暴走させたみたいで…それに…巨人と怪物が…」

巨人と聞いた途端、プレシアの青白い顔の表情が変わった。
フェイトの顔を食い入る様に見つめ、

「それは、どんな巨人だったの！？」

恐ろしい目で問い詰める。
フェイトは今まで感じた事の無い恐怖を感じ、自分が見た巨人の特徴と状況を話した。

「…銀色の顔に、赤と青の体…？」

何やら考えるプレシアだが、何かを思い立つとフェイトを拘束していた魔法拘束を解除した。
床に倒れ込むフェイト。プレシアはフェイトを見下ろし、

「今日は、ここまでにしておくわ…」

フェイトは顔を上げる。信じられないといった顔だ、いつもなら延々と折檻が続いている筈なのに…
プレシアは、フェイトに背を向けて、

「これからは、慎重に行動してちょうだい…変わった事があれば、すぐ報告を、こちらも手を打つわ…期待してるわよ私の娘、可愛いフェイト…」

感情など1ミリも籠もっていない口調で言い残すと、振り向きもせず部屋を出て行った。

「…はい…」

それに対し、何とか体を起こしたフェイトは返事をした。
プレシアの去った後、フェイトは部屋の隅にあるテーブルに目をやった。
そこには、渡せなかったお土産のケーキの箱がぽつんと置かれていた。

プレシアは、時の庭園の最深部に向かった。
フェイトやアルフも知らない場所だ。
プレシア以外にそこに立ち入る事が出来ない様になっている。
幽かな明かりの中、長い階段を降り、プレシアは数十メートルはある巨大な扉の前に立った。
鈍い音を立てて扉が開く。
その部屋は異常な程広い部屋だった。天井が百メートル近くあり、奥行きもかなりのものだ。
その中には異様な機械や、光る巨大なカプセルが並んでいる。
プレシアは、その中の巨大な棺桶の様なものに近づく。
その中には、巨大な何かが立っていた。
『それ』は人型をしていた。鋭角的な金色の顔に体の各部にプロテクターの様な物が取り付けられた濃い赤のボディー。
微動だにしない所を見ると生物では無い様だ。
プレシアは、『それ』を見上げ、狂気の笑みを浮かべる。
異様な部屋の中に、押し殺した哄笑が響いた。『それ』は、かつて『エースキラー』『メビウスキラー』と呼ばれた機体に酷似していた。

ーーー

までの主とは随分違っていた。
いや…随分どころでは無い、何もかもが違っていた。
『主はやて』の我々への対応は、これまでの主の様に高圧的であったり…道具の様に扱うので無く…まるで、家族にする様なものであった…
それは我らが、味わった事の無い体験だった。

そしてもう一人、『ゼロ』は驚くべき事に、別世界から迷い込んだ宇宙人であるという。
我々も永く生きて来たが、宇宙人と会ったのは初めてだ。
この少年に見える（本人は我々より年上だと言い張っている）彼は、もう一つの姿を持ち、魔力は無いが底知れぬ力を秘めている様だ。
『ゼロ』は一見、粗暴で口は悪いが、根が優しく、ひどく純粋なものを持っている。
宇宙人故なのか、悪意、打算といったものが感じられない男で、我々を家族として何の疑問も無く受け入れた。

我々は、今までこの2人の様な人間に会った事がなかった…

我々は、戸惑いながらも新たな主の望むままに、静かな日々を暮らし始めていた。

その日の昼下がり、はやては、ゼロと、シグナム、シャマルとで図書館に本を借りに行っていた。

「騎士甲冑？」

はやてがキョトンとして言った。
シグナム達から言われたのだが、ピンと来ない。
シグナムが説明する。

「我らは、武器は持っていますが、甲冑は主に賜(たまわ)らなければなりません」

そう言われても、そないな物持ってないな…と思うはやてに、シャマルが説明する。

「自分の魔力で作りますから、形状をイメージして下されば」

「そっかー」

と、納得するはやてだが、目を閉じて額に指を当て悩む、

「…そやけど…私はみんなを戦わせたりせえへんから…」

そんなはやてにシグナムが、

「しかし、今のこの街の状況は聞きました。何かあるかもしれませんし…」

シグナム達にも『ジュエルシード』関係の事は、一通り話している。
その事もあって言い出したのだろう。
ゼロは、今までの話を聞いて、

（…騎士甲冑か…？）

想像してみた、『ボーグ星人』という、全身鎧で覆われたゴツい宇宙人を思い出した。
あれも確か女だった筈、あんな感じか？と思っていたら、何故かみんなに睨まれた。

考え込んでいたはやてだが、直ぐに何か思いつき、

「服でええか？騎士らしい服、なっ？」
「ええっ、構いません…」

シグナムは即答する。
はやては、俄然やる気になった様で、目を輝かせ、

「ほんなら、資料探して格好ええの考えてあげなな」

と楽しそうに笑った。

早速はやては、シャマル、ヴィータを連れて資料探しに出掛けた。
ゼロも興味があったのでついて行く。

はやてに連れて行かれたのは、外国資本大手チェーン店の大きなオモチャ屋だった。シャマルは、はやての車椅子を押しながら、

「ここは…？」

と不思議そうに尋ねるが、はやてはニコニコして、

「ええからええから、こういう所にこそ、ええ資料があるんや」

ノリノリである。
確かにこの店は海外や国内のオモチャに、様々な衣装などが置いてあり、いい資料になるかもしれない。

ゼロは、オモチャ屋に入った事が無かったので興味深く見回していた。
そんな時、ヴィータが一心に何かを見つめているのが目に入った。

（よっぽど気に入った物があるんだな…）

ゼロは微笑ましくなった。
基本、不機嫌で、ちょっと打ち解けない所のあるヴィータが、頬を染めてものすごく欲しそうにしている様は、可愛いものであった。
ゼロはヴィータに歩み寄り、

「ヴィータ、そいつが欲しいんだな？買ってやるぞ」

「えっ、いいの…？」

ヴィータは振り返ってゼロを見上げ、顔を輝かせた。
ヴィータが見つめていたのは、赤い目に蝶ネクタイ、口が縫われている、ちょっと変わったウサギのぬいぐるみである。
ゼロは『それ』を手にとり、

「こいつだな？なかなか面白いものじゃねえか？」

その手にあるのは、ヴィータが見ていたぬいぐるみの隣りにあった、某メーカーが何かにとち狂って作った挙げ句、大量に売れ残った不人気シリーズの、臓物をはみ出させ全身黒こげのウサギを模したぬいぐるみだった…

「違えよ！馬鹿ぁ！！」

思わずヴィータは叫んでいた。

夕日が差す並木道を、はやて達４人は家路についていた。
シャマルに車椅子を押してもらい先頭を行くはやては、いい資料が見つかったらしく、ほくほく顔だ。
その後を、ゼロとヴィータがゆっくりついて行く。
ヴィータは、あの後ゼロに買って貰ったぬいぐるみ（無論、欲しか

った方）の入った紙袋を、さっきから気にしながら歩いている。
ゼロは、仕方無えなあと苦笑し、

「おい、ヴィータ、もう袋から出していいぞ」

と声を掛ける。
声を聞いた途端ヴィータは、待ちきれないといった感じで紙袋を開け、ウサギのぬいぐるみを取り出した。
改めてぬいぐるみを手にしたヴィータの顔が、子供らしい満面の笑顔になる。

「ゼロ…ありがと…」

お礼を言おうとすると、ゼロは照れくさいのか気配を察して、

「ヴィータ遅えぞ、はやて達に置いてかれちまう、急げぇ！」

はやて達目指して走り出す。
そんなゼロを見てヴィータは、

（アイツ、自分で言い出したクセに照れてやがんの）

おかしくなった。
（まったく、はやてといい、こいつといい…）そう思ったら、何だか幸せな気分になった。
でもゼロにその事を悟られるのがシャクで、ワザと乱暴な口調で返

事をする。

「あっ、狡いぞコラッ、待てよ！」

走るゼロを追いかけながら、ヴィータは生まれて初めて買って貰ったぬいぐるみをしっかり抱きしめた。

シグナム

その日主はやては、星を見てみたいとの事だったので、私は主を抱きかかえ庭に出ていた。
夜空には見事な星空が広がっている。

「うわあ！綺麗…」

主はやては、子供らしい素直な瞳で星空に見入っている。
私は無粋だとは思ったが、気になる事を聞いてみる。

「主はやて、本当によいのですか？」

「何が？」

主は不思議そうにこちらを見る。

「『闇の書』の事です…あなたの命あらば、我々は直ぐにでも『闇の書』のページを収集し、あなたは大いなる力を得る事が出来ます…この足も治る筈ですよ…」

いささか、卑怯な物言いだったと思う。
私は不安だったのだろう。
戦いしか知らなかった我らが、安穏としていて良いのか？と…
しかし主は考えるまでも無いという程の即答で、私の目を見、

「あかんて、『闇の書』のページを集めるには、色んな人にご迷惑をお掛けせなあかんのやろ…？」

私は言葉に詰まった。
魔法に詳しくない主だが、収集がどういうもうなのか察しているのだ。
主はやては、夜空を見上げ、

「そんなんは、あかん。自分の身勝手で、人に迷惑掛けるんは良くない…」

確固たる意志を瞳に浮かべ、しっかりと言った。
年若い身でありながら、主はやてはしっかりとした信念を持っているのだろう。
私は自分を恥じた。
そんな主に、自身の為に他人を犠牲にしろと囁いた様なものだからだ…
だが、主はやては気にした様子の無く、

「私は今のままでも、充分幸せや…」

と実感を込めて言う。
主は、今の状況を聞かせてくれる。
ご両親の事、援助してくれるお父上の友人の事。
そして私に家族にする様に抱きついて、頬ずりをする。

「今はゼロ兄や、みんなが居るからな」

主の柔らかい頬が触れる。
私は心の中に、感じた事の無い暖かさを感じた。

最後に、主はやては言った。

「現マスター八神はやては『闇の書』には何も望み無い…私がマスターでいる間は『闇の書』の事は忘れてて…」

そして主はやては、命令を伝える。

「みんなのお仕事は、家で一緒に仲良く暮らす事…それだけや、約束出来る？」

私は頷き、誓いを込めて返事をする。

「誓います。騎士の剣にかけて…」

主はやては、花の様に笑みを浮かべた。

私は疲れて眠ってしまった主を部屋で寝かせ、皆が居るリビングに向かった。
リビングには、ゼロも含め全員が揃ってソファーでくつろいでいた。
私は、主はやての命令を皆に伝える。
シャマルは嬉しそうにクスクス笑い、ヴィータは「はやてらしいや」とニヤニヤしてソファーに寝転び、獣形態のザフィーラは無表情ながら、フッと微かに笑った様だ。
ゼロは聞くまでもない、という感じだった。
私は、ゼロに尋ねる。

「『ジュエルシード』の件だが、何かあったらいつでも声を掛けてくれ…魔法関係だ。力になれるだろう…」

ゼロは、少々行儀悪く足を組みながら、

「気持ちだけ貰っとくぜ。はやてもみんなを戦わせる気は無えって、言ってたしな…」

「それは、収集の話だ。主はやてに危険が及ぶ可能性があるなら、是非も無い…」

ゼロは不敵な笑みを浮かべ、

「まあ、俺に任しときな、みんなが居るから安心して出掛けられるしよ。俺は無敵だぜ、どんな奴にも負けやしねえよ！」

自信に満ちた表情で言った。

私は、少々自信過剰気味のゼロに一抹の不安を感じた。

ーーー

…マスターの成長を促してしまったのかもしれない…」

「落ち着いてるね孤門は…」

落ち着いている方の娘が、呆れた様に言う。
孤門と呼ばれた青年は苦笑し、

「…まだ動きようが無いしね…でも、覚悟は出来てるよ！」

そう言うと、懐から奇妙な物体を取り出した。
その短剣ほどの大きさの物体は、彼が『エボル・トラスター』と呼んでいる物だ。
青年は、それを決意の眼差しで見つめるのだった。

つづく

第11話　ヴォルケンリッター参上！や（後編）（後書き）

え～読んでいただいている皆さんの中で、ウルトラマン関係は詳しくない方も居られるかもしれないので、少し説明をしたいと思います。

『エースキラー』『メビウスキラー』は、ウルトラマンAとメビウスに登場したロボット兵器で、対ウルトラマン用兵器として作られました。
なかなか格好いいスマートな姿と、ウルトラマン個人では勝てない位の（エースキラーはねっ）戦闘能力を持っています。
最後に『エボルトラスター』は、ウルトラマンネクサスの変身アイテムです。
こんなところで

第１２話　悲しみの記憶や（前書き）

読んで下さってる皆さん、ありがとうございます。
読んで下さる方々のおかげで続けております。
では１２話です。

第１２話　悲しみの記憶や

「うおッ！何だこりゃあ！？」

午前中の八神家に、再びゼロの声が響き渡った。
何事かと、はやて達が駆けつけてみると、廊下で掃除中だったゼロが掃除機を持ったまま立ち尽くし、その前に『闇の書』がぷかぷかと宙に浮かんでいる。

「『闇の書』が最初の時みたいに浮いとる？」

驚くはやてに、ああ…、とシグナムが得心のいった顔で説明する。

「主はやて、『闇の書』は自分で動き回る事も出来ますし、意志もありますので…」

「へえ…そうやったんや～」

感心するはやての所にふわふわ降りて来た『闇の書』は、そのままはやての膝の上にちょこんと乗った。

「何か可愛いなあ…堪忍な、知らんかったから放っておいて…」

リビングに移動した6人。説明を受けたはやては『闇の書』を撫でている。

ヴィータはゼロをからかって、

「ゼロ、お前何びびってんだよ～」

「びびってねえ！ビックリしただけだ！」

「本当かよ～？」

「ヴィータてめえ～年上をからかいやがって～」

「何言ってんだ！あたしの方が年上に決まってんだろ！」

「俺の方が年上だって何回言わす気だ！」

と不毛な言い合いをしている。

どちらが年上なのか、微妙なところであるが…

この2人、性格が似通っているせいもあり気が合う様だ。

ザフィーラはその様子をやれやれという感じで見ながら床で丸くなる。

シグナムとシャマルは『闇の書』を子犬の様に撫でるはやてを見ながら『闇の書』の『管制人格（マスタープログラム）』の事を考えていた。

『管制人格』は『闇の書』の全てを司るプログラムで、シグナム達のもう1人の仲間でもある。

しかしその起動には魔法収集が必要であり、今の状態は半起動状態

で何の力も無い。
はやてがマスターである限り、会う事は無いだろう…

シグナム達の感慨をよそに、ヴィータとの口げんかを終えたゼロは物珍しげにはやてに近寄り、

「自分で飛べる本か…面白えな、俺にも触らせてくれよ」

はやての膝の上の『闇の書』に触れた。
その瞬間だった。
何かが自分に流れて来るとゼロが感じた時、一気にはやてとゼロの頭の中に大量の何かが流れ込んで来た。

（こいつは!?）

（何やの?一体!?）

2人の様子がおかしい事に気付いたシグナム達は2人に駆け寄り、

「主はやてどうしました!?」

「ゼロ君どうしたの!?」

声を掛けるが、ゼロとはやては『闇の書』に手を触れたまま、虚空を見つめ硬直したままだ。
どうしたらいいか分からないシグナムに、シャマルが、

「…もしかしたら…」

「何だシャマル、心当たりがあるのか？」

シャマルは少し考え、

「ゼロ君は、私達とは別系統の特殊な力を持っているわ、それが『闇の書』と、現マスターであるはやてちゃんと偶然、一緒に接触した事で『闇の書』の記録が2人に流れ込んだんじゃ…」

ヴィータが慌てて、シャマルに詰め寄る。

「おいッ、2人共大丈夫なのか？早く引き離した方がいいんじゃ！？」

シャマルは、困った様に眉を寄せ思案するが、

「危険は無いとは思うけど…無理に途中で引き離して大丈夫かしら…？」

その間にも、ゼロとはやての頭の中を膨大な情報が流れ込んでいた。

2人は思った。

（この記憶は…）

（みんなの過去なんか…？）

それは、『闇の書』と『ヴォルケンリッター』の永い永い、記憶だった。

代々のマスターに命じられ『闇の書』の完成の為、戦いに継ぐ戦いの日々。
今までの歴代のマスター達、人と変わらないシグナム達を道具扱いし何とも思わない連中…
そんな中でも、ひたすらマスターの為に戦い続ける４人。
満足に着るものも食事も与えられず、休む事も許されず、怪我を負っていても収集に駆り出される日々…
収集とは、魔力を持つ生物にのみ存在する『リンカーコア』という魔力の源を吸収し『闇の書』のページを埋める事だ。
ヴォルケンリッターは、今まで『闇の書』収集の為の道具としてしか扱われていなかったのだ。
はやては知らぬ間に涙を流していた。
ゼロは砕けんばかりに歯を食いしばり、血がにじむ程拳を握り締めた。

戦いの中、傷付き倒れるシグナム達。
極寒の中、地下牢の様な部屋に押し込められ、寒さに震え固まって寒さを凌ぐ４人…

そんな中、力尽きたヴォルケンリッターは消滅していく。
しかしそれで終わりは来ない、次の代のマスターに変われればまた復活してしまう。
それは生き地獄だった…
道具として戦い抜いて命を落とし、また生き返ってまた戦って死ぬ…それは無限地獄であろう。
そして一通りを語り終えたのか、潮が引くかの様に記憶の奔流はゼロとはやての頭の中から去った。

2人は正気に還った。
時間にして、ほんの数秒にも満たなかったが、ゼロとはやては永い時を旅した様に感じた。
滂沱の涙を流すはやてと、憤りの余り立ち尽くすゼロを見てシグナムは、おそらく2人は我らの過去を見たのだろうと感じた。

「大丈夫ですか？主はやて…ゼロ…？」

声を掛けると2人の目の焦点が合ってくる。
シグナムはふと、『管制人格』がゼロの力を利用して2人に我々の過去を見せたのかもしれないと思った。

（しかしそんな事があり得るだろうか…？）

シグナムは疑問に思ったが、はやてに近寄り頭を下げ、詫びる。

「どうもお見苦しいものを見せた様で…申し訳ありません…」

その時、はやては涙を流したままの顔で、ゼロと目を合わせ呼びかける。

「ゼロ兄ぃ…」

「おうッ！！」

応えたゼロは『ウルトラゼロ・アイ』を装着していた。

「ゼロ何をしている?こんな部屋の中で何を…!」

シグナム達が慌てる中、『ウルトラマンゼロ』に変身したゼロは、3メートル程に巨大化し座り込むと、その大きく長い腕で、はやてとヴォルケンリッター全員を抱きしめていた。

「ゼロ、おいっ天井をぶち抜いちまうぞ!」

ヴィータが慌てて注意するが、ゼロは離さず、

「うるせえ、こうでもしねえと…」

ゼロは言葉に詰まったが、5人には後に続く筈の言葉が解った。
(お前ら全員、抱きしめられねえだろうが…)
その中で、はやてもみんなを抱き寄せる。
はやては涙を拭おうともせず、

「うちの家族に何て事さすんや…辛かったやろうに…よう頑張ったなあ、みんな…」

それは単なる同情などでは無い、大事な家族を傷付けられた者の本物の痛みだった。
シグナム達に家族だと言ったその言葉に嘘偽りなど欠片も無く、2人の中では決まりきった事だったのだ。
はやてもゼロも、家族とは縁遠い生活が長かっただけに、なおさら

思いが強かったのかもしれない。
シグナム達の心に、その事が染み渡った。
暖かいはやての温もりと、ゼロの包み込む様な暖かさの中４人は、

（主従だけでは無い…この人達の為になら…自分達を家族と言ってくれた２人の為に…全てを捧げる）

深く心に誓った。

この後、急にゼロの元気が無くなった。
話し掛けても沈んだ様子で生返事しかしない。
まるで自分を責めている感じがした。
はやて達は、いくらシグナム達の過去を見たからと言って、あのやんちゃ者のゼロがここまで落ち込む姿を見た事が無かったので心配したのだが…

その夜ゼロはベランダで一人、星一つ見えない夜空を見上げていた。
すると、コンコンと部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「ゼロ兄、ええ…？」

はやてだった、心配している声だ。ゼロは空を見上げたまま、

「おう…いいぞ…」

と返事をするとはやては部屋に入り、ベランダのゼロの隣に車椅子を着けた。
しばらく星一つ無い空を2人して眺めていたが、ぽつりぽつりとゼロが話し始めた。

「あいつらの過去を見て、思い当たった…」

はやては口を挟まず、続きを促す。

「俺は…罪を犯して故郷を一度追放された事がある…」

「ゼロ兄が？」

思わず声を出してしまうはやて。
ゼロは、はやての方を見て自嘲し、

「どうしても、もっと力が欲しくてな…故郷で一番重要な『プラズマ・スパーク』ってものに触れようとした…」

『プラズマ・スパーク』とはウルトラ族の全ての源であり、地球の人間と同じだった彼らを、超人に進化させた奇跡の光で『光の国』を支える人工太陽でもある。
ゼロはその力を手に入れようとしたのだ。
しかし父である『ウルトラセブン』に止められ、逮捕された。
『プラズマ・スパーク』に触れる事は重大な禁忌だったので、ゼロは『光の国』を追放され、磁気嵐が吹き荒れる不毛の惑星で長い修行生活に入る事になった事などをはやてに話した。

「…それで思った…『プラズマ・スパーク』の力を手に入れようとした俺と『闇の書』の力を手に入れようとして、あいつらを酷い目に遭わせた今までのマスター達とは同じじゃねえかってよ…」

ゼロは手すりを掴み、下を向いた。

記憶の中で見た、力を求める歴代の『闇の書』の主達の欲望に歪んだ顔、それに『ベリアル』が浮かぶ。

自分もあんな顔をしていたのかと思うと、シグナム達を酷い目に遭わせていたのは自分じゃないのかと錯覚してしまう位だった。

「同じや無い…！」

はやての高くは無いが強い響きの声が聞こえた。

ゼロは頭を上げる。いつの間にか、はやてはゼロの顔のすぐ側に顔を近付けていた。

「同じや無いよ…ゼロ兄はそないに思えるし、誰かを犠牲にしてまで力を手に入れようとする人や無い！私が保証する…」

はやての真摯な目を見て、ゼロは苦笑した。

こいつにはかなわねえなと思いながら、ふと思いついた言葉を自然な笑顔で口にする。

「ありがとよ、はやて…お前の様な人間を地球の言葉で、天使と言

うんだろうな…」

「なっ…？」

はやての顔が、ボッと音がしそうな位に真っ赤になる。
照れすぎてあたふたするはやてを楽しそうに見ながら、ゼロは後ろに声を掛ける。

「お前らも、そう思うだろう？」

「愚問だな…問うまでも無い…」

シグナムの声がして、廊下で待っていたヴォルケンリッターの４人が入って来た。
皆でやって来て、はやてが代表で入って来たのだろう。
話を聞いてしまったので若干決まりが悪そうだが、ゼロも皆に聞かせるつもりで話していたので気にはしない。

「一つ聞かせて欲しい…」

シグナムが一歩前に出て、真剣な眼差しでゼロに問う。

「何故お前は、力を欲したのだ…？」

ゼロは部屋の中に入り、シグナムと向かい合うと一瞬表情を曇らせたが、はっきりと言った。

「言い訳にもならねえが…たった一人の友達を守れなかったからだ…！」

シグナムは目を閉じ微かに微笑むと、静かに言った。

「…そうか…分かった…お前らしいな…」

それは、この場に居る全員の代弁の言葉だった。

まだ出会ってから短いが、この６人には家族の絆というべきものが出来つつあった…

はやてはふと、光を感じて夜空を見た。

そこには、雲が晴れて顔を出した満月が柔らかく輝いていた。

ーーー

アースラの超未来的な設備の艦橋で、艦長席に座った緑色の髪をした若く見える女性、時空管理局提督アースラ艦長『リンディ・ハラオウン』は、ため息をついた。

「すっかり到着が遅くなっちゃったわね…」

お茶を飲みながらごちるリンディに、オペレーターのショートカットの元気の良さそうな少女が、

「仕方ないですよ、あちこちで小規模次元震騒ぎがあって、大わらわでしたからね…」

慰めるように声を掛ける。
リンディは、オペレーター『エイミィ』に苦笑いを向け、

「でも…結局、原因は不明…どうなってるのかしら…お陰で最初の予定より、かなり到着が遅れてしまったわ…」

少々、憂鬱になってしまうリンディだったが、直ぐに気分を切り替える。

「みんな状況はどう?」

艦橋の他のオペレーター達に状況を確かめる。
それに男性オペレーターが答える。

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無い様ですが、２人の捜索者が再度衝突する可能性が高いですね」

続けてエイミィが測定画面のコンソールを見ながら、

「それと、気になるのは次元震の際に現れた謎の高エネルギー反応ですかね…？測定不能のとんでもない量の…それに巨大な影、何なんでしょうか？」

リンディはカップのお茶を飲み干すとデスクの上に置き、少し前の情報を頭の中で整理する。

「あの世界は確か…１０ヶ月程前にも次元震が発生して、調査が入ってるわよね？」

エイミィが即座に答える。

「はい、調査が入ってますが…特に異常は発見されませんでした…」

リンディは気になった。
同じ世界での二度の次元震に、測定不能のエネルギー反応…偶然なのか？と…

しかし…とリンディは先入観をあまり持たない様、気をつける。
先入観は判断を誤らせる事があるからだ。
彼女の持ち味は、柔軟な思考でいかなる事態にも臨機応変に対応出来る事だ。
場合によっては冷酷とも言える決断を下す事も辞さない。
その為、思考は常にフラットにしていた方がいい。
（まずは、2人の探索者と接触する事、後はそれからね…まあ、うちのスタッフは全員優秀だし…何よりうちには切り札が居るものね）

リンディはとりあえずそれだけ決めておいた。
そして、誰も居ない空間に話し掛ける。

「小規模とはいえ、次元震はちょっと、厄介だからね。危なくなったら直ぐ現場に向かって貰わないと…ね？クロノ」

頼もしそうに声を掛けると、いつの間に現れたのかリンディの隣に黒いバリアジャケットを着た、ゼロより少し下位の年の黒髪の少年が立っていた。
一流の魔導師にして、時空管理局執務官、リンディの息子でもある『クロノ・ハラオウン』はリンディを見据え、

「大丈夫、分かってますよ艦長、僕はその為に居るんですから…」

不敵な笑みを浮かべた。

つづく

第１２話　悲しみの記憶や（後書き）

ゼロの過去についてですが、逮捕、追放は公式ですが理由は特に触れられていません。
ただ強くなりたかったという事では納得出来ず、何かそれなりの理由があったに違いない！と勝手に妄想した結果、この様になりました。
ゼロの過去の細かい事は追々、書いて行きたいと思います。

第１３話　魂の激突や（前書き）

いつも読んで下さる皆さんありがとうございます。
９月だというのに暑い日が続きますが、体に気をつけて下さい。
では、第１３話です。

第１３話　魂の激突や

海鳴臨海公園、海に面した自然公園で眺めが良く、市民の憩いの場所である。
夕日が沈むあたりなどは、とても絵になる風景が見られる人気スポットだ。
しかし今は、まだ日も落ちていないにも係わらず人っ子一人居ない。
それは結界が張られているからだ。
その中で1本の大樹が怪物化した。
枝を触手の如く蠢かせたその姿は、童話に出て来る森の悪霊のようだ。
その前に対峙する2人は、久し振りに出会ったなのはとフェイトである。
まずは封印をと、怪物に攻撃を仕掛ける2人。
桜色と金色の魔法光が輝く、なのはとフェイトの魔法攻撃が怪物に炸裂した。

「えっ！？」

「…バリアー？」

警戒して距離をとる2人、樹木の怪物はグリーンモンスの様に全面にバリアーを張って攻撃を防いだのだ。
ならばと再び攻撃しようとするなのはとフェイト、その時だ。

「うおりゃあああああっ！！」

気合いと共に、上空から物凄い勢いで何かが落下して来た。
何かは、その勢いのまま怪物にぶち当たり、バリアーごと怪物を粉々にすると、地面に着地し直径3メートル程のクレーターを作った。
土煙と飛び散る木の破片の中、立ち上がる者がいる、『ウルトラマンゼロ』である、人間サイズだ。
粉々に粉砕された怪物から、青く光る物が出て来る、『ジュエルシード』だ。

「今だ！封印しろっ！！」

ゼロの声に押され、なのはとフェイトは同時に『ジュエルシード』の封印を完了した。
封印を終え、宙に浮かぶ『ジュエルシード』を挟んで対峙するなのはとフェイト、それに狼形態のアルフにユーノ、ゼロも加わった。
身構えるフェイトとアルフ。アルフは鋭い犬歯を剥き出し、威嚇する様に、

「久し振りだね、おちびちゃん達、かなわないからって今日は助っ人を呼んだって訳かい？また変なのを…」

そこまで言った所で目を見開く、その姿に見覚えがあったからだ。

「あんた…小さいけど、まさかこの間の巨人？」

ゼロは、片手を挙げて気さくに答える。

「よおっ久し振りだな、体は大丈夫だったか?俺は『ウルトラマンゼロ』別の世界から来た宇宙人だ」

調子に乗って、いささか馴れ馴れしい挨拶になってしまった。

「宇宙人だってぇっ?」

驚くフェイトとアルフだが、直ぐに全身を緊張させた。
宇宙人というのが本当かどうかは別にして、ゼロの理解を超えた戦闘能力は目の当たりにしている。
目の前の怪人が巨人と同一人物で、更になのは達の仲間だとしたら、容易ならざる事態だ。
今の怪物を一撃で粉砕した力を見ても、まともにぶつかっては不利だ。
いざとなったら、フェイトだけでも逃がさなくては…そう覚悟を決めようとしたアルフにゼロは声を掛ける。

「落ち着け、俺はどっちの味方でも無え、だからお前らと戦う気も無えし何もしねえ、ただ、いい話を持って来たんだ」

三流詐欺師のようなセリフをぬかすゼロを胡散臭そうに見るアルフ。

「話なら聞かないって、何度も言ってるんだけどね…」

聞く耳持たない、といった感じのアルフ、フェイトも頷き油断無くバルディッシュを構える。

ゼロは、警戒させないように両手を挙げ、とりあえず喋りまくる。

「だからよ、話によっちゃ、こっちの『ジュエルシード』を全部やってもいいし、残りを探すのも手伝ってやるってんだよ」

「はあっ!?あんた正気かい?」

アルフが呆れた様な声を出す、フェイトもポカンとしてしまう。
性格的に、細々した駆け引きなんぞ出来ないゼロは直球で話すのみだ。

「その代わりに、何で『ジュエルシード』を集めてるのかの納得の行く理由を聞かせろ、納得行ったら協力してやる」

なのはとユーノは、ハラハラしながら成り行きを見ている。
特にユーノは『ジュエルシード』がかかっているので、気が気でない。

一方、ゼロの条件を聞いたフェイトとアルフは警戒は解かないが、一瞬目を合わせる。

「フェイト…悪い話じゃ無いと思うんだけど…」

直ぐにゼロ達に目を向けながら、アルフは迷う様に言う。

「…うん……」

フェイトは考えた、確かにいい話なのかもしれないが…
そんなフェイト達にゼロは、

「多分、『ジュエルシード』を欲しがってんのは、お前らじゃねえだろ？」

母親なんだろうな…と思いながらも、そうカマを掛ける。
ピクリと反応してしまいそうになるフェイトとアルフにゼロは畳み掛ける。

「あんな物騒なもん、お前らみたいな子供が欲しがるとは思えねえからな、だからそいつに会わせろ。直に話を聞く、それが条件だ」

アルフはフェイトに念話で語りかける。

《どうする？フェイト信用出来るかね？でも本当だとしたらありがたいし…あの人も『ジュエルシード』集めが楽になるなら、会ってくれるんじゃないのかい？》

フェイトは、頭の中で一通りを整理してみた。確かに悪くは無い条件だが…
フェイトはゆっくりと首を横に振り、表情をきつくすると、バルディッシュをゼロに向けた。

「それが、返事か…？」

ゼロは表情の無い銀色の顔で、意外そうにつぶやいた。

「フェイト…」

アルフが残念そうに、視線を向ける。

フェイトは無表情でゼロに自分の考えを伝える。

「…確かに、いい話かもしれないけど…信用出来ない…あなたも怪しい…それに、その条件は呑めない…」

フェイトは、母プレシアが承知しないであろう事は想像がついた。

発見者が競争相手なのは既に報告してある。

それでもプレシアには、その相手を潰してでも『ジュエルシード』を確保しろと言われている。

母が『ジュエルシード』を悪用する筈は無いが、非合法な目的なのだろうという事位はフェイトにも判っている、応じる事は出来ない。

更には目の前の人物をプレシアに会わせたとして、実は母に危害を加えようとしている可能性もある。

ゼロという異質な存在も、却ってマイナスに働いてしまった様だ。

交渉は決裂した。

「すまねえな…なのは、ユーノ…役に立てなくて…」

ゼロは2人に顔を向け謝る。なのはは首を振り、

「いえ…、ウルトラマンさんは一生懸命頑張ってくれました。気に

しないで下さい」

小学生に慰められるウルトラマンの図であった。
そのしょんぼりした姿に、フェイトとアルフは何故か知り合いの好意を踏みにじってしまった気分になった。
何処かで会った気もする2人（ラーメンをご馳走してくれた少年と同じ名だとは思った）だったが、気のせいだと思い戦闘体制を整える。
そこに、なのはが一歩踏み出した。
レイジング・ハートを手にフェイトを見据え、

「…私もウルトラマンさんと同じ、フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

フェイトは無表情のまま応えない。
なのはは続ける。

「私が勝ったら、只の甘ったれた子じゃ無いって分かって貰えたら…私とお話してくれる？」

フェイトは表情を険しくした。
それが合図だったかの様に、2人は同時に空に舞い上がっていた。
海上に移動する。
アルフとユーノも後を追おうとするが、

「止めとけ！これはあいつらの勝負だ。俺も手を出さんから、見守

ってやんな」

ゼロが静止する。
ある意味人間同士の争いでしか無いこの状況ではゼロにはどうする事も出来ない。
しかしなのはのフェイトに認めて欲しいという気持ちは伝わって来た。
その為に互角に戦えるという事をフェイトに見せたいのかもしれない。
何とも不器用な考えかも知れないが、そういうのはゼロも嫌いでは無い。いっそ、とことんやり合うのもいいだろう…
言葉で駄目なら、拳で語り合え！とレオ師匠なら言うだろう。

（俺らしくねえ…あいつらが争うのを見たくなくて、らしくも無い事をしたな…）

内心で苦笑いする。
フェイトは飛びながら、アルフに念話でこれからの事を伝えていた。

《…アルフ、ここで決着を着けるよ…あの赤と青の人も気になるから、決着が着いたら隙を見て『ジュエルシード』を取って、直ぐ撤退しよう…》

《判ったよフェイト、任しときな》

アルフはいつでも飛び出せるように、四肢の力を抜く。
そして海上上空で、なのはとフェイトの戦いが始まった。

レイジング・ハートとバルディッシュがぶつかり合い火花を散らす。
なのはもフェイトも一歩も引かない。
接近戦から距離をとったなのはは、砲撃魔法『ディバインシューター』を放つ。
追尾性能を持つ、桜色の多重魔力弾5発がフェイトを襲う。
しかしフェイトも、フォトン・ランサー、電光の槍を何本も生成、同時発射する『フォトンランサー・マルチショット』で迎撃する。
周囲は魔法爆発で埋め尽くされた。

ゼロは、初めて見る魔法使い同士の戦闘を興味深く観察する。
最初は、当たったら死んでしまうのでは?と思ったが、『非殺傷設定』というものがお互いのデバイスに掛けられており、やられたとしても魔力ダメージで動けなく位と聞いて、安心する。
その間にも戦いは続く、なのはの砲撃魔法をフェイトがバルディッシュで切り裂き、接近戦に持ち込もうとするが、なのはは弾幕を張ってそれを阻む。

ゼロは思った。魔法を覚えて間もないのに、これほど戦えるなのはは天才という奴だろう…だが!

「あっ!?」

いつの間にかなのはは、金色の輪に拘束されていた。フェイトの捕縛魔法に捕まったのだ。
その間にフェイトは、最大の攻撃魔法の為の呪文の詠唱を完了する。

「『フォトンランサー・ファランクスシフト』撃ち砕けｆｉｒｅ!」

フェイトの声と共に、計１０６４発に及ぶフォトンランサーの一斉射撃が、動けないなのはに襲いかかった。

「なのはぁーっ！！」

ユーノの叫び声が響く、豪雨のごとく降り注ぐ金色の槍、なのはは魔法爆発の中に消えた。

「まだだ！」

２本足で立ち上がり固まるユーノにゼロが首を振る。
魔法爆発の煙の中からバリアジャケット、魔法で精製された防護服はあちこち破れているが、無事な姿のなのはが姿を現す。
レイジング・ハートを構え、既にチャージの態勢に入っている。
自分はフェイトと比べ、経験やほとんどの能力が劣っている。
唯一勝っているのは防御と砲撃、今の自分の勝機はフェイトの攻撃を耐え忍び、隙を突いて砲撃魔法を叩き込むしかない！
なのはは、一気にディバインバスターを発射した。
不意を突かれたフェイトだが、強固な魔法障壁を張り桜色の猛烈な光を耐え凌ぐ。
しかしなのはの砲撃魔法は凄まじい、防御しても抉られる様だ。

「行けるよ、なのは！」

ユーノが歓声を上げ、アルフは息を呑む、

（フェイトが押されている？あの子何てバカ魔力を持ってんのよ！）

間髪入れず、なのははフェイトに向けて、捕縛魔法バインドを掛ける。

これで動きを止め、自身の最大の切り札『スターライトブレイカー』を打ち込む！

「やはり…なのはには経験が足りないか…」

ゼロの言葉にユーノとアルフが振り向く。

「あれっ？」

なのはの声が響いた。

バインドを掛けた筈のフェイトの姿は既に無く、何処にも見当たらない。

その時、自分に向かって高速で迫る影をなのはは捉えた。

それはバルディッシュを構えたフェイトであった。

フェイトは、砲撃戦でまともにぶつかり合うのは不利と瞬時に悟り、自身の最高スピードで魔法爆発の残煙を利用、死角に回ったのだ。

この後、色々な事で追い込まれギリギリの時のフェイトであったら判断ミスでやられていたかもしれないが、今のフェイトに死角は無かった。

しかしなのはも諦めない、レイジング・ハートを砲撃モードからデバイスモードに戻し迎え撃つ、その時だった。

「ストップだ！」

打ち合わされる寸前で、レイジング・ハートとバルディッシュは突如現れた黒髪の少年に掴まれ、止められていた。

少年は、２人を見据え、

「ここでの戦闘は危険過ぎる！時空管理局、執務官『クロノ・ハラ

オウン』詳しく事情を聞かせて貰おうか…」

ゼロはぽかんとしていた。
確かに2人の戦いに気を取られ、クロノの転移に気付くのが遅れたが、あんまりにもあんまりなタイミングで出て来たクロノの、その絶妙な間の悪さに呆れてしまっていた。

（空気を読まないにも程がある…シグナムが見たら、無粋の極みとか言って怒りそうだ…）

クロノは何か、ひんしゅくを買いまくっている様な気がしたが流す事にする。

フェイトはとっさに動いた。浮いている『ジュエルシード』を取ろうと飛び出す。
しかしクロノは見逃さなかった。その背に向け、攻撃魔法の散弾を発射する。

「うっ…！」

腕に被弾し、フェイトは地上に落下して行く。
あれだけの腕を持つフェイトをあしらう、このクロノという少年は並々ならぬ実力を持っている様だ。

「フェイトぉっ！」

アルフは狼の瞬発力で高速で駆け出し、落下して来るフェイトを背中で受け止めた。その前に降下して来たクロノが立ちふさがる。
とどめとばかりに、デバイスをフェイトとアルフに向けようとした時、クロノのデバイスを青い手がガッチリと掴んでいた。

「感心しねえな…、対マン勝負に割り込みやがった上に、気を失った奴に武器を向けるんじゃねえぞ！」

ゼロが目を光らせ、威嚇する様に言う。
なのはも、フェイト達の前で両手を広げて、庇う様に立ちふさがっている。
クロノの注意が逸れた隙に、アルフは転移魔法を使いフェイトと共に脱出に成功した。

ゼロは掴んでいたクロノのデバイスを離したが、クロノはすかさず後方に飛んで距離をとった。
なのはとユーノはともかく、ゼロは怪し過ぎる。

「君は何者だ？その姿はバリアジャケットか？いや…魔力反応は無い様だが…」

いぶかしむクロノに、ゼロは名乗る。

「俺は『ウルトラマンゼロ』Ｍ７８星雲から来た宇宙人だ！」

「う…宇宙人ん…？」

クロノの顔が歪む、一瞬からかわれているのかと思ったのだろう。
固まったクロノはおいといて、ゼロはユーノに聞いてみる。

「おいユーノ、じくうかんりきょくって何だ？」

「え～とですね…僕が住む『ミッドチルダ』が中心になって作られ

た…次元世界間に干渉するような出来事や、魔法のリスクを管理する、一種の警察みたいなものです」

「げっ、警察かよ…！？」

一度逮捕された事のあるゼロには、出来れば関わり合いにはなりたくないと思う組織だ。それにユーノの説明だけでは、判断のしようが無い。

例え健全な組織でも、不用意に接触すべきでは無いだろう。シグナム達の件もある、４人が管理局に手配されている可能性もあった。

ゼロはクロノに気付かれない様に、なのはとユーノの念話回線にテレパシーで語り掛ける。

《おい、俺は色々あっからバックレるが、お前らはどうする？》

《ちゃんとした所ですから、僕は行って事情を話して来ます》

《私も、ユーノ君と一緒に行ってみます》

《そうか…判った、怪しまれるようなら俺の事は好きに喋っても構わねえぞ》

まあ２人はゼロの事を殆ど知らないが…しかし２人は、

《偶然会って、少し手伝って貰った。後は知らないでいいですね？》

《私達もウルトラマンさんの事はよく知らないって事で…》

2人共ゼロの強大な力の事は、あまり知られない方がいいと判っていた。

ゼロは感謝する。

《ありがとうよ、なのは、ユーノ俺も影で動いてみるつもりだ。また会う事もあるかもな…元気でな》

《こっちこそ、色々ありがとうございました》

なのはとユーノは同時にゼロにお礼を言う。

最後にゼロは、なのはに、

《あの子と、仲良くなれたらいいな…》

なのはは、ハッとし目を輝かせた。

「はいっ！」

なのはは思わず声を出してしまう。

クロノも気づいて、

「何をしてるんだ?まずは3人共、アースラまで来て貰おう」

そんなクロノに対し、ゼロは片手を挙げ、

「悪いな管理局、今日は食事当番なんで帰らせて貰うぜ。用事なら、衛星軌道上の宇宙船まで頼む」

また適当な事を言ってこの場から去ろうとするゼロだが、クロノはデバイスを構え逃がさないという姿勢だ。

「事情の説明と、君の正体を確かめるまで逃がす訳にはいかない！」

そう叫んだ瞬間、ゼロはテレポートで掻き消す様に姿を消した。
クロノは辺りを見回すが影も形も無い、転移魔法などでは無いなと直感する。

「エイミィー！奴を追えないか？」

アースラに連絡をとるが、

「ごめ～んクロノ、センサーにまったく反応無し、消えちゃった…」

「そうか…判った…ありがとう…」

通信を切ったクロノは、ゼロが消えた方向を見る。

（…一体、何者なんだ…？）

とりあえずクロノは、なのは達の方に歩き出した。
聞きたい事は山ほどある…

ーーー

ゼロの方の心配が無くなったところで、『闇の書』の現主であるはやてと、ヴォルケンリッターのみんなが気になった。
記憶を見ても分かるが、『闇の書』とヴォルケンリッターは案の定管理局に手配されている様だ。
歴代マスター達が収集の為、人を襲わせたりしていたせいで管理局とも戦ったらしい。

当然、現マスターであるはやても手配される…
ゼロの疑問にシグナムが不敵に笑って答える。

「我らは強力な結界魔法を持っている。普通にしていればまず感知される事は無い。主はやてに至っては魔法資質のほとんどが『闇の書』の中だ、まず見つかる事は無い…」

それを聞いて安心するゼロ。はやてはへえ～という感じで膝の上の『闇の書』を見ている。
どうやら今の所、此処が見つかる心配は無さそうだ。
しかしもう一つの気掛かりがある。ゼロははやてに、

「はやて…結局、話し合いは見事に失敗しちまったよ…」

と力無く交渉の結果を告げた。
そんなゼロに、はやては微笑んで優しく慰める。

「しゃあないよ…フェイトちゃん達にも、色々事情があったんやろ

うし…でも、絶対無駄や無かったと思うで」

う～んと唸るゼロ。そこでヴィータが、買って貰ったぬいぐるみ（のろいウサギというらしい）を撫でくりまわしながら、

「まあ、ゼロに話し合いなんて無理があんだろう。慣れない事すっからだ」

意地が悪い笑顔で言うが、ヴィータなりに慰めているつもりらしい。

「うるせえ～放っとけ」

ゼロもそれが判って苦笑して返す。
はやては少し遠い目をして心配気に、

「フェイトちゃん達、これからどうするんやろ…？」

ポツリと呟いた。
それにシグナムが、改まった表情で応える。

「管理局が相手では今までの様にはいかないでしょう…その2人にとって厳しい状況になりますが…」

はやては悲し気に視線を落とし、

「…諦めたりはしないんやろうな…」

シグナムは目を閉じ、ゆっくりと頷いた。

「そうですね…話を聞く限り、並みの覚悟では無いようですし、諦めないでしょう……」

事態は変わったのだ。これからは管理局が組織だって『ジュエルシード』の探索をするだろう。
それでもフェイト達が管理局を相手にする気でいるのは、ゼロにも予想できた。

（フェイト、アルフどうするんだ？このままだと、追い詰められて自滅しちまうだけじゃねえのか…？）

ゼロはこの世界の何処かに居る筈の2人に、心の中で問うしかなかった。

フェイトとアルフは、何とかマンションにたどり着いていた。
暗い部屋の中、ソファーに倒れ込むフェイト。なのはとの戦闘で消耗したのに加え、クロノにやられた傷もある。

手当てを受けたフェイトはグッタリしていた。
そんな彼女を心配して見守っていたアルフだが、我慢出来ずに、

「駄目だよ…時空管理局まで出て来たんじゃ、もうどうにもならないよ…逃げようよ、２人でどっかにさ」

本音を吐き出した。実際状況はとても悪い。
アルフはこれ以上フェイトに危険な目に遭って欲しくなかった。

「…それは、駄目だよ…」

フェイトは辛そうに体を起こしながらも、はっきりと拒否する。

「だって雑魚クラスならともかく、あいつ一流の魔導師だ。本気で捜査されたら、此処だっていつまでバレずに居られるか…だからさ」

アルフがそこまで言った時だった。
急に部屋の温度が上がった気がした。そして、

「メッタナ事ヲ言ッテ主人ヲ惑ワスノワ止メタラドウダ…？」

突如暗がりから、ぐもった不気味な声が響いた。
フェイトもアルフも驚いた。まったく気配を感じなかったからだ。
すぐさま身構える２人、夜目が効くアルフの目に全身をフードで覆った得体のしれない人物が部屋の隅に立っているのが見えた。

「誰だい！管理局か！？」

アルフの問いに、フードの人物は気味の悪い忍び笑いをし、

「慌テルナ…俺ハ、プレシア様ノ使イダ…」

と嫌な声で言う。

しかし不気味な声だった、まるで人でない者が無理に人話を話しているかの様な…それに妙に部屋が熱い、アルフは驚いて、

「何だって？あんたみたいなの見たことも無いよ！？」

不信感を露わにするが、プレシアの名を知っているのは関係者以外にはいない筈だった。

フードの人物はフェイトを見、先ほどの忍び笑いより更におぞましい笑いをし、

「知ラナイノモ無理ハ無イ…何シロ、最近生マレ変ワッタバカリダカラナ…」

謎の言葉を吐く。

フェイトとアルフには何を言ってるのか判らなかった。

プレシアの新しい使い魔なのだろうか？と思ったが、それにしてはあまりにも異質なものを感じる2人だった。

フードの人物はフェイト達の戸惑いをよそに、

「プレシア様ノ伝言ヲ伝エニ来た…今カラ１０日以内ニ、少ナクトモ後８個ハ『ジュエルシード』ヲ集メロトノ事ダ…」

「何だって！そんな無茶だよ、管理局だって居るのにさ、それにこの間は急がなくていいって言ってたじゃないか！」

そう噛みつくアルフだが、フードの人物はフードの奥の人では有り得ない位の丸く大きな目を赤く光らせ、

「プレシア様ノオ考エダ…オ前達ハ言ウ通リニシテイレバイイ…ソレダケダ」

そう言い残すと、フードの人物はいつの間にか姿を消していた。
現れた時と同じく、まったく気配を感じられなかった。部屋の温度も下がっていく。
アルフは何とも不吉なものを感じていた。２人の前に広がる暗雲を…

「…後、１０日…」

フェイトは暗い顔でつぶやいた。

つづく

第１３話　魂の激突や（後書き）

色々と異物や何者かの思惑とで、この様になりました。（汗）
クロノの乱入が無くあの時点で戦っていたなら、なのはの負けだったのではないかと…
クロノは巷で散々ＫＹだと言われている様で、私は別にそう思ってなかったんですが、ネタとしては面白いのでやってみたら、あのタイミングになってしまいました。
何かすんません。

第１４話　津波怪獣の恐怖・海鳴市大ピンチ！や（前編）（前書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。
皆様のおかげで細々と続けていますのでがんばります。
では第１４話をお送りします。

第１４話　津波怪獣の恐怖・海鳴市大ピンチ！や（前編）

次元の海に時空管理局の次元空間航行艦船『アースラ』が待機していた。

アースラブリッジではエイミィの現状報告をリンディ、クロノ、なのは、ユーノとで聞いている所だ。
ちなみにユーノは本来の姿であるなのはと同い年位の少年の姿だ。
この姿の件でなのはと色々と行き違いがあった様で、（なのはは、ユーノは喋るフェレットだと思っていた）ひと悶着あったようだ。

なのははここで手を引く事を良しとせず、リンディに頼み込んで民間協力者という形でアースラに乗り込む事になった。
両親をリンディに説得して貰い（魔法関係はもちろん伏せて）学校には長期休みの届け出を出してある。
リンディもなのはの熱意と強力な魔力を使わせて貰おうという冷徹な計算の元、乗船を許可した。

何しろ、なのはは魔力だけならクロノを上回る程の才能を持っている。万年人手不足の管理局にとってはありがたいらしい。

今アースラは、武装局員総出で『ジュエルシード』の探索に当たっていた。
しかしフェイト達が影で暗躍し、クロノやなのはが居ない時を見計らって武装局員達を襲撃し『ジュエルシード』２個を奪った。
これで２１個ある『ジュエルシード』は残り８個。

リンディは難しい顔をしてエイミィに尋ねる。

「あの子達を何とか捜せないの？」

「それが…余程高性能なジャマー結界を使っているらしく、今の所は無理です…」

エイミィは申し訳無さそうに報告する。

ちなみにゼロの件だが、なのは達が「何も分からない突然現れて助けてくれた」としか話しておらず、巨大化も超絶の戦闘能力の事もリンディ達は知らない。

測定不能のエネルギーの主がゼロである事も。

敵対する意志も話を聞く限り無さそうな上、魔力も無く大した力も持っていないと判断され、フェイト達の件が優先される事になった。

クロノは気にしているようだが、基本ゼロは何か変な奴扱いである。

（涙）

エイミィの報告を聞いたリンディは、仕方ないといった感じでため息をつくが、続けて聞く、

「あの子の正体については何か分かった？」

それには今まで黙って聞いていたクロノが答える。

「テスタロッサ…、かつての大魔導師『プレシア・テスタロッサ』と同じファミリーネームです」

「プレシア・テスタロッサ！」

リンディにも覚えがあったらしく驚いている。

なのはは何の事か分からず、

「プレシア…さん…？」

と首を傾げる。

そんななのはにクロノが説明する。

「だいぶ前の話だけど、『ミッドチルダ』中央都市で魔法実験中に大きな事故を起こして追放されてしまった大魔導師だよ…あの子は関係者かもしれない…

本名じゃないかもしれないけどね…ともかく、捕まえてみれば解るさ、次は捕まえる！」

クロノは拳を握り締めた、出し抜かれた形になって頭にきているのだろう。

「プレシア・テスタロッサさん…」

なのははその名前を呟いた。

フェイト達は追い詰められていた。

突如プレシアから突き付けられた期限は迫って来る。

焦るフェイトだが、管理局の目を盗んでの探索の結果は、はかばか

しくない…

2人は人気の無い沼地に降り立った。
狼の姿のアルフは一息つき、

「やっぱり、むこうに見つからない様に隠れて探すのは、なかなか難しいよ…」

弱音をはいてしまうアルフに、フェイトはクロノにやられた腕の傷に巻かれた包帯を解きながら、

「…うん…でも、もう少し頑張ろう…」

今のフェイトには、母親の願いを叶える事が全てだ、それが自分自身の為でもあると思った。
そうすれば昔の優しかった母に戻ってくれるとフェイトは信じた…
色々な不幸に襲われ、別人の様になってしまった母の笑顔を取り戻す…
時間は迫って来る、何事かを決意したその目には悲壮感が漂っていた。

ーーー

最初ゼロが張り切って色々教えてやろうとしたが、色々な世界を回り人間と変わらない生体機能を持つシグナム達は、『ウルトラマン』であるゼロより世知に長けていた。
逆にゼロが常識の無さを指摘されてへこむ始末だった。

そんな中でもフェイト達の事が気になるゼロは探索系が得意なシャマルに頼み込み、それらしき魔法反応を探って貰っていた。
フェイト達らしき反応は、現れては直ぐに逃げるという行動を繰り返していて追いきれなかった。

ゼロとしては、フェイトの母親に無理にでも会わせて貰い、話を着けてやるつもりなのだが…（もちろん場合によっては腕ずくで）
そう思いながら、洗濯を終えみんなが居るリビングに向かう。
とりあえずヴィータに、あれほど言っておいたにも関わらず色物を他の洗い物と一緒に洗濯機に入れるなと注意してやろうと思った。

ゼロがリビングに入った時、ヴォルケンリッター全員が立ち上がっていた。
ただ事では無い雰囲気だ。

「どうした！？」

ゼロが問い掛けると４人はゼロの方を振り向いた。
はやてはポカンとしていたが尋常では無いのは感じ取る。
シャマルが深刻な顔をし、

「誰かが大掛かりな魔法を使っているわ…多分フェイトちゃん達ね」

「そんな大掛かりな魔法を使ったら、管理局に直ぐに見つかっちま

うんじゃねえのか？」

ゼロは不振に思う、今まで管理局の目を盗んで動いていたフェイト達がここに来て、何故こんな派手な真似を？

「何？この反応は！？」

シャマルが訝し気な声を出す。シグナムが目つきを鋭くし、

「シャマル何があった？」

「フェイトちゃん達が居る辺りに『ジュエルシード』らしき反応が６つあるんだけど、そこに向かって来るもう一つの『ジュエルシード』の反応があるの…これって…？」

「『ジュエルシード』の反応が近付いて来るだと！？」

ゼロは思わず叫んでいた。直感する、恐らくグリーンモンスをけしかけて来た奴が、また何か仕掛けて来たのだ。

「はやて、多分例のろくでもない野郎だ。また何か仕掛けて来たらしい」

はやても頷いた。

グリーンモンスを仕掛けて来た奴が愉快犯だと見抜いたのは彼女である。

はやては嫌な予感が蘇るのを感じた。

「何が起こるか分からねえ、お前らはやての事を頼む、敵は『ジュエルシード』を吸収した俺の居た世界の怪獣だろう、ぶっ倒して来る！」

ゼロは皆にそう言うと玄関に駆け出した。
ふと、その背に不安を感じたはやてが声を掛けようとすると、

「私も行こう…みんな主はやての事、頼んだぞ…」

シグナムがゼロの後を追った。
リビングを出る前にはやての方を見て頷く、どうやらはやての不安を察してくれたようだ。
はやても頷いて、

「2人共、気い付けてなー、行ってらっしゃーい」

手を振って2人を送り出した。
ゼロは玄関で靴を履くと、すぐさま『ウルトラゼロ・アイ』を装着しウルトラマン形態になる。
シグナムは不振に思い尋ねる、

「此処で変身するのか…？」

「ああ、一旦テレポートで手前まで跳ぶ、その方がいいだろう…魔法じゃねえから管理局に探知もされねえ」

そういってシグナムを抱きしめた。
仰天するシグナムは顔を赤らめて、

「な…何をする!?」

「何って…こうしねえと跳べねえだろうが？おら、行くぞ！」

腕の中であたふたするシグナムを怪訝そうに見るゼロだが、構わずテレポートを敢行する。
その瞬間2人の姿は玄関から消え失せた。

雷雲渦巻く海鳴市沖上空に、金色の巨大な魔法陣が浮かんでいた。
その直径は数百メートルにも及ぶ巨大なものだ。フェイトが作り出した雷の魔法陣。
フェイトは海中にあると思われる『ジュエルシード』に電気の魔力を叩き込んで強制発動させ、位置の確認をするプランだった。
アルフは少し離れた位置で狼の姿をとりフェイトのサポートに努める。

雷鳴轟く人気の絶えた海辺の防波堤近くにゼロとシグナムはテレポートアウトした。
シグナムを離すゼロ、解放されたシグナムは固まったまま「いくら跳ぶ為とはいえ…断りも無しに…誰にもこんな事…」頬を赤らめてブツブツ言っている。
ゼロは（何を今更、前に巨大化してみんなまとめて抱きしめたじゃ

ねえか）と思ったが、まず遠視能力で状況を確認する。
気を取り直したシグナムも探査魔法でフェイト達の様子を探った。
ゼロの目に見えるのは巨大な魔法陣とフェイト達、魔法陣から雷が海に撃ち込まれているのが確認出来るが…

「何をしてるんだ…？」

状況が分からないゼロにシグナムが説明してくれる。

「ああやって魔法雷を撃ち込んで『ジュエルシード』の位置を確認しようとしているのだろう…だが…」

そこでシグナムは一旦言葉を切る。
海上では、青い６つの光が海の中から浮かんで来ていた。

ゼロはシグナムの方を向き、

「何かやばいのか？」

シグナムは海上を見ながら頷き、

「これだけの大規模魔法だ、術者の負担も相当なものになる。更に『ジュエルシード』は６個、これだけの大規模魔法使用に６個の同時封印、個人の出せる魔力の限界を超えている…このままだと自滅するぞ！」

「何だって！？」

焦るゼロ、その時シグナムは何かに気付いて海上を指差した。

「見ろゼロ！誰か現れた様だ」

シグナムが指した方向を見ると、小さな人影が2つフェイト達の方に飛んで行くのが見えた。

「なのは達なのか！？」

ゼロが叫ぶ、片方の少年には見覚えが無いなと思うが…
それはフェイト達を助ける為アースラを飛び出して来たなのはとユーノだった。

アースラ側でもフェイト達の動きは掴んでおり、フェイト達が自滅するまで待つ作戦だったのだが、見ていられなくなったなのはとユーノは命令無視をして飛び出して行ったのだ。

フェイト達の所にたどり着いたなのは達は何やら話していた様だが、2人で『ジュエルシード』の封印を始めた。
その様子を見てシグナムは不思議そうに、

「あの子達は何故手伝っているのだ？状況から言っても管理局に協力している筈だが…？」

「見てらんなかったんだろうよ…そういう奴らだ…」

ゼロはその様子を見ながら嬉しそうに言う。

そうしている内に、雷が止んできた『ジュエルシード』の青い輝きも収まった。どうやら無事封印は終わったらしい。
しかしゼロは気を抜かない、彼にとってはこれからが本番なのだ。
ゼロが海上を睨みつけると同時に、フェイト達が居る場所より更に沖の海面が山の様に盛り上がった。
そこから海水の山を突き破る様に巨大な頭が出現した。
滝のごとく海水を滴らせ、鼻先の巨大な一本角を震わせ吼える。
唸り声を数十倍にアップさせた様な大音量が周囲に響き渡った。

心の整理を着け、フェイトに話し掛けようとしていたなのははびっくりして声も出ない。フェイト達も固まってしまう。

海面に出ているのは肩まで程なのに、それだけで４０メートルはありそうだ。海岸にいるシグナムの目でも確認出来る程に。

「あれが…怪獣か…？」

シグナムが容易ならざる気配を察した時、ゼロの緊迫した声がした。

「…あいつはやべえ…！」

シグナムもその声にただならぬものを感じる。ゼロはシグナムに向き直り、

「みんなに連絡しろ！何かあったら、はやてを連れて直ぐに逃げられる用意をしとけってな！」

「それ程の奴なのか…？」

シグナムには、はやてを逃がさなければならない程の事態とは思え

なかった。
ゼロは怪獣を睨みつけ、

「強いというより、能力がやべえんだ…奴の名は『シーゴラス』自然現象をも操る怪獣だ…」

『津波怪獣シーゴラス』（竜巻怪獣という説もある）最初の個体は東京湾に現れ、『ウルトラマン・ジャック』と戦った。
つがいである『シーモンス』と共にウルトラマンを敗北寸前まで追い込んだ事もある。
シーゴラスの能力は、海流を自在に操り東京を全滅させる程の局地的大津波を起こせる事。

「一つの都市を壊滅させる程の津波だと…？」

さすがのシグナムも顔色を失う。
更にはシーゴラスは『ジュエルシード』を吸収している。今現れたシーゴラスは元の倍、全高１２０メートルはある。いったいどれほどの津波を起こせるのか。
シーゴラスが大音量で吼えた、巨大な一本角が激しく放電を起こす。力を使う時に見られる現象だ。
それに伴い周囲の海全体が生き物の様に激しくうねり出し、あっという間に潮が引いて行く。
そして周囲全ての海水がシーゴラスの全面に集まって行った。
次の瞬間、一気に爆発する様に数百メートルに及ぶ壁の様な津波が発生した。
フェイトなのは達は慌てて『ジュエルシード』と共に高空へ退避する。
シグナムもペンダントを剣型アームドデバイス『レバンティン』に

変化させ、いつでも離脱出来る様にした。

「シグナム！お前も逃げとけ！！」

ゼロはシグナムに逃げるように言うと海目がけて走り出した。
その後ろ姿にシグナムは呼びかける。

「ゼロどうする気だ！？」

「このままじゃ、海鳴市どころかこの辺りは全滅だ！何としても止めてやる！！」

シグナムは慌てて呼び止めようとする。

「馬鹿な！あれがどうにか出来ると思っているのか！？どんな魔導師でもどうにか出来るしろものでは無い、戻れ！！」

その間にも巨大津波は轟音を上げ陸地に迫っていた。

津波の速度は速い、通常津波の速度は水深により左右される。
深海では音速に近い速さになる事もあり、１００メートル程の深さでも時速１００キロを超えるスピードがある。
しかし同じ水深でもシーゴラスの力で引き起こされた津波は実に時速３００キロに近い速度があった。

高さ数百メートルの津波が時速３００キロに近い速度で押し寄せるのだ。飲み込まれて無事な建物も人間もいないだろう。
ゼロは海辺の開けた場所に着くと、腕を組み合わせた。エネルギーを解放する、

「おおっ…！」

シグナムが驚きの声を上げた。
組んだ両手を広げるのに合わせる様にゼロの体がみるみる本来の身長４９メートルの大きさに巨大化した。

シグナムも一度ゼロの巨大化は見た事はあるが、これほど大きくなれるとは思っていなかった。

天を突く巨人になったゼロは、地響きを立てて巨大津波に向かい合った。

それは見渡す限りの視界を埋め尽くす高さ数百メートルに及ぶ海の壁だった。
まるで海が上空に現れた様に錯覚する程だ。
凶獣のごとく唸りをたてて陸地に襲いかからんとする。
規模も初代シーゴラスが起こした津波とは比べものにならない、身長４９メートルのゼロが小さく見える。
直撃すれば海鳴市を中心とした数百キロの沿岸付近の都市は壊滅するだろう。

迫る大津波の前にゼロは仁王立ちのままだ。

（どうするつもりなんだ…ゼロ？）

シグナムは逃げるのも忘れ、ゼロの背を見つめた。

ウルトラマンゼロはこの事態にいかにして立ち向かうのであろうか？

つづく

第１４話　津波怪獣の恐怖・海鳴市大ピンチ！や（前編）（後書き）

今回のウルトラ説明です。
『ウルトラマン・ジャック』は『帰ってきたウルトラマン』の事です。今まで呼び名が定まっていなかったのですが最近公式化されました。
『シーゴラス』に関しては大体本文通りですが、付け加えると（普段はおとなしいが妻シーモンスの産卵期には妻を守る為に凶暴になる）（夫婦で巨大竜巻を起こせる）という感じです。
ちなみに今回の引きは本家の引きと同じです。
何かカッコ良くて１度やってみたかったので…少しでも本家の緊張感を感じていただければと思います。
では後編で

第１５話　津波怪獣の恐怖・海鳴市大ピンチ！や（後編）（前書き）

久々の巨大化戦闘です。
ウルトラマンのクロスなのに今まで巨大化戦闘が２回だけとは…
では３回目の巨大化戦闘第１５話をお送りします。

第１５話　津波怪獣の恐怖・海鳴市大ピンチ！や（後編）

ゼロが大津波と対峙している時、八神家ではシグナムからの念話を受けたヴォルケンリッター３人が、はやてをいつでも脱出させられる態勢を整えていた。

各自はやてにデザインして貰った騎士甲冑、バリアジャケットと同じ魔力で作った防護服を纏っている。

ヴィータはゴスロリドレス風の深紅の服に、ゼロに買って貰ったのろいウサギを模した飾りを付けた深紅の帽子に、ハンマー型のアームドデバイス『グラーフアイゼン』を持っている。

シャマルは上品なイメージの緑系の色でまとめられたファンタジー風の服に同じ色合いの帽子。

ザフィーラは人間形態をとり、紺色のノースリーブの裾の長い上衣とカンフーズボン風のパンツにアームガード、レッグガードのこちらもファンタジー風の格闘家といった感じの服装だ。

先ほどから３人は、はやてに脱出するように説得しているのだが、はやては頑として動こうとはしなかった。
はやては３人を見据え、

「他の人が何も知らんのに、私だけ逃げるやなんて…そないな事出来ひん…」

「でも…はやてちゃん…」

シャマルが何とか説得しようとするが、はやては強い意志を秘めた目で3人に穏やかな口調で語る。

「今ゼロ兄が、この街を守る為に頑張っとるんや、私はゼロ兄を信じる。みんなも信じたって…必ずゼロ兄はみんなを助けてくれる。何たってゼロ兄は平和を守るウルトラマンなんやから…」

その言葉を聞き3人は何も言えなくなった。

はやては自分一人が助かるのを良しとしない、それは少女らしい潔癖さかもしれないが、何よりはやては許せなかったのだ。

どんな状況かは聞いている、怪獣を送り込んだ奴は面白半分で人を大勢殺そうとしている、はやては直感した。

そんな奴に背中を見せたくは無かった。

（お前なんかにゼロ兄は絶対負けへん…私らもや！）

「はやてぇ～…」

はやてを心配して、不安げに膝にしがみつくヴィータの背中を撫でる。『闇の書』もはやてから離れようとしない。

その様子を見て、万が一の時は強権発動でみんなは逃がさんと…そこまではやては覚悟した。

彼女は肌身離さず持っているゼロから貰ったペンダントを握りしめ、海の方角をしっかりと見据えた。

同時刻、海鳴市上空の雷雲上に浮かぶ巨大な黒い巨人の姿があった。

赤く輝く単眼『ダークロプスゼロ』である。右手に誰かを乗せ、上空の強い気流の中微動だにせず空中に制止している。

ダークロプスの巨大な手の平に黒づくめの男が立っていた。

ゼロに似た顔立ち、『2つの目』のダークロプスゼロの人間形態である。やはり単眼のダークロプスと彼は別人らしい。

もっとも巨大機動兵器であるダークロプスが人間サイズになれる訳も無い。そうなるとこの男は何者だろうか?

その男、青年は上空の強い気流を気にも留めず巨大な指の間から地上を覗き込む。

青年の目には厚い雷雲を問題にせず地上の様子が見える様だ。

「どうだ?ゼロ、面白くなって来たろう?さあ…どうする?」

青年は凶悪な笑みを浮かべ、気流になぶられる黒髪を撫でた。

ゼロの目前に巨大な壁のような津波が迫っていた。

（やれるのか？一回聞いた事があるだけの『あれ』を…）

怖いもの知らずのゼロもさすがに足がすくむ気がした。

津波が怖いのでは無い、自分が止められなければ大勢の命が失われるという事実が何より恐ろしかった。

それは戦闘とは別次元の恐怖だった。

《ゼローっ！！》

その時、ゼロの頭にシグナムの念話が響いた。

後ろを見ると、管理局の監視を警戒し木陰に隠れてはいるが、シグナムが逃げずにゼロを見上げている。

何故逃げない？そう思い、逃げろと言い掛けた所で、

《主はやては逃げない…自分だけ助かる事を拒否された…！》

シグナムは叫ぶ。

ゼロは驚いたが、はやての性格なら当然予想出来た事だった。

シグナムは気迫の籠もった眼差しでゼロを見据え、

《主は言われた！お前を信じると…、ならばゼロお前は主はやての信頼に足る、平和を守る『ウルトラマン』なる戦士としての誇りがあるのなら、見事この津波を止めて見せろ！！》

それはシグナムの…、シグナム達の心の叫びだ。
騎士の誇りにかけて主の命令には従わなければならない、例えその命令が主の命に関わるとしても…

しかし今のシグナム達にはそれだけでは割り切れない思いがあった。
はやてが逃げないと決めた今、ゼロの未知の力に賭けるしかなかった。

《任せろ!!もう少し離れとけよ!》

ゼロはそんなシグナム達の思いも含めて彼女を見下ろし、力強く頷いた。

（びくついてる場合じゃ無かったな…ありがとよ、はやて、シグナム!）

さっきより距離をとるシグナムの後ろ姿に心の中で礼を言った。
気合いを入れたゼロは迫る津波と向かい合った。胸の前で両腕をクロスさせる。

（ぶっつけ本番だ!やってやらあーっ!!）

覚悟を決めたゼロはその場で高速回転を始めた。
1回転2回転、更に回転を重ねる、ゼロの体から赤いスパークが発生した。エネルギーを螺旋状に高めているのだ。

ゼロの高速回転で風が巻き起こる。エネルギーを高めたゼロは回転を止めた。津波はもう目の前だ。波しぶきが体に当たる。

ゼロは思い切り右手を前に突き出した。

「行けえええええええっ！！」

吼えるゼロ、シグナムは動かずゼロの巨大な後ろ姿を見守る。

次の瞬間、天に轟く程強烈な激突音が響いた。衝撃で地面が揺れ動く。

何とかバランスを保ったシグナムは驚愕した。

何と見渡す限りの津波はゼロの突き出した右手の所で動きを止めていた。

まるでゼロの前に、高さ数百メートルの長大な見えない壁が出現した様に。

『ウルトラ・バリヤー』『帰ってきたウルトラマン』こと『ウルトラマンジャック』が初代シーゴラスの大津波を防いだ時に使用した技だ。

一度だけジャックから話を聞いていたゼロは、ぶっつけ本番でウルトラ・バリヤーを使用したのだ。

この技は、高さ百数十メートルものエネルギー障壁を沿岸一帯に張り巡らせるという荒技である。

しかし今ゼロは、ジャックのバリヤーの数倍の規模のバリヤーを張り巡らせていた。

凄まじい重圧と衝撃がゼロの体にのし掛かる。重力制御能力で、ある程度中和しても強烈な加重が体にかかっていた。

ゼロは右手を突き出したまま懸命にバリヤーの制御に集中するが、手前の不可視のバリヤーが時折不安定になりスパークする。

想像以上にコントロールが難しい、ゼロのような戦闘一辺倒にはきつい作業だったが、彼は諦めない。

（負けてたまるかよっ！この手に何百万の命がかかってんだ！一歩も引かねえぞ！！）

この手にかかる命の重みを実感し、軋む全身にありったけの力を込める。技術の足りない分はパワーでカバーする！

「ぶっ飛びやがれえええええええっ！！」

ゼロがひときわ高く吼えた。その勢いで両腕を天高く振り上げる。

「これは…」

シグナムが天を見上げた。

ゼロに導かれる様に、津波がまるで天に向かって落ちる長大な滝のごとく、空に巻き上げられて行く。

その光景は海を割り現れる古代の神をシグナムに連想させた。

舞い上げられた大量の海水は広範囲に広がり、豪雨の様に海に降り注ぐ。

そのあおりをまともに食らったシーゴラスは盛大な水しぶきを上げ、ひっくり返ってしまった。

海は余波で荒れているが、ゼロは大津波を見事に防ぎきった。

「…ふはははは…やってやったぜ…ちきしょうめっ！！」

ゼロはやりきった喜びで仁王立ちで笑う、エネルギーをかなり消耗したので体はキツイが…

しかしこれで終わりでは無い。

怒り狂ったシーゴラスは降りしきる海水の中で立ち上がり、しぶきを上げながら陸地目掛けて突進して来る。

さすがに津波攻撃は連続して使えないらしい。

「陸には上げねえぞ！！」

エネルギー残量を気にしながらもゼロは海に飛び込み、爆発の様な水しぶきを上げながらシーゴラスに向かって走る。

丁度、ゼロの膝下あたりの水深の場所でぶつかり合うゼロとシーゴラス。

ゼロは先手をとって左右の回し蹴り二連撃をシーゴラスの両脇腹に見舞う。

「ゴガアアアッ」

シーゴラスがうめき声を上げる、衝撃で１２０メートルの巨体が揺らいだ。盛大な水しぶきを上げ堪らず膝を着く。

ゼロは間髪入れずに左足を軸に後方に体を回転させ、低くなったシーゴラスの巨大な頭目掛けて後ろ回し蹴りを叩き込む。

唸りを上げて炸裂する蹴りを受け、シーゴラスの巨体がふっ飛び海面に突っ込んだ。

更に追撃をかけるべく走るゼロ、その時怒りの雄叫びを上げ立ち上がるシーゴラスの角が再び放電現象を起こした。

（野郎っ、また懲りもせず津波を起こす気か？だがこんな浅瀬で何が出来る？タイマーが鳴る前に片付けてやる！！）

構わず突っ込むゼロ、だが突如として目の前に巨大な竜巻が発生した。

「何ぃっ！？」

猛烈な竜巻に飲み込まれるゼロ、上空で唖然としていたなのはフェイト達の所まで強風が吹き荒れる。堪らず距離をとる４人。

「ぬうわあああああーっ！？」

竜巻に飲み込まれ、回転しながら天高く吹き飛ばされるゼロ。
3万トンを超える巨体が軽々と宙に飛ばさていた。
落下して来るゼロの背中をシーゴラスはその巨大な角でかち上げる。

「ぐわあっ！！」

ゼロが苦悶の声を上げる。
痛烈な一撃を受け巨体が再び上空に吹き飛ぶ、そこで再び竜巻に巻き込まれるゼロ。シーゴラスの2段攻撃だ。

本来竜巻攻撃は、つがいであるシーモンスと2匹揃わなければ使用出来ないのだが、『ジュエルシード』の影響で単体でも使える様になったらしい。

しかも只の竜巻では無い『ジュエルシード』のエネルギーを利用した高重圧、高エネルギーの魔力竜巻だ。

シーゴラスは巻き上げられたゼロが落下して来るのを狙い、放電する角でその体を串刺しにするつもりだ。

竜巻は有り得ない動きをしゼロを拘束したまま降下して行く。

シーゴラスは竜巻をコントロールして拘束状態のゼロを突き殺す気だ。

「ゼロっ！」

思わずシグナムが叫んだ。

（馬鹿が、不意打ちで最初は食らったが…何度も同じ手が通じるかよ！うおおおおーっ！！）

ゼロは全身からエネルギーを放出し、竜巻を強引に吹き飛ばした。

落下しながら素早く体勢を立て直す。右足にエネルギーを集中させ落下の勢いで降下する。

「ウルトラマンゼロを舐めるなあっ！！」

そのままシーゴラスの角目掛けて『ウルトラゼロキック』を放った。

赤熱化した右足が巨大な角を粉々に粉砕する。

海水を盛大に散らして着地したゼロ。

その時、胸の『カラータイマー』が赤く点滅を始めた。

（チッ…、やっぱり地球上じゃエネルギーの減りが早いな…）

舌打ちするゼロ。他のウルトラ戦士と比べて、並外れたエネルギー量と活動時間を誇るゼロだが限界はむろん有る。

本人はもう少し保つと思っていたのだが…ウルトラ・バリヤーで思ったよりエネルギーを消耗したらしい。

シーゴラスは顔を押さえのた打ち回っていたが、執念で立ち上がり雄叫びを上げてゼロに突進をかけて来た。

ゼロはシーゴラスの真正面に立ち、両手を頭に添える。

「とどめだっ！！」

ゼロの頭部の宇宙ブーメラン『ゼロ・スラッガー』2本がゼロの脳波で飛び出す。

唸りを上げ空気を切り裂きながらシーゴラスに向かって飛ぶ。

2本のスラッガーは鋭い切れ味で突進して来るシーゴラスの太い両腕を疾風のごとく切り落とし。

返す刀で最後に巨大な首を神速の居合い切りのごとく2本のスラッガーが叩き切った。

巨大な首と腕が海に大きなしぶきを上げ落下する。

首を切り落とされたシーゴラスは大量の赤い血を撒き散らしながら海に崩れ落ちた。

辺り一面が真っ赤に染まった中、ゼロは動かなくなったシーゴラスに近寄り、右手を抜き手にして海に横たわるその腹に突き込む。

内臓をかき分けて青く光る『ジュエルシード』をえぐり出す、大量の血液が噴水の様に飛び散った。

血まみれの『ジュエルシード』を上空で固まっているフェイト達に向かって投げる。

血まみれ『ジュエルシード』にさすがに少し引き気味のフェイト達だが、封印を完了した。

一息つくゼロにシグナムからの念話が入る。

《良くやったなゼロ…ウルトラマンの力とは凄まじいものだな…》

振り向いたゼロの目に木陰で珍しく微笑むシグナムの顔が映る。何か照れてしまったゼロは、

《ど…どうって事あ無えよ…ら、楽勝だったぜふははは…》

無理して胸を張るゼロである。
シグナムは少々意地の悪い顔になり、

《ところで、一つ聞きたいのだが…胸で赤く点滅しているのは何だ？》

《ああ…これは活動限界を教える『カラータイマー』だ。地球上だとあまり長くはこの体を維持出来な…》

そこでゼロはようやく気付いた。

《シグナムてめえ、引っかけやがったな!?》

シグナムは笑いをこらえている表情だ。消耗しているのはお見通しらしい。

《無理をするな、意地っ張りが…お前は本当に素直では無いな…》

緊張の解けた2人はそんな軽口を叩き合っていたが…

「何だ！？」

「…これは…魔力攻撃！？」

何かを感じ取り、ゼロとシグナムは同時に空を見上げた。

その瞬間、辺り一面をおびただしい数の紫色の落雷が一斉に降り注いだ。

それはフェイトやなのは達が居る辺りを中心に落ちている。

「あああああーっ！？」

その内の一つがフェイトを直撃した。

なのは達は何とか避ける事が出来たが、大規模魔法の使用で疲れきっていたフェイトはまともに食らってしまったのだ。苦悶の声を上げるフェイト。

その時なのはの耳に、

「母さん…？」

とつぶやくフェイトの声が聞こえた。

「フェイトちゃん！」

なのはが近寄るより早く、人型に変化したアルフが落下して行くフ

ェイトを追う。

「フェイトぉーっ！」

アルフは意識を失っているフェイトを空中でキャッチした。

フェイトの様子を見ると意識は無いがそれ程酷い怪我はしていない様だ。

アルフは目つきを鋭くした。

（今なら、『ジュエルシード』をみんな持って逃げられる！）

そう判断したアルフはフェイトを抱えたまま宙に浮かぶ『ジュエルシード目掛けて一気に突っ込んだ。

青く光る石に手を伸ばす、その時不意に現れたクロノが攻撃を仕掛けて来た。今までチャンスをうかがっていたのだろう。

アルフはそんなクロノに殺意さえ覚えた。何でこんな一生懸命な子の邪魔をするのかと、いささか理不尽な怒りだがアルフは止まらない。

「邪魔をするなあっ！！」

アルフはフェイトと同じ『フォトンランサー』をクロノ目掛けて何本も撃ち込んだ。

アルフの気迫に押される様に金色の槍で吹っ飛ぶクロノ。

その隙に『ジュエルシード』を掴むアルフだったが、

（3つしか無い！？）

慌てて下に吹き飛んだクロノを見ると、いつの間に取ったのか、残り4個の『ジュエルシード』はクロノの指の間にあった。

アルフは歯噛みするが、今の一瞬で移動し『ジュエルシード』を奪った手際を見ても、気を失ったフェイトを抱えて戦うには不利だった。

（ここは引くしかないけど…すんなり逃がしてくれるかね…）

アルフは脱出の隙をうかがう。

その頃、次元の海で待機していた『アースラ』も魔法雷による攻撃を受けていた。

ゼロの信じられない力を目の当たりにし、気を取られた時に不意打ちを食った形になった。

紫色の魔法雷を受け大きく揺れるアースラ。

そんな中エイミィは素早くセンサー類をチェック、状況を確認しリンディに報告する。

「次元を越えた砲撃魔法です！艦の損傷はエンジンの一部が破損。システムの一部が損傷、通信モニター関係が使えません…これは…？」

エイミィが言葉に詰まった。リンディはまた攻撃が来たのかと思い、

「エイミィ何があったの？」

リンディの問いにエイミィはコンソール画面を見たままで、

「じ…次元ゲートらしきものを確認！何かがあの世界に出現します！」

「次元ゲートですって！？」

リンディは顔色を変えた。

睨み合いを続ける、アルフとクロノの近くの空が突如として、ガラスの様に割れた。

その場に居る全員が驚く。割れた空から毒々しい赤い空間が覗いた。

「何ぃっ！？」

ゼロが驚いて叫ぶ。

その赤い空間から巨大な何かが3つ海面に落下して来た。大きな水柱を上げ着水する。

その内の1つがクロノ目掛けて何かを撃ち出した。

クロノはとっさに防御魔法でガードするが、撃ち出されたものは大爆発を起こし衝撃で吹っ飛ばされた。

（今だっ！）

その隙にアルフは転移魔法を使い、現場からの離脱に成功する。離

脱の瞬間アルフはタイミング良く現れたそれらを見、

（こいつら…あたしらを助けに来たみたいに現れたね…？）

不振に思ったがそのまま脱出した。

攻撃を受けて吹き飛んだクロノは何とか体勢を整える。

現れた３つの何かを見たゼロは更に驚愕した。

「超獣だと！？何でこんな所に居やがる、ヤプールなのか！？」

ゼロに向かって進撃して来る３匹は、全身を珊瑚の様な赤い突起物に覆われた『ミサイル超獣ベロクロン』

黄、青といったカラフルな芋虫の様な体に巨大な一本角が特徴的な『一角超獣バキシム』

巨大な複眼に真っ赤な長い牙、凶悪な爪を持つ『蛾超獣ドラゴリー』

３匹は海面をかき分けゼロを包囲する。

ベロクロンは全身のミサイル発射機関を準備、バキシム、ドラゴリーも攻撃体勢を整える。

そんな中ゼロのカラータイマーの警告音が鳴り響いた。

（ちきしょう…！こんな時に…）

ゼロは消耗した体で3匹と対峙するしかなかった。

つづく

第１５話　津波怪獣の恐怖・海鳴市大ピンチ！や（後編）（後書き）

今回のウルトラの解説です。
超獣は『異次元人ヤプール』に作られた兵器としての怪獣で、２つの生物を合成させたり改造をほどこしたものです。
『ミサイル超獣ベロクロン』は、色々出てメジャーですね。
全身がミサイル発射口になっているのに加え、各種攻撃武器を持った歩く弾薬庫みたいな超獣です。
『一角超獣バキシム』も色々出てまして、こいつも体の各部にロケット弾や超高火炎を装備してます。何故かこのがたいで子供に化けた事も有り、質量保存の法則とかどうなってるのか気になる所です。
『蛾超獣ドラゴリー』は、飛び道具は少なめですが、怪力と強力な爪が武器です。
『ウルトラバリヤー』に関しては多分に想像が入っております。こんな所で、では次回『超獣対魔導師対宇宙人』でお会いしましょう。

第１６話　超獣対魔導師対宇宙人や（前書き）

いきなり寒くなりましたが、いかがお過ごしでしょうか。
風邪には気を付けて下さい、私は見事にやられましたので。
では第１６話です。

第１６話　超獣対魔導師対宇宙人や

突如空を割って現れた、『ベロクロン』『バキシム』『ドラゴリー』の３大超獣。
各自の姿は以前確認された個体とは違っている部分がある。

体も一回り大きくなっている様だ、どうやら改造強化され、戦闘能力をアップされているらしい。

奇声を上げ、ベロクロンが全身の珊瑚状の突起、ミサイル発射機関から一斉にミサイルを発射した。

雨あられのごとく飛び交う大量のミサイル弾は、ゼロとクロノ、なのは達目掛けて飛ぶ。

誘導ミサイルでもあるベロクロンのミサイルは、バキシム、ドラゴリーを避け、ゼロ達のみに襲いかかる。

「ぐわっ！！」

あまりのミサイルの量に加え、エネルギー残量が少ないゼロは避けきれず食らってしまう。
とっさに腕を組んで防御するが、吹き飛ばされてしまった。

なのは達にも誘導ミサイルが襲いかかる。防御魔法でガードするが威力は凄まじく、爆発の衝撃波で木の葉の様に舞う。

ミサイルを食らったゼロは、何とか踏ん張り倒れるのは免れたが、膝を着いてしまった。

3匹はその隙を見逃さない。バキシムは両手から超高火炎を、ドラゴリーは巨大な複眼から破壊光線を照射してゼロを攻撃する。

「ちきしょう！！」

寸での所で横に転がり攻撃を避けるゼロ。攻撃が当たった場所の海水が一瞬で蒸発した。

そのまましぶきを上げながら転がり3匹と距離をとる。
カラータイマーの点滅はどんどん早くなっていく。

（やろうっ！本調子ならこんな雑魚共まとめて片付けてやんのに！）

そう毒づくが、今のゼロにそれだけのエネルギーは残されていなかった。

父であるセブンと同じ、胸部の太陽エネルギーチャージプロテクターで、ある程度のエネルギー補充が出来る彼だが、悪い事にフェイトの大規模魔法の影響で空は曇ったままだ。
エネルギーの補充も出来ない。

飛び上がって雲の上に出ようとしても、その前に撃墜されてしまうだろう。

じりじりと追い詰められていくゼロに、シグナムが念話で呼びかけ

る。

《退けゼロ！今のお前では勝ち目は無い！》

《駄目だ！》

ゼロは首を振り拒否した。その間にもバキシムが発射した、高熱弾が撃ち込まれる。爆風の中よろめきながら、

《俺が退いてもこいつらが引くとは限らねえ！へたすりゃこのまま海鳴市に上陸される…今此処で倒さねえと駄目だ！！》

それを聞いてはシグナムも何も言えない。
ゼロは火炎とロケット弾の爆煙を目眩ましにドラゴリーに接近し、顔面に渾身の突きを叩き込んだ。

「ディヤァァァッ！！」

痛烈な一撃でドラゴリーの長い牙と下顎が砕けのけぞって倒れる。
そのまま顔面を踏み砕こうと突進するゼロにバキシムが襲いかかった。

巨大な一本角で突き上げんとする。かろうじて身を捻り避けるが、バキシムは首を捻り至近距離から巨大な角をミサイル弾として発射する。
背中に直撃を受けたゼロは吹っ飛び海面に倒れ込んだ。

一方なのは達は、ベロクロンのミサイル群をかわし、砲撃魔法をベ

ロクロンに撃ち込んだ。

しかしベロクロンは平気だ。再びゼロにミサイルを発射し、なのは達にも攻撃する。

ベロクロンは全身にミサイル発射口が有るため、３６０度の同時攻撃が可能なのだ。

「相手がデカすぎるんだ。こんな攻撃じゃ倒せない…」

そう呟くとクロノはミサイルの雨を魔法防御で防ぐユーノに、

「おいっフェレットもどき、時間を稼いでくれ！」

「誰がフェレットもどきだ！」

怒るユーノを冗談だとなだめ、ユーノに守って貰い広域魔法の呪文を詠唱に入る。

様子を木陰で見ていたシグナムはそれに気付いた。

「広域魔法を使う気か…」

《ゼロ離れろ！広域攻撃魔法が来るぞ！》

すぐさまゼロに念話を跳ばす。察したゼロは再度突っ込んで来たバキシムをかわし距離をとった。

その時呪文の詠唱を終えたクロノの中距離広域魔法『スティンガー

ブレイド・エクスキューション』が3匹の超獣に豪雨の様に降り注ぐ。

百を超える魔力の刃による一斉射撃だ。

光の刃は超獣達に嵐の如くぶち当たる。次の瞬間、大爆発を起こした。ベロクロン達の巨体が爆発の中に消え去る。

それを見たなのはは「凄い！」と驚いている。

（やった…）

クロノがそう確信した時だった。

爆煙の中から、無傷のベロクロンが現れる。巨大な口をバカリと開け、クロノ達目掛けて超高火炎を吐いて来た。

「しまった…！」

大規模魔法を使ったクロノはとっさに反応出来ない。

ユーノが動けないクロノを抱えて回避するが、凄まじい火炎の輻射熱だけで魔法防壁を破られダメージを負ってしまう。

バキシム、ドラゴリーも爆煙が晴れた中無傷の姿を現した。

超獣は通常の生物では無い、２つの生物を合成させ、強化改造を受けた戦闘用の生物だ。

様々な超能力を持つウルトラ族に対抗する為、防御機能も強化され

ている。

並みの攻撃では傷一つ着けられない。ミサイルや、光学兵器を受けても平気な防御力も兼ね備えているのだ。

ダメージを負ったクロノとユーノを助ける為、なのははミサイル群を『ディバインシューター』で迎撃する。

周りでミサイルの連鎖爆発が起きた。

「きゃあああっ！」

防御しても爆風で飛ばされるなのは。いくら彼女の防御が堅くても、そう何時までもミサイルの直撃には耐えられない。

防御だけで魔力が削り取られいく。

一方のゼロも防戦一方だ。なのは達を後回しにした3匹は、同時にゼロに超高火炎を浴びせる。

「ぐわあああああっ！！」

三方からの攻撃にゼロは、もろに数億度の火炎を浴び、苦悶の声を上げる。

数億度の炎は最早超高熱のビームだ。周りの海水が余波で沸騰する。

カラータイマーの点滅が更に早くなった、残された時間はもう僅かだ。

《ゼロ！》

再びシグナムから念話が入った。だが数億度の火炎に身を焦がされるゼロには応える余裕が無い。
シグナムは念話を続ける。

《そのままで聞け、今のお前では3体を倒すのは無理だ。おそらく攻撃を撃てるのは後1度という所だろう?》

後方にジャンプし、ようやく炎から逃れたゼロは、巨大な水しぶきを上げて海面に降り立ち距離をとりながら、

《何が言いてえ…?》

《今此処に居る者で奴らを1撃で倒せる者は居ないが、皆で1点集中攻撃をかければ倒せる可能性が有るという事だ…》

ゼロはかろうじて攻撃を避けながら、

《こんな奴ら俺1人でも…》

《意地を張っている場合では無かろう!お前には大勢の命を救う使命があるのだろう?ならば成すべき事を果たせ!》

その言葉は効いた。色々と未熟なゼロではあるが、命を救うというウルトラマンの使命だけは忘れない。今は超獣を必ず倒す事が先決だ。

《…分かった、少し待ってろ》

《うむ…》

シグナムの心なしか嬉しそうな返事が帰って来た。
ゼロが人命最優先の為、すぐさまプライドをかなぐり捨てたのが分かったからだ。

彼は間違っても強いだけの戦士では無かった。
ゼロは思考をフル回転させて現状を分析する。

（撃てるのはせいぜい後1発『ウルトラゼロ・ブレスレット』を使っても打ち漏らす可能性が高い…そうなると…よし！）

思い付いたゼロは、なのは達に呼びかけた。

《おいなのは、そこの子供、管理局手を貸せ！お前ら俺の攻撃に乗せて一番強い攻撃を撃て！それしかあいつらを倒す手は無い！》

《ゼロさん、僕ユーノですっ》

そこの子供と呼ばれたユーノが慌てて念話を送る。

《お前、ユーノだったのか…？》

ユーノの事を喋るフェレットだと思っていたゼロは驚いた。続いてなのはが応える。

《分かりますした、今そっちへ行きます。クロノ君もいいよね？》

ユーノの肩を借り、回復してきたクロノも苦笑いし、

《それしか無いようだね…アースラにもこの状況を何とか出来る援軍は居ない…分かった！》

武装局員が何人来ても死人の山が出来るだけだろう。
だからクロノは応援を頼んでいない。アースラとの連絡もとれないが…

本来なら管理外世界の事は関係ないと、立ち去っても良い筈だが、クロノはそんな冷血漢では無い。

《よし！まず俺が3匹を動けないようにする。そこを狙って撃ち込む俺の攻撃にお前らの攻撃を乗せろ！》

《はいっ！》

《分かった！》

《2人は僕がガードします！》

なのは達がミサイル群をかいくぐってゼロの元に集まった。

《私も加勢しよう…》

シグナムの念話だ。ゼロはクロノ達に気付かれない様にテレパシーで、

《おい、いいのか？管理局が居るんだぞ》

《心配無い、今此処は色々なものが飛び交っていて魔法反応を探知出来ない、それにその2人と同時に撃てばまず分からん、1人でも多い方が良かろう…》

《分かったシグナム頼むぜ！》

《任せておけ…》

不敵に笑って返事をする、高揚している様だ。根っから戦うのが好きらしい、ゼロの戦闘を見て火が点いた様だ。

シグナムは木陰で騎士甲冑を纏う。

赤いインナーに白地のジャケット、同じく白地に赤を所々にあしらったスカート状のアーマーの白い剣士といった出で立ちだ。

シグナムの専用剣型アームドデバイス『レヴァンティン』に、弾丸に似た魔力を込めたカートリッジを装填する。

これは彼女達『ヴォルケンリッター』の使用魔法『古代ベルカ式』と呼ばれる魔法方式独特のものだ。

なのは達が使っているのは『ミッドチルダ式』と呼ばれる魔法方式で汎用性に富んでいるが、古代ベルカ式は近接戦闘に特化し『カートリッジシステム』という独自のシステムを持つ。

これは魔力を込めたカートリッジをデバイスに装填、一時的に魔力を増大させる一種のブースト機能で、扱いが難しくあまり出回っていないものである。

念の為シャマルに作って貰っていたものだ。シグナムは持って来て

いて正解だったと思う。

「レヴァンティン『シュツルムファルケン』行くぞ…」

《Ｂｏｗｇｅｎ　Ｆｏｒｍ.》

レヴァンティンが応える。シグナムはレヴァンティンの柄に鞘を組み合わせ弓に変化させた。

近接戦闘に特化した彼女の有一の遠距離攻撃『シュツルムファルケン』である。

《ゼロ…こちらもいつでも行けるぞ》

３匹の超獣の攻撃をやり過ごしながら、シグナムの念話を受け取ったゼロは行動を起こす。

「行くぜ！なのは、ユーノ、管理局！！」

「「はいっ！」」

「クロノだ…頼んだぞ！」

逃げ回っていたゼロは方向を変え、鯨の様に水柱を上げながら陸地を背にした。

なのは達もゼロの手前横に移動する。

「来やがれ！超獣共！！」

バキシムのロケット弾、ベロクロンのミサイルの雨の中、ゼロは左

手首の『ウルトラゼロ・ブレスレット』を投擲した。

ブレスレットは高速で飛びながら空中で変化し、巨大な光の鎖となると3匹の超獣をまとめて縛り付けた。

もがく超獣達、何とか拘束から逃れようとする。ゼロは頭部のゼロスラッガー2本を外した。

（今のエネルギー残量で一番効果的な使い方は…貫通力だ。細く鋭く、3匹をまとめてぶち抜く！！）

ゼロはスラッガーを連結させる。スラッガーは光に包まれると変形し数倍の長さの弓の形になった。

《ほう…ゼロも弓を持っていたのか…》

シグナムがゼロの弓を見て念話で話し掛ける。

《こっちのは一度も使った事は無えんだが…今の状況にはピッタリだ》

《ふっ…弓矢の同時射出と行くか…》

《おう！遅れるなよ！》

ゼロは最後のエネルギーで光の矢を作り出した。光の矢をつがえ巨大な弓をぎりぎりと引き絞る。

カラータイマーの点滅が限界だ、保って後数十秒！

「行くぜ！合わせろよ！！」

ユーノに防御して貰い、なのはとクロノも攻撃の為のチャージを終える。

シグナムも魔力で作り出した矢をつがえた。魔力をレヴァンティンに注入したカートリッジが排出される。

《ｓｔｕｒｍ　ｆａｌｋｅｎ》

同時にゼロの巨大な弓の弦が極限まで引き絞られ、光の矢がひときわ輝いた。

「ぶちかませ！『ゼロ・アークシュート』！！」

「翔けよ！隼っ！！」

「全力全開！『スターライトブレイカー』！！」

「『ブレイズキャノン』！」

ゼロの光の矢にシグナム、なのは、クロノの光が合わさった。

超速で撃ち出された矢は４色の光の奔流となって超獣達に突っ込み、獲物に向かって降下する隼のごとく一気に３匹の胴体をぶち抜いた。

「グガアアア…」

３匹は断末魔の声を漏らす。腹に風穴を開けられ、同時に盛大に海に倒れ込む。巨大な水しぶきが舞い上がった。

内部機関に致命的な損傷を負い大爆発を起こす。

３匹まとめての爆発は凄まじい、爆風と天まで届きそうな黒煙が上がった。

爆発の煙で視界が悪い中、なのは達は喜び合っていたが、ふと気付くとゼロの巨大な姿は何処にも見えなくなっていた。

ーーーーーーーーーーー

木陰でシグナムは騎士甲冑を解き、ゼロが戻って来るのを待っていた。

煙が漂い薄ぼんやりとした景色の中、シグナムの耳は足音を捉える。

煙の中に人影が見える、ゼロだった。平気を装って歩いて来るが疲れきった顔に足元もふらついている。

「ゼロ…ご苦労だったな…」

シグナムがねぎらいの言葉を掛ける。ゼロは無理してふてぶてしく笑い、

「…何てこたあ無えよ、こんぐれえ楽勝だ…」

そう強がってシグナムに近付くが…

「おっ…？」

膝が疲労でカクンッと崩れ、そのままシグナムに倒れ込んでしまう。
とっさに抱きとめるシグナム。ゼロは彼女の胸にもたれる形になった。

（むにゅっ）

ゼロの顔が何とも柔らかい大きな2つの物体に包まれた。

「お…おい、ゼロ…？」

顔を赤くしシグナムはゼロに呼びかけるが、

「…悪い…さすがに、もう体が言う事を聞かねえ…」

もう限界だったゼロは動けない。シグナムはとりあえず倒れない様に支える。
ゼロは彼女の胸に顔を埋めながらぽつりと、

「…助かった…あのままだったら駄目だった…1人でも欠けてたら倒せなかった…」

「そうか…」

珍しく素直なゼロにシグナムは苦笑してしまう。
しばらく静かにしていたゼロだが不意に、

「…シグナムの胸はデカくて柔らかくて気持ちいいな…」

「なっ！？」

あまりにストレートな発言に思わず固まるシグナム。
だが直ぐに、ゼロの事なので変な意味では無く、感じたままを言っているだけだと分かったのだが動揺して、

「あ…主はやてが最近お気に入りでな…よくマッサージをされるのだ…」

と返事にもなっていない事を言う。ゼロは薄く笑って、

「じゃあ…たまに俺にもこうさせてくれよ…シグナムの胸すげえ気持ちいいから…」

シグナムは迷ったが、邪心のかけらも無いゼロの目をチラ見した後、頬を染め顔を逸らして、

「…おっ…お前の好きにするといい…」

気力を振り絞って何とか返事をした。言いながら、何を言っているのだ私は？と混乱してしまう。

あたふたしてしまうシグナムだが、ふと気が付くとゼロの反応が無い。

「…ゼ…ゼロ…？」

シグナムがゼロの顔を覗き込むと、気持ち良さげな顔で気を失っていた。
彼女は意識を失ったゼロの安らかな顔を見ながら、

（何とも仕方のない男だ……まったく、最初に会った時から、お前には驚かされてばかりだな…）

自然に顔がほころんでいた。今までの生活の中でゼロが実はとても優しい男だという事は分かっている。見た事も無い程に。
そして今回シグナムはゼロの決死の戦いを見た。

何度もの危機を乗り越えたゼロを支えたのは、命を救いたいという彼の優しさという本質故だろう。

ウルトラマンなる種族としてはまだまだ未完成なのだろうが、その本質と戦闘能力は誠の戦士の名に恥じないとシグナムは思った。

何か急にゼロを抱きしめたい衝動に駆られた彼女は頭をブンブン振る。

（何を考えているのだ私は！？）

戦闘マシーンとしてのみ永い旅路を過ごして来た彼女は、今の自分の感じた事の無い心の動きに焦る。

火照った顔でその考えを振り切り、シグナムはゼロを抱え上げた。

女性にお姫様抱っこされるという、いささか屈辱的な格好になったゼロと共にシグナムは皆が待つ八神家へと帰って行った。

その場面を遠くから見ている者があった。
シグナムが尾行を警戒しているので、後をつけるのは無理の様だが、そいつは少年に見覚えがあった。
フェイト達を監視していた時に接触していた少年だとそいつは確信する。
（ククク…アイツ、ウルトラマンダッタノカ…）
そいつはゼロが変身を解く所を見ていたらしい。
（プレシア様ニ報告セントナ…）
そいつ、フードの人物は人間では有り得ない程の大きな丸い目を赤く輝かせ、姿を消した。
「あ～あ、間抜けな奴だ…バレちまったじゃねえか」

一部始終を見ていた黒づくめの青年は面白そうに言う。

「まあ…いい感じてごちゃごちゃして来たしな、遊びはこれ位にしとくか…向こうの位置も分かった事だし…頼まれものもそろそろやらねえとな、行くぞ『ＩＩ（ツヴァイ）』」

ダークロプスは巨大な首で頷くと浮遊を止め飛行を開始する。

青年は猛烈な風圧の中、髪と服をばたつかせながらポケットに手を入れ、何でも無い様にダークロプスの手の上に立っていたが、ふと振り返ると、

「まだまだだな…虫けら共の力を借りてる様じゃ、俺どころかアイツの足下にも及ばないぜ…」

青年はそう呟いた。ダークロプスはそのままスピードを上げ、空の彼方へ消えて行った。

つづく

第１６話　超獣対魔導師対宇宙人や（後書き）

今回ゼロの使った技『ゼロ・アークシュート』はＮＧ版の武器で本編では使っていませんが、冬の映画で別のバカでかい…が、ネタバレになるので此処までにします。
今回これを使ったのはシグナム姐さんの『シュツルムファルケン』とのダブル撃ちをやってみたかったんです。それだけだったんです…（最強光線ゼロツインシュートも出してないのに）笑ってやって下さい。

さて次回は、まもなく無印編も佳境に入るのでその前に息抜きのバカっ話です。
では次回１６．５話『はやての願いや』でお会いしましょう。

第１６．５話　はやての願いや（前書き）

今まで（珍しく）バトル続きだったので今回は幕間のお話といったところです。
では第１６．５話です。

第16．5話　はやての願いや

ようやくゼロとシグナムは八神家に帰って来た。
駆け寄るはやて達、ゼロは意識を失ったままシグナムに抱きかかえられている。

「ゼロ兄大丈夫なんか？」

はやては気絶しているゼロを心配して顔を覗き込むが、何かやけに幸せそうな顔をしている気がした。

「心配は無いと思います主はやて、力を使い果たしただけの様ですから…」

ゼロを抱いたまま微笑んでシグナムが答える。
それではっ…、という事で部屋に運びベッドに寝かせる。
そこではやてが深刻な顔で、

「さすがに汗と海水で濡れとる。着替えさせんと風邪引いてまうわ…」

それを聞いて固まる女性陣。はやては車椅子をベッドの横に着け、

「誰か手伝ってくれへん？私1人だと無理や」

固まっていたシグナム、シャマル、ヴィータだが、シグナムが意を決し頬を染めながら、

「あ…主にその様な事をさせる訳には行きません…ここは将である私が…」

するとヴィータが頭の後ろで腕を組み、さも面倒臭そうに、

「将は関係ねえだろが…シグナムは結構活躍したんだろう？しっ…仕方無えな…あたしがやってやんよ…」

ヴィータは、何だかんだで仲のいいゼロの為に何かしたいのだろう。そこで今度はシャマルが手を挙げ、一歩前に出る。

「そっ、そういう事なら風の癒やし手の私が一番だと思うんですけど…」

こういう時、あまり前に出て来なそうなシャマルの発言をいぶかしむシグナムとヴィータ。

「何だシャマル珍しいな、お前が言い出すとは…」

シャマルはちょっと頬を膨らませて2人を見ると、

「…だってゼロ君は優しいもん…シグナムもヴィータちゃんも私が失敗するとドジっ子シャマルとか言うだけなのに、ゼロ君は仕方無えな…とか言ってちゃんとフォローしてくれるのよ…」

とても嬉しそうに微笑むシャマル。言葉に詰まる2人。

今八神家の家事は、はやてとゼロとシャマルとで分担している。シャマルは天然なのか料理の腕が致命的に残念だったり、たまにドジをしでかしたりするのだ。

そんな中家事が不得手で大した手伝いも出来ず、はやての護衛に着くか鍛錬をしている以外は、でんっと座ってリビングの主と化しているシグナムと、ひたすら子供のごとく遊びまくり小学生のお手伝いレベルのヴィータは沈黙する。

しかしここで引くと負けな気がする2人は食い下がった。

はやてはその様子を楽しそうに見ている。

みんな倒れるまで街を守り抜いたゼロを少しでも介抱したい様だ。

みんなでわいのわいの言い合っていると、

「…俺がやろう…皆は部屋を出ていてくれ…」

と落ち着いた渋い声が聞こえた。みんなが振り向くと、久々に人間形態をとったザフィーラである。

不満げにブーたれる3人に、

「ゼロも気を失っている間に、異性に着替えさせられたりしては男として厳しかろう…さあ、みんな出るんだ…」

正論であった。さすが八神家での一番の常識犬?である。

さすがは同性である。お陰でゼロは恥辱プレイを味あわなくて済んだ様だ。

せき立てられ渋々部屋を出る3人、ザフィーラがふとベッド横を見ると、はやてはニコニコしてちゃっかり居座っている。

「……」

ザフィーラはため息を吐くと、

「…出来れば、主にもお願いしたいのですが…」

「は～い…」

さも残念そうにはやても出て行った。

さて部屋の前で着替えが終わるのを待つ女性陣。各頭の中を変な妄想が渦巻いていた。

「こういう状況…何かで読んだ気がするんや…」

はやてがポツリと呟いた。シグナムがいぶかしげに質問する。

「主はやて、何かあるのですか？」

「考えても見…密室で男が2人っきり…何か間違いが起こるみたいなのを読んだ覚えがあるんよ…」

真面目な顔で重々しく語るはやて。どうやら小学生には刺激が強すぎるものを読んだらしい…

頭の中の妄想に明確な方向性を与えられ3人は、ガ～ンッ！と衝撃を受けた顔をする。

シャマルが両手を頬に当て、まあっという風に顔を赤くし、

「じゃあ…まさか…今部屋の中は…」

ヴィータはごきゅっと唾を飲み込み、

「…くんずほぐれずの……」

シグナムが顔を真っ赤にして、

「阿鼻叫喚…では無く、あ…主、何てものを読まれているのですか…！？」

慌ててはやてを止め様とするが動きが弱い。
そんなアホな事で盛り上がる女性陣の背後に、ぬうおおお～んっ、という擬音がぴったりな腐ったオーラが見えた気がする。
声がデカいのでゼロを着替えさせているザフィーラにも丸聞こえだ。

「…何をやっているのだか……」

付き合っておれんと、ため息を吐くザフィーラである。
我らはもう少し堅苦しい筈だったが…とザフィーラは苦笑いする。
主とゼロの影響か？と思うが悪くは無いと感じる彼が居た。
少なくとも以前の様に、諦めと虚無感しかない人生より遥かにいいではないか…と。
しかし…と寝ているゼロを見て今意識があったなら、

「無えよ！なあ馬鹿だろ？お前ら馬鹿なんだろっ！？」

と怒り狂っただろうと想像がつき、珍しく緩みそうになる口元をこらえるザフィーラだった。

ドタバタも落ち着き八神家に夜がやって来た。平和な夜だ、一歩間違えば壊されていた筈のものだ。
（街の人は守られた事も気付いてないんやろうな…それも今、私の前で寝とる人にやなんて……）

枕元の電気スタンドのみの暗めの部屋の中、はやてはこんこんと眠り続けるゼロの横顔を見つめながらそう思った。
時刻は１１時を回った所だ、ゼロはあれからずっと眠り続けている。
寝る前にゼロが気になったはやては様子を身に来たのだ。
少しだけと思っていたが、寝汗を拭いたりゼロの顔を眺めていたら結構な時間が経っていた。

「…はやて…？」

小声ではやてを呼ぶ声がし、ドアを開けて寝巻き姿でのろいウサギを持ったヴィータがペタペタと部屋に入って来た。眠そうに欠伸をしながら、

「はやて…まだ寝ないのか…？ゼロはもう大丈夫だろ…？」

「うん…そやね…ヴィータは先に寝とり、私はもう少し様子見したら行くわ…」

ヴィータは仕方無いなと苦笑し、

「分かった…先に寝てる」

そう言うとベッドに近寄り、ゼロの寝顔を見て頬を指で突っついて、

「…気持ち良さそうに寝やがって…」

苦笑すると、ペタペタと足音を起てて部屋を出て行った。

それからしばらく薄明かりの中ゼロの顔を見つめていたはやてだが、ふとゼロの方に手を伸ばし頬に触れた。

ゼロは安らかに眠ったままだ。はやてはしばらくその頬を慈しむ様に撫でていたがゼロが何やら寝言を言っているのに気づいた。耳を澄ましてみると、

「…親父……」

とつぶやいるのが聞こえた。はやては軽くショックを受ける。ゼロは元々この世界に迷い込んで来たのだ、当然元の世界には家族を残して来ているという事に思い当たったからだ。

（…やっぱり帰りたいんやろか……？）

ゼロの頬を撫でながらそんな事を考えていると不意に、

「…今日は…はやてのお陰で助かった…」

と呟く様な声が聞こえた。見るとゼロが目を開けはやてを見上げている。

「堪忍な…起こしてしもて…」

はやては慌てて手を引っ込めて決まりが悪そうにする。ゼロはそんなはやてに、

「…たまたま目が覚めただけだ…気にすんな…」

微笑して答える。ゼロの気遣いを嬉しく思いながら、何で感謝されるのか分からないはやては、

「…私…別にお礼を言われる様な事しとらんよ…？」

不思議そうに尋ねる。ゼロはまだダルいらしく気だるげな笑いを浮かべ、

「…今日、逃げない、俺を信じるって言ってくれたろう…？」

はやてはもじもじして複雑な顔をし、

「…あ～…あれは…ちょう頭に血が昇ってしもて…　後々考えてみると…みんなにもマスターとして無責任やったなあ…と思っとるけど…ゼロ兄ならやってくれる思て…」

色んな感情がごちゃごちゃしている様だ。

ゼロは情けなさそうに眉をひそめ、

「…津波を受け止める前に…ちとびびっちまってな…情けねえ…」

「ゼロ兄が…？」

はやては意外そうだ。戦いに関してゼロは怖いもの無しだと思っていたからだ。

ゼロは布団から右手を出して顔の前にかざすと、

「…俺のこの手に直接命がかかってるって思ったら…急に怖くなった…情けねえ話さ……」

「そないな事あらへん…」

はやては優しく微笑んだ。かざしたゼロの右手をそっと握り、自分に寄せると、

「…それはゼロ兄が優しいからや…命の重さを知っとるから怖くなるんや…そこで何も思わんような人は命の大切さを分かっとらんと私は思う…」

ゼロは苦笑する。本当にこの子は俺がマイナス思考に陥ったりするといつも前向きな言葉で励ましてくれるなと思う。

「…はやてが逃げねえ、俺を信じるって聞いて腹が据わったよ…そのお陰でやり遂げられた…　ありがとな…　はやて…」

はやては照れて、えへへ…　と笑うが、ふと思いついてニンマリす

ると、

「今日は久しぶりにゼロ兄と寝るわ」

「お…　おい、みんなに止められてるだろうが？」

ゼロは慌てて止める。一緒のお風呂と並んで添い寝も駄目でしょうとなり、普段はやてはヴィータと一緒に寝ているのだ。

「かまへんかまへん」

はやてはそう言うと、車椅子から器用に手と上半身のみの力でベッドに潜り込んだ。
ゼロも本調子では無いので抵抗が鈍い。
はやては困ってしまうゼロの横に体を着けると、にっこり笑って、

「たまにはええやないの、前はけっこう一緒に寝てたんやし…」

ゼロはこ難しい顔をして、

「…でもよ…それは知らなかったからで…」

はやてはゼロの顔に自分の顔を近付けて、反論する間を与えず優しく畳みかける。

「みんなが堅すぎるだけや…　各家庭には色んなその家だけのやり

方っちゅうもんが有るんや…　せやから、そないな事気にする必要は無いんよ…」

へ理屈もいいとこなのだが、優しい口調でさも当たり前の様に言うのがポイントである。

「…そ…そうなのか…？」

案の定引っ掛かるゼロである。

一般常識はある程度身に付いても文化というのがゼロにはくせ者で、所によって変わる常識やＴＰＯというものが有り把握しきれないのだ。

ゼロを騙くらかすのはその辺を突いてやるとちょろい。

優しく微笑むはやてに狸の耳が付いている気がするが、きっと疲れてるせいだと思うゼロである。

「久々のゼロ兄の匂いや～」

はしゃいでゼロの匂いを嗅いだり胸に顔を埋めたりをしばらく続けていたはやてだが、不意に顔をを近付け真剣な眼差しで、

「…ゼロ兄…聞…」

何か言いかけたが止めてしまい顔を逸らした。

何か言いにくい事なのか、

「どうしたはやて…言ってみろよ…」

ゼロは先を促す。

「……」

はやてはそれでもしばらく悩んでいた様だが、意を決してゼロの目を見て、

「…ゼロ兄…元の世界に戻りたいんか…？」

「…どうした？いきなり…」

いきなりの意外な質問に頭を捻るゼロである。

はやてはちょっと言いにくそうにしたが、

「…ゼロ兄寝言で親父って…父さんの事呼んどったから…」

「なっ…！？」

動揺するゼロ、寝言で親を呼んでいた上、他の人に聞かれるというのはかなり恥ずかしい…

彼には少々ファザコンの気が有るのだ。

動揺するゼロを見、はやては少し淋し気に目を伏せて、

「…せやから…父さんに会いたいんやないかと思て…」

それははやてにとって、とても怖い質問であった。

ゼロが約束を破る訳は無いと信じているが、自分との約束のせいで帰りたいのを我慢しているのではないかと思ってしまったのだ。

「…はやては考え過ぎだ……」

そう言うとゼロは彼女の栗色で絹糸の様に艶やかな髪をクシャクシャと撫でた。
暗めだったはやてはくすぐったい表情になる。

「…確かに親父には会いてえけどよ…別に無理はして無えよ…」

ゼロは優しく語りかける。はやてはゼロの目を見つめ、

「…ほんまに…？」

と恐る恐るといった風に問う。
ゼロは照れくさそうに、

「ああ…只…親父にみんなを会わせてえなと思ってな…さっきもそんな夢を見てた…「これが俺の家族だ親父っ」てな…きっと喜ぶぜ…親父の奴…」

疲労のせいか普段より穏やかに、でもやっぱり照れくさそうなゼロの表情にはやてはドキリとしてしまい、衝動を抑えられなかった。

（ほんまに…この人は…）

はやてはゼロの首に両手を絡ませた。長い睫毛に潤んだ大きな瞳がとても近くなる。

「へっ…？」となって何か言おうとしたその唇を彼女の唇が塞いでいた。
とても柔らかく温かいはやての唇の感触をゼロは感じた。
しばらくそうしていた彼女はゆっくりと唇を離した。

「…は…はやて…？」

ポカンとするゼロ。はやては頬を染め、イタズラっ子の様な表情で人差し指を唇に当て、

「みんなには内緒やよ…私のファーストキスの事…」

「な…ないしょ……？ふあすときす…？」

ゼロははやての言葉をオウム返しで繰り返すが声がうわずっている。そんなゼロの様子を見てはやては、

「…ゼロ兄が悪いんやよ……つい、やってもうた…」

今更恥ずかしくなったらしく、顔を真っ赤にするとそのまま誤魔化す様に抱きついた。

混乱するゼロ、どうリアクションをとったらいいか分からない。（俺何か悪い事したか？）などと間抜けな事を思ってしまう。

はやても照れてゼロの胸に顔を埋めたまま、「恥ずいわあ…」やら何かごにょごにょ呟いている。

ゼロは混乱する頭でどうするか必死で考え、とりあえず落ち着かせようと頭を撫でてやる。

しばらく続けていると、抱きつく力も弱くなり呟きも徐々に低く静かになっていった。

気付くとはやての乱れた呼吸が規則正しくなっている。

「はやて…？」

見ると安らかな天使の様な顔で寝入っている。
昼間色々気を張る事があって疲れていたのだろう。ゼロはそんなはやての寝顔を見て、

（…ったく…何なんだか……からかうんじゃねえぞ…）

と苦笑するしか無い。そうしている内に強い眠気が襲って来た。
こちらも疲労が抜けきっていない、墜落する様にゼロは眠りに落ちて行った。

次の日の早朝、その有り様を見てシグナム、ヴィータ、シャマルの額に青筋が浮いていた。
気になった3人は早起きしてゼロの様子を見に来、ベットに半裸で抱き合って眠るゼロとはやてを発見した。
ゼロは上半身裸で、はやてもパジャマのあちこちがめくれてボタンも外れている。
実際の所、ゼロが半裸なのは寝汗でシャツが濡れてしまい寝ぼけて脱いだだけである。

はやても派手にゼロにじゃれついてそのまま寝てしまったというだけなのだが、誤解を招くには充分すぎる光景であった。

周りの騒ぎにはやてが目を覚ました。
眠い目を小動物のようにこすりながら体を起こす、周りを見て、

「…あれ…？おはようさん…みんな今日はえらい早いな…」

ぽわ～んと聞くが、シャマルはとても悲しそうな顔をして、

「…可哀想なはやてちゃん…この年でこんな…さあはやてちゃん、このケダモノから離れましょうね…」

と、まだ寝ぼけているはやてをベッドから抱き起こし、車椅子に乗せると素早く部屋を退避した。
周りの慌ただしさにさすがに目を覚ますゼロ。

「…ん～…何だ…？」

目をしょぼつかせながら上半身を起こし顔を上げる。
その眼前には仁王立ちのシグナムとヴィータが…
２人共口元をひくつかせ、目もとは濃い影に覆われて見えないのに、目の光のみが夜に灯る獣の目のようにぎらついている。
寝ぼけているゼロは、そんな２人の様子には気付かず、

「…２人共…どうかしたのか……？」

緊張感の無い間抜けな声を出す。
それがまた感に触ったのか、シグナムは額の青筋をを更に浮き上がらせて、

「…自分の胸に聞いてみてはどうだ……？」

ひどく押し殺した声で言う。
頭に霞みがかかっているゼロには、まだ分からない。

シグナムは視線を落とし肩を振るわせて、

「…昨日の事があったから安心していたというのに……まさか…年はも行かぬ主に手を出す様な見境無しの獣だったとは……今日から改名して『ウルトラマンゼ・ロリ』にすべきだな…！」

まるで地獄から響いて来る様な声で呟く、正直とても怖い。
ヴィータも凶暴な笑みを浮かべ細い首をごきごき鳴らし、汚らわしいものを見るかのように見下ろし、

「…処刑確定だな……」

状況をまったく判って無いゼロの前で、シグナムはレヴァンティンを、ヴィータはグラーフアイゼンを手にしていた。

ゼロの様子を身に来たザフィーラは、直ぐに状況を察し2人を止め様としたが、今のシグナムとヴィータは最早言葉など通じる状態ではなかった、目が逝ってしまっている。

（…すまんゼロっ…死ぬなよ…！）

ザフィーラは早々に諦め、部屋を飛び出した。

「この淫獣があっ！地獄へ堕ちろおおおおーっ！！」

後ろの方でシグナムとヴィータが吼えている。
何か固い物が肉の塊を打つ嫌な音がしたかと思うと絶叫が上がり、ガラスが割れる音がした。

絶叫が遠くなって行く。ザフィーラがふと廊下を見るとシャマルが緑色に輝く魔法陣を展開している。
それは『旅の鏡』というもので空間をねじ曲げ、遠く離れた相手を攻撃出来る魔法である。

シャマルは黒い笑みを浮かべて、廊下にあったゴツい花瓶を手にすると魔法陣に花瓶ごと手を突っ込んだ。

すると遠ざかる絶叫が、「うおっ？胸から手が！？」と言った瞬間、ゴガッというゴツい音がザフィーラの耳に聞こえた後絶叫がぴたりと止んだ。

こうして最強のウルトラ戦士ウルトラマンゼロは八神家女性陣によりトドメを差されたのである。

つづきます

第16．5話　はやての願いや（後書き）

え～バカっ話でございました。
これから最終決戦までシリアス展開になるのでつい……反省しております。

次回から無印編は佳境に入ります。
ゼロに降りかかる危機とは？

タイトルでネタバレになるかな？と思いましたが、毎回サブタイトルを載せているので大丈夫かと。
それにこの手のタイトルは未だにドキリとしてしまうのです。

さすがに重要な事を言ったり、『〇〇は死んでしまうのか！？続く』とやっておいて、予告で『次回〇〇死す！』なんてずっこけそうなのはやりませんが…（たまに特撮であるんです…涙）

という訳で次回
『奪われたウルトラゼロアイや』
でお会いしましょう。

第17話　奪われたウルトラゼロアイや（前書き）

タイトルでバラしてますが、ヒーローが変身道具盗られたり、主役ロボット奪われたりの話って分かっていてもドキドキしてしまいませんか？
では第17話です。

第17話　奪われたウルトラゼロアイや

高次元に浮かぶ『時の庭園』寂寥感さえ感じられるただっ広い墓所の様な場所…
その中の生活感が感じられない寒々とした広い部屋から鞭が肉を打つ音と少女の悲鳴が響く。

天井からぶら下げられたフェイトは母から執拗な暴力を受けていた。
プレシア・テスタロッサは能面のごとく表情を消した顔に狂気をにじませ、

「…酷いわフェイト…アナタはそんなに母さんを悲しませたいの…!?たった3つしか手に入れられないなんて!!」

そう言うと、もはや鞭などでは気が済まないのか、フェイトの拘束を解き床に転がすと、うずくまる彼女のか細い体を執拗に蹴り上げ踏みつけにする。

プレシアの硬い靴が顔面に腹に容赦なく打ち込まれた。フェイトにはもう悲鳴を上げる気力さえ無い、壊れた人形の様に床に倒れ伏している。
最早、折檻や虐待などという言葉では生温い、剥き出しの暴力であった。

プレシアはそれでもまだ気が済まないのか、更にフェイトを蹴り上げ様とするが、

「…プレシア様…ゴ報告ガ…」

例のフードの人物が音も無くプレシアの後ろに立っていた。
プレシアは唾でも吐きかけんばかりに倒れているフェイトを一別すると、フードの人物の報告を聞く。
念話で話し合っているらしく床に転がるフェイトには何を話しているのか判らない。

《…あれで片付けられると思っていたけど…以外としぶといわね…》

《プレシア様…殺シテシマイマショウ…次元振騒ギヲ起コシテ時間稼ギヲシタオ陰デ、コチラノ態勢ハ整イマシタ管理局ハ問題デハ有リマセンガ、ウルトラ族ヲ生カシテオクト面倒ナ事ニナルカモシレマセン…》

プレシアは無表情な顔に、にたりと嫌な笑みを浮かべ、

《心配は無用よ…たかが名も知らない雑魚1匹でしょ…？少しはやる様だけど…この遠い世界では仲間を呼ぶ事も帰る事も…私に太刀打ちすら出来ない…そうでしょう…？》

《デハ…放ッテオクノデ…？》

プレシアは少し思案したが、何か思いついたらしく邪悪な笑みを浮かべる。

《ただ殺すのはつまらないわ…どうせなら自分の無力さを呪いながらどうする事も出来ず、あの世界と一緒に死んで貰うとしましょう…》

フードの人物はフード奥の赤い目をぎらつかせ、

《ソレヲ、ドウヤッテ…？例ノ怪獣ヲ送リ込ンデ来タ敵ノ事モ有リマス…コレ以上超獣ヲ消耗スルノハ…》

プレシアは床に倒れているフェイトを冷たく見下ろし、

《報告通りなら、とても簡単にあいつを無力化出来るわ…私の可愛い娘にやらせればね…！》

そう言うとプレシアは倒れているフェイトに歩み寄り優しく抱き起こした。

呻くフェイトは驚く、人が変わって以来母親がこんな事をするのは初めてだった。

プレシアは痣だらけになったフェイトの顔を優しく撫で、

「…フェイト…ごめんなさいね…でもこれもアナタの為なの…分かってちょうだい…」

能面の様な顔に悲し気な表情を浮かべて言う。

久しぶりに掛けられる母の優しい態度に戸惑いながらも、嬉しさが込み上げて来るフェイトは弱々しく笑い、

「…分かってます母さん…私が不甲斐ないから…」

プレシアは満足気に微笑み、フェイトを立たせながら、

「…フェイトは優しい子ね…じゃあ、『ジュエルシード』の最後の一つを探して来てちょうだい…これは最低限よ…」

「…分かりました」

フェイトはふらつきながらも立ち上がり、しっかりと返事をする。
そんな彼女にプレシアは何気なく、

「…そうそう…そう言えば向こうの世界でお世話になった子がいるそうね…？」

と切り出した。母親の質問の意味が一瞬判らなかったフェイトだが、直ぐにゼロの事だと思い当たる。プレシアは、

「…それでフェイトにお願いがあるのよ…」

寒気がする程残忍な笑みを浮かべたが、久しぶりにプレシアに優しくされて舞い上がっているフェイトには気付く事は出来なかった。

アルフは怒り狂っていた。もう我慢も限界だった。

彼女は元々真っ直ぐで善良な性格だ、今まで必死に我慢して来たのはフェイトの為だった。

アルフは生まれて間もない子狼の時に死病に掛かり、群れにも見捨てられ死を待つだけだった所をフェイトに助けられ使い魔になった。

フェイトの為なら命も惜しくはない。だから今まで我慢してきた。

しかしプレシアの行動はあまりにも酷すぎた。
無理難題を押し付け、挙げ句の果てに必死で頑張ってきた娘へのこの仕打ち…
ようやく開いたプレシアの部屋の扉から中に入ったアルフは、プレシアに反逆する覚悟を固め始めていた。
このままではフェイトが不幸になるだけだと思ったのだ。
急いで部屋に入り、倒れている筈のフェイトの姿を捜すと、意外な事に彼女はしっかり立ってアルフの方に歩いて来た。
体や顔に痣が有る。虐待を受けていたのは確かなのだが、心なしか嬉しそうに見えた。アルフは駆け寄り、
「大丈夫かいフェイト、ああ…酷いよ…あの鬼婆…よくも…！」
無残な姿に悔し涙を浮かべ怒るアルフにフェイトは痣だらけの顔に笑みを浮かべて、
「…平気だよ…それに母さん、今日は優しくしてくれたんだ…」
とても嬉しそうに言う、その顔を見てアルフは泣きたくなった。
そんな酷い目に遭っているのに、この子は…
プレシアが優しくしたなどというのは疑問に思ったが、
「へ…へえ～そうなのかい…」
とりあえず相づちを打つ。フェイトは恥ずかしそうに顔を伏せると、

「…それでね…母さんが向こうに行った時に…私達がお世話になった…ゼロさんにお礼がしたいって…何か用意してくれるって…」

「えっ！あの女がっ！？」

驚いてしまうアルフ、違和感を感じる。
ゼロの事を知っているという事は見張りが居たという事か？あのフードの奴だろうか。

そうは思っても、いくらプレシアでも関係無い人間に何かするとは思えない。ゼロは全くの無関係なのだから。

それにせっかく喜んでいるフェイトに水をさす様な事を言うのも躊躇われた。
虐待は許せないが今は我慢する。

「…それでねアルフ…私の顔…酷くない…？」

フェイトは痣だらけの顔に触れ、落ち込んだ調子で言う。アルフは彼女の気持ちを察した。

フェイトにとってゼロとの事は殺伐とした向こうでの生活の中で唯一の心暖まる記憶だ。

また食事を採ろうとしないフェイトにゼロに注意された事を言うと、少しながらも口をつけたものだ。
それにアルフはフェイトがゼロから貰った携帯番号のメモを大事に仕舞っているのを知っている。

苦しい時、辛い時には意外に他人の善意や優しさといったものが支えになるものだ。
フェイトはアルフにも言わないが、その事からもゼロとの出会いを大事に思っているのが判った。

そんな中、連絡をとる事も無いと思っていた少年に再び会う事になった。
それでフェイトは年相応の少女らしく痣だらけの顔でゼロに会うのに気後れしてしまったのだろう。
そんな彼女をいじましく思ったアルフはフェイトの手をとり、

「あたしが全力で治してあげるよっ。だからそれまでに痣をみんな消そうじゃないか」

「…うん…」

フェイトはプレシアに気に掛けてもらった嬉しさで不自然な部分があるこの話を全く疑問に思わなかった。

ーーー

しかし起きてから妙に浮かれ気味のはやてがまあまあという事で、ゼロ用に朝っぱらから特大とんかつを揚げてもらってホクホク顔になる。

更に約束を破ったはやてと窓ガラスを割ったシグナムとヴィータ、花瓶を割ったシャマルの分のアイスを貰うという事でたちまち機嫌を直した。扱いやすい宇宙人である。

反省しきりのシグナム、ヴィータ、シャマルである。
シグナムに至っては正座で反省中だ。はやてはあまり反省して無い様だが…

ゼロは昨日消耗した分を取り返さんばかりの勢いだ。
太陽エネルギー補充とは関係なさそうではあるが、人としての体も消耗してしまったのだろう。

「ふう…食った食った…」

軽く5人分は平らげ、お腹をぱんぱんにしたゼロは、リビングのソファーに横になるとそのままコテンと熟睡してしまった。
行儀悪い事はなはだしいが、慣れないバリヤー操作などで消耗したのだろう。

はやて達は苦笑し、そのまま寝かしておいてやる事にした。

もうすぐ昼時という頃、ゼロは何かの呼び出し音で目を覚ました。

周りを見渡すと、台所ではやてが昼食の準備をしていて、シャマルが手伝っているのが見えた。

眠い目をこすりながら音の方向を見ると、ポケットに入れていた自分の携帯電話が着信音を響かせている。

「ゼロ兄、電話鳴っとるよ」

はやてが調理をしながら、まだ寝ぼけているゼロに声を掛ける。

ようやく自分の携帯が鳴っていると気付いたゼロは電話に出た。

「…はい…もしもし…」

「……」

何も聞こえない。おかしいなと思ったゼロがもう一度喋ろうとした時、

《…あ…あの…この間はありがとうございました…フ…フェイトです…》

眠気が一気に吹っ飛んだ。思わずガバッと起き上がる。

「おおっ！フェイトかあっ、元気でやってるか？ちゃんと飯食ってるか？アルフも元気か？」

ゼロはフェイトが自分に電話を掛けて来てくれたので、つい素で喜んでしまい普通に話し込んでしまう。

一方、ゼロからフェイトの名前が出てびっくりするはやてとシャマル。

あのフェイトから連絡が来たらしいのだから驚くのも無理ないが。

しばらくゼロは話し込んでいたが、「…いや…そんな気にすんなって」「分かった…」と言って電話を切った。

はやてとシャマルが慌ててゼロに詰め寄る。

「ゼロ兄ぃっ、フェイトって…あのフェイトちゃん?」

「ゼ…ゼロ君、い…一体どういう事なの?」

慌てる2人をなだめ電話の内容を話す。

街で偶然フェイト達と出会って知り合いになった事をシャマルに説明した。

彼女達が来る前の事なので、はやてにしかフェイト達と知り合いだという事を言っていない。

「それで、この間の事で親にお礼を持たされたから是非渡したいってよ…気にするなって言ったんだが…それで会いたいって話だ」

はやてとシャマルはこういう事もあるんだ…と感心した顔だ。

ゼロは早速出掛ける用意を始める。その様子を見て、はやては少し心配そうに聞く、

「せやけど…ゼロ兄はどないする気なんや？」

ゼロは上着を羽織りながら、

「…まずは会ってみてからだな…上手い事親の事を聞けりゃあいいが…まずは行ってみる。場合によっちゃあ後を着けるのも有りだ」

はやては不安になる。シグナム達は買い出しに出掛けて留守だ。相談した方がいいのではと思ったのだが…

「…大丈夫やろか…？何か気になるわ…」

ゼロは笑って、不安そうなはやての頭を撫でてやる。

彼女は昨日の夜の事を思い出し顔が赤くなってしまう。

「心配無えよ、立場的になのは達と敵対してるが、あの2人は悪い奴らじゃない…人を騙したり陥れたりする様な奴らじゃねえさ…」

そう言って、はやての頭から手を離す。はやてもフェイト達の人となりは聞いているので、それもそうかと思い直した。

ゼロは2人に手を振ると、

「なあに何かあっても俺は無敵のウルトラマンゼロだぜ、心配無えよ。じゃあ、行って来る」

見送る2人におどけて言うと、張り切って出掛けて行った。

フェイトとアルフは以前に出会った廃棄された工場区画でゼロが来るのを待っていた。

フェイトはプレシアから持たされたケーキの箱位の包みを持っている。

何故この場所かというと、両方共知っている所であまり人目の無い場所というと此処しか知らなかったからだ。

プレシアから、このお礼はこちらの世界では珍しい物だから、あまり他人に見られない方がいいとの事だったので。

ゼロも特に不審には思わなかった。管理局に追われている身としては人目につきたくは無いだろう。

ゼロを待つ間、フェイトはアルフにゼロとの電話の事を話していた。

「…ゼロさん、相変わらずだったよ…一度しか会ってない私達の事を本気で心配してくれてた…」

はにかんだ様子で喋るフェイト。

連絡先をもらったとはいえ、いきなり電話を掛けて大丈夫かなと思っていたが、心から歓迎されているのを感じて嬉しくなってしまった。

会えますかというお願いにも即答してくれた。そんなひとつひとつが心地良かった。
気のせいか何度も会っていて心配してもらった気がする。

いつもの淋し気な表情も薄まり、楽しそうなフェイトを見てアルフも嬉しくなる。
幾らか不審に思っていたが気のせいだったかと思う。

この調子で最後の『ジュエルシード』一つを集めれば、もうフェイトが酷い目に会う事も無い筈だ。
自然アルフの表情も明るくなった。その時に、

「おおーいっ、待たせたなーっ」

聞き覚えの有る声が聞こえた。
見るとゼロが片手を挙げてこちらへ走って来るのが見える。
久しぶりに見るゼロは、初めて出会った時と変わらない印象だったが、少し眠そうに見えた。

「2人共元気だったか？フェイトは少し痩せたんじゃねえか…？アルフもだぞ、無理してるんじゃねえか？」

会って早々2人の心配である。相変わらずのゼロに、思わず顔を見合わせ笑いそうになるフェイトとアルフだった。

一通りの挨拶を済ませるとフェイトはプレシアから持たされた包み

を差し出す。

「…これ…母さんからなんですが…ゼロさんによろしくと言ってました…」

少々緊張して包みをゼロに手渡した。彼は悪そうにしていたが、

「悪いな…こんな物貰っちまって…礼をされるような事はしてねえんだけどな…」

照れくさそうに受け取り、嬉しそうに包みを見る。

「…母さんが直ぐ中を見て貰えと…」

フェイトが言うのでゼロは包み紙を破く。

中身は可愛らしい実物の子犬程の大きさの茶色い犬のぬいぐるみだった。

フェイトはどこが珍しいのか疑問に思う。

「へえ～ぬいぐるみかあ～」

そう言ってぬいぐるみを手にした時だった。

ぬいぐるみの目が鋭く光り可愛らしい口をばあくりと開け、口内部に仕込まれた発射装置から光弾を連続してゼロに撃ち込んだ。

「ぐはあっ…！？」

体が痺れる、何か神経麻痺弾の様な物を撃ち込まれたらしい。

力を振り絞ってぬいぐるみをアスファルトに叩きつける。

ぬいぐるみは地面にぶつかると、内部メカを飛び散らし火花を散らして動かなくなった。

何が起こったのか分からず蒼白になるフェイトの前にバランスを崩しよろめく。

フェイトがとっさに支えようと手を伸ばした。その手を掴もうとして服に手が掛かる。

倒れるゼロの反動で服がずれフェイトの肩が露わになった。

「!?」

ゼロは倒れる前にはっきりと見た。惨たらしい痣や傷だらけの体を。

そのままアスファルトに倒れ込んでしまった。

意識が朦朧とし体がまったく動かない。そんなゼロに蒼白な顔のフェイトとアルフが駆け寄る。

（…罠に…嵌められた…？）

一瞬そう思ったが真っ青なフェイト達の顔を見て、

（…利用されたな…）

と直感する。フェイト達にはまったく悪意も殺気も無い、それでまんまと引っかかってしまった。

ゼロ自身にも驕りがあった。自分はウルトラマンなのだからどんな危機もぶち破れる、そんな慢心も原因だった。

「ケヒャヒャヒャヒャヒャッヒャヒャヒャヒャッ!!」

その時不気味な哄笑が人気の無い工場跡地に響き渡った。
ゼロを抱き起こそうとしていたフェイト達はハッとする。
見ると例のフードの人物が立っていた。
フードの人物はゆっくりとゼロの方に歩み寄りながら、
「オ前達…ゴ苦労ダッタナ…プレシア様モオ喜ビニナル…」
フェイトはその言葉を聞き愕然とする。信じたくはなかったが、これは母の仕業なのは間違いなかった。
「…どうして…ゼロさんが何をしたと言うの…？」
声を震わせて睨み付ける。いくら母の命令でも酷すぎた。
無関係の…それも自分達を気に掛けてくれた優しい人に恩を仇で返す形になってしまった。
フードの人物はそんなフェイトを気にも留めず、
「オ前達ガ知ル必要ハ無イ…」
そう言うと脇に居たフェイトを突き飛ばし、地面にうつ伏せに倒れているゼロを蹴り飛ばして仰向けにさせる。
「何するんだい！止めな！」
見かねたアルフが掴み掛かろうとするが、フードの人物は片手でアルフを弾き飛ばした。

「うわあっ！？」

数十メートルは吹き飛ばされたアルフはコンクリートの壁に叩きつけられた。呻いて頭を振る、しばらく動けそうにない。

フードの人物は面倒そうに片手を振るとしゃがみこんで、動けないゼロのポケットをまさぐる、異様な熱気がゼロに伝わってきた。しばらくしてその動きが停まった。目的の物を見つけたのだ。

フードの人物は内ポケットから、銀と赤と青に色分けされた『ウルトラゼロアイ』をゆっくりと取り出した。

「…き…貴様……」

朦朧としながらも取り返そうと手を伸ばすが、体が言う事を聞かない。

フードの人物は『ウルトラゼロアイ』をゼロに見せびらかす様にしながら耳元で、

「コレガ無ケレバ、オ前ハ無力ナ唯ノ人間デシカナイ…オ前ハ自分ノ無力サヲ呪イナガラ、コノ世界ト共ニ死ネ…」

ゼロは霞む目でフードの人物を睨んで、

「…どういう意味だ…てめえ…何者だ…？」

「フフフ…コノ世界ヤ周リノ次元世界ハ全テ、扉ヲ開ク為ノ贄（にえ）トナリ消滅スルノダ…」

そう言うとフードの人物はフードを捲り上げゼロのみに素顔を晒した。ゼロはその顔を見て、

「…てめえ…マザロン人…？確か死んだ筈…！？」

フードの下の顔は人間ではなかった。

人間の数倍はある球形の真っ赤な目、凶悪な牙がびっしりと生えた鮫のような口に不気味にグレーがかった体色、『マグマ超人マザロン人』であった。

怨念の塊故、完全に滅ぼす事が出来ない『ヤプール人』はともかく、その配下で『ウルトラマンA』に破れて死んだ筈のマザロン人が何故？疑問に思うゼロ。

「フフフ…蘇ッタノサ…貴様ラヘノ怨ミ…忘レテハイナイゾ…！」

悪鬼のごとく叫ぶと、動けないゼロの腹を凄まじい勢いで踏みつける。

「ぐはあっ！」

うめき声を上げるゼロ、並みの人間なら内蔵が破裂しかねない程の衝撃だった。

もう一撃加えてやろうと足を上げた時、

「止めて…！」

ゼロの上にフェイトが覆い被さっていた。
それを見てマザロン人は舌打ちすると上げた足を降ろす。
フェイトは顔を上げ、マザロン人をキッと見据えると、

「…この人が何をしたって言うんですか…？今盗った物をゼロさんに返して…！」

マザロン人はそんなフェイトを嘲る様に見ると、

「コレハプレシア様ノ命令ダ…コイツヲ持ッテ来イトナ…文句ガ有ルノナラプレシア様ニ言ウ事ダナ…ケヒャヒャヒャヒャヒャ…」

嫌らしい声でギチギチと笑った。
言葉に詰まるフェイト、マザロン人は追い討ちを掛ける様に、

「ヨクヤッタナ…オ前ラノオ陰デ事ガ、スンナリ運ンダ…プレシア様モ、サゾオ喜ビニナルダロウ…オ前ラハ残リノ『ジュエルシード』ヲ探セ…グズグズシテ、プレシア様ヲ怒ラセルナヨ！」

マザロン人はたっぷりと言葉に悪意という毒を込めてフェイトに言い残すと、きびすを返した。
その前に異様な空間の揺らぎが現れる。

「待って…！」

フェイトは後を追おうとするが、マザロン人は一顧だにせず揺らぎ

の中に踏み込むと、その姿は揺らぎと共に消え失せてしまった。
茫然と立ち尽くすフェイト。

（…母さんが優しくしてくれたのは…この為だったんだ……）

その泣き出しそうになったフェイトの顔を見たのを最後にゼロの意識は闇の中に落ちていった。

つづく

第17話　奪われたウルトラゼロアイや（後書き）

今回のウルトラ解説です。

『マグマ超人マザロン人』体内に燃え盛るマグマを持ち、指先のマグマ破壊光線が武器の異次元人です。
得意技は豊穣を願うマザロンダンスです。（本当ですよ）

ヤプール人の幹部クラスの部下らしいのですが諸説あります。
ヤプールがウルトラマンAと直接対決に敗れた後に復讐の為に色々暗躍しました。

このマザロン人、インパクト絶大な人間形態がありまして、奇怪な歌を歌いながら珍妙なダンスを踊る行者という、字で書くとただの変な人ですが、実物はかなり不気味です。

マザロン人を出すなら人間形態を出すべきでしたが、勘違いで別人だと思っていたのでこうなってしまいました。（汗）

ただ、こいつをフェイト達の前に出すとお笑いになってしまう恐れがあった気はします。

それと、犬のぬいぐるみロボット攻撃は以前ヤプール人が、Aに仕掛けた事がある戦法で使ってみました。

では次回予告です。
『ウルトラゼロアイ』を奪われたゼロは変身不能に！苦悩するゼロ。
この危機に八神家はどう立ち向かうのか？はやて豆狸の本領発揮？

では次回お会いしましょう。

第１８話　ウルトラはやて作戦第一号や（前書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。
勢いで書き始めて気が付けば小説歴２ヵ月半を過ぎました。続けていられるのは読んで下さる皆さんのお陰です。
これからも頑張りますので、どうか見てやって下さい。

では第１８話です。

第18話　ウルトラはやて作戦第一号や

数年前『時の庭園』

その日『プレシア・テスタロッサ』は苛立っていた。
長年の研究成果も失敗に終わり、新たなアプローチを考えていたが行き詰まっている最中だった。
プレシアは激しく咳き込む。

（…時間はそう残っていないというのに…）

手のひらに着いた血痰を見て暗たんとするプレシア。
その時だった。『時の庭園』にアラームの警告音が鳴り響いた。
今フェイト達は使いにやって此処にはプレシアのみである。彼女は外部モニターで異常の報告があった箇所をチェックする。

「…これは…何なの…？」

映し出された画像を見てプレシアは眉をひそめる。
どこからか漂着し外壁に引っ掛かっているそれは、大破した巨大な人型のロボットらしき物であった。

ーーー

ゼロは暗黒の中に居た。
暗黒の中、様々な場面が走馬灯の様に次々と現れては消える。
フェイトの傷だらけの肌、赤いぎらつく目に嘲笑う声、そして……
誰かがしきりに自分に謝っている気がする…顔に温かいものがかかった…
そして……

「…兄……」

「…ロ…」

「しっか…ろ…」

どこからか声が聞こえる。ゼロは声の方に意識を向ける。

「ゼロ兄ぃっ！」

今度ははっきりと聞こえた。暗黒の中に光が差し込んだ気がした。

「……んっ…？」

ゼロは目を開けた。
ぼんやりした視界で周りを見ると、無機質な白い壁や天井が見える。

どうやら自分は寝ているらしい、その自分を心配そうに覗き込み呼びかけているはやて達全員の顔が見えた。
人間形態のザフィーラまで居る。
『闇の書』までがベットの上に浮いていた。

「…此処は……？」

ゼロは呟く様にみんなに聞く、体に不快感があるどうも頭がはっきりしない。

「病院やよ…ほんま良かった…目が覚めて…」

ゼロが寝かされているのは病院の処置室だった、他には人は居ない。
まだぼーっとしているが目が覚めたゼロに、はやては涙ぐみながらしがみついた。『闇の書』も心配している様に寄って来る。
そんなはやての頭と『闇の書』を撫でてやりながら、

「…俺…何で病院なんかに居るんだ…？」

と聞くと、同じくゼロを覗き込んでいたシグナムも安堵した顔をして説明してくれる。

「どうもこうも…何でもお前が外で倒れていたのを誰かが見つけて、救急車を呼んでくれたらしい…何が有ったのだ？」

その話を聞いてゼロの意識が急速に覚醒した。途切れ途切れだった記憶が繋がる。

「ちくしょう！やられた！」

そう叫ぶと体を起こすが、体のあちこちが痺れ腹部が痛んだ。

「痛うっ…！」

痛みに腹を押さえるゼロに、はやては慌てて起き上がるのを止める。

「まだ無理したらあかんよ…何やらお腹を強く打ったらしいてお医者さんも言うとったし…」

神経麻痺弾の方は地球の医学では分からなかったらしい、まだ体が後遺症で痺れる。
それでもゼロは顔をしかめながらも起き上がると、

「…やられた…罠に嵌められた……正体がばれていた…」

悔しそうに拳を握り締める。それを聞いたはやても驚く、フェイト達がそんな事をするとは思ってもみなかったからだ。
ゼロは首を振ると、

「フェイト達は何も知らないまま利用されただけみてえだった…可哀想にな…真っ青な顔をしてたぜ…救急車を呼んでくれたのはフェイト達だろうな…」

その時のフェイト達の気持ちを思うと辛くなった。
ゼロは沈痛な面持ちで『マザロン人』に襲撃を受けた事をみんなに話る。
一通りを聞いたシグナムが厳しい表情で、

「…という事は、前回の超獣といい…フェイト達の周りに、ゼロの知っている『ヤプール』とやらが関わっているのは間違いなのだな…？」

「…ああ…確かだ…死んだ筈の奴が現れやがった…」

ゼロはマザロン人の哄笑を思い出し、拳を握り締めた。

そんなゼロにシグナムが疑問を投げかける。

「…しかし…よく殺されなかったものだ……状況から言ってもお前を殺すのは造作もなかったろう…」

ゼロは歯をきつく噛み締めた。肺腑をえぐり出された様に声を絞り出す。

「…殺されるより悪い……『ウルトラゼロアイ』を奪われた…！！」

はやてが驚いてゼロに聞く、

「『ウルトラゼロアイ』って、ゼロ兄が変身するのに使うあの眼鏡！？」

ゼロははやての顔を憔悴した表情で見て頷く、

「…あれが無いと二度とウルトラマンになれねえ…今の俺にはほとんどの力が使えない……」

ゼロの話を聞いて驚く全員、そこまで重要な物とは思っていなかったのだ。

故郷に帰れない今、重要度では魔導師のデバイスの比では無い。

シグナムが瑠璃色の瞳に怒りの色を浮かばせて憤る。

「一番の脅威であるゼロを排除するにはある意味、安全確実な方法という訳か…女子供を利用して……卑劣な！」

シグナムの憤る声も今のゼロには遠かった。

彼は今まで味わった事の無い不安に襲われていたのだ。

ウルトラマンの力を失った、それは初めて味わうものだった。

此処に来る以前、別次元で『カイザーベリアル』の軍団と戦う際に、その世界の人間である『ラン』の体を一時的に借りた時も自分一人の意思では力を振るえなかったが、それとは訳が違う。

いくら危険が迫っても今の自分にはどうする事も出来ず、容易く死んでしまうだろう…

（…何て事だ……）

ゼロは自嘲する。今まで自分はウルトラマンとしての力を使えるからこそ、不敵に敵に立ち向かえたのかもしれない。

だから今こんなに不安になるのだと…

心が強かったからではなく、体が強かっただけではなかったのか？

ゼロはそう自問する。

だがそんなゼロの脳裏に、フェイトの傷だらけの体に今にも泣き出しそうな顔が浮かんだ。

夢の中で顔にかかった温かいものは……

（クソッ！）

ゼロは自分を奮い立たせる。正直今の状況は最悪だが、そんな泣き言を言っている暇は無い。

「こうしちゃいられねえ…！」

ゼロはベットから這い出し、まだダメージの残る体で無理やり立ち上がる、慌てて止めるはやて、

「ゼロ兄ぃっ無理したら、あかんって」

「馬鹿っやせ我慢すんなっ！」

「駄目よ、まだ動いちゃ」

ヴィータとシャマルが覚束ない足取りのゼロを抑える。

シグナムがそんなゼロに鋭く声を掛ける。

「ゼロ、どうする気だ…？」

「…ヤプールが裏に居るなら、フェイト達は間違いなく殺されるか死ぬより酷い事になる…あいつの体傷だらけだった…」

ゼロは惨たらしいフェイトの体を再び思い出す。怒りの余り全身の血が逆流する気がした。

「だからその前に『ウルトラゼロアイ』を取り返してヤプールを倒す…！」

ゼロはまだふらつきながらも一歩も引かない強い意志を秘めた目でシグナムに答えた。

力を失おうとも彼はウルトラマンなのだ。
助けなければならない命が有る限り立ち上がる。
今の自分の状態は不安だらけであったが、フェイト達の心配で二の次にする。

そんなゼロを見てシグナムは微笑みそうになったが、直ぐに表情を険しくし、

「どうやってだ？相手の位置も判らんというのに…おそらくゼロアイは、敵の本拠地に持ち去られているぞ？」

言葉に詰まるゼロ。そんなゼロにシグナムはやれやれ仕方ない奴といった風に微笑し、

「…こんな時こそ我らを頼れ…お前の為なら力を貸すぞ」

ヴィータが頭の後ろで手を組み明後日の方向を向いて、

「し…仕方ねえな…ゼロの為だ。手伝ってやんよ…その替わりお前のアイス貰うかんな…」

少々頬が赤い、照れている様だ。

「そういう事なら私の出番ねっ、探索は任せてっ」

目を輝かせて両手を握り締め張り切るシャマル。

「ゼロ…気にするな…我らが力になりたいだけだ…」

ザフィーラもわずかに笑って頷く。

「みんな気持ちは一緒やよゼロ兄ぃ…」

はやてはゼロの手を取り、にっこりと優しく笑った。

「…すまねえ、みんな…！」

ゼロは自然頭を下げていた。何だか鼻の奥がツンとし目頭が熱くなった気がする。

ゼロには未知の感覚だった。

感激しているのは間違いないのだが…（何だろう…？）と疑問に思う。

今の彼にはこの感覚を理解出来なかったが、悪いものでは無いと感じた。

だがそれに浸る間も無くゼロは重大な事を思い出す。マザロン人の去り際の言葉を、

「あいつ…言ってやがった…この世界は扉を開く為の贄（にえ）となり滅ぶと…ヤプールめっ！この世界を滅ぼす気らしい！！」

ゼロの話に全員がざわめく。シグナムはゼロを見、不敵に微笑むと、

「なおさらだな…主はやてと主の住まう世界…そしてお前の為…我ら『ヴォルケンリッター』ヤプールと戦う剣となろうぞ！」

頷くヴォルケンリッター一同。その横で先程から、はやてがじっと考え事をしていた。

「では…主はやて、ご指示を…」

シグナムははやての方に向いて指示を待つ。

「えっ？私が…？」

急に話を振られて焦るはやて。シグナムは慌てる彼女に軽く礼をし、

「我らは、主はやての騎士…主は何かお考えが有る様子ですので…」

その通りだった。さっきからはやてはどうしたら『ウルトラゼロアイ』を取り返せるかずっと考えていたのだ。

「そうだな…そういうのは、はやてに任せるのが一番だな…」

はやての聡明さを良く知っていて、今まで何度も相談を持ち掛けていたゼロも賛成する。

「頼むぞ、はやて」

ヴィータも信頼の籠もった瞳で彼女を励ました。

はやては少し考え込むが決心したらしく、

「そんなら…私に考えがあるんや、みんな協力してくれるか？」

穏やかな口調だが、力強く言う。皆も訊かれるまでも無いといった風に力強く頷いた。

ゼロはふと昔に聞いた話を思い出した。片膝を着いて、はやての目線に合わせると、

「はやての初作戦って訳だな？」

「そ…そないな大袈裟なもんや無いよ…？」

そう言って照れるはやての肩をポンと叩き、

「地球に最初に降り立ったウルトラマンが初めて参加した作戦名が『ウルトラ作戦第一号』って言うんだそうだ。あやかって『ウルトラはやて作戦第一号』ってとこだな…？」

と笑った。少々レトロな響きの作戦名だが、シンプルで力強いとはやては感じた。自分の名が入っているのは照れくさいが…

何だか高揚して胸がワクワクして来た、思わず張り切って声を上げる。

「よっしゃ！みんなウルトラはやて作戦第一号や！」

「おおっ！！」

思わずゼロ達も声を上げた。

この後、看護師さんに病院では静かにと怒られた。

ーーー

その事が前にアルフが言っていた、甘ったれの子には何も話す必要は無い事と関係あるのかも知れないとなのははは考えていた。

（もう一度フェイトちゃんに会うんだ…私はまだ大事な事を伝えてない…！）

彼女は決意を胸にアースラに戻って来たのだ。

会議室ではリンディ達が、デスク上に球形に映し出された立体モニターで数日前のゼロの戦闘を見ている所だった。

「何てデタラメな力…ＳＳＳランクの魔導師レベルどころの話しじゃないわね…」

リンディは画像を見て、驚きを通り越して呆れてしまい苦笑する。

クロノもリンディに似た面立ちで同じように苦笑した。

「まったくです…巨人にはなるし…どういう体をしているんだか…」

挨拶を終えたなのはとユーノはそれを聞いて、引きつった笑いを浮かべる。

リンディは、そんな2人をじろりと見て、

「…あなた達…あのウルトラマンの力の事、知ってたわね…？」

リンディに図星を突かれてビクンッとなり、焦るなのはとユーノである。

「…にゃははは…あ～」

「…あのう…そのう…」

誤魔化し笑いを浮かべるなのはに、しどろもどろになるユーノ。
リンディにはとっくにお見通しだった様である。

小学生の子供に管理局のやり手で海千山千のリンディを誤魔化す事は出来なかった様だ。
なのはは頭を下げる。

「すいません…いっぱいお世話になりましたし、とてもいい人であまり力の事は知られたくないみたいだったので…」

ユーノも続いて頭を下げる。

「ゼロさんは喋ってもいいって言ってたんですが、僕らが黙っていようと決めたんです」

素直に謝る2人、リンディ達もゼロの力を見たのでは隠しても仕方なかった。

リンディも子供らしいなのは達の律儀さを責める気は無い、確認をからかい半分でしただけである。

「まあ…いいわ…実際どうしようもないしね…」

リンディは悪戯っぽく笑って2人に言う、ほっとするなのはとユーノ。

「…でも艦長…どうしますか…？このウルトラマンて人の件…それに空を割って現れる怪物って、以前管理局のデータベースで見た事

があるんですが…」

エイミィがゼロとシーゴラスの戦闘場面を興味深く見ながら訊く、
リンディも頷いて

「私も昔の報告書で読んだ事があるわ…　時たま現れて巨大生物を連れ去る正体不明の勢力、その神出鬼没振りと得体の知れない力で、『異次元の悪魔』と呼ばれていた…どうやらウルトラマンと敵対関係にあるみたいね…」

と記憶を辿り言う。さすがは『異次元人ヤプール』である。
『ミッドチルダ』方面にも現れた事が有るらしい、超獣の素体探しにでも来ていたのか…
そういえば超獣の中には妙な力を持った奴も居た。中には魔力を持った個体も居たのかも知れない。エイミィは頭を捻って、

「…それでも確か、数十年前を境にパッタリと現れなくなったんですよね…？何で今更…どうします艦長？」

リンディはにっこりといい笑顔で、

「放っておきましょう…」

「ええ～っ？いいんですか！？」

絶句するエイミィ、クロノは苦笑して、

「仕方ないよエイミィ…これは管轄外なんだ…」

エイミィはああ…、と納得のいった顔になった。ユーノが疑問に思ってクロノに尋ねる。

「どういう事なんだ？」

クロノはユーノを見ると自嘲の籠もった口調で、

「…管理局の仕事は管理世界の管理と維持…
そして此処は管理外世界、
元々此処に来たのは魔法が存在しない世界に紛れ込んでしまった『ロストロギア』の回収と次元犯罪者の逮捕だ…
他の勢力同士の争いに首を突っ込みに来たんじゃ無い…
彼らが魔法と関係無い以上、やらせておくしか無い…そういうものなんだ……」

ユーノはまだ何か言いたそうだが、そんな彼にリンディが真剣な顔になって言う、

「管理局は万能じゃないわ…あくまで管理世界を守る為のものなの…それ以上の事をしようとすると際限が無くなるし、干渉行為になるわ…だから私達が出来るのはそこまで…」

「そうですか…」

ユーノは今まで管理局の事を正義の組織っぽく考えていたので現状を知って少しガッカリしたが、「ゼロの力は危険だ封印しなければ！」なんて話が出なくて、ほっとした。
なのはにはさすがに難しかったらしく、一生懸命自分なりに理解しようと頭を捻っている。

リンディは困った風な笑顔をして、

「まあ…　そういうのは建て前で…
実際彼を捕まえるのは無理そうだし…話し合ってみる位しか手は無いわね…話を聞く限り、とてもお人好しの様だし…敵対するのは避けるべきね…」

なのははそれを聞いて安心して笑顔になる。
リンディは一息つき、入れて貰った緑茶に砂糖とミルクを大量に投入したお茶を美味しそうに飲んでいる。
日本人であるなのはにしてみれば一言、言ってやりたい所だが、余りに美味しそうに飲んでいるので黙っている事にした。

お茶を飲み終えたリンディはなのは達を見て、

「それじゃあ後はこちらがやるべき事をしましょう、まずは残り１個の『ジュエルシード』の回収にプレシア・テスタロッサ女史の本拠地を突き止める事」

なのは達が返事をしようとした時だった。
スクリーンに赤い文字が大量に表示され、アラーム音が鳴り響いた。
エイミィが素早く反応して報告を受ける。

「艦長、フェイトちゃん達が現れました！今武装局員が追跡中です！」

リンディはクロノとなのはユーノに視線をやり、

「お願いね、みんな！」

「「行って来ます！」」

「今度は逃がしはしませんよ！」

3人はリンディにそれぞれ返事をすると、現場に駆け付けるべく武装転移ポートに急いだ。

その頃、人気の無い山中を金髪の髪をツーテイルにした黒衣の少女と橙色の毛並みの大型の狼が武装局員十数名に追われて空を駆けていた。

武装局員は、逃げる一人と一匹に砲撃魔法やバインドを仕掛けるが、何無くかわされる。
まるでからかっている様に見えた。

金髪の少女フェイト・テスタロッサは、軽々と局員の攻撃を避けながらニヤリと笑い、

「へっ　バーカ、そんなへなちょこ弾当たるかよ！」

といつものフェイトでは考えられない口を訊いた。

追っていた局員の1人が（あの子供あんな喋り方してたか…？）と思う。

それを見咎めたアルフの口から、

「…調子に乗るな…バレるぞ…　それ以上喋るな…」

渋い男の声が飛び出した。フェイト?は人の悪い笑みを浮かべると、

「うっせえな～　ちょっと位大丈夫だろっ？」

気にする風も無い。局員達は今度は一斉に砲撃魔法をフェイト達?に撃ち込んだ。

フェイト?は飛んで来た無数の光の砲撃を、後ろも見ずにデバイスで瞬時に全て叩き落とした。

その手並みにざわめく武装局員達、まるで問題にならない、局員達とフェイト達?には天と地程の実力差が有る様だ。

フェイト?は『バルディッシュ』を肩に載せると、恐れて遠巻きになる局員達を不遜な態度で見渡し、

「せいぜい引っ掻き回してやんねーとな…なあ『アイゼン』！」

《Ｊａ》

バルディッシュ?が古代ベルカ語で応えた。

何とこの2人は変身魔法でフェイト達に化けたヴィータとザフィーラであった。

つづく

第１８話　ウルトラはやて作戦第一号や（後書き）

話の中に出て来た『ラン』ですが、今年冬の映画でゼロと合体する別次元の宇宙の青年です。

合体したといっても一時的なものでゼロに変身出来るのは3回だけだそうです。

管理局のウルトラマンへの対応はリンディはああ言ってますが、一枚岩ではない管理局の事なので今後変わって来ると思います。

大分原作とかけ離れて来ましたが、無印も決戦の時は近いです。

では次回お会いしましょう。

超番外編　映画予告一発ネタ（前書き）

すいません。最初に謝っておきます。

これは本編とは全く関係なく、登場人物達も本編とは違うとお考え下さい。

完全に期間限定のネタですので短いです。

テレビで予告をまだ一度も見ていないという方イメージが湧かなかったらすいません。

超番外編　映画予告一発ネタ

此処は、とある六課の部隊長室。

その室内で六課の部隊長八神はやてと、その部下で副隊長のシグナムはテレビを見ていた。

テレビは、はやてが生まれ故郷の世界から買って来た最新型の大型プラズマテレビで、ある程度の広さがある部隊長室の壁の一面の殆どを占める位大きい。

はやてはどこぞの司令官よろしく、デスクに肘を着き顔の前で両手を組んで、映し出された画像を見てご満悦だ。

さすが最新式、画面も音も素ん晴らしい。

そのテレビには今、画面いっぱいに映画の予告映像が流れている。

その映画とは、『ウルトラマンゼロ超決戦！ベリアル銀河帝国』である。

このテレビは、部隊長権限（公私混同とも言う）にて技術部に改造して貰い、平行世界の番組が映る優れものである。

今映っている番組を放送している世界には、ウルトラマンは存在しないが、テレビや映画で架空のヒーローとして認知されているらしい。

はやては大はしゃぎで予告に見入っている。

シグナムも興味津々で見入っていた。

高性能なスピーカーから、ゼロそっくりな声が響く、はやては、おお～となった。

平行世界のゼロの声優さんの声は、本人そっくりである。

画面には次々とウルトラマン達のアップに、登場人物達が映る。

そして、闇をバックに目を光らせたウルトラマンゼロが登場した。

「おお～、暗がりで構えるゼロ兄、格好ええなあ～」

「同感です…」

はやての横でシグナムも後ろ手で直立したまま同意して頷く。

引き続き、画面からゼロそっくりな声が流れる。

《俺は君を守り…この宇宙の平和を守る…信じてくれ…》

これは多分、一体化した青年ランに呼びかけているのだろうが、はやては赤くなって、顔を押さえる。

「うわあ～っ、ゼロ兄…そんな改めて言わんでも…なあ、シグナム？」

「ど…同感です…」

シグナムも頬を赤らめて返事をする。

続けてテレビから、

《カイザーベリアルの野望は俺が阻止する！　俺を行かせてくれっ！！》

この後に「カイザーベリアル！貴様だけは絶対に許さん！！」と続くのだが、２人はそこまで聞いちゃおらず、一斉に顔を赤くした。

はやてはもじもじして恥ずかしそうに、

「いややわあ…ゼロ兄…やらしいなあ…『いかせてくれ』やなんて…」

「ど…同感です…！ゼロは破廉恥です！」

顔を真っ赤にしてシグナムも同意する。

はやてはそんなシグナムを、瞳孔が開いて逝ってしまった人の様な目で一別し、

「これは問題やっ、ゼロ兄はエロ魔神になってもうたんやっ！」

シグナムも頷いて、同じく瞳孔を開いてこちらは闇夜に出没する辻切りの様な目をして、

「同感です！子供も見る映画で…一晩説教ですねっ！！」

と、『レヴァンティン』を取り出した。

はやてとシグナムは、ものすごく勝手な理屈で大いに盛り上がって、見事にユニゾンした笑い声を出す。

部隊長室にゲタゲタと不気味な笑い声が木霊した。

2人共仕事が忙しく、今日まで2日徹夜続きであった。

その仕事から、ついさっき解放されたばかりで、はやてもシグナムも超ウルトラハイ状態で、頭に虫でも湧いたらしい。

この宣伝で何故そんな発想が湧くのか…

報告書類を届けに、部隊長室のドアを叩こうとしていたティアナ・ランスターは、関わり合いにならない様に素早く回れ右をした。

不気味な笑い声が響く部隊長室を走るのと変わらないスピードの競歩にて後にする。

歩きながらティアナは、ひどく真面目な顔をすると、

（駄目だわ此処…転属願いを出そう！）

と堅く心に誓ったのだった。

つづきません

超番外編　映画予告一発ネタ（後書き）

反省しております。
映画予告をやっている今しか出来ないネタで、ついやってしまいました。

舞台がＳＴＳなのも深い意味は有りませんので、では本当すいませんでした。自分の心が濁っているのがよく分かった今日この頃です。

第１９話　ヴォルケンズ出撃せよや（前書き）

気がつけば目次欄が２ページにまたがる位に書いてました。
これも読んで下さる皆さんのお陰です。では第１９話です。

第19話　ヴォルケンズ出撃せよや

数年前『時の庭園』

プレシアは誰にも気付かれない内に、大破した金と暗い赤色をした巨大ロボットを転移ポートを使い何とか、最深部の広大な研究スペースに運び込んだ。

此処なら誰の邪魔も入らない、フェイト達も知らない場所だ。
優秀な技術者でもある彼女にはその巨大なロボットが『ミッドチルダ』とは違う、未知の超テクノロジーによって造られた事を見抜いていた。

（これだけの物を造れるなんて…何者なの…？）

ロボットを探査機器で調べながらプレシアは、その技術力に戦慄していた。

その時、探査機器が何かの反応を捉え、ディスプレイに表示する。

「生命反応…？」

プレシアは反応の有った箇所をチェックした。

ディスプレイに画像が映し出された、ボロボロになったロボットの額に有る緑色のひび割れたクリスタル部に、青白い肌をした全裸の黒髪の女が眠っていた。

ーーー

「掛かったな、これで面倒な奴らはみんなこっちへ来やがったぜ」

ザフィーラはアルフの顔（狼の）で頷き、

「よし後はせいぜい時間稼ぎだ…行くぞ…気を付けろよ…」

「誰に言ってんだよっ」

ヴィータは不遜に笑う、後ろから追って来るなのは達を見て、

「しっかり着いて来いよ…！」

そう、なのは達に聞こえない様に呟くとヴィータ達は飛行速度を上げた。

さて、はやてが考えた作戦だが、簡単に言うと相手をおびき出して行方を突き止めるというシンプルなものだ。

だがそれを上手くやるには様々な条件をクリアする必要があった。

その一つが管理局である。管理局が介入して来ると事が面倒になる上、『闇の書』の存在とはやて、ヴォルケンズの事を知られる訳にはいかない。

そこで作戦中管理局の目を逸らす必要が有った。
それでヴィータとザフィーラが変身魔法でフェイト達に化け、管理局を囮(おとり)となって引き付けているのである。

場面は変わり、此処はヴィータ達が居る地点から正反対の方向に位置する遠見市近くの森の中。

その中を最後の一個の『ジュエルシード』を手のひらに張ったフィールドで確保した『ウルトラマンゼロ』が空を飛んでいた。

もちろんゼロ本人では無い、こちらはゼロに化けたシグナムである。

（…私がゼロに化ける事になるとは…）

シグナムは赤と青の腕を見て少し複雑な気分になるが、はやての作戦内容をもう一度頭の中で確認する。

シグナムの持っている『ジュエルシード』は本物である。シャマルの広域探査で確保した物だ。

ヴォルケンズを作り出した『古代ベルカ』の技術は『ミッドチルダ』を凌駕しており、管理局やフェイト達に先んじて確保する事が出来た。

シグナムの役目はフェイト達の隠れ家が近いと推察される辺りを（以前シャマルがフェイト達を探った時の反応などから見当をつけた）『ジュエルシード』を持って、ゼロの姿でおびき出す事だ。

はやていわく、

「喉から手が出る程欲しいもんと、無力化した筈のゼロ兄が出て来たら、あちらさんもちょう怪しい思ても出て来るしか無いやろ？必ずフェイトちゃん達とマザロン両方出て来る筈や」

病院から自宅に戻って、みんなに作戦内容を説明するはやては、小悪魔っぽい笑顔を浮かべて、

「罠の基本は、分かっとっても掛からずにはいられん様に仕向ける事や」

と小学生とは思えないセリフを言う。
作戦の全容を聞いてシグナム達は、はやてに狸の耳と尻尾が付いている錯覚に襲われた。
そんなはやてをゼロは、

「…そういや…最近、架空戦記物とかいうのにハマってたな…魔法少女もええけど魔術師も捨てがたいわあ、とか言ってな…」

と微妙な顔で言っていたものだ。

（大したお方だ…将来が楽しみだな…）

シグナムは作戦を練るはやてを思い出し、ゼロの銀色の顔で微笑する。
アルカイックスマイルのゼロの口元が僅かに動いた。

シグナムは飛行しながら、封印してある『ジュエルシード』に僅かに魔力を送り込み、微弱な反応を出させフェイト達が嗅ぎ付けるの

を待つ。

「管理局が気付く前に済ませんとな…焦っても詮無いが…早く来て貰いたいものだ…」

シグナムはそう呟いた。

その頃フェイト達はシグナムが撒き散らす『ジュエルシード』の微弱な反応を捉え、森の中に入っていた。

「怪しいって言えば、怪しいんだけどね…」

人間形態のアルフは反応の有る方向を見ながら、彼女の横を飛行するフェイトに話し掛ける。

フェイトは暗い表情で、

「…判ってるよ…『ジュエルシード』の反応を撒き散らしながら動いてる…管理局の罠かもしれないけど…行くしかないよ…」

ボソボソと呟く様に返事をする。

今のフェイトは苦悩の色が濃い、罪悪感に押しつぶされそうになっていた。

結果的に、ゼロを陥れるのに手を貸した形になってしまったのを悔やんでいた。

フェイトはプレシアに愛して貰いたいが為に今まで命令には絶対服従して来たが、母親の命令だからと人を裏切って平気でいられる様な少女では無かった。

アルフは罪悪感から憔悴し切ったフェイトの横顔を痛まし気に見る。

マザロン人が去った後、救急車を呼ぶ間フェイトは意識を無くしているゼロの頭を膝に乗せ、ずっと謝り続けていた。

アルフはその姿を見て、感情を余り露わにしないフェイトの謝罪の声が涙声になるのに気付いた。

（…あの女…！こうなるのが判ってて…これが親が子供にする仕打ちなのかい！！）

アルフは憤りで鋭い犬歯を食いしばったが、肩を震わせるフェイトを見て視線を落とした。

アルフは静かに歩み寄って、フェイトの横にしゃがみ込み、震える背中を撫でてやる事しか出来なかった。

それからのフェイトは酷い有り様だった。

全く休もうともせず探索にあたり、食事を採ろうともしない、自責の念から、ろくに寝られないらしく目の下には隈が浮かんでいる。

何事か決心している様な気配があった。

（このままじゃ、フェイトは壊れてしまうよ…罠だろうが何だろうが、『ジュエルシード』を集めて早く休ませないと…！）

アルフは例え罠だろうとフェイトの為に、玉砕覚悟で『ジュエルシード』を奪ってやると決意していた。

そういうアルフもそんなフェイトに付き合った上に、彼女自身もゼロへの申し訳なさで肉体的にも精神的にも疲弊していたのだが…

そんな2人は、森の木々の上を『ジュエルシード』を持って、ゆっくりと飛行する『ウルトラマンゼロ』の姿を発見した。

「フェイト、あれはウルトラマンとか言う巨人だよ…！厄介だね…まともに行ったら勝ち目は無いよ…」

予想外の人物が、『ジュエルシード』を持っていたので困惑するアルフ。

フェイトも真紅の瞳に戸惑いの色を浮かべ、ゼロの後ろ姿を見る。

「…頼んだら、くれるって事は無いかね…？」

アルフはゼロの以前の態度から、何となくそんな考えが浮かんで口に出してみたが、

「…甘い期待はしない方がいいよ…」

フェイトはゆっくりと首を横に振った。

その時だった。

「バ…馬鹿ナ…？何故、奴ガッ！？」

フェイト達の後ろの方から、何度となく聞いたぐもった不気味な声がした。

フェイトとアルフはとっさに振り向く。案の定フードの人物『マザロン人』が木の陰から姿を現していた。

またしても2人を見張りに戻って来たらしい。

「…あんた…！」

アルフが眉間にシワを寄せて、怒りの籠もった目でマザロン人を睨み付ける。

フェイトの憔悴した顔にも憤りが浮かんだ。

しかしマザロン人には2人の事など眼中に無い様で、前方を飛ぶゼロの後ろ姿を驚いた様に見つめている。

「アイツノ変身道具ハ、確カニ取リ上ゲタ…　ドウイウ事ダ…！？」

と、フェイト達には意味不明な事を呟いている。

マザロン人の様子を不審そうに見ているフェイト達に、

「何ヲ、ボーットシテイル…　オ前ラ『ジュエルシード』ガ目ノ前ニ有ルノダ…サッサト行ケッ！」

と、ゼロの遠ざかって小さくなって行く後ろ姿を指して命令した。

突っかかろうとするアルフを抑えてフェイトは、

「…行こうアルフ…今はやるべき事をやろう…」

とアルフを促すと、覚悟を決めた様にゼロの後ろ姿を追跡にかかった。

マザロン人はそのまま動かず、フェイト達を様子見代わりに使う気らしい。

ゼロに気付かれない様に用心して接近しながらアルフが、

「あたしがアイツの気を逸らすから、フェイトは隙を見て『ジュエルシード』を奪っておくれ、そしたら転移魔法で直ぐに逃げようよ」

疲れ切っているフェイトを気遣ってアルフは先に案を出す。

「…でも…それだとアルフが…」

フェイトはアルフの身を案じ、表情を曇らせるがアルフは笑って、

「大丈夫さっ、無理はしないからさっ！」

そう言うと一気に飛行速度を上げ、ゼロに接近した。

一方、ゼロに変身しているシグナムは、優れた剣士としての研ぎ澄まされた感覚で、フェイト達の接近を察知していた。

（来たな…作戦開始だ！）

シグナムは空中で静止した。
その瞬間、アルフが高速で突入して来る。

「『ジュエルシード』を渡しなっ！！」

アルフは突っ込んだ勢いのままシグナムに連続してパンチを繰り出す。

獣人である彼女の筋力は常人を遥かに上回る。有り得ない風切り音をたて、アルフのパンチが跳ぶ。だがシグナムは、その優れた反射神経で、アルフの連続攻撃を紙一重で全て避け切っていた。

（なかなかの力と速度が込められた攻撃だが…　攻めが甘い、気を逸らすのが目的か…だとすれば…！）

シグナムはアルフの動きから、瞬時にフェイト達の意図を見抜いた。

間髪入れず、シグナムの後ろからフェイトが、音も無く最大スピードで接近する。
狙いは右手に持っている『ジュエルシード』！

『バルディッシュ』を一気にシグナムの右手目掛けて振り下ろす。
とっさに半身になって攻撃を避けるシグナム、

（思った以上に早いな…）

もう少し余裕を持って避ける筈が、フェイトの予想以上のスピードに少し避ける動作が大きくなる。
奇襲をかわされてしまったフェイト達だが、それを見逃さずすぐさ

ま『ジュエルシード』を奪いにかかる。

2人は必死だ、ゼロの力は嫌と言うほど見ている。これを逃したら後は無いと思い込んでいた。

フェイト達の同時攻撃にシグナムは動かない、アルフの前蹴りが、フェイトのバルディッシュがシグナムに迫る。

（そろそろかっ…！）

シグナムは振り下ろされるバルディッシュの軌道を見切り、鋭い突きでバルディッシュの峰部分を叩き弾き飛ばすと、アルフの蹴りを首を振ってかわす。
そして小さなボタン程の物体をすれ違い様にアルフの服に付けた。
魔力方式の発信機である。（よし…）シグナムがそう思った時、

「貴様ハ、誰ダッ！？」

マザロン人が突如出現した。シグナムの頭上から襲いかかる、フェイト達を囮にして隙を窺っていたのだ。

「貴様ウルトラマンデハ無イナ！正体ヲ現ワセッ！！」

マザロン人は右手を突き出し、その五指から真っ赤な数万度に及ぶマグマレーザーを発射した。

「くっ…！『レヴァンティン』！！」

《Ｐａｎｚｅｒ　Ｇｅｉｓｔ》

シグナムは素早くレヴァンティンを出現させ、ゼロの姿に変えている騎士甲冑の周りに紫色の防壁を張り巡らす。

マグマレーザーは防ぎ切ったが、衝撃で吹き飛ばされた。その拍子に『ジュエルシード』を手放してしまう。

「ヤハリ偽物カッ！奴ノ仲間カッ？驚カシオッテ、死ネエッ！！」

マザロン人は両手を突き出すと、地上に落下して行くシグナム目掛けて両方の指からマグマレーザーを撃ち込んだ。

轟音が轟き、周囲の大木を巻き込んで爆発が起こった。周りの木々も余波でブスブスと焦げる。

シグナムが落ちた地点には、マグマレーザーが炸裂して全てが炭化し爆発のクレーター跡が残っているのみだった。

「消シ炭ニナッタカ…ケヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャッ！！」

不気味な哄笑を上げるマザロン人、マグマレーザーと爆風でフードがズタズタになり、マザロン人の本当の姿が露わになった。

「！？」

「何だ…お前っ！？」

フェイトとアルフはその異形の姿を見て総毛立つ、血の様に赤い巨

大な目に牙、節くれだってグレーがかった体、両肩にはカッターの様な物まで付いている。

色々な世界の生物を見た事の有るフェイト達だが、その姿に酷く邪悪なものを感じた。

そのマザロン人が、ゆっくりとフェイトとアルフの元に浮遊して来た。

そのおぞましさに少し退いてしまうフェイト達、そんな2人に構わずマザロン人はアルフに手を伸ばした。

「なっ…何すんのさっ！？」

たまらずアルフは身をよじって逃れようとするが、それより早くマザロン人は彼女の服に付いている物を引き剥がした。

シグナムが取り付けた発信機だった。

マザロンはシグナムとフェイト達の争いを観察し、その目的を察したのだ。

万事休す！はやての作戦は見抜かれてしまったらしい。

「ソウイウ事カ…『時ノ庭園』ノ場所ヲ突キ止メヨウトシテイタノカ…ソレデ逆ニ『ジュエルシード』ダケ奪ワレテハ意味ガ無イナ…ケヒャヒャヒャ…！」

そう奇怪な笑い声を上げると、先程シグナムが手放してしまった『ジュエルシード』を掲げる。

アルフはマザロンの不気味な姿に退き気味ながらも、

「…発信機かい…判ったから…『ジュエルシード』をこっちに渡しな、持って行くから」

恐る恐るながらも手を出す。マザロン人は鮫の様な口を歪め、

「コレハ俺ガプレシア様ニ持ッテ行ク…」

それを聞いてフェイトは顔色を変える。

「そんな…それは私達が持っていた方が…！」

アルフも激興して拳を振り上げる。

「何だって！横取りする気なのかいっ！？」

マザロン人は2人の訴えを気にした様子も無く、手のひらに野球ボール程のエネルギーフィールドを作り出し、『ジュエルシード』を包み込みながら、

「管理局カ、奴ノ仲間カハ知ランガ、魔導師ガ関ワッテイルノナラ、俺ガ持ッテ行ッタ方ガ安全ダ…魔力ヲ持ッテイナイカラ、追跡モ出来ン上、『ジュエルシード』モ封印状態デハ探知モ出来マイ…」

そう言われてはフェイト達も黙るしか無い。

「オ前達ハ、コイツヲ何処カ遠クノ次元世界ニデモ置イテカラ戻レ」

そう言うと、マザロン人は、先程アルフから取り外した発信機をフェイトに投げる。
無言で受け止めるフェイト。
マザロン人の背後に空間の揺らぎが発生する、異次元ゲートだ。

「コレカラ忙シククナルカラナ…管理局ヤ、奴ノ仲間ナド、何ホドノ事モ無イガ、目障リダカラナ…用心ニ越した事ハ無イ…」

そう言い残すとマザロン人は、ゲートの中に消えた。
フェイト達も無言で『時の庭園』とは真逆の世界に次元転移して行く。

これで完全に『ウルトラゼロアイ』を取り戻すのは絶望的になってしまった。

「行ったか…」

フェイト達が去って暫くしてから、焼け焦げたクレーター跡の地面から、騎士服姿のシグナムが出て来た。

彼女はマグマレーザーが直撃する前に、素早く降下して地面をレヴァンティンの一閃で穴を掘り、地中に隠れていたのだ。
シグナムはマザロン人が消えた辺りを怒りの目で睨み、

（あ奴がマザロンか…ゼロを卑劣な手で陥れた外道がっ…！）

いつもは冷静な彼女だが、マザロン人を叩き切ってやりたい衝動に駆られた、しかし今はまだその時では無い、

（ゼロ自身がそうしたいだろうからな…）

シグナムは不敵に笑い、八神家で待機しているシャマルに念話を送る。

《シグナムだ、作戦は成功した。マザロンが『ジュエルシード』を持って移動を開始した。シャマル後は頼んだぞ…！》

八神家でシグナムからの念話を受け取ったシャマルは、緊張した面持ちで事態の推移を見守っていたはやてとゼロに事の次第を告げる。

「ビンゴや、掛かりよったわっ」

はやては思わず小さくガッツポーズをとる。ゼロも「よっしゃあっ！」と声を上げた。

作戦は失敗ではなかった。最初からマザロン人に『ジュエルシード』を持って行かせる手はずだったのだ。

発信機はダミーである。

はやての考えはこうだった。

フェイト達は用心深い、高性能のジャマー結界を持っているらしく反応を追いにくい上に、かなり神経を使って行動している。

シャマルの探査能力でも見失う可能性が高かった。

それに比べてマザロン人には能力が高い故なのか、その行動に驕り

があるのをはやては見抜いていた。

ゼロを殺さなかったのがその証拠である。
聞いた所によると、ゼロが表舞台に現れたのは今から千年近い未来、おそらくマザロン人はゼロの力を知らないのだ。

そこではやてはその油断を突く事にした。自分に自信ある者程騙し易い事がある。
わざと発信機を見つけさせ、罠を見破ったと錯覚させると同時に疑心を抱かせる。

そうなればフェイト達に任せず自分で持って行こうとするだろう。
自分なら絶対に見つかる事は無いと、そこが付け入る隙になる！

「はやてちゃん、ゼロ君後は任せて！」

緑色の騎士服を纏ったシャマルが、張り切って右手にはめている２つの指輪からアームドデバイス『クラールヴィント』を起動させる。

「クラールヴィントお願いね」

《Ｊａ　Ｐｅｎｄｅｌｆｏｒｍ》

青と緑の菱形の宝石が緑色の光の糸で連結され、振り子の様になる。

「お願い…導いて…！」

クラールヴィントは一点を指し示す様に空中で静止する。
シャマルは集中する為目を閉じた。

何故反応を追えない筈のマザロン人を追跡出来るのか、それは『ジュエルシード』だった。

封印はシャマル自身が行っている、つまり『ジュエルシード』には彼女の魔力が込められているのだ。

もちろんわずかな反応だが、管理局の最新の探査機器を上回るシャマルには可能だ。

マザロン人の心理的誘導、これがはやての作戦だった。

とても小学生の少女が考え付けるレベルでは無い、八神はやて恐ろしい子！であった。

集中するシャマルをかたずを飲んで見守るゼロとはやて。

後の全てはシャマルに掛かっている。

シャマルは懸命に微弱な反応を追う。汗が額を伝わる、次元間を移動するマザロンを追うのは彼女にとっても至難の業であった。

（もう少し…頑張ってクラールヴィント！）

消え入りそうな反応を必死で追うシャマル。

「クラールヴィントっ！」

シャマルが叫ぶ、それと同時に彼女の体がビクンッと動いた、ギョッとするゼロとはやて。

シャマルはその場にカクンッと膝を着いた。慌てて抱き起こすゼロ、はやても車椅子を操作しシャマルに寄る。

余程集中していたのか、シャマルの顔には疲労が浮いていたが、ゼロとはやての顔を見上げ、やりきったという笑顔をし、

「やりました…！次元座標の割り出しに成功しました…！」

「すげえぞシャマルっ！！」

「シャマルほんまに大したもんやっ！」

ゼロとはやては2人揃ってシャマルを抱きしめる。シャマルも照れた様な笑みを浮かべ、Vサインを出した。

「ありがとな、本当にありがとうなっ…」

シャマルを抱きしめながら何度もゼロは礼を言った。

（みんなの頑張り無駄にはしねえ…！）

ゼロは顔を上げると、クラールヴィントが指し示した方向を見て、

（待ってやがれ！てめえらの本拠地に殴り込みだ！！）

見えない敵に向かい宣戦布告した。

つづく

第１９話　ヴォルケンズ出撃せよや（後書き）

次回『時の庭園』へ突入編です
正直ここまで書き続けられるとは思っていませんでした。

続けられたのは読んで下さる皆さんのお陰です。
頑張って決戦編を書きたいと思います。

では次回『時の庭園への挑戦や』でお会いしましょう。

第２０話　庭園への挑戦や（前書き）

読んで下さりありがとうございます。

長くなってしまい、危なくタイトルに偽り有りの所で切る所でした。

では第２０話です。

第２０話　庭園への挑戦や

数年前『時の庭園』

プレシアはロボットの中に居た女を治療の為、研究用に使用していた培養カプセルに移した。
重傷を負っており、放っておくと生命が危ない状態だっのだ。

親切心から助けた訳では無い。
プレシアは巨大ロボットを作り出した未知の超技術に興味が有ったのだ。

それには中に居たこの女に聞くのが一番だった。

検査の結果、女が人間とは別種の知的生物である事は判っていた。
重傷だった怪我も常人の数倍のスピードで治癒していく。

どうも全く違う姿の生物が人間に擬態している様だった。
念の為、プレシアの意思でいつでも始末出来る様、女に爆弾を仕掛けた。

得体の知れない相手に用心に越した事はない。

プレシアはこの女から、今の行き詰まった状況を打破出来る糸口が掴めるかもしれないと考えたのだ。

数日後、女は目を開けた。まるで光彩の無い瞳で辺りを見回している。
プレシアは興奮してカプセルに近寄ると、女に顔を近付けて質問する。

「あなたは何者なのっ？どこから来たのっ！？」

培養液の中で女はゆっくりと、どろりとした黒い穴の様な目でプレシアを見ると、

《…私は…ヤプール…》

プレシアの頭の中に非人間的な、それでいてどこか嘲る様な響きの声が聞こえた。

ーーー

「おお～っ凄え！」

ヴィータが喜びで歓声を上げる。
テーブルには、はやてとゼロが腕によりをかけて作った料理が並べられていた。
刺身の船盛りに、牛頬肉の煮込みなどの各種肉料理、丸焼きにしたアヒルに香草と果物を詰めた物まで有る。クリスマスもかくや、という感じだった。

「いただきます」

揃って食前の挨拶をする。
ヴィータは喜び勇んで早速料理をもりもりと食べ始めた。
シグナム達も美味しそうに食べ始める。

ヴィータは「ギガウマ～っ」と凄い勢いで料理を平らげていく、はやてがしょうがない子やな～と小さな妹をあやす様に声を掛ける。

「ヴィータ、そないにがっつかんでもお料理は逃げへんよ」

ヴィータは一旦箸を止めてはやてを見ると、

「聞いてよはやて～っ、高町え～と…高町なんとかがしつこくて、巻くのに苦労してお腹がペコペコになったんだよ～っ」

と、こちらも姉に甘える妹のごとく訴える。はやては苦笑して、

「なのはちゃんやろ…そないに大変やったんか？」

「しつこいなんてもんじゃなかったよ…フェイトちゃ～んフェイトちゃ～んてさ…今晩夢に出て来そう…二度と会いたくない……」

ヴィータはぶ然とした顔をした後、遠い目で宙を見つめた。

「ヴィータは途中で頭に来て、攻撃しようとしたがな…」

床で食事を食べる狼の姿のザフィーラが付け加えた。

「ザフィーラ何バラしてんだよっ」

ヴィータが慌ててザフィーラに文句をつけた。
クスクスと笑うみんな、ヴィータは決まりが悪そうに頬を赤くして、切り分けた丸焼きを口に入れる。
その顔がぱあーっと輝いた様になった。

「何だこれ？めちゃめちゃ美味い！」

ヴィータは切り分けた分をあっという間に食べてしまうと、直ぐに自分で塊を切り始める。
各自もヴィータにつられて切り分けられた丸焼きを食べてみる。

「…これはまた…何と芳醇な…」

「皮がパリパリでソースでしっかり味がついていて、お肉も柔らか～い」

「…ヴィータこちらにも追加を頼む…」

みんな喜んで食べている。大きな丸焼きがどんどん小さくなってい

く。

はやてがその様子をニコニコして見ながら、

「みんな、その丸焼きはゼロ兄が４時間掛けて作った力作やでー」

みんながほおー、という顔になった。さっきから静かに食事をしていたゼロは急に視線が集まったので、気まずそうにする。

はやてはゼロの様子を微笑ましく見て、

「ドイツやハンガリーって国でのお祝い料理なんやけど、めっちゃ手間が掛かるんよ、ゼロ兄がみんなに食べさせたいてアヒル扱ってる店探しからしたんよー」

さらに集まる温かい視線にゼロはいたたまれなくなり、顔をあさっての方向に向けて、気付かないふりでご飯を食べる。

（…はやて…余計な事を…）

そう思うが、みんな喜んでくれたので良しとする。

実際ゼロははやて達に感謝を込めて、料理を作ったのだ。

これにした理由は、シグナム達のデバイスがドイツ語そっくりな言語を使っていたから、と単純な理由と出来るだけ手間の掛かる料理にしようと決めたからだ。

みんなが出掛けている間そわそわしながら、何時間もオーブンで肉を焼いては取り出してソースを塗りの繰り返しをしながら、飛び出して行きたくなる衝動を料理で紛らわせていた。

その間ゼロには色々と思う所があった。

自分ではどうする事も出来ず、誰かに頼らなければならないという今の状況、無力感。

（…あの時に似てやがる……）

ゼロは昔を思い出し唇を歪めるが、頑張っているみんなの事を思うと一人の時とは違うと強く感じた。

実際ゼロ一人だったなら絶望的な状況だったろう…
彼はかつて、故郷で『ウルトラマンメビウス』から聞いた言葉を思い出した。

（そうか…ウルトラマンが一人では戦えないってのはこういう事か…そういう意味だったのか…）

ゼロは今まで気にも留めていなかった言葉を噛み締めた。

『ラン達』の勇気を思い出す、彼らに学んだ事を忘れていた。
一人がどれほど強い力を持っていようが限界が有る、その事を改めて思い知る。

みんなを自分一人で守るという考えは既に相手を低く見ているのだ。

共に戦うという事は互いを認めて、お互いを高め合うという事、その事にゼロはようやく気付いた。

笑顔で料理を食べるはやて達を見ながらゼロは、感謝の気持ちを新

たにするのだった。

次元空間航行艦船『アースラ』内艦橋

リンディがクロノ達から今日の報告を受けていた。

「…どうも、してやられた気がします…」

クロノが不機嫌そうに言う。

フェイト達（実際はフェイト達に化けたヴィータ達だが）を追っている最中にアースラから連絡が入り、全くの正反対の地点から『ジュエルシード』らしき反応が有ったと知らされた。

別の局員を差し向けたが、到着前に反応は消えてしまっていた。

「つまり、フェイトちゃん達は最初から囮で他にも仲間が居て、最後の『ジュエルシード』を持ち去ったという訳ね…？」

リンディは艦長席の肘掛けにもたれて、ため息を吐く。

なのはは納得した顔をして、

「だからフェイトちゃん今日は、逃げてばかりだったんだ。何かい

つもと違う気がしたし…」

しきりに頷いている。リンディは肘掛けに寄りかかって斜めになっていた姿勢を戻し真面目な顔になると、

「これで向こうには12個の『ジュエルシード』が渡った事なるわ…プレシア女史が何をする気かは分からないけど嫌な予感がするわね…」

「じゃあ、どうするんですか？もしも悪用されたら…？」

ユーノが不安そうに言う。『ジュエルシード』の発見者としては不安になったのだろう。

ユーノの不安を察してクロノが、

「こちらも手をこまねいたままでいる気は無いよ、砲撃魔法から今総力を上げてプレシアの居所を解析中だ…これで何とか分かれば…」

そう言うが実際難しい、どれ位時間が掛かるか分からない上に、大まかな位置しか分からないだろう。

（向こうが何らかのリアクションを起こしてくれれば…早くしないと母さんの言う通り、大変な事になる気がする…）

エイミィ達オペレーターが突貫作業で解析を進めてコンソールを叩き続けるのを見ながらクロノは焦りを隠せなかった。

（…でも、その前に言っておかないと駄目だろうな…）

クロノはエイミィ達の様子を心配そうに見ているなのはを見て、

「…なのは…君に話があるんだ…」

まだ彼女に知らせていない事実を伝える為に口を開いた。

『時の庭園』

岩盤をくり抜いた広大な空間に、人工物を配置したほの暗い部屋に、ぼんやりとした青い光が満ちていた。

その部屋で一人プレシアは、青く光る『ジュエルシード』を宙にリング状に浮かべ、狂気の目で見入っていた。

プレシアは改めて浮遊する『ジュエルシード』を眺めた後に眉をひそめて、

「結局１２個…時間は掛かるけど、動力炉に使っている『あれ』の力と合わせれば何とかなりそうね…」

にたりとそう呟いた時だった。

突如、部屋の岩盤が爆発してぶち抜かれた。

もうもうと立ち込める爆煙の中から、怒りの形相で少女の姿のアルフが現れた。

彼女はもう我慢の限界を超えたのだ。あれから別次元に発信機を置いてから帰って来たフェイトは、今までの無理が祟りボロボロだった。

母親に話しがあるというフェイトだったがプレシアは会おうともせず、アルフが何とかなだめ休ませると、フェイトは今までの疲れで気を失う様に寝入ってしまった。

そんなフェイトの憔悴しきった寝顔を見て、アルフの最後の我慢が消し飛んだのだ。

アルフは怒りの形相で部屋の歪な階段を降り、プレシアに掴み掛かった。

しかしプレシアは動じる事も無く、前面に魔法障壁を張り巡らす。

アルフの手が障壁に阻まれた。

それでもアルフは怯まなかった。力を振り絞って魔法障壁を無理やり破ると、プレシアの胸ぐらを掴み一気に引き寄せた。

アルフは何の感情も籠もらない表情のプレシアに、

「あんたは母親で、あの子はあんたの娘たろう！あんな頑張ってる子に…あんな一生懸命な子になんであんな酷い事が出来るんだよっ！！」

プレシアを怒鳴りつけている内に悔し涙が出ていた。
何の反応もしないプレシアに激したアルフは更に続ける。

「あんた何なんだ！？今までの事もだけど、何であの子の最後に大事にしてたものまで踏みにじったんだ！？それでも親かっ！何とか言ってみろおっ！！」

今まで押さえてきた思いのたけをぶつけるアルフ。
しかしプレシアはまるで物を見る様に無感動な目でアルフを見ると、煩わしそうに首を振って、右手をアルフの腹部に当てた。

次の瞬間、プレシアの手から光がほとばしる。砲撃魔法がゼロ距離でアルフに放たれた。

「ぐはあっ！」

腹部に砲撃魔法をまともに食らったアルフは、衝撃で吹っ飛んだ。

ゴツゴツした岩肌の壁に叩き付けられる、壁に亀裂が入る程の一撃だった。

そのまま床に落下したアルフは、衝撃で全身ずたぼろになって床に這いつくばる。
プレシアはそんなアルフに近付くと、嘲る様な目で彼女を見下ろし、

「あの子は使い魔の作り方が下手ねえ…余分な感情が多すぎる…」

侮蔑する様に吐き捨てた。痛みに耐えながらアルフは顔を上げて、

「…フェイトは…あんたの娘は…あんたに笑って欲しくて…優しいあんたに戻って欲しくて…あんなに…」

傷の痛みに顔をしかめる。しかしそんなアルフの心からの叫びにもプレシアは何の痛痒も感じてはいないらしかった。

「躾のなってない犬には罰が必要ねっ！！」

プレシアはニタリと嫌な笑みを浮かべると、倒れているアルフの腹を蹴りつけた。

「ぐあっ！！」

アルフは血を吐いてのた打ち回る。
砲撃魔法を食らった箇所を蹴られていた。薄れる意識の中で、とっさに魔法で瞬間移動を試みる。

「なっ…！？」

いつの間にかバインドで拘束されていた、身動き一つ出来ない。プレシアは床に這いつくばるアルフを嘲りを込めて見下ろし、

「消してしまいたい所だけど…まだ生かしておいてあげるわ…使い道がありそうだからね…」

アルフは薄れ行く意識の中で、プレシアの哄笑を聞いたのを最後に気を失った。

ＡＭ１：０７八神家

深夜で静まりかえり月光が照らす庭先に、空気を切り裂くヒュンッという音と、布が風圧で煽られる微かな音がしていた。

誰かが闇の中で突きや蹴りなどの練習をしている様だ。その人物の上には一冊の本が宙に浮かんでいる。

練習しているのはゼロで、浮かんでいるのは『闇の書』であった。時々ゼロは練習を止め、『闇の書』に何か問い掛け、身振り手振りなどを交えて相談しているらしかった。

『闇の書』の方も浮き方や、宙を舞ったりして器用に何か伝え様としているらしい。一通り納得したらしいゼロが再び構えをとった時、

「眠れないのか…？」

家の中から深みのあるバリトンの声がした。

見ると月光に青い毛並みを照らされたザフィーラが四肢で立っていた。

「悪いな…起こしちまったか？」

構えを解き、済まなそうに謝るゼロ。
ザフィーラは首を振ると、

「たまたま目が覚めただけだ…それより後数時間で出発だぞ…眠れないのか…？」

ゼロは宙に浮いている『闇の書』を見ながら、

「少し思い付いた事があってな…みんな休んでっから『闇の書』に頼んで手伝ってもらってたんだ」

ザフィーラは感心した様子でゼロを見て、

「珍しい事も有るものだ…主だけで無く、ゼロにもすっかり懐いてしまったな…しかし『闇の書』と話せるのか…？』

「何か、こないだの記憶の件以来懐かれてな…話はテレパシーで何となくと…後は身振り手振りで何とかな…」

器用な話である。そういうゼロの頭にちょこんっと乗る『闇の書』だった。

ゼロは思い付いた様に手を叩くと、

「そうだザフィーラ、悪いが少し手伝ってくれっ」

ザフィーラは首を傾げた。

ーーーーーーーーーー

月光に照らされた庭先で、ゼロと人間形態のザフィーラが向かい合っていた。
2人の真上には『闇の書』がふわふわ浮いている。

「ゼロ…本当にいいんだな…？」

拳を軽く握り構えをとりながらザフィーラが尋ねる。
ゼロは不敵に笑い、半身に構え左手を前に突き出し、レオ拳法の構えをとる。

「構わねえ…強化魔法も使って思い切り入れてくれ！」

ザフィーラは静かに頷くと、

「行くぞ、ゼロっ！」

ザフィーラは一気に踏み込んで距離を詰めると、ゼロ目掛けて強烈なパンチを繰り出した。

獣人の筋力に加え、強化魔法で破壊力を増した拳は、コンクリートの壁をもぶち抜く。

一方のゼロは人間離れした身体能力を持ってはいるが、今の体はあくまで人間、まともに食らったら命が危ない。

（何ぃっ…！？）

驚くザフィーラ、てっきり避けると思っていたゼロが彼のパンチに真っ正面から向かって来たからだ。

（いかん…！止められん…！！）

突進して来るゼロにザフィーラの拳が炸裂する瞬間！
エネルギー同士が反発する鋭い衝撃音が響いた。

ザフィーラの拳がゼロの左手のひら数センチの所で止められていた。
驚くザフィーラにゼロは右の拳を繰り出す。その拳に何かの力が付加されているのを感じ取るザフィーラ。

「魔法防御しとけよっ、ザフィーラ！」

ゼロの言葉と尋常では無い力の気配に、とっさにザフィーラは体の全面に魔法障壁を張り巡らした。
魔力の壁にゼロの正拳突きが叩き込まれる。

「うおおっ…！？」

ザフィーラの体が後方に数メートルは飛ばされる。強固な魔法障壁が半ば突破されていた。

会心の笑みを浮かべるゼロ。後ろに飛び退いたザフィーラは感心した様に尋ねる。

「ゼロ…これは…？」

「ウルトラ念力だ。今の俺に残された最後の武器…魔導師の戦い方を見て、前から考えてはいたんだ…人の姿の時の強化に使えるんじゃねえかってな…」

ゼロはうまく行った喜びで『闇の書』に向けてサムズアップする。

ウルトラ念力は人間形態でも使える超能力で様々な用途に使用出来、フルパワーで使用すれば一時的に怪獣を吹き飛ばす程の力を発揮する事が可能だ。

しかし使い過ぎると寿命を縮めてしまう両刃の剣でもある。

なのは達の戦いを見て、魔法を使い重力や加速にかかるGを軽減したり、攻撃の際の威力アップさせる方法をウルトラ念力で代用出来るのではないかと思い付いたのだ。

もっとも念力は瞬発力には長けているが持続性には欠けるので、空を自在に飛び回ったり砲撃したりは出来ないが…

「これで今日は何とかなりそうだぜ…」

ゼロは拳を握り締めた。そんなゼロを見てザフィーラは少しだけ微笑み、

「只では転ばん男だな…ゼロは…」

「当たり前よ、俺はやられっぱなしで黙っていられる程、出来た男じゃねえっ」

にやりと笑って答えるゼロだが、不意に真面目な顔をするとザフィーラに右手を差し出した。

「今日はお前らに命を預ける…頼む」

ザフィーラも手を差し出し、ゼロの手をしっかりと握る。

「任せろ…盾の守護獣ザフィーラ…今日はゼロの盾となろう…」

決意の握手を交わす2人を青い月光が照らしていた。

ＡＭ５：１０八神家

リビングに八神家の面々が勢ぞろいしていた。

シグナム、ヴィータは騎士甲冑を纏い、各自のアームドデバイスを手に戦闘準備を整え、ザフィーラは狼の姿だ。ゼロを乗せる為である。

ゼロは、地球に最初に来た時に着ていた灰色系の民族衣装に似た上着にパンツ姿だ。

シャマルははやての護衛も含め家で待機する。少々ふらついている様子に見えた。

彼女はこの数日、シグナムとヴィータの魔力カートリッジをずっと作っていたのだ、魔力の使い過ぎである。

戦闘能力が低いシャマルはせめてこれ位はと、無理をしたのだ。

ヴォルケンリッター全員は僅かながらもはやてから魔力供給を受けているが、はやての負担を考え極力自前の魔力での活動を主にしている。

無理をすると当然そのツケは本人に降りかかって来る。
その事も有り、ゼロは申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
辛い思いをして来たみんなを再び戦わせる事になってしまったと…

「ゼロ…そんな顔をするな…これは我らの意思なのだぞ…」

シグナムがゼロの沈んだ顔を見て微笑んで声を掛けた。

「そうだぞゼロ、その話しはもう終わっただろ?いつまでもへこんでんのはゼロらしくねえぞっ」

ヴィータが『グラーフアイゼン』を肩に載せながらからかう様に励ます。ゼロは苦笑して、

「分かった、もう考えるのは止めだ!必ず『ウルトラゼロアイ』を取り戻して、ヤプールをぶちのめす!!」

みんなの思いを受け、ゼロは決意を込めて宣言した。

はやては戦いに赴く一人一人を抱きしめる。
彼女としてもみんなだけを戦わせたくはなかった…しかし今は信じるしか自分には出来ない…
はやては不安を押し隠し笑顔で見送ろうと決めていた。

はやては最後にゼロを抱きしめると、

「ゼロ兄…絶対みんなと無事に帰って来てな…美味しいもん沢山作って待っとるから…」

その言葉には強い意思が込められていた。
自分は何が有っても逃げず、みんなの帰って来るこの家を守ると、そんな思いを込めて笑った。

そんなはやての気持ちが痛い程分かったゼロも彼女をしっかりと抱きしめる。

「…当たり前だ…安心して待ってな…八神家は無敵だぜ…！」

そうはやてに告げると、ゆっくりと彼女の体を離した。

「じゃあ…行って来る、シャマル『闇の書』はやてを頼むぜっ」

シャマルは頷き、『闇の書』も宙に浮いて任せてという感じで上下に動いた。
片手を挙げてゼロはリビング中央に居るザフィーラの元に歩み寄った。

「頼むぜ、ザフィーラ」

「しっかり掴まっていろよ…ゼロ…」

ゼロはザフィーラの背に乗り、太い首をしっかりと掴んだ。

「行くぞっ…！」

シグナムが次元転移魔法を発動させる。４人の足下にベルカ式の三角形の魔法陣が展開された。

「行くぜ！敵の本拠地に殴り込みだ！！」

ゼロが叫ぶのと同時に４人は光に包まれ、『時の庭園』に向けて次元転移を開始した。

私は夢を見ていた。

昔母さんとピクニックに行った時の記憶が蘇ったのかな…？

夢の中で私はそんな事を思った。

優しく私に笑い掛ける優しかった母さん…

私の為に綺麗な花で花冠を作ってくれる母さん…

私は温かな気持ちに満たされた。

母さんは出来上がった花冠を私の前にかざして、

「ねえ…とっても綺麗ね…『アリシア…』」

アリシア…？母さん私はフェイトだよ…

そこでフェイトは目を覚ました。

しばらく夢の余韻でぼんやりする。自分の部屋のベッドの中だ、そこで彼女は昨日の事を思い出した。

プレシアに会おうとして断られ、アルフになだめられて横になった所から記憶が無い。

「…アルフ…？」

アルフの姿を探すが姿が見えない。

此処は広いから少し離れた場所にいるのか…そうフェイトは思った。

気を失った様に寝たお陰で体は幾分楽になっていた。

（…まずは母さんに頼まないと…）

フェイトは起き上がりマントを羽織ると、プレシアの居る玉座の間に向かった。

ガランとした広い空間の中をフェイトの足音だけが響いている。

玉座の間の扉の前に立つと、巨大な扉が軋む様な音を立ててゆっくりと開いていく。会ってくれるという事だろう。

フェイトは部屋の中に足を一歩踏み入れた時悪寒を感じた気がしたが、自分を奮い立たせる為に首を振ると部屋の中に入って行った。その先に何が待っているのかも知らず…

『時の庭園』に爆発音が響いた。

外壁にあたる岩盤部が攻撃を受けて砕かれ穴が穿たれていた。

立ち込める粉煙の中に立つ2つの人影が有る、シグナムとヴィータであった。

「ヴィータ…我らはゼロ達が侵入する為の陽動…せいぜい敵の目を引き付けるぞ…」

シグナムの言葉にヴィータは『グラーフアイゼン』を肩に載せ、ふんぞり返って、

「うっせえなあーっ、いちいち言われなくたって分かってんよ…」

憎まれ口を叩くが、口元が笑っている。

そんな2人の前の広大な部屋の床に次々と魔法陣が展開された。

魔法陣から続々と、西洋の鎧騎士の様な姿をした兵士が現れた。

しかしそのサイズは人間の数倍はある。

一番小さな奴でも3メートル近くある剣と楯を構えた金色の兵士に、飛行タイプの槍を構えた緑色の兵士、それに巨大な戦斧を携えた6メートル近くはある鉄色をした重装兵まで居る。

その数はどんどん膨れ上がり、数百体に及んだ。広い庭園内が鎧兵士に埋め尽くされる。

「傀儡兵か…侵入者を自動的に感知して攻撃する機械兵…」

シグナムは大軍に囲まれているというのに涼しい顔で言う。

「へっ…なら遠慮はいらねーな…！」

ヴィータもいつもの不遜な態度で傀儡兵を見渡す。

2人は胸の内に高揚感が湧き上がるのを感じた。

この世に生まれてから千年近く、マスター達の力への欲望の為だけに戦って来た彼女達が初めて自分の意思で戦いの場に立ったのだ。

「主はやてとゼロに感謝せねばな…この様な心持ちで戦いに臨める刻が来ようとは…」

シグナムは感慨深げな表情をし『レヴァンティン』を軽く上げる。

「へっ…」

ヴィータもそれに応える様に微笑んだ。シグナムはレヴァンティンを静眼の構えに似た構えをとり、

「主の為…家族の為…邪悪を伐つ…これこそ誠のベルカの騎士…！」

「今のあたしらに敵は無えっ！」

ヴィータもグラーフアイゼンを傀儡兵の群れに向かって構えた。

「烈火の将シグナム…」

「鉄槌の騎士ヴィータ！」

「「推して参るっ！！」」

2人は傀儡兵の群れ目掛けて飛び出した。それに反応して傀儡兵も一斉に地響きを上げてシグナムとヴィータに殺到する。

ヴィータは傀儡兵の群れに向かいながらゲートボールサイズの鉄球を3つ取り出した。

「グラーフアイゼン！」

《ｓｃｈｗａｌｂｆｌｉｅｇ》

掛け声と共に一気に鉄球を打ち出す。

魔力付与で灼熱色と化した鉄球が高速で飛来し、頑丈な傀儡兵の鎧を破片をばらまきながら次々とぶち抜いて行く。

続いてシグナムが叫ぶ、

「レヴァンティン！」

《ｓｃｈｌａｎｇｆｏｒｍ》

レヴァンティンから魔力カートリッジが排出され、レヴァンティンの刀身が分裂し、いくつもの節に別れた蛇腹剣と化した。

「はあああっ！」

シグナムの気合いと共に、数百メートル以上に伸びた刀身が巨大な大蛇の様に螺旋を描き、傀儡兵に襲いかかる。

まるで大蛇が地面を這っているかのごとく、刀身が傀儡兵をまとめて巻き込んで粉砕する。

あっという間に数百体は居た傀儡兵の数が減って行く、シグナムもヴィータも鬼神のごとき強さであった。

千年近い戦闘経験は伊達では無い。

ヴィータは宙を舞い、残っている傀儡兵の一団の中央に降り立つ、傀儡兵達は警戒しバリヤーを張り巡らした。ヴィータはニヤリと笑い、

「ぶちかませ！アイゼンっ！！」

《ｊａｗｏｈｌ》

グラーフアイゼンで周囲の傀儡兵をバリヤーごと、根こそぎ叩き壊す。

盛大な破片が辺りに飛び散った。

一方のシグナムには巨大な戦斧を振り回す、６メートルサイズの重傀儡兵が襲いかかった。

巨大な戦斧が唸りを上げてシグナム目掛けて振り下ろされる。

彼女は振り下ろされる戦斧をわずかな動きでかわし、床に食い込む戦斧を蹴ってジャンプする。

重傀儡兵の頭上に出ると、頭から股関にかけて一気に唐竹割りに切り裂いた。

重傀儡兵の体が左右に別れ、地響きを立てて床に倒れ込む。

ものの１０分足らずで数百体は居た傀儡兵はガラクタの山と化していた。

シグナムとヴィータは一発の攻撃も貰ってはおらず、息一つ乱れてはいない。

「思ったより歯ごたえがねえでやんの…」

傀儡兵の破片の山に立って周りを見渡しながらヴィータはつまらなそうに言う。

「安心しろヴィータ…本番はこれからだ…来た様だぞ…」

シグナムが何かの気配を察してヴィータに注意を促す。

シグナムの言う通り、何か巨大なものが近付いて来るのをヴィータは感じ取った。

それは唸りを上げて、こちらに向かって来る。雷の様な足音が響く、床がそれに伴い揺れ動いた。

シグナムとヴィータの前方の数十メートルはある巨大な扉が重い軋み音を立てて開いて行く。

凶暴極まりない大音量の獣が吼える様な唸り声が響く。

地響きを上げて、２匹の異形が姿を現した。

黒っぽいゴツゴツした体に左右の腕にスパイク付きの鉄球と鎌を装備した『殺し屋超獣バラバ』

真っ赤な体に胸部にソーセージの様な瘤をまとわりつかせ、特徴的な細い口を持つ『火炎超獣ファイヤーモンス』

２匹は雄叫びを上げて、シグナムとヴィータに襲いかかった。

つづく

第２０話　庭園への挑戦や（後書き）

今回出て来た殺し屋超獣バラバですが、マイナーか微妙です。タイラントの手の人と言った方が有名かもしれません。

ファイヤーモンスは知ってる人居るんだろうか？と心配になりますが、承知で出したのはこいつが炎の剣を持っているからでして…

それぞれシグナムとヴィータに合わせた訳です。

話は変わりますが、ヴィータとなのはの間にこんな事が有った…かもしれません。

「フェイトちゃーん待って～お話ししましょう～」

「高町なんとかしつけえ～っ！」

「今日はどうしたの～目つきも何か悪いし、やさぐれてない～っ？」

ぶちっ！ヴィータはキレた。

「上等だ…高町なんとか…ぶち殺す！」

「ああっ、フェイトちゃんがバルディッシュを持って大回転した？まさかフェイトちゃんの新必殺技！？」

すいません忘れて下さい。

では次回
『死闘！超獣ＶＳヴォルケンリッター』でお会いしましょう。

第２１話　死闘！超獣ＶＳヴォルケンリッターや（前書き）

バトルの連続です。
うまく書けているか非常に不安ですが、第２１話です。

第２１話　死闘！超獣ＶＳヴォルケンリッターや

数年前『時の庭園』

プレシアは『ヤプール』のオーバーテクノロジーに酔いしれていた。

『ヤプール』と名乗った女は、プレシアの意思でいつでも始末されるという事実を知り、素直に協力する事を承知した。

それから『女ヤプール』は数々の異次元科学の成果をプレシアに提供した。

それはプレシアの想像を遥かに上回るものではあったが、彼女の求めるものにはまだ届かなかった。

そんなプレシアに『女ヤプール』が一つ提案が有ると言い出した。

《『アルハザード』を知っているか…？》

プレシアは小馬鹿にした様に笑い、

「そちらにも『アルハザード』の伝説があるの…？おとぎ話でしょう…時間をも自由にし、死者も蘇らせる技が眠る都…馬鹿馬鹿しい…」

そう吐き捨てる彼女に『女ヤプール』は、光彩の無いどろりとした瞳で、非人間的な笑みを浮かべ、

《それが本当に存在しているとしたら…どうする…？》

と、静かにプレシアに告げた。

ーーー

匹の巨体で狭く感じてしまう。

シグナムは『レヴァンティン』にカートリッジを補充しながら、

「ヴィータ、ゼロからの各超獣の知識は頭に入っているな…？」

「当然っ！」

ヴィータも『グラーフアイゼン』にカートリッジをセットしながら、超獣達を睨み付ける。

その時、バラバとファイヤーモンスが同時に2人目掛けて火炎を口から発射した。

シグナムとヴィータはすぐさまその場から離れる。

火炎が命中した岩の壁面が真っ赤に融解した。

2匹はそのまま連続して宙を飛ぶ2人を狙って火炎を吐く。

火炎攻撃を避けながらシグナムがヴィータに念話を送る。

《気を付けろヴィータ、性能は前と同じで強化はされていない様だが…まともに食らえば防御魔法もそう長くは保たんぞ…》

《だったら、先にぶっ潰してやんよっ！》

ヴィータは火炎攻撃で火の海と化した空間の中、アイゼンを構え、

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

《Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ》

カートリッジが圧縮された余剰魔力と共に排出される。

グラーフアイゼンのハンマー部分が組み換えられ、ハンマーヘッドの片方にスパイクが、もう片方に噴射口が形成された。

「ラケーテン…！」

アイゼンの噴射口から推進剤が唸りを上げて噴出される。

その勢いでヴィータはアイゼンを高速で振り回し、赤いスカートをなびかせながら遠心力を生み出す。

次の瞬間その勢いのままロケット推進で更に加速し、一気にバラバに突っ込んだ。

「ハンマぁーっ！うおおおおおおおっ！！」

バラバの頭目掛けてアイゼンを振り下ろす。

しかしバラバも右手のスパイク付きの巨大な鉄球を、その強大なパワーで振り回して迎え撃つ。

ガッギイーンッ！！

という鋭い金属音が響く、火花を散らしてアイゼンとバラバの鉄球が真っ向からぶつかり合っていた。

バラバのパワーとアイゼンのロケットのパワーがせめぎ合う。

「うわあっ！？」

バラバのパワーがアイゼンを押し返す。ヴィータは耐えきれずに跳ね飛ばされてしまった。

「ヴィータっ！」

シグナムが叫ぶ。しかしヴィータは空中で姿勢を立て直し、再びバラバに向き直る。

バラバは勝ち誇った様に鉄球を振りかざした。

「ちくしょう…あたしに向かって、打撃で来ようってのか…上等だ！」

ヴィータはアイゼンを構え直しバラバをきつく睨み付けると、

「シグナム！コイツはあたしがやる！！」

そう言うとバラバに向かって突進して行った。シグナムは苦笑すると、

「判った…あまり熱くなるなよ…ならば、こちらは私がやろう…！」

火炎攻撃を続けるファイヤーモンスに向かう。火炎弾を避けながら、カートリッジをロードした。

シグナムの足下に紫色の魔法陣が展開し、魔法光が体の回りで渦を巻く。その中でレヴァンティンを振りかぶった。

「飛竜…一閃っ！！」

レヴァンティンが蛇腹状に分割し、抜き打ちに目にも留まらぬ速さの斬撃が放たれた。

紫色の魔法光に包まれた斬撃が空を走り、袈裟掛けにファイヤーモンスに炸裂する。

「むっ…！？」

シグナムは攻撃の結果を見て唸る。
ファイヤーモンスは飛竜一閃を食らってもダメージを受けた様子は無い。
生体装甲に傷が付いた程度だ、傀儡兵とはケタ違いである。

「やはり…一筋縄では行かないな…」

シグナムは一旦距離を取る。その時ファイヤーモンスが鋭い爪の付いた右手を顔前にかざし、手を広げた。

（何をする気だ…？）

シグナムが不審に思った時、ファイヤーモンスのその手に巨大な剣が現れた。
どこからか転送されて来た様である。

ファイヤーモンスがひときわ高く吼えると、２０メートル近くある剣の刀身が炎に包まれ業火の剣と化す、輻射熱がシグナムにも届いて来る。

「…ふふふ…、そうか…貴様にはそれが有るのだったな…ウルトラマンをも一度は葬った『炎の剣』なる物を…」

シグナムは戦鬼の笑みを浮かべた。レヴァンティンを両手で構えると、

「面白い…貴様の炎の剣と炎の魔剣レヴァンティンとの勝負だっ…！！」

彼女はファイヤーモンスに向かい、二撃目の斬撃を放つべくカートリッジをロードした。

その頃ゼロとザフィーラは、別ルートから庭園内に侵入する事に成功していた。
人気の無い、静まり返った古びた神殿の様な室内を、ゼロと狼の姿のザフィーラが駆けていた。

時たま地鳴りの様な微かな振動が感じられる。
ゼロは走りながら振動の方向を向いて、

「派手にやってるみてえだが…2人共大丈夫か…？」

心配そうに言う。横を走るザフィーラは視線をゼロに向け、

「…シグナムもヴィータも一騎当千の戦騎…滅多な事ではやられはせん…」

安心させる様に言った。頷くゼロ、今は信じるしか無い。自分がやるべきは一刻も早く『ウルトラゼロアイ』を取り返す事…

ゼロは走りながらも精神を集中させ、その超感覚で庭園内の気配や音を探る。

かなり奥の方から、人の会話らしきものを捉えた。

「こっちだ、ザフィーラっ」

2人はゼロの超感覚に従って通路を走り、次の角を曲がる。その時だ。通路上に光る魔法陣が次々と現れ、傀儡兵が姿を現した。瞬く間に通路を埋め尽くす。

傀儡兵と対峙しながらザフィーラが、

「…どうやら警報装置に掛かった様だ…迂回するか…？」

ゼロは首を振り、戦闘的な笑みを浮かべると、

「見つかったからには時間を掛けたら不利だ。ぶちのめして通るしか無えっ！」

ザフィーラも頷く、

「…判った…」

「おうっ！行くぜ、ザフィーラっ！！」

2人は猛然と傀儡兵の群れに突っ込んだ。傀儡兵達も武器を振り上げて向かって来る。

「縛れ、鋼のくびき！」

突如床から無数の槍状の物体が突き出し、傀儡兵を串刺しにする。ザフィーラの攻撃にも転用出来る防御魔法だ。

その後に続き、ゼロは傀儡兵の群れの中に突入する。

正面の傀儡兵目掛けて念力の応用で弾丸の様なスピードで跳躍し、その勢いの正拳突きが腹をぶち抜いた。

そのまま、破片を飛び散らして崩れ落ちる傀儡兵の背を足場に更に跳躍すると、剣を構えて襲いかかる別個体に回し蹴りを放つ、

「退けええっ！！」

ウルトラ念力で強化された回し蹴りが、傀儡兵の胴体を横凪ぎに叩き壊した。

「行けるぜっ！！」

ばらまかれる破片の雨の中、ゼロは闘争本能を剥き出しで笑う。

その時、壁をぶち抜いて大型の傀儡兵が現れた。戦斧をゼロ目掛けて振り下ろす。

「しまったっ！！」

完全に不意を突かれたゼロは使い慣れていないせいで、とっさに念力を発動出来ない。その為対応が遅れた。

（やべえっ！！）

そうゼロが思った時、巨大な戦斧が激突音と共に光る魔法陣により止められていた。

見ると、ゼロを庇ってザフィーラが防御魔法を展開している。

「悪い、ザフィーラ、助かったぜ…」

ゼロはほっとした顔で礼を言う。
ザフィーラはゼロの方に顔を向け、

「まだ使い慣れてないようだな…無理をするなゼロ…」

そんな2人に大型傀儡兵は更に二撃目を食らわせるべく、巨大な戦斧を振り上げた。

「それじゃあ、実戦で練習するとすっか！！」

「今の状況では仕方ないか…！」

２人は戦斧が振り下ろされるより早く、大型傀儡兵に向けて跳んだ。
ゼロの正拳突きが、ザフィーラの鋭い爪が同時にその胴体を粉々に粉砕する。

２人は壁を蹴って再び敵の真っ只中に跳ぶ。

「雑魚共、そこを退きやがれっ！！」

ゼロは傀儡兵の群れの中に飛び込みながら吼えた。

勝ち誇る様に立ちふさがるバラバとファイヤーモンス。

庭園内のその空間は炎で温度が上昇し、あちこちの岩盤がぶち抜かれ無惨な様子になっている。

その中でシグナムとヴィータは満身創痍で超獣達と対峙していた。

２人共騎士甲冑のあちこちが破れ、火傷を負い流血もしている。呼吸も荒い、無理も無い１対１で超獣と戦っているのだ。

「野郎～っしぶてえ…」

ヴィータが超獣達を睨み舌打ちする。
既に一人当たり２０発は有ったカートリッジが残り少なくなっていた。

シグナムもヴィータもそれだけの攻撃を打ち込んだのだが、超獣達は全ての攻撃を耐えきって逆に攻撃を仕掛けて来る。

「…想像を絶する耐久力だな…」

シグナムが超獣達を見上げながら呼吸を整える。

「クソっ…化け物が…」

ヴィータは額から流れる血を拭う。その手にも血が滲んでいた。
シグナムは残りのカートリッジをレヴァンテァンにセットし、

「…だが…退く訳にはいかん…！今こいつらをゼロ達の元にやる訳にはいかんのだ…！」

「わーってるよ…！」

ヴィータはアイゼンを肩に載せ笑った。
ゼロ達の侵入は気付かれたらしい、先程から2匹の超獣はしきりに他の場所へ移動しようとしている。

それを何とかシグナムとヴィータで抑えているのだ。
ヴィータはグラーフアイゼンを再び構えると、

「ぜってえ退かねえ…はやてが待ってんだ…ゼロとみんなで帰るって約束したんだ…」

「そうだな…」

シグナムが微笑んで応える。
ヴィータは超獣達のぎらつく目を見据え、

「…やっと巡り会えたんだ…こんな奴らの為にみんなで暮らす世界を壊されてたまっかよ!!」

「…その通りだな…」

シグナムは瑠璃色の瞳に戦闘意欲をたぎらせてレヴァンテァンを構えた。

「長期戦は不利だ。一気に叩き切る!」

「判ってら!行くぜえっ化け物っ!ぶっ潰してやる!!」

シグナムとヴィータはケリを着けるべく、加速して超獣達に挑んだ。

ファイヤーモンスが炎の剣をシグナム目掛け横殴りに切りつける。
図体の割に動きが速く、強大なパワーで振るわれる剣は風圧だけでも衝撃波となってシグナムを襲う。
彼女は寸での所で回避するが、そこを狙ってファイヤーモンスが口からミサイルを連続発射する。

「ぬうっ…！」

ミサイルの爆発を魔法防御で耐えるシグナムに、ファイヤーモンスが2撃目の斬撃を繰り出した。

「ちいっ！レヴァンティンっ！！」

《Ｐａｎｚｅｒｇｅｉｓｔ》

回避が間に合わないと判断したシグナムは防御を固めるが、炎の剣の一撃で魔法防御を砕かれた。

迫る巨大な燃える刀身をシグナムはレヴァンティンで受け止める。

凄まじい炎と熱がシグナムを襲う。騎士甲冑無しでは1秒で炭化してしまうだろう。

更に衝撃に耐えられず、吹き飛ばされてしまった。

岩盤の壁にたたきつけられ壁にめり込んでしまう。一瞬息が詰まった。

（ぐはっ…！）

とどめをとばかりにファイヤーモンスが炎の剣を突き出しシグナムに迫った。

ヴィータのグラーフアイゼンの渾身の一撃とバラバの鉄球が再びぶつかり合った。
またしても吹き飛ばされそうになるヴィータだが、

「アイゼンっ！カートリッジロードっ！！」

《ｊａｗｏｈｌ》

連続してカートリッジを使う、アイゼンのロケット推進が爆発的に増大した。

「この野郎おおおっ！！」

今度はヴィータが競り勝った、後退するバラバ。

（やった！）

ヴィータがそう確信した時、鋭い一撃が彼女を襲う。肩を切り裂かれ床に落下してしまった。

それはバラバのもう一つの武器、左手の大鎌がヴィータを襲ったのだ。

ヴィータは歯を食いしばり何とか立ち上がる、肩から血が滴っていた。しかし彼女は不遜に笑いバラバを見上げると、

「どうした…デカブツ…！こんなの全っ然痛くねえぞ…！そのナリであたし一人潰せないのかっ！！」

ヴィータの挑発に怒ったのか、バラバの頭頂部に三又の巨大な剣がせり出してきた。バラバの隠し武器である。

バラバは怒りの叫びを発し、頭頂部の剣をヴィータ目掛けて発射した。

シグナムに迫るファイヤーモンス、炎の剣が業火と化して一直線に彼女を突き刺ささんと突き出された。
シグナムはまだ壁に突っ込んだまま動けない。

ザグリッ！と音を立て、炎の剣がバターに差し込まれたナイフの様に深々と岩盤に突き刺さる。

勝利を確信したファイヤーモンスが雄叫びを上げ様とした時、その目に寸での所でその一撃から逃れたシグナムが映った。

ファイヤーモンスは岩盤に刺さったままの炎の剣を抜こうとするが深く刺ささり過ぎて直ぐには抜けない。

そこを狙いシグナムはレヴァンティンを振りかざした。

「紫電…一閃っ！」

炎と化したレヴァンティンの一撃が炎の剣の側面に打ち込まれる。
バギンッ！と音を立てて炎の剣が根元からへし折られていた。

驚愕の声を上げるファイヤーモンス。
どんな剣でも側面は弱い、元々刀剣の類は刃の部分で衝撃を受ける様に作られているのだ。

炎の剣とて例外では無かった様だ。

「剣は優れていても使い手が悪かったな…！」

シグナムは素早く飛び上がり、カートリッジを装填しながらファイヤーモンスの上空に出た。

レヴァンティンを振りかぶり、ファイヤーモンスに切り掛かる。

炎の剣をへし折られ動揺していた様子のファイヤーモンスだが、効かないと判りきっているのか敢えて受けるつもりで両腕を広げた。

「馬鹿め…紫電…一閃っ！」

渾身の力を込めた斬撃がファイヤーモンスの肩に打ち込まれた。

「グギャアアアッ！？」

次の瞬間、ファイヤーモンスの悲鳴に似た叫び声が響く。

レヴァンティンが打ち込まれた箇所の生体鎧が袈裟掛けにバックリと裂けていた。

「己の力を過信し過ぎたな…」

シグナムは傷だらけの顔で不敵に笑った。
驚くべき事にシグナムは初撃の飛竜から今までの攻撃全て、寸分違わず同じ箇所を攻撃していたのだ。

動き回る相手への一点集中攻撃、恐るべき手腕であった。

シグナムは叫ぶ、

「レヴァンティン！カートリッジ全ロード！」

《ｊａｗｏｈｌ》

レヴァンティンからシリンダー内の全カートリッジが一度に排出された。

暴発覚悟で一気に魔力を高めたのだ。レヴァンティンの刀身の炎が爆発的に増大する。

「レヴァンティンっ！叩っ切れっ！！」

《ｊａｗｏｈｌ！》

レヴァンティンがファイヤーモンスの肉に一気に食い込む。

「はあああああああああっ！！」

シグナムの気合いと共に、レヴァンティンがファイヤーモンスの真っ赤な巨大な体を肩から腰にかけて真っ二つに両断した。

ヴィータに迫るバラバの巨大な剣、しかし彼女は逃げない、グラーフアイゼンをロケットフォルムに変化させる。

「待ってたぜ！そいつを、ラケーテン・ハンマーっ！！」

ロケットの勢いでバラバの剣を打ち返した。
打ち返された剣はバラバの腹に突き刺さる、うめき声を上げるバラバ。それと同時にヴィータはバラバの後ろに回った。

「今だっ！アイゼンっ！！」

《Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ》

アイゼンのハンマー部が赤く輝き、ヴィータの身の丈程も有る角柱状に巨大化した。

足元に赤い魔法陣が展開する。
するとグラーフアイゼンが数十メートルまでに巨大化した。
グラーフアイゼンのフルドライブバーストモードだ。

ヴィータは一気にバラバの頭の高さまで飛び上がると、超巨大サイ

ズのアイゼンを振りかぶった。

「轟天！爆砕！ギガントシュラークっ！！」

周りの壁をぶち壊しながら轟音を上げて巨大なハンマーがバラバの弱点の後頭部に炸裂した。

「キシャアアアアッ！！」

悲鳴を上げるバラバの目玉が衝撃で飛び出していた。
しかしまだ倒れない、凄まじい生命力だった。

ヴィータも一撃で息の根を停められるとは思っていない。
更にアイゼンをぶん回して二撃目を見舞う。

衝撃で吹っ飛び、壁にめり込んだ。それでもバラバは動いている。

「しぶてえっ！この野郎っ！！」

ヴィータは三撃目を繰り出す。更に壁に亀裂を作ってめり込んだ。

四撃目！バラバの頭蓋骨にようやくひびが入る。

ヴィータのアイゼンを持つ手から血が飛び散る。最後の力を振り絞った。

「ぶっ潰れろおおおおっ！！」

五撃目がバラバの後頭部に唸りを上げて打ち込まれた。

硬い物が砕ける感触、アイゼンが岩の破片を撒き散らし壁をぶち抜くと共に、バラバの頭が完全に粉砕された。
大量のどす黒い血を噴水の様に撒き散らし、バラバは動かなくなった。

アイゼンが元のサイズに戻って行く。ヴィータは飛行魔法を維持出来なくなり、ふらふらと床に着地し膝を着いた。

ふと横を見ると、自分と似た様な様子だが、とりあえず立っているシグナムが居る。

「…立てるか…？ヴィータ…」

シグナムが厳しい顔付きで聞く、ヴィータはよろめきながらも立ち上がった。

「当たり前だ…これ位…」

相変わらずの不遜な態度で応える。
シグナムも仕方ない奴といった風に笑い、

「…カートリッジは何発残っている…？」

ヴィータはポケットを探り、

「…後２発…」

シグナムは扉の方向を見てレヴァンティンを構え、

「…そうか…こちらは3発だ…」

「…そうかよ…ちょっとキツいかもな…」

ヴィータは苦笑いを浮かべ、アイゼンを構えた。

扉の向こう側に無数の傀儡兵が金属音を立てながら、大挙してやって来るのが見えた。

プレシアの元に向かうフェイトは、庭園が揺れているのに気付いた。

（…何か有ったのかな…？）

この『時の庭園』はちょっとやそこらではびくともするものでは無い事を知っているだけに不安になる。

そう考えている間にプレシアが居る玉座の間の二つ目の扉の前に着いていた。

《入りなさい…フェイト…》

プレシアの念話が聞こえた。
その声に何故か言い知れぬ不安を感じながらもフェイトは扉を開けた。

つづく

第２１話　死闘！超獣ＶＳヴォルケンリッターや（後書き）

バトルの連続であります。

ジャンル恋愛なのに、どこが恋愛なんだ?と自分にツッコミを入れたくなる今日この頃ですが、めげずにがんばります。

では次回
『遠い都アルハザードや』
でお会いしましょう。

第２２話　遠い都アルハザードや（前書き）

読んで下さり本当にありがとうございます。
感謝の言葉しかありません。

では第２２話です。

第２２話　遠い都アルハザードや

玉座の間の扉を開くフェイト。扉は軋む様にゆっくりと開いた、意を決して足を踏み入れる。

部屋の中に入ったフェイトの目に、床より数段高い高座に置かれた豪奢な椅子に座り、頬杖を着くプレシアの姿が映った。

何の感情も読み取れない冷たい目でフェイトを見下ろしている。

フェイトはプレシアを見上げた。動悸が早くなるのを感じる。

プレシアは頬杖を付着いたまま、ねっとりと口を開く、

「それで…何の用なの…？フェイト…」

フェイトの心臓の鼓動が更に早くなる。萎縮してしまいそうになる心を抑え、両手に力を込めると、

「…お…お願いしますっ…ゼロさんから盗った物を返してあげて下さい…！」

深々と頭を下げた。足が震えている、無理もなかった。

ひたすら母の命令に無条件で従い続けて来たフェイトが初めてプレシアに意見したのだ。

プレシアはそんなフェイトの様子を高所からつまらなそうに見下ろし、

「…珍しい事も有るものね…フェイトが私に意見しようだなんて…」

毒の籠もった口調で言う。フェイトはその言葉に竦みかけたが、自らを奮い立たせてもう一度頭を下げる。

「…お願いします…ゼロさんは何の関係も無いんです…だから、盗った物を返して下さい…！」

必死だった。自分がどんな目に遭おうが、ゼロに母が盗った物を返したかった。

それだけは譲れない、この数日フェイトが苦しみ抜いた末に出した結論だった。

それは新たにゼロやなのはといった他人と関わった事で、今までプレシアに従って来ただけのフェイトに変化を促したのかもしれない。

プレシアは頭を下げたままのフェイトを侮蔑した様に見ると、

「それは出来ない相談ね…万一邪魔でもされたらたまらないのわ…」

「…邪魔…？ゼロさんがどうし…」

顔を上げたフェイトが理由を問おうとした時、またしても庭園が微かに揺れた。

「…何？また揺れてる…」

とっさに辺りを見回すフェイト。プレシアは動じる様子も無く頬杖を着いたまま、

「どうやらネズミが入り込んだ様ね…どうせ直ぐに片付くわ…」

呟く様に言った。不審そうな顔をするフェイトだが、先程の言葉に引っ掛かり、

「…邪魔って…どうしてゼロさんが邪魔になるんですか…？」

プレシアは冷たい目でフェイトを見ると、

「あなたに説明しても判らないわ…只放っておくと…『アルハザード』へ渡るのを邪魔されるかもしれないからよ…」

フェイトはここでおとぎ話の都の名前が出て来たので訳が判らなってしまった。

確か前に読んだ本で読んだ事が有る。伝説の都で『ミッドチルダ』の子供にも割と知られている話だが…

プレシアは困惑するフェイトを嘲笑う様に笑みを浮かべ、

「『アルハザード』は実在するのよ…私はその場所へと至る道標を手に入れたわ…！」

更に混乱して立ち尽くすフェイトにプレシアは凶気の眼差しを向け、

「それには『ジュエルシード』を使って大規模な『次元断層』を発生させる必要が有る…放っておくとあいつは必死で邪魔するでしょうからね！」

フェイトの顔が真っ青になっていた。

「かっ…母さん、待って…そんな事をしたら周りの次元世界も一緒

に…」

「そうね…次元断層で周りの次元世界は全て消滅するでしょうね…でもそれがどうかして…？」

プレシアのその目には迷いや逡巡といった感情は欠片も無かった。

フェイトは愕然とした。まさか母が『ジュエルシード』をそんな事に使おうとは思ってもみなかったのだ。

「そ…そんな事をしたら沢山の人が死んでしまいます…母さんだって捕まったら、数百年の隔離幽閉どころじゃ済まない…止めて下さいっ」

プレシアは必死で懇願するフェイトをつまらなそうに見下ろすが、にたりと邪悪な笑いを浮かべると、空間モニターを操作し、

「私を捕まえる事も邪魔する事も誰にも出来ないわ、見なさいフェイト！」

フェイトの前に空間モニターが次々と映し出された。

「…これは…！？」

驚くフェイト。それは庭園内の最深部の映像だった。

グランド何個分はある広い空間におびただしい数の巨大な異形の怪物がひしめいていた。

毒々しい原色の体が薄暗い空間の中で蠢いている。

「見なさい！私は『ヤプール』の力を手に入れたのよ！この力が有れば恐れるものなど何も無いわ！！」

感情が激したのかプレシアは立ち上がり、両手を広げ恍惚の表情を浮かべた。

庭園内にこんな怪物が居る事に全く気付いていなかったフェイトは声も出ない。
そんな彼女の前に新たな映像が映し出された。それを見たフェイトの目が驚愕で見開かれた。

「…えっ…？」

何かの生物の様な蠢く物体に裸体を半分程埋没させた少女の姿が映し出されていた。
そしてその少女はフェイトと瓜二つだった。

「…わ…私…？」

ショックで思わず後ずさるフェイトにプレシアが言い放った。

「これが私の本当の娘…アリシアよ…フェイトあなたは私がこの超獣達と同じ技術で作ったアリシアの偽物なのよ！！」

フェイトは自分の中で何かが壊れていくのを感じた。

（フェイトちゃん…）

次元の海を航行する『アースラ』の艦橋で、なのはは昨日クロノから聞いた話を思い出していた。
現在アースラは大まかな探索位置を頼りにプレシアの本拠地を探している。
昨日、なのはに沈痛な面持ちのクロノがフェイトについて判った事実を話してくれた。

「最初の事故の時…プレシアは実の娘『アリシア・テスタロッサ』を亡くしている…彼女が最後に行っていた研究は使い魔を超えた人造生命の生成に死者蘇生の秘術…フェイトという名は当時プレシアの研究につけられた開発コードだ…」

「…そ…それって…やっぱり…」

なのはには専門的な事は判らなかったが、それが何を意味しているのかは察する事が出来た。
クロノは頷いて、

「…そう…フェイトはアリシアのクローンだ…」

なのはは心が自分の事の様に痛むのを感じた。

（この事を知ったら…フェイトちゃんはどうなってしまうんだろう……？）

なのははフェイトの淋しそうな顔を思い浮かべた。その時だった。

「大規模な魔法戦闘の反応を捉えました！」

エイミィの叫び声がアースラ艦橋に響いた。

フェイトは自分の足元が崩れていく感覚を感じていた。

頭の中がぐちゃぐちゃしていた。信じていたもの全てが偽物、自分すらも偽物。

本当の事なんて何も無い。視界が意味を成さなくなっていた。プレシアを見ている筈なのに見えていない感覚。

全部悪い夢だと思いたかった、しかし残酷にも真実を告げるプレシアの蔑んだ様な声だけがフェイトに突き刺さる。

「おかしいと思わなかった…？記憶の中であなたは何て呼ばれてたの…？」

フェイトは思い出す。何故今まで不思議に思わなかったのか…記憶の中でプレシアは自分の事をアリシアとしか呼んでいなかった。

プレシアの更なる言葉が放たれる。

「作り物の命は所詮作り物…失った者の代わりになる訳も無い…フェイト…あなたはやっぱりアリシアの偽物…せっかくアリシアの記憶をあげたのに…とんだ出来損ないだわ！」

呆然と立ち尽くすフェイトの足元に何か重いものが投げ捨てられる音がしたが、それすらも今の彼女には気付けない。

「アリシアを蘇らせる間に慰みに使うだけのお人形…だからもうあなたは要らないわ…吐き気がする程大嫌いなフェイト！」

最後の言葉がフェイトの胸に突き刺さった。拒絶の言葉、この世の全てから否定された気がした。フェイトの目から一筋の涙が流れ落ちる。

何もかもが終わったと感じ体中の力が抜ける。生きる為の気力すら抜けて行く気がした。フェイトは床に崩れ落ちていた。

プレシアはゆっくりと倒れているフェイトに歩み寄る。

虚ろな目をして動かないフェイトに悪魔のごとく囁いた。

「そんなあなたでも最後は私の役に立ってちょうだい…そこに転がっている駄犬と一緒ににね…」

プレシアのその言葉にも、絶望に打ちひしがれているフェイトの耳

には聞こえていない。自分の前に転がっているものも判らない。

床に転がされていたのは全身ずたぼろのアルフだった。その後ろにはいつの間に現れたのか『マザロン人』が立っている。

プレシアは床に転がるフェイトとアルフを一瞬見た後に、

「じゃあ…後はこの2人を超獣製造機に放り込んでおいて…きっと強力な超獣になってくれるわ『リンカーコア』を持った超獣にね…あははははっ！」

マザロンに命令し、狂った様に笑った。

「カシコマリマシタ…プレシア様…」

マザロン人は頭を下げると、壊れた人形の様に倒れているフェイトとアルフに節くれだった手を伸ばした。

その時だった。

「汚え手で2人に触るんじゃねえっ！！」

怒鳴り声と共に突如として玉座の間の壁が轟音を上げてぶち抜かれていた。

崩れた壁の破壊孔から現れたのは、凄まじい怒りの目をし拳を握り締めたゼロであった。

後ろから人の姿のザフィーラも姿を現わす。

ゼロは髪の毛が逆立たん程に全身に怒りをみなぎらせて、プレシアを睨んだ。

「…貴様がフェイトの母親か…」

明らかに怒りを抑えている低い声を絞り出す。
ゼロはこの部屋にたどり着くまでに、その超感覚で今までのやり取りを全て聞いてしまったのだ。

それならゼロの性格上、直ぐに殴りかかっても不思議では無いのだがそうはしなかった。何故なら…

「…あなたがウルトラマンの坊やね…よく此処が判ったわね。そこの出来損ないが失敗でもしたのかしら?」

プレシアは床上のフェイトを見て吐き捨てる。
ゼロはそんなフェイトを痛ましそうに見ると、

「この子は、そんなへまはしねえ…そこの目ん玉のボケ野郎を着けて来たんだよっ!」

マザロン人を指差した、驚くマザロン。じろりと睨むプレシアに慌てて頭を下げた。

「…モッ申シ訳アリマセンッ」

恐縮するマザロンを尻目にプレシアはゼロを見下す様に笑みを浮かべ、

「…それで私を殺しに来たって訳…？だったら早くかかって来たらどうなの…？」

「……」

ゼロは無言だ。プレシアはその様子を見て、

「…そう…正義の味方として『ヤプール人』と戦いに来たのに、実はヤプールの力を手に入れた人間が相手で躊躇っているのかしら…？」

さも可笑しくて堪らないといった調子で言う。

ゼロは唇を噛む、その通りであった。プレシアの話を聞いた彼は衝撃を受けていた。

相手が『ヤプール』では無くフェイトの母親だったという事もショックだったが、それ以前に、

「…フェイトの体の傷もお前がやったのか…？」

無惨な体の傷を思い出しゼロの声が更に低くなる。プレシアは侮蔑した目でフェイトを見ると、

「そうよ…この出来損ないがあまりに使えないから躾（しつけ）をしたまでよ…」

「ふざけるなっ！クローンだろうと正真正銘お前の娘だろうが！子供に順番を付けんのか、それでも親かっ！！」

激興したゼロは思わず怒鳴っていた。

幼い頃とある事情から施設で育った彼には人一倍親の愛が大事に思える。

そんなゼロにはプレシアの様に我が子を虐待する様な人間の存在を信じたくなかった。

プレシアは激興するゼロを醒めた目で見ると、

「…うるさいわね…アリシアを蘇らせる事以外どうでもいいのよ！それよりこれを取り返しに来たんでしょう…？」

そう言うとマントの中から『ウルトラゼロアイ』を取り出しニヤリと笑った。ハッとするゼロは反射的にプレシアに飛びかかろうとするが、

「返してあげるわ…！」

そう言うと、プレシアは『ウルトラゼロアイ』を高く放り投げた。

（どういうつもりだ！？）

ゼロは不審に思ったが黙って見ている訳にはいかず駆け出した。

「ゼロっ…！」

ザフィーラも罠を警戒して飛び出すが、その前に何処から現れたのか、不気味なのっぺりとした仮面の『銀星人宇宙仮面』が立ちふさがった。

ザフィーラを掴もうと手を伸ばして来る。

（いかん…確かこいつの能力は…！）

ザフィーラはとっさに横に飛んで逃れる。勢い余った宇宙仮面の手がそこに有った太い柱に触れると柱は火花を上げて爆発した。

（こいつは俺が引き受けるしか無い…！）

ザフィーラは宇宙仮面に向かい拳を構えた。

ゼロは放物線を描いて宙を舞う『ウルトラゼロアイ』を追い、手を伸ばす。

その時だ。マザロン人が床に倒れているフェイトのマントを掴んで軽々と持ち上げ、ゼロに向かって投げつけた。

「ホラッ、シッカリ受ケ止メロッ！」

それに気付いたゼロは、猛烈な勢いで投げ捨てられたフェイトの体をとっさに受け止めた。

『ウルトラゼロアイ』がカランッという音を立てて床に落ちる。

「…お馬鹿さんねっ…！」

その声にゼロが振り向くと、プレシアの体の周囲に金色に輝く『フォトン・スフィア』が形成されていた。

フェイトと同じく電光の槍『フォトン・ランサー』の発射態勢！

「消えなさいっ！！」

無数の電光の槍が一斉にゼロとフェイトに向かって放たれた。

「ゼロっ！」

ザフィーラは宇宙仮面との戦いでゼロ達から離れ過ぎていた。とても間に合わない。

（まずいっ！この距離だと念力でも防ぎきれねえ！！）

ゼロはフェイトを庇い、しっかり抱きすくめるとフォトン・ランサーに背を向けた。

玉座の間の壁が破砕音と共に吹き飛んだ。破壊された壁の粉塵が辺りを舞う。

「…ばっ…馬鹿なっ…！？」

プレシアが驚きの声を上げて自分の手を見た。

粉塵が晴れると、無傷のゼロとフェイトの姿が有った。

フォトン・ランサーは何故か2人から大きく外れた壁を直撃していたのだ。

（今だっ！）

ゼロはフェイトを抱えたまま、床に転がる『ウルトラゼロアイ』を

掴む。すぐさま装着しようとゼロアイを掲げた時、

「ケヒャヒャッ遅カッタナ！」

目の前にマザロン人がゼロに五指を向けて立っていた。
その指先が灼熱化する。マグマレーザーの発射態勢だ。

（駄目だっ、変身が間に合わねえっ！」

これでは変身する前にフェイト共々焼き殺されてしまう。

「消シ炭ニナッテ死ネエッ！！」

マグマレーザーが発射されようとした時、ゼロは2つ折りになっていた『ウルトラゼロアイ』をマザロン人に向けると、『トリガー』を引いた！
その瞬間『ウルトラゼロアイ』から超高熱のビームが一直線に発射された。

「グワアッ！？」

その一撃を肩口に受け、後ろに吹き飛ぶマザロン人。
ニヤリと笑うゼロが握っている『ウルトラゼロアイ』の銃口から微かな煙が漂う。

肩口からマグマの血を流し床から白煙を上げながら、マザロンが起き上がった。

「…バッ…馬鹿ナッ、武器ダト…？変身道具デハ無イノカッ…！？」

「変身道具さっ！こっちの技術だって進んでんだぜ！！」

ゼロは得意気に笑った。ゼロアイのもう一つの機能『ガンモード』だ、もちろんゼロ本人にしか使用出来ない。

「ウルサイッ！イイ気ニナルナッ！！」

モーション無しでマザロンは抜き打ちにマグマレーザーを放った。赤い光が宙を走り、ゼロとフェイトの居た場所が吹き飛ぶ。マザロンが勝利を確信した時、爆煙の中から二つ光るものが煙を切り裂いて飛び出して来た。

「ナッ、何ィッ！？」

マザロンの目に最後に映ったのは高速で飛来する二本の『ゼロスラッガー』だった。

「ギャアアアアアアアアアアアアッ！！」

断末魔の声を上げるマザロン人。『ゼロスラッガー』の斬撃が銀色の嵐と化してマザロンの体を切り裂いた。
文字通り八つ裂きになったマザロン人は、体中のマグマを撒き散らし爆発四散した。

「散々コケにしてくれた礼だ…」

後ずさるプレシアの前に、爆発の炎を背にフェイトを抱きかかえた、銀と赤と青色をした超人の姿が現れる。久し振りの『ウルトラマンゼロ』の姿であった。

ゼロはこちらを睨んでいるプレシアを六角形の目で見据えると、

「そういう事か…」

と低く呟いた。

今のフェイトには何も判らなかった。

視界は意味を成さず、外部から入って来る音すらも何処か遠くに感じていた。

そんな中で自分を包み込む優しい温もりだけを感じていた。前にもこんな温もりを感じた事が有った気がする。

（…あれは…確か……）

フェイトがその少年の顔をぼんやりと思い浮かべた時に彼女を呼ぶ声が聞こえた。

「フェイトっ、しっかりしろっ！」

フェイトはその聞き覚えのある声に思わず目の焦点を合わせた。

（…ゼロ…さん…？）

フェイトの目の前に居たのは気に掛けてくれた少年では無く、ウルトラマンの方のゼロの銀色の顔が有った。

「…あなたは……」

やっと反応を示したフェイトにホッとした様子のゼロだが、フェイトのまだぼんやりした赤い瞳を見つめ、

「…落ち着いて聞け…フェイト…」

少しためらった後に、しっかりとした口調で、

「お前の母親は…既に殺されている……」

ゼロの言葉にフェイトは目を見開いた。

「…母さんが…！？」

フェイトの霞がかった頭がショックで鮮明になる。しかしそれがどういう事なのか、彼女はプレシアを見て、

「…で…でも…母さんは其処に…」

混乱するフェイトにゼロはその目を怒りで強く発光させ、プレシアを睨んだ。

「…あいつは…『ヤプール』だ…！」

つづく

第２２話　遠い都アルハザードや（後書き）

今回のウルトラの説明です。

『銀星人宇宙仮面』超マイナーです。実は私もこんな奴居たっけ？という感じです。
ネットで調べてヤプール関係で適当なのがコイツしか居なくて…すいません。

コイツはロボットらしいです。巨大化もしません。念動力と触ったものを破壊する能力が武器です。

さて本編で超獣製造機なる物の名が出て来ましたが、これはまんま名前の通りの機械です。

二つの生き物を放り込むと超獣が出来るというお手軽？なマシーンであります。
はやてと狸を放り込むと本物の豆狸が出来るかもしれません。使い方次第では夢のマシーンかも？

ちなみに本編でフェイト達が放り込まれていたらと、少し妄想しました。

魔法雷超獣『ブェイドルフ』体中から強力な電撃を放ち、鋭い牙で攻撃する。

後一歩までゼロを追い詰めるが、なのはの呼びかけに動きを止めた所をゼロに後ろから攻撃を受け、無印にて死亡…

最悪です…これを本当にやってたら大ひんしゅくものですね。すいません忘れて下さい。

では次回タイトル未定（まだ決まってないもので…）でお会いしましょう。

第２３話　復活のヤプールや（前書き）

読んで下さっている皆さんありがとうございます。

ひたすら、只ひたすら感謝です。

では第２３話です。

第２３話　復活のヤプールや

「異次元の悪魔『ヤプール』…お前の母親の体を乗っ取り、その全てを吸収しやがったんだ！」

フェイトは目の前のプレシアの姿をした者を驚愕の目で見る。

「…そ…そんな…何時から……？」

プレシアの姿をした者は、いかにも詰まらなそうな顔をし、

「ちっ…まあいいわ…何年も前からよ…プレシアが戦いに敗れて漂流していた我らを見つけて…爆弾仕掛けて言いなりにしようとしたんだけどね…」

プレシアいや…ヤプールは、そこで幾分忌々し気な表情をするが、

「でも人間ごときが我らを操れる筈も無く…哀れプレシアは逆に体を乗っ取られて死にましたとさっ…あはははははっ！」

何とも楽しげな笑い声が三日月に歪められた口から漏れる。

ひとしきり笑った後に、フェイトを嫌な目つきで見ると、

「もうバレちゃったわ…詰まらないわあ…もう少しその餓鬼で楽しみたかったんだけど…」

ヤプールは長い髪をかきあげ、先程とはガラリと態度を変えて残忍さを露わにする。

「…噂以上のド外道な奴だな…！」

ゼロはフェイトを、そっと床に座らせると、ヤプールに向かって怒りを込めて言い放つ。

「うふふふふ…誉め言葉ね、我らは異次元の悪魔…人の負の感情こそが極上の美味…この女の絶望とその餓鬼の悲しみ、最高だったわぁっ…！」

プレシアの顔のまま、悪魔そのもの邪悪な表情で哄笑する。

「…貴様……！」

ゼロは、ヤプールに向かい拳を構える。しかしヤプールは特に動じる事も無く、笑みを浮かべたまま、

「でも、勘違いしない事ね…私はプレシアの力も何もかも吸収した。私の行動はこの女の行動でも有るのよ…？」

「…どういう意味だ…？」

訝しむゼロに、ヤプールは目をかっと見開き、

「簡単よ…この女は私が居なくても、全く同じ事をしていたって事よ…！」

「何だと？デタラメ抜かすんじゃねえっ！！」

怒るゼロだが、ヤプールは馬鹿にした様に鼻で笑い、

「デタラメなんかじゃ無いわっ、私はこの女の知識も記憶も奪い取った。この女は、以前の職場での事故の責任を上に押し付けられ、更にその事故で娘を亡くして以来狂ってしまったのよ…それでその餓鬼を作ったけど、とんだ失敗作」

（…フェイトの母親にそんな事が有ったのか…）

唸るゼロにヤプールは更に続ける。

「この女は娘を蘇らせる為なら何だってやるわ！『アルハザード』へ渡る際の被害も承知していた。他人が何百億人死のうが関係無いってねっ、これも人の愛故にってやつかしら？ある意味我らヤプールより質が悪いと思わない…？」

「……」

答えないゼロ。フェイトは床に座り込んだまま、青い顔をしてプレシアの姿をしたヤプールを見つめている。

ヤプールはそんな彼女を指差し、

「その餓鬼に対する態度もそうよ！」

びくりとするフェイト。ヤプールは言葉にどす黒い悪意を込め、

「まさか…アナタ今までの自分への仕打ちは、私の意思であってプレシアの意思じゃ無いとか都合のいい事考えてなあい…？」

フェイトの顔が歪む。その考えは、うっすらと浮かんでいたからだ。
ヤプールはせせら笑い、

「この女は、お前が疎ましくて仕方無かったのよ！せっかく作ったのにオリジナルとまるで違う劣化コピー、私がお前に投げかけた言葉も、仕打ちも全てプレシアの意思よ！！」

猛毒の籠もった言葉に、耳を塞ぎうずくまるフェイト。ゼロはそんな彼女の前に庇う様に立つ。

「止めろっ！！」

ヤプールに向かって怒鳴った。ヤプールは忌々しげに舌打ちすると、憎しみを込めて、

「お前もよ！正義の味方気取りのウルトラ族がっ！反吐が出るわっ！この我ら以下の身勝手さが人間の本質、これもお前が守ろうとする人間の本性よっ！！」

「黙れっ…！」

ゼロの低く、しかし強い響きの声がヤプールの毒の籠もった言語を遮った。
ゼロは下を向き、

「…プレシアは無くしたものを取り戻したかったんだろうな…やり方は絶対ぇ認めねえけどよ……俺は笑う気にはなれねえ…」

ゼロの脳裏に、自分の腕の中で息を引き取った友の顔が浮かぶ。

自分が『プラズマ・スパーク』に手を出した時、プレシアと似た様な思いを抱いたのかもしれないと思った。

そして次に浮かんだのは、はやて達みんなの顔…心が温かくなる。

前の自分とは違うのだと強く感じた。

ゼロはゆっくりと顔を上げ、ヤプールを見据える。

「俺は人間に絶望したりはしねえ…人はそれだけじゃ無え事を知っているからだ！だから俺は人間を信じる！だからこそ俺はお前らと戦うんだ！！」

きっぱりと決意を込めて言い放った。

ヤプールは醜く顔を歪ませると、

「甘ちゃんが…いずれ裏切られて後悔しない事ね…！その前にお前は死ぬけどね！！」

憎々しげに言うと、不意にその姿が歪む、

「もうこの姿も用済みね…返してあげるわ！」

そう言った、ヤプールの体が二つに別れた。

ヤプールの着ていた濃い紫のマントが取り払われると共に、白骨化した死体が床に崩れ落ち乾いた音を立てる、プレシアの成れの果てだった。

「いやあああああああああああああっ！！」

フェイトの悲鳴が廃墟と化した玉座の間に響いた。

そして、そこに立って居たのは、白装束の着物に不気味な能面を被り、長い黒髪を蛇の様になびかせた『女ヤプール』である。

女ヤプールの足元に光る魔法陣が展開される、転移魔法だ。プレシアの全てを吸い尽くして、魔法をも使える様になったらしい。

「貴様っ逃げる気かっ！！」

ゼロは飛び出すが、女ヤプールは慌てる事も無く尊大な態度で、

「私は逃げも隠れもしないわ、今から『ジュエルシード』と此処の動力炉とで『アルハザード』への扉を開く！止めたければ庭園の上に来なさい、超獣軍団が相手になるわ！お前一人でどこまで戦れるのかしらねっ！！」

そう言い残すと、ゼロの手が届く前に転移し姿を消した。

静かになった室内に、先程の衝撃で意識を取り戻したらしいアルフのうめき声が聞こえる。

ゼロはアルフに駆け寄り、『メディカルパワー』で治療を施した。

獣人としての体力も手伝って、みるみる回復して行く。

アルフを治療したゼロは、プレシアの白骨死体の前で茫然と座り込むフェイトに歩み寄った。

これ以上フェイトに母親の死体を見せるのは忍びなく、ゼロは床に脱ぎ捨てられていたマントを拾い、プレシアの死体にかけてやる、その時だった。

（これは……？）

プレシアの遺体にマントをかけ終えたゼロは、座り込んでいるフェイトの前にしゃがみ込み、

「フェイト…聞け…」

声を掛けるが、フェイトは駄々をこねる子供の様に激しく首を振り、

「母さんが死んだら私に生きるている意味なんて無いんだ！母さんに認められる以外に価値なんて無い…！」

その紅玉色の瞳から涙が溢れる。その様は親に先立たれて泣き叫ぶ幼子そのものだった。

「聞けっ！」

ゼロは懸命にフェイトに呼び掛けるが、彼女の慟哭は止まない。

「母さんは最後まで私を見てくれてなかった…微笑んでくれなかったままで…」

顔をくしゃくしゃにして泣き叫んだ。その肩をゼロの手がしっかりと掴んでいた。

「落ち着けフェイト！あんな外道の言う事に惑わされるな！」

そこでようやく、フェイトはゼロに気付いて銀色の顔を見る。

まだしゃくり上げる、フェイトの目を見つめ、

「…さっきのヤプールの攻撃が外れたのは何でだか判るか…？」

優しく語り掛ける。フェイトはゼロの言葉の意味が判らず、涙で濡れた顔で首を横に振る。

ゼロは静かに頷いた。フェイトにはその無表情な銀色の顔がとても優しい顔をしている気がした。

「あれは…お前のお袋さんがお前を守ったんだ…」

「…えっ…？」

意外な言葉に、フェイトは思わず声を上げた。ゼロはコクリと頷き、

「そうだ…お袋さんの最後の一念が、ヤプールの動きを一瞬止めたんだろう……死んだ後でも娘であるお前を守ったんだ…この意味が判るな…？」

フェイトは、マントがかけらているプレシアの遺体をじっと見る。

「…か…母さん……」

「お袋さんも本当は判っていたんだろう…お前がアリシアの代わり

なんかじゃ無く、フェイトというもう一人の娘だって事が……」

ゼロはフェイトの肩から手を離すと、両手を軽く彼女の頭に添えた。

「お袋さんの遺体に残留思念が残っていた…とても強い思いだ…酷い話だが、ヤプールに体を乗っ取られてしばらくは意識が残っていたらしい…お前が虐待される様子をずっと見せられていたんだ…」

ゼロは沈痛な響きの声でフェイトに事実を告げる、今の彼女には必要だと思ったのだ。

「聞け…これがお袋さんの最後の言葉だ…」

その瞬間、フェイトの頭の中に声が響いた。

フェイトは思った。

これは…母さんの声だ……

それも…記憶の中の…優しかった頃の母さんの声…

…フェイト……

母さん……私の名前を呼んでくれるの…？

フェイト…母さんに構わず…此処から逃げるのよ…

…ご免ね…フェイト……

あなたは生きなさい…母さんの様になっては駄目…

『生きなさい…フェイト…！』

そして声は、テレビの電源が切れる様に唐突に途切れた。
ゼロはゆっくりと、フェイトに触れていた手を離す。

「母さん……」

フェイトの目から再び涙が溢れていた。マントをかけられたプレシアの遺体を、マントごとかき抱く。

それは初めて自分自身に向けられた温かい言葉…

「…でも…やっぱり…生きている母さんの口から聞きたかったよ…」

フェイトは遺体をしっかりと抱きしめ嗚咽した。

ゼロは無言でフェイトを見守っていた。

しばらくして、地響きが庭園を揺るがした。ヤプールが超獣達を集結させ始めたのだろう。

ゼロは幾分落ち着いてきたフェイトの肩をそっと叩いた。フェイトはマントから顔を上げ、泣き腫らした目でゼロを見る。

ゼロはひどく優しい口調で、

「お袋さんの最後の言葉確かに聞いたな…？」

コクリと頷くフェイト。その目には光が灯り始めている。しかしその光には、悲壮感が漂っている様にゼロには感じられた。

「フェイト、お前今、何もかも無くしたとか思ってねえか…？」

図星を突かれ、フェイトは思わず俯いてしまう。
その時フェイトは、腕の装飾品形態の『バルディッシュ』が励ます様に光っているのに気付いた。

「…バルディッシュ…」

呟くフェイトにゼロは指で後ろを示す。

「フェイトぉーっ」

回復したアルフが駆け寄って来る所だった。涙を浮かべてフェイトを抱きすくめる。ゼロは頷き、

「2人共、ずっと一緒だったんだろ…？」

ハッとするフェイト。そうだ…アルフもバルディッシュもずっと…
フェイトは、アルフとバルディッシュをしばらく見た後に微笑んで、

「…はいっ…2人共ずっと私の傍に居てくれてました…」

「それが判れば上等だ…後はお袋さんの分までしっかり生きればいい…お前はこれからなんだからな…自分で選んで自分の道を行けばいい…」

「…自分の道……」

フェイトはゼロの言葉を噛みしめた。
今まで考えてもみなかった自分のこれから…

「…私に見つけられるのかな…？」

フェイトは自信なさげにポツリと呟いた。

「大丈夫さ…お前の頑張りは何度も見たからな、自信持て」

ゼロの言葉にフェイトの表情が明るくなる。

その表情を確かめると、ゼロは立ち上がり天井を睨んだ。

「俺は超獣共と戦いヤプールを倒すが、お前らはどうする？避難するか？」

フェイトはしっかりと立ち上がっていた。涙を拭い、バルディッシュを変形させる。

「…私も戦います…！」

強い意思を目に秘めてゼロを見る。そんなフェイトを見てゼロは、

「敵討ちで、死んでもアイツを殺すとか考えてねえよな…？」

フェイトは静かに首を横に振り、

「母さんが生きなさいと言ったこの命…無駄にはしません…だからまず、自分に出来る事をやります…！」

「そうか…」

頷くゼロにフェイトは、

「…動力炉の方は詳しいですから、私が止めます…あいつの好きにはさせません…」

「ならあたしもだねっ？」

アルフがフェイトの肩を叩き、頼もし気に笑う。バルディッシュも応えて光る。

フェイトはアルフとバルディッシュに、

「…アルフもバルディッシュも、今まで心配掛けてご免ね…ちゃんと自分で終わらせるから、一緒に頑張ろう…！」

「任しといてフェイトっ」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ.》

アルフとバルディッシュが同時に応える。ゼロは満足気に頷いた。

フェイトとアルフはゼロに深々と頭を下げた。

「…ありがとうございます…あなたが居なかったら…母さんの事も知らずに死んでいました…」

ゼロは決まりが悪そうに頭のスラッガーをトントン叩く、フェイトは続けて、

「…お願いします…私じゃあいつらに勝てない…だから母さんの…母さんの敵を撃って下さい…お願いします！」

それは親を殺された子供の必死の願いだった。
ゼロは頭を下げたままのフェイトの肩を軽く叩き、

「頭を上げな…」

フェイトは、おずおずと頭を上げた。
ゼロは右手を挙げて拳を握り締めると、

「任せろっ！お袋さんの敵は必ず撃ってやる！！」

力強くフェイトに宣言した。

「じゃあ…気を付けろよ2人共っ」

「はい…必ず止めます…！」

「フェイトはあたしがしっかり守るからねっ」

ゼロはフェイトとアルフの頭をポンと叩き、

「2人共無理すんじゃ無えぞっ！」

そう言い残すと猛然と駆け出した。

フェイトアルフも、やるべき事を成す為、目的地に向かって駆け出す。

走りながらフェイトは、

（…やっぱり…あの人、ゼロさんと感じが似てる…）

そう思った。

ゼロにはその前に行く所が有る。

さっきからテレパシーで呼び掛けているが、ザフィーラからは直ぐそちらに向かうと返事が有ったが、シグナムとヴィータから応答が無い。

（シグナム、ヴィータ無事で居ろよ…！）

ゼロは戦闘が続いている場所目掛けて全速力で向かった。

つづく

第２３話　復活のヤプールや（後書き）

ウルトラの解説です。
不覚にもヤプールの解説を今まで忘れてました。すいません！
ヤプール人は異次元に住む人間ですが、共通の集合意識を持っていたり、みんな合体して巨大ヤプールになったりと、色々謎な人達です。

世界に生物の負の感情が有る限り、不滅だそうです。今では悪意の集合体みたいなものになってるっぽいです。

女ヤプールですが、初代は歯医者に化けて、虫歯治療に来た北斗（エースに変身する人です）に幻覚装置を取り付け、抹殺しようとしました。

あらすじだけ見ると阿呆な話に思えますが、（私もあらすじを先に見て、しょうもない話かと思ってました）本編はとても不気味な話です。一見の価値有りだと思います。

では次回『時の庭園の攻防や』でお会いしましょう。

第２４話　時の庭園の攻防や（前書き）

読んでいただきありがとうございます。
バトルの第２４話です。

第２４話　時の庭園の攻防や

（ぬううう…！）

念話でゼロに直ぐに向かうと伝えたザフィーラだったが、危機に陥っていた。

『宇宙仮面』の念動力により空中に縛り付けられ、身動き一つ出来ない状態だった。

その体のあちこちには避け切れなかった攻撃で肉が弾ぜ、血が流れ落ちている。

魔法と別系統の不可視の力には魔法防御が効かない。

そのザフィーラに宇宙仮面の手が伸びる。

「虫けら、跡形も無く吹っ飛べっ！」

触れた物質を破砕する死の手が迫る。

「うおおおおおおおおっ！！」

ザフィーラは吼えた。その姿が雄々しい蒼い狼の姿に変わる。

「何っ！？」

驚く宇宙仮面に向け、ザフィーラは自らの長い牙を噛み砕き、含み針の様に飛ばした。

「ぐわっ！？」

牙は宇宙仮面の顔面に突き刺さる。ザフィーラの拘束が一瞬緩んだ。

（隙有り…！）

ザフィーラは直ちに魔法を発動させる。床を突き破り、無数の鋭い槍状の棘が宇宙仮面の全身を貫く。

合成樹脂や機械の破片が辺りに飛び散り、宇宙仮面は機能を停止した。

その頃『アースラ』は魔法戦闘の反応を捉え『時の庭園』の位置を特定、武装局員を庭園内に突入させていた。

そしてその中に、プレシアの逮捕に向かうクロノと共に、志願して加わったなのはとユーノの姿が有った。

（フェイトちゃん…）

なのははフェイトともう一度会う為に庭園内をひたすら駆けた。

アースラ艦橋で状況を見守るリンディは、難しい顔をして現状の把握に努めていた。

（運良くプレシア女史の本拠地を見付けられたけど…一体誰と戦っているのかしら…？）

考え込むリンディの耳に、エイミィの硬い響きの報告が入った。

「艦長、武装局員が攻撃を受けています！」

庭園内に侵入した武装局員の姿がモニターに映し出される。

傀儡兵に襲撃を受け、後退を余儀無くされてしまう局員達。武装局員達では対処しきれないのだ。

奥へと向かうなのは達の前にも多数の傀儡兵が立ちふさがる。

かなりの数はゼロ達が破壊した筈だが、いったい後どれだけの数が居るのか。

なのは達はクロノの活躍も有り問題無く進んでいるが…

リンディが武装局員達を退がらせる指示を出した時だった。

「艦長、通信回線に何者かが割り込んで来ました。あの巨大次元航行船からの様です！」

「直ぐに繋いでちょうだい」

エイミィの報告に、リンディは即座に回線を開く様指示を出す。

（プレシア・テスタロッサから…？）

そう思い、正面モニターを見たリンディの目に映ったのは、庭園の屋上にあたる場所に1人立つ、不気味な仮面を被った若い女だった。

リンディは不審に思う、てっきりプレシアからの連絡かと思っていたからだ。

「アナタは誰なの？」

リンディは不信感を露わにしてモニターの女に呼び掛けた。

女は人を食った様に片手を挙げ、

《お初にお目にかかりますわ、時空管理局の皆さん。我らは『ヤプール』皆さんには『異次元の悪魔』と言った方が通りがいいのかしら？》

うやうやしく頭を下げるが、相手に対する敬意など全く無い小馬鹿にした態度である。

リンディは此処で異次元の悪魔と名乗る人物の登場に戸惑い、相手の態度に不快感を覚えながらも、

「アナタが異次元の悪魔だと言うのね…ちょっと信じ難いけど…何故此処に居るの？プレシア・テスタロッサの仲間なの？彼女は何処

に？」

リンディの矢継ぎ早の質問に女ヤプールは笑い声を発し、

《うふふふ…その女なら、とうの昔に地獄に送ってやったわよ…今此処の支配者は我らヤプールって訳…》

予想外の答えにオペレーター達がざわめいた。プレシアを追って来た筈が、当の本人が既に殺害されているとは…

リンディは衝撃を受けながらも気丈にヤプールに向かって疑問を投げかける。

「…アナタの目的は何…？」

《うふふ…聞きたい…？》

女ヤプールはもったいぶった態度でこちらを見ると、

《教えてあげるわ『ジュエルシード』で次元断層を起こして『アルハザード』へ渡るのよっ！》

艦橋内に衝撃が走った。リンディは顔色を変えて、

「馬鹿な事を、アルハザードは伝説に過ぎないわ！そんな不確かな事で周りの世界を消滅させる気なの！？」

憤るリンディの声を心地良さそうに聞く女ヤプールは嘲笑って、

《伝説なんかじゃ無いわ…『アルハザード』こそが我らヤプールの

失われた故郷なのだから！》

そう叫ぶと女ヤプールは天を掴むかの様に両手を挙げる。それに合わせて、無数の魔法陣が時の庭園の上部に現れた。

次々と姿を現す巨大な異形の群れ、５０匹を超える超獣軍団であった。多数の怪物の雄叫びが高次元空間に渦となって響き渡る。

その中心で女ヤプールは凶気の叫びを上げる。

《『アルハザード』に眠る『ヤプールの遺産』を手に入れた時、全ての世界はヤプールの物となる！止められるものなら止めてみなさい！あはははははっ！！》

どす黒い哄笑と共に通信はブツリと切れた。

リンディは庭園を埋め尽くす超獣軍団を青い顔で見る。

（…いったい、どうすればいいの……？）

絶望がリンディの心をじわじわと重苦しく染めていった。

「…ヴィータ大丈夫か…？」

満身創痍のシグナムは、隣でかろうじて立っている、同じくズタボロのヴィータに声を掛ける。

「…これ位…平気だっ…」

とりあえず強気な返事をするヴィータだが、正直立っているのがやっとだった。

周りは傀儡兵の群れ、超獣を倒した代償は大きく、シグナムとヴィータに戦闘能力は殆ど残されていない。

カートリッジも全て使い切ってしまった。2人は壁際に追い込まれてしまい、逃げる事もままならない。

魔力の使いすぎで念話に応える余裕も無かった。

傀儡兵が迫る、シグナムとヴィータは限界の体に鞭打って各自のアームドデバイスを構える。

「…や…野郎…！」

ヴィータが迫る傀儡兵に重い足取りで向かおうとした時、破片に足を取られてしまった。

膝に力が入らず床に倒れ込んでしまう。

「ヴィータ…！」

シグナムが駆け寄るが傀儡兵はその隙を見逃さない、一斉に武器を振るい2人に襲いかかった。

（しまった…！）

シグナムは倒れているヴィータを庇い前面に立つが、最早レヴァンティンを握っているのがやっとの状態だ。

2人目掛けて鋼鉄の凶器が振り下ろされようとしたその時、一条の光が走ったかと思うと傀儡兵がまとめて消し飛んだ。

更に次々と光が走ると、傀儡兵の群れが破片と火花を散らし、瞬く間に破壊されて行く。

（…これは……？）

シグナムが辺りを見渡す、ヴィータも顔を上げた。

とどめとばかりに光が一直線に走り、光のラインが傀儡兵の群れを横一文字に凪ぐと、数百体の傀儡兵は一斉に爆発四散し跡形も無くなった。

『エメリウム・スラッシュ』の乱れ撃ちだ。

「シグナムっヴィータっ無事かあっ！？」

ゼロの叫び声が響く。声の方向を見る2人の目に、こちらに駆けて来る『ウルトラマンゼロ』の姿が飛び込んで来た。

「「ゼロっ…！」」

シグナムとヴィータは同時に名前を呼んでいた。その顔が明るくなる。

ゼロはこちらに走りながら、人間形態をとると『ウルトラゼロアイ』を外して掲げ、

「取り戻したぞっ！」

と叫びながら2人に駆け寄った。しかしボロボロのシグナムとヴィータを見て絶句する。

「だ…大丈夫か？シグナム、ヴィータ、ボロボロじゃねえか…！」

青くなるゼロに、シグナムは明らかに無理をして、ふらつく足を踏ん張り、

「…これしき…大した事は無い…心配するな…」

と微笑んだ。ヴィータも血が滲む顔で笑みを浮かべて、

「…取り戻せて、良かったじゃねえか……これでしばらく、ゼロのアイスはあたしんだな…」

そう言った時、後ろの方向で誰かが近付い来る気配がした。

「…みんな無事の様だな…」

見ると、蒼い毛皮のあちこちから血を流したザフィーラが、ゆっくりと歩いて来る。

「ザフィーラも…」

3人の姿を見たゼロは胸が詰まる思いがした。

みんなの無事を確認して緊張の糸が緩んだのか、ヴィータの膝が崩れる。

「ヴィータっ？」

シグナムがとっさに支えようと手を伸ばすが、同様に足にきていた彼女もヴィータ共々崩れ落ちてしまう。

しかしその2人をゼロがしっかりと受け止めていた。

ゼロの体温を感じたシグナムとヴィータは、自分達がひどく安らかな心持ちになるのを感じた。

「…ばかやろう…無理しやがって…」

ゼロは2人をそっと座らせる。その血が滲む手を取り、横目で動かないバラバとファイヤーモンスを見て、顔を伏せた。

「…こんな…細え手でこいつらを倒したのかよ…ばかやろう…無理しやがって…」

まるで大事な宝物に触れる様にシグナムとヴィータの手を握った。

「…何だよ…らしくねえぞ…」

こそばいものを感じて照れたヴィータが声を掛けた時、2人の手に温かいものが零れ落ちた。
それに気付かないゼロは、2人の手を握ったまま、

「…お前ら凄えよ…俺なんかよりよっぽど勇気が有る…」

2人の手を握るゼロの両目から透明な液体が流れ出ていた。

「…ゼロ…泣いているのか…？」

シグナムがそれを見て驚いた顔をする。言われてゼロは初めて自分の目から何かが止めどなく流れているのに気付いた。

（…俺が泣いている…？これが……？）

その液体は彼の意思に反し、止まろうとはしなかった。

「…だ…男子たるもの…みだりに人前で泣くものでは無いぞ…」

シグナムが明らかに照れて注意する。ヴィータもそっぽを向いて、

「…ちょ…調子狂うじゃねえかよ…」

泣かれる程心配されて、顔を真っ赤にし、ぼそぼそ呟く様に言った。

「…うるせえっ…、何か知らねえけど、止まらねえんだよっ…！こんなのは初めてなんだ。仕方無えだろ！」

ゼロはコントロールが効かない涙腺に困り、逆切れ気味に返答する。

それはかつて人と同じ存在だった、ウルトラマンが進化の過程で無くしたもの…

彼は何となく遥か過去に自分達が置いてきたものを見つけた気がした。

何と胸が熱くなる事か…ゼロはその思いを籠める様に、握った手から2人に『メディカルパワー』を送り込む。

シグナムとヴィータは体に温かいものが満ちて行くのを感じ、身を委ねそうになるが思い直し、

「ゼロ止せ…お前はこれから戦いに赴くのだぞ…余計な所で力を使うな…」

「…そうだ…あたしらは…いいっ…」

2人はゼロが治療に余分な力を使うのを懸念してその手を離そうとする、しかしゼロは手を離さない。

「要らん心配してんじゃねえ…大丈夫だ…お前らから別なものを沢山貰ったからな…」

ゼロは涙を溢れさたまま、宝物を貰った子供の様に2人に微笑みかけた。

「どうだ、ヴィータ…？」

シグナムがレヴァンティンを片手で軽く振り、隣でアイゼンを握るヴィータに声を掛ける。

「まあまあだな…」

ヴィータはアイゼンを青眼に構えて、体の調子を確認する。

２人共、まだ魔力は回復してはいないが、メディカルパワーで怪我の治療を受け、体力も幾分回復していた。

メディカルパワーも万能では無いので充分では無いが、動き回る位は出来る。

ゼロは今ザフィーラの怪我の手当てを終えた所だ。

「それじゃあ、お前らは外に退避しといてくれ、管理局も嗅ぎつけたらしいからな…後は任せとけっ！」

ゼロは立ち上がり、３人にそう告げると『ウルトラゼロアイ』をかざした。

それを見たシグナムとヴィータは顔を見合わせると、ゼロに歩み寄った。

「…ゼロ…少しいいか…？」

声を掛けて来たシグナムに変身の手を止めたゼロに、ヴィータが、

「…ちょっと…顔を下げろよ…」

とゼロの服を引っ張った。ゼロは?となったが、言われるままに頭を低くした。

次の瞬間、ゼロの両頬に柔らかいものが押し付けられていた。
シグナムとヴィータが同時にゼロの頬にキスをしたのである。

「!?」

驚くゼロに2人は照れくさそうにゆっくりと唇を離す。
?となるゼロにシグナムが頬を染めながら難しい顔をし、

「…べ…ベルカの戦いに赴く騎士を送り出す為の儀式だ…」

ヴィータも頬を赤くするが、誤魔化そうと偉そうに両腕を組み、

「ゼっ…ゼロ以外に誰にもやった事ねえんだぞっ…か…感謝しろよなっ…鉄槌の騎士と烈火の将の両方なんて幸せ者だぞ…だから負けたら承知しねえぞっ」

ゼロは苦笑して、顔を真っ赤にしているシグナムとヴィータの肩に手を乗せ、

「…フェイトとの約束といい…絶対え、負けられねえ理由が増えたな…!」

力強く笑いかけた。２人から手を離し、ザフィーラの頭を撫でる。
ゼロは、みんなから距離をとり『ウルトラゼロアイ』を再び掲げる。

「見ろっ！お前達のお陰で取り戻した力っ！今の俺は誰にも負けねえっ！！」

「デュワッ！！」

掛け声と共に『ウルトラゼロアイ』を両目に装着した。
目も眩むスパークに包まれて、ゼロの体が頭部から徐々にウルトラマンに変換されて行く。

目、ビームランプ、カラータイマーに力強い光が灯り、赤と青の強靭な肉体にエネルギーが満ちる。
その体に満ちる膨大なエネルギーに比例する様に、ゼロの体が一気に身長４９メートルの小山のごとき巨人になった。

『ウオオオオオオオオオオッ！！』

ゼロは体中を駆け巡るエネルギーを解放する様に雄叫びを上げ、一気に飛び上がると天井をぶち抜き、超獣軍団の待つ戦場へと向かった。

アースラの艦橋に非常アラーム音が鳴り響いていた。その中で高次元空間が微細な振動を起こし始めた。
オペレーターの焦りが混じる報告がリンディの耳に飛び込んで来る。

「次元振発生！震度が徐々に増加して行きます。この速度で振動が増加して行くと『次元断層』の発生予測値まで２０分足らずです！」

更にエイミィの『時の庭園』の解析結果の報告が続く、

「あの庭園の駆動炉も『ジュエルシード』と同じ『ロスト・ロギア』です。暴走覚悟で発動させ、足りない出力を補っているんです！」

「…元々、『アルハザード』がヤプールの物なら片道だけで充分なのね…」

リンディは暗たんたる気持ちになった。『ジュエルシード』を持ったヤプールは超獣軍団に守られている。

超獣の力はクロノの報告で承知している。魔法をものともしない怪物が５０体以上、とても手が出せるものではない…

迷った末にリンディはクロノに連絡を入れる。

《クロノ、状況は分かったわね？こうなれば動力炉を停めるしかないわっ》

《艦長、分かりました。今からそちらに向かいます》

クロノが応えた後になのはとユーノも続く。

《私も行きます。このままじゃ私の住んでる世界も何もかも無くなってしまいます！》

《僕も、逃げる気なんてありません。責任が有ります》

なのはは決意を篭めて一歩も退く気は無い。フェイトの事も気掛かりだった。母親が既に殺されているとは、なのはの胸は痛んだ。

リンディは少し迷った。なのは達には戻れと言おうとしていたのだが、事態は深刻だ、少しでも戦力は欲しい。

「分かったわ…でも気を付けて、相手も動力炉に何か手を打っている可能性が高いわ…」

《分かりました》

3人揃って返事をし、通信が切れる。

正直事態は最悪だ、動力炉の封印も上手く行くかどうか…最悪なのは達はクロノが連れて脱出してくれる筈だ。

今は自分達が出来る事をするしか無い。

「私も出ます。庭園内でディストーション・シールドを展開して次

元振を抑えます」

リンディは厳しい表情をし、武装転移ポートに向かおうと立ち上がった。

その時エイミィがモニターを見て声を上げた。

「艦長っ、あれを、ウルトラマンが現れました！」

リンディは振り返って正面モニターを見る。

ウルトラマンゼロが、庭園の外壁を内側からぶち抜いて、超獣軍団に向かうのがモニターに映し出されていた。

（まさか…戦う気なの！？あの怪物の群れと…）

リンディはモニターに映るゼロを見て、一瞬迷ったが、

（彼なら…やれるかも知れない…あの異常なまでの力なら…今の状況では彼に賭けるしか無い…なら私は時間を稼ぐ！）

そう決心すると武装転移ポートに向けて駆け出した。

ゼロは外壁をぶち抜くと、庭園に降り立ち超獣軍団と向かい合った。
超獣軍団の後方に『ジュエルシード』と共に宙に浮かぶ女ヤプールは、完全に見下した態度でゼロを見下ろし、

「どうやら命が惜しく無い救いよう無い偽善者の様ね…アナタ1人で立ち向かえると思っているのぉ？」

「御託は聞かねえぞ死に損ない！さっさと掛かって来い！フェイトのお袋さんの仇に、傷ついたみんなのお返しだっ、貴様を元の地獄へ叩き込んでやるぜっ！！」

ゼロはヤプールの言葉を一蹴すると、左手を突き出し右手を引き、得意のレオ拳法の構えをとる。
女ヤプールはプライドを傷つけられたのか激興し、

「…ほざいたな雑魚があっ！超獣軍団よ、あの虫けらを八つ裂きにしろおっ！！」

女ヤプールの叫びと共に超獣達の吠え声が時の庭園を揺るがした。
一斉にゼロ目掛けて庭園を揺るがして殺到する。

「行くぜぇっ！ヤプールっ！！」

ゼロは岩盤を踏み砕いて、超獣軍団に突撃した。

最初に飛行タイプの超獣ブラックピジョン、カメレキング、ゼミス

トラーが襲い掛かった。

ゼロは轟音を上げて駆けながら、額のビームランプから『エメリウムスラッシュ』を連射する。

青白色の死の光を立て続けに受けた3匹は、体を撃ち抜かれ肉片を飛び散らして四散した。

爆発の余波と爆煙の中、超獣達は構わずゼロに突進して来る。その様は生者に群がる死者の群れの様だ。

ブラックサタンが巨大な一つ目から破壊光線を発射、アリブンタ、ブロッケンも超高火炎をゼロ目掛けて一斉に発射する。

しかしゼロは素早く宙に飛び上がり、攻撃をかわす。

巻き添えを食ったマッハレス、ユニタングが攻撃をまともに浴び爆発する。

（馬鹿がっ！そっちは集団、飛び道具なんざ同士撃ちの元だぜっ！！）

空中を軽やかに舞うゼロを狙い、各超獣の攻撃が襲う。

しかしゼロは軽々と攻撃を避け、右足にエネルギーを集中させる。

その足が炎のごとく赤熱化した。

『ディヤアアアアアッ！！』

ゼロの裂帛の叫び声と共に、『ウルトラゼロキック』がブラックサタンの首に命中、更にゼロは反動を利用し、後方のガランに回し蹴りを食らわせ、近場の3匹に立て続けにゼロキックを見舞う。

薄暗い高次元空間を炎が舞っている様だ。

『ウルトラゼロキック五段蹴り』

ゼロが庭園に着地すると同時に5匹の超獣が首を吹き飛ばされ爆砕する。

「な…何をしている！さっさと、そいつを片付けなさい！！」

恐れを為した様にヒステリックな女ヤプールの声が響いた。

その命令に従い、超獣達は着地したゼロに群がるが、彼はいつまでも同じ場所に留まる様な愚は犯さない。

コンマ1秒の躊躇も無く、瞬時に飛びすさると、頭部の『ゼロ・スラッガー』を手にする、

『ゥオオオオオオッ！！』

ゼロはスラッガーを両手に構え、岩盤を蹴って飛び出す。

その瞬間、一気に初速が音速を超え、ゼロの姿が超スピードで見えなくなった。

銀の閃光が走る。見えない死神の鎌に襲われる様に超獣達の五体が次々と切り裂かれた。

『ゼロ・スラッガーアタック』

超獣の頭が胴体が宙を舞う。加速を解いたゼロが姿を現す。彼の背

後で切り裂かれた十数匹の超獣が大爆発を起こした。

「すっげえーっゼロ強えーっ！」

ヴィータが歓声を上げる。
ヴィータ達3人は一旦庭園を離脱し、戦場から離れた外壁で戦況を見守っていた。
シグナムも食い入る様にゼロの姿を見つめながら頷いて、

「ああ…全く…大した男だ……」

彼女はその身が奮い立つのを感じる。

ヴィータは興奮気味で、シグナムとザフィーラに顔を向け、

「なあ…信じられっかよ…あれが、あたしらの家族なんだよ…あたしらのウルトラマンなんだぜっ…」

年相応の子供の様に満面の笑顔ではしゃぐ。ザフィーラは微かに笑った。シグナムはヴィータに微笑みかけ、

「…そうだな…私達のウルトラマンだ…他人の為にしか戦わないお人よしのな…」

ゼロを見つめ感慨深げに応えた。ヴィータも頷くと、ゼロの方を向

き、身を乗り出して叫んだ。

「行っけえーっゼロ、ぶっ潰してやれえっ！！」

「任しとけっ、ヴィータっ！！」

超感覚を持つゼロには当然ヴィータの声援は届いていた。

ゼロは一気に勝負を着けるべく、左腕を水平に伸ばす。

『ゼロ・ワイドショット』の構えだ。

エネルギーが両腕に集中する。残りの超獣達が怒号を上げ、押し寄せて来た。

「まとめてぶっ飛びやがれえええっ！！」

ゼロは腕をL字形に組んだ。その右腕から強烈な光の奔流が凄まじい勢いで超獣達に発射される。

以前のグリーンモンス戦の様にパワーを抑えていない、フルパワーに近い一撃だ。

超獣達が次々と断末魔の悲鳴を上げ、光の奔流に飲み込まれていく。

光線の余波で庭園の外壁が吹き飛んでいた。

『ゼロ・ワイドショット』の威力は凄まじい。

庭園を大きく揺らし、残っていた超獣達は全てワイドショットの広域照射を受け、爆発消滅した。

無惨な有り様になった庭園に転がる超獣の残骸の中、ウルトラマンゼロが女ヤプールを睨んで山の様にそびえ立っていた。

「ばっ…化け物か…貴様っ…！？」

先程まで余裕を見せていた女ヤプールもさすがに声がうわずっている。

「…貴様…一体何者だっ…！？」

女ヤプールの問いに、ゼロは足を一歩踏み出し、一呼吸置くと高らかに名乗った。

「ゼロっ、ウルトラマンゼロ！セブンの息子だっ！！」

「セブンの息子だと…！？　馬鹿なっそんな話は聞いた事が無いっ！！」

明らかに狼狽する女ヤプールをゼロはせせら笑って、

「やっぱり貴様は、この時代の元の世界から流れて来たヤプールか…俺は千年近い未来から来たんだよ！」

女ヤプールは全身に怒りをみなぎらせる、自分の迂闊さを呪っているのか。

「おのれえ～っ、そういう事だったのか…最初に殺しておくべきだった…！！」

血を吐く様に悔しげに吠える。ゼロはヤプールにとどめを刺すべく構え、

「観念しろ！これで最後だ、ヤプールっ！！」

観念した様にうなだれる女ヤプールだったが…

「あはははははははははははははははっ！！」

突如狂った様に笑い出した。尋常成らざる雰囲気に油断無く構えるゼロ。

女ヤプールは、不気味な能面を被った顔をゆらりと上げると、

「…これでヤプールに勝ったつもりか…？餓鬼がっ、見ろおっ！！」

女ヤプールが片手を挙げると、突如として転移魔法により、何かがゼロと女ヤプールの前に出現した。

「こいつはっ！？」

驚くゼロの前に現れたのは、西洋式の巨大な棺桶であった。

女ヤプールは勝ち誇った響きの声で叫ぶ。

「出でよ！最強の超人ロボット『ウルトラキラー』よっ！！」

巨大な棺桶の蓋が重々しく、独りでに開いた。

つづく

第２４話　時の庭園の攻防や（後書き）

本編の雰囲気をぶち壊すので使えなかったネタを…

リンディ編

「あはははは…私はヤプール！」

モニターに映し出された不気味な能面を被った女。

「艦長…何ですか？あの不気味なマスクは…」

薄気味悪そうにモニターを見るエイミィに、リンディは得意げに説明する。

「あれはね…え～と…、そう、お多福のお面よ、日本でお祭りの時に被るやつ」

「へえ…そうなんですか…じゃあ怖く見えるのは気のせいなんですね…」

「おいっ、待てや！このインチキ日本通！！知ったかぶりしてんなっ！！」

女ヤプールはぶちきれた。

ユニタング編

説明せねばなるまい。くのいち超獣ユニタングとは１０人の女が合体して出来る変幻自在の超獣である。

女ヤプールを追い詰めたゼロとヴィータの前に６人の女が立ちふさがった。

１人は眼鏡を掛けた成人女性、残りは制服を着た女子高生である。

女ヤプールは得意げに笑い、

「うふふ…この女達は私が最新の情報を元に作った平成版ユニタング、人数も少な目でパワーアップよ！さあ合体してウルトラマンを倒すのよ！！」

６人の女達は合体した。赤が目立つ、目がでかいブッサイクな超獣である。

だが様子が変だ。中から声がする。

「やだよ～可愛くないよ～」「面倒くさ～」　「…怖い…」

「お茶にしましょう」

「先輩達もっと真面目にやって下さいよ」

「こらあっ、あなた達いい加減にしなさい！」

１分としない内に合体は崩れた。大失敗だったらしい。

どうやら新しさにこだわるあまり、戦闘にまるで向かない人達を元

にしてしまったようだ。

目を回して床に転がる6人。気まずい空気の中、とりあえずとどめを刺そうとするゼロにヴィータが、

「ゼロ…あの眼鏡の人だけ見逃してやってくれ…」

「どうしてだ?」

「何となく…あたしと声が似てるから…」

けいおん!ネタでした。すいません血迷いました忘れて下さい。

では次回『脅威のウルトラキラーや』でお会いしましょう。

第２５話　脅威のウルトラキラーや（前書き）

いつも読んでくれる皆さんにただ感謝です。

武器が多い奴を書くのが、こんなにしんどいと思いませんでした…

では第２５話です。

第２５話　脅威のウルトラキラーや

巨大な棺の蓋が地響きを立てて地面に落下した。

そして中より巨大な人影が、直立したままの姿勢で見えない糸で吊られているかの様に不気味に起き上がった。

血を連想させる濃い赤のボディー、全身を覆う金色のアーマーに同じく金色の鋭角的な顔、以前に出現した『エースキラー』タイプと比べて鋭角的な部分が増え、重装甲になっている様だ。

「あはははははっ、見たかっ！『エースキラー』タイプの最終強化型！我らヤプールが総力を結集して造り上げた『ウルトラキラー』だ！！」

女ヤプールは両手を広げゲラゲラと狂笑を上げ、ウルトラキラーに向かい命令する。

「起きろぉっ！ウルトラキラーっ！！」

ウルトラキラーの緑色の両眼に光が灯り、体内のメカニズムが唸りを上げて稼動する。

「グオオオオオオオオオッ！！」

高次元空間をびりびりと震わせて、ウルトラキラーは両腕を広げて吼えた。

「さあっウルトラキラーよ、奴を細切れの肉塊にしてやれぇっ！！」

女ヤプールがゼロを指差し命令を下した。ウルトラキラーはゼロを誘う様に一気に高次元空間の薄暗い空に飛び上がる。

「面白えっ！噂に聞くエースキラータイプがどれだけのもんか見てやんぜっ！！」

どの道ウルトラキラーを倒さねばヤプールを停められない。ゼロもウルトラキラーを追い、宙に舞い上がった。

その頃フェイトとアルフは、動力炉目指して立ちふさがる傀儡兵と戦い続けていた。

アルフが最初に傀儡兵の群れ目掛けて、電光の槍『フォトン・ランサー』を発射、着弾したランサーが傀儡兵の足元で炸裂する。

浮き足立った傀儡兵にとどめとばかりにフェイトの『フォトン・ランサーマルチショット』が降り注ぎ、傀儡兵が電光の槍の散弾の前に次々と破壊されて行く。

しかし動力炉の守りで、大量に配置されているらしい傀儡兵は、続々と繰り出して来る。

「数が多いっ…！フェイト大丈夫かいっ！？」

アルフが襲い来る傀儡兵を殴り倒しながら叫ぶ。

「…大丈夫…多分、こっちに残りを全部集めてるんだよ…でも頑張ろう…！」

フェイトも『サイス・フォーム』で敵を切り裂きながら応える。

（…時間はあまり無い、退く訳には行かないんだ…必ず停めてみせる…！）

フェイトは傀儡兵を切り捨てながら、ひたすら前に向かって走る。

前衛の一団を突破した2人が次の角を曲がり広間に出たその時、隠れていた傀儡兵が一斉に先行していたフェイトに襲い掛かった。

（しまった…！）

不意を突かれたフェイトは回避しようとするが、数が多い。

「フェイト、危ないっ！！」

アルフの悲痛な叫びが広間に響く。

その時桜色の強烈な光がフェイトに襲い掛かっていた傀儡兵をまとめて吹き飛ばした。
驚いたフェイトは砲撃が飛んで来た方向に視線を向ける。埃が舞う中、小さな人影が走って来るのが見えた。

「フェイトちゃん、大丈夫!?」

「…あなたは…」

フェイトは思わぬ人物を見て声を出す。
茶色い髪に、白いバリア・ジャケット、高町なのはであった。

「…どうして此処に…?」

困惑したフェイトは、疑問を投げかける。なのはは、にっこり微笑むと、

「何か、お手伝いが出来ればと思ってクロノ君に着いて来たの…それに、フェイトちゃんが心配だったんだ……」

フェイトは、どう反応したらいいのか判らなかった。
そんな彼女に、なのは少し恥ずかしそうにし、

「…どうしてもフェイトちゃんに伝えたい事が有ったんだ…」

フェイトはもじもじするなのはを疑問の目で見た。
なのはは一旦目を閉じ気持ちを落ち着けると、自分の胸に手を当て微笑み、

「友達に…なりたいんだ…」

静かにフェイトの目を、しっかりと見て伝えた。
フェイトは顔が赤くなるのを感じる。
今まで友達というものは、自分にとって縁遠いものだと思っていた彼女は混乱してしまう。
でも心に染み入るものを感じた。

「フェイトぉっ！危ない！！」

しかしその感情に浸る間も無く、駆けつけたアルフが叫ぶ。

新たな傀儡兵の一団がフェイトとなのはに迫っていた。
2人は素早く飛行魔法で宙に舞い上がると同時に敵に向かい、砲撃魔法を撃ち込む。

金色と桜色の魔法光が傀儡兵を次々と撃ち抜く。
フェイトは自分の隣で一緒に戦うなのはをチラリと見て、今までの事を思い返していた。

（…何度もぶつかった、真っ白な服の女の子…）

フェイトの横で砲撃魔法を振るうなのは。フェイトも『バルディッシュ』を振るい傀儡兵を切り裂く。

（…初めて私と対等に…真っ直ぐ向き合ってくれた…何度も出会って、戦って…）

フェイトは、なのはの後ろから襲い掛かる傀儡兵目掛けて砲撃魔法を放つ。

（…何度も私の名を呼んでくれた…何度も…何度も…）

今度は、なのはがフェイトの不意を突こうとしていた傀儡兵を撃墜する。

（…私を気に掛けてくれる人が此処にも居るんだ…）

フェイトは戦いながらも心が温かくなるのを感じた。

あらかたの傀儡兵を片付けたフェイトとなのはの前に、壁をぶち抜いて１０メートル近い巨大な赤銅色の傀儡兵が、破片を撒き散らしながら現れた。
大型の大砲を肩に装備し、２人を狙いエネルギーチャージを始める。

「…大型だ…バリアが強い…」

フェイトは、なのはに相手のデータを伝える。不安げな顔をするなのはの顔を見据え、

「…でも…２人なら…」

なのはの顔が輝いた。フェイトはバルディッシュを前面に構える。

「…行くよ…バルディッシュ…」

《Ｙｅｓ　ｓｉｒ》

「こっちもだよ『レイジング・ハート』」

《Ｓｔａｎｄｂｙ，ｒｅａｄｙ，》

なのはもレイジング・ハートを構える。２人は長年のパートナーだったかの様に、自然にコンビネーションを組んでいた。

何度もぶつかり合い、お互いの力を分かり合っていた2人だからこそだ。

傀儡兵が閃光と共に肩の大型砲を撃ち出した。
しかしフェイトとなのはは軽やかに蝶の様に宙を舞い、砲撃を避けると、一斉に砲撃魔法を放つ。

「サンダー・スマッシャー…！」

「ディバイン・バスターっ！！」

金色と桜色の砲撃魔法が、巨大傀儡兵の強固なバリアを撃ち抜き、その巨体を吹き飛ばした。
大爆発を起こす傀儡兵。敵を一掃した2人はゆっくりと床に降り立った。

「フェイトぉーっ」

アルフが駆けて来る。その時クロノとユーノもこちらに向かって走って来た。

「…なのは…先走り過ぎだ…」

憮然となのはに文句を言うクロノ。どうやらなのはは気が急いて先に飛び出し、クロノ達とはぐれていた様だ。

クロノは、なのはがフェイト達と一緒に居るのを見て、

「状況を聞かせて貰えるかな…？」

幾分不審そうに聞く。アルフはフェイトの前に庇う様に立ち、

「フェイトは悪くないよっ、今まで母親に化けたヤプールに騙されてたんだ！だから今停めようとしてるんだよ！！」

必死でクロノに訴えかける。フェイトがヤプールの仲間などと思われるのは我慢ならなかった。

クロノは難しい顔をし、

「事のあらましは聞いているよ…じゃあ、君達もヤプールに踊らされていたのか…？」

するとフェイトがアルフの前に踏み出し、クロノの前に立つと、

「…私達もウルトラマンが助けてくれなかったら殺されていた…母さんの為にも絶対にあいつの思い通りにはさせない…！」

フェイトは紅玉色の瞳に、揺るがぬ決意を込めてクロノを見た。

クロノはしばらくフェイトの目を見た後、息を吐き、

「判った…信用しよう…動力炉に案内してくれ」

フェイトは頷くと駆け出した。なのは達も後に続く。

フェイト達の後を追うクロノの背中にユーノが小声で話し掛ける。

「いいのか…？信用して……」

クロノは走りながらユーノを見ると、

「彼女達は利用されただけだろう…それに親を殺された子供が仇の言う事なんか聞く訳無い…それにヤプールには僕らなんて眼中に無い…何とかしたいのはウルトラマンだろうからね…」

その時庭園がひときわ大きく揺れる。クロノは先程から衝撃が響き、細かな破片が落ちて来る天井に目をやった。ユーノは意外そうな顔をする。

「クロノ意外と話が分かるんだ…もっと石頭かと思ってたよ…」

クロノは、じと目でユーノを見て、

「君は、どういう目で今まで僕を見てたんだ…」

「あはは…ごめん…（只のK，Yかと…）」

笑って誤魔化すユーノに、クロノは不意に真面目な顔になると、

「それより、次元振が強まっている…他の世界にも影響が出るだろう…しばらくは艦長が抑えくれる筈だが…急ごう時間は余り無い！」

クロノとユーノは、なのは達の後を追い走った。

『第９７管理外世界』と管理局に命名されているその世界を、静かだが異様な揺れが襲っていた。

地震の様に地面だけが揺れているのでは無い。

この世界いや…空間そのものが、断末魔に震えて軋んでいる様な不気味な揺れであった。

不安におののく人々の中、おそらくこの世界で唯一事情を知る一家の家主、八神はやてはシャマルととひたすら料理の支度に集中していた。

「…はやてちゃん…」

次元振の中、不安げな表情を浮かべるシャマルに、はやてはにっこり笑い掛け、

「大丈夫や…私は、みんなを信じとる、だからみんなが帰って来たらご馳走で迎えてあげような…」

「はいっ、はやてちゃん私がんばりますっ」

動じた様子の無いはやてに元気づけられ、シャマルも笑って腕まくりする。

はやては頷くと、再び調理に掛かった。鍋の火加減を見ながら、ゼロに貰ったペンダントをシャマルに見えない様に、そっと握り締め

る。

ふと今ゼロが必死で戦っている気がした。

（…ゼロ兄……）

はやては見えない筈の戦いを、その目に映そうとするかの様に、窓から震える空を見上げた。

暗鬱な黒い渦が舞う高次元空間の空を、二つの巨大な影がぶつかり合っていた。
音速を遥かに超えた速度でソニックブームを巻き起こし激突する。

『ゥオオオオオッ！！』

ゼロが掛け声と共に、ウルトラキラー目掛けて正拳突きを放った。
ウルトラキラーも負けじと鉤爪の付いた拳でパンチを放つ。

お互いの拳がスパークを上げて激突する。突きとパンチの応酬だ。
辺りに響く巨大なハンマーをぶつけ合う様な激突音。

（野郎っ！やるなっ、これならどうだっ！！）

ゼロは相手の腹部を狙い、大砲の様な前蹴りをぶち込む。
しかしウルトラキラーは素早く反応し、腕を組んでガードし強烈な一撃を耐える。

一旦後方に退がるウルトラキラー、ゼロも飛びすさり距離をとった。

《うふふふ…これからが本番よっ！》

女ヤプールの自信たっぷりの嘲る声が辺りに響き渡る。

《ウルトラキラー！『スペシウム光線』！！》

ウルトラキラーが両腕を十字に組んだ。その手から白色の光線が放たれる。

かろうじて避けるゼロに、ウルトラキラーは追撃を掛ける。
額の赤いクリスタル部分から緑色の光がゼロに向け一直線に走る。

（ちいっ！親父の『エメリウム光線』かよっ！！）

ゼロも額のビームランプから『エメリウムスラッシュ』を発射し迎撃する。

二つの光線がぶつかり合って対消滅を起こし、薄暗い空間を明るく

照らした。

《まだまだ、これからよっ！！》

女ヤプールの声が再び響く。ウルトラキラーは左手にはめているブレスレットを投擲、ブレスレットは光のナイフと化し高速でゼロに襲いかかる。

「『ウルトラブレスレット』かっ！」

ゼロも負けじと『ゼロ・スラッガー』でブレスレットを叩き落とす。

しかしその隙を突き、ウルトラキラーは連続して『メタリウム光線』『ストリウム光線』を放った。金属光沢を帯びた光に嵐の様な破壊光線が次々とゼロに襲い掛かる。

「うおおおっ！！」

さしものゼロも避けきれず、まともに食らってしまった。白煙を上げ吹き飛ぶゼロ。

そのまま落下するかと思われたが、素早く体勢を立て直しウルトラキラーに対峙する。

（…超獣とはケタ違いだな…火力が凄え…兄弟全員の武器が使えるってのは思ってたより厄介だな…）

そんなゼロの心の動きを察したかの様に女ヤプールの声がゼロの耳に木霊する。

《あはははっ！ウルトラ兄弟全員と一人で戦う様なもの、いくら貴様が強くとも勝ち目は無いっ！！》

「舐めんな！技だけ真似ただけの奴に負けてたまっかっ！！」

拳を握りしめ怒るゼロ。ウルトラキラーは一気に上空に飛び上がった。その足にエネルギーが集中し赤熱化する。『レオキック』の体勢だ。

「てめえ如きが師匠の技使ってんじゃねえっ！！」

ゼロも飛び上がり『ウルトラゼロキック』で迎え撃つ。

炎と化した互いの蹴りが空中で火花を散らして交差する。必殺キックの撃ち合いだ。

ドゴオオオンッ！！

凄まじい轟音を上げてゼロキックがウルトラキラーの腹に炸裂し、キラーのキックがゼロの胸部にめり込む。

「…ぐっ…！！」

相打ちになったゼロとウルトラキラーは、お互い後方に吹き飛んだ。

しかしゼロは痛みに耐え、すぐさま体勢を立て直し、吹き飛ぶウルトラキラーを追う。

懐に飛び込み、拳の一撃を加え様とした時、ウルトラキラーの腹部のクリスタル部分から青白い光のシャワー『ウルトラマン８０』の

『バックルビーム』がゼロに降り注いだ。

（クソっ！）

とっさに『ウルトラゼロ・ブレスレット』を銀色の楯『ウルトラディフェンダー』形態に変え防御するゼロ。

光のシャワーの前に銀の楯が勢いで吹き飛ばされそうになる。

防御で手一杯なゼロに、ウルトラキラーは右腕より光の長剣『メビューム・ナイトブレード』を形成し、ゼロを突き刺さんと強烈な突きを繰り出した。

察したゼロもブレスレットを銀色の槍『ウルトラランス』形態に変え、メビュームブレードの一撃を弾き飛ばす。

ギィィンッ！！

という鋭い衝撃音が走り、ウルトラキラーが吹き飛んだ。

しかし、そのままの勢いで後方に回転しゼロに向き直ると、右腕を正面に突き出し左腕を胸部に当てた。

《ウルトラキラー！『Ｍ８７光線』！！》

女ヤプールが叫ぶ。兄弟中、最大の破壊力を持つ『ゾフィー』の必殺光線『Ｍ８７光線』の発射態勢だ。

突き出された右手が白熱化し、竜巻の如く強大な破壊光線がゼロに迫る。

避けきれずゼロは光の渦に飲み込まれた。

「ゼロっ！！」

その光景を見て、ヴィータが悲鳴に近い叫び声を上げた。
破片が辺りに飛び散る。

「大丈夫だ…！」

蒼白な顔のヴィータに、シグナムが励ます様に言い切った。

《何いっ！？》

勝利を確信していた女ヤプールが驚きの声を上げる。
光の奔流が晴れた中に、無事な姿のゼロが『ワイドゼロショット』の発射態勢で現れたのだ。

その体から粉々になった『テクターギア』がボロボロと崩れ落ちる。
ディフェンダーでは防ぎきれないと判断したゼロは、ブレスレットに縮小収納していたテクターギアを瞬時に装着して身を守ったのだ。
テクターギアはもう使いものにならないが。

「今度は、こっちの番だ！くたばりやがれっ！！」

L字形に組んだ腕から必殺の破壊光線がウルトラキラーを直撃した。
その体が爆発の中に消える。

「やったか…？」

ゼロがワイドショットの構えを解いた時、爆煙の中に緑色の目が光った。

《うふふふふ…》

女ヤプールが不気味な笑い声を出す。

爆煙が晴れると、無傷のウルトラキラーが、ゼロを嘲笑う様に両手を広げ体を揺らしながら浮いていた。

「ワイドゼロショットが効かねえ!?野郎…何て重装甲だ!!」

舌打ちするゼロに、女ヤプールは発狂した様に勝ち誇って叫ぶ。

《驚くのはまだ早いわっ!ウルトラキラーの本当の力はこれからよっ!!》

女ヤプールの指令に反応し、ウルトラキラーの頭上にエネルギーが集中して行く。

集中したエネルギーが七色の光の球に形成される。凄まじいエネルギーであった。

「まさか…そいつはっ!?」

ゼロは思わず驚愕の声を上げた。

それは『ウルトラマンA』がウルトラ兄弟のエネルギーを結集して放つ合体技『スペースQ』であった。

固唾を飲んでゼロとウルトラキラーの戦闘を見守っていたシグナム達だが、ヴィータがその様子を見て首を傾げた。

「なあ…シグナム、ザフィーラ…あの金色の奴の動き妙じゃねえか…？」

「ヴィータも気付いていたか…」

シグナムも戦闘を見つめながら眉をひそめる。ザフィーラも頷いた。

シグナムは違和感をどこに感じるのか、永年の戦闘経験から導き出そうとする。

ふと視線をゼロの後ろに向けた時、シグナムはヤプールの狙いに気付いた。

「またしても卑劣な真似を…！」

憤るシグナムの視線の先を見たヴィータとザフィーラも敵の狙いを察した。

『スペースQ』の発射態勢を整えるウルトラキラーに身構えるゼロの頭に、シグナムの念話が響いた。

《ゼロっ！ヤプールの思う壺だ、誘い込まれているぞ！！》

その瞬間、ウルトラキラーが腕を振り上げ、スペースQをゼロ目掛けて発射した。周りの空間を歪める程の高エネルギーを帯びた光の球スペースQが恐ろしい速さでゼロに襲い掛かる。

シグナムの言葉の意味も分からぬまま、ゼロは必死で飛びすさり、スペースQの攻撃をかろうじて避けた。
しかし完全には避けきれず、肩をえぐられる。

（…ぐっ…！かすっただけでこれか…）

肩を押さえ呻くゼロの耳に、女ヤプールの甲高い耳障りな声が届く。

《あら…いいの？避けちゃってぇ…？》

その言葉に不穏な響きを感じたゼロは、反射的に後ろに目をやった。

「なっ！？」

ゼロの目に映ったのは、スペースQの射線軸上で退避しようとしている、逃げ遅れた『アースラ』の姿だった。

つづく

第２５話　脅威のウルトラキラーや（後書き）

『ウルトラキラー』は、今まで出て来た『エースキラー』や『メビウスキラー』の改良発展型という設定です。

感じとしては、今のところ最後にヤプールが確認されているメビウスのＤＶＤゴーストリバースで破壊されたメビウスキラーを改造したものと考えていますので。

暇を見て、ただ今一部にチマチマと修正を加えております。

それでは次回タイトル未定でお会いしましょう。

第２６話　必殺！ゼロ怒りの一撃や（前書き）

いつも読んで下さる皆さん、お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。

今回少し、映画のネタバレがあります。
でも雑誌やネットでもう流れている情報なので大丈夫かな、とは思うのですが…ご了承下さい。

では第２６話です。

第２６話　必殺！ゼロ怒りの一撃や

『スペースQ』が周囲の空間を焼き尽くしながら猛然と『アースラ』に迫った。

「まずいっ！！」

焦るゼロの目の前で、スペースQは僅かにアースラの脇を掠めて、高次元空間の渦の中に消えた。
遥か彼方で凄まじい閃光を放つ。

ゼロを掠めた事で軌道が逸れたらしい。しかしスペースQの余波で、アースラの一部が火を噴き白煙が上がった。

「被害状況はっ！？」

衝撃波で傾き、エマージェンシーを告げる表示で赤く染まる艦橋の中、エイミィは懸命に動揺を抑えて指示を出す。

「右航行エンジン破損！航行不能です！」

「強力なエネルギー波の影響でセンサー類が殆どが使用不能っ！」

オペレーターの悲鳴に近い報告が飛び交う。

（まずい…！このままじゃ…）

エイミィはかろうじて無事だった、正面モニターに映る2人の巨人の姿を不安の面持ちで見据えた。

《あらあ～っ、非道いわねえ？後ろに人が居るのに避けてぇ！？》

女ヤプールの毒の籠もった言葉がゼロに突き刺さる。

「貴様っ…誘い込んだなっ！？汚え真似しやがって！！」

ヤプールの意図を察したゼロは拳を震わせ憤る。女ヤプールはそんなゼロを見上げて、馬鹿にした様に首をすくめ、

「勝つ為の算段ってやつよ…お前は確かに戦闘能力は異常な程高いけど、絡め手には弱い様ね？まだまだ青いわ…」

全く悪びれない態度で自慢げに言う。

ヤプール人は集合意識を持っている、つまり女ヤプールの頭の中には過去全てのヤプール人達の戦闘データが入っているのだ。

策略と悪知恵にかけてはゼロなど問題では無い。

《次に避けたら、あの船は跡形も無く消し飛ぶわよ！正義の味方さ

あん！！》

女ヤプールのどす黒い悪意に満ちた声が、毒の矢となって鋭く突き刺さる。
ゼロを倒すのに完璧を期して、アースラを人質に取ったのだ。

《とどめを刺せぇっ！ウルトラキラーぁっ！！》

女ヤプールは狂女がヒステリックに叫ぶ様に絶叫し命令を下す。
ウルトラキラーは右腕を水平に伸ばし、左拳を握り締め後ろに引いた。

その体にスペースQとは比べものにならない膨大なエネルギーが集中して行く。

ウルトラ兄弟最大の合体光線『コスモミラクル光線』の構えだ。ヤプールは完全にウルトラ兄弟の戦闘力を解析し、そのノウハウを全てウルトラキラーに注ぎ込んだのだ。

後ろには航行不能のアースラ、逃げる訳にはいかない。

ゼロは覚悟を決めた様に、アースラの前に盾になるかの如く立ちふさがった。

「…ゼロ…あの化け物と撃ち合う気だ…」

ヴィータがゼロの様子を見て息を呑む。シグナムもゼロが覚悟を決めたのを悟った。

「ゼロ……」

シグナムは無意識に息苦しさを増す胸元を握り締めた。

ザフィーラは無言でゼロを凝視する。3人は祈る様な気持ちで、ウルトラキラーと対峙するゼロを見つめた。

（やるしか無えっ！）

ゼロは、頭部の『ゼロスラッガー』2本を引き抜いた。胸部のプロテクター部分にスラッガーを放熱板の様にセットする。

スラッガーのエネルギーが体内にチャージされ、それに伴い体中の全エネルギーを集中させて行く。

ゼロとウルトラキラー、両者の体に莫大な量のエネルギーが集まる。

圧力が高まり臨界点に達した。

そのタイミングを見越した女ヤプールが叫ぶ。

《撃てえええいっ！ウルトラキラーぁぁあああっ！！》

ウルトラキラーの上半身から、眩いばかりの金色の光が高次元空間を撃ち抜かんばかりの勢いで発射された。

その時、ゼロの胸部に取り付けられたスラッガーが目も眩むスパークを発する。

次の瞬間、スラッガーから凄まじい勢いで、青白い光が吼えるかの様にほとばしった。

「ぶちかませえええええっ！！」

ゼロ最大の必殺光線『ゼロ・ツインシュート』だ。

発射の反動で後ろに持っていかれそうになる体に無理やり制動をかける。

青白い光と金色の光が、真っ向からぶつかり合った。

お互いの光線がスパークし、高次元空間を真昼の様に照らし出す。

空間を破壊しかねない程のエネルギーのぶつかり合いだ。

ゼロもウルトラキラーも一歩も退かない、その威力は五分と五分の様だ。しびれを切らした女ヤプールが指令を出す。

《ウルトラキラーっ！もっとパワーを上げろおっ！最大出力だっ！

！》

指令を受けたウルトラキラーの両目が強く光った。それに伴い金色の光の勢いが更に強くなる。

『コスモミラクル光線』が『ゼロ・ツインシュート』を一気に押し返した。

《終わりだ！ウルトラマンゼロおおおっ！！》

女ヤプールが勝利を確信し、勝ち誇って叫んだ。

「くそったれええっ！魂の籠もって無え光線如きに負けて堪るかあああっ！！」

ゼロが獣の様に吼えた。その両眼が激しく輝き、拳を力の限り握り締める。

「ぅおおおおおおおおおおおおおっ！！」

ゼロの叫びに応える様に『ゼロ・ツインシュート』の青白い光が唸りを上げ勢いを増した。

光の激流と化した『ツインシュート』が金色の光を一気に押し戻す。

《ばっ、馬鹿なああっ！？》

女ヤプールは驚愕の声を上げた。
青白い光の激流が金色の光を真っ正面から撃ち破り、ウルトラキラーに炸裂する。

「ゴガアアアアアアアッ！！」

絶叫するウルトラキラー。青白い光が破壊の竜巻となって、ウルトラキラーの全身の装甲を吹き飛ばし、全ての内部機関を撃ち抜いた。

残骸と化したウルトラキラーは大爆発を起こす。爆煙と破片を撒き散らして、粉みじんに砕け散った。

「…ばっ…馬鹿な…ウルトラキラーが…」

茫然と爆煙を見上げ、立ち尽くす女ヤプール。
追い討ちを掛ける様に、先程まで高次元空間を震わせていた次元振が収まって行く。

（くっ…何が…？）

それに気付き、焦りを隠せない女ヤプールの念話回線に、穏やかな

中にも厳しさを感じさせる、成人女性の声が入って来た。

《どうやら…あなたの切り札は敗れた様ですね…》

女ヤプールは忌々しそうに視線を下に向ける。

《管理局か…？》

吐き捨てんばかりに、同じく念話で応える。

庭園内で光る緑色の魔法陣が展開されていた。

その中心で念話の主『リンディ・ハラオウン』は妖精の様な半透明の羽を広げ、魔法を発動し続けている。

《次元振は私が抑えています。動力炉も間もなく封印されるでしょう…終わりです『ヤプール』…》

女ヤプールが何か言い返そうとした時、巨大な影がその前に地響きを上げて降り立った。

「これまでだな…ヤプールっ！」

女ヤプールを仁王立ちで見下ろすゼロ。ヤプールは思わず後ろに退がった。

「うふふふふ……」

しかし不気味な能面の奥から、低い忍び笑いが漏れた。
女ヤプールは顔を上げ、小山の如くそびえるゼロを見上げると、

「まだよ…まだ勝負は着いてないわっ！」

尊大な態度を崩さず、自信を込めて言い放つ。それと連動する様に『時の庭園』が突如大きく揺らいだ。

その頃フェイト、なのは、クロノ、ユーノの４人は動力炉の守りについていた傀儡兵を撃破し、無事動力室にたどり着いていた。

しかし、その目に映ったものは…

「…何…？これは…？」

フェイトが唖然として、思わず声を漏らす。
動力室内に異様な光景が広がっていた。

フェイトも何度か見た事の有る『ロスト・ロギア』を利用した巨大なドーム状の動力炉が赤い光を放ち、何か巨大な蠢く物体に半ば呑み込まれているのだ。

そしてその物体が動力室いっぱいにびくびくと脈動しながら広がっている。

「…フェイトちゃん…これが動力炉なの…？」

立ち尽くすフェイトの横で、なのはが蠢く物体を指差し尋ねる。
フェイトが応え様とした時、物体が突如庭園中を揺るがし、激しく動き出した。

「危ないっ、２人共退がるんだっ！！」

クロノが２人に向かって叫ぶ。物体の激しい動きに天井が砕け、瓦礫が落下してくる。

「くっ……！」

フェイトは降りしきる瓦礫の中、飛行魔法を発動させ、動力炉目掛けて飛び出した。

「フェイトちゃんっ！」

なのはもフェイトの後を追い、動力炉に向かって飛び込んだ。

「なっ、何だ!?」

ゼロは足元を見下ろした。庭園が揺れている。次元振などでは無い、もっと直接的な揺れだ。

女ヤプールを中心に岩盤に亀裂が入る。何か巨大なものが、出て来ようとしていた。

岩盤が一気に砕ける。庭園を揺るがし、凄まじい破壊音を立てて黒い影が現れた。それを見たゼロが声を上げる。

「フェイト!?」

現れたのは裸身を異形の物体に半ば埋め込んだ、金髪の少女の姿だった。

しかしその姿は生きている人間の姿ではない。その肌は死人のそれであった。

「違う…アリシアかっ!?」

危険を感じ宙に飛び上がるゼロの目の前で、アリシアの下に続くものが金切り音の様な叫び声を発し、岩盤を突き破って全容を現した。

エースキラーを思わせる巨大な頭に長大な首、体中を覆う異形の突起に無数の触手、昆虫の様な鋭い六本足。

ゼロを遥かに上回る、体長三百メートルに及ぶ巨体。その腹部に赤

く輝く動力炉が埋め込まれている。

「こいつはっ！『ウルトラキラーザウルス』か？しかし何でアリシアが…！？」

庭園を半壊させ、岩を撒き散らしながら宙に浮かび上がる巨体、その体に『ジュエルシード』が呑み込まて行く。

その背に乗り、蛇の様にのた打つ黒髪をなびかせて、女ヤプールが哄笑を上げる。

「あはははははっ！ヤプールを甘く見たわね！『プロジェクトF』で再生した名付けて『究極超獣Uキラーザウルス（ウルトラ）A（アリシア）』よっ！！」

その時ゼロの『カラータイマー』が赤く点滅を始める。

しかしゼロには、Uキラーザウルスの額のアリシアの姿の方が気になった。

それに気付いた女ヤプールは、さもおかしくて堪らないという様子で体を揺らす。

「あの女の願いを叶えてやったのよ、『Uキラーザウルス』再生の核にしてあげたわ。もっとも只の死体だから、養分になっただけだ

けどねっ、プレシアの意識が消える前にUキラーザウルスに食わせてやったら泣き叫んでいたわよ！あはははははっ！！」

体を揺すり、正に悪魔の如く地獄の笑い声を上げた。

「貴様あああああっ！！」

ヤプールの卑劣さに烈火の如く激怒したゼロは、突撃するべくスラッガーを手に取ろうとする。

「攻撃するのは辞めておいた方がいいわよ…とんでもない事になるから…」

女ヤプールの余裕の言葉に嫌な予感を感じ、ゼロは手を止めた。
Uキラーザウルスの背に立つ女ヤプールの足元が、Uキラーの体に溶け込んで行く。
ヤプール怨念の化身である女ヤプールが、Uキラーザウルスと一体化しているのだ。徐々に体を沈み込ませながらゼロに向かって、

「…確かに貴様は化け物じみた強さを持っている…Uキラーザウルスも倒せるかもしれない…こいつはウルトラキラー程の力は無いからね…でもこいつをよく見なさい…」

女ヤプールの自信たっぷりの態度に、ゼロはUキラーザウルスAの異常なエネルギーの流れに気付いた。

「…こいつは…！？」

Uキラーザウルスの体内に、爆発寸前まで飽和状態に達したエネルギーが満ちていた。吸収した『ジュエルシード』と動力炉の暴走状態の莫大な魔力だ。

固まるゼロ、これでは動く巨大爆弾である。
胸までUキラーの中に融合しながら女ヤプールは笑う。

「そうよ、今のUキラーザウルスは爆弾と同じ…下手に攻撃をすれば、他の次元世界を巻き込んで大爆発を起こして『次元断層』を起こせるわっ！私はどちらでも構わないけどね！！」

皮肉たっぷりに言い放つと、その姿は能面を被った頭まで完全にUキラーの中に消えた。

Uキラーザウルスの両眼が鋭く光る。暗鬱な空を震わせ、金切り音の様な声で吠えた。

《くたばれえっ！ウルトラマンゼロぉおおっ！！》

Uキラーザウルスの体中の突起から一斉にミサイルが嵐の様にゼロ目掛けて飛ぶ。更に両眼からの破壊光線が狙って一直線に空を駆ける。

「ちくしょうっ！！」

飛来するミサイルの雨と光線の嵐の中、逃げ回る事しか出来ないゼロ。高次元空間を爆発の閃光が埋め尽くした。

「まずいぞ…このままでは…いずれ次元断層が起きる…ゼロの活動時間も余り無い…」

シグナムが閃光に包まれる空を見上げ、焦りの表情を浮かべる。ヴィータは悔しそうに歯噛みし、

「クソっ！ゼロに魔法の封印は出来ねえ…あたしらに魔力が残ってればどっちか封印出来んのに！」

ザフィーラも悔しげに牙を噛み締める。その時ザフィーラの目にあ

るものが映った。

「シグナム、ヴィータ、あれを見ろ…！」

ザフィーラの声に2人は視線を向けた。

カラータイマーの点滅はどんどん速くなる。

カラータイマーに気を取られた一瞬の隙に、Uキラーザウルスの広域砲撃に被弾してしまう。

体勢を崩したゼロに無数の触手が襲いかかった。

（しまった！！）

触手に絡め取られてしまうゼロ。更に別の触手が襲い、がんじがらめにされてしまう。

（クソっ、このままじゃ…！）

手も足も出せないゼロを、Uキラーザウルスと同化したヤプールが嘲笑った。

《ふはははっ！このまま『アルハザード』で『ヤプールの遺産』を手に入れて、ウルトラ族に復讐し全次元を我らのものとしてくるわ

っ！！》

「クソぉおおっ！！」

その時、怒るゼロの頭の中に少女の声が届いた。

《ゼロさんっ、任せて下さい…！今、動力炉を封印します…！》

《もう少し頑張って下さい！》

フェイトとなのはからの念話だ。ゼロはとっさにUキラーザウルスを見る。

いつの間に張り付いたのか、フェイトとなのはの2人が、Uキラーザウルスの腹部に埋め込まれている動力炉近くに取り付いていた。

（あいつら…無茶しやがって…）

呆れるゼロをよそに、2人はUキラーザウルスの体中に生えている突起を伝い、動力炉までよじ登って行く。

見つかったら即座に叩き落とされてしまうので、飛行魔法も使えない。

ミサイル発射の衝撃や、動き回るUキラーザウルスに何度か振り落とされそうになったが、2人は汗まみれになって、ようやく直接魔力を撃ち込める位置に達する事が出来た。

フェイトとなのはは同時に『バルディッシュ』と『レイジング・ハート』を構える。

「…行くよ…！」

フェイトが横目で、なのはに合図する。

「いつでも大丈夫だよ、フェイトちゃんっ！」

なのはは、しっかりと頷いて応えた。

「封…」

「印！！」

金色と桜色の魔法光が同時に赤く輝く動力炉に炸裂した。

みるみるうちに輝きを失い、沈黙する動力炉。そしてUキラーザウルスの体に満ちていた魔力が減少して行く。

そこで初めてUキラーザウルスと融合していたヤプールは2人に気付いた。

《餓鬼共があっ！何て事をっ！！》

激怒したUキラーザウルスは、無数の触手を2人に向けようとする。

しかしその時、雷鳴の様なゼロの声が轟いた。

「貴様の相手は、この俺だっ！！」

Uキラーザウルスが巨大な顔を上げると、ゼロは触手を引きちぎり、上空に素早く飛び上がっていた。カラータイマーの点滅が速まる。

（時間は無え！一撃で決める！！）

ゼロは『右腕』の『ブレスレット』を高く掲げ、虚空に向かって叫ぶ。

「『バラージの盾』よ！俺に力を借してくれえええっ！！」

ゼロの叫びに応える様に空間が歪み、事象地平の彼方から、白銀に輝く盾を思わせる鋭角的な物体が出現した。

これこそゼロが『カイザーベリアル』との戦いの中手にした、新たなる神秘の力『ウルティメイト・イージス』である。

イージスはゼロの背後で分解すると、そのパーツが次々とゼロの上半身と腕部に装着される。

凄まじい力が限界寸前のゼロの体の隅々にまで行き渡り、余剰エネルギーが周囲の放電とスパークし、青白い閃光を放つ。

「最後だ…ヤプールっ！！」

高次元空間に白銀の鎧を纏い浮かぶゼロが、Ｕキラーザウルスに向かって雄々しく叫ぶ。

ウルトラマンゼロ最強形態『ウルティメイト・ゼロ』降臨であった。

つづく

第２６話　必殺！ゼロ怒りの一撃や（後書き）

『Ｕキラーザウルス』ですが、ウルトラマンメビウスの映画に出た超獣です。

Ｕキラーザウルスから、ＵキラーザウルスＮ（ネオ）に二段階変化します。全身武器の固まりで、ウルトラ８兄弟と渡り合った最強超獣です。

『ウルティメイト・イージス』ですが、冬の映画で登場するゼロの強化アイテムです。

詳細が分からないので（映画の中でも出所不明らしいです）演出などは、全て想像です。

映画を見た後、違ってたら演出を書き直すかもしれません。

それでは次回、無印編最終回
『心からの言葉や』
でお会いしましょう。

第２７話　無印編最終話　心からの言葉や（前書き）

読んで下さる皆さんありがとうございます。

何やかんやでここまで来ました。

こんな未熟な作品にお付き合い頂き感謝が絶えません。

では無印編最終回です。

第27話　無印編最終話　心からの言葉や

雷鳴轟く高次元空間に、白銀の鎧を纏った『ウルティメイト・ゼロ』の姿が浮かび上がる。
そのシルエットは、銀の不死鳥を纏った古代の神の様であった。

《おのれえええっ！むざむざ負けてたまるものかあっ！！》

Uキラーザウルスがその内蔵兵器を一斉に発射した。
無数の生体ミサイルと数キロ先を焦土と化す破壊光線が、宙に浮かぶゼロにまとめて命中する。
辺り一面が紅蓮の炎に包まれ、生き物の様にゼロを飲み込んだ。
UキラーザウルスAが女ヤプールの声で哄笑する。

《ふはははははは…油断したな…少々姿を変えても、あれだけの攻撃を…！？》

勝利を確信しようとした言葉が途中でギクリと停まる。
爆煙が晴れた中、先程と同じ場所から微動だにせず、傷一つ無いゼロが姿を現した。
ゼロは軽く首を捻り、全く効いていないというアピールをして、Uキラーザウルスを不敵に見下ろし、

「…俺は、みんなのお陰で再びこの力を取り戻した…そして今貴様を追い詰めたのは人間の力だ…」

静かに、しかし実感を込めて言い放つ。
そしてゼロの纏う『ウルティメイト・イージス』の一部がゼロの右腕にセットされ、腕と一体化した巨大な剣を作り出した。

『ウルティメイト・ゼロソード』

ゼロは右腕を振り上げると、弾丸の様に一気にUキラーザウルスA目掛けて降下した。ゼロソードにエネルギーが集中し眩く輝く。

《おのれえええっ!!》

Uキラーザウルスが全身の触手を矢の様に一斉に伸ばし、迎撃しようとする。
しかしゼロに触れる前に周囲のエネルギー場に触れて、一瞬で消滅した。
ゼロが右腕を振り上げ叫ぶ。

「ヤプールっ!貴様が負けるのは俺じゃ無え、人間だ!貴様が散々見下して来た人間に負けるんだっ!思い知りやがれえええっ!!」

ゼロソードが長大な光の剣と化し、Uキラーザウルスに唸りを上

げて振り下ろされた。

《ぎゃあああああああああっ！！》

女ヤプールのおぞましい絶叫が上がる。
その切っ先の速度は神速を超え、Ｕキラーザウルスの数百メートルの巨体を空間ごと、肩から真っ二つに切り裂いた。

空に巨大な光の軌跡で、三日月の様な半円が描かれる。
斬撃の衝撃波で、Ｕキラーザウルスの巨体が二つに別れて吹き飛んだ。

崩れ行くＵキラーザウルスを見届けるゼロの目に、青白い肌のアリシアが映った。気のせいか、その顔は安らかに見えた。

次の瞬間Ｕキラーザウルスは高次元空間を明るく染め、大爆発を起こした。
爆発の閃光がゼロをも包み込んで行く。

Ｕキラーザウルスから離脱し、クロノ達と合流したフェイトとなのはは、爆発の中に消えたゼロを見て息を呑む。

しばらくして爆発が収まった後にアルフが空を指差し叫んだ。

「あっ、あそこだよっ！」

アルフが指差した方向を全員で一斉に注目する。

爆発が晴れた中、人間サイズに小さくなったゼロが右手に青い光を携えて、こちらにゆっくりと降りて来るのが見えた。

『時の庭園』は次元振の影響と、度重なる戦闘で崩壊が進み、内部の虚数空間が暴走し始めていた。

そんな不気味に揺れる庭園の中を女が一人、壁を伝いよろめきながら歩いている。

女ヤプールであった。

Uキラーザウルスが倒される前に、間一髪で脱出に成功していたらしい。

しかし女ヤプールは酷い有り様だった。能面は砕け散り、耳まで裂けた口の悪鬼の形相を醜く歪め、その脇腹からどす黒い血が滲んでいる。

「…おのれ…ウルトラマンゼロ…人間共め…しかし…まだ望みは有る…」

血を床に滴らせながらも、女ヤプールは目的地である庭園最深部の

一室にたどり着いた。
深手を負っているというのに凄まじい生命力である。

その部屋は、朽ちた巨大な大木や岩石が無秩序に置かれた薄暗い部屋で、その床部分には『虚数空間』と呼ばれる魔法関連が一切働かない空間が不気味に蠢いていた。

女ヤプールは虚数空間の前に立ち、

「…次元断層を停められたから、完全では無いけど…一か八か渡ってみるしか無い…」

そう苦しそうに呟くと、口から小型の異様な形をした機械を吐き出した。
今まで体内に隠し持っていたらしい。

女ヤプールはその機械を操作し始める、その時だった。

「そいつか…『アルハザード』の位置を特定出来るマーカー（追跡装置）は…？　まったく用心深い事だな…今まで分からなかったぜ…」

若い男の皮肉っぽい声が響いた。女ヤプールは驚いて声の方向を見る。

暗がりに紅い2つの光が浮かんでいた。2つ目の『ダークロプスゼロ』が闇に溶け込み、倒れた大木に行儀悪く腰掛けている。

女ヤプールはハッとし、ダークロプスを睨み付けた。

「…貴様だな…陰で色々動いていたのは…？　クソっ！『ヤプールの遺産』が狙いだったのかっ…！何者だ!?」

ダークロプスは質問を無視し、悪鬼の形相を歪める女ヤプールを馬鹿にした様に見下ろした。

「ヤプールの遺産…確か、空間と時間をも自在に操る『ヤプール・コア』だったな…　しかし生み出したはいいが全く制御出来ず暴走し、アルハザードを巻き込んで次元の狭間に沈んだって話だったか…」

女ヤプールはダークロプスを睨み付け、とっさに先程の機械、マーカーを両手で姑息に隠した。

そんな女ヤプールの様子を見て、ダークロプスは呆れた様に首をすくめて両手を軽く広げ、

「まあ…俺には必要無いものだが…どうしても要るって奴に頼まれてな…いい退屈しのぎには、なったぜ…」

あまり興味が無さそうに言う。女ヤプールは怒りに震え身構えた。

「おのれえ～っ！　貴様の思い通りにはさせんっ！！」

その姿がヤプールの本性を現す。赤いおぞましい突起と棘に包まれた体に鬼の様な角の異形に姿が変わる、ヤプールの正体だ。

「おい…俺が出るまでも無い、お前片付けろ…」

ダークロプスがやる気の無い態度で声を掛けると、

「…承知しました…」

不意にヤプールの後ろで低い女の声が聞こえた。

驚いて後ろを振り返るヤプール、全く気配に気付かなかったのだ。

後ろに立っているのは女の様だが、ちょうど深い陰が被さり姿がよく見えない。

「貴様っ！！」

ヤプールは右手の三日月型のクローで女を攻撃しようと、腕を振り上げた。

その瞬間白い閃光が闇を走る。

パチンッという金属音が闇の中微かに木霊した。女がいつの間にか手にしていた剣を鞘に収めた音だ。

「なっ…？」

ヤプールは自分の体が頭から両断されてのにそこで初めて気が付く。それを最後にヤプールの意識はまさしく断ち切られる様に途絶えた。

そのまま2つに別れた体は声も無く床に崩れ落ち、マーカーを残して跡形も無く消滅した。

女の電光の速さで繰り出された斬撃が、一撃でヤプールを葬り去ったのだ。

ヤプールは全く反応する事が出来なかった。

手負いとは言え、あのヤプールを剣だけで葬り去るとはこの女は恐ろしい使い手らしい。

ダークロプスが大木から飛び降りて来る。女が歩み寄り、拾い上げたマーカーを手渡した。

ダークロプスはマーカーをかざすと、

「これで『アルハザード』の位置は解った。行くぞ…奴もまだあの程度だしな…」

「…承知しました…」

女は頭を下げ静かに応える。

ダークロプスは虚数空間に一気に飛び込んだ。
その後に続き、女も括った長い髪をひるがえして虚数空間に消えて行った。

フェイト達の目の前に、ゼロはゆっくりと降り立った。
右手に12個の『ジュエルシード』を持っている。Uキラーザウルスが爆発する前に確保していたのだ。

「また飛び散っても洒落(しゃれ)にならねえからな…おらよっ」

ゼロはクロノにジュエルシードを投げ渡した。

「…すっ済まない…」

クロノは幾分慌て気味に、自分のデバイスにジュエルシードを収める。

庭園の揺れが大きくなって来た。崩壊もそう遠くないだろう。そんな中、フェイトは何かを思い出した様にハッとし、

「…ゼロさんの盗まれた物を探さないと…！」

顔色を変えて中に戻ろうとする。
プレシアの遺体は持って来ているが、色々有ったせいでそちらはうやむやになったままだ。

「そっ、それなら…俺が拾っておいたから大丈夫だ…」

ゼロは慌てて走り出そうとするフェイトを呼び止めた。

「本当ですか…ありがとうございます…」

フェイトは申し訳なさそうに頭を下げる。なのは達には何の事か分からない。
フェイトは頭を上げると、

「…あの…私が返して謝りたいんですが…」

と真剣な表情で言って来たのでゼロは困った。本当の事を言う訳にもいかない。

「そっ、それなら…そう…おっ、俺の超能力で…もう戻してやったから…きっ気にすんな…」

そんな都合のいい力は持って無いが、苦し紛れにデタラメを言っておく。

フェイトは明らかに落ち込んだ様子になってしまった。

「…そうなんですか…」

とても残念そうに呟く。きちんと謝りたかったのだろうが、ゼロは話を逸らして誤魔化す事にする。

「…まあ…それは俺が何とかするとして…フェイト達は、これからどうすんだ…？」

気になっていた事を尋ねる。フェイトはゼロの銀色の顔を見上げ、

「…『管理局』に出頭します…やった事の責任は取らないと…」

ゼロの目を見て、しっかりと言う。

そんなフェイトの肩を、アルフが微笑んでポンと叩いた。

振り向いたフェイトは頷くと、アルフが持っていたマントにくるんだプレシアの遺体をそっと受け取り、

「…母さんの為にも本当の事を話して来ます…」

「…そうか…頑張んだぞ…」

決意を決めたフェイトの言葉にゼロは頷き、相変わらずの乱暴な口調で、温かみの籠もった激励を掛ける。

フェイトは更にゼロに何か言おうとしたが、突然ぐらりとふらついた。

「フェイトぉっ？」

「フェイトちゃん？」

アルフがすぐさまフェイトを支え、なのはも心配そうに駆け寄った。

今まで酷い状況の中で頑張って来て、さすがに限界が来たのだろう。

アルフとなのはに介抱されるフェイトを見てゼロは、リンディと連絡を取り合っていたクロノに声を掛ける。

「おいっ、クロの字だったな？　フェイトはまさか犯罪者って事にはならねえだろうな？』

「…クロノだ…！何だよクロの字って…？」

最近時代劇の呼び方がお気に入りで、クロノの名前と合っていたので、つい使ってしまうゼロである。

ブツブツ不満そうに口を尖らすクロノであるが、気を取り直し、

「…確かに次元干渉は重罪だけど…自らの意思で加担していない事もはっきりしている…」

クロノはアルフに支えられて、かろうじて立っているフェイトを横目で見ると、

「それに…親を殺されて…騙されて、何も知らされずに母親の為と信じてやって来た子を罪に問うなんて、管理局はそこまで冷徹な組織じゃ無い…ヤプールはこちらでも確認されているし…まず悪い様にはならない…」

「…そうか……」

クロノの真摯な言葉にゼロは嬉しそうに頷いた。
頷いた拍子に先程から点滅する『カラータイマー』が目に入る。
もう時間は無い、庭園ももう直ぐ崩壊するだろう。揺れも激しくなって来た。

「お前ら、船の方は大丈夫なのか？」

ゼロがアースラの損傷具合を心配する。クロノは空を見上げ、

「大丈夫だ。何とか自力航行出来る様になったそうだからね…それから『アースラ』のみんなを助けてくれたそうだね…ありがとう…」

クロノは深々とゼロに頭を下げた。こういう雰囲気が苦手なゼロは思わず後退ってしまう。
その時ゼロの耳に女性の声が響いた、念話の様だ。

《これで聞こえるかしら…？私はアースラ艦長、リンディ・ハラオウンです。ウルトラマンゼロさん…艦長として私からもお礼を言わせて貰います…ありがとう》

感謝されまくって落ち着かないゼロは、わざと視線をあさっての方に向け、

「ま…まあ…大した事じゃ無えよ…それより早く此処から離れた方がいいぞ、俺も腹減ったから帰るぞ」

照れ隠しにぶっきらぼうに言った。まだ少々照れながらもフェイト達の方を向き、

「じゃあな…お前ら元気でな…」

そう言うとゆっくりと宙に浮かび上がった。それに気付いたなのはとユーノがそれぞれ手を振る。

「ウルトラマンさんありがとうございました…私の世界を助けてくれて…」

「お元気で…本当にありがとうございました」

アルフに支えられていたフェイトも気付いて立ち上がった。

「…あの……」

フェイトはゼロに感謝の気持ちを伝えようとしたが、気持ちが先走って上手く言葉に出来なかった。

感謝という言葉では言い表せない程のものを貰ったからだ。そんなフェイトの代わりの様にアルフが盛大に手を振る。

「本当にありがとう！フェイトには、しっかりあたしが着いてるよっ！」

そんなフェイトを見下ろしてゼロは片手を挙げると、

「あんまり無理すんなよ…飯はしっかり食えよな…」

励ます様に言う。フェイトはその言葉に聞き覚えが有った。彼女が戸惑っている内にも、ゼロはゆっくりと上昇して行く。クロノが遠くなるゼロに向かい叫んだ。

「最後に聞かせてくれっ、どうして君はここまでしてくれたんだ！？　本来君はこの世界とは何の関係も無いんだろうっ！？」

ゼロはクロノ達をゆっくり見下ろすと、

「俺はウルトラマンだからな…そういうもんなんだよ…それに俺は人が好きだからな…他に何か理由が必要か…？」

そう照れくさそうに言う、ゼロの無表情な銀の顔が、微笑んでいる様にクロノ達には見えた。
そしてゼロの姿は高次元空間の薄闇の中に見えなくなった。

（…ゼロさん……）

フェイトはゼロが消えた空を何時までも見つめていた。

数分後、変身が解けたゼロは、シグナム達に抱き抱えられていた。

ゼロはフェイト達の前から消えた直後に、時間切れで人間の姿になり、落っこちる所だったのを3人掛かりで捕まえた所だ。

両脇を抱えられたゼロはエネルギーを使い果たし、見事に気絶している。

「呆れた意地っ張りだな…やせ我慢にも程が有る…」

満足げに気を失ったゼロの顔を見て、苦笑するしか無いシグナム。

ザフィーラも僅かに苦笑する。

どうやらフェイト達に別れを告げた時は、殆ど意地だけで立っていたらしい。

「まったく…ゼロはしょうがねえなあ…あたしらが着いてねえと心配でしょうがねえや…」

ヴィータがゼロの頬を突っついて、とても嬉しそうに笑った。

「…では帰ろう…我らの戻るべき所に…」

シグナムは気絶しているゼロに言い聞かせる様に囁くと、転移魔法を発動させた。

ふと庭園の方を見ると、クロノ達もアースラへと転移して行く。そして時の庭園は完全に崩壊し、虚数空間へ呑み込まれて行った。

それを確認すると、人知れず世界を救った家族の一員達は、光の中に消えて行った。

次元振が収まり、静寂を取り戻した『第９７管理外世界』の八神家では、はやてとシャマル、それに『闇の書』がテーブルに料理を並べ、ゼロ達が帰って来るのを待っていた。

不安を押し殺して平静を装っていたはやてが、ふとリビングの方に目をやった時、ベルカ式特有の三角形の魔法陣が床に現れた。

「！」

はやては思わず我を忘れて、車椅子を操作しリビングに走った。シャマル達もはやてに続く。

魔法陣の上に４人の人影が現れる。はやては４人に突っ込む様に近づいた。
ゼロを抱えたシグナムとザフィーラに、嬉しそうなヴィータの姿が見える。
はやては涙腺が緩みそうになるのを我慢し言葉を発した。

「みんなっ…」

勢い余ってゼロ達に車椅子が突っ込んでしまい、気絶したゼロがはやてに倒れ込んで来た。
はやてはバランスを崩して倒れそうになりながらも、ゼロをしっかりと抱きしめる。そして傷だらけの４人を改めて見ると、

「お帰りなさい…」

と少し涙を滲ませて、天使の様に満面の笑顔を浮かべるのだった。

ーーー

色い髪の少女2人の姿が見える。

「よおーっ」

ゼロは片手を挙げて声を掛けた。そこに居たのはフェイトとなのはであった。

一時間程前フェイトから携帯に連絡が有ったのだ。
消え入りそうな声でフェイトは、ゼロに直接謝りたいので出来れば出て来て欲しい、自分は訳有って出向けないと本当に申し訳なさそうに言った。

余程勇気を振り絞ったのだろう。
あんな目に逢わせた相手に謝ろうというのだから。

ゼロは二つ返事で電話を切ると、急いで海鳴公園に飛んで来た（本当に飛んではいない、はやて達に停められたので…）のだ。

フェイトはゼロの姿を認めると、深々と頭を下げた。なのはも続いて、ぴょこんと頭を下げる。

ゼロはなのはが居るのに少し驚いた。

おそらくフェイトはこれから裁判などで別の所に移送されるのだろうから、その前にクロノあたりが気を利かせて、時間を作ってくれたのだろう。

その時にゼロに電話を掛けて来たらしい。

「よおっ、どうした？　改まって…」

申し訳なさで頭を上げられないフェイトに不思議そうに声を掛ける。
前の件はすっとぼける事にしたのだ。

フェイトは?という感じで顔を上げる。
ゼロはいささかぎこちなく、

「電話の事だけどよ…何の話だ?…俺には何の事かサッパリ分からないぞ…夢でも見たんじゃねえか…?」

頬をひきつらせてとぼけた。フェイトは慌てて首を振り、

「…そ…そんな事は有りません…確かに…」

訳が分からないと言った感じになり、必死で説明しようとするが、
当然ゼロと話が噛み合わない。
そこでゼロは、はやて直伝の言い訳を使う。

「ああ…そう言えば…何か妙な赤と青の奴が現れて…記憶を消すとか、何たらかんたらとか言ってたような…」

さも記憶が無い様に指を額に当てて言うが、いかんせんセリフが棒

読みなので、めっさ怪しい。

「…そうですか……」

複雑な顔をするフェイトに、事情を聞いているらしいなのはは、なるほど！という顔をする。

ウルトラマンは宇宙人だから何でも有りだと思っているのだろう。

これ以上突っ込まれるとボロが出そうなので、ゼロは話題を変える事にする。

「こっ、こっちの子は誰だい…？よおっ、俺はモロボシ・ゼロってんだ…」

なのはに向かって気安く挨拶をした。なのはもぺこりと頭を下げて、

「高町なのはと言います」

元気良く挨拶を返す。フェイトは照れた様になのはを見てから、ゼロに向き直り、

「…友達です……」

と頬を染めて幾分俯き、もじもじしながらもはっきりと言った。

ゼロはその時フェイトのツーテイルの髪を留めているリボンが何時もと違うのに気付く。

これは確かなのはの…？そう思いなのはを見ると、黒いリボンで髪を留めている。どうやら2人は、互いのリボンを交換したらしい。

色々有ったが、2人は分かり合えた様だ。ゼロの顔は自然ほころんだ。

フェイトは、そんなゼロの表情を見て思わず頬を染める。
ゼロは自分がとても優しい顔をしているのに気付かず、

「ひょっとして…もう此処を離れるのか？だから挨拶しに来てくれたんだろ…？」

結局謝る事も出来ず、どうしたらいいか分からないフェイトに助け船を出してやった。

「…は…はい…」

フェイトも取り敢えず頷く事にした。その間に彼女の頭には、一つの考えが浮かんでいた。
ずっと心に引っかかっている事…

そうしている内に、こちらに歩いて来るクロノとアルフの姿が見えた、きっともう出発の時間なのだろう。

ゼロは鋭い所の有るクロノと顔を合わせるのは、辞めた方がいい気がした。フェイトには悪いが、ここは引き上げた方がいい。
クロノ達に気付いたフェイトは、残念そうな表情になる。
ゼロはアルフに手を振ると、フェイトの頭に軽く手を置き、

「向こうに行っても元気でな…困った事が有ったら何時も連絡して来いよ…」

「…はい……」

フェイトは照れながらも返事をしていた。
本当ならもう合わせる顔が無いと思っているのだが、自分は狡いと自覚しながらも、今はその言葉に甘えたかった。

「じゃあなフェイトっ、元気でな、自分の道がんばれよっ」

最後にフェイトの頭を笑顔でポンと叩くと、ゼロは片手を挙げ、他のみんなにも挨拶すると、きびすを返して走り出した。

なのははその後ろ姿を見送り、ふと横に立つフェイトを見た。

「フェイトちゃん…どうしたの…？」

なのははフェイトの目から涙が零れているのを見て驚いた。

「…な…何でも無い…何でも無いよ…」

フェイトは涙を拭ったが、涙は止まらない。彼女はゼロの最後の言

葉に、とても覚えが有ったからだ。

それはウルトラマンゼロが、フェイトに掛けてくれた言葉と同じ言葉…

確証は無い、偶然かもしれない。しかしフェイトの中でゼロの名を持つ2人は一つに重なった。

最初からあの少年が今までずっと自分を助けてくれていた?

突拍子も無い話かもしれないがフェイトは信じた。いや…信じたかった。

フェイトは遠くなるゼロの後ろ姿に向かい、普段の彼女から考えられない程の大声を出した。

「ありがとう…ございましたっ…!」

フェイトの心からの感謝が籠もった言葉だった。

遠ざかるゼロが片手を挙げるのが、彼女の涙で滲む目に確かに見えた。

そしてその姿は、風にそよぐ緑の木々の中に次第に小さくなって行く。

そよ風がフェイトの濡れた頬を優しく撫でる。

フェイトが気が付くと、ゼロの後ろ姿はもう何処にも見えなくなっていた。

無印編完

つづく

第２７話　無印編最終話　心からの言葉や（後書き）

当初の予定を大幅にオーバーしましたが、ここまで来ました。

続けて来れたのは読んで下さる皆さんのお陰です。

ガチのクロスものをと思っていたのに、やっちゃった感の方が強いこの作品ですが、これからもお付き合い頂ければ幸せです。

この後、Ａ'ｓ編に入る前に2、３話程半年の間の話をしてからＡ'ｓ編に入ろうと思いますので、よろしくお願いします。

では次回お会いしましょう。

第２８話　第９７管理外世界で出会った奇跡や（前書き）

読んで下さりありがとうございます。

幕間話ですが、Ａ's編にも絡みます。

第２８話　第９７管理外世界で出会った奇跡や

『時の庭園』での『ヤプール』との決戦から、１０日余りが過ぎた。
ようやく平穏を取り戻した八神家で、皆のんびりした日々を送っていた。
様々な出来事や事件のせいで、あっという間に５月も終わり、カレンダーはもう６月である。
梅雨にはまだ遠く、最も過ごしやすい季節だ。
ぽかぽかした陽気がのんびりと心地いい、正午の八神家のリビングで、はやてを除く全員が何かの準備に勤しんでいた。
準備の合間にヴィータは、はやての部屋の方をちらちらと見て、
「…まだ大丈夫だよな…？」
と警戒して呟く。そんなヴィータにゼロは、紙袋から何やらカラフルな物を取り出しながら、
「大丈夫だ。後３０分は掛かる筈だ、急いで済ませるぞ」
幾分慌て気味でヴィータを促すと作業に戻った。

一方のはやては自室で机に向かい、若い女性と勉強に励んでいた。

女性は、はやての様な病気休学児童の勉強の指導をする、訪問支援員の先生で、教員経験者があたる事になっている。

今日ははやての勉強の進み具合をテストする日なのだ。

「…凄いわねはやてちゃん、同い年の子達より全然出来てるわ…百点よ」

はやての提出した、答案用紙の採点を終えた支援員の女性が、感心した声を出した。

「ゼロ兄のお陰で助かっとります」

はやては照れて頬を染め、髪を撫でながら笑顔を浮かべた。

指導員の先生をみんなで玄関まで送り、はやては開放感でう～んと両腕を挙げ、伸びをする。

ひと息着いた所で、後ろで勢揃いして見送りしていたゼロ達に、車椅子を操作して向き直り、

「さあて…テストも終わった事やし、みんな今お茶入れるから、ちょう待っとってな？」

にっこり笑って、キッチンに向かおうとすると、

「はやて、茶なら俺が入れて来っから、休んでろっ」

ゼロが先を越し、慌ててキッチンに素早く走って行った。

「そうそう、はやては勉強で疲れてんだから、休まないと…」

ヴィータが素早く、はやての車椅子のグリップ部分を持ち、リビングまで押して行く。

「何やヴィータ、私そんなに疲れとらんよ？」

はやては、ヴィータの大げさな物言いに苦笑しながらも、されるがままにリビングに連れて行かれた。

はやては車椅子からリビングのソファーに移して貰い、他のみんなも彼女を囲む様にそれぞれ座る。

はやてはゼロが入れた紅茶を、ゆったりと味わいながら、にこにこした。

「どうしたはやて、何かいい事有ったのか？」

隣でふうふうお茶を吹いていたヴィータが、目ざとく見付けて聞いて来た。

はやては照れた様な笑みを浮かべ、

「センセに勉強よう出来とるって、誉められてな…　同い年の子よりええ言われたんよ…」

休学中の彼女としては、勉強で誉められて嬉しかったのだろう。頬

が緩みっぱなしである。

はやては行儀悪く床に胡座をかいて、お茶を飲んでいるゼロに、

「これも、ゼロ兄のお陰やね…ぎょうさん教えてもろたもんなあ…」

と話を振った。それを聞いたヴォルケンリッター全員が驚いた顔をする。

「えっ？　はやて、ゼロに勉強教わってるのか？このギガ常識音痴にっ！？」

ヴィータが、もの凄おく意外そうに声を上げた。

「…い…意外だな…にわかには信じられれん…一般常識もまだ怪しいというのに…」

「…何か悪い物でも食べたの…？そんなのゼロ君のキャラじゃ無いわ…裏切られた気分よ…」

シグナムとシャマルは、知らない人を見る目でゼロを見て、めいめい勝手な事をぬかす。ザフィーラは無言だが目が驚いている。

「…お前らが俺をどういう目で見てるか、良〜く判ったぜ…（何ならシャマルの微妙料理を食ったからって言うぞ…）」

ゼロは肩を震わせて、引きつった笑みを浮かべた。

「みんな、ゼロ兄は一応宇宙人なんよ、めっちゃ頭ええんやから、数字や暗記は得意なんや」

ふてくされそうになるゼロを見かねて、はやてがフォローを入れるが、一応宇宙人とか言っている辺り、はやても忘れてたくさい。
ちなみに非公式ながら、ウルトラマンはＩＱ１００００位は有るらしい。
それではやての教科書や、参考書を全て覚え、先生代わりに教えていたのだ。

シャマルが手をパチンと叩いて納得顔をする。

「こう考えればいいんですね、いくらゼロ君でも小学校の勉強位は簡単だと？」

「…なるほど…例えるなら一番不出来な大学生でも、幼な子には教える事が出来るという感覚ですね…？それならば得心します…」

シグナムが腕を組んでウンウン頷き納得した。
ヴィータは安心した様にほっと息を吐き。

「…何だ…そういう事か…ウルトラマンの中で一番頭が悪いけど、こっちでは良く見えるだけか…あ～びっくりした…やっぱゼロはゼロだよな～」

もうボロクソである。何時の間にか、ウルトラ族の中で一番頭が悪い事にされてしまった。

まあ、あまり頭が良さそうには見えない性格ではあるが…イメージ的に不良っぽいので。

「…てめえら…言いたい放題言いやがって…そこまで言うなら頭で勝負だ！俺の頭の良さを見せてやるぜ！！」

ゼロが立ち上がり、ヴィータ達を指差した。

「面白えじゃんっ、受けて立ってやる、吠え面かくなよっ！」

ヴィータが不敵な表情で腕まくりして立ち上がる。
そんなヴィータに向かってゼロは不敵に笑い、親指で自分の鼻を軽く弾くと、

「甘えなヴィータ…俺に勝とうなんざ、二万年早いぜえっ！」

挑発する様に二本指を示す。何で二万年かは不明だが、睨み合う2人。

「はいはい…2人共、そこまでや…お茶が冷めてまうわ」

何時もの事なので、のんびりした口調でたしなめるはやてであった。

まだにやにやしながら、隣に座り直すヴィータにはやては、

「せやけどヴィータ、ゼロ兄はこう見えても、向こうで『宇宙警備隊』言う、固い仕事に着いとったんよ、一旦クビになったみたいやけど…」

と余計なのが2つばかり入っている言葉で再フォローする。シグナムがほお、という顔でゼロを見て、興味深そうに、

「名前からして、大掛かりな組織の様だな…ゼロの様な戦士が数多く所属しているのか?」

「ああ…、百万人のウルトラ戦士が、侵略者から星々や人々を守ってる、でかい所だな…」

ちょっと誇らしげに説明するゼロであった。

シグナムはちょっと感心して、はやてに話を振る。

「しかし…主はやて、ゼロの性格で良くそんな規律の厳しそうな組織に入れたものですね…」

「ほんまやね…？」

はやても今まで警備隊時代のゼロの話は、あまり聞いた事が無かったので、

「そないな事なら、当然ゼロ兄は訓練学校みたいな所にも行ってたん？」

「…ああ…一応、行ってたけどよ…」

ちょっと歯切れの悪い返事をするゼロ。

はやて達は訓練校で、他の銀色の顔をした同期生達と、かしこまって授業を受けているゼロの姿を、もやもやと思い浮かべた。

「…ぷっ、あはははははははははっ、似合わねえっ！」

ヴィータが耐えきれずにお腹を抱えて爆笑した。

「…あかんよヴィータ、笑ったら…ぷぷぷ…」

そういうはやても、明らかに笑いをこらえている顔だ。

シャマルは涙目で必死で口を押さえている。
シグナムは下を向いて、ゲフンゲフンと何度も咳をしている。笑いを必死で誤魔化しているのだ。

コイツら～と思うゼロは、ザフィーラと『闇の書』ならば、と思い2人を見た。

ザフィーラは狼形態で床に伏せ、闇の書ははやての膝の上で普通にしていたが、良く見ると2人共小刻みにぷるぷる震えていた…
どいつもこいつも、裏切り者ばかりである。

「お前らっ！　いい加減にしやがれ！　俺だってなあ…」

ゼロは再び立ち上がり、文句を言おうとした所で、ぴたりと勢いが停まる。あれっ？と言う感じの顔だ。当惑した様子である。

はやて達は思った。（サボってたクチだな…）と…

シグナムがそんなゼロを、さすがに哀れに思ったのか、

「…しかし…戦いに関するの知識は、大したものだ。超獣の能力、弱点を全て記憶しているとは…お陰で超獣も倒せたからな…」

「あっ、分かったわ、戦い方面の授業だけはしっかり聞いて、それ以外の心得とか隊則みたいな授業は聞き流すか、サボってたのね？」

シャマルがニコニコしながら鋭い所を突く。
はやては図星を突かれて、ぐうの音も出ない様子で突っ立っている
ゼロに笑い掛け、

「良かった…それでこそゼロ兄やね？」

何か変な所で感心してしまった。つくづく突っ込み所の多いウルトラマンである。

「…何か嬉しくねえ…キツいぞはやて…」

拗ねてぶちぶちボヤくゼロであったが、開き直った様に腕を組んで床にドスンと座り込むと、

「…ふっ…しょせん俺は、はみ出しもんよ…」

何かカッコ着けて、遠くを見つめた。最終的に孤独なヒーローを気取って、誤魔化す気らしい。

どう考えても手遅れだが…

そんなゼロの目に、リビングの時計が映る。午後5時を回った所だ。

「よし、そろそろいいだろうっ！」

ゼロが声を上げると、はやてを除く全員が、懐から一斉に何かを取り出した。

パンッ！パンッ！パンッ！

というリズミカルなクラッカーの音が、リビングに響く。

「誕生日おめでとうっ！」

5人が一斉にはやてに向けて、声を出した。

「ふあっ…？」

クラッカーの紙テープにまみれたはやては、ポカンと口を開け、唖然とした顔をする。

「はやて、どうした？自分の誕生日を忘れてたのか？」

ポカンとするはやてに、ゼロが悪戯っぽく笑いかける。

「…そないな事は無いんやけど…」

はやてが口ごもる。ゼロと初めて出会った日でもあるので、忘れてはいなかったが、嵐の様な出来事の連続で何か言い出し辛く、黙っていたのだ。

「さあ…主はやて、こちらへ…」

シグナムは優しく微笑み、はやてを抱きかかえ車椅子に乗せると、食卓に押して行く。

見ると、いつの間に用意していたのか、テーブルにお寿司や料理類が沢山置かれていた。どうりでキッチンに行かせたくなかった訳だ。

「何でや…？匂いなんて、全然せえへんかったのに…？」

はやてが不思議そうに首を傾げる。ゼロは冷蔵庫を開け、ケーキを取り出した。

「へへっ、コイツを馴染ませる時間が足りなくてな…その間バレない様に、ウルトラ念力で見えない壁を張っておいたのよ」

何という能力の無駄遣いであろう。

それはともかく、ゼロは冷蔵庫で寝かして置いた、手作りの生クリームケーキを、テーブルにそっと置いた。

赤い苺が目に鮮やかな純白のケーキの真ん中に、『はやて9歳の誕生日おめでとう』の手書きの文字が書かれた、チョコレートのプレートが載っている。

「他の料理も、みんな手伝ってくれたんだぜ」

ゼロが嬉しそうに言うと、シグナムがニヤリと笑い。

「…安心して下さい、味付けにシャマルは関わっていませんので…」

「ちょっとお、シグナム、それって酷くないっ？」

シグナムの言葉に抗議の声を上げるシャマルである。

ゼロはじっとケーキを見つめているはやてに微笑んで、カラフルなケーキ用ローソクを立てて行く。

はやては目頭が熱くなるのを感じた。

周りには心から自分を祝ってくれる家族。こんな日がまた自分に来るなんて…

（…ゼロ兄が来てから、嬉しい事ばっかりや…）

ゼロとの庭先での出会いからちょうど一年、彼女の頭の中をこの一年の思い出が次々と浮かぶ。色々な事が有った宝物の様な日々…

はやては涙ぐみそうになるのを必死で堪えた。
せっかくみんなが準備してくれた誕生会、湿っぽいのは無しやと気分を切り替える。

「…みんな…ありがとな、めっちゃ嬉しいわ…」

笑顔でお礼を言うはやての目の前で、ヴィータがあたしがやると、ライターでローソクに火を点ける。

「さあ、はやて一気に吹き消せよ」

ヴィータがはやての隣でワクワク顔で催促する。

「よっしゃ、任しときっ」

気合いを入れたはやては、思いっ切り息を吸い込み、可愛らしく頬を膨らませ、力の限りぷう〜っと吹き出した。

9本のミニローソクの火が一度に消える。

「「おめでとう、はやて！」」

「主はやて、おめでとうございます」

「はやてちゃん、おめでとう」

「…主、おめでとうございます…」

「…あはは…みんな、ありがとうな…」

みんなの温かい拍手の中、はやての顔色がつう～と、白くなった。
それに気付いたヴィータが、

「どーした？はやて？」

「…あかん…張り切り過ぎや…」

頭をクラクラさせるはやて。頑張り過ぎて酸欠になりかける彼女であった。

ーーー

寒村である。

今の村は戦火に逢ったかの様な、無残な有り様であった。

建築物は原型を留めぬ程に破壊しつくされ、業火が火の粉を撒き散らし、夜のとばりが降りた村を真っ赤に染めながら燃え盛っている。

地獄の様な光景であった。

しかしその光景には一つ足りないものが有った。人間の姿である。

死の気配が漂い、これだけの規模の破壊の中で、人間の姿が見えない。既に村の住人は全員非難したのだろうか？

その時、人の断末魔の悲鳴が辺りに響いた。

中年の女が絶叫を上げながら、見るもおぞましい巨大な怪物に呑み込まれて行く所だった。

「いやあああああああっ！あげえええぎゃよべえげえええっ！！」

生きながら喰われて行く、耳を塞ぎたくなる悲鳴が辺りに木霊し、声が止む。

その紫色の怪物はいやらしく蠢きながら女を呑み込むと、ぶるりと体を揺らす。

そのクレーン車程の体が更に巨大化して行く、その体は数十メートルまでみるみる大きくなっていた。

この村に人間の姿が見えないのは、この怪物に殆どの人々が喰われてしまったからだっだ。
そしてこの怪物は、人のあるものを糧にして力を増して行くのだ。

怪物はその紫色の海牛に似た、粘液に包まれた体に炎をテラテラと反射させ、吠えるかの様に不快音を響かせる。
次の獲物を見つけた歓喜の声だ。

怪物が巨大な体を向けた方向から、赤ん坊の泣き声が微かに風に乗って流れて来ていた。

怪物は巨体を不気味に蠢動させ、泣き声目掛けて真っ直ぐに向かう。
前方の崩れかけた建物から、若い夫婦連れが赤ん坊を抱いて飛び出して来た。

その顔は恐怖に歪んでいる。火が点いた様に父親の腕の中で泣き叫ぶ赤ん坊。夫婦は必死で怪物から逃げようと駆け出した。

怪物から無数のヌラヌラした触手が伸びる。夫婦はあっという間に触手に絡み捕られ、宙に吊り上げられた。

怪物の体の中央が縦に裂け、ゾッとする様な牙の生えた口をばくりと開ける。

触手はゆっくりと夫婦と赤ん坊を巨大な口に運ぶ。夫婦が死を覚悟したその時であった。

突如一筋の光が闇を翔る。光は鋭い刃と化し、夫婦を捕らえていた触手を切り裂いた。

怪物が、おぞましい悲鳴を上げる。地面に落下して行く夫婦は、途中で何か弾力を持ったものの上に落ちていた。

恐怖に震える夫婦はパニックを起こし掛けるが、その物体は静かに下降すると、夫婦を地面に降ろした。

呆然とする夫婦の目の前に、赤い炎に照らされて銀色の巨人がそびえ立っていた。

兜を被った様な頭部、暗がりに強く輝く2つの目、胸にYの字に似た巨大な赤いクリスタルが見える。

巨人は夫婦を庇う様に、大地を揺るがし怪物の前に立ちふさがった。

その巨人はある別世界で、確認されている巨人と酷似していた。

その巨人の名は『ウルトラマンネクサス』…

つづく

第２８話　第９７管理外世界で出会った奇跡や（後書き）

今回出て来た怪獣は、ウルトラマンネクサス登場のスペースビースト、ペドレオンです。

不定形のビーストで、人間やエタノールを食います。

スペースビーストは、知的生物の恐怖の感情を食って増殖する謎の生物で、ネクサス本編でも正体は明らかにされていません。

ちなみにゼロが言っていた「二万年早えっ！」は、新作ＤＶＤで本当に言ってました。

全っ然性格が変わってなくて爆笑してしまいました。

良かった…へたにいい人になってなくて。

おまけ

ある日の八神家

「ゼロ兄、聞いてや、私なええ事考えたんや」

「何だ、はやて言ってみろよ」

「ゼロ兄の登場の時の名乗りと、鎧を着た時の必殺技の掛け声考えたんよっ、両方無いから寂しいやん？」

「…いや…ウルトラマンそういうの、いらない…」

はやてはゼロの言葉を途中で遮り、

「ええからええから、必殺技の時はやな、豪快っ！銀河十文字斬りっ！！でどうやっ！？」

「…いや…駄目だろ、それ…」

ゼロのつれない返事に頬を膨らませるはやてだが、

「じゃあ、これやっ！気に入るでえ、登場の名乗りや、颯爽登場ぅっ！銀河美少年、ウルトラマンゼロおおぉぅっ！！なっ？偽り無しやろう！？」

浸るはやてだが、気が付くとゼロがダッシュで逃げて行くのが見えた。

「何でゼロ兄ぃっ、ええやないの、ほんまもんの銀河美少年やろっ！？」

「誰が、そんなこっぱずかしいセリフ言えるかあっ！！」

はやては車椅子フルスロットルで逃げるゼロを追った。

すいません、スタードライバーを見てたら、つい…

それでは次回お会いしましょう。

第２９話　その名はウルトラマンネクサスや（前書き）

読んで頂き、恐悦至極でございます。

寒くなって来ましたので、お体に気を付けて下さい。

それでは第２９話です。

第２９話　その名はウルトラマンネクサスや

赤ん坊の泣き声が辺りに響き渡り、闇を焦がす炎に銀色の体を照らされ『ウルトラマンネクサス』は怪物『スペースビースト・ペドレオン』に対峙する。

『ペドレオン』は『ネクサス』を認めると地を這うのを止め、格闘形態、二本の足を形成し、異形の獣のごとき姿となった。

体中醜い瘤に覆われた、おぞましい悪夢の様な怪物の姿である。

両手に無数の鞭状の触手を形成し、威嚇の奇声を発した。

『シェワッ！』

ネクサスはペドレオン目掛けて轟音を上げて突っ込んだ。

二つの巨体が大地を揺るがし、ぶつかり合う。ネクサスがペドレオンを押さえ込む形となった。

猛烈なパワーで逃れ様ともがくペドレオンを、相手を上回るパワーでがっちりと押さえ着ける。

呆然と立ち竦む夫婦に、首を振って逃げる様に合図した。

ようやく自失から目覚めた夫婦は、赤ん坊を連れ村の外へと駆け出して行く。

赤ん坊の泣き声が遠くなる。その姿を確認したネクサスは、ペドレオンの瘤に覆われた首を強靭なパワーで抱え上げる。

『ダアアアッ！！』

首投げの要領で一気に地面に叩きつけた。爆発する様に土煙が上がり、舗装路を砕いてペドレオンは地面にめり込んだ。

追撃を掛けるべくネクサスは、ペドレオンに巨大な足を振り上げる。

その時だった。突如ネクサスの背後から巨大な何かが襲い掛かった。

『デュヤッ！？』

痛烈な一撃を受けたネクサスは、崩れ掛けた酒場に突っ込んでしまう。

舞い上がる粉塵。だが直ぐに体勢を立て直し、瓦礫を吹き飛ばして立ち上がった。

見ると巨大な紫色の円盤状のものが高速で飛び回っている。ペドレオンの飛行形態『フリーゲン』だ。まだ他の個体が居たらしい。

ペドレオン・フリーゲンは地面を砕いて着地した。

円盤状のものがうねうねと形を変え、ペドレオンと全く同じ姿をとる。

両腕の鞭を振り上げ、もう一匹を庇う様にネクサスに対峙した。

油断無く構えをとるネクサスの超感覚に、更に別の反応が捉えられる。

『!?』

周りに次々と紫色のドロリとした液体がマグマの様に湧き出し、見る間に巨大な異形の怪物を形作って行く。

不気味な吼孔の合唱が闇夜に響き渡った。

ペドレオンが6匹、ネクサスを逃げ場無く包囲する。

倒れていたペドレオンも唸りを上げて立ち上がる。

計7匹が一斉に両腕の鞭をネクサス目掛けて放った。上半身をがんじがらめにされてしまうネクサス。

次の瞬間その鞭から、数百億ボルトに及ぶ高圧電流が彼の体を襲った。

凄まじい赤いスパークが走り、ネクサスの体中を落雷の数百倍もの電流が駆け巡る。

鯨でも一瞬で黒こげにする一撃だ。しかしネクサスは微動だにしな

い。心なしか、ふっと微かに笑った様な気配が有った。
ネクサスは拳を握り締めると、腕を下に向かって交差する。両腕に装備されている手甲『アームド・ネクサス』のクリスタル部分が光を放った。

『デェヤアアッ！！』

ネクサスの裂帛の掛け声と共に、ペドレオン達の鞭がアームド・ネクサスの『エルボーカッター』により火花を上げて、一度に切断される。

ペドレオン達は均衡を失い一斉にバランスを崩す。ネクサスはその隙を見逃さず、大地を揺らして一気に飛び上がり、包囲から逃れた。

重力を感じ差せない跳躍で、軽々と巨体が宙に舞う。

対面のペドレオンの頭上に出ると、背後に回りながら後頭部に大砲のごときキックをぶち込んだ。

前のめりに地面を砕きながら、倒れ込むペドレオン。

地面に着地したネクサスの背後から、もう一匹がおぞましい触角を蠢かせ襲い掛かる。

ネクサスは直ぐさま立ち上がり、振り向き様にペドレオンの腹部目掛けて、突き上げる様に強烈なボディーブローを叩き込んだ。

『シェワッ！！』

ペドレオンの巨体が爆発する様に、宙に吹き飛んだ。地響きと破壊音を立てて、醜い体が半壊した建物に落下する。

ネクサスはペドレオン達に向き直ると、左腕を胸の前にかざした。

腕の『アームド・ネクサス』のクリスタル部分が再び輝き、ネクサスの全身に変化が生じる。

赤い波長が全身を覆うと、銀色の体が赤を基調としたものに変わり、肩部に生体甲冑が形成され、胸部中央に青く輝くクリスタル『コア・ゲージ』が現れた。

ウルトラマンネクサスの特殊戦闘形態『ジュネッス』である。

ペドレオン達が一斉に体内の可燃性物質を頭上に集中した。可燃性物質は燃え上がり、巨大な火球と化す。

間髪置かず火球がネクサス目掛けて斉射された。超高温の火球の雨が襲い掛かる。

『ヘヤッ！！』

ネクサスは前面に光エネルギーを円形の盾に形成『サークルシールド』で火球を跳ね返す。

シールドに阻まれ爆発する火球。外れた他の火球が、ネクサスの後ろで大爆発を起こし大地を抉った。

再度の攻撃の為、ペドレオン達が再び火球を形成しようと頭上に可燃性物質を集中する。

だがネクサスは、そんな間を与える気など無い。

『デヤッ！！』

アームド・ネクサスを発動させ、光エネルギーの刃『パーティクルフェザー』を両手で一斉に放つ。

7匹の体を、くの字形をした光の刃の乱舞が切り裂いた。

スパークが走り、ダメージを受け醜い体をよじらせるペドレオン達。

『シェアッ！！』

ネクサスは連携を失ったペドレオンの群れの中に高速で突入した。

一番手前の2匹に、エネルギーを込めた拳で強烈なパンチを見舞う。

吹き飛び、建物を粉々にして大地に崩れ落ちるペドレオン。

ネクサスは攻撃の手を緩めない。ビーストに隙など見せたら、どんな逆襲を受けるか良く知っているからだ。

『デェヤアッ！！』

ネクサスの巨大な脚部が空気を切り裂いてペドレオン達に襲い掛かる。

回し蹴りが怪物の頭部に炸裂し、込められたエネルギーがスパークした。

悲鳴の様な軋み音を上げ、地面になぎ倒される巨体。

それでもネクサスの動きは停まらない。まるで人型をした巨大な竜巻の如く唸りを上げて回転し、残りのペドレオン達を一度に蹴散らす。

ペドレオン達は血の様な体液を撒き散らし、奇声を上げる。明らかに7匹の動きが鈍くなった。

ペドレオン達から一旦距離を取ったネクサスは、拳を握り締め両腕を下に組み合わせると、両腕を挙げ力を込めた。

全身のエネルギーをアームド・ネクサスに集中させる。

両腕の間にエネルギーの放電現象が発生した。エネルギー圧が高まり、臨界に達する。ネクサスは両腕をL字形に組み合わせた。

『シュワッ！！』

右腕のアームド・ネクサスに集中したエネルギーが眩い光の激流と化し、ペドレオン達に炸裂した。
ネクサスは体の向きを変えながら、７匹の怪物に光線を片っ端から撃ち込む。

ウルトラマンネクサスの必殺光線『オーバーレイシュトローム』だ。
不死身に近いスペースビーストを分子レベルで破壊出来る恐るべき武器である。

オーバーレイシュトロームの掃射を受けたペドレオン達は、ビースト細胞を全て焼き尽くされ、大爆発を起こした。

体内の可燃性物質が引火し、村は業火に包まれる。闇夜に巨大な火柱が上がり、辺りを真昼の様に染め上げた。

燃え盛る炎の中、ネクサスは光に包まれ、蜃気楼だったかの様にその巨大な姿を消した。

「…これは……？」

『リンディ・ハラオウン』はモニターに映し出された、ネクサスの戦闘記録を見て、思わず声を出していた。

此処は『時空管理局本局』の運用部、提督執務室である。

「彼の名は『ネクサス』…そして、あの怪物共は『スペースビースト』と呼ばれているらしいわ…」

紫色の髪に眼鏡の、理知的な雰囲気の女性。

リンディの古くからの同い年の友人にして、本局の人事、運用部提督『レティ・ロウラン』は、眼鏡のズレを直しつつ静かに答えた。

「…彼もウルトラマンなの…？それに、スペースビースト…？」

リンディの問いにレティは、空間モニターを切り替え、

「確かに、あなたからの報告に有った『ウルトラマンゼロ』と似ている所も有るけど…」

「違うの…？」

「どうも違う存在らしいわ…詳しくは不明だけど、ウルトラマンゼロとは、違う世界から来た様よ…」

レティは困惑するリンディを見て、

「彼は何年か前にスペースビーストを追って、この世界にやって来たそうよ…その力の源は管理局では全く解らなかった…」

「…スペースビーストを追って…別の次元から来たって事ね？」

レティは頷き、モニターに別の画像を次々と表示する。
奇怪な姿をした怪物達が映し出された。

「…スペースビースト…今まで管理世界で確認された個体よ…」

「…こんなに…でも、今まで私の耳にもこんな怪物が出たなんて、入ってないわ…」

疑問を浮かべて、モニターに見入るリンディ。レティは同意の相づちを打ち、

「私の所に入って来たのも数日前よ…上が停めてたのね…それにはスペースビーストの習性が関係しているらしいわ…」

「習性…？」

レティは、薄気味悪そうに画面を見ながら説明する。

「スペースビーストは知的生物の『恐怖』の感情を喰らう、彼ネクサスの居た世界でも正体不明の宇宙生物群…ビーストの存在が知れ渡ると、その恐怖心がビーストを更に呼び寄せてしまう…だから公には出来なかったという事…」

リンディも薄気味悪そうに、画面に映る醜悪な姿を見つめる。

「私達では対処出来ないの…？」

レティは目を閉じ、ゆっくりと首を横に振る。

「…残念だけど…不死身に近く、わずかな破片からでも再生可能な上に、様々な力を持つ怪物らしいわ…『アルカンシェル』でも撃ち込まない限りは…完全に息の根を停める事は出来ない…」

「…でも、アルカンシェルは地上で撃てる代物じゃ無いわね…」

リンディは眉をひそめ唸るしか無い。

『アルカンシェル』とは『アースラ』などの管理局の艦船に、許可を貰わなければ搭載出来ない大型魔導砲である。

地形を変えてしまう程の威力を持っているが、大威力故にどうしても使い所が制限されてしまうのだ。とても地上戦には向かない。

「そこで管理局は、唯一ビーストを完全に葬り去れる、ネクサスを民間協力者として、ビースト退治を依頼したという訳よ…お陰で管理世界に出現したビーストは全て彼が退治したわ…」

「ああ…、だから、こっちにも情報が降りて来たのね…しかし上も思い切った事をしたものね、そんな正体不明の相手と協力なんて、意外だわ…」

ビーストが全て退治されたと聞き、リンディはホッと胸を撫で下ろしたが、管理局の対応に少し違和感を感じた。

下手をすれば、歩く『ロスト・ロギア』の様な相手と協力するとは、それだけ切羽詰まった状態だったという事だろうか？

そんなリンディの疑問にレティは苦笑いし、

「確かに私も、ふに落ちない所は有るけど…それだけ危機的状況だった事は確からしいわ…放って置いたら、全ての人間は捕食されていた所だったそうよ…」

レティの言葉に、まあ…そういう事なのだろう…とリンディは納得する事にした。
只ネクサスが今後どうなるのか気になったが…
そんなリンディに対し、レティは少し言いにくそうにしていたが、

「そこでリンディに上層部から、たっての指名が有ったのよ…」

「指名…？」

レティの突然の物言いに、リンディはこの話の流れで、何故その話が出て来るのか訝しんだ。
古い付き合いだが、理知的なレティがこんな唐突な話を持ち出すとは…
嫌な予感がした。そんなリンディの胸の内を悟った上でレティ提督は、

「リンディ提督…あなたにネクサス『孤門一輝』を預かって欲しいとの命令よ…」

と上層部からの命令を、有罪を告げる裁判官の様におごそかに伝えた。
リンディ・ハラオウン提督は絶句した。

つづく

第２９話　その名はウルトラマンネクサスや（後書き）

ウルトラマンネクサスには様々な姿が、有ります。

一つは基本形態『アンファンス』最初に出た銀色の姿です。

もう一つの赤い姿が特殊戦闘形態『ジュネッス』です。

こちらは、アンファンスより戦闘能力が高く、威力が高い光線が撃てるのも、特殊戦闘亜空間『メタ・フィールド』を張れるのも、ジュネッスのみです。

ネクサスは変身者（デュナミスト）が複数居るので、変身者によりジュネッスの形は様々です。

さて今回のお話は、実は八神家の話とネクサスの戦闘が一緒に入る予定でしたが、八神家の話とネクサスの話のギャップがあまりにひどい（本当にひどいです…）上に長くなるので、八神家の方のお話は、次回別の話としてお送りいたします。

では次回お会いしましょう。

第２９．５話　電光石火エロ作戦や（前書き）

読んで下さり誠にありがとうございます！

この度ＰＶ１０３０００　ユニアク１１０００を超えました。感謝ならぬ多謝の極みであります。（滝涙）

それなのに…記念の話がこれですいません！

タイトルで分かる通り、下ネタ、バカっ話でございます。

第２９．５話　電光石火エロ作戦や

「…頼むっ！この通りだ！！」

その青年はゼロを拝む様にというか、実際拝み倒すつもりで頭を下げ、両手を合わせた。

7月も後半に入り、日差しがキツイ日曜の昼下がり、ゼロは最近出来た友人に呼び出され、近くの公園に居る所である。

「…いや…別に構わねえけどよ…」

ゼロは頭を下げる友人に戸惑いながら返事をした。

この最近出来た年上（あくまでゼロの外見上と比べて）の友人は、朝のトレーニング中に知り合い、妙に気が合った。それ以来友人付き合いをしている。

その友人は、前の戦友にそっくりな声で礼を言うと、かなり大きめのダンボール箱をゼロに渡し、笑顔で帰って行った。

（…おかしな奴だな…）

ゼロは重荷を下ろしたかの様に、軽い足取りで、スキップせんばかりの様子で帰って行く、友人の後ろ姿を見送りながら不思議に思っていた。

後ろ姿が見えなくなり、ゼロは持っているダンボール箱を難しい顔で見ると、

（…まあ、これも人間修行ってやつか…）

心の中で呟くと、ダンボール箱を抱えて家に向かって歩き出した。

はやては、シグナムとシャマルと共に、買い物から戻って来た。

ヴィータとザフィーラは散歩で、ゼロは友人に呼び出されて出掛けている。最近知り合ったという年上の男性だそうな。

3人が玄関に入ると、ゼロの靴が有るのを見付けた。

「あっ、ゼロ兄帰っとる。ただいまーっ」

はやてが声を掛けるが、返事が無い。

「ゼロ兄…どうしたんやろ…？」

不審に思いながらも、はやて達は家の中に上がる。

「ただいまーっ」

ちょうど散歩に出ていた、ヴィータとザフィーラも帰って来た。
5人揃ってわいわい話しながら、リビングに向かう。

リビングの方で何やら音というか、声が微かに聞こえて来る。

「なあんや、ゼロ兄やっぱり居るやないの」

はやてが妙な顔をする。シグナムが先に立ち、リビングのドアを開けた。

「ゼロ…帰ったぞ、聞こえなかったの…」

そこまで言った所で、シグナムは戸口で硬直して立ち止まり、持っていたエコバックをどさりと落とした。
大根だの玉ねぎなどがゴロゴロと廊下に転がる。
その時その場に居た全員の耳に、艶っぽい女性の声が響いた。

『あ～んっ！いく！いくう～っ！いっちゃう～っ！！』

全員がその場で固まった。いわゆるアレの時に女性が出す、喘ぎ声というやつである。
しばらくアホみたいに口を開けて静止しているはやて達。
その中でシグナムは、湯気を出しそうな程顔を真っ赤にして、かろうじて茫然自失から抜け出した。
彼女の額に青筋が浮かぶ。
女を引っ張り込んだ!?シグナムを始め、みんなの頭にその考えが浮かんだ。
しかもこんな真っ昼間から!!
シグナムはその表情に明らかにメラメラと殺意を浮かべた。はやて達はまだ固まったままである。

「ゼロおおっ!!」

シグナムはリビングに一気に駆け込むと、力の限り怒鳴った。

「貴様あっ、何をしている!?女を連れ込むとは万死に値するぞっ!!」

通り名の通り、烈火の如く怒り狂ってリビングに飛び込んだ彼女の目に映ったものは…

いわゆる世に言う所のH本を大量に床に広げて、それを興味深そうに眺めているゼロの姿であった。

そしてご丁寧に、リビングの大型液晶テレビにはアダルトDVDがかけられ、画面いっぱいに女性の○○○姿が音量MAXで流れている。

一瞬思考停止を起こすシグナムだったが、ホッと胸を撫で下ろした。しかし、これはこれで困った状況であると気付く。

その時ようやくショックから立ち直ったはやて達も中に入って来るが、リビングの様子を見て再び硬直した。

そんな超気まずい緊迫した空気の中、ゼロはようやくはやて達が帰って来たのに気付き、

「よお、お帰り…どうした?みんなそんな所で突っ立って…?」

と、いたってごく普通に向かい入れた。
それでも固まったままのシグナム達を不審そうに見つめ、

「…どうしたみんな？シグナムも何怒鳴ってんだ？」

と心の底から不思議そうに首を傾げた。
シグナムもはやてもシャマルもヴィータも何と言ったらいいのか解らない。

すると蒼い毛並みを揺らして、ザフィーラが静かにゼロに歩み寄った。

「…ゼロ…そういう物は普通、人に見られない様にするものらしいぞ…特に異性には…」

「…へエ…そういうもんか…分かった」

ザフィーラの言い聞かせる様な言葉に、ゼロは納得顔をし、いそいそとＨ本をダンボール箱に仕舞いＤＶＤを取り出すと、そそくさと自分の部屋に戻って行った。

ゼロが去って、しばらく呆けていた女性陣だったが、顔を一斉に合わせると、

「ゼロ（兄、君）が色気づいたあっ！？」

と見事にハモって叫んだ。

さて此処は、はやての部屋である。
ドアに張り紙がしてあった。それにはこう書いている。

『緊急会議中、男子入室禁止』

その中ではやて、シグナム、ヴィータ、シャマルが顔を突き合わせて、何やら話し込んでいる。

その中ではやては真面目くさった表情で腕組みをし、

「…そんで問題は、ゼロ兄をどないするかと言う事や…」

分別くさい事を言う。そんなはやてをシャマルが困った様な顔をして見て、

「…あのう…はやてちゃんとヴィータちゃんには刺激が強すぎると思うんですけど…」

「…ど…同感です…ここは私達で何とか致しますので、主達は…」

シグナムは腕を組み、うんうん頷くが頬が赤い。

「何だよっ、あたしは立派な大人だぞっ、似た様な年じゃんか！」

拗ねて口を尖らすヴィータ。はやてもすかさず反論する。

「私は家長として責任ちゅうもんが有るんやっ、ゼロ兄が道を踏み外さんようにせなあかんっ」

胸を張って言い切った。そう言い切られてはシグナムとシャマルも頷くしか無い。
何だか息子の部屋でH本を初めて見つけてしまった、お母さんの様である。

「…それに、こんだけ周りに女性がいっぱい居るのに、他の女の裸見るやなんて許せへん！」

（ほんま、めっちゃおもろないわ…）

はやては拳を振り上げて力説する。どうやらお母さんでは無かった様である。

確かに！と何か殺気立つ3人であった。

「大体ゼロ兄は、あないな物どっから、持って来たんや…？」

難しい顔で首を傾げるはやてにシャマルが応える。

「ザフィーラに聞いて貰ったんですけど…最近出来た友達に押し付けられたみたいです…何でも、最近彼女が出来たからとかで…捨てるのももったいないからと…」

「いらん事を…」

眉間にしわを寄せて、ため息を吐くはやてに、シャマルが手を挙げて質問する。

「でもはやてちゃん、ゼロ君は人間の血が混じってるという事ですし、男の子として仕方ないんじゃ…」

おそるおそるといった感じで思った事を言う。
はやてはゆっくりと首を横に振り、

「…ゼロ兄な…そっちの知識は殆ど幼稚園レベルなんよ…それがいきなりあれやと刺激が強すぎるわ…」

などといっぱしの口を利くが、実は本人も本などで聞きかじった位で、そんなに詳しい訳でも無いのはみんなには内緒だ。

しかしゼロがそうなったのは、はやてが原因でもある。

ゼロが地球に来て間もない頃、地球の事、人間の事を教える時、無意識にそっち方面は避けてしまったのである。

もっとも、当時わずか8歳の少女にしてみれば無理も無い話であるが…

「例えば、みんなが来る前にこないな事が有ったんや…」

はやてが身を乗り出して重々しく語る。

「あれはゼロ兄がうちに来て、しばらく経った頃やったわ…」

その時2人で話をしながらテレビを見ていた時、ドラマでたまたまラブシーンというやつをやっていた。

家族でテレビを見ている時に流れると、非常に気まずい瞬間である。

「そんでな…少し気まずくなって、さりげなく視線を外した時なんやけど…」

3人は揃ってこくこく頷く。はやては思い返して目を閉じながら、

「ちょうどテレビでキスシーンをしとる所で、盛り上がった所で場面が切り替わるやん…？それを見たゼロ兄が不思議そうに聞くんよ…」

はやては一旦みんなを見渡すと、ゼロの口真似をして、（あんまり似てない）

『なあ…はやて、こういう時、いつも似た様な所で場面が切り替わるんだが、この後どうなってるんだ？』

「て心底不思議そうに聞くんよ…さすがに参ったわ…」

はやてはしみじみと、ため息を吐いた。

「…あの…バカ……」

ゼロよりまだましなヴィータが顔を赤らめる。

シグナムとシャマルも黙って下を向き、顔を赤らめるしか無い。

犯罪に間違われそうな事はさすがに教えてあるが、それ以外は小学生以下のゼロである。

以前ザフィーラが、はやて達のホモネタ話をゼロが聞いたら、怒るのではないかと思った事が有ったが、実際聞いたら首を傾げただけだったのだろう。

（…そう言えば……）

シグナムは以前ゼロとしてしまった約束を思い出す。胸うんぬんの話である。

彼女としては、清水の舞台どころか、東京スカイツリーから飛び降りる位の覚悟を決めて応じたというのに、肝心の本人が忘れているくさいのだ。

あれから暫くの間いつ頼まれるのか、内心ハラハラしていたというのに…

ため息を吐くシグナムであった。まったく、一人焦っていた自分が

バカみたいである。

「と言うわけでや…」

はやては再び3人を見渡す。いつもの優しく穏やかな笑顔を浮かべながら…

しかし3人には、その笑顔がとても怖いものを秘めている気がした。
何か頭に狸の耳ならぬ、鬼の角が生えている様な…
しかし面白くないのは3人も同じである。

シグナム達の表情を満足そうに確認したはやては、高らかに宣言する。

「ゼロ兄の持っとるH本関係は全部没収！跡形も無く破棄やっ！！」

「「「おおーっ！！」」」

声を揃えて気勢を上げる女性陣であった。

リビングで丸くなって昼寝をしていたザフィーラは、響いて来た声に一瞬ビクッとしたが、我関せずとばかりに再び寝る事にした。

彼はあの勢いでは何を言っても無駄であろうと悟りきっているのだ…

ゼロの部屋目指し、ドカドカと階段を駆け上がるシグナムとシャマルである。

はやてとヴィータは下で待機だ。シャマルたっての頼みである。

シグナムがその事に関して不思議そうに聞いた。

「シャマルは随分主はやてとヴィータに、着いて来るのを止める様に言っていたが、どうしてだ…？」

シャマルは顔を赤らめ、恥ずかしそうに頬を押さえながら、

「…三件隣の山本の奥さんに聞いたのよ…最近中学生の息子さんがゼロ君と似た感じになったって…」

「何…？それはどういう事だ…？」

シグナムは興味深そうに聞く。シャマルは真剣な顔でシグナムを見ると、

「…それが…山本の奥さんが息子さんの部屋にノック無しで入ったら…息子さんがHな本を見ながら、〇〇〇〇をしてたって、ゲラゲラ笑いながら話してたのよ…」

「なっ！何と…！つまりゼロもっ！？」

顔を真っ赤にして固まるシグナム。お姉さんぶって、うんうん頷くシャマルである。

ご近所付き合いを一手に引き受けているシャマルは、近所のオバチャン達の井戸端会議で要らん知識を大量に仕入れているので、たいへん耳年増である。

でも山本の奥さん、ゲラゲラ笑わないで欲しいものである。息子さんが哀れだ…

「…だから、もしそんな事になってたら…とてもはやてちゃんやヴィータちゃんには見せられないわ！」

「なっ、なるほど…最もだな…」

生真面目な表情でコクコク頷くシグナムである。

何か知ったかぶりをして同級生に知識をひけらかしている小学生と、それを真にうける同級生みたいになっている。

そんな事をやってる間に2人はゼロの部屋の前に着いてしまった。

「……」

「……」

部屋の前で無言で立ち往生する、シグナムとシャマルである。

「…なあシャマル…」

「…何？シグナム…」

シグナムは固い表情でシャマルを見ると、

「わっ…私は…こういう事に慣れてはいない…というか、どう接すれば良いか分からん…シャマル頼む！」

そう言うと、敵の前では一度もした事が無い事、後ろに退いた。シャマルはギョッとした顔をして、

「む！む！無理よお～！私だってどうしたらいいか分からないわよ～」

両手をあたふた振って、こちらも一歩退く。シグナムは対抗する様に更に一歩退いて、

「シャっシャマルは、この様な事に耐性が有るのだろう？ならば適材適所という事だ…頼む…」

「ひっどおーい！シグナム、私だって耐性なんて無いわよっ、近所の奥さん達に話を聞いてるだけなのにぃ～っシグナム私達の将でしょう、シグナムが行ってよ～」

などと2人で不毛な言い争いをしていた時、不意にゼロの部屋のドアが開いた。

「「きゃっ！？」」

思わず可愛らしい悲鳴を出してしまうシグナムとシャマルである。ドアから顔を出したゼロは、2人を怪訝そうな目で見るが、何か思い付いた表情をし、いたって自然な調子で、

「ちょうどいい、2人共俺と闘らないか?ちょっと付き合ってくれよ」

「なっ!?」

「えええ～っ!?」

ゼロの言葉に、湯気を出しそうな程顔を赤くして、絶句する2人である。

「なななっ…何をいきなり言い出すのだ、お前はっ!!」

「ぜぜぜゼロ君、いきなりハードル高すぎでしょうっ!」

良くゼロの台詞を見ると、やるが闘るになっているのだが、直前までH関係で揉めていた2人には、そうとしか聞こえなかった。

ゼロはとても残念そうに肩を落とし、

「何だ…2人共忙しいのか…じゃあヴィータにでも頼むか…」

「犯罪者になる気か貴様あっ！！」

「いけませーんっ！！」

ゼロは2人の剣幕に驚きながらも、

「じゃあザフィーラにでも…」

「お前は見境無しかあっ！？」

「そういうのは実際は駄目だと思います！！」

シグナムとシャマルは血相を変えて、ゼロに詰め寄った。
ゼロは訳分からんといった顔で目をパチクリさせる。

「…いや…みんな都合悪いなら、いいんだけどよ…なら1人で特訓すっけど、何でお前ら怒ってんだ？」

それを聞いたシグナムとシャマルの目が点になった。

「…特訓……？」

「やるって…そっちの……」

ようやく2人は、自分達がこっ恥ずかしい勘違いをしているのに気付いた。

「…どうした…？」

目の前には2人の葛藤などまるで分かってないノホホン顔のゼロ…

その表情に一瞬殺意すら覚えるシグナムとシャマルだった。

2人は引きつった顔を見合わせた。以心伝心でコクリと頷き合う。

「なっ、何だあ！？」

困惑するゼロを押しのけて、2人はドカドカと部屋の中に上がり込んだ。

部屋に置いてあるH本やDVDを、やり場の無い憤りをぶつける様に、片っ端から乱暴にダンボール箱に放り込む。

「ああっ！お前ら何すんだっ！？」

ゼロが慌てて2人を止め様とすると、シグナムとシャマルは額に青筋を浮かべて、

「「2万年早いっ！！」」

声を揃えて怒鳴ると、ぷりぷり怒った様子でダンボール箱を持って、部屋を出て行った。

庭先である。男性から見ると、ムゴい位というか鬼気迫る勢いではやて、シグナム、シャマル、ヴィータがＤＶＤを粉々に砕き、Ｈ本をビリビリに引き裂いていた。

トドメとばかりにライターで火を点けるヴィータ。

そこへ、やっとシグナム達の勢いに呑まれて固まっていたゼロが復活して降りて来た。

女性陣の様子を見るとギョッとして、慌てて走って来る。

取り返しに来たのか！？と女性陣の目つきが険しくなった。

そんなはやて達にゼロは、さも怒った様子で、

「お前ら！庭先でゴミを燃やすのは条例違反だぞっ！」

「つっこむのは、そっちか！この鈍感宇宙人っ！！」

全員のツッコミが辺りに響いた…

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

後日談

それから数日後、そろそろ夏の暑さが本格的になる、夏休み前の平日である。

八神家の面々は、近場のレジャーランドに来ていた。流れるプールやウォーターコースターが有る、大きな所である。

商店街の福引きで当たったのと、女性がいるお陰ではやても色々不都合が無くなったので（着替え、その他諸々）みんなでやって来たのだ。

まだ夏休み前の平日という事で、さほど人は多くなく、程よい人出である。

そんな中、ゼロと人間形態のザフィーラは水着に着替えて、はやて達を待っていた。

端正な顔に、鍛えられた引き締まった体つきのゼロと、褐色の肌にゴツい筋肉のザフィーラは目立っていて、今の時間帯に多い奥様方の注目を集めている。

更にしばらく経った頃、

「ゼロ兄ぃ、ザフィーラお待たせやーっ」

はやての声がした。見ると、シグナムにお姫様抱っこされたはやてと、それぞれ水着に着替えた女性陣が、こっちにやって来る所だった。

はやては白地に青が所々に入ったワンピースの水着で、シグナムは紫色の結構際ど目のビキニ。

シャマルも際どい、緑系のセパレーツ水着で、ヴィータは赤系のフリル付きのワンピースの水着である。

非常に華やかな光景だ。はやてとヴィータは可愛らしく、シグナムとシャマルは露出が多いせいと、見事なプロポーションでえらく色っぽい。

ヴィータはともかく（それでも照れくさそうだが）シグナムとシャ

マルは非常に恥ずかしそうだ。

周りの男性のやらしい視線や、奥様方の嫉妬の視線が痛い…

水着を買う時、もっと露出が少ない物をと、はやてに頼んだのだが、ノリノリで選ぶはやてが聞き入れる筈も無く、無理やり着せられた2人である。

ちょっとはやての将来が不安だ…

お前ら遅いぞ…と歩み寄り掛けた所でゼロは、心臓の鼓動が速くなった気がして立ち止まった。

？という感じで心臓をさする。

そんなゼロを女性陣は、チラチラ見ている。彼は訳が分からず、何か困ってしまった。

そんなゼロにザフィーラがアドバイスしてくれる。

「…こういう時、誉められると女性は喜ぶらしいぞ…」

小声でそっと教えてくれた。ゼロは、おおっと納得し、

「…そういう事なら任せろ…伊達に1年以上地球に居た訳じゃない…」

自信満々で言うと、はやて達の前にスタスタ近付いた。
至って自然に手を挙げ、

「おおっ、みんな水着良く似合ってるな、可愛いし、綺麗だぞ」

ゼロの意外にまともな反応に、はやて達は一斉に照れくさそうな表情になる。
ゼロは更に、にこやかに笑いかけ、

「みんな凄えエロいな、今晩お相手願いたい位だ、俺の我慢も限界寸前だぜ！」

と全然意味が分かって無いのが明らかな、棒読みで言った瞬間、強烈な蹴り（×3）を食らい流れるプールに叩き込まれた。
水死体の様にぷかりと浮かぶゼロ。

「まったく…この鈍感宇宙人がっ！」

「ゼロ兄早速、変な影響受けてからに…」

「…やっぱりゼロ君にはあーゆうのは、2万年早いです！」

「…わきまえないにも程があんだろうが…」

大ひんしゅくの声を背中に受け、プールの中を流されながら、みんなの水着姿を見て何で心拍数が上がったんだろう？と疑問に思うゼロであった。

つづく

第２９．５話　電光石火エロ作戦や（後書き）

すいませんでしたあっ！！

これで前回の話と一緒に出来なかったのが、分かって頂けたかと…

この話の後にネクサスの戦闘では、あまりにギャップが…

ちなみにこの話メビウス本編を見ていて、ミライのキャラが新鮮で、もしミライが下ネタ振られたらどうすんだろうというアホな考えから生まれました。

何かすいませんでした。アホ作品で…

では次で幕間話は終わりですので、次回お会いしましょう。

第３０話　うたかたの空や（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

では幕間最終話です。

第３０話　うたかたの空や

その日『高町なのは』は早朝の桜台登山道にて、ユーノの指導の元、魔法の訓練に集中していた。

ユーノは膨大な魔力に目覚めたなのはの指導係として、暫くの間この世界に留まっているのだ。

毎朝４：３０に起床しての魔法の練習は、なのはの日課の一つとなっている。

自分の中に眠っていた魔法の才能を、更に高めて行くのが楽しいのだろう。

その他にも、夜間の高速移動の訓練に『レイジング・ハート』による戦闘シミレーションから、日常生活に於ける魔力負荷による魔導師養成ギブスの訓練ｅｔｃ．…

さすがに先生役のユーノも、呆れてしまう程の打ち込み振りである。

「なのはは魔法使いを続けるんだね…？」

フェレット姿のユーノは、小さな頭をピョコンと上げ、魔法操作に励むなのはに聞いた。

「うんっ、私にも出来る事が有るなら、今はこの力をもっと鍛えたいんだっ」

なのはは朝から元気いっぱいで笑う。ユーノは頷いて、

「それはやっぱり、この間の経験のせい…？」

「うん…そうだよ…」

なのはは掲げていた『レイジング・ハート』を下ろして微笑んだ。

「こんな私でも…ウルトラマンさんの手助けをして、この世界を守るお手伝いが出来たんだよ…」

なのはは誇らしげに早朝の澄んだ空を見上げた。

「…人が好きだから…他に理由が必要か？なんて言って貰ったら…私達はそれに応えられる様な人になれたらいいな…と思ったんだ…」

ユーノも、あの銀色の顔をした超人の事を思い出す。なのはは再びレイジング・ハートを構え、

「だから私は自分の力をもっと磨く…そしてウルトラマンさんみたいに、誰かを守る為にこの魔法を生かしたいんだ…」

そんなのはを見てユーノは頷いた。
彼もゼロの戦い抜く姿を見て、心打たれるものがあったからだ。

「分かったよ、なのは、じゃあ練習を再開しよう」

「ユーノ先生お願いします！

ようやく目を覚まし始めた街を見下ろし、なのはは張り切った表情で練習を再開した。

ーーーーーーーーーー

「いや…幾ら何でもやりすぎじゃないのか…？」

次元の海に浮かぶ都市並みの巨大さを誇る『時空管理局本局』
ドックに係留中の管理局艦船『アースラ』その通信室にクロノの呆

れた様な声が響いた。

クロノはユーノから、なのはの練習メニューを聞き、呆れ半分驚き半分といった表情である。。

画面上のフェレット姿のユーノは、頭を掻き、

「…どうもなのはは、魔法の練習が楽しいらしくてさ…」

そんなやり取りをモニター越しにし、通信を終えた時、部屋の扉が開いた。

「おじゃまします…お茶持って来たよ」

入って来たのは、お茶の載ったトレイを持った、フェイトである。

フェイトは裁判中、アースラに身柄を預けられているのだ。

裁判の進み具合は順調で、艦内をフェイトは自由に歩き回る事が出来る。

「クロノ…ユーノと話してた？なのははどうだって…？」

お茶を渡すフェイトに、クロノは首をすくめ、

「元気だよ…物凄い特訓をしている…あんまり無理をするなと伝えておいたよ…」

「そうか…なのはは頑張ってるんだ…私も頑張ろう…！」

張り切るフェイトを見て、クロノは2人の将来に空恐ろしいものを感じ、引きつった笑いを浮かべた。

なのはもフェイトも9歳にして、並みの魔導師を遥かに超える力を秘めているのだから。

部屋を出たフェイトは、クロノから渡されたなのはからのビデオメールを手に、自分の部屋へといそいそと歩いていた。

なのはとはビデオメールをやり取りして、お互いの近況を知らせ合っている。

「フェイトぉーっ」

そこに元気いっぱいな調子のアルフが声を掛けて来る。

フェイトとアルフは並んで歩きながら、これからの事を話していた。

「フェイト、本局に着いたから、もう直ぐ『嘱託魔導師』の認定試験だね…」

アルフが感慨深そうに腕を組んだ。フェイトは頷き、

「これに合格すれば、異世界での行動制限がぐっと少なくなるし、リンディ提督やクロノのお手伝いが出来るからね…」

嘱託魔導師とは、管理局員とは別に契約を結んだ民間魔導師がなる場合が多い役職だ。

前線に出る事が多い代わりに権限が大きい。

そして嘱託魔導師になるには、試験に合格しなければならないのだ。

フェイト達は裁判中の身としては異例だが、その試験を受ける事になっている。

リンディやクロノの尽力に加え『ヤプール』の大規模次元干渉の阻止に貢献した上に、ヤプールの悪辣さとフェイトの境遇に同情の声

が集まった結果だった。

アルフは、なのはからのビデオメールを大事に抱える、フェイトを嬉しそうに見ながら、

「試験はやっぱ、なのはの影響？」

「ん…それも有るけどね…」

フェイトは初めて出来た友人の顔を思い浮かべる。

「なのはも向こうで頑張ってるんだし…私も頑張らないとなって…」

「それに『ウルトラマンゼロ』だろう？」

アルフがにっこり笑って、フェイトが続け様としていた言葉を先に言った。
フェイトは照れた様な笑みを浮かべ、

「…うん…私もゼロさんみたいに、誰かを助けられる様になりたいんだ…」

フェイトは数ヶ月前に出会った少年の顔を思い出す。遠くを見る様な表情になり、

「…私はあの時…暗闇に1人取り残された気持ちだった……」

彼女は母親に化けていた、ヤプールとの悪夢の様なやり取りを思い出し、少し眉をひそめるが、

「…あの人が居なかったら…私は絶望したまま死んでいた…それだけじゃ無い、あの時ゼロさんに命だけじゃ無く、生きる希望まで貰った…」

「…うん…」

フェイトの言葉にアルフはゆっくりと頷いた。
フェイトは視線をアルフに戻し、

「…だから私もゼロさんみたいに、あの時の私みたいな人の手助けをしたい…あんな凄い力は無いけど…自分が出来る限りの事をしてみたいんだ…」

ちょっと照れた表情のフェイトの肩を、アルフはポンと叩き、

「それがフェイトの見つけた自分の道だね？」

「うん…！」

フェイトの照れてはいるが、しっかりとした意思を感じる表情を見てアルフは感慨深く思った。

（…あのフェイトが…こんな表情を浮かべられる様になったんだね…）

ヤプールの化けたプレシアに、何時もびくびくしていた彼女は明らかに成長を遂げたのだ。

ところで2人共、少々話に入り込み過ぎていた様だ。
その為通路の角から出て来た人影に気が付かなかった。

「あっ…！」

フェイトは角から歩いて来た青年に、思い切りぶつかってしまった。

「す…すいません…ぼーっとしてて…」

慌ててすぐさま謝るフェイト。青年は人懐っこい笑みを浮かべ、

「いや…こっちこそ御免、初めてなものでね…こっちもキョロキョロしてたみたいだ」

青年は特に気にした様子も無く、笑って許してくれた。
そこで青年は、フェイトとアルフを見て何か気付いた様で、

「ああ…、君達はフェイトちゃんとアルフちゃんだね…？」

「…は…はい…」

「そうだけど…」

2人は少し戸惑いの表情を浮かべる。目の前の青年に見覚えが無かったからだ。

アースラに来てから暫く経ち、クルーは全員知っているが、こんな青年は見た事が無い。
初めてと言っているし、新しく入ったクルーだろうか？

フェイトとアルフの戸惑った表情に気が付いた青年は苦笑し、

「ああ…御免ね、知らないのも無理は無い…僕は今日からこの船にお世話になる事になったんだ」

青年は右手をフェイトに差し出し、

「僕は孤門一輝…よろしくねフェイトちゃん」

にっこりと優しい笑みを浮かべた。

ーーー

「なんや?そんなとこで見とったら、水が跳ねて汚れるでー」

はやての言葉に頷く様にピョコンと動くと、少し距離をとる。何かほのぼのした光景だ。
シャマルはクスリと笑う。

お味噌汁のいい匂いが漂い、魚の焼ける香ばしい香りがキッチンを満たす。ゆったりとした時間が流れる朝の一時だ。

「ただいま〜っ、腹減ったあ〜っ」

「ただいま戻りました」

早朝からトレーニングに出ていた、ゼロとシグナムが帰って来た。
ゼロは腹ぺこらしく、ちょっと情けない顔をしていて、シグナムにそれをからかわれている。

「たっだいま〜っ」

続いてザフィーラと散歩に出ていたヴィータも帰って来る。リビングは一気に騒がしくなった。

ーーーーーーーーーー

朝食を終え一休みした後、シグナムとシャマルは洗濯物を干しに庭に出ていた。
澄み切った朝の空気の中、シャマルはふと手を休め、

「ねえ…『闇の書』の管制人格（マスタープログラム）の起動って…蒐集が４００ページを越えてからだっけ？」

「ああ…」

シグナムも洗濯物を干す手を止め、

「それと…主の承認が要る…つまり主はやてが我らが主である限り、我らや主はやて、ゼロが『あの子』と会う事は無いだろうな…」

シグナムは心なしか憐れむ表情になった。シャマルは頷き、

「そうね…はやてちゃんは『闇の書』の蒐集も完成も望んでいない

し…それが分かるから『あの子』寂しいのかしら…」

「どうだろうな…？そうか…シャマルは『あの子』が主やゼロに懐くのを見て、そう思ったのだな…？」

シグナムは、はやてやゼロにくっ付いて行く、子犬の様な『闇の書』の姿を思い出す。少し罪悪感を感じた

「しかし…主はやてとゼロには『管制人格』の事は伏せておかないとな…主もゼロも、きっと気に病まれる…」

シグナムの言葉にシャマルは納得して頷き、

「うん…『あの子』もきっと判ってくれる…」

2人はリビングでゼロの頭の上をふわふわ飛び回る『闇の書』を見ると、再び洗濯物干しの作業に戻った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

夕暮れ間近の午後、静かな八神家のリビングで、はやてはソファー

に座らせて貰っていた。

その前にはゼロが座り込んでいて、はやての足を持って何やら集中している様子だ。

ゼロの毎日の日課になっている、はやての足への『メディカル・パワー』の照射である。

以前フェイトに使ったあたりから、一年近く続けているのだ。

「…ああ…気持ち良かったわ…ありがとうなゼロ兄…」

照射を終えたゼロにはやては、嬉しそうに笑ってお礼を言う。

「…いや…こんな事は、何でもねえよ…」

応えるゼロは浮かない顔だ。

「…済まねえなはやて…あんまり役に立てなくてよ…」

はやての足を直してやれない自分が不甲斐ないのだろう。

「まーたゼロ兄は、そないな事言うてっ」

はやては凹み気味のゼロを笑って、たしなめる。

「…でも何だかよお…」

まだ元気の無いゼロに、はやては何か言おうとしたが、ふと思いついて、

「そないに気になるんやったら、私のお願い聞いて貰おうかな…？」

「おうっ、何でも言えよっ」

ーーーーーーーーーーー

という訳でソファーに座り、はやてを膝に乗せて赤ちゃんをあやす様に抱きすくめ、頭を撫でているゼロである。

はやてはゼロの胸板に体を預け、嬉しそうにゼロの手の温もりを味わっている。

夕暮れの茜色の光がリビングに優しく射し込み、ゆったりとした時間が流れる。

はやてには時間までゆったりと進んでいる気がした。

彼女の耳にはゼロのトクットクッという、心臓の脈打つ音だけが聞こえ、温かい温もりが全身を包む。

はやてはふと、茜色に染まったリビングを見渡し、

「…みんなも、すっかり此処に慣れたんやなあ…」

感慨深そうに、今は出掛けている家族の姿をその目に映し出す。

シグナムは近所の道場で臨時の講師を頼まれて出ている。

シャマルは町内会の集まりに行き、ヴィータは老人会のゲートボールに参加、ザフィーラはそれに散歩がてら着いていっている。

いつもは一斉に出払う事は無いが、今日はたまたま出かける用事が重なり、珍しく家にはゼロとはやてだけである。

ゼロはしみじみしているはやてを、からかう調子で、

「はやて…何かその言い方だと、子供を心配するお袋さんみたいだぞ…」

「もう…ゼロ兄ぃは…私まだ9歳なんよ…」

少し頬を膨らませ、むくれている素振りを見せるはやてだが、ゼロにははやてがシグナム達の小さなお母さんを密かに任じているのを分かっている。

小さい身でありながら、抱え込む性格のはやてが少し心配になった。

（…まあ…その分、俺がこうして甘えさせてやるか…）

ゼロははやてが苦しくない程度にもう少しだけ、抱く力を強める。

はやてもゼロの腕にしっかりと、すがりつく様に腕を絡めた。

はやては改めてリビングを見渡す。彼女の目には、後1時間もすれば帰って来るみんなの姿がしっかりと見える。

「…ずーっと、みんなでこのまま楽しく暮らして行けたら、ええな…」

呟く様に言うはやての頭を撫でながらゼロは、

「当たり前だろ…みんなはやての傍にずっと居るさ…」

幼い子に言い聞かせる様に優しく言う。
その時ふとゼロは、はやてがとても儚く消えてしまう様な気がして、思わずゾッとした。縁起でも無いと平静を装う。

「…うん……」

はやてはそんなゼロの心の動きには気付かず、離れるのを恐れる赤ん坊の様に、ゼロの腕をしっかりと握り締めた。

（…ありがとうな…ゼロ兄…私は…そう長くは生きられんと思うけど…それまでは……）

はやては心の中で、そっと呟いた…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

其処には闇だけが有った。

その中で彼女は永い時の殆どを、１人で過ごして来た…

我は『闇の書』…

かつての姿と名…既に失い…

遠からず時は動き出すだろう…

そうなった時…

我が騎士達や…我が主…ゼロは…

我を呪うだろうか…

比度はいったいどのような形で…我は目覚め、力を振るうのか…

そして誰がどのようにして…

我と主を破壊するのだろうか…

願わくば、その時が…

たとえ僅かでも先に延びるよう祈るばかり…

我は『闇の書』…

破滅か再生か、いずれにせよ…

我はただ…その時を待つばかりなり…

ただ気掛かりなのは…

我が感じたおぞましい影と…

我に一度だけ干渉し、主とゼロに我の記憶を伝えさせた謎の力…

何が起きようとしているのだろうか…

我にはただ時を待つしか出来ない…

八神はやて・闇の書の主・覚醒第一段階

蒐集頁数　現在０頁

完成まで後６６６頁

つづく

第３０話　うたかたの空や（後書き）

という訳で次回からＡ'ｓ編となります。

最初無印編をすっ飛ばそうと思っていたのが、結局此処まで来るのに３０話近くかかりました…

それでは予告なんぞを…（ネクサス風です）

フェイト
「エイミィ嘘でしょ?ゼロさんが人を襲ってる!?そんな…!!」

「ウルトラマンネクサス…君を倒しに来た…」

シグナム
「貴様は誰だ!?何故そんな…」

「高町なんとかがいきなり…!」

シャマル
「ど…どうなってるの!?闇の書の頁が…」

「あなたはいったい何者なんですか…?」

「僕は…彼を助けに来たんだ…」

「いやあああああああああっ！ゼロ兄ぃぃっ！！」

では次回Ａ－ｓ編『侵蝕－エンクラッチメント－』でお会いしましょう。

第３１話　Ａ'ｓ編　侵蝕ー エンクラッチメントー （前書き）

ここまで付き合って下さった皆さん、ありがとうございます。

Ａ'ｓ編開幕であります。さあ！あげてこうか！↑間違い

第３１話　Ａ’ｓ編　侵蝕ー エンクラッチメントー

その日、第１世界『ミッドチルダ』の辺境の砂漠地帯で、小規模な次元振が観測された。

『時空管理局』が調査に向かったが、何も発見出来ず調査は打ち切られた。

只…彼らは知らなかった。

巨大な足跡の様なものが有った事…

砂漠地帯が故に、調査隊が到着した時には既に風で足跡は消えてしまっていた事に…

その事件は小さな出来事として、誰の記憶にも残らなかった…

ーーー

今日ははやての定期検査の日で、ゼロとシグナム、ヴィータ、シャマルとで付き添って、海鳴大学病院に来ていた。

「この検査退屈なんよ…時間は掛かるし…暇つぶしに本も読めんし…」

はやてはゼロに車椅子を押して貰い、検査室に向かいながらため息を吐く。ゼロは苦笑し、横を歩くヴィータも笑う。

「まあ…少しの我慢だ。昼寝でもするつもりで行って来ればいい…」

「はやて、待ってるから早く終わらせて帰ろっ」

「そうさせて貰うわ…ヴィータもいい子で待ってるんやで」

はやてはやれやれといった顔をして2人に返事をすると、大人しく検査室に連れて行かれた。

ーーーーーーーーーー

定期検査も終わり、はやては開放感でニコニコ顔だ。
ヴィータは早速はやてにまとわりついて、嬉しそうに喋っている。

ゼロとシグナム、シャマルは、はやてとヴィータを待合室で待たせ、石田先生に検査結果を聞きに診察室に入っていた。

部屋に入った時ゼロは、石田先生の表情が暗いのに気付いた。

（何だ…？）

得体の知れない不安感を感じる。

そして先生の口から出た言葉は最悪のものであった。

「命の危険？そんなっ…！？」

思わず声を出してしまうゼロ。

今し方石田先生から聞いた言葉が頭の中で木霊した。目の前が真っ暗になった気がする。

「…ま…まさか…」

「はやてちゃんが？」

シグナムとシャマルも愕然とした顔をする。石田先生は沈痛な面持ちで頷き、目を閉じ、

「…ええ…はやてちゃんの足は…原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが…この半年で麻痺が少しづつ上に進んでいるんです…この2ヶ月は特に顕著で…」

ゼロ達は衝撃でもう言葉も出ない。石田先生は伏せ気味の顔を上げ、無念そうに、

「…このままでは内臓機能の麻痺に発展する危険性があるんです…」

それは、はやてにとって死刑宣告に近いものだった。

ゼロは以前に感じた、漠然とした不安感が現実のものとなったのを知った…

先生が部屋を出た後も3人は茫然としたままだ。ゼロの頭の中を、笑っているはやての顔がよぎる。

死ぬ…？…はやてが…

そんな馬鹿な…

そんな馬鹿な事があっていいのか…！？

打ちのめされるゼロの横で、壁を力の限り叩く音がした。

「何故っ、何故気付かなかった！」

シグナムの怒りに震える声が、静まり返った診察室に響く。

「ごめん…ごめんなさい～っ私…」

シャマルの打ちひしがれた涙声が懸命に謝っている。

「…お前にじゃ無い…自分に言っている…！」

シグナムの低い、しかし深い自責の念が籠もった声を、ゼロはぼんやりと聞いていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

自宅に戻ったゼロ達は、表面上は何事も無かったかの様に振る舞った。

とても本人に言える事では無い…

普段通りに食事を終え、談笑して何時も通り過ごす。

この間ゼロは空元気を振り絞って明るく振る舞っていた。

必死で湧き上がる不安を抑えながら…

夜も更けたので、入浴を済ませたはやてをゼロが部屋に運んで行く。

いつの間にかシグナム達の姿が見えない。きっとあの場に居なかったヴィータとザフィーラに話を聞かせる為に、外に出たのだろう。

はやてをベッドに寝かせ、布団をかけてやる。

「じゃあな…はやてお休み…」

「…うん…ゼロ兄もお休みや…」

はやては検査の疲れも有り、もうウトウトし始め早々と寝入ってしまった。

ゼロはその無邪気な寝顔をじっと見る。

（……何でだ…？何ではやてが…あんまりじゃねえかよ…こんない子が何をしたって言うんだよ…？）

はやての栗色の髪をそっと撫でてやる。彼女の表情に心なしか、安らかな笑みが浮かぶ。

小さな恩人…両親を亡くし足を悪くしながらも、今までたった1人で生きて来た…

実は寂しがり屋のクセに、明るく振る舞う危なっかしい強さと、包み込む様な優しさを持ったゼロ達全員にとって、掛け替えの無い少女…

（ふざけるなっ！俺は絶対認めもしねえし、死なせもしねえ！！）

握り締めた拳から血が滲んでいた。
ゼロは何事か決意した顔をすると、静かに部屋を出て行った。

「主はやてのそれは病気では無い…『闇の書』の呪いだったのだ…」

シグナムは重々しく、分かった事実をヴォルケンリッター全員に伝えていた。

シグナム達は、はやてやゼロに気付かれない様に、八神家より離れた海沿いの公園に集合している所だ。

シグナムは更に話を続ける。

「…主はやてが産まれた時から共に在った闇の書は…主の体と密接に繋がっていた…抑圧された強大な魔力は、『リンカーコア』が未成熟な主の体を蝕み、健全な肉体活動どころか、生命活動すら阻害している…」

初めて聞くヴィータと狼の姿のザフィーラは息を呑んで、シグナムの話に聞き入っている。

「…そして…主が第一の覚醒を迎えた事で、それは加速した…それは私達４人の活動を維持する為、ごくわずかとはいえ主の魔力を使用している事も無関係とは言えない筈だ…」

「むう……」

シグナムの言葉に思い当たったザフィーラは顔を上げる。

つまり自分達の存在そのものが、はやての命を削っている一因である事を…

「…助けなきゃ…」

先ほどからうつむいたままだったヴィータの呟く様な声に、全員が目を向ける。

「はやてを助けなきゃ！！」

顔を上げたヴィータの目から、大粒の涙が零れていた。
ベンチに沈んだ様子で腰掛けているシャマルに詰め寄る。

「シャマルは治療系得意なんだろっ？そんな病気くらい直せよおっ！」

「…ごめんなさい…」

シャマルは目を伏せ、申し訳なさそうにうなだれた。

「…私の力じゃ…どうにも…」

それを聞いたヴィータは、ハッとして、

「そうだ…ゼロなら…ゼロの力なら何とかならないのか！？」

最後の希望にすがる様にヴィータは提案するが、シグナムは重々しく首を横に振り、

「…本来なら、主の体の麻痺はもっと速く進行していた筈…進行が遅くなっていたのは確かにゼロのお陰だが…それが限界だ…元々力

の根本が違う…ゼロにも止める事は不可能だ…」

ヴィータは絶望に目を閉じる、涙が止まらなかった。
実の姉の様にも感じているはやてが居なくなる…耐えられなかった。

「何でだ？何でなんだよおっ！？」

ヴィータの嗚咽が暗い海に呑み込まれる。誰もがヴィータと同じ気持ちだった。

「…シグナム…」

ザフィーラが立ち尽くすシグナムを見上げた。彼女は握っていた拳を挙げる。

「…我らに出来る事は…あまりにも少ない…」

そう呟くと、握り締めていた手を開く。手のひらのペンダント状の『レヴァンティン』を見つめ、

「…だが…」

「だが、どうす気だシグナム…？」

暗がりに声が響いた。ハッとするシグナム達。
何時の間に現れたのかゼロが直ぐ側に立っていた。

「ゼロ…聞いていたのか…？」

シグナムは少し動揺し、顔を伏せた。ゼロには知らせないでおこうと思っていたからだ。
ゼロは苦笑いを浮かべ、

「俺の耳がいいのは知ってるだろう？聞こえちまったって感じだがな…まあ、俺も敢えて聞かない様にはしなかったが…」

ゼロはゆっくりとみんなの中央に歩み寄った。真剣な表情になると、

「結局…はやてを助けるには『蒐集』が必要って訳か…やる気だな…？」

「止めても無駄だゼロ…我らには、それしか道は無い…！」

シグナムは悲壮な表情で言い放った。
ヴィータ、シャマル、ザフィーラも似た様な表情になる。
ゼロは苛ついた様に髪を乱暴にかき上げ、

「誰が止めるって言った？水くせえって言ってんだよ…『蒐集』なら付き合ってやるって言ってんだ！」

シグナム達はゼロの言い様に呆気にとられた。
それはそうだ。正義の味方に話せる事では無い。『蒐集』それは人を襲うという事なのだから。シグナムは怒った様に、

「自分が何を言っているのか判っているのか？犯罪者になると言っているんだぞ！」

だからシグナム達はゼロを巻き込みたくはなかったのだ。

『蒐集』は『リンカーコア』を狙って、何の関係も無い人間を襲わなければならない。
ゼロにそんな事はさせられない…だから汚れ役は自分達だけで引き受けるつもりだったのだ。

ゼロはやれやれといった風に頭を傾け、

「まったくよ…前科持ちの俺に要らねえ気を回しやがって…そんな気ぃ使われる程ご立派なもんじゃねえぞ俺は…」

ゼロは少しふざけた調子で言うが、不意に真剣な顔付きになると、

「その代わり…人を襲うのは無しだ…！『蒐集』は人間でなくていいんだよな？魔力を持った動物からだけ集めると約束しろっ！」

ゼロの言葉にヴォルケンリッターは表情を曇らせる。
シグナムは悲痛な目でゼロを見ると、

「それでは、どれくらい時間が掛かるか……『闇の書』の頁を一番稼げるのは魔導師の『リンカーコア』なのだ…！」

低い調子で否定するが、言葉尻が震えていた。彼女達とて、人を襲ったりしたくは無いだろう。

更には『蒐集』を行うという事は、はやての意思に背く事でもある。
ヴォルケンリッターは、初めて主の意思に背く決心をしたのだ。

自分達に温もりと安らぎをくれた優しい少女を救う為に…

シグナム達は退く訳にはいかないと、ゼロを見つめた。ゼロは不敵に笑い、

「お前ら、『ウルトラマンゼロ』を忘れてんじゃねえのか？俺は怪獣専門だぜ、やばすぎて手を出せない奴や、数を稼ぎまくれば行けるんじゃねえか？」

シグナム達はハッとする。確かにウルトラマンゼロの力なら、可能かもしれない。

あの圧倒的なパワーが有れば、人間を1人も襲わずに『闇の書』を完成させられる？

全員の顔にわずかに希望が浮かんだ。ゼロは海を背に、ヴォルケンリッター全員を見渡し、

「いいか…？お前達は『八神はやて』の騎士だ…前とは違うんだ！絶対はやても死なさねえし、お前らに人を襲わせたりもしねぇっ！」

シグナムは一瞬嬉しそうな顔をするが、少し心配そうに表情を曇らせ、ゼロの顔をまじまじと見ると、

「…本当に出来るのか…？綺麗事では無いのか…？」

ゼロはシグナムを見ると頼もしく微笑し、握り締めた拳をかざす。

「綺麗事を貫く分は、俺が全部背負ってやる…！！」

力強く言った。その言葉は染み入る様に各自の胸に伝わり、全員の決意は決まった。

シグナムは頷き、ようやく笑みを浮かべる。

「…恐らく…ゼロに全てしわ寄せが来るぞ…」

「望む所だ…お前らに、この間の借りを返してやるぜ」

「ゼロ君…」

「済まん…ゼロ…」

シャマルとザフィーラが感じ入った様子で目を閉じる。

「うわああ～っ、ゼロぉっ！」

涙で顔をクシャクシャにしたヴィータがゼロにしがみつく。

「ゼロ…はやてを…はやてを助けよう…！」

「当たり前だ…」

ゼロはヴィータの頭をあやす様に撫でてやった。
闇夜にヴィータの泣き声と波の音だけが響く。

街の灯りに照らされながらも、夜の闇は更に深くなって行く様だった。

ーーー

シグナムが『レヴァンティン』を掲げ、全員を見渡す。

「主の体を蝕ばんでいるのは『闇の書』の呪い…」

その体に『騎士甲冑』が形成され、白い剣士の如くの出で立ちになる。

「はやてちゃんが『闇の書』の主として、真の覚醒を得れば…」

シャマルも緑の騎士甲冑を纏い、『闇の書』をしっかりと抱えた。

「我らの主の病は消える…少なくとも、進みは止まる…」

ザフィーラは狼の姿から、人間形態をとる。

「そしてあたし達は、八神はやての騎士として、殺しも人も襲わずに望みを必ず果たしてやる！」

ヴィータの『グラーフアイゼン』が振り下ろされると同時に、真紅の騎士甲冑が彼女の体を覆う。

「申し訳ありません…我らが主…恥じる様な真似こそしないと誓いますが…只一度だけ、あなたとの誓いを破ります…我らの不義理をお許し下さい！」

シグナムの言葉にゼロは頷くと、

「済まんな、はやて…これは俺達の勝手でやる事だ！デュワッ！！」

『ウルトラゼロアイ』を両目に装着する。
光に包まれ、銀色に輝く超人が姿を現した。

「行くぜぇっ！！」

ゼロの掛け声と共に、５つの光が一斉に闇夜の中へと流星の様に飛び立った。

それを近くのビルの屋上でじっと見ている影が有った。
影は嬉しくて堪らないといった様子で体を震わせ、

「さあ…儀式の始まりだっ！ふはははははっ！！」

影の黒い笑い声が、闇に溶け込み渦を巻く。それは正に悪魔の嘲笑だった。

つづく

第３１話　Ａ' ｓ編　侵蝕ー エンクラッチメントー（後書き）

Ａ' ｓ編はサブタイトルがネクサス風になります。

今までの付け方が内容に合わないのと、ネタ切れ防止の為という事で。

ちなみにサブタイトルの発音には全く自信が有りません！

かなりてきとーです。

（日本語発音は、どこにも無くて…英語は苦手…）

では次回『蒐集ーコレクトー』でお会いしましょう。

第３２話　蒐集ーコレクトー（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

遅ればせながら第３２話です

第３２話　蒐集ーコレクトー

シグナムの転移魔法で、ゼロはとある別次元の世界に来ていた。
密林が生い茂り、異形の岩がゴロゴロしている、原始の地球の様な世界だ。
あちこちに赤い花が点在しているのが見える。

（あの花、どこかで見た様な…？）

ゼロは少し疑問に思ったが、後回しにする。
密林上空をゼロとシグナムは並行して飛ぶ。ゼロは下を見下ろし、

「シグナム、此処には人間は住んでないのか？」

「ああ…無人の世界だ。此処に棲んでいるのは野生の生物だけだ…」

シグナムの説明に頷くゼロ。
彼にとっては初めての『蒐集』な上に、『リンカーコア』を取り出せないので、彼女に着いているのだ。シグナムも密林を見下ろし、

「ゼロの言う通り、厄介な相手が多い世界を選んだが…油断は大敵だぞ…」

シグナムが見ている方向に、ゼロも目をやる。
密林の中には様々な異形の生き物達が動き回っているのが見えた。
一番小さい奴でも4メートル近くあり、一番大きな奴は、数十メートル近くある。
まるで恐竜時代の地球の様な光景だ。異形の生物達の無法地帯といった感じである。

「上等だっ、望む所だぜっ！」

そう不敵に言うゼロの、無表情な銀色の顔が、戦闘的な笑みを浮かべた様にシグナムには見えた。

「行くぞゼロ…！」

シグナムは『レヴァンティン』を構え、密林の中の開けた場所目掛けて降下した、ゼロも後に続く。
その場所には、体長十数メートル程のドラゴンを思わせる生物が十数匹程で、たむろしていた。
凶暴そうな顔をしている。

「ゼロ最初は見ていろ、レヴァンティン！」

《ｊａ》

シグナムは群れの中に突っ込んだ。気付いた生物達は鋭い牙を剥き出し、一斉に襲い掛かる。

しかしシグナムは巧みに生物達の牙や爪を避け、攻撃に転じる。

「はあああああっ！」

裂帛の気合いと共に、鋭い衝撃が銀色の閃光と化して生物達に放たれる。

たちまち群れの半数が意識を刈り取られ、地響きを立てて地面に倒れ込んだ。

（やるな…シグナム！）

ゼロはシグナムの流れる様な剣技を見て頷いた。

残りの群れが怒声を上げてシグナムに殺到するが、あっという間にレヴァンティンの一撃で昏倒させられてしまった。

見事な腕前である。

地面に降りたゼロの前で、シグナムは気絶させた生き物達に『闇の書』を開き、『蒐集』を始めた。

『リンカーコア』と呼ばれている光の塊が、生物達の体から抜け出て来る。

すると『闇の書』の真っ白な頁に、シグナム達の魔法陣にも刻まれている『古代ベルカ文字』が刻まれて行く。

1匹から蒐集出来る魔力はそんなに多くない様で、1匹につき数行といった所だ。

生きて行くのに支障が出ない程度にしか蒐集していないせいもある。

群れ全部から蒐集しても、せいぜい5分の1頁位だ。

やはり魔導師が一番効率が良いのだろうが仕方ない。

しかしゼロは嬉しかった。

「ありがとなシグナム…俺との約束守ってくれてよ…」

頁の埋まり具合を見て、難しい顔をしているシグナムに礼を言う。

「し…仕方あるまい…お前があれだけの決意をしての言葉…我らがその約束を反故には出来ん…」

少し照れた様子でシグナムは俯いた。
ゼロは満足そうに頷くと、蒐集を受け倒れている生物達を見下ろす。

「攻撃も蒐集も加減して…やっぱりシグナムは優しいな…」

「なっ、何を馬鹿な事を…！」

シグナムはゼロから顔を逸らした、照れているらしい。
ゼロは気付かず、平手に拳を景気よく打ち付けると、

「よし！大体分かった。じゃあ俺は、あのデカい奴らをやるぜ！」

そう言うと、空にふわりと舞い上がった。数十メートルクラスの魔法生物達に一直線に向かう。

「仕方のない奴め…」

シグナムは苦笑すると、ゼロの後を追って飛び上がる。

数十メートルクラスの魔法生物達は、殆ど怪獣じみていた。

ゴツゴツした体表に尖った耳に鋭い牙、どことなく『岩石怪獣サドラ』を思わせる、凶暴そうな顔付きである。

近付いて来るゼロ達に気付き、一斉に威嚇の叫びを上げた。

「悪いなっ！少し寝といて貰うぜぇっ！！」

ゼロはサドラもどきの集団に突っ込みながら、一気に巨大化する。

身長４９メートルの巨人が濃厚な緑の大気を切り裂いて、無数のサドラもどきの群れの中に踊り込んだ。

『ディヤアアアアッ！！』

ゼロの上段回し蹴りが、唸りを立ててサドラもどき達の側頭部に、立て続けに炸裂する。

脳震とうを起こして地面に次々と倒れ込むサドラもどき。

シグナムも手近な奴の頭部にレヴァンティンで強烈な打撃を加える。

（超獣と闘った後だと楽に思えるな…）

サドラもどきを昏倒させながら、シグナムはそう感じた。

超獣と戦い、暇さえあればゼロと手合わせしていた彼女は、一段レベルアップを果たしていたのだ。

その間にもゼロは暴れまくっている。

的確に急所を狙い、最小限のダメージで相手を気絶させていた。

その時だ。先程の赤い花が咲いていた場所が天高く土煙を上げ、地面を揺るがし、巨大花が地中から現れた。

大音量の吠え声が轟く。

大量の土砂をかき分けて出現したのは花では無い。

腹部に巨大な毒々しい程の赤い花に、頭部の一本角、左手の鋭いフック状の一本爪に鞭の右手、サドラもどきを上回る巨体。

『宇宙大怪獣アストロモンス』であった。

「アストロモンスっ？何でこの世界に居やがる！？」

身構えるゼロ。また例の奴が送り込んで来た敵か？と思い、『ゼロ・スラッガー』を手を掛けた時、

「何だゼロ、奴を知っているのか？此処で最も強力な個体だぞ…」

シグナムがゼロの巨大な肩に、ちょこんと降りて聞いて来た。ゼロ

は驚いて、肩のシグナムを見る。

「アストロモンスは、この世界の出身だったのか…？」

「名前は付いていないが、奴のお陰でこの世界では蒐集が難しかったのだ…あの赤い花は全て奴の幼体だ…百年に一度しか咲かないが、数が多いので、いつも数匹は必ず居る」

シグナムが説明してくれた。感心するゼロ、道理で見た事のある花だと思った。

アストロモンスの幼体『チグリスフラワー』だったのだ。

宇宙大怪獣という割に色々と怪しい怪獣だったが、どうやらこの世界からチグリスフラワーの種が、ゼロの居た世界に紛れ込んだのだろう。

この世界では逆にゼロ達が異物なのだ。

感心している間に、更にアストロモンスが3匹唸り声を上げて現れる。サドラもどきも大挙して押し寄せて来た、物凄い数だ。

「どうするゼロ…一旦退くか…？」

「冗談だろ？これだけ居れば相当稼げるぜ！」

「行くとするか…」

ゼロの即答にシグナムは笑みを浮かべる。心が高揚していた。

（お前と居ると…心が踊る様だな…！）

ゼロは地面を揺るがし、アストロモンス達に向かう。シグナムもレヴァンティンを構えて突撃した。

「レヴァンティンっ！！」

《ja！》

ゼロは濃厚な空気を震わせて吼えた。

『ウオオオオオオッ！！』

ゼロの強烈な正拳突きが唸りを上げて、アストロモンスの頭に炸裂した。

ーーー

シャマルは驚きで目と口で3つの○を顔に描き、

「…ご…５０頁ぃっ！？」

思わず絶句した。ヴィータ達はギョッとして、

「嘘だろっ？５０頁ぃっ！？どんな集め方したんだよぉっ！？」

ザフィーラもポカンとしている。変身を解いたゼロは、隣に立っているシグナムと顔を見合わせ、

「まあ…こんなもんだ…アストロモンス達でかなり稼げたからな」

ニヤリとするゼロとシグナムであった。

「ゼロの暴れ方は凄まじいものだったぞ。悪鬼羅刹の如くとは、あの様な事を言うのだろう…」

「シグナム…それ誉めてねえだろうがっ」

したり顔でウンウン頷くシグナムに、ゼロが渋い顔でツッコミを入れた。

クスクス笑うヴィータ達。驚きながらもみんなの表情は明るい。こんな驚きなら大歓迎である。

ヴィータは嬉しそうにゼロの腹を突っつき、

「やるじゃねえかよゼロ。次はあたしと組んで６０頁を目指そうぜっ、シグナムより稼いでやんよ！」

やる気満々で息巻くヴィータに、ゼロは笑って自分の鼻を軽く弾き、

「任せとけ！！」

力強く拳を挙げた。ヴォルケンリッター全員の胸に希望の光が射した、これなら行ける。

最速で、しかも１人も魔導師を襲わずに『闇の書』を完成させられると…

こんな事は永い人生の中で初めてであった。

こんな『蒐集』が有るとは…

「さあ…主が起きる前に戻るぞっ我らの姿が無いと心配される」

シグナムの指示の元、ゼロ達は意気揚々と自分達が帰るべき場所へと引き上げて行った。

ーーー

今日もゼロは、はやての足に『メディカルパワー』を当てる。前より照射時間を増やしていた。

それについて、はやては不思議そうにゼロを見下ろし、

「ゼロ兄…最近当てる時間が長ない？体に無理とかしとらん…？」

「これ位軽いもんよ、俺は治療系はあんまり得意じゃねえからな…もう少し増やした方がいいと思ってな…」

何でも無い様に普通を装う。平気で嘘を吐くのはゼロには結構キツイが、何とかやり通している。

「なら、ええけど…気持ちええし…でも、あんまり無理せんといてな…」

「ああ…分かってる」

ちょっと照れたはやての言葉に、笑って返事をするゼロ。

（…待ってろよ…直ぐに治してやるからな…！）

決意を新たにするが、同時に自分の不甲斐なさに腹が立った。

（『ウルトラマンヒカリ』みてえに、天才科学者だったら『蒐集』もしなくて済んだかもな…）

そうも思ったが、今は自分の出来る事をやるしか無い。

他の用事と偽って『蒐集』に出ていたシグナム達と交代し、買い出しとはやてには伝えて、『蒐集』に今日も出掛けるゼロだった。

ー ー ー

それから１０日余りが過ぎた頃、ウルトラマンゼロは、シャマルと共に別世界の荒れ果てた乾燥地帯に『蒐集』に来ていた。

『闇の書』はゼロの頭部の『ゼロスラッガー』の間にすっぽり乗っている。

何やら身ぶり手ぶりで『闇の書』と話しているゼロを見て、可笑しくなるシャマルだった。

（本当に不思議な人ねゼロ君は…）

しみじみしていたシャマルは不意に、おっとりした表情を曇らせた。

「どうした、シャマル？」

気付いたゼロが声を掛けるが、シャマルは深刻な表情のまま、

「『管理局』の船が近くに来てるわ…おかしいわね…こんな管理外世界に…」

眉をひそめるシャマルに、ゼロは空を見上げ、

「見つかっても面倒だな…そこそこ頁は稼いだし、今日は引き上げるか…？」

「そうしましょう…」

ゼロとシャマルは、管理局の船が離れるのを待ち、元の世界へと転移した。

ーーー

ユーノは優しそうな人だなと、孤門に好印象を持った。
フェイトやアルフ、クロノやエイミィも気さくに孤門と話している。
フェイトとアルフはもう孤門を呼び捨てにしていた。
孤門に呼び捨てでいいと言われたせいも有るが、気さくでフェイト達にも対等に話をしてくれる孤門に、親しみを感じたからだ。

そんな彼にも時折、陰の有る表情を浮かべる事がある。
そんな孤門を見てフェイトは、

（…この人も何か辛い事が有ったのかな…？）

と思う時が有った。クロノは最初孤門がアースラに来た時、少し警戒する風だったが、孤門の人となりを見て、警戒を解いた様だった。
今ではすっかりこの船に馴染んだ孤門も含め、アースラは賑やかである。

同日、『時空管理局・本局』

執務室で書類整理をしていた、運用部『レティ・ロウラン』提督に、至急の配置要請が入ったのは、そろそろお茶が欲しくなる午後3時を回った頃だった。

モニターに映った相手の、シーベル定置観測隊の責任者は、焦った様子で、

《武装局員４０名を強行探索装備Ｃで揃えてほしい》

「いきなりですね…何か荒事ですか？」

レティの質問に相手は深刻な顔をし、

《『探索指定遺失物』が稼働しているようなんだ…それを使った被害者も出てる》

「なるほど…」

事態を把握したレティは、すぐさまモニター越しで、部下のマリーに指示を出し、配置手続きを整える。

4時間程で出動出来る旨を伝えると、相手は礼を言い、通信を切った。

「相変わらず、世界は物騒ね…」

《本当です…》

眉をひそめて、ため息を吐くレティに、部下のマリーがモニター越しに同意の返事をした。

鈍い堅い物が肉を打つ音が響いた。
それと共に男の悲鳴が2つの月が照らす夜に木霊す。

一撃で地面に這いつくばる羽目になった男は魔導師であるらしい、デバイスを持っている。

そんな男の前に2つの人影が立っていた。
その内の1人が男に歩み寄って行く。

人影が冷たく言い放つ。

「微温いな…こちらはまだ抜いてもいないぞ…」

男は流血している顔を何とか上げ人影を睨む。

「く…貴様ら…いったい何者だ…？」

屈辱に身を震わせて、辛うじてそれだけを言う。

「私は貴様の名に興味が無い…なあゼロ…？」

人影は後ろに立っているもう1人に声を掛けた。
その時月明かりが2つの人影を照らし、その姿を露わにする。
1人は八重桜色の髪をポニーテールにした白い女剣士、シグナムだった。
そしてもう1人は…

「ああ…どうでもいい…」

そう応えたのは、闇夜に輝く黄色い目に緑のビームランプ、青く輝

くカラータイマー。

『ウルトラマンゼロ』であった。

つづく

第３２話　蒐集ーコレクトー（後書き）

サドラは色々出ているのでメジャーですかね?帰ってきたウルトラマンに出て来ました。

アストロモンスはメジャーかマイナーか良く分かりません。

ウルトラマンタロウ第１話に出て来ました。東光太郎に重傷を負わせ、タロウ誕生に関わってもいる怪獣です。

コイツは設定的に相当怪しく、突っ込み所満載なので、別世界出身という事にしてみました。

それでは次回お会いしましょう。

第３３話　遭遇ー コンプリーケーション ー（前書き）

あけましておめでとうございます。

読んでくださる方々にひたすら感謝です。

今年もどうぞよろしくお願いします。

では第３３話です。

第３３話　遭遇ー コンプリーケーション ー

「そういう事だ…貴様如きに我が名を覚えて貰おうとも思わん…」

女、シグナムは無様に倒れている男に向き直り、軽蔑した様に見下ろす。

「欲しいのは、この戦いに貴様と賭けたもののみ…さあ…立って戦うか敗北を認めるか…決めて貰おう…」

男は屈辱に唇を噛み締めた。

腕に覚えの有った男は、いきなり現れた女から挑戦された。

勝てば何でも言う事を聞いてやる、との申し出にいい女だった事も有り、つい助平心が出た。

妙な奴も一緒に居たが、負ける訳も無いと高を括って勝負に応じた。

それがこの様だ…だが男には切り札が有った。

「おのれ…無頼の分際で…！」

気力を振り絞って、体を起こした男の足元に、魔法陣が展開された。

それに伴い、男の後ろに巨大な魔法陣が現れ、２０メートルは有る真っ赤な異形の竜が現れる。

召喚魔法で呼び寄せられた赤竜だ。

竜は雄叫びを上げ、シグナムに襲い掛かる。男は勝利を確信していた、しかし…

「！？」

ゼロが一気に赤竜の頭上に跳躍していた。男にはゼロがいつ移動したのかも、全く分からなかった。

ゼロは手刀を振り上げると、赤竜の頭目掛けて一気に振り下ろした。

手刀は青色の死の凶器と化し、竜の頭蓋骨を陶器の様に叩き割る。

しかしそれだけでは収まらず、手刀は顔面を切り裂き、そのまま衝撃波だけで巨大な体を真っ二つにしてしまった。

竜の脳漿と、どす黒い血が辺りに飛び散る。

赤竜は肉の塊と化し、地面に倒れ込んで動かなくなった、呆気ない最後だ。

切り札も失い、ガックリと力尽きた男に、シグナムがゆっくりとした足取りで近付いて来た。

「では…約束のもの頂いてゆくぞ…」

手を伸ばすその姿は、男の目には悪魔の如く映った。

「ぐはあああああっ！」

男の恐怖に彩られた悲鳴が月夜に響き渡った。

ーーー

フェイト達は嘱託魔導師の試験にも合格し、裁判も無罪は確定したも同然なので、気楽なものである。

次元の海に浮かぶ、巨大な本局の威容が見えて来た。
間も無くドッキング態勢に入る。長い航海を終えるクルー達の表情は明るい。

ブリッジの後の方に立っている『孤門』の表情も心なしか明るく見えた。

リンディは横目でチラリと孤門を見る。

（ウルトラマンネクサス、孤門一輝君か…）

最初、孤門を預かる事にリンディは困惑していた。

歩く『ロスト・ロギア』の様な存在にどう接すればいいか判断が着かなかったのだ。

しかしその心配は無用だった。
孤門には、巨大な力を持つ故の驕りや傲慢さは欠片も感じられず、実に親しみ易い穏やかな青年だった。

ある意味ごく普通の青年に見えた。とてもあんな力を持っている様には見えない。
フェイト達ともすっかり打ち解けた様だ。

孤門の力は重要機密として、フェイト達や他のクルーには、特殊な

『レアスキル』の持ち主としか伝えていない。

今の所、孤門の力を知らせているのはクロノだけである。

上からの指示で出来る限り彼の力は知られない様にとの事だったからだ。

クロノは最初、孤門を警戒する風だったが、ウルトラマンゼロと出会っていた事と、孤門の人となりに、多くの人命を救って来た実績を見て、警戒を解いた様だった。

いずれエイミィやフェイト達にも教えなければならないだろうが…

（それにしても…）

リンディが気にしているのは、孤門がこの船に乗っている理由である。

彼女は最初に孤門と会った時の事を思い出す。リンディに何故この船に乗るのか?との問いに、

「漠然とした感覚なんですが…この船に乗っていれば、いずれ何かにたどり着ける気がするんです…」

「何かとは、あの『スペースビースト』の事?それともまったく別の事…?」

リンディの問いに孤門は首を傾げ、何とも言えない表情を浮かべ、

「…それすら分かりません…只そう感じるとしか言えないんですが…」

リンディは孤門から聞いた話を思い出し、眉をひそめた。

何とも漠然とした話だからである。彼の感覚が当たっているとすれば、いずれアースラは何かと出会う事になるのだろか…？

いずれにせよ、今はまだ可能性の段階にしか過ぎない様だが…

上層部も孤門を持て余しているらしく、とりあえず彼の希望を受け入れたというのが本当らしい。

（有るかどうかも分からない事で、じたばたしても仕方ないわね…）

リンディは気分を切り替える事にする。

頭から否定する気は無い。もしもの時には即座に対応出来る様にしておけばいいのだ。

本局までもう少しという所で、艦長席の通信モニターに『レティ提督』から通信が入った。

2週間振りに見る彼女は相変わらず、冷静そうなポーカーフェイスである。

《お疲れ様リンディ提督、予定は順調？》

「ええ、レティ、そっちは問題ない？」

リンディの返事にレティは少し表情を曇らせ、

《ドッキング受け入れとアースラ整備の準備はね…》

「ええ…？」

ブリッジの扉が開き、裁判の打ち合わせを終えたクロノが入って来た。

レティとやり取りをする、リンディのただならぬ様子に立ち止まる。

レティは眼鏡のズレを直しながら、深刻な表情を浮かべ、

《こっちの方ではあんまり嬉しくない事態が起こってるのよ…》

「嬉しくない事態って…？」

《ロストロギアよ…一級捜索指定が掛かってる超危険物…》

リンディの表情も険しくなる。『ロスト・ロギア』今は存在しない文明が生み出したオーバーテクノロジーの遺産。

『ジュエルシード』の様に世界を滅ぼしかねない危険なロスト・ロギアを回収確保するのが、時空管理局の重要な任務の一つである。

その内でも最も危険度が高い、第一級捜索指定が掛かっているロスト・ロギアの話が出たので、自然リンディは居住まいを正す。

覚えが有るクロノはハッとした。

レティはリンディに状況の説明を続ける。

《幾つかの世界で痕跡が発見されているみたいで捜索担当班はもう大騒ぎよ…》

「そう…」

《捜索員を派遣して今はその子達の報告待ちね…》

「そっかぁー」

リンディは顎に手をやり目を閉じて、ため息を吐いた。
そのやり取りをクロノは、思い詰めた表情を浮かべ見つめる。
レティはそこで複雑そうな表情をし、

《…それで…これは未確認情報なんだけど…一応リンディの耳には入れておいた方がいいと思って…》

「どうかしたのレティ…？」

レティはリンディをモニター越しに見据え、はっきりと言った。

《その第一級捜索指定に『ウルトラマンゼロ』が関わっている可能性が有るのよ…》

「なっ、何ですってえ!?」

リンディは絶句し、クロノは思わず、報告書の入った端末を床に落とした。

ーーー

西日が照らす図書館の中を、すずかは目当ての本を探して、本棚を見回す。

ゆったりとした図書館の雰囲気も彼女には好ましく、柔らかい光の中を楽しむ様に探し歩いていた。

その時、本の隙間から、車椅子の少女が懸命に手を伸ばして、上段に有る本を取ろうとしている姿が、偶然目に入った。

少し逡巡したすずかだったが、すぐさま小走りで車椅子の少女の元に向かう。

少女が手を伸ばしている本を先に手に取った。
車椅子の少女はハッとして声を洩らす。

「…これですか…？」

少々照れながらも、すずかは本を少女に差し出した。

車椅子の少女『八神はやて』は頬を染めて、

「はい、ありがとうございます…」

嬉しそうに、すずかに笑顔を見せた。

2人は自習コーナーに座って、話し込んでいた。どちらが言い出すでも無く、自然とそんな流れになっていたのだ。

「そうかあ…同い年なんだあ…」

「うん、時々此処で見かけてたんよ、あっ、同い年位の子やって…」

「実は私も…」

すずかは照れくさそうに相槌を打つ。
思わず笑い合ってしまう2人。

はやてもすずかも、昔からの気心の知れた友達と話している気持ちになった。

人にはたまに、こんな出会いが巡って来る事がある。
過ごした時間と関係なく親友になれる、そんな出会いが…

「えと…私、月村すずか」

自然にすずかは自己紹介をしていた。
はやてはその名を確かめる様に、しみじみとした口調で、

「すずかちゃん…八神はやて言います」

「はやてちゃん…」

すずかも、はやての名前の響きを確認するかの様に繰り返す。
はやては照れくさそうに肩をすくめ、

「ひらがなで、はやて…変な名前やろ…？」

「そんな事ないよっ、綺麗な名前だと思う」

お世辞抜きのすずかの即答に、はやては笑みを洩らし、

「あっ、ありがとう」

長年の友達の様に2人は、自然に笑い合っていた。

夕暮れが近付き、オレンジ色の光が射し込む図書館の通路を、すずかに車椅子を押して貰い、はやては楽しそうに話しながら、出口に向かう。

「どうも…」

丁度ゼロとシャマルが出口付近で待っていた。すずかにゼロは挨拶し、シャマルは会釈をする。

一緒に来ていたのだが、はやてが話し込んでいるのを見て、気を利かせたのである。
すずかも2人に会釈し、アッという顔をした。
それに気付いたはやては、

「ああ…すずかちゃん、ほんならゼロ兄達も見掛けた事があるんやな？」

「て…言うか…特にあのお兄さん、目立ってたから…」

すずかは少し言い難そうに笑った。
何気にゼロは図書館の隠れた有名人である。
分厚い本を山と積み上げ、人間とは思えない程のスピードで読みまくり、なおかつ全て頭に叩き込んでいるらしい少年。
それに、先生役らしい車椅子の少女は、風芽丘図書館の隠れた名物になっていた。

（う～ん…ゼロ兄やっぱし目立っとったんやなあ…）

思わず苦笑してしまうはやてである。

「ありがとう、すずかちゃん、此処でええよ」

「うん、それじゃあ」

車椅子の向きを変え、すずかの方を向いたはやては、

「お話してくれておおきに、ありがとうな…」

本当に嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。すずかもにっこり笑い、

「またね、はやてちゃん」

また会えるのが楽しみで仕方ない様子で、挨拶を返してくれた。
それを聞いてはやては、

（またねかあ…何てええ言葉なんやろ…）

とても温かいものが胸に満ちるのを感じた。

夕暮れの中、車椅子をゼロに押して貰いながら、帰路につくはやてはニコニコが止まらない様だ。

（初めて同い年の友達が出来たから、嬉しいんだな…）

ゼロは微笑ましくなって、笑みを浮かべた。

もう１２月に入り、空気が冷たく感じる時期である。

足下のアスファルトからも、ひんやりとした冬の足音が聞こえて来る様だ。

そんなはやてに、横を歩くシャマルが声を掛ける。

「はやてちゃん、寒くないですか？」

「うん平気、シャマルもゼロ兄も寒ない？」

シャマルは微笑んで、

「私は全然」

「俺も楽勝だぜっ」

ゼロはそう言いつつも、結構着込んでいて、はやてに編んで貰ったマフラーと手袋をしっかりと着用している。

父親譲りなのか、少々寒がりの気が有る様だ。

しばらく歩いていると、途中でコート姿のシグナムが待っていた。
迎えに来てくれたのだろう。

「シグナムぅっ」

はやてが嬉しそうに、剣士らしく姿勢よく出迎えるシグナムの名を呼ぶ。

「はい…」

シグナムは正に主人を待つ騎士の様に、頼もしく応えた。

４人での帰り道、はやては嬉しそうに横を歩くシグナムを見上げ、

「シグナムは何食べたい？シャマルは、ゼロ兄は？」

シグナム微笑し、少し考えるが、直ぐには浮かばない様で、

「ああ…そうですね…悩みます…」

「スーパーで材料を見ながら考えましょうか？」

シャマルも直ぐには考えつかない様で、そう提案する。

「それなら、寒いから鍋がいいぞっ」

ゼロははやての顔を覗き込み、目を輝かせて提案した。はやてはポンっと手を打ち、

「それええなあ、鍋にしよっ、足りない材料買わんと」

早速何の鍋にするかを考え始めるが、ふとゼロ達を見上げ、

「そういえば…ヴィータ今日は何処かへお出かけ？」

「そっそうだなシャマル…どうだったか…？」

話を振られて、焦ったシャマルは、

「…ああ…え～と…そうですね…」

若干困った表情で答えるが、直ぐにシグナムが続ける。

「外で遊び歩いているようですが、ザフィーラが着いていますので、あまり心配は要らないですよ…」

シグナムは何でも無い様子で答える。

「そうかあ…」

それでも少し心配気に空を見上げるはやてに、シャマルは微笑んで、

「でも…少し距離が離れても、私達はずっとあなたの傍に居ますよ…」

「はい…我らは何時でもあなたの傍に…そうだなゼロ…？」

シグナムがシャマルの言葉に続いて言う。同意を求められゼロは、

「いっ…今更聞くまでもねえ事だろう…」

まともに答えるのが照れくさいらしく、ワザとぶっきらぼうに答えた。

「…ありがとう…」

はやては頬を染め、みんなの言葉を感謝を込めて、噛みしめた…

ーーー

「えっ？」

なのはが机の上のレイジング・ハートを見るのと同時に、なのはの家一帯を含む広い空間が異相空間と入れ替わった。

「結界っ？」

驚いて立ち上がるなのは。以前に何度となく目にした、ユーノが使う広域結界に似た感覚だ。

通常空間と魔法が作用する空間をずらして作り出す、人には感知出来ない特殊空間。

その中になのはは1人取り残されていた。

《Ｉｔａｐｐｒｏａｃｈｅｓ　ａｔａ　ｈｉｇｈｓｐｅｅｄ.》（対象、高速で接近中）

「こっちに？」

レイジング・ハートが更に警告を発する。

ただ事では無いと感じたなのは、直ぐ様レイジング・ハートを変形させ、飛行魔法で空に舞い上がった。

色を失い、ゴーストタウンと化した街を見回し、見晴らしの良さそうなビルの屋上に降り立つ。

なのはは辺りを見渡した。確かに結界の様だが、ユーノの使っているものと違う気がする。

その時レイジング・ハートが警告を発した。

《Ｉｔｃｍｅｓ》（来ます）

「！？」

赤い光に包まれた何かが、なのは目掛けて高速で飛来して来た。

とっさに防御魔法を張り巡らす。

なのはの強固な魔力の盾に衝撃が走った。防御越しでも振動が伝わって来る、凄まじい威力だ。

その時だ、なのはは気配を感じて、とっさに空を見上げた。

その目に赤いものが目に映る。

「テートリヒ・シュラアァァクッ！！」

鋭い叫びと共に、真紅の騎士服をなびかせた『ヴィータ』が『グラ

ーフ・アイゼン』をなのは目掛けて、一気に振り下ろした。

「ああっ！？」

なのはは血の気が引く思いで息を呑んだ。

つづく

第３３話　遭遇ー コンプリーケーション ー（後書き）

えーゼロが父親ゆずりで寒さに弱いというのは、ウルトラセブンが寒さに弱いという設定からです。

セブン程では無いとは思いますが…

正月休みも無く、まだ映画も見に行けてません（泣）

次も少々遅れると思いますので、すいません。

では次回お会いしましょう。

第３４話　錯綜ー ベルミスクングー （前書き）

ここまでお付き合い頂きまして、ありがとうございます。

今回ごちゃごちゃしているので、分かり辛くないか不安ですが、第３４話です。

第３４話　錯綜ーベルミスクングー

『時空管理局本局』
今日フェイトの全ての裁判が終了した。
予想通り無罪が確定し、フェイト達は一息吐く間も惜しんで、整備中の『アースラ』に向かっていた。

なのはに少しでも早くこの事を伝えたかったからである。
クロノは報告で、途中で別れている。

アルフとユーノと一緒に、急ぎ気味に通路を歩くフェイトは、ある少年の顔を思い浮かべ、

（…ゼロさんにも伝えられたらいいな…）

と、そっと考えていた。
アースラに着くと、クルーは殆ど出払っており、残りの仕事を片付けていたエイミィと、丁度部屋を出ようとしていた孤門だけが残っていた。

「うんっ、なのはちゃんへの連絡ねっ」

話を聞いたエイミィは二つ返事で引き受けてくれる。
別世界との通信は、専用の通信機器と、専門技術が要るのだ。

「孤門も、なのはに紹介するから、一緒に行こう…」

「そうですよ、孤門さんも来て下さい」

フェイトとユーノに促されて、苦笑しながらも孤門は一緒に着いて行く。

「なのはちゃんて、前に聞いた友達の事だね？」

「うん…少しでも早く知らせたくて…」

孤門の質問にフェイトは微笑して答える。
フェイト達の前歴は孤門も大方の事は聞いており、別に隠す事でも無い。

もっともクローン人間という事までは話していないが…

通信室に入ったフェイト達は、通信機を操作するエイミィを囲む様にモニター前に陣取る。

エイミィは暫くの間コンソールを操作していたが、眉をひそめて手を止めた。フェイトは怪訝な顔をし、

「…エイミィ、どうかしたの…？」

「それが…連絡が取れ無いのよ…」

真剣な表情になったエイミィは、素早くコンソールを操作し、センサー類を起動させる。
センサーに異常が表示されていた。

「これは…広域結界…？何で街中に？」

エイミィの言葉に、フェイト達の間に緊張が走った。

時間は少しだけ戻る。

ヴィータと狼の姿のザフィーラは『蒐集』を終え、海鳴市上空に転移していた。

「あ～あ、すっかり遅くなったなあ…早く帰って、はやてのギガ旨ご飯が…？」

「む…待てヴィータ…」

一息吐くヴィータとザフィーラは異常に気付いた。周りの様子がおかしい。

「これは封鎖領域？何で街中に張ってんだ？」

ヴィータとザフィーラは色を失い、ゴーストタウンと化した街を見下ろし、不審そうな顔をする。

「シグナムかシャマルが張ったのか…？これベルカの封鎖領域だぞ…」

「確かにそうだな…？」

ヴィータは念話を試みるが、何故か通じない。歴戦の騎士としての勘が異常事態を告げていた。

「こいつは何かあるな…」

「うむ…」

ヴィータの言葉に、ザフィーラも頷いた。
ヴィータは『グラーフ・アイゼン』を構え、周囲の様子を探索魔法で探る。
離れた別々の場所で二つの魔力反応を見つけた。

「ザフィーラはあっちの反応を見て来てくれ、あたしはそっちに行ってみる」

「心得た…『闇の書』は預ける…」

「OK、ザフィーラ、何か変だ…油断すんなよ…」

ヴィータはそう言い残すと、紅い魔法光の軌跡を空に描いて、高速で反応に向けて飛んだ。

ザフィーラは頷き、もう一つの反応に向けて飛び出す。

無音の街をヴィータの風を切る音だけが響く。彼女にはお馴染みの筈の封鎖領域内が、やけに凶々しく感じられた。

ヴィータ達は気付いていないが、領域内には魔法とは別種の波動が満ちており、中の人間に、ある作用をもたらしていた。

ヴィータは暫く飛行を続け、もう少しで魔力反応に辿り着こうとしたその時だった。

《Ｇｅｇｅｎｓ　ｔａｎｄ　ｋｏｍｍｔａｒ．》（対象接近中）

「何っ！？」

グラーフ・アイゼンの警告に急制動を掛けたその瞬間、桜色の砲撃魔法の連射がヴィータを襲った。

「うわあっ！？」

かろうじてヴィータの目の前を掠める砲撃。
瞬時に体勢を立て直した彼女は怒りに震え、砲撃魔法が飛んで来た方向に視線を送る、その顔色が変わった。

「お前はっ！！」

そこには高層ビルの谷間に浮かび、醒めた目で『レイジング・ハート』を構えているのは『高町なのは』の姿があった。

「お前！何のつもりだ！？」

ヴィータは訳が判らない。何故コイツにいきなり攻撃されなければならないのか？

（まさか…『蒐集』が見つかって、『闇の書』の事もバレたのか！？）

ギリッと歯を軋ませるヴィータに、なのははレイジング・ハートをヴィータに向け、

「あなた達だけ、幸せになれるとでも思っているのですか…？そんな価値が自分達に有るとでも？あんな得体の知れない怪物に乗せら

れて…妙な夢でも見ましたか？」

「お前…怪物とは誰の事だ！？妙な夢だと…！！」

ヴィータの声が震えていた。なのははあくまでも冷静な声で、

「ウルトラマンゼロの事に決まってます…得体の知れない上に、彼の力は危険過ぎる、管理局は彼を捕獲封印し、あなた達、害悪も捕らえるように命令が出ています…」

「ふざけんなあっ！！」

ヴィータは怒りで我を忘れ始めていた。
害悪呼ばわりされた上に、この世界を救って貰った恩も忘れ、家族であるゼロを怪物扱いされた事に。

「てめえええっ！！」

ヴィータはグラーフ・アイゼンを振り上げ、なのはに突進する。
しかしなのはは、いきなりきびすを変えすと、逃げに入った。

「てめえっ！言うだけ言って逃げる気かっ！！」

ヴィータは、絶対にぶっ飛ばしてやると心に決め、闇夜を飛ぶ白いバリアジャケットの姿を追った。

「テートリヒ・シュラアアクッ！！」

ヴィータがグラーフ・アイゼンをなのは目掛けて振り下ろした。

なのははもう一つの防御魔法の盾を形成し、その一撃を受け止める。反発する魔法同士が、凄まじいスパークを放った。

しかし圧力に耐えきれない、なのはの足元のコンクリートが衝撃に耐えきれなくなり陥没する。

「あああっ！」

ついに衝撃に耐えられなくなったなのはは、圧力で弾け飛ぶ屋上と共に、吹き飛ばされてしまった。

真っ逆さまにビルの屋上から落下するなのははペンダント状のレイジング・ハートを握り締め叫ぶ。

「レイジング・ハートお願い！」

《Ｓｔａｎｄｂｙ．ｒｅａｄｙ　ｓｅｔ　ｕｐ》

その体が桜色の光に包まれ、『バリア・ジャケット』が装着される。
そしてすぐさま飛行魔法を発動させ、宙に舞い上がった。
その様子を屋上から見ていたヴィータはきびすを返すと、その場からかき消す様に姿を消した。

「てめえっ！待ちやがれっ！！」

暗い封鎖領域内をヴィータは、嘲笑うかの様に飛び回るなのはの後

を追う。

なのはは時々振り返ると、挑発する様にジグザグに飛んで逃げ回る。

「ふざけやがってえっ！」

ヴィータが撃ち落としてやろうと鉄球を取り出した所で、なのはから桜色の光が連続して発射される。魔力の誘導弾だ。

「くそっ！！」

ヴィータは防御魔法でガードするが、その間になのはの姿が見えなくなっていた。

「何処へ逃げた！？」

ヴィータは辺りの魔力反応を注意深く探る。直ぐ近くのビルの裏手に反応が有った。

「そこかあっ！！」

ヴィータは、ビルの向こう側の宙に浮いている『なのは』目掛けて、先程の鉄球をグラーフ・アイゼンで打ち出した。

「!?」

なのはの防御壁に、魔力付与された鉄球がぶち当たる。魔法爆発の爆煙が上がった。

「おらあああっ!!」

ヴィータはとりあえず、一発くれてやろうとグラーフ・アイゼンを振り下ろした。
無論手加減はしてあるが、一発食らえばしばらく動けなくなる程の一撃だ。
しかしヴィータの攻撃は空を切る。

いち早くなのはは爆煙を利用して、その場所から離脱していた。

「誰?何処の子?いきなり襲い掛かられる覚えは無いんだけど…一体何でこんな事するの!?」

とりあえず距離を取ったなのははそう言うが、ヴィータには馬鹿に

されている様にしか思えなかった。

「何ふざけた事言ってんだあっ！」

もう一度、鉄球をお見舞いしてやろうと、構えるヴィータ。
その時彼女の背後から、桜色の光の玉がヴィータを襲った。
なのはが先程の攻撃を受ける前に発射していた誘導弾である。
不意を突かれたヴィータだが、防御魔法で桜色の光弾を何とか受け止める。アイゼンを持つ手が衝撃で震えた。

「この野郎おおぉ～っ！！」

ヴィータはなのはに突撃し、グラーフ・アイゼンを振り降ろす。
なのはは間一髪で後方に下がり、素早くレイジング・ハートを砲撃モードに変化させた。
足元に桜色の魔法陣が展開され、同じく桜色のリングがレイジング・ハートの周りに形成される。
そして、その先端部に膨大な魔力が収束されて行く。

（ヤバいっ！）

ヴィータが危機感を覚える程の膨大な魔力量だ。

「話を聞いてってばっ！！」

なのはの叫びと共に、凄まじい桜色の砲撃がヴィータに放たれる。
なのはの得意な砲撃魔法『ディバイン・バスター』だ。

強力な光の奔流が轟音と共に、襲い掛かった。

身をかわし、かろうじて砲撃を避けヴィータだが、帽子を吹き飛ばされてしまった。

赤い布を撒き散らし、地面にゆっくりと落下して行くうさぎの付いた帽子。

ヴィータの青い目の瞳孔が怒りのあまり開いた。

はやてに貰った騎士服に、ゼロに買って貰ったウサギのぬいぐるみ、両方を踏みにじられた気がした。
今まで我慢していたヴィータの我慢も限界だった。
その形相になのはは思わず後ろに退いてしまう。それ程ヴィータの怒りは凄まじかった。

「グラーフ・アイゼン！カートリッジロード！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

グラーフ・アイゼンの柄の部分がスライドし、余剰魔力が蒸気の様に噴出した。
シリンダー内のカートリッジの魔力がアイゼンに更なる力を与える。

アイゼンのハンマー部が組み換えられ、スパイクと噴射口が形成される。
バラバと競り合った『ラケーテン・ハンマー』だ。
ベルカ式のカートリッジシステムを見た事の無いなのはは驚く。

噴射口から唸りを上げて、勢い良く推進剤が噴射された。
真紅のスカートをなびかせて、ヴィータはグラーフ・アイゼンを勢い良く振り回す。

「ラケーテン・ハンマあああああーっ！！」

推進剤と遠心力を利用して加速すると、一気になのはに突っ込み、アイゼンの一撃を叩き込んだ。

なのはの強固な防御魔法の盾に火花を散らして、アイゼンのスパイクが食い込んで行く。

「!?」

驚くなのはの目の前で、ガードを打ち破られドリルと化したスパイクが、レイジング・ハートを抉る。そしてなのはを襲う圧倒的なパワー。

「きゃあああああっ!」

痛烈な一撃に、なのははボールの様に弾き飛ばされてしまった。向かいのビルの窓を突き破り、中の事務室に叩きつけられる。魔法で防御はしたが、魔力ダメージで、もう体が動かない。

ヴィータは様子を見ようと、なのはの突っ込んだ窓から事務室に入る。

もう相手は動けないらしい、それでもボロボロになったデバイスを震える手で向けようとするが、戦闘力を失っているのは明らかだ。

(ざまあ見ろ…)

一発お見舞いし、幾分落ち着いたヴィータは、動けないなのはを見下ろし、鼻で笑ってやった。

散々言いたい放題された上に、問答無用で攻撃されて頭に来ていた

が、人を襲わないというゼロとの約束を破る気は無い。ちょっと気が引けたが…

しかし今回はどう考えても、いきなり襲って来た向こうが悪いと、ヴィータは自分を納得させる。

（最後にちょっと、脅かしてやるか…）

ぶっ飛ばしてやって少しは気が晴れたが、まだ腹の虫が収まらないヴィータは、なのはの目の前でグラーフ・アイゼンを振り上げた。

脅かしてやるだけのつもりである。これでもヴィータにとっては寛大な方だ。

なのはは殺られると思い込み、思わず目を瞑る。

その時、黒い影が2人の間に割って入った。響く金属音。

「お前はっ！！」

ヴィータは声を上げる。寸止めのつもりで振り下ろしたアイゼンが、途中で止められていた。

「…友達だ…」

なのはを庇い、アイゼンをバルディッシュで受け止めているのは、金髪の髪に、黒いバリアジャケットに身を包んだフェイトであった。

「民間人への魔法攻撃…軽犯罪じゃ済まない罪だ…」

ヴィータにはそう言い放つフェイトの顔がニヤリと笑うのが、確かに見えた。

（まさかコイツら…最初から、あたしを嵌める気で…！？）

ヴィータは弱みは見せまいと、内心の動揺を何とか押し隠すが、更に3つの反応が転移して来たのを察知し、ギリッと歯噛みした。

その頃、八神家ではやてとゼロ、シャマルとで夕飯の支度をしている所だった。

はやてはふと調理の手を休め、リビングの時計を見る。結構な時間

だ。

「ヴィータとザフィーラ、遅いなあ…」

そう呟くはやてに、テーブルのセッティングをしていたシグナムが、

「きっと道草でもしているのでしょう…そこまで迎えに行って来ます…」

そう言って微笑むとコートを羽織り、外出の支度をする。

「じゃあ…シグナム頼むわ」

はやてはシグナムを拝む様に片手を上げる。そこにゼロが、

「それなら俺もちょっとコンビニに用事があるから、付き合うぞ」

「そうやね…じゃあゼロ兄もお願いや」

ゼロは頷くと、寒さ対策でしっかりと着込んで支度をする。

「じゃあ行って来る」

「それでは行って来ます主はやて…」

「2人共、気ぃ付けてなあ」

はやてに見送られ、ゼロはシグナムと玄関へ向かった。

外へ出た2人は、足早に夜道へと足を踏み出す。

ゼロは速めに足を進めながら、シグナムに、

「向こうの様子は判るか？」

「街中に結界、それもベルカ式の封鎖領域が張られている事しか分からん…ヴィータもザフィーラにも念話が通じん、どういう事だ…？」

シグナムは今分かっている事をゼロに一通り教えた。
先程異常を感知したシャマルから、念話を受けたゼロとシグナムは、示し合わせて外に出たのである。
ゼロもテレパシー回線を使って、念話とのやり取りに慣れたので、今では普通にシグナム達と話せる様になったのだ。

「嫌な予感がする…急ぐぞ！」

ゼロは内ポケットから『ウルトラゼロアイ』を取り出し装着する。
シグナムも『レヴァンティン』を変化させ、騎士甲冑を纏った。
ウルトラマン形態をとったゼロはシグナムと共に、街中に張られている封鎖領域目指して高速で飛び出した。

『それ』は闇の中に潜んでいた。
それの発する催眠波動は、死人をも操る程強力なものだ。
それの発する波動は封鎖領域内全ての者に影響を与える。

それは巨体を僅かに震わせ、鋭い牙を剥き出しにした。

指示通りの結果に満足して、おぞましい笑いを双頭の口に浮かべたかの様である。

そして、それは最後の仕上げをすべく、波動を強めた。

つづく

第３４話　錯綜ー ベルミスクングー （後書き）

やっとウルトラマンゼロの映画を見て来れました。

面白かったです。しかしこの作品と明らかな違いが…

大体の所は少し修正すれば済みそうですが、ゼロに関する事で２つばかりまずい事がありまして、直すかどうか考え中です。

後はチマチマ直しますが、今年の冬にも続きっぽい話の映画が有るみたいなので、無理だと開き直るかもしれません。

では次回ウルトラマンゼロ対ウルトラマンネクサス『亜空間ーメタフィールドー』

でお会いしましょう。

第３５話　亜空間ーメタフィールドー（前書き）

お読み頂きありがとうございます。

今回も視点がコロッコロ変わります。判りづらくなければいいのですが…

では第３５話です。

第３５話　亜空間ーメタフィールドー

デバイスを打ち合わせたまま睨み合う、ヴィータとフェイト。

「ちいっ！」

ヴィータは一旦後方に跳んで距離をとった。忌々し気に目前のフェイトを睨み付ける。

（こいつら…いい奴らだと聞いてたのに…ゼロを封印だと？とんだ恩知らず共だ！）

そんなヴィータの心の内も知らず、フェイトは『バルディッシュ』を『サイス・フォーム』電光の鎌に変化させると、何時でも斬撃を放てる構えをとり、

「時空管理局・嘱託魔導師、フェイト・テスタロッサ…」

静かな怒りを込めた口調で一歩前に出る。

「…抵抗しなければ、弁護の機会が君には有る…同意するなら武装を解除して…」

「誰がするかよっ、その気も無えクセに！」

ヴィータはそう吐き捨てると床を蹴り、割れた窓から素速くビルの外に離脱する。

フェイトは続いて転移して来たユーノになのはを任せ、ヴィータの後を追ってビルの外へ飛び出した。

ユーノは壁に叩きつけられていたなのはに治癒魔法を使い、ダメージを抜いてやる。

治療を受けながら、直ぐに駆けつけられた理由を話してやった。

なのはの異常を察知したフェイト達は、あの後直ぐに転移ポートを使い駆けつけて来たのだ。

ユーノは治療を施しながら尋ねる。

「あれは誰…？何でなのはを？」

「…分かんない…急に襲って来たの…」

覚えの無いなのははそう答えるしかない。ユーノは安心させる様に

笑い掛け、

「でも、もう大丈夫…フェイトも居るし、アルフも居る、それに…孤門さんも来てくれたんだよ…」

「…孤門さん…」

なのはは、フェイトからのビデオメールで聞き覚えのある名前を呟いた。

その頃ヴィータは、フェイトとの熾烈な空中戦を繰り広げていた。

ヴィータの『シュワルベフリーゲン』魔力付与の鉄球が飛び交い、フェイトの『アークセイバー』電光のブーメランがヴィータを襲う。

両者共一歩も退かないが、

「バリヤぁぁーっブレイクっ!!」

隙を突いて、下方から一気に接近して来たアルフがヴィータの魔法障壁を拳で破壊する。得意の魔力無効化の魔法だ

「てめえっ！」

ヴィータはアルフにアイゼンでの一撃を食らわせた。
衝撃で防御壁ごと吹っ飛ばされるアルフ、しかしフェイトはその隙を見逃さず攻勢に出る。
２対１ではヴィータの不利であった。

（くっそお…ぶっ潰すだけなら簡単なのに…！）

相手を叩き潰す訳にはいかないヴィータは、とりあえずフェイト達の攻撃を凌ぐ。

不本意だが逃げるしか無いかと思ったが、それも難しそうだった。
何故か封鎖領域の外に出られない、解除して出ようにも戦いながらは難しい…

その頃、ゼロとシグナムは封鎖領域内への侵入に何とか成功していた。

確かにベルカ式の結界で、シグナムが一部を解除して入り込む事が出来たのだ。

2人は中での戦闘の気配を感じ取り、向かおうとしたその時、

「何だっ？この強烈な波動は！？」

ゼロが頭を押さえて、静まり返っている辺りを見渡した。

「どうしたゼロ…？」

不思議そうに顔を覗き込むシグナムにゼロは焦った様子で、

「強烈な催眠波動が中に満ちている、シグナム精神防御だ！これじゃあ中に居る人間はまともな状態じゃいられねえぞ！」

「何っ！？」

ゼロの言葉にシグナムは直ぐさま対精神防御の魔法を発動させた。
その時、暗鬱なビルの谷間に飛び交う赤と金の光が見える。

「あの魔法光はヴィータか！？」

「ヤバそうだ、行くぜ！」

ゼロとシグナムは飛び上がり、急ぎ光を目指し低空で向かった。

なのはは、ユーノの転移魔法で離れた位置にあるビルの屋上で、フェイト達の戦闘を見守っていた。

「アルフさんも来てくれたんだ…」

そう呟くなのはを支えながらユーノは、

「クロノ達もアースラの整備を一旦保留にして動いてくれてるよ…」

元気付ける様に言う。
封鎖領域内をスキャン出来ないアースラは、クルー達が総動員で状況の確認に動いている。

そんな中、同じく転移して来た『孤門一輝』はなのは達より少し離れたビルの屋上に居た。

その手に短剣状の『エボルトラスター』を持ち、油断なく辺りを見渡している。

「ん…？」

孤門は何かを感じて、エボルトラスターを見るが、中央のビースト反応を知らせるクリスタル部分は沈黙したままだ。

「気のせいか…？一瞬反応が有ったような…むっ！？」

不意に孤門は顔を上げ、戦闘中のフェイト達の方を向いた。

「来たか…」

その表情を険しくして、エボルトラスターを握り締めた。

ヴィータはフェイトとアルフ相手に苦戦していた。

フェイトもアルフも以前とは格段に腕を上げている。更に息の合ったコンビネーションでヴィータを追い詰めて行った。

「こんのおっ！」

ヴィータがアイゼンでフェイトに殴りかかった時、彼女の周りを金色のリングが襲った。

「ううっ！？」

その手足を計４つの金色のリングが空中に拘束する。

ヴィータはもがくが、そう簡単には外れない。

フェイト達の連携プレーだった。フェイトに気を取られている内にアルフが罠を張り、バインドで捕まえる事に成功したのだ。

フェイトは空中に磔になったヴィータに勝ち誇ってバルディッシュを向ける。

「終わりだね…さあ観念して仲間の居場所を教えて貰うよ…害悪…！」

ヴィータは怒りの表情でニヤニヤするフェイトを睨み付けた。

（こんな奴らに負けてたまっかっ！）

バインドを外そうと力を込める。
その様子をフェイト達は馬鹿にする様に嘲笑っていた。
少なくともヴィータの目にはそうとしか映らない。

いや…フェイト達も同様だった。お互いの言葉も態度も、全く違って相手に伝わっている事に全員が気付いていない。
自分達が誰かに踊らされている事に…

その時アルフが鋭い感覚で異常を捉えた。

「何かヤバいよっ！！」

アルフの叫びと同時に、駆けつけたシグナムが『レヴァンティン』の一撃で、フェイトを弾き飛ばした。

「シグナム…」

磔状態のヴィータが声を漏らした。

「うおおおおおっ！！」

それと同時に、異常を察知して同じく駆けつけた、人間形態のザフィーラが、アルフに強烈な回し蹴りを叩き込んだ。

ザフィーラにはフェイト達が嘲笑いながら、ヴィータに止めを刺そうとしている様にしか見えない。

「待てザフィーラ！」

吹っ飛んだアルフを追おうとするザフィーラの背後にゼロが現れ押し留める。

「ゼロか…ヴィータが危ない…！」

「ヴィータはシグナムに任せろ、今はまず精神防御の魔法を使え！」

「何故だ…？」

「頼む！俺を信じてくれ！！」

ゼロの尋常では無い剣幕に、ザフィーラも精神防御の魔法を使用する。

「どういう事だゼロ…？む…さっきと様子が違う…？」

「簡単に言うと、嵌められらしいって事だ…」

ゼロはこちらの姿を見て、唖然としているフェイト達に視線を向けながら、苦々し気にザフィーラに伝えた。

「な…何でゼロさんが…？」

思いもよらない人物の登場に、フェイトは動揺を隠しきれない。

様子を見守っていたなのはとユーノも驚いている。

目の前のポニーテールの女性は剣型のデバイスを構え、冷ややかな目でフェイトを見下ろしていた。

そしてその横に、ゆっくりと浮かんで来たのは、良く見知った『ウルトラマンゼロ』の姿。

「ど…どうして、なのはを襲った人達と一緒に居るんですか…？離れて下さい、その人達を捕まえないといけない…！」

フェイトの呼びかけにゼロはゆっくりと首を横に振り、

「仕方ねえんだ…邪魔をするなら、お前らでも容赦出来ねえ…頼む、退いてくれっ！」

ゼロは沈んだ声で頼んだ来た。フェイトには、その無表情な顔がとても哀しそうに見える。

そして後ろで嫌な笑みを浮かべている、紅い服の少女とポニーテールの女剣士の姿…

「ゼロさんに何をしたっ…！」

フェイトは紅玉色の瞳に怒りの色を浮かべ、バルディッシュを女剣士、シグナムに向けた。

「ゼロ…テスタロッサの私を見る目が、かなり悪くなった…」

シグナムはレヴァンティンを構えながらゼロに囁いた。

「今更何言っても無駄だろうな…こっちの言葉がどう聞こえているのか…」

ゼロは困惑して返事をするしかない。

今フェイトに誤解だから話を聞いてくれと伝えた所だが、まるで通じていないらしい…

「おいっ、どういう事だよっ！あの高町なんとかがいきなり襲って来たんだぞ！」

ゼロ達の後ろで磔状態のままのヴィータが、イラついた声を出す。
状況がさっぱり判らないのだろう。

「簡単に言うと…お前達全員、強力な催眠波動で踊らされていたのだ…」

「何だと！そんな馬鹿な…！？」

シグナムの言葉に驚愕して顔色を変えるヴィータ。

「まずは精神防御を発動させろ、それでなくては、この中ではまともに判断も下せん」

ヴィータも言われた通り、対精神攻撃の防御を発動させた。
そうしている間に、フェイトがシグナム目掛け突っ込んで来る。

「今は何を言っても無駄なら、少し大人しくしていて貰おう…」

シグナムがレヴァンティンを掲げる。

「おい、シグナム無茶すんなっ！」

ゼロが慌ててシグナムに声を掛けるが、

「仕方あるまい手加減はする…レヴァンティン、カートリッジロード！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

レヴァンティンからカートリッジが排出され、刀身が業火の剣と化す。シグナムは一気にフェイトに突っ込んだ。

「紫電…一閃っ！！」

フェイトはとっさに振り下ろされる炎の斬撃をバルディッシュでガードする。

しかし一撃でバルディッシュの柄部分は真っ二つにされてしまった。

「うおうっ！！」

鋭い気合いと共に、返す刀で二撃目が襲う。
フェイトは防御魔法で受け止めようとするが、痛烈な一撃に防御シールドごと吹き飛ばされ、ビルに勢い良く叩き込まれてしまった。

ビルの屋上に風穴を開け、瓦礫に転がるフェイト。

「フェイトぉぉっ！！」

アルフが焦って落下したフェイトを追う。それを見たゼロは、

「…シグナム…やり過ぎじゃあねえか…？」

「加減はした…あいつはなかなか腕が立つ、これ位でないと行動不能に出来ん…」

シグナムはそう涼しい顔で言う。ゼロを騙している悪女呼ばわりされ、少し怒っていたのだろうか？

ゼロはため息を吐くと先程から磔状態のヴィータに近付き、バインドを『ウルトラ念力』で破壊してやった。

「悪い…ゼロ…」

腕をさすりゼロに礼を言うヴィータにシグナムが近寄り、

「どうした？油断でもしたか…？」

「うるせえよ…こっから逆転するとこだったんだよ…！」

「そうか…それは邪魔したな、済まなかった…」

ふくれっ面をするヴィータの頭にシグナムがウサギの付いた帽子を載せてやる。先程なのはに吹き飛ばされたヴィータの帽子だ。

「破損は直しておいた…大事な物なのだろう…？」

ヴィータは帽子を被り直し、

「シグナム…あんがと…」

呟く様に礼を言った。普段何かとシグナムに突っかかる事が多いヴィータだが、こうして見ると姉妹の様に見える。

しかし無事の再開を喜んでばかりもいられない状況だ。４人はとりあえず一塊になった。

「このまま　闘り合う訳にも行かねえ…離脱するか…」

ゼロはそう提案する。何者かは知れない奴の策略にむざむざ乗る気は無い。しかしシグナムは周りを見て、

「それがだな…そう思って封鎖領域を解除しようとしたのだが、脱出出来ん…入った時と術式が組み替えられてしまった様だ…」

「何だって？じゃあ俺達もまんまと嵌められちまった上に、此処に閉じ込められたって事か！？」

「そうだ…これを破るには恐らくゼロの光線か、私かヴィータの最大クラスの魔力攻撃もしくは、解析しての解除が必要だろう…」

「分かった…それなら俺がやる！」

ゼロは頷くと、『ワイド・ゼロショット』の構えをとった。
復活して来たフェイトがアルフと共に向かって来るのが見える。
ユーノもなのはを防御結界の中に1人退避させ、援護の為に向かって来ていた。

「何をする気かは知らないが…そうはさせない！」

厳しい目で状況を見守っていた孤門は、エボルトラスターの鞘にあたる部分を一気に引き抜いた。
短剣部分を頭上に掲げる。

「うおおおおっ！！」

刃先が眩いばかりの光を放ち、孤門の体は光に包まれた。

「何だっ！？」

ゼロは突如として現れた光の柱を見て、ゼロショットの手を止める。
眩い光と共に巨大な何かが、大地を揺るがしビル街に降り立った。

「ばっ馬鹿なっ！ウルトラマンだと！？」

ゼロはその姿を見て思わず声を上げた。
眩い光が晴れると、片膝を立てて降り立つ巨大な姿。
全身銀色のボディーに胸部のＹの字形の『エナジーコア』が特徴的な『ウルトラマンネクサス』であった。
片膝を着いていた体勢からゆっくりと立ち上がり、その数十メートルの威容を示す。

「あ…アイツはゼロの仲間なのか…？」

ヴィータがネクサスの巨体を見下ろしながら聞いて来るが…

「いや…あんなタイプの同族は居ない…誰だアイツは…？」

ゼロは困惑して答える。一見ウルトラ族に良く似ているが、胸部の形状といい、腕の籠手の様なアームガードといい、明らかに違う点が有る。

生命体として別種の存在に見えた。
強いて言うなら胸のクリスタルの形状が『ウルトラマンノア』に似ている位かと思った。
警戒して身構えたゼロは、ある事に気が付く。

（催眠波動が消えた…？）

どういう事か分からず疑問を抱くゼロだが、こちらにとって最悪のタイミングで切られた気はした。
そんなゼロの頭の中に声が響く。

《…君がこんな事までするとはね…》

《誰だてめえは？俺を知ってるのか！？》

巨人ネクサスは、その巨大な腕を構え、

《ウルトラマンネクサス…君を倒しに来た…まさかと思っていたが…やはり今まで魔導師を襲っていたのは君達だったのか…！》

《ふざけるなあっ！いきなり出て来て訳分からねえ事抜かしてんじゃねえっ！！》

ゼロも対抗して一気に身長４９メートルの巨人と化し、地響きを上げてネクサスの前に降り立った。

暗いビル街に、お互いの光る目が辺りをぼんやりと照らし出し、２体の巨人が対峙し合う。

「闘る気かゼロっ！？」

シグナムが呼び掛ける。ゼロはネクサスを睨み付けたまま、テレパシーで念話回線に、

《こいつと闘り合ってる最中に光線をぶっ放して封鎖領域を破壊する。その隙を突いてバックレるぞ…俺達は今『管理局』に捕まる訳にも出頭もする訳には行かかねえ！！》

シグナムは頷いて、レヴァンティンを構える。

《判った…こちらは邪魔されない様にあちらを抑える…！》

《任しとけゼロっ！1対1なら負けは無えっ！！》

ヴィータもグラーフ・アイゼンを構えた。ザフィーラも拳を握る。
3人は上昇して来るフェイト達に備えた。

フェイト達は見た事の無い巨人の出現に戸惑っていた。
そんな彼女達の念話回線に聞き覚えのある声が入って来た。

《僕は孤門だ…、ウルトラマンゼロは引き付けておくから、その内になのはちゃんを連れて脱出の準備を！》

《えっ！孤門なの…？孤門の『レアスキル』って…！》

フェイトはネクサスの姿を見て驚いている。
だが正直ありがたい。

さっきまで4対3だった上に、ウルトラマンゼロを抑える事など不可能に近いと思っていたからだ。

どんな力を秘めているかは分からないが、今は頼らせて貰うしか無い、思わぬ援軍だった。

ダメージを負ったなのはも居るので、今は脱出を優先し、フェイトが相手を引き付けている内に全員を結界の外へと転送するのが、彼女達の考えだ。

ゼロ達もフェイト達もお互い気付かずに、それぞれ別に脱出の算段をしている事になる。

これを仕掛けた者はきっと陰で、せせら笑っているのだろう…

ゼロはネクサスと向かい合って、間合いを計っていた。どんな能力を持っているのか、まるで未知数だからだ。

（まずは攻めて、出方を見る！）

そう決めたゼロは、アスファルトを蹴って一気に前に飛び出し、距離を詰める。ネクサスの顔面目掛け、正拳突きを放った。

『ディヤアアアッ！！』

ネクサスは素速く反応し、空気を切り裂く大砲の様な拳を左腕の『アームド・ネクサス』で受け止め、ゼロの顎目掛け強烈な右アッパーを放つ。

ゼロは上体を逸らし、その一撃を避ける。衝撃波が唸りを立てた。

（やるじゃねえかっ！）

ゼロは直ぐさま体勢を立て直す。
空振りし、がら空きになったネクサスの脇腹にボディーブローを叩き込んだ。

『シャエアアッ！！』

しかしアッパーから切り替えて振り下ろされる、ネクサスの肘打ちが巨大な杭と化し、ゼロの拳を叩き落とした。

（野郎っ！！）

ゼロは後方に飛び退くと、ネクサスの側頭部を狙って鉞（まさかり）の如く回し蹴りを放った。
ネクサスも同時に迎撃の回し蹴りを放つ。

お互いの蹴りが空中で激突する。互いの攻撃に込められたエネルギーが火花を散らし、衝撃波が周りのビルの窓ガラスを粉々に砕いた。

『ゥオオオオッ！！』

『シェアアアアッ！！』

双方の体に力が満ちる、強大なパワーとパワーとのぶつかり合いだ。

『デリャアアアアッ！！』

ゼロが吼える。右足が炎の様に赤熱化し、更にパワーを込めた。ゼロのパワーがネクサスを怒涛の勢いで押し返す。

『ウオオオオッ！？』

耐え切れなくなったネクサスは爆発した様に吹き飛ばされ、横のビルに頭から突っ込んだ。
ビルが崩れ落ち、瓦礫と粉塵が辺りを白く染める。

《見たか！この野郎っ！！》

口元を親指でチョイと弾いて得意気に吐き捨てるゼロ。
しかしネクサスは何でも無い様に瓦礫を押し退けて立ち上がった。

再びゼロに対峙すると、

《そろそろ本気で行くよ…！》

そう呟くと、右腕を胸に当てる。アームド・ネクサスのクリスタル部分が輝くと、赤い波長が全身を覆った。

《何だっ！？》

驚くゼロの目の前で、ネクサスは赤を基調とした特殊戦闘形態『ジュネッス』に姿を変える。

（コイツ…『ウルトラマンダイナ』と同じく、姿を変えられるのかっ！？やはり別世界から来たウルトラマン…？）

ゼロの驚きを余所に、ネクサスは両腕を左側にクロスさせる、右腕のアームド・ネクサスが激しく輝いた。

《悪いけど、付き合って貰うよ！》

ネクサスは右腕を天高く伸ばす。その腕から眩い光の奔流が放たれ

た。

（何をする気だ…？）

油断なく身構えるゼロは、周りの空間がおかしい事に気付く。
ネクサスが放った光が金色の巨大なドーム型を形成、２人の周りを包み込んで行くのだ。

「ゼロっ！？」

驚いて呼び掛けるシグナム達の目の前で、ゼロとネクサスの巨体が金色の光と共にぼやけて行き、跡形も無く消え去ってしまった。

ゼロは空間の異常に混乱し掛けるが、何とか踏みとどまる。金色の光を抜けるとゼロは、見た事の無い異様な空間の中に居た。

赤や紫が入り混じってオーロラの様に揺らめく空に、異形の大地が広がる荒涼とした場所だ。妙な息苦しさを覚える気がする。

（奴の力か…？別の空間に閉じ込められたのか…？）

辺りを見渡すゼロの前に眩い光が現れる。光は人型をとり、ウルトラマンネクサス・ジュネッスが姿を現した。

《コイツは貴様の力か…！？》

怒鳴るゼロに、ネクサスは胸部に形成された『コア・ゲージ』を青く輝かせ、

《そう…特殊戦闘空間『メタ・フィールド』…来い！ウルトラマンゼロっ！！》

ネクサスはアームド・ネクサスを煌めかせた。

つづく

第３５話　亜空間ーメタフィールドー（後書き）

ネクサスの変身アイテム『エボルトラスター』は、変身以外にもビーストの反応を検知する事が出来ます。

『メタ・フィールド』は3分間だけ自分の体を使って作り出せる特殊戦闘用亜空間で、周りに被害を出さない為に使用します。

この中ではネクサスの力もアップしますが、本人の負担も激しい様です。

ウルトラマンノアは以前光の国にも現れた事がある様ですが、ゼロはネクサスがノアの中途形態とは当然知りません。ノアの姿しか知らない筈です。

さて…映画を見たのですが、やっぱりと言うか、違った部分があります。

幾らか映画に合わせてちまちま修正しましたが、どこまで直すかは考え中です。

完全な設定が出てから考えてみますので、ご了承下さい。

それと色々と立て込んで来て、しばらくの間、更新が1日か2日いつもより間が開いてしまうと思いますのですいません。

では次回お会いしましょう。

第３６話　激戦ーフェースファイティングー（前書き）

読んでい頂き誠にありがとうございます。

相変わらず場面がコロコロ変わります。読みづらくない事を祈って…第３６話です。

第３６話　激戦ーフェースファイティングー

「…ゼロとあのデカブツが消えた…？」

ヴィータが唖然として、ゼロの消えた辺りを見回した。

「ゼロにあんな能力は無い筈だ…あの巨人の力か…？」

シグナムもそちらに視線を向けるが、フェイトが上昇して来るのを見て、再び向き直る。

厳しい表情でシグナムを睨むフェイトに続いて、アルフとユーノも戦闘態勢を整えて上がって来た。

シグナムは、迫るフェイト達に視線をやりながら、

「あの様子ではゼロも封鎖領域を破る余裕は無さそうだ…念の為、此処に侵入する前にシャマルに応援を頼んでおいた。今頃察して、解除を始めている筈だ…しかしその間相手をせねばなるまい…」

「ゼロは大丈夫かよ…」

ヴィータは心配そうにゼロ達が消えた辺りを見る。
シグナムはヴィータに振り向き、

「ゼロなら大丈夫の筈だ…私は信頼している…行くぞ、状況は実質4対4…1対1なら我らベルカの騎士に…」

「負けは無えっ！！」

ヴィータがすかさず合いの手を入れる。ザフィーラも頷いた。それを合図に3人はフェイト達に向かう。

ヴィータはその時ふと、違和感を感じ背中に手をやった。

「『闇の書』が無い？」

はやてはキッチンで下ごしらえの真っ最中であった。

他のみんなが少々遅くなりそうだと連絡が有ったので、それなら下ごしらえに手間の掛かる、洋風の鍋を試してみようと、挑戦している所である。

シャマルはその際、足りなかった材料の買い出しに出掛けた所だ。

鼻歌交じりで包丁を握っていたはやての携帯が鳴る。シャマルからであった。

《すいません、お目当ての食材が見当たらなくって、ちょっと遠くのスーパーまで行って探して来ます》

「別にええよ、無理せんでも」

はやては言うが、シャマルはついでにみんなを拾って帰るとの事だった。

「なるべく急いで帰りますから…」

封鎖領域前のビルの屋上で、緑の騎士服姿のシャマルは、携帯と接続させている指輪モードの『クラール・ヴィント』に話し掛けた。

《あっ、急がんでええから気い付けてな》

「はい、それじゃあ…」

シャマルはそう言うと接続を切る。その小脇には『闇の書』が有った。

戦闘の邪魔になると自ら判断し、封鎖領域の術式が組み替えられる前に離脱して来たのだ。

シグナムからの念話を受け、駆けつけたシャマルは、全員が閉じ込められたのを察した。

今、目前の封鎖領域を前に『クラール・ヴィント』を起動させ、術式の解析に掛かっている所だ。

シグナムの予想通りである。伊達に永い時を過ごして来た訳では無い。

（確かにベルカの封鎖領域なのに、あちこち弄られてるみたいね…

解除にはもう少し時間が掛かりそう…みんな無事でいてねっ！）

シャマルは焦りながらも、作業に集中する。彼女の能力でも中の様子ははっきりとは判らなかった。

『ディヤアアアッ！！』

幻想の様な空間の中、ゼロの先手必勝とばかりに放たれた前蹴りがネクサスに跳ぶ。

《同じ手は食わないっ！》

《何いっ！？》

音速の勢いで繰り出された蹴りを、ネクサスが片手でガッチリと受け止めていた。更にゼロの足を掴むと、力任せに引く。

『シェアアアッ！！』

何と腕一本で、３万トンを超えるゼロの巨体を頭上まで引っこ抜いてしまった。
そのまま大地に強烈なパワーで叩き付ける。

『グワアッ！！』

異形の大地を砕いて叩き付けられたゼロは、苦悶の声を上げた。
更にネクサスの巨大な足が振り上げられる。

ゼロは痛みをこらえ腹筋の力のみで、バネの様に一気に起き上がり、反動を利用してネクサスのボディーに正拳突きを叩き込んだ。

『グオオッ！！』

ネクサスは声を漏らすが、強靭な腹筋が衝撃を受け止める。

（何っ？俺の突きを耐えたのか！？）

ネクサスは右腕を振り上げると、驚くゼロの頭を狙って横殴りにフックを繰り出す。

「野郎っ！！」

避けきれないと瞬時に判断したゼロは、ネクサスの顔面に頭突きを食らわす。

しかし察したネクサスもフックを止め、逆に頭突きを合わせて来た。

ガキンッ！と鈍い音を立て、ゼロは弾かれた様に後ろに吹き飛ばされてしまう。

ゼロは頭を振りながら、後方に飛び退き距離を取った。

（何だ？　さっきとパワーが段違いだ！　あの姿はやっぱりパワーアップした形態なのか！？）

ゼロは油断無くネクサスに構え直すが、疑問も感じる。

（確かに奴はパワーアップしたらしいが…　それだけか…？　どうも調子が上がらない気がするぜ…）

妙な息苦しさと不調を感じるが、ゼロは気のせいだと自らを奮い起

こす。

（考えても仕方ねえ！行くぜえっ！！）

ゼロの頭部から2対の宇宙ブーメラン『ゼロスラッガー』が唸りを上げて飛び出した。
ネクサスに向かって空を切り裂き飛来する。

しかしネクサスも両腕の『アームド・ネクサス』を発動、光の刃『パーティクル・フェザー』を連射して繰り出す。

空中を白熱化したスラッガーと、くの字型の光刃がスパークを上げて激突した。

（何ぃっ！？）

光刃がスラッガーを弾き飛ばし、更に残りの光刃がゼロに襲い掛かる。

横っ飛びに身をかわし、パーティクル・フェザーをかわしたゼロは、そのまま大地を踏み割って跳躍した。

弾かれたスラッガーを呼び戻し、両手に構えるとネクサスに怒涛の勢いで突撃する。

ネクサスも『エルボーカッター』で迎え撃つ。

幻夢の空間を揺るがして、2体の巨人の斬撃の音が響き渡る、嵐の様な打ち合いだ。

『シェアッ！！』

ネクサスの痛烈な一撃が炸裂し、ゼロの手からスラッガーを弾き飛ばした。

（しまった！）

一瞬スラッガーに気を取られた瞬間、ネクサスは見逃さず右拳にエネルギーを集中させる。

『ウオオッ！シェアッ！！』

光を放つ猛烈な一撃『ジェネレイド・ナックル』がゼロの腹に叩き込まれた。

『グワアアッ！！』

ゼロ距離からの砲撃を受けた様にゼロは数百メートルは吹っ飛び、

岩を砕いて大地に叩き付けられてしてしまう。

（ぐはっ…！）

腹を押さえて呻くゼロ。凄まじい威力であった。

（ば…馬鹿なっ！　俺がパワー負けしただと…？）

驚愕してまだ立ち上がる事が出来ないゼロに、ネクサスが歩み寄る。

《投降すれば、これ以上の攻撃はしない…　管理局に出頭するんだ、悪い様にはしない…》

《舐めた事抜かしてんじゃねえぞ…！》

ゼロは腹を押さえながらも立ち上がり、ネクサスを睨み付ける、その時だった。
ゼロの『カラータイマー』が赤く点滅を始めた。

（そんな馬鹿なっ！　俺のエネルギーがこんなに早く無くなる訳がねえっ！？）

ゼロは予想外の出来事に動揺を隠せない。そこで彼はようやく気付く、

（このメタ・フィールドとやらのせいか…　この空間の中では奴は普通以上にパワーアップし、敵には消耗させるって訳かよ…！　クソッ！此処に誘い込まれた時点で不利って訳か…！）

それでもゼロは痛みを堪え、ネクサスに反撃すべく戦闘態勢を取った。

ビル街上空でぶつかり合う、シグナムとフェイト。
『レヴァンティン』と『バルディッシュ』が火花を上げて、打ち合わせられる。

「くっ…！」

不利を悟ったフェイトは後方に一旦距離を取った。

（ほう…大分腕を上げたな、以前闘った時とはまるで別人だ…）

シグナムは状況も忘れ、少し嬉しくなってしまう。

戦闘狂の血が騒ぐのだろう。こんな状況なのに困ったものである。

シグナムと対峙するフェイトの周りに金色の魔力スフィアが現れる。

フェイトの得意魔力『フォトン・ランサー』の発射態勢だ。

「レヴァンティン、私の甲冑を…」

シグナムは動じず、レヴァンティンに指示を送る。

《ＰａｎｚｅｒＧｅｉｓｔ》

シグナムの体が紫色の淡い魔法に包まれた。

フェイトは構わず発射態勢に入る。彼女のフォトン・ランサーなら、なまじの魔法障壁なら貫通する威力を持っているのだ。

「撃ち抜け、ｆｉｒｅ！」

雷音の様な発射音と共に、計４発の電光の槍がシグナムに向かって放たれた。

しかしシグナムは余裕を見せる様に、着弾前に目を閉じる。

轟音と共に炸裂したフォトン・ランサーは、紫色の壁に阻まれ何なく弾かれてしまった。

「ああっ…！？」

フェイトは思わず声を漏らした。凄まじい防御力である。

なのはですら、フォトン・ランサーの前には揺らいだものを、目の前の女剣士は微動だにせずに、受けきってしまったのだ。

驚くフェイトの前でシグナムは、ゆっくりとレヴァンティンを構え、

「魔導師にしては、悪くない線だ…だがベルカの騎士に１対１を挑むにはまだ足りん…だがな…」

シグナムは一旦言葉を切る。直ぐに襲い掛かって来ると思っていたフェイトは、不審そうな表情で女剣士を見た。

「退いては貰えんか…？全ては誤解だ…」

「何を今更…！ゼロさんを騙しているのに…！」

シグナムの言葉に、かえって怒りを覚えてしまうフェイト。大事なものを更に踏みにじられた気持ちだった。

シグナムはため息を吐くと、軽く首を振り、

（やむを得ん…何者かの思惑通りだろうが、今の状況では仕方ないか…！）

シグナムが思考を巡らせた所に、フェイトがバルディッシュを振り上げて向かって行った。

「…！？」

シグナムの姿が閃光と共に残像を残してフェイトの視界から消え失せる。

瞬時に高速移動を行ったのだ。フェイトは一瞬シグナムの姿を見失

ってしまった。

「！！」

フェイトが気付いた時には、頭上から一気に降下して来たシグナムが、彼女目掛けてレヴァンティンを振り上げる所だった。

殆ど反射神経のみでバルディッシュを突き出し、防御魔法を張り巡らす。

しかし一撃で防御をガラスの様に砕かれ、バルディッシュとレヴァンティンが激突した。

フェイトはシグナムの重い斬撃をかろうじて受け流し、後ろに逃れる。

（…やるな…ならば仕方が無い…！）

レヴァンティンから魔力カートリッジが排出され、刀身が炎と化した。

「レヴァンティン！叩っ斬れ！！」

《ｊａｗｏｈｌ》

シグナムの凄まじい抜き打ちが襲う。
フェイトはバルディッシュで受け止めるが、業火の剣に耐えきれず亀裂が入り、コア部分にまで達した。
シグナムの鋭い気合いが響く。

「はあああああっ!!」

次の瞬間、圧力に耐えきれなくなったフェイトは砲弾の様に吹き飛ばされ、ビルに叩き付けられてしまった。

「フェイトちゃん!!」

その様子を見ていたなのはの悲鳴が辺りに響いた。

ユーノはヴィータと、アルフはザフィーラと戦いながら、封鎖領域外への脱出準備を試みていたが、結界が硬く手間取っていた。

しかしそれはシグナム達も同じ状況だ。今外でシャマルが必死で封鎖領域の解析解除にかかっている。

シグナムはレヴァンティンにカートリッジを補充しながら、ビルに叩き付けたフェイトの上空に移動した。

フェイトは何とか立ち上がり、シグナムを睨み付ける。

ゼロを騙していると思われるシグナムへの敵愾心も有るのだろうが、一歩も退かない精神力に彼女は感心した。

口元に自然笑みが浮かぶ。

「いい気迫だ…私はベルカの騎士、ヴォルケンリッターの将シグナム…そして我が剣レヴァンティン」

シグナムはレヴァンティンを構え名乗る。

「ミッドチルダの魔導師…時空管理局・嘱託フェイト・テスタロッサ、そしてこの子はバルディッシュ」

フェイトも負けたくないという思いから、バルディッシュを構え名乗り返した。2ラウンド目が始まる。

荒涼としたメタ・フィールドの中、ゼロとネクサスの戦いは続いていた。

エネルギーの異常なまでの消耗に焦りを隠せないゼロは、パワーアップしたネクサスに押されていた。
戦況はゼロが不利である。

（クソッ！手加減出来る様な相手じゃねえぞ！）

ゼロは異様な色が入り混じった空を飛びながら、後方から追撃して来るネクサスに視線を向ける。

戦闘は空中戦に移っていた。ソニックブームを巻き起こし、2体の巨人がぶつかり合う。

ゼロは誤解から始まった戦い故に、最初は手加減をして追い払うつもりだったのだが、もうそんな余裕は無い。

柄にも無く話し合いとも思ったが、なのはが怪我を負わされたらしい上に『闇の書』の事が有るゼロ達には、出頭して事情の説明も出来ない。

この場はネクサスを退けて逃げるしかなかった。

（これも敵の思う壺かよ！ちきしょう！！）

何処の誰とも知れない敵の陰湿なやり方に頭に来るゼロだが、ネクサスは容赦なく追撃して来る。

只ネクサスもゼロを殺す気が無いのか、お互い必殺光線の撃ち合いまでには至ってはいない。

しかし相手を戦闘不能まで追い込みたいのはゼロもネクサスも同じで、攻撃に遠慮は無い。

『ディヤアアッ！！』

『シェアアアッ！！』

空中を嵐の様なゼロとネクサスの格闘戦が繰り広げられる。
ゼロの突きがネクサスのボディーに突き刺さるが、ネクサスも負けじとジュネッスパンチをゼロの鳩尾に叩き込む。

やはりメタ・フィールド内ではゼロが不利なのか、ボディーの打ち合いで競り負けたゼロは地上に吹き飛ばされてしまう。

（ちきしょうっ！！）

何とか地上に落下する前に体勢を立て直したゼロは、上空のネクサスを見上げる。
その目に有るものが映った。

（何だ？　あいつのカラータイマーみたいな物が点滅している？）

ネクサスの胸部に形成された『コア・ゲージ』の点滅が始まっていた。更に消耗したのか、動きにキレが無くなって来ている様だ。

（そうか、この空間を維持出来るのはそう長い時間じゃねえんだな？　自分に有利でも有るが、消耗が激しい両刃の剣って訳か！）

かなりまずい状況だったが、相手の消耗に気付いたゼロは反撃に移るべく、ネクサスに向けて上昇を開始した。

こちらもあまり時間は残っていない。

封鎖領域内でも戦闘は続いていた。領域内の暗い空をぶつかり合う６つの光。

戦況はフェイト達が不利であった。

離れたビルの屋上で、ユーノが作った回復防御の結界の中、戦いを見守っていたなのはは、徐々に追い詰められて行くフェイト達を見て焦っていた。

「助けなきゃ…私がみんなを…」

ダメージを負った体に鞭打って、なのはは結界の外に歩き出す。

そんなのはの思いに応え、『レイジング・ハート』がボロボロの

状態にもかかわらず砲撃モードに変形し、

《Ｌｅｔ．ｓ　ｓｈｏｏｔ　ｉｔ．Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ》（撃って下さいスターライト・ブレイカーを）

「そんな…無理だよそんな状態じゃ…あんな負担の架かる魔法レイジング・ハートが壊れちゃうよ！」

《Ｉｂｅｌｉｅｖｅ　ｍａｓｔｅｒ．Ｔｒｕｓｔｍｅ　ｍｙｍａｓｔｅｒ．》（私はあなたを信じています。だから私を信じて下さい）

なのはの心配にレイジング・ハートは励ます様に応えた。

なのははレイジング・ハートの信頼に目頭が熱くなるが、目を閉じると覚悟を決めた。

「レイジング・ハートが私を信じてくれるなら…私も信じるよ…」

なのははレイジング・ハートを構えた。前面に桜色の魔法陣が展開される。

なのは最大の砲撃魔法『スターライト・ブレイカー』の態勢。

スターライト・ブレイカーには追加効果で、結界破壊が可能なのだ。

なのははフェイト達に、結界破壊と同時に脱出する様念話を送る。
その体で大丈夫か？と心配するフェイト達に任せてと返事をし、砲撃に精神を集中する。

なのはの周りに膨大な魔力が集中して行く。周囲の残存魔力をもかき集めて放つその威力は絶大だ。

レイジング・ハートの途切れ途切れながらのカウントが響く。

その魔力の高まりにシグナム達も気付いた。
一瞬気を取られたシグナムにフェイトが鋭い一撃を入れる。間一髪で避けるシグナム。

ヴィータも桜色の魔法陣を見るが、邪魔はさせないとばかりにユーノが立ちふさがった。

（こいつは都合がいいぜ、この魔力なら封鎖領域をぶっ壊せる）

ヴィータはそう思い、なのはがレイジング・ハートを振り下ろそうとした瞬間だった。

「ああっ！？」

なのはの動きがびくりと停まる。その胸から人の手が生えていた。

緑系の服の裾が見える。

シャマルの『旅の鏡』空間を繋げて離れた相手を攻撃する能力だ。

その手の中に光る物体が見える。なのはの『リンカーコア』だ。

その光が徐々に小さくなって行く、『蒐集』されているのだ。

「止めろシャマル！約束を忘れたのかよっ！！」

訳が判らず固まっていて出遅れたフェイト達よりも、ヴィータが一瞬早く動いた。

加速して、なのはに一気に近寄ると、その胸から生えている手を掴むが、

「うわあっ！？」

不可視の力を受け跳ね飛ばされてしまうヴィータ。

その手はびくりとした様にリンカーコアを掴んでいた手を引っ込めてしまった。

「何これ？『闇の書』のページが勝手に増えて行く！？」

封鎖領域の外で解析を急いでいたシャマルは驚いて声を上げた。

小脇に抱えていた『闇の書』が突然起動し、その真っ白なページがひとりでに埋まって行く。

「そ…そんな馬鹿な事が…」

シャマルは宙に浮かぶ『闇の書』を見て驚愕に身を震わせた。

魔力を吸われたなのははそれでも砲撃魔法の態勢を止めず、最後の力を振り絞ってレイジング・ハートを振り下ろした。

「スターライト・ブレイカぁぁぁっ！！」

桜色の巨大な凄まじい砲撃が闇夜を明るく染め上げた。

ゼロのカラータイマーと、ネクサスのコア・ゲージが赤く点滅する。

互いに消耗している様だ。しかし今の状況では確実にゼロの方が先にエネルギーが無くなりそうだった。

（くそったれえっ！！）

焦るゼロの周りの空間が、不意に金色の光を放ち始めた。メタ・フィールドが解除され始めたのだ。

《貴様、何のつもりだ！？》

ゼロは宙に浮かぶネクサスに問う。消失して行くメタ・フィールドの中ネクサスは、

《君の仲間の作った結界は破壊された、これでみんな脱出出来る…
こちらは怪我人が居るから今日の所は退く、君も街中で暴れる程堕ちてはいないだろ…？》

《ちいっ…》

舌打ちするゼロの前でネクサスの姿が朧気になって行く。

《このまま人を襲い続けるのなら、次に会う時は容赦はしない…！》

そう言い残すと、その巨体は幻の様に姿を消した。

スターライト・ブレイカーで全ての魔力を使い果たしたなのはは、コンクリートにバタリと倒れ込んだ。

その脇で跳ね飛ばされていたヴィータは立ち上がる。

気配を感じて上を見上げると、金色の光が解ける様に消え、ゼロの巨体が姿を現した。

（ゼロ無事だったか…）

ヴィータはホッと胸を撫で下ろす。そこにシグナムから全員に念話が届いた。

《結界が壊れた、脱出するぞ！》

その言葉を合図に、ゼロ達は一斉にその場所を離脱する。

結界が壊れた瞬間、『アースラ』に状況の映像が入って来ていた。

「何故ウルトラマンゼロが！？」

「えっ？何？どういう状況？」

通信ルームで事態を見守っていたクロノと、サーチを行っていたエ

イミィの困惑した声が響く。

「こいつら…」

映し出されたシグナム達の顔を見てクロノが声を漏らす。そして転移して行くシャマルの抱えている『闇の書』を見た。

「あれはっ！！」

クロノの表情が変わる。その間にエイミィは必死で追跡を掛けるが、反応をロストしてしまった。

「ごめん…クロノ君、しくじった…」

エイミィが済まなそうにガックリと顔を伏せる。
済まなさで一杯だった彼女は、黙ったままのクロノに違和感を感じ、顔を上げた。
クロノは食い入る様にモニターを見つめ、

「第一級捜索遺失物…ロストロギア『闇の書』…」

クロノは拳を震える程に握り締めていた。

つづく

第３６話　激戦ーフェースファイティングー（後書き）

メタ・フィールドに他のウルトラマンが入った事が無いので、あえてこの様に書いてみました。

まあ…ネクサスが自分以外の者には消耗する様に調整したという設定です。

それでは軽く展開予告などを。

ビーストの影を追って、それぞれ別々に動くゼロ達八神家と、孤門達。

闇に潜む影とは？そして姿を現す悪魔の名を持つ巨人達、ゼロ達はどう立ち向かうのか！？

それでは次回お会いしましょう。

第37話　予兆ープロフェシーー（前書き）

遅くなりました。第37話です。

第37話　予兆ープロフェシーー

封鎖領域から脱出したゼロ達は、管理局に追跡されないように一旦バラバラに散る。

追跡を巧みに逃れ、何時も集合場所にしているビルの屋上に、無事全員が集まっていた。

みんな深刻な表情だ。無理も無い、何者かに嵌められまんまと管理局と敵対する羽目になってしまったからだ。

何事も無ければ、誰1人襲う事無く『蒐集』を終えられる筈だったというのに…

ゼロ達はシャマルが開いた『闇の書』をまじまじと見つめた。

ヴィータが途中で邪魔をしたお陰で、１０頁程ではあるが確かに頁が埋まっている。なのはから『蒐集』された魔力だ。

「…それでシャマル、その時『闇の書』が『蒐集』もしていないにも係わらず、勝手に頁を埋め始めたのだな…？」

「…まるで何処からか、魔力が転送されたみたいだったわ…」

シグナムの質問にシャマルは困惑顔で答えた。

「魔法だと割と有る事なのか？」

ゼロの疑問にシグナムが首を横に振る。

「そう簡単にやり取り出来るものでは無いというより…まずあり得ん事だ、一体どうなっている…？」

シグナムは眉をひそめてシャマルの持つ『闇の書』を見つめるしか無い。

『闇の書』は魔力蓄積型の大型ストレージデバイスだ。

様々な魔力を集める事は出来るが、他から魔力を転送出来る機能など無い筈なのだ。

第一そんな機能が有ったら『蒐集』など必要なくなってしまう。

頭を捻るヴォルケンリッター一同の中ヴィータが、

「でもさあ…最初はシャマルが血迷って、高町なんとかから『蒐集』したのかと思った…」

「…そうね…話を聞く限り、私の『旅の鏡』とまったく同じ能力ね…』

薄気味悪そうに身を竦めるシャマル。

既に失われた技術で生み出された彼女達の使用魔法と、同じ魔法を使う敵の存在…困惑気味のヴォルケンリッターである。

ゼロはそんな全員を見回し、

「…催眠波動での撹乱に、もう一つあの巨人『ネクサス』が言ってやがった…魔導師が襲われていて、その犯人が俺達だと…」

「そんな馬鹿なっ！アタシらが魔導師を襲っただと？どういう事なんだ？」

血相を変えるヴィータ。シグナムは暫く考え込んでいたが、何か思い付いた顔をする。

「状況から判断すると…我らと同じ力を持った連中が存在していて、魔導師を襲っている可能性が有るという事か…？我らをその犯人に仕立て上げる目的で…」

「そういえば最近妙に、管理局のパトロールが厳しいと思ってたのよ…管理外世界で鉢合わせになりそうになった事も有ったわ」

シャマルが以前ゼロと『蒐集』に出た時の事を思い出し、その考えに頷いた。

「ちきしょう！一体何処のどいつがそんな事をやってるんだ!?せっかくいい調子でここまでやって来たのに!!」

ヴィータは偽物だったらしいなのはの言葉を思い出して、怒りの表情を浮かべる。

（何がアタシらに幸せになる資格が無いだよ！そんなに大それた事なのかよ、みんなで仲良く暮らす事が？夢見ちゃ悪いのかよっ!?）

憤りをぶつける様にフェンスを殴りつけた。ガシャンッと乾いた音が辺りに木霊する。

「落ち着けヴィータ…」

シグナムがたしなめるが、ヴィータは怒りが収まらない様で、

「これが落ち着いてられっかよ！お陰で管理局に見つかった『蒐集』だって今までみたいに行かなくなる！！」

更に激興するヴィータの頭に、ゼロの手がポンと置かれた。

「なっ？」

「…大丈夫だヴィータ…簡単な事じゃねえかよ…」

ヴィータはゼロの低く押し殺した声にハッとして顔を上げた。
ゼロはその顔に獰猛な笑みを浮かべ、

「…何処のクソ野郎か知らねえが…ぶっ飛ばしてふん捕まえて、管理局に突き出してやれば済む事じゃねえかよ…！」

言い方はおどけていたが、凄まじいばかりの怒りと哀しさの籠もっている声だった。

「…うん、分かった…」

それを感じたヴィータは素直に頷く。ゼロが一番きついのだという事に思い当たったのだ。

ヴィータ達が戦ったなのは達とゼロは、共に戦った事が有る者ばかりだという事に。

態度や口は悪いが、根が優しい彼にはとても辛いのだろう…

しかしゼロは、何でも無いようにヴィータに笑い掛け、

「細かい話は後にして今日は帰ろうぜ、はやてが美味い鍋を用意して待ってる。遅いと心配するぞっ」

そう言ってヴィータの頭をポムポム叩いた。

「そうだな、はやてが心配するから、早く帰ろうぜ」

ようやくヴィータの顔に笑顔が浮かんだ。

はやての待つ自宅へと向かいながら、ゼロはヴィータと他愛の無い話しをしていた。しかし話しながらも、嵌めた犯人の事を考えてしまう。

《ゼロはどう思う…？》

そんなゼロにシグナムが念話で話し掛けて来る。ゼロもテレパシーで、

《前に何度か、怪獣をけしかけて来た奴かとも思ったんだがな…》

《ゼロは違うと思うのか？》

《分からねえが…どうもやり口が違う気がする…》

《どう違うと思うのだ？》

《…上手く言えねえんだが…前の奴はやり口に遊び半分って感じがしたもんだが、今回は全部計算尽くの気がする…》

《ゼロもそう思うか…》

ゼロの後ろを歩きながらシグナムは眉をひそめた。

そろそろ八神家が見え来た。小走りになるヴィータを追い掛けながらゼロは、

（奴じゃ無いとすると…一体誰が俺達を嵌めたんだ？）

家の灯りにホッとしながらも、その疑問が頭から離れなかった。

ＰＭ８：４５　時空管理局本局

倒れたなのはは『アースラ』医療班に搬送され、本局の医療施設に収容されていた。

検査の結果、かすり傷程度の傷と魔力ダメージの後遺症が少しに、魔導師の魔力の源『リンカーコア』が幾らか小さくなっているとの事だった。

命に別状は無く、なのはは直ぐに目を覚ます事が出来た。

リンカーコアのダメージも直ぐに元通りになるそうで、早々に退院したなのはは、フェイトやユーノ、アルフにクロノと改めて挨拶を交わしていた。

なのはもフェイトも怪我は大した事は無かったのだが、代わりに『レイジング・ハート』と『バルディッシュ』が大破してしまい、修理には時間がかかるとの事だった。

シグナム達の使用魔法を見たことが無かったフェイト達に、クロノとユーノとで説明をしていた時、ドアが開いて孤門が部屋に入って来た。

「みんな大丈夫だったかい？」

「うん…なのはも大した事は無いって…私達もかすり傷程度だよ…」

「それは良かった…」

フェイト達の無事が分かり、孤門は安堵の表情を浮かべた。
フェイトはなのはの方を向くと、

「前にビデオメールでも話した孤門だよ…」

なのはは思い当たって、ああっという顔をする。ぴょこんと頭を下げ、

「高町なのはです。助けに来て貰ってありがとうございます」

「孤門一輝だよ、よろしくね、なのはちゃん」

孤門は笑顔で右手を差し出す。なのはも顔を上げ、その手を握った。
なのはは興味深そうに孤門を見つめ、

「孤門さんもウルトラマンなんですか…？」

疑問に思っていた事を聞く。ネクサスのテレパシーは、なのはにも届いていたので、当然巨人が孤門と名乗ったのも知っている。

「…孤門の変身した姿を見たんじゃ仕方ないな…」

クロノが仕方ないという表情をする。ユーノは驚いて、

「えっ？じゃあクロノは孤門さんの力の事知ってたのか？」

「ああ…最重要機密だから、アースラでは艦長と僕にしか知らされていないけどね…こうなっては全員に話しておいた方がいいだろう…」

クロノの言葉に孤門は頷くと、全員を見渡し、

「僕は別の世界から来た『次元漂流者』だ。ウルトラマンゼロとも違う世界から来た、光を受け継いだ人間なんだ」

孤門の言葉に驚いたユーノは、

「えっ？それって、孤門さんは宇宙人じゃ無いって事ですか？」

「そうだよ…僕は宇宙人じゃ無い、光を受け継いだ、普通の人間だよ…」

驚く一同。生まれついての宇宙人と言われれば、ゼロはそういう生命体だとまだ納得も出来る。

しかし普通の人間をあんな巨人に変える力など魔法の世界でも聞いた事が無い。

「ウルトラマンゼロは僕に任せて貰うよ…彼を止められるのは僕だけだろう…」

厳しい表情の孤門に、フェイトとなのはは慌てて、

「何かの間違いだよ孤門…！」

「そうですよっ、ウルトラマンさんが悪い事する筈が無いです！」

見たものがまだ信じられない2人は、必死でゼロを庇うが、今まで黙っていたクロノが口を開いた。

「残念だが…これで今までの魔導師襲撃事件にウルトラマンゼロが関わっている事がはっきりしてしまった…」

「どういう事クロノ？魔導師襲撃事件？」

フェイトは詰め寄るが、クロノはやり切れない表情をし、

「…今までに様々な世界で魔導師が襲われる事件が起こっているんだ…目撃情報から、あの連中と一緒にウルトラマンゼロらしき人物が確認されている…」

「…そんな…ゼロさんが他でも人を襲っていたなんて…」

「…最初ははっきりとした証拠が無かったから、伏せていたんだが…今回の件ではっきりしてしまった…この半年の間に彼に何が有ったのか…？」

クロノの沈痛な言葉に、青くなるフェイトだが、嫌な笑みを浮かべるシグナム達の事を思い出し、

「…ゼロさん言ってた…仕方ないんだって…とても辛そうだった…あの人達に騙されているか、脅されてるかしてるんだ…！」

フェイトの目には決意の光が宿っていた。今度は私がゼロさんを助けると、密かに心の中で決心する。

（…でも…あの人達とどういう関係なんだろう…？）

シグナム達と一緒に居るゼロを想像して、心の中がざわめくフェイトだった。

なのはは思い詰めた様子のフェイトを心配そうに見る。

話を聞く限り、フェイトちゃんにはキツいんだな…と思い心が痛く

なった。

そんな2人に気分を変える様にクロノが、

「今はあれこれ悩んだも仕方ない、彼なら話せば判ってくれる筈だ…次に会った時に、説得してみよう」

クロノの言葉に全員が頷いた。此処に居る全員はゼロに助けられた事の有る者ばかりだ、思いは同じである。

落ち込んでいても、彼の助けにはならないと思い直した様だ。

クロノはその様子を見てホッと一息吐くと、

「フェイトそろそろ面接の時間だ」

「あっ…」

フェイトは思い出したらしく、声を洩らした。なのはは何の事か判らず、首を傾げる。

「なのは…君もちょっといいか?それに孤門も…」

「？」

なのははきょとんとした顔で、歩き出すクロノの背中を見た。

クロノ、フェイト、なのは、孤門の４人は、広々とした応接室にて、ある人物と対面していた。

管理局の蒼い制服に身を包み、整えられた髭を生やした、落ち着いた雰囲気の初老の男性、管理局顧問官『ギル・グレアム』提督である。

歴戦の勇士であり、艦隊指揮官に執務官長まで勤めた程の人物で、その権限は本局内でも大きい。

今回裁判が終了したフェイトの保護観察官になったのだ。

「久しぶりだなクロノ…孤門もアースラには慣れかね？」

グレアムはまずクロノと孤門に気さくに声を掛けた。

「ご無沙汰しています」

「何とか…足手まといにならない様にしています」

挨拶をする2人を不思議そうに見るフェイトとなのはに、クロノが説明してくれる。

「グレアム提督は僕の指導教官だった人なんだ、それに孤門をアースラに乗れる様に口利きをしてくれたのも提督だよ」

「此処に来てから、グレアム提督には何かとお世話になったんだ」

孤門も提督との付き合いが有った事を説明する。
意外な事に、なのはと同じ世界のイギリス出身であるという。

フェイトとなのはの目には、グレアムはとても感じの良い人物に見えた。

勿論歴戦の勇士だった人物だ、感じのいいだけの人間では無いのだろうが、そんな様子はおくびにも出さず、表面上は至って穏やかな印象の人物だった。

保護観察官として、フェイトに出した条件は、

「約束して欲しい事は一つだけだ…友達や、自分を信頼してくれる人の事は決して裏切ってはいけない…それが出来るなら、君の行動について何も制限しない事を約束するよ…約束出来るかね？」

「はいっ、必ず…」

「うん…いい返事だ」

フェイトの強い意思を込めた返事に、グレアムは満足して目を細めた。

孤門を除いた3人は挨拶して部屋を出る。

孤門は久々に会ったグレアムと話が有るそうなので少し残るそうだ。

部屋を出ようとしたクロノは、振り向いてグレアムを見ると、

「提督…もうお聞き及びかもしれませんが…先程自分達がロストロギア『闇の書』の捜索捜査担当に決定しました…」

「そうか…君がか…言えた義理では無いかもしれんが…無理はするなよ…」

グレアムは、心からクロノを案じる目ををする。
クロノは安心させる様に言葉を返すと、挨拶をして部屋を出て行った。

グレアムはしばらくの間、クロノが出て行ったドアを凝視していた。

「クロノ君は『闇の書』と何か有ったんですか…？」

孤門は気になっていた事を聞く。この件があってからクロノが思い詰めた様子をしているのを感じていたからだ。

グレアムは下を向いて、悔やむ様な表情をし、

「彼の父親は『闇の書』の犠牲者なのだよ…私が無能だったせいも有るが…」

「そんな事が…それで…」

孤門はグレアムの言葉に深い後悔の念を感じ、痛ましい表情になった。

グレアムは振り払う様に顔を上げると、

「それよりも…そちらはどうなっている？」

「こちらはまだ分からないですが…ウルトラマンゼロがあそこまで非常手段に出るとは思いませんでした…それに彼は強敵です…」

孤門は動かし辛そうに腕を上げ、裾を捲り上げる。その腕に無数の痣が刻まれていた。

「確かに予想外だった…体は大丈夫かね…？」

「はい…」

孤門は笑って答えた。
それから2人は小1時間程内密の話しをする。
相談を終えた孤門は最後に頭を下げると、

「提督には感謝しています…僕に力を貸して頂いて…」

グレアムは首をゆっくりと横に降り、

「こんな私でも、少しでも君の役に立てるならお安いものだよ…何しろ世界の命運が掛かっているのだろう…？」

「はい…ありがとうございます…『冥王』の好きにはさせませんし、クロノ君達も僕が必ず守り抜きます！」

孤門は力強く誓うと部屋を出て行った。それを見送るグレアムに、念話が届いていた。

彼は相手に返事をすると、最後に念を押す様に付け加える。

「孤門にも絶対に気付かれるなよ…」

グレアムの温和だった表情が厳しいものになっていた。

同日同時刻、八神家

素知らぬ顔で帰って来たゼロ達は遅い夕食を終え、リビングでくつろいでいる所だった。

ヴィータははやてのスペシャルな鍋で、残りの凹んだ気持ちが大分晴れたらしく、はやてとザフィーラとで楽しそうにテレビを見ている。

残りの後片付けをゼロに任せて、シャマルがはやてとヴィータに、

「はやてちゃんお風呂の支度出来ましたよ」

「うん、ありがとう」

「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいましょうね」

「はーいっ」

ヴィータはテレビを名残惜しそうにしながも返事をする。

「明日は朝から病院です…あまり夜更かしされませんよう…」

ソファーでお父さんよろしく、新聞を読んでいたシグナムが、はやてのクセになっている夜更かしを注意する。

「はーい」

こんなやり取りも楽しいはやては笑って返事をした。
よいしょっと、はやてを抱きかかえたシャマルは、

「シグナムはお風呂どうします？

「私は今夜はいい…明日の朝にするよ…」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

ヴィータが意外そうな顔をする。シグナムは澄ました顔で、

「たまにはそういう日も有るさ…」

彼女はフッと微かに笑みを浮かべた。

はやて達が風呂場に行った後、ザフィーラがシグナムの元にのっそりと歩いて来た。

「…今日の戦闘か…？」

「…聡いな…その通りだ」

シグナムはそう言うと、服を捲り上げる。
チラリと覗く黒のブラジャーの下辺りから白い腹部にかけ、斜め一直線に刻まれた赤黒い痣が有った。
フェイトが隙を突いて一矢報いた証だった。

「お前の鎧を打ち抜いたか…」

ザフィーラの声に感心した響きが有る。シグナムはフェイトの攻撃を思い出し、

「一途な太刀筋だった…以前とは比べものにならない程腕を上げて

いた…余程ゼロを助けたかったのも有るだろうが…良い師に学んだのだろう…」

余韻に浸りながら、服を元通りにしようとした時だ。

「おうっ、これは見事にやられたな…」

「!?」

シグナムは思わず飛び上がる所だった。
いつの間に現れたのか、後片付けを終えたゼロがしゃがみ込んで、シグナムの痣が刻まれた肌をまじまじと眺めていたからである。

「おおおお前は、なな何をしているのだっ！」

湯気が出そうな程顔を真っ赤にしたシグナムは、慌てて捲った服を戻そうとするが、ゼロに服を掴まれてしまった。

「メディカルパワーを当ててやるから、ちょっとじっとしてろ、治りが早くなる」

「いいっ！こんな傷は直ぐ治る、離せゼロ…！」

「何言ってやがる。痕が残ったらどーすんだ、お肌は女の命ってテレビで言ってたぞ」

要らん知識だけは増えて行くゼロである。
シグナムは抵抗しようとするが、端から見るととっても怪しいこの体勢ではどうしようも無く、結局押し切られてしまった。

ゼロはシグナムの引き締まった、雪の様に白いお腹に手を当て、生体エネルギーを送り込む。

「どーしたシグナム？何か震えてるぞ、風邪か…？」

「な…何でも無い…！」

シグナムは必死で何でも無い様に振る舞うが、あまり成功していない。
恥ずかしそうに身を固くして、プルプル震えて、されるがままになっているしか無い。

ザフィーラはさり気なく視線を逸らして、烈火の将のプライドを守る事にしたのだった。

ようやく解放されたシグナムはまだ顔が赤い。ゼロを恨みがましそうに見てぶつぶつ「この朴念仁が…」とか何とか呟いている。

治療を終え、立ち上がったゼロは満足げだ。しかしその様子を見てザフィーラが、

「…そういうゼロも、後でシャマルに看て貰え…お前が一番辛そうだぞ…」

「ちえっ、バレちまったか…」

ゼロはイタズラを見つかった子供の様に肩をすくめ、さり気なくこの場を離れようとする。

「見せてみろ…！」

何とか平静を取り繕ったシグナムが、お返しとばかりに、逃げようとするゼロの服をむんずと掴んだ。目がちょっと怖い…

結局ゼロも押し切られる形で仕方無く、シャツを脱いで見せる。

全身痣だらけであった。背中一面に叩きつけられた後が痣となって

残っている。

更に腹部に拳の形をした痣が何カ所もくっきり残り、内出血していた。ネクサスの猛攻の跡である。

「…これは酷いな…」

「…お前がこれほど痛め付けられるとはな…」

シグナムもザフィーラも、ゼロの体から熾烈な戦闘を読み取り、表情を固くした。

「アイツ…ネクサスの強さは半端じゃねえ…あの特殊空間の中だと更にやばい…くそったれ！」

ゼロは悔しそうに吐き捨てると寒そうに服を着る。ほぼ負けに近い戦いだった。

負けん気の強いゼロの事だ、悔しくて仕方ないのだろう。

「次は必ずぶっ飛ばしてやる！！」

闘志を剥き出しにして、拳を握るゼロにシグナムは呆れて、

「倒してどうする…」

「うっ…そうだった…」

これでムキになってネクサスと戦ったら、多分犯人の思う壺である。
ゼロは思い止まるしか無い。

とりあえず深呼吸して、気を落ち着けたゼロは、ドスンと床に胡座をかくと真剣な表情をして2人を見る。

「まあ…奴へのお返しは諦めるとしてだ…気になる事が有る…」

「気になる事…？」

ゼロの様子にシグナムとザフィーラは身を乗り出した。

「あれだけの強力な催眠波動…使える奴に心当たりが有る…そいつが海鳴市に潜んでるとするとヤバい…！」

「詳しく話してくれ…」

シグナムは話の先を促した。

その頃、正式に『闇の書』の捜索捜査担当になったリンディ以下アースラ、ブリッジクルーは、休憩所に集合していた。

その中にはフェイト、なのはとユーノにアルフ、孤門の姿も見える。

アースラにこの話が来た理由の一つは孤門の存在だろう。『闇の書』にウルトラマンゼロが関わっていると思われる以上、ゼロに対抗出来るのは彼しか居ない。

一同はこれからの方針をリンディから聞いている所だ。

解析の結果、なのはの住んでいる世界が中心なのは間違い無いと判断された。

しかしアースラが整備中で暫く使えない上に、本局から転送ポートを使うには遠すぎる為、なのはの住む世界に臨時作戦本部を3ヶ所設け、其処を拠点に捜査する事が決まった。

「ちなみに司令部はなのはさんの保護を兼ねて、なのはさんのお家の直ぐ近所になりま～す」

リンディは努めて明るく振る舞い、暗くなりがちなフェイト達を元気付ける為に笑顔で、司令部の場所を発表する。

さすがにフェイトも、なのはと顔を見合わせて笑顔を浮かべた。

そんな中孤門は、内ポケットからそっと『エボルトラスター』を取り出し、

（向こうに着いたら、一度調べてみた方がいいな…）

と呟いた。エボルトラスターがゼロとの戦闘前に一瞬反応した気がして、ずっと気になっていたのだ。

孤門はエボルトラスターを戻し、久々に笑顔を見せるフェイト達を後に、ひっそりと席を立った。

つづく

第37話　予兆ープロフェシーー（後書き）

やっとこさグレアム登場です。
此処まで来るのが長かった…

さて強力な催眠波動を使う敵とは？

それでは次回お会いしましょう。

第３８話　追跡ートラッキングー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
最近遅れ気味で申し訳ありません。

それでは第３８話です。

第３８話　追跡ートラッキングー

「えっ？海鳴市の何処かに『スペースビースト』ゆう怪獣が潜んでるやて？」

ネクサスとの戦いから一夜明けた次の日の早朝、朝食を終えたはやては驚いて声を上げた。

今ゼロが、病院へ行く前の時間潰しにテレビを見ていたはやてに話をした所である。

開き直って『蒐集』の事や『管理局』と敵対してしまった事を話した訳では無論無い。

この海鳴市に、怪獣が潜んでいる可能性が有ると話しただけである。

あの後シグナム達と話し合った結果、それなら『蒐集』の件は伏せ、ビーストの事のみはやてに話しておいた方が良いと結論したのだ。

これ以上隠し事をすると、怪しまれる可能性も有り、ならいっその事そちらは話しておいた方が『蒐集』も誤魔化し易い。

管理局に追われる今、心配をかけない様に黙って『蒐集』を始めていて良かったと思うゼロ達である。

「それでゼロ兄、その怪獣はどんな奴なんや…？」

はやてが興味深そうに聞いて来る。今日はこれから病院なのだが、それどころでは無いと思った。

「多分…『ガルベロス』って奴だと思う…こいつは別の世界から来た怪獣らしいんだが…特徴は強力な催眠波動と、人間を喰うって事だ…一度倒した事があるんだが、別の同族かもしれねえ…」

「ひ…人食い怪獣なんか…」

はやての顔色が青ざめる。ゼロは頷き、

「ああ…何でも正確には知的生命体の恐怖の感情を喰うらしいが、俺の居た世界でも余り詳しくは判ってねえんだ…」

「…ほんなら…早いとこ見つけんと、えらい事になるんやな…」

「何でか奴は暴れもしないで、何処かに隠れているらしいんだが、どうやって探したらいいのか分からねえんだ…」

ゼロは悔しそうに眉をしかめる。彼の超感覚でも、ガルベロスの途絶えた波動の反応を追えなかった。

ネクサスの居た世界では、孤門の持つ『エボルトラスター』の他に、ビースト振動波と呼ばれるスペースビースト特有の反応を追えるセンサーを防衛組織ＴＬＴが持っていた。

しかしビースト出現数が少ないゼロの居た世界では、そこまで細かい事は分かっておらず、当然ゼロも知らない。

はやては額に指を当てて少し考え込む、何か考える時の彼女のクセである。

必死で考えるはやて。つい一年以上前まで、自分は何の役にも立たない、要らない人間なのでは…？などと考えてしまう日々を送って来た。

病院で先生達や看護師の人と話す以外、殆ど人と接する機会の無い日々…

夜１人静まり返った家の中で、このまま誰にも必要とされず、たった１人で死んで行くのだろうな…などとぼんやりと思っていたものだ。

しかしゼロやみんながやって来てから、こんな自分にも誰かの役に立てるのかもしれない、と思う事が出来た。

それは何だか、とても嬉しい事だった。

だからはやては全力で最善と思われる方法を考える。少しでもゼロの力になって誰かを助けられたら、という想いを胸に…

「なあゼロ兄…その波動の特徴みたいなのは覚えてるんよね…？」

「ああ…それは覚えてるが…」

はやては満足げに頷くと、隣で不安げな表情でソファーに座るシャマルに、

「シャマルの力で判らんの？」

シャマルは申し訳なさそうな顔をし、

「私の探索能力は基本的に魔力探査用なので…すいません、せめてその波長みたいなものが私に判ればいいんですが…」

「しゃあないよ…う～ん…」

再び考え込むはやてだが、不意に顔を上げ、

「ゼロ兄は前に自分をデータ化して、役所とかのサーバーに侵入して、自分と、みんなの戸籍作ったんよね？」

「ああっ…そうだが…？」

ちなみにシグナム達が八神家に来た後に、再び官公庁のデータベースに侵入して全員の戸籍も作ったゼロである。

一見ゼロ偽造なんて、能力使いまくりだな…と思われるかもしれないが、おそらく人間に変身していた、セブン、レオ、８０達はみんな似たような事をやっていたと思われる。

「ほんならゼロ兄の力で、シャマルのクラール・ヴィントにガルベロスの波動データを入力出来たりせえへん？」

「なる程、それなら出来る筈だ。前にお前に記憶を見せられた時に、大体の構造は分かってる」

ゼロは得たりとばかりに、はやての膝の上の『闇の書』を見て、ポンと手を叩く。

魔法はプログラム方式なので、ゼロも基礎構造が判っていれば、データの転送位は出来る筈である。伊達にウルトラマンでは無いのだ。

そこに思い当たるとは、まったくはやての思考の柔軟さは大したものだと思うゼロである。

ゼロやヴォルケンリッターは、各自の能力に秀でているせいか、な

かなかそういう発想が出ない。

ゼロは、ウルトラマン形態になると、何とか『クラール・ヴィント』へのデータ入力に成功する事が出来た。

シャマルは、起動させた振り子型のクラール・ヴィントの動作を確認しながら、

「バッチリです。なる程…こうなってるんですね、でも…魔法探査みたいに、それ程広範囲という訳にはいかないみたいです…」

「どれくらい行けそうだ？」

変身を解いたゼロの質問に、シャマルは少し考え、

「う～ん…五十キロ圏内なら何とか…」

「それだけ行ければ上等だぜ、すげえなシャマルはっ」

「ええ～っ、そ、そんな事無いわよ～っ」

ゼロが笑顔でシャマルの肩をポンと叩く。彼女は嬉しそうに頬を染めた。

はやても考えが上手く行って嬉しそうだ。

「さすがだ、バッチリ上手く行っただぜ、天才だなはやては！」

ゼロは更にはやての頭をわしゃわしゃ撫でまくった。

「…そ…そないな事無いよ…ゼロ兄誉め過ぎや…」

顔を赤くして、もじもじするはやてにシグナムとヴィータが口々に、

「いいえ…主はやて、あなたにしか思い付きません、自信を持って下さい」

「やっぱ、はやては凄いよなあっ」

みんなの言葉に、はやては照れまくって頭をかいた。

海鳴市の地図を持って来て貰ったはやては、地図をみんなの前に広げ、

「話を聞く限り、陸上の怪獣みたいやし…身長が数十メートルもあるんやったら、隠れる場所も限られてくる思うんやけど…」

真剣な顔で地図に見入るはやて。ゼロ達も地図のあちこちに目をやる。

「ガルベロスの催眠波動は、かなりの広範囲に届くらしいが、それでもあの波動の強さから見ても、海鳴市の外とも考え辛いと思う…」

はやてはゼロの言葉にふむふむと頷くと、地図を指差し、

「長く海鳴に住んどる私としては…やっぱり、この辺の山辺りが一番怪しいと思うわ」

其処は海鳴市の温泉郷近くの山で、特に温泉が出るでも無く、険しい森のせいで登山客もあまり寄り付かない場所であった。

「この辺か…」

ゼロは食い入る様にその箇所を見つめるのだった。

その頃、リンディ以下の『アースラ』のクルー達は、海鳴市への引っ越しを終え、早速『闇の書』の探索準備に取り掛かり始めた所であった。

フェイトはリンディの計らいで、なのはと同じ小学校に通う事になり、頬を染めてリンディにお礼を言ったものである。

フェイトにとっては初めての体験ばかりであった。初めての学校生活。こんなに沢山の同い年の子達と過ごすのも初めてだった。

最初は不安も有ったが、なのはの親友アリサとすずかとも直ぐに気が合い、打ち解けた。

なのはの家もとても近く、フェイトにとっては仕事で来ているにも拘わらず、楽しい事ばかりである。

リンディの心遣いも有るのだろう。天涯孤独になった自分への…

それから数日経ったある日、フェイトはなのはと一緒に『本局』での用事を済ませた後、アリサの家に遊びに行っていた。

楽しい時間を過ごしたフェイトは、なのはとの帰り道に、ふとリンディから言われている件を思い出した。

（ウチの子にならない、か…）

リンディの言葉を思い出し、ちょっと物思いに耽り掛けた時、なのはの声が耳に入った。

「フェイトちゃん、あれ孤門さんじゃない…？」

「えっ…？」

なのはの指差す方向を見ると、何かを見ながら歩いている、シャツにジーンズのラフな格好の孤門であった。

孤門だけは別に部屋をとって貰っていて、ここの所顔を会わせていない。

昨日差し入れを持って行った時も留守だった。

「孤門さ～んっ」

「孤門～っ」

なのはとフェイトが手を振ると、孤門はこちらに気付き、笑顔で歩いて来た。

「2人共、今帰りかい？フェイトちゃん…その…学校はどうだい…？」

孤門のちょっと心配そうな質問に、

「うん、とても楽しいよ、なのはの友達も良くしてくれるし…」

「フェイトちゃん、人気者なんですよ～っ」

笑顔の2人を見て、心配は無さそうだなと孤門は思う。
フェイトが今まで学校に通った事が無いと聞いていたからだ。

それにゼロの件で、こちらに来る前は少し元気が無い風だったが、なのはと学校に行けて楽しそうだ。
いい気持ちの切り替えになったのだろう。

「じゃあ…僕はちょっと行く所が有るから…またねフェイトちゃん、なのはちゃん」

孤門はそう言うと、2人の前から立ち去ろうとするが、

「待って孤門、ひょっとしてこの間言ってたビーストの件…？」

「あの怪獣の仲間を探しているんですか？」

心配そうな顔をするフェイトとなのは。
孤門の正体が分かった後、念の為スペースビーストなどの説明は一通り聞いている2人である。孤門は苦笑し、

「…僕の気のせいならいいんだけど…どうしても、この間の事が気になってね…」

「だったら…エイミィに頼めばいいのに…」

不思議そうなフェイトの質問に孤門は、

「どの道『管理局』の機器だとビーストの反応をキャッチ出来ないし、探索班の人達も『闇の書』の捜査で手が離せない、僕もそんなに自信が有る訳じゃ無いから、自分でちょっと探してみようと思ってね…」

孤門の説明に、顔を見合わせたなのはとフェイトは、頷き合うと、

「孤門それなら、私達にも手伝わせて…連絡が来るまで、私達はこちらで待機だから探すの手伝えるよ…」

「お話に聞いてた通りの怪獣が、本当に隠れてたら大変じゃないですか、お手伝いさせて下さい！」

詰め寄る2人に慌てた孤門は手を振って、

「相手はとんでもない怪物なんだよ?それに、なのはちゃんはまだ魔法が使えないし、2人のデバイスだってまだ直ってないんだろ?」

「私は完全復活です。少ししか魔力を吸い取られていなかったから…」

なのはは小さくガッツポーズをとる。それからフェイトと笑ってお

互いを見ると、それぞれ待機状態の『バルディッシュ』と『レイジング・ハート』を取り出した。

「何が起こるか分からないからって…メンテナンススタッフの人が、がんばって治してくれたんだって、ついさっき直ったばかりなんだよ…」

「おまけに新しい機能付きなんです。あの人達と同じ『カートリッジ・システム』っていうのが付いたんです。レイジング・ハートとバルディッシュが自分から付けて欲しいって言い出したんですよ」

どうにも事態に不穏なものを感じたエイミィが、メンテナンススタッフの後輩に頼み込んで、突貫作業で仕上げて貰ったのだ。

後輩は作業終了後、ヘロヘロだったという。

孤門は苦笑して、真剣な目でこちらを見上げるフェイトとなのはを見て、

「…その勢いじゃあ、止めても無理矢理付いて来そうだね…？」

コクコク頷く2人、ビーストの恐ろしさは映像でも、充分に伝わっていた。

それだけに尚更じっとして居られない。生半可な気持ちで言い出し

たのでは無かった。
放って置けば人が襲われる。ゼロの様に、誰かを助けられる人間になりたいと誓った2人には見過ごせなかった。
ゼロが今苦境に居るらしいとあっては、尚更その思いが強い。

「…分かった…まずはリンディさんに話してみて、許可を貰ってからだよ…」

フェイトとなのはの気迫に折れた孤門は承知する事にした。

「直ぐにリンディ提督に話して来るよ…！」

「ちょっと待っていて下さい、先に行ったら駄目なのです！」

司令部にしているマンションに、慌ただしく走る2人を見送りながら孤門は、

（…もし本当にビーストが潜んでいたとしたら…いざという時は2人を守らないと…）

そう固く決意し、エボルトラスターを握り締めるのだった。

その頃、海鳴市の紅葉も終わり、寒々しさも感じられる山あいを歩く、一組の男女の姿が有った。

私服姿のゼロとシャマルである。ちなみにゼロは寒いのか、ばっちり着込んでいるのがちょっと情けない。

この辺りは森も深く、険しい崖や霧も出やすい地形で、人気は殆ど無い。

シャマルはクラール・ヴィントを振り子状の探査形態にし、ガルベロスの波動を読み取ろうとしていた。

ゼロも超感覚を駆使して異常を探る。

『蒐集』も止める訳にもいかないので、そちらはシグナムとヴィータが出掛け、はやての元には念の為ザフィーラが残っている。

ガルベロスの探索はゼロとシャマルとで行っているのだ。

探し始めてから数日が経つが、まだ敵の姿を捉えるまでには至っていない。

さすがに慣れない作業とあって、シャマルも少し疲れた様だ。フウ…と息を吐く彼女を見たゼロは、

「シャマル休憩しようぜ、お茶と弁当をはやてに持たせて貰ったからよ」

そう言うと、背負っていたリュックを下ろし、レジャーシートを広げ、保温ポットを取り出した。

「わあ～っ温かい…生き返るわあ…」

温かい紅茶を味わいながら、シャマルはニコニコする。はやての心が籠もっている気がした。

もう12月に入っているので少し肌寒いのだが、着込めばどうと言う事も無い上、今日は風も無く日も出ているので、過ごしやすい。

怪獣探しなどという物騒ぎな目的で無ければ、季節外れのちょっとしたピクニック気分なのに…などとと、場違いな事を思ってしまうシャマルである。

ゼロもお茶をすすりながら、この辺りの地図を広げ、

「後はあっちの方か…なかなか見つからねえもんだな…」

難しい顔で地図を見るゼロに、シャマルは済まなそうな様子で、

「ごめんなさいゼロ君…私がもっとしっかり探せたならいいんだけど…」

「何言ってんだ…俺は今まで、シャマルに迷惑ばっかりかけて、助けて貰ってばかりじゃねえか…充分助かってる…」

照れくさそうにそっぽを向きながら、ゼロはボソボソ言う。
何かシャマルは嬉しくなってしまった。

「それなら、危なくなったら助けてねっ、私あんまり戦闘能力無いから…」

「おおっ任しとけ、シャマルは必ず守るからよ！」

「うふふ…ありがとうゼロ君、そう言われるとお姉さん張り切っちゃうわよ！」

ゼロの即答に、感激したシャマルは、更に言葉を続けようとした時、

その直ぐ耳元から声がした。

「ゼロ…シャマルは私がフォローする、お前はガルベロスに集中しろ…！」

「シ…シグナムぅっ！いつの間に!?」

シャマルはビックリして、思わず飛び上がった。

いつの間にか私服姿のシグナムがシャマルの真後ろに、ぬお～んと立って、耳元に顔を寄せていたのである。

シャマルは引きつった笑顔を浮かべ、

「あら…シグナム…何時から其処に居たの…？」

「…守ってね…の辺りからだ…全く…騎士にあるまじき言動だぞシャマル…」

シグナムは不機嫌そうな渋い顔で、レジャーシートに正座で座り、ゼロをじろりと見ると、

「ゼロ…私もお茶を貰おう…頼む…」

「おうっ、今日の分の『蒐集』は済んだのか？」

ゼロは屈託が無い。シグナムはため息を吐くと、

「ああ…朝早くから出ていたからな…思ったより早く済んだので、手伝いに来た…ビースト相手だと、私の魔法属性『炎』が一番相性がいいらしいからな…」

ゼロからお茶を受け取ったシグナムは、日本人顔負けのキッチリした姿勢でお茶を飲み干した。ホウ…と小さく息を吐く。

戻って来て、直ぐに休み無しで来てくれたのだろう。

「頁はどれくらい行った？」

ゼロは『蒐集』の進み具合を聞く。

「管理局が捜査を始めたせいで、少し遠くの世界まで出向かねばならないが、もう直ぐ４５０頁になる…」

「後もう少しか…こっちも早いとこガルベロスを倒して、『蒐集』に戻らねえとな…」

頷くシグナムとシャマル。早々に昼食を終えると、再びガルベロス探しを再開した。

そろそろ日も落ちてきた頃、山道もすっかり暗くなり、気温も下がってくる。

昼間は感じなかった闇の気配が辺りを侵食して行く。

不気味さを増す山道をシャマルを先頭に、３人は奥へ奥へと分け入って行った。

辺りを照らすのは、クラール・ヴィントの淡い緑の光だけだ。

足元の枯れ落ち葉を踏む乾いた音が妙に響く。風に揺らぐ木々のこすれ合う音がザワザワと不安を煽った。

しかし…ゼロは不審に思う。１２月とはいえ、極端に生き物の気配がしない事に…

その時だ。先頭でクラール・ヴィントを操作していたシャマルが突

然声を上げた。

「反応有ったわ、この奥よ！」

ゼロとシグナムがクラール・ヴィントを見ると、森の奥を確かに差し示している。3人は頷き合った。

ゼロは『ウルトラゼロアイ』を取り出し、シグナム、シャマルもアームドデバイスを翳す。

「よしっ行くぜ！デュワッ！」

「レヴァンティン！」

「クラール・ヴィントお願い！」

眩い3色の光が辺りを照らし、ゼロはウルトラマン形態に、シグナムとシャマルはそれぞれ騎士甲冑を纏った。

ゼロ達は少し地面から浮き上がり、クラール・ヴィントの差し示す方向に、注意深く低空飛行で進む。

小1時間程進んだ所だろうか、シャマルが前方を見て、

「気を付けて…何かが潜んでいるわ…」

「ああ…俺にも判るぜ、あまりデカくはねえが、かなりの数だ…ガルベロスだけじゃねえって事か…」

「凶々しい気配だな…」

3人は地面に降り立つと、油断無く辺りを見渡す。シャマルを庇う様にゼロとシグナムが前面に出た。

「シグナム、シャマル油断するなよ…」

「承知している…」

「は…はいっ！」

ゼロは左手を前に突き出したレオ拳法の構えをとり、シグナムはレヴァンティンを静眼に構える。シャマルは何時でも魔法障壁を張れる準備を整えた。

薄暗い闇に包まれた森の中に、不気味な声があちこちから聞こえて来る。

まるで死人が闇の中から這い出して来る様なおぞましさであった。

森の中から現れる異形の黒い姿。

体長2メートル程の甲殻類と植物を合わせた様な体に、両手の鋭い蟹を思わせる鋏、スペースビースト『アラクネア』の群れであった。

アラクネア達は赤い目を闇に光らせ、ギチギチと何かを擦り合わせる様な不快音を鳴らしながら、ゼロ達にゆっくりと近付いて来た。

孤門、フェイト、なのはの3人は、『エボル・トラスター』が捉えたとおぼしい反応を追って、人気の無い山の麓に在る廃工場跡に踏み入っていた。

リンディから、至急の呼び出しには直ぐに転移魔法で駆け付ける事を条件に、同行を許可されたフェイトとなのはは、キョロキョロ辺りを見回している。

しかし辺りも暗くなってきたので2人をそろそろ帰そうと孤門が思った時、トラスターが反応を始めた。

孤門はエボル・トラスターを見る、中央のクリスタル部分が淡く光

り出していた。

「やっぱりそうか…微かだけど反応が有る、気を付けてフェイトちゃん、なのはちゃん！」

「うん…！」

「はいっ！」

孤門の警告に、フェイトとなのはは直ぐ様バリアジャケットを纏う。それに伴い、レイジング・ハートとバルディッシュが、新たなる姿を現した。

外見上は以前とあまり変わらない様だが…

孤門も『デュナミスト』の専用武器『ブラストショット』を銃形態にして、油断無く辺りを探る。

その時数発の光弾が、凄まじい勢いで孤門達に襲い掛かった。

「危ない！僕の後ろに来るんだ！！」

孤門は叫ぶが早いが、フェイトとなのはの前に庇う様に立つと、ブラストショットで前面にバリアーを張り巡らす。

轟音と共に光弾がバリアーに命中し、孤門達にも衝撃が伝わる。

「うっ…！」

「きゃあああっ！？」

予期せぬ攻撃に、思わず声を洩らすフェイトとなのは。
外れた光弾が辺りの地面を抉り、土煙が爆発した様に舞った。凄まじい威力だ。

辺りを覆う土煙の中、何者かがこちらに向かって歩いて来る。
態勢を立て直した孤門達の周りの土煙が晴れて行く。

「お…お前はっ！！」

その姿を見た孤門は、驚きの声を上げた。孤門達の前に立つその姿。
３本の鬼の如き角に、血の様な紅に漆黒の体、深い闇を映す無表情な目…

孤門には絶対に忘れられないその姿…闇の巨人の一人『ダークファウスト』であった。

つづく

第３８話　追跡ー トラッキング ー（後書き）

え～っガルベロスですが、ウルトラマンネクサスに何度となく登場したビーストです。

不死身に近く、粉々にされても再生する生命力があります。
外見は犬に酷似した二つの首と、胴体に目の無いイルカの様な頭を持っています。
武器は強靭な四肢と、誘導式の火球です。

小型ビースト、アラクネアは、体長２～１５メートル程の食虫植物型のビーストで、嗅覚と聴覚に優れ、地中を移動する事も出来ます。

何故ゼロがビーストを知っているかと言うと、ある強大な宇宙人により、ギャラクシークライシスなる次元の乱れが引き起こされ、ゼロの居た世界に他の怪獣が現れる様になってしまったからです。

ダークファウストは闇の巨人第１号で、最初のファウストは、孤門の恋人リコを殺害して操り人形にしたもので、放送当時あまりの酷さに涙したものです。

ちなみに今回登場したのはＩＩ（ツゥヴァイ）といった所です。

最近キーワードにフェイトと入れた方がいいのか、真剣に悩む今日この頃、最初は空気の予定だったのに、ここまで目立つとは…

それでは次回お会いしましょう。

第３９話　悪魔ールシフェルー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
寒い日が続きますが、体調に気をつけて下さい。

では第３９話です。

第３９話　悪魔ールシフェルー

ゼロ達の前に現れたスペースビースト『アラクネア』の群れ。
一斉に両手の鋭い鋏を構えると、奇声を上げて襲い掛かって来た。
ゼロが隣でレヴァンティンを構えるシグナムに叫ぶ。

「シグナム奴らはしぶとい、倒す時はお前の炎で細胞を焼き尽くせ！」

「承知…！レヴァンティン、カートリッジロード！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

カートリッジが排出され、魔力を一気に高めたレヴァンティンの刀身が業火と化す。

「退け雑魚共！！」

「参る…！」

ゼロとシグナムは、同時に襲い来るアラクネアの群れに突っ込んだ。
ゼロは額の『ビームランプから『エメリウムスラッシュ』を連続発射する。
闇を照らす青白い光がアラクネア達に炸裂すると、その体が炎に包まれ炭化して崩れ去った。

「はぁぁぁぁぁっ！」

炎の剣と化したレヴァンティンがアラクネア達を切り裂くと、切断面から炎が上がり絶叫を上げて燃え盛り崩れ落ちる。
しかしアラクネア達は怯まない。まるで死を恐れない様子で、地獄の亡者の如くわらわらと押し寄せて来る。
ゼロは動じず黒い群れに向かい、頭部に両手を添えた。

『ディヤアアアッ！！』

『ゼロスラッガー』が勢い良く飛び出し空中で白熱化すると、死の刃と化してアラクネア達を変幻自在に切り裂く。
スラッガーに込められたエネルギーで、ビースト細胞を焼き尽くされ、次々と燃え上がる異形の姿。

戻って来たスラッガーを両手に掴んだゼロに、アラクネア達が鋭い鋏で切りかかって来た。ゼロは攻撃を電光の速さでかわす。

鋭い鋏が周りの大木を大根でも斬るかの如く両断するが、ゼロには掠りもしない。

『オラアッ！！』

逆に次々とゼロスラッガーに斬り裂かれ、燃え上がるアラクネア達。

「やるなゼロ…！」

戦うゼロの姿に高揚したシグナムは戦鬼の笑みを浮かべ、負けじと炎と化したレヴァンティンを振るう。

暗い森の中を炎の剣が舞う。その様は、まるで剣劇でも舞っているかの如く美しい。

死の剣舞を浴びたアラクネア達は切り裂かれ、炎の中に崩れ落ちた。

シャマルは少し後方に位置し、ゼロ達を死角から襲おうとして向かって来る一団に、渦巻き形の魔法障壁『風の護楯』を展開して、アラクネア達を弾き飛ばすが…その顔は必死だ。

元々後方支援が役割のシャマルは戦闘力が高く無いので、これが精一杯な上に、人喰いの化け物と来ては恐怖も増す。

「来ないでえ～っ！」

少し涙目で奮戦する、シャマルの足下の土がいきなり盛り上がった。

「きゃっ！？」

シャマルはバランスを崩し、尻餅を着いてしまった。

「どうしたシャマルっ！！」

「シャマル！」

その声に気付いたゼロとシグナムが振り返った時、地中から突如現れたアラクネアがシャマルに鋏を振り上げ、襲い掛かる所だった。

しかしゼロ達は少しシャマルから離れ過ぎていた。

（しまった！）

ゼロはアラクネアの群れを蹴散らして駆け付け様とした時、突然アラクネアが苦痛の声を上げた。

「きゃあきゃあっ！来ないでええっ！！」

シャマルの前面に暗緑色の丸い楯の様なものが張られていた。
空間をねじ曲げて攻撃する、シャマルの魔法『旅の鏡』である。

シャマルは悲鳴を上げながらも旅の鏡に手を突っ込んで、辺りに何かをポンポン投げ捨てる。

「何だこりゃあ…？」

ゼロは足下に転がった何かに目をやると、肉片というか内臓であった。何かビクビク動いている。

（…こいつはまさか…）

顔を上げたゼロが想像した通り、それはアラクネアの心臓に当たる部分であった。

シャマルは悲鳴を上げながら、旅の鏡でアラクネアの心臓やら内臓

部分を、めちゃくちゃに抜き取っているのである。

アラクネアは耐えきれず、バタリと倒れ込んで動かなくなった。

「あれって、ああいう使い方も出来るのか…えげつねえな…」

向かって来るビーストを切り裂きながらも、顔が引きつるのを感じるゼロ。一度食らった事のある身としては何とも…

同じくレヴァンティンを振るうシグナムが神妙な顔をし、

「…あまりアレに触れないでやってくれ……」

「判った…」

ゼロも神妙にコクリと頷いた。

あらかたのアラクネアは片付いた。シャマルが倒した分の死骸をエ

メリウムスラッシュで焼き払う。

「シグナムもシャマルも怪我は無えか？」

「問題ない…」

「平気よゼロ君」

2人共無傷の様だ。シャマルが尻餅を着いた位である。

「良し…行くぜ、一気に本拠地に殴り込んでやる！」

ゼロの言葉に頷くシグナムとシャマル。3人は更に森の奥へと進む。
その時シャマルがピタリと足を停め、

「催眠波動が来たわ、気を付けて！」

シャマルの注意にゼロとシグナムは頷く。ゼロは平気だが、シャマルとシグナムはそれぞれ対精神攻撃の防御魔法を張り巡らす。

数分程歩いた時であった。突如として辺りに地響きが轟く。何か巨大なものが、暗い森の中を近付いて来る。

「来たなガルベロス！」

ゼロは音の近付いて来る方向に目をやり身構えた。何時でも巨大化出来る態勢を整える。

暗い森の生い茂る原生林の中に三つの光が姿を現した。唸り声の様な声が闇に木霊する。

ゼット～ン…ゼット～ン…

「何だとっ！？」

暗闇を見通すゼロの目にはっきりと映し出されたものは…

特徴的な二本角、目の代わりにブロック状になった眼部、漆黒の鎧の如き胴体に白い蛇腹状の手足、『宇宙恐竜ゼットン』であった。

孤門達の前に姿を現した、紅き死の巨人『ダークファウスト』は歩みを止め、一定の距離を保つ。

人間大のファウストはその漆黒の目を孤門に向ける。フェイトとなのはは、相手の姿を見る孤門の表情が尋常で無い事に気付いた。

「…リコ…リコなのか…？」

孤門は苦しそうに、血を吐かんばかりの様子でそれだけを言う。ファウストは嘲る様に首を振り、

「残念だったな…リコという女は、とうの昔に家族共々殺された挙げ句、闇の巨人にされて死んでいる、お前のせいでな…」

クツクツと嫌な笑い声を発する。孤門は血が出る程唇を噛み締めた。

（…孤門…そんな事が…）

その様子を見たフェイトは、時折見せる孤門の哀しげな表情を思い出す。

少しだけ理由が分かった気がした。きっと沢山辛い目に遭って来たんだなとフェイトは思った。

「私はダークファウストⅡ（ツヴァイ）とでも名乗っておこう、だが私だけでは無いぞ！」

名乗るファウストの後ろに更にもう一つの影が現れる。漆黒の体に血管の様な紅い模様のもう一人の影。

「誰だお前は！？」

叫ぶ孤門にもう一人の影から低い声が漏れる。

「ダーク…ルシフェル…」

孤門が一度も見た事が無い闇の巨人であった。明らかにファウストや『ダークメフィスト』と違う姿をしている。

ウルトラマンのマスクに牙を生やした様な凶暴な顔の左右に、ファウストとメフィストの顔が付いた異形の首。

鋭い鉤爪、ウルトラマンと怪獣を合わせたかの様なおぞましい姿だった。

「第３の闇の巨人か？お前らが出て来たという事は…！」

孤門は闇の巨人2体を睨み付け、エボルトラスターを取り出す。ファウストはクックツと嫌な笑い声を上げ、

「ククク…その通り、今の不完全なお前では、あの御方の足元にも及ばんぞ…！」

フェイトとなのはには、孤門とファウストが何を話しているのか分からなかったが、深い因縁が有るのを感じた。

「それでも奴もお前達も僕が倒す！フェイトちゃん、なのはちゃん離れているんだ！！」

その気迫に呑まれた2人は一旦後ろに退がった。
孤門はエボルトラスターの鞘を外すと、短剣部分を天にかざす。

「うおおおおおおおおっ！！」

孤門の叫びと共に、エボルトラスターの刃の部分が眩く輝いた。思わず目を庇うフェイトとなのは。

薄闇を真昼の様に照らし、光の中からネクサスがその巨体を現す。

フェイトとなのはの前に、数十メートルの銀色の巨人が大地を震わして降り立った。

「ならば、その力見せて貰おう！」

ファウストが叫ぶとそれを合図に、闇の巨人2体の体が闇色の光と共に、ネクサスに匹敵する大きさに巨大化する。

薄闇に包まれる工場跡に3体の巨人が対峙し合う。

「なのは私達も…！」

「うんっ、フェイトちゃん！」

それを見たフェイトとなのはは、孤門に加勢しようと飛び上がった時、地中から何かが飛び出して来た。

「！？」

「きゃあっ！？」

襲い掛かって来る何かを避け、更に上空へと上昇する2人。
それはおぞましい肉色をした不気味な触手であった。
更に地面を砕き、土煙と土砂を巻き上げ、巨大な生物が姿を現す。

「フハハッ、お前達はそいつの相手でもしていて貰おうか！」

ファウストが哄笑する。甲虫の様な巨大な姿、スペースビースト『バグバズン』であった。

『ビーストまで居たのか！！』

焦ったネクサスはバグバズンの方に向かおうとするが、ダークルシフェルが黒い壁となって立ち塞がる。

『退けっ！！』

ネクサスは瞬時に赤い『ジュネッス』に変化すると、ルシフェルに『ジュネッスパンチ』を繰り出した。

しかしルシフェルは唸りを上げて飛ぶジュネッスパンチをその鉤爪の付いた剛腕で弾き飛ばす。

更にその余波でネクサスの体を横殴りに軽々と殴り飛ばした。

『ウオオッ！？』

地響きを立てて工場跡に突っ込むネクサス。赤錆た工場の外壁が粉々に吹っ飛んだ。

（クソッ！！）

しかし直ぐに破片をバラまいて立ち上がり、態勢を立て直す。

（こいつ…恐ろしい程のパワーだ！）

不気味に三つ首を向け、立ち塞がるルシフェルに身構えるネクサス。ファウストの嘲りを含んだ声が跳ぶ。

『お前の相手は私達だ、さあ進化の儀式を始めようか！！』

ダークファウストが両腕をクロスし、天に向かって吼える様に両腕を一気に広げると、周りの空間が白い布に染み込む墨の様に異相空間へと侵食されて行く。

《2人共気を付けるんだ！奴らの戦闘用亜空間『ダークフィールド』だ、空間の歪みで意識を失わないように気を付けて！！》

ネクサスのテレパシーに、バグバズンの触手を避けて飛行していたフェイトとなのはは、全身に防御魔法を張り巡らし、姿勢制御を『バルディッシュ』と『レイジング・ハート』に任せ衝撃に備える。

それとほぼ同時に、3体の巨人にバグバズン、フェイトなのは達の姿は、この世界から跡形も無く姿を消した。

「くっ…？」

「む～っ…？」

異様な光の中を抜けたフェイトとなのはは、自分達が見た事も無い空間に浮かんでいるのを自覚した。

荒れ果てた異形の大地に、異様な光が揺らめく空が広がっている。

「此処は…？」

「孤門さんが言ってたダークフィールド…？」

顔を見合わせる2人の頭に孤門の声が響いた。

《2人共バグバズンがそっちへ行った！気を付けて！》

ハッとして下を見たフェイトとなのはの目に、昆虫の様な羽根を広げてこっちに向かって来るバグバズンの巨体が映った。

バグバズンは地中から空中まで、あらゆる空間で活動する事が可能なのだ。

バグバズンは軋む様な奇声を上げ、両手の鋭い鎌で2人に襲い掛かる。フェイトとなのはは素速く散会してその一撃をかわした。

下を見るとネクサスが、ダークファウストとダークルシフェルの2体と、地響きを立てて戦っているのが見える。

襲い来るダークファウストを弾き飛ばしながら、ネクサスはテレパシーを2人に送る。

《済まないこちらも余裕が無い、バグバズンを頼む！奴の弱点は頭

だ、君達の魔力なら其処を集中攻撃すれば倒せる筈だ。幸いこの空間の中なら肉片をバラまいても、空間の消滅と一緒にビースト細胞も消し去れる！》

《分かったよ孤門、こっちは任せて…！》

《がんばります！》

頷いた2人はデバイスを構えバグバズンに向かう。

孤門、ネクサスにとっても苦渋の決断だった。しかし今はフェイトとなのはにも頑張って貰うしかない。

闇の巨人2体相手ではとても2人を助けに行けなかった。

更にダークフィールドは、ネクサスの『メタフィールド』とは真逆の性質を持つ暗黒時空間だ。

この中ではネクサスの力は弱まり、闇の巨人やスペースビーストは力を増す。エネルギーが無くなる前に片を着けるしか無い。

『シェアッ！！』

ネクサスは『アームド・ネクサス』を発動させ、光の刃『パーティ

クルフェザー』を連続発射する。

しかしファウストとルシフェルは闇色の光の盾『ダークシールド』を張り巡らし光の刃の嵐を防ぐと、巨大な闇の球を作り出しネクサスの頭上に飛ばして来た。

（しまった、これは！）

ネクサスが頭上を見上げた時、二つの闇の球が爆発する様に分散すると、無数の光弾の雨となって一斉に降り注いだ。

闇の巨人の殉滅技『ダーククラスター』である。

『ウオオオオオッ！？』

凄まじい爆発が起こり、ネクサスの姿が爆煙の中に消えた。

「孤門…！！」

「孤門さんっ！？」

爆発の中に消えるネクサスの姿に、声を上げるフェイトとなのはだ

が、そちらに気を取られる間も無く、バグバズンが奇声を上げて２人に襲い掛かって来た。

突如として３人の前に現れたゼットン。ゼロは即座に飛び出した。

「野郎っ！何で此処に居るかは知らねえが、ぶっ潰してやるぜ！！」

飛び出すと同時に一気にその体が４９メートルの巨人と化す。

「ゼロ、気を付けろ…！」

「分かってる！」

シグナムの言葉に相槌を打ち、ゼロの巨体が暗い森を震わせて大地に降り立った。

『ディヤアアアッ！！』

ゼロは先手必勝とばかりに大地を踏み割ってジャンプし、その勢いでゼットンの顔面目掛けて、強烈な飛び蹴りを放つ。

しかしミサイル弾の様な蹴りが当たる寸前に、ゼットンの姿が消えた。

ゼロはバランスを崩す前に体勢を立て直し、森の中に着地すると瞬時に周囲を見渡す。

（ちっ、ゼットンのテレポーテーションか？）

警戒するゼロの後方にゼットンがいきなり姿を現した。

《ゼロ後ろだっ！》

目敏く見つけたシグナムの念話を聞いたゼロは、反射的にその場を飛び退いた。

それとほぼ同時に、ゼットンの口部分にあたる発光器官から発射された、１兆度の火の玉が森に着弾する。

外れた火の玉は森の木々を瞬時に炭化させ、地面を真っ赤にプラズ

マ化させる。

その時距離をとったゼロは、周囲の空間異常に気付いた。周りが異様な光に包まれて行く。

《まずい！これはネクサスの張っていた『メタ・フィールド』だ！シグナム、シャマル敵の戦闘空間に取り込まれるぞ！！》

ゼロのテレパシーがシグナム達に届いた時には、全員が特殊亜空間に引きずり込まれ姿を消していた。

ゼロは異形の大地が広がる異空間の中で1人ポツンと立ち尽くしていた。

《シグナム、シャマル無事かっ！？》

シグナム達もろとも異空間に閉じ込められたのを察したゼロは、慌てて2人に呼び掛ける。直ぐに返事があった。

《こちらは大丈夫だ、問題無い》

《こっちよゼロ君》

念話が届いた方向を見ると、幾らか離れた異形の岩の上に、無事な姿のシグナムとシャマルを見付けた。

ホッとして2人に歩み寄ろうとした時、特有の不気味な唸り声と共に、ゼットンが姿を現す。

『野郎っ！』

迎え撃とうと身構えるゼロ達、その時だ。

『フハハハハッ！！』

突如として野太い笑い声が異形の大地に響いた。

そしてゼットンの背後に闇色の光が輝くと共に、その光が人型をとり黒い巨人が顕現した。

『何者だ貴様っ！？』

ゼロの問いに、骸骨を思わせる姿に血の様にどす黒い紅と闇の黒色の巨人は、静かにゼロを見下ろし、

『ダークメフィスト…闇の巨人の1人にして『冥王』の使いだ…』

『闇の巨人?冥王だと?何だそりゃあ?ともかく貴様らだな、俺達を嵌めたクソ野郎は!?』

相手が何を言っているのかゼロには判らなかったが、くだらない小細工で管理局と争わせ、みんなを悲しませた元凶だという事は直感した。

『散々コケにしてくれた様だな…何が目的かは知らねえが、二万倍にして返してやんぜ!!』

ゼロは怒りを込めてメフィストを指差す。しかし黒い巨人はさも可笑しそうに肩を揺らし、

『ククク…それで俺を管理局にでも引き渡すのか…?』

『そうだ!今なら九割殺し位で許してやるぜ!!』

ゼロは牙を剥かんばかりにメフィストを睨むが、闇の巨人はその無表情な顔に明らかに嘲笑を込め、

『それでお前達は無罪という訳か？甘い甘いぞ…『闇の書』の事はバレてしまっている、お前達は無罪を訴える事も出来ない…考えてもみろ…！』

『何だと！？』

ゼロは反発して怒鳴るが、メフィストは事実を突き付ける。

『出頭などしてぐずぐずしていたら時間切れでマスターの命は尽きてしまう…それに『闇の書』は第一級捜索指定される程の危険物、マスター共々永久封印される可能性が高い、どうだ？それでも名乗り出られるのか？』

『クッ…！』

ゼロは黙るしか無い。止めを刺すかの様なメフィストの言葉が突き刺さる。

『どの道お前達はマスターの命を救う為に、邪魔する者は排除して

進むしか道は残っていないのだ！もう平穏など望むべくも無い！！』

『貴様ぁっ！そこまで計算ずくかあっ！！』

憤るゼロだが、完全に嵌められてどうしようも無い状況に追い込まれたのは確かだった。

『だからって貴様をぶっ飛ばすのを止める理由にはならねえっ！！』

我慢の限界を超えたゼロはメフィストに猛然と殴りかかる。

『フハハハハッ！貴様の相手は、まずはそいつだ！！』

後ろに飛び退くメフィストに呼応して、ゼットンがゼロに地響きを上げて突進して来た。

『ゼットン如きが！俺の敵じゃねえっ！！』

ゼロは素早く『ゼロスラッガー』を投擲する。唸りを立てて飛び出したスラッガーがゼットンに炸裂すると思われた時、その姿がかき消えた。

『またテレポーテーションか！だが俺の反応速度なら！』

ゼットンの次の出現位置を空間の揺らぎで察知したゼロは『エメリウムスラッシュ』を現れたゼットンに撃ち込む。

しかしまたしても、当たる瞬間その姿が消え失せてしまう。外れた光線が大地を抉った。

（馬鹿な！外しただと！？）

驚くゼロの背後から無数の火の玉が襲い掛かった。とっさに前方に連続して前転し、火の玉をかわす。

外れた火の玉が周りの大地を抉り取って爆発し、破片を舞い上げた。

体勢を立て直したゼロが、ゼットンに再びエメリウムスラッシュを撃とうした時、またしても姿が消える。

（おかしい…幾らゼットンでも移動速度が速すぎる…まさか…）

疑問を浮かべるゼロに、シャマルからの急ぎの念話が入って来た。

《ゼロ君それは幻覚よ！きっと其処にその怪獣は居ないわっ、ガルベロスは別に居るのよ！》

《やっぱりそうか！道理で攻撃が当たらねえ訳だ。クソッ、至近距離だと俺にまで効きやがるとは！奴の位置が掴めねえ！》

焦って辺りを見回すが、透視能力を使ってもガルベロスの姿は捉えられず、ゼットンの姿があるばかりだ。

幻覚で全ての感覚を狂わされているのだ。離れた位置で戦いを観戦していたメフィストが嘲って肩を揺らし、

『やっと気付いたか、ククク…ガルベロスの催眠波動は以前とは比べものにならんぞ、さあどうする？時間もあまり無いだろ？』

『なめんな、これしき！』

ゼロがメフィストを睨み付けた時、胸の『カラータイマー』が赤く点滅を始めた。

「孤門！？」

「孤門さんっ！！」

フェイトとなのはの悲痛な叫びが異形の大地に木霊した。

ダーククラスターの爆発に巻き込まれたネクサス、それを見た2人は駆け付けようとするが、バグバズンが立ち塞がった。

とても援護に向かえる状況ではない。

しかし心配は無用だった様だ。爆煙の中から赤い巨体が姿を現す。

『シェアッ！』

ネクサスは近くに位置していたファウスト目掛けて『パーティクルフェザー』を繰り出す。

『何ぃっ！？』

不意を突かれたファウストは、光の刃を胸部に受け吹き飛び、大地

を削って突っ込んんだ。

ネクサスは続け様に腕を十字に組み、破壊光線『クロスレイ・シュトローム』をダークルシフェルに発射する。

しかしルシフェルは右腕を前に突き出し、紫の光の破壊光線『ダークレイ・ジュビローム』を発射した。

クロスレイ・シュトロームとダークレイ・ジュビローム、白色と紫色の光が激しいスパークを起こしてぶつかり合う。

しかし紫の光の凄まじいパワーが、易々と白色の光を押し返しネクサスを襲った。

『ウオオオッ！？』

ネクサスは、ダークレイ・ジュビロームを食らって吹き飛ばされてしまう。

何とか倒れるのは免れたが、片膝を着いてしまった。かなりのダメージなのか、胸を押さえて苦しそうな様子だ。

（…何てパワーだ…以前見たファウストやメフィストもここまでの力は無かった筈だ…）

ネクサスはルシフェルのパワーに旋律しながらも、全身に力を込め

て立ち上がった。

『！』

しかしその時、胸の『コア・ゲージ』が点滅を始めた。

つづく

第３９話　悪魔ールシフェルー（後書き）

ダークメフィストは第２の闇の巨人で、ネクサス本編では２体登場しています。今回のメフィストはＩＩＩ（ドライ）と言った所です。

ダークルシフェルは設定画のみ存在した第３の闇の巨人で、ネクサスが打ち切られていなければ本編に出ていた筈です（涙）その為、武器能力は想像です。

バグバズンは甲虫型ビーストで、色々とネクサスを苦しめた（ナイトレイダーがウルトラマンを攻撃したせい説あり…）割に最後はナイトレイダーの手持ち武器でやられてしまいました。

ゼットンは言うまでもなく、ウルトラマンを倒した人気怪獣ですね。（幻覚ですけど…）

久々にメジャー所を出した気がします。

それでは次回お会いしましょう。

第４０話　青ーブルーー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。何やかんやでちょうど四十話です。

第４０話　青ーブルーー

異様な光が揺らめく『ダークフィールド』の空を切り裂いて『バグバズン』が、フェイトとなのはに迫る。

フェイトとなのははバグバズンの突撃を回避し再び合流した。顔を見合わせる２人。

「いきなり本番だけど、なのは行くよ…！バルディッシュ！」

「うんっフェイトちゃん！レイジング・ハートお願い！」

フェイトとなのはは同時に叫ぶ。それに応え、新たに生まれ変わった『バルディッシュ・アサルト』と『レイジング・ハート・エクセリオン』の中間部に有るコッキングカバーがスライドした。

それに伴い、内部のリボルバーシリンダーが拳銃のシリンダーの如く回転し、魔力カートリッジがロードされる。爆発的な量の魔力が満ちた。

（…これなら行ける…！）

（これがカートリッジシステム！？）

フェイトとなのははその予想以上の魔力の高まりに驚いた。迫り来るバグバズンに同時に砲撃魔法を放つ。

「プラズマスマッシャーっ！」

「アクセル・シューターッ！！」

以前とは比べものにならない勢いで、金色と桜色の無数の魔力弾がバグバズンに炸裂した。バランスを崩し、２人から逸れる巨体。

「…凄い…前と比べものにならない…」

「威力が全然っ段違いだよ！」

フェイトとなのははは改めてバルディッシュとレイジング・ハートを感嘆の目で見る。

しかし何時までも感心ばかりもしていられない。外殻が強靱なバグバズンはまだ参らない。

直ぐに体勢を立て直し２人に向かいながら、おぞましい触手を砲弾

の様に繰り出して攻撃する。

フェイトとなのはは触手の猛攻をくぐり抜け、再び攻撃魔法を撃ち込むが、さすがにバグバズンはしぶとい。

カートリッジシステムでも簡単に倒せる相手ではなかった。

しかも動きが速いので弱点の頭部に攻撃を集中し辛い。このままではせっかくの強化した魔力の無駄撃ちになってしまう。

「なのは…あいつの動きを止めるよ！」

フェイトがなのはの顔を見る。なのはは力強く頷き、

「分かったよフェイトちゃん！」

2人共考え付いた事は同じだった。再び襲い来る触手を避け、狙い所目掛けて散会した。

一方のネクサスは、襲い来る『ダークファウスト』と『ダークルシフェル』の猛攻を凌いでいた。

闇の巨人2体が放つ闇色の光刃『ダークレイフェザー』の斬撃が刃の嵐となってネクサスを襲う。

（ちいっ！）

ネクサスは両腕をクロスさせ『アームド・ネクサス』を発動。その姿が光を放ち残像を残して瞬時に消え去った。
目標を見失った光刃が大地を一斉に切り裂く。

『！？』

姿を見失い、辺りを見渡すファウストとルシフェルの背後にネクサスの姿が現れる。

超高速移動『マッハムーヴ』だ。一瞬で背後に回ったネクサスは、間髪入れずアームド・ネクサスを発動させ巨大な竜巻『ネクサスタイフーン』を巻き起こす。

巨大な竜巻に弾かれ怯むファウストだが、ルシフェルは物ともせずネクサスタイフーンを強引に突破し、ネクサスに強襲をかけて来た。

（しまった！？）

アームド・ネクサスを発動中だったネクサスは一瞬反応が遅れてしまう。
ルシフェルの鋭い爪『ルシフェルクロー』がネクサスを袈裟掛けに切り裂く。

『ウオオオッ！』

光の粒子が血の様に辺りに散らばった。更に追撃を掛けるルシフェルは、ルシフェルクローでもう一度ネクサスの体を切り裂かんとする。

ネクサスはとっさに後方に飛び退き、死の爪をかわす。
しかし態勢を整えたファウストの『ダークジュビローム』の一撃がネクサスに炸裂した。エネルギーがスパークする。

（クソっ！！）

かろうじてアームド・ネクサスでガードしたが、白煙を上げ大地に片膝を着いてしまった。胸の『エナジーコア』が喘ぐ様に点滅を繰り返す。

ファウストとルシフェルが嘲笑う様にネクサスにゆっくりと近付い来る。

『ここまでの様だな…』

ファウストはなぶる様にゆったりと右腕をネクサスに向けた。
ルシフェルは無言で両腕の『アームド・ルシフェル』を組み合わせる。最強の光線で止めを刺す気だ。

しかしネクサスは拳を握り締め、一歩も退かない意思を光る両眼に込めて、力強く立ち上がった。

その眼光が強く輝き、アームド・ネクサスが青い光を放つ。その体が青い波長に包まれた。

フェイトとなのははバグバズンの突進を避け、背後に回り込んだ。
狙いはバグバズンの羽根部分。

「プラズマランサー！」

「アクセル・シュータぁぁぁっ！！」

金色と桜色の魔力弾が、背中の羽根の根元に集中してぶち当たる。

バグバズンは奇声を上げた。バランスを崩し飛行速度が落ちるが、まだ飛行を続け、触手を背後の２人に伸ばして攻撃を仕掛ける。

かろうじて逃れたフェイトとなのはは、再び片羽根を狙って砲撃魔法を連続して撃ち込む。爆煙に包まれる巨体。

明らかにバグバズンの飛行速度が落ちた。デバイスが以前のままだったなら、こうは行かなかっただろう。

（今だ…！）

フェイトはカートリッジをロードすると、バルディッシュを『ハーケン・セイバー』電光の刃の大鎌に変形させる。

以前の『アーク・セイバー』より、出力も刃の大きさも格段にアップしたバルディッシュを振りかざし、高速移動で一気にバグバズンの羽根部分に移動した。

「はあああああっ！」

連続攻撃により脆くなっていた羽根の根元部分を電光の速さで切り

裂く。

中程まで切り込みを入れられた片羽根が、風圧でメリメリと完全に千切れ、浮力を失ったバグバズンは軋む様な声を上げ大地に落下して行く。

轟音を響かせその巨体が頭から地面に激突した。土煙がもうもうと上がる。

フェイトとなのはは一瞬仕留めたかと思ったが、舞い上がる土煙の中からバグバズンの巨体が姿を現した。

数百メートルもの高さから落下したにも関わらず猛然と立ち上がり、2人を威嚇して両腕の鎌を振り上げる。

しかし全くの無傷とは行かなかった様だ。バグバズンの頭部の外殻にひびが入っていた。

打ち所が悪く、落下の衝撃で損傷してしまった様だ。2人にとっては運が味方してくれたらしい。

「なのは今っ！」

「うん、フェイトちゃん！」

フェイトの言葉になのははカートリッジをロード。レイジング・ハートを砲撃形態バスターモードに変形させる。

以前と違い、二又の槍の様に厳つい形だ。その周囲を囲む様に桜色のリングと光の翼が形成された。周りの残留魔力をもかき集め収束する。

フェイトも右手を全面に突き出し、砲撃態勢に入る。魔力チャージを完了した2人は同時に叫んだ。

「トライデントスマッシャーぁっ！」

「全力全開スターライトブレイカぁぁっ！！」

強烈な光と共に、金色と桜色の砲撃魔法が損傷したバグバズンの頭部に炸裂し爆砕する。

頭を粉砕されたその巨体が、甲殻の破片と肉片をばらまいて、地響きを立てて崩れ落ちた。

アームド・ネクサスが青く輝き、ネクサスの体を覆う。それに伴い、赤かった体色が青く変わる。

生体甲冑の形状も変化し、明らかに先程とは違う形態となった。

『シェアッ！』

変化したネクサスは、ファウストとルシフェルにファイティングポーズをとり、雄々しく対峙する。

孤門のみが成し得たもう一つのジュネッス形態『ジュネッス・ブルー』である。ルシフェルとファウストは構わず光線を同時発射した。

『シェアッ！！』

ジュネッスブルーネクサスは、高速で飛び上がり発射された光線をかわし、その勢いのままファウストに突撃する。
背後で逸れた光線が大地を抉り爆発して巨大クレーターを作った。

『デェヤアアッ！！』

ネクサスのジュネッスキックが唸りを上げてファウストの腹に突き刺さり、その巨体が勢い良く吹き飛ばされた。

ルシフェルがその光景を見て怒りの雄叫びを上げ、ネクサスにルシフェルクローを振り上げる。

ネクサスは素早く体を変え、クローの一撃を避けつつ、その腕を取ると一歩背負いで、ルシフェルの巨体を大地に叩き付けた。

数万トン分の衝撃がダークフィールドの大地を揺るがす。

『ルシフェル！よくもおおおっ！！』

ジュネッスキックを受けて吹き飛んでいたファウストが土砂を退けて起き上がり、凄まじい怒声を上げてネクサスに襲い掛かる。

大砲の一斉射撃の様なパンチの嵐だ。しかしネクサスは腕の『アローアームド・ネクサス』でその攻撃を払いのけ、逆にファウストの腹部目掛けて『ジェネレイド・ナックル』の痛烈な一撃を放つ。

『ぐわあああっ！！』

ファウストが腹を押さえて呻く。追撃を掛けようとするネクサスの背後からルシフェルがダークレイ・ジュビロームを発射した。

ネクサスは一瞬早く空に高く飛び上がり光線をかわす。

ジュビロームの流れ弾が逃げ遅れたファウストに命中してしまった。

ルシフェルは慌てた様に崩れ落ちるファウストに駆け寄る。

ネクサスはその隙を見逃さず落下しながら、右腕を地上の2体に向けた。

胸の『エナジーコア』の光が右腕に投影され、そこに光の弓が形成されて行く。ジュネッスブルーの必殺光線の一つ『アローレイ・シュトローム』の態勢だ。

光の帯を弓を引き絞る様に引く。『エナジーコア』の点滅が速い、時間はあまり残されていない。

『ヘャアアアッ!!』

ネクサスの叫びと共に、光の弓が超高速で打ち出された。
眩い光の弓が空間を切り裂き、恐ろしい勢いで2体の巨人に炸裂した。

凄まじい爆発とスパークが起こる。それと同時にネクサスは大地を砕いて降り立つ。

闇の巨人達は苦しげにもがくと、闇色の光と化し幻の様に消え去った。

(逃げたか…)

ネクサスは辺りを見回す。フェイトとなのはも何とかバグバズンを倒した様だ。

闇の巨人達の撤退と共に、ダークフィールドが解除されて行く。

そんな中、フェイトとなのはは異形の大地に降り、巨大なクレーターだらけのダークフィールドの有り様を見て、巨人同士の凄まじい力に驚いていた。

2人は青いネクサスの巨体を見上げ、普段の孤門とのギャップに少し当惑するものを感じるのだった。

もう一つのダークフィールド内を『幻影ゼットン』がゼロを嘲笑うかの様に、消失と出現を繰り返す。

（クソっ！まるで居所が掴めねえっ！）

ゼロは必死で幻覚を作り出している『ガルベロス』の位置を探ろうとするが、強力な催眠波動で全ての感覚を狂わされていた。

触感や皮膚感覚、第六感といったものまでもがおかしくなっている。

恐るべき威力であった。

『ダークメフィスト』の言う通り、以前戦ったガルベロスとは天と

地程の差が有る。

外部からの入力情報が全て当てにならないという状況は、戦闘には致命的である。
焦るゼロの背後からゼットンの火球が再び襲い掛かった。

『グワアアッ!?』

背中に火球を受け、白煙を上げ地面に倒れ込むゼロ。間髪入れずに飛来する火の玉。
ゼロはそのまま前方に前転し火球の雨をかろうじて回避した。

『フハハッ、どうした?その程度なのかウルトラマンゼロ!?』

響き渡るメフィストの嘲笑う声。
ゼロの周りで火球が連続して大爆発し、爆風がシグナムとシャマルの居る場所まで届く。
シグナムは頭を押さえた。その表情が険しい。

「くっ…魔法防壁が侵食されている…?こちらでもあの怪獣が存在している様にしか見えん…!」

「物凄い催眠波動だわ…このままじゃ幾らゼロ君でも危ない…!」

シャマルはキッと苦戦するゼロを見ると目を閉じ、

「『クラールヴィント』！」

指輪形態のクラールヴィントを起動させた。緑の振り子が探知を始める。
火球攻撃に翻弄されるゼロにシャマルの念話が入った。

《ゼロ君、クラールヴィントで何とかガルベロスの位置が判るわ！私の言う通り動ける？》

《奴の位置が判るのかシャマル？》

驚くゼロに更にシャマルは、

《私達も催眠波動のせいで全ての感覚が侵されているみたいだけど、ゼロ君に入力して貰った波動データだけは使えるのよ、それを利用して位置を特定出来るわ！》

ゼロは前方に現れたゼットンに対し勢い付いて立ち上がった。

《その話乗ったぜ！頼むシャマル！》

ゼロは即座に全ての感覚をシャットアウトした。視覚、聴覚、超感覚全てを意識的に遮断、ゼロは何も無い暗黒の中に身を置く。

《任せてゼロ君！》

何の躊躇も無い潔い程の信頼を受けて、奮い立ったシャマルは全感覚をガルベロスの位置特定に向ける。

「頼むぞシャマル…」

横で励ますシグナムの声もシャマルには聞こえなくなっていた。只ガルベロスの波動のトレースに集中する。

全ての感覚器官を切り、棒立ちのゼロに迫るゼットン。その時シャマルの念話が飛ぶ。

《ゼロ君！右後方４０度来るわっ！》

シャマルの声と同時にゼロは元居た場所をゼロコンマ一秒の躊躇も無く飛び退く。

火球が元居た場所を吹き飛ばし、土煙が舞った。

《左前方３１度、約時速８０キロで接近して来るわ！３００メートル、２００メートル、１００メートル！》

『ウオオオオッ！！』

ゼロはシャマルの指示のみに従って、右拳を思い切り突き出した。
その様子を見守っていたシグナムは違和感の様なものを感じる。ゼットンの姿が一瞬薄れた気がしたのだ。

《ゼロ君そのままの位置前方２００メートル、さっきより２０メートル程下よ！》

『これでも食らいやがれえっ！！』

ゼロはシャマルの示した位置目掛け、額のビームランプから破壊光線『エメリウム・スラッシュ』を発射した。
青白い光のラインが何も無い場所に命中する。

「グギャアアアアアッ！！」

その時シグナムの耳におぞましいばかりの絶叫が届いた。

「むうっ…！？」

見ると、ゼットンの黒い姿が煙の様に消え失せ、地面をのた打ち回る異形の怪物の姿があった。

犬に酷似した双頭の片方の頭からドクドクと血が流れ落ちるている。エメリウム・スラッシュが直撃したのであろう。

『チイッ、ガルベロスの幻覚を破るとは！』

メフィストは舌打ちすると、高みの見物を止めゼロに向かう。

ガルベロスも鮮血を滴らせながらも立ち上がって牙を剥いた。ゼロは不敵に親指で口元を弾き、

『散々言いようにコケにしてくれたな！2万倍にして返してやるぜえっ！！』

挑発して二本指をかざす。メフィストは右腕の鉤爪型の打突武器『メフィストクロー』を伸ばし攻撃態勢をとる。

『フン…ガルベロスの幻覚攻撃を破った位でいい気になるなよ…それでも2対1な上に、この俺に勝てるかな…？』

『へっ…こちとら勝利の女神が沢山ついてるんだぜ！負ける理由が思い当たらねえ！！』

ゼロは敢然とメフィストとガルベロスに構える。それを見守るシグナムとシャマル。
ゼロのカラータイマーの点滅が速くなって行く。

シャマルは極限までの集中で消耗し、地面にへたり込んでいる所をシグナムに支えられていた。

「…シグナム…まだ不利だわ…ゼロ君の手助けを…」

シャマルの心配そうな声にシグナムは微かに笑みを浮かべ、

「必要なかろう…ゼロはシャマルの努力を無駄にする様な男では無いからな…」

「…そうね…後は反撃タイムね…」

2人は笑い合うと視線をゼロに向けた。

ガルベロスが計3つの鋭い牙の生えた口から連続して、超高温の火球を発射する。

『これしきぃっ！！』

ゼロは構わず火球の中に飛び込む。片手で火球を弾き飛ばし、地響きを上げてガルベロスに突進した。

『ディヤアアアアッ！！』

腹部の3つ目の頭に強烈なゼロの正拳突きが打ち込まれた。顎の骨が牙もろとも砕け散り、絶叫を上げるガルベロス。

更に唸りを上げて放たれたゼロの回し蹴りが巨体をなぎ倒した。大地を砕いて転がる異形の姿。

『貴様っ！！』

メフィストが三日月型の光刃『ダークレイ・フェザー』を連続発射した。無数の刃がゼロを切り裂かんと襲い掛かる。しかしゼロは真っ向から刃の嵐に向かう。

『甘えっ！！』

その頭部からツバメの如く二本の『ゼロ・スラッガー』が飛び出し、ダークレイフェザーを全て叩き落とした。

『おのれええっ！！』

メフィストは右腕のクローを振り上げ突進する。
嵐の様な突きのラッシュがゼロを襲った。一撃で高層ビルを倒壊させる程の威力だ。

ゼロは紙一重で巧みにメフィストクローのラッシュを避ける。その動きには一切の無駄が無い。

そのゼロ目掛けて飛来するものがある。銀色に光る2つの物体ゼロ・スラッガーだ。

ダークレイフェザーを叩き落としたスラッガーは、攻撃をかわすゼロの元に戻る。その両手にスラッガーを捕むゼロ。

『オラアアアッ！！』

下からすくい上げる様にスラッガーがメフィストクローを弾き飛ばす。返す刀でメフィストの胸部にスラッガーの一撃を叩き込んだ。

『グオオオオオッ！？』

火花を上げよろめくメフィスト。加勢しようと立ち上がったガルベロスが強靭な前脚をゼロに叩き付けようとする。

ゼロは瞬時に空高く飛び上がり、ガルベロスの頭上を超え背後に降り立った。

その間にメフィストは何とか態勢を立て直す。
ガルベロスも背後のゼロに振り向いた。しかし振り向いた時はもう遅い。
そこには両腕をＬ字型に組んだゼロの姿が！

『くたばれガルベロスっ！！』

至近距離から放たれた青白い光の奔流『ワイドゼロショット』がガルベロスに炸裂した。
ビースト細胞を焼き尽くされ、その巨体が大爆発を起こす。爆煙に包まれゼロの姿が見えなくなった。

『馬鹿めっ！止めを刺してくれるっ！！』

メフィストが両腕の『アームド・メフィスト』を組み合わせた。闇色の光がスパークする。
最大の破壊力を誇る破壊光線『ダークレイ・シュトローム』の態勢だ。その時！

『ウオオオオオオッ！！』

裂帛の気合いと共に、爆煙を蹴りで突き破ってゼロが飛び出して来た。
メフィストは慌ててダークレイ・シュトロームを放とうとするが、

『遅ええっ！！』

それより速くゼロはメフィストに高速で突っ込む。その右足が炎と燃えた。

『グアアアアッ！！』

『ウルトラゼロキック』をもろに腹に食らったメフィストは弾丸の様に吹き飛び、異形の崖に叩き付けられた。ぶち当たった崖が粉々に砕け散り、その体が岩石に埋まる。

『見たかこの野郎っ！！』

ゼロは拳を握り締め吼えた。まだ動いているメフィストに近付こうとした時、

『？』

周りの空間の異常を感じて空を見ると、ダークフィールドが解除されて行く。

ハッとしてメフィストを見ると、闇色の光と共にその姿が消え去ってしまった。

『野郎っ逃がしたか…！』

悔しがるゼロだが、こちらはエネルギーが限界だった。被害者が出る前にガルベロスを倒せただけでも良かったと思うしかない。

ダークフィールドが解け、元の山中に再び立ったゼロはウルトラマン形態を解除する。

「ふう…」

ゼロは一息吐くと、幾分離れた位置のシグナムとシャマルの元へと向かった。

「2人共怪我は無いか？」

シグナムとシャマルに合流したゼロは開口一番2人の心配をする。

騎士甲冑を解除した2人に怪我は無さそうだったが、シャマルがへたり込んでいた。

「大丈夫かシャマル…？」

「大丈夫よ…ちょっと慣れない事で集中し過ぎただけだから…少し休めば…」

疲れた顔ながらも笑顔を浮かべるシャマルに近付いたゼロはその手を取ると、

「じゃあ…家までおぶって行ってやるよ」

へたり込んでいるシャマルを背中に乗せ立ち上がった。

「えっ？い…いいわよ…少し休めば大丈夫だし…ゼロ君だって疲れてるでしょう…？」

恥ずかしそうに頬を染めるシャマルにゼロは、

「気にすんな…そんなやわな鍛え方はしてねえ…さっきはシャマルのお陰で助かった…これ位させろ…」

照れくさそうにボソボソ呟いた。嬉しくなったシャマルはお言葉に甘える事にする。肌寒い夜の山にゼロの体温が温かい。

3人は暗い山道を、街の灯り目指して降りて行く。ゼロの背中のシャマルがふと、

「ゼロ君って思ったより背中が広いのね…」

「そうかあ？まあ…家まで寝とけばいい…」

「…じゃあ…お言葉に…甘えて…」

シャマルは嬉しそうに呟く。暫くしてゼロの背中から、すうすう寝息が聞こえて来た。

「本当に寝てしまった…全く…」

シグナムが気付いて呆れ顔をする。ゼロは苦笑し、

「仕方ねえよ…俺が無理をさせたんだ…寝かしといてやろう…」

「…むう…分かった…」

シグナムは若干ムスッとした表情で、ゼロをチラ見してから返事をした。少し面白くなさそうだが表情を戻し、

「そう言うゼロ…お前は大丈夫なのか？短期間での繰り返しの巨大化戦闘に、今日はあれだけの激戦の後だぞ…」

ゼロは振り向いて不敵に笑い、

「さっきも言ったろ？そんなやわな鍛え方はしてねえってよ、楽勝だぜ」

頼もしげにそう言って歩き出す。

シグナムはゼロの後ろ姿を見て、漠然と不安を感じるのだった。

つづく

第４０話　青ーブルーー（後書き）

どこにも映画主題歌『進めウルトラマンゼロ』のＣＤが無いのです…愚痴は置いといて、

ちなみにシグナムとヴィータがあんなに苦戦したのに、何故フェイトとなのははアッサリ気味でビーストに勝てたのかと言いますと、２人掛かり＋運＋バグバズンが弱いからです！（手持ち武器一発でやられてました…冷凍弾で凍らされたとはいえ…）

それでは次回お会いしましょう。

第４０．５話　八神家の午後（前編）（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
バトル続きだったので息抜きです。サウンドステージのお話になります。

それでは第４０．５話前編です。

第４０．５話　八神家の午後（前編）

「うわあ…でっけえ車だなあ～っ」

「わあ～っキャデラックのリムジンやね」

ヴィータとはやては、目の前を横切る黒塗りの高級車を見て思わず声を上げた。
はやての説明にヴィータは、

「キャデジンの…リラックス…？」

「あはっ、そんな感じやっ」

上手く発音出来ないヴィータだが、大体発音は合ってると思ったはやては同意しておく。

はやてとヴィータ、ゼロとで、交差点にて信号待ちをしている所である。図書館からの帰り道だ。

「…あれだけデカいと、追い回された時相当キツそうだな…」

ゼロがクソ真面目な顔で、少し身構えて通り過ぎる高級車を睨む。
師匠の『ウルトラマンレオ』の冗談をまだ真に受けている様だ。

「だから…車は人を追い回す為の物やないよ…」

はやてがすかさずツッコミを入れる。ヴィータはニンマリしてゼロに、

「何だゼロ、あんなのにびびってんのか？だらしねえなあ～」

「俺はびびって訳じゃねえ…何時襲われてもいい様に気を配ってるだけだ…交通事故というものも有るからな…なあ？はやて」

「はいはい、判っとるって、そないな事より信号青やで」

ある意味のん気でズレた会話に、吹き出しそうになりながらも2人を促すはやてである。
ゼロとヴィータは、はやての車椅子の取っ手の片方をそれぞれ持ち、

「「ＯＫ、はやてホーク1号発進！」」

「レッツゴーっ！」

ノリノリではしゃぐはやてを押して、横断歩道を爆走するゼロとヴィータであった。はっきり言って迷惑である。

暫く歩いた頃、白い制服を着た小学生らしき子供達が歩いているのを見掛けた。
楽しそうにはしゃいでいる元気な声がする。ヴィータは何となくそちらを見て、

「ああ…小学校の下校時間なんだな…どうりでうるせえと思った」

「みんな元気でええ事や」

如何にも年上ぶった感想を述べるヴィータに、はやては小学生達を見て目を細める。少し羨ましいのかもしれない。
ゼロも釣られてそちらを見るが、不意に固まってしまった。

ヴィータがその小学生達の制服を見て、

「あの白い制服って、あれだよね…えと…はやてに写真見せて貰ったあの子の…」

「あはっ、すずかちゃんの学校の制服やね」

「うんっそれだっ」

はやては漸く腑に落ちた様子のヴィータに笑いかける。
ちなみにすずかとはすっかり打ち解けた間柄になり、ちょくちょく会っているのだ。
はやては怪訝な顔をしてヴィータを見て、

「ん…？ヴィータ学校に興味有るか？」

「えっ？いや…別にんな事無いけど…」

少し慌てた様子のヴィータだが、はやてはノッて来たらしく色々と想像して、

「ヴィータは…一年生位かなあ…制服着たら可愛いやろうなあ～」

「うっ…か…可愛いのは苦手だ…」

学校に行った事が無いヴィータは正直少し興味が有ったのだが、だからと言ってあの制服を着たい訳では無い。

はやての変なスイッチを押してしまった事に気付いたヴィータは、慌ててゼロに話を逸らして貰おうと振り向いた。

「ゼロ…？」

「……」

しかし頼りのゼロは、何故か心此処に有らずの様子で空を見上げている。

はやても気が付いて、

「ゼロ兄どないしたんや？ぼーっとして…」

「あっ…？悪い…」

漸く気付いたゼロが2人の方を向く。ヴィータは文句を言ってやろうとした時、横目にシグナムの姿が映った。

「あっシグナムだっ」

「ほんまや、シグナム～っ」

はやてが笑顔で買い物カートを持ったシグナムに手を振った。

「シグナム買い物カート持って来てくれて、おおきにな」

「いえ…シャマルの指示ですから…」

はやてのお礼の言葉にシグナムは静かに答えた。勿体ないお言葉と言った感じである。

ヴォルケンリッターの将は、はやてへの礼節を欠かさない。

こちらは礼節以前に、甘えん坊な妹と言った感じのヴィータははやての顔をキラキラした目で見て、

「帰りに買い物してくんだよね？はやてアイス買っていい？」

「ええけど…Ｌサイズはあかんで、ヴィータがまた食べ過ぎてお腹痛くしたらアカンしなっ」

はやてはしっかり者のお姉さんよろしく、おねだりに応じながらも締める所は締める。

アイスはヴィータの大好物なのだが、好き過ぎて１人でＬサイズ丸ごと食べて見事にお腹を壊した事が有るのだ。

「ううう…人の過去の傷跡を…」

お腹を壊した時の事を思い出し、ブルーになるヴィータにゼロが、

「ヴィータは欲張るからああなる…気を付けとけ…」

兄貴風を吹かすが、ヴィータはニンマリと人の悪い笑みを浮かべ、

「ゼロこそ、来たばっかの頃楽勝とか言って、店の大食いにチャレンジしてひっくり返った挙げ句、一晩中苦しくて唸ってたらしいじゃん？」

「何故それを…？はやて！？」

ギクリとしたゼロは慌ててはやてを見ると、両手を合わせてごめんなさいと言った表情の彼女が…

何か収集が着かなくなって来たので、シグナムが話題を変えようと、

「そういえば…先程はお話の途中ではありませんでしたか？」

「ああ…、学校と、ゼロ兄がぼーっとしてたいう話やったね？」

「何でも無い話だけどさ…」

はやてとヴィータの答えに、シグナムは意外そうな顔をし、

「学校ですか…？」

少し思案顔をした後に、

「石田先生がおっしゃっていましたね…あなたの足がもう少し良くなったら、きっと復学も出来ると…」

はやては苦笑してしまう。治療に頑張ってくれている、石田先生やゼロには悪いが、正直諦めている所が有る…

「あは…石田先生らしい励ましやなあ…私は別に学校は行っても行かんでも…」

「そうなの？」

ヴィータが不思議そうにはやての顔を覗き込んだ。

「そんな訳に行くかよ…良くなったらちゃんと学校へ行け…」

ゼロが少し憮然とした表情ではやての頭をポンと軽く叩きたしなめる。はやては少しムキになって、

「でも…私が家に居らんかったらみんなのお世話が出来ひんやんか？」

シグナムとヴィータが神妙な様子で深々と頭を下げ、

「すみませんお世話になっております…」

「感謝してます…」

家事スキルが低い2人には感謝あるのみである。
ザフィーラも似たようなレベルだし、比較的家事が得意なシャマルも料理の腕が残念と来ている。

「あははっ、闇の書と守護騎士ヴォルケンリッターの主として当然の務めや」

ちょっと誇らしそうに胸を張るはやてである。

「はやて…みんなの面倒は俺が見るから…治った時はちゃんと学校に行けよ…」

何気に家事スキルが高いゼロは、みんなの小さなお母さんを任じて

気負いがちなはやてを心配して、釘を刺しておく。
ちなみに男尊女卑が無い『光の国』出身のゼロは、シグナムとヴィータに働けとは言わない。
得意な者がやればいいという考えである。

並みの警備隊員より遥かに強い女戦士が、ざらに居るのを知っていれば尚更だ。

王女なのにバリバリ前線に出て来る人とか、凶悪な必殺技デルタアローとか使う人とかである。

お陰でますますシグナムとヴィータが人任せになりそうだが…

「あははっ冗談やて、せやけど…結構学校さぼってたクチのゼロ兄が言うと、何か可笑しいなあ…？」

はやてはゼロに見透かされたのが少し恥ずかしく、ワザとおちゃらけて言う。

「確かに…名の通り説得力ゼロですね…」

「残念って奴だな…」

シグナムもヴィータも納得顔で頷いた。大概な言われようだがゼロは、

「似合わなくて悪かったな…」

はやての照れ隠しなのは判っているので苦笑するしか無い。

「そういえばゼロ、何でさっきは、ぼーっとしてたんだ?」

ヴィータがゼロの様子を思い出して不思議そうに聞いてみる。

「あ…ああ…大した事じゃ…」

とても照れくさそうなゼロであった。顔が赤い珍しい事である。まるで凄く嬉しいのを我慢している様に見えた。

「何?ゼロ兄教えてえなあ~、今のは私らが悪かったから」

「ああ…それは…」

ゼロが言い淀んだ時、また別の小学生の一団が横をすり抜けて行く。

「あっ…」

思わず声を洩らしたゼロの視線の先を見てみると、小学生の背負っている鞄に良く見慣れた姿のストラップが付いている。

「ああっ、あれってゼロ兄の…？」

はやてが通り過ぎる小学生達を見て納得顔をした。
彼らの鞄に付いているのは、明らかにウルトラマンゼロを模した二等身人形のストラップである。

実は最近謎の超人としてじわじわ人気が上がっているのだ。
海鳴湾での死闘にも目撃者が居り、遠くからながらも映像も撮られている。

誰とも無く謎の超人ウルトラマンという名前が広がっていた。

商魂逞しい海鳴の商店が、最近ストラップやらを売り始めたらしい。

（（（ああ…自分のグッズがあって、嬉しくて仕方ないんだな…））））

とはやて達は思ったが、下手に言うと素直じゃ無いゼロは絶対に認めないと分かっている。

だからはやて達は黙って、小学生達に手を振りそうになる位に顔を綻ばせる彼を生暖かく見守る事にするのだった。

夕食の買い物を終え、ゼロ達は家に帰って来た。

「お帰りなさいはやてちゃん」

シャマルがみんなを玄関まで迎えに出て来てくれる。

「ただいまシャマル」

はやてが満面の笑顔で返事をした。ゼロは手に持った買い物カートから袋を取り出し、

「シャマル、買い物分はキッチンに持って行くぞ」

「うんありがとうゼロ君、そっちは私が持つわ」

「おうっ、悪い」

シャマルは大量の食材の袋の一つを受け取る。６人分、しかも大食いが居るので結構な量だ。

「主はやて失礼します…」

「うんっ」

シグナムははやてを車椅子から抱き上げる。はやては気持ち良さそうな表情で、シグナムに身を預けた。

「やっぱりシグナムの抱っこはええ感じやなあ～」

「そうですか…？」

シグナムは何がどう良い感じなのかはイマイチ分かっていないが、はやてが喜ぶなら良い事だと思う。

そこまで良かったのだが、次にはやてはキッチンに向かおうとするゼロに、

「ゼロ兄も一度シグナムに抱っこされてるんやけど、ええ感じやったろ？」

「あっ主！？」

いきなりとんでもない事を言い出したはやてに慌てるシグナムだが、

「えっ？そうなのか？全然覚えて無いぞ…」

ゼロはあの時気絶していたので覚えていない様だ。

「それは残念や…」

「主はやて…お戯れを…」

悪戯っぽく笑うはやてに、シグナムは顔を真っ赤にして注意した。
あの一件を蒸し返されると、ゼロが約束を思い出すかもしれないので、シグナムは焦りまくりである。

「はやてちゃん…私の抱っこは…駄目なんですか…？」

何故かここでシャマルが目をうるうるさせて、どこかの悲劇のヒロイン張りによよよ～とばかりに訴える。

はやてはどこかの評論家よろしく、チッチッとばかりに人差し指を振り、

「甘いでぇシャマル…、シャマルの抱っこは『素敵』な感じや」

最早そっち方面のエキスパートと化している、八神はやて9歳である。

「わあいっ♪」

素直に喜ぶシャマルだった。扱い易い…
ゼロは何となく気になったので何か言おうとするが、その前にはやてがニコリとして、

「ちなみに…補足として、ゼロ兄の抱っこは『むふふ』な感じや、おんぶされたシャマルなら判るやろ？」

「なるほど…むふふな感じですね…」

シャマルがなる程と言った顔でニコリと同意した。
シグナムはシャマルの足を踏んづけたい衝動に駆られ、ヴィータは興味が湧いたのかはやてに、

「どっちが上なの？」

と聞いてみる。はやては悪戯っぽい笑みを浮かべ、

「さて…どっちや？」

と澄まし顔でのたまうのである。ゼロは一連の会話を聞いて、日本語は難しいとつくづく思った。

さて…帰ってからの軽いジャブが済んだ所で、私八神はやてを抱えたままやったシグナムが、

「行き先はリビングでよろしいですか…？」

何時も真面目さんなヴォルケンリッターの将は、あくまで私に敬語で接する。

「よろしいよっ」

私はかしづかれるのは趣味や無いんやけど、シグナムはこういう質なので私もふざけて付き合っとく。

私八神はやてはつい一年半程前までは、ごくごく平凡な小学3年生相当の女の子やったんですが…

とある事件がきっかけで正義の宇宙人ウルトラマンゼロことゼロ兄の家主と、異世界の古代遺産『闇の書』のマスターになってしまいました。

どっちか片方なら有り得る（普通はどっちも無いかあ…）かもしれんけど、両方いうんはなかなか無いんやないかと思ってます。

「イチゴのアイスはアタシんだからな手え出すなよ」

「私はイチゴよりバニラが好きだもん」

「キャラメルショコラの良さが分かってねえな…」

「名前でも書いて置け…それなら間違わん…」

みんな凄い人らの筈やのに、買って来たアイスについて何ともしょうもない話を本気でしとる。私は思わず声を立てて笑ってしまった。

シグナムのええ感じの抱っこに揺られながら（別のもんも揺れとるなあ…）リビングに入ると、蒼い毛並みのザフィーラが待っとった。

私が声を掛けると、ザフィーラはクウンとばかりに喉を鳴らして出迎えてくれる。

何時も渋いザフィーラは落ち着いとって、あまり喋る方や無い…何か最近人間の姿をさっぱり見とらん気がする。

ゼロ兄が仕切りに人の姿になれ言っとったけど、やっぱりあの姿が落ち着くらしいから、あのまんまや。まあええか…可愛いし。

私はゼロ兄の家主に、闇の書とその守護騎士４人のマスターとしてみんなの暮らしを守ってます。

「さて…ヴィータちゃん車椅子のタイヤ拭いて来てくれる？」

おっとりぽわぽわのシャマルは、細かい気配りが出来る優しいお姉さんみたいや。たまに色々かますウッカリさんやけど。

「はいよっ」

即答して玄関に走って行こうとするヴィータに私は声を掛ける。

「ヴィータおおきにな」

「直ぐ綺麗にして持って来るかんね」

ヴィータは任せなさいとばかりに笑顔を私に向けた。ホンマにええ子や…実の妹みたいで可愛くて仕方無い。

シャマルがキッチンで、買い物袋から材料を取り出しチェックを始めて、

「竹輪に大根昆布にさつま揚げ…今夜はおでんですか？」

「当たり！」

シャマルの読みに私は感心した。シャマルええ勘しとるなあ。とてもこっちの世界に来て一年も経っとらん人とは思えへんな。せやけど…何で料理だけアカンのやろ…？

「いいですね…」

「おでん…寒い時ははやての美味いおでん、最高だな！」

和食好きなシグナムは微笑しとるな。寒いのが苦手なゼロ兄は小躍りせんばかりの勢いや。ホンマに寒いの苦手なんやなあ…

案外雪山で遭難したら、私より先に凍死してまうかもしれへん。

しかしそこまで言われたら、私も作りがいが有るゆうもんや。

「じっくり煮込んで美味しく作るから、楽しみにな」

「はい…」

「材料斬るのは任しとけ！」

「私もお手伝いします」

シグナムもゼロ兄もシャマルも嬉しそうに返事をしてくれた。ゼロ兄切るの漢字が間違っとるけど、何か幸せやなあ…

結構波乱万丈な日々やけど、毎日が楽しいです。

えっ？ゼロ兄の事だけ言うてないて？

恥ずかしいやん…聞くだけ野暮ってもんや…

後編につづきます

第４０．５話　八神家の午後（前編）（後書き）

車の話はかなり前に出たので、忘れた方も居るでしょうか？（初めて外出した時の話ですから…）

一応ゼロが師匠のレオの冗談をまだ引きずっているという感じです。

話の中に出た、前線出まくりの王女はユリアンの事です。

もう１人は…内山まもる大先生の新作漫画に出たウルトラウーマンアウラです。誰が知っているというのでしょう…

もちろん知らなくても話には関係ないので大丈夫です。

それと、はやての関西弁が間違っていた場合遠慮なく指摘して下さい。

それでは次回『八神家の午後・後編』でお会いしましょう。

第４０．５話　八神家の午後（後編）（前書き）

地震災害で被災された方々のご健康と、行方不明の方々のご無事と、亡くなった方々のご冥福をお祈り致します。

それでは後編です。

第４０．５話　八神家の午後（後編）

冬の太陽が早めに陰り、辺りに夜の気配が忍び始めていた。
寒さが堪えるこの季節、昼の暖かさも遠のき北風が骨身に染みる。
時刻は間も無く5時を回ろうとしている。八神家ではこの季節には堪らない、良い匂いが漂っていた。

「うんっ、仕込みはＯ．Ｋ．」

はやては大鍋の中で、グツグツと煮えるおでんの最後の味見をして、満足げな表情を浮かべた。会心の出来と言った所か。

「ふわああ～いい匂い～はやてお腹減った～」

ヴィータが涎を垂らさんばかりの勢いではやての脇から、ガスコンロにかけられている特性おでんを見て甘えた声を出した。
一応千年近くの永い時を生きて来た筈の彼女だが、完全に待ちきれない子供と言った感じである。

はやてはそんなヴィータに言い聞かせる様に、

「まだまだ…このまま置いといて、お風呂入って出て来た頃が食べ

頃や」

「待ち遠しい～」

欠食児童みたいに、いや…餌をねだる鳥の雛みたいなヴィータである。

隣で副菜作りをしていたゼロは苦笑して、

「もう少し我慢しろよ、俺もつまみ食いしたいのを必死で堪えている…」

「なるほど…プッ」

ヴィータは、こちらも涎を垂らさんばかりで、様々な具が踊るおでん鍋を横目で見るゼロを見て、吹き出しそうになった。

ヴィータと同じ位か、それ以上の食いしん坊のゼロが我慢しているので、こっちも我慢しようと思う彼女だが、なかなかにキツイ。

ちなみに、さっきから調理をするはやてと、副菜を作るゼロに片付けをするシャマルの後ろを、チョロチョロしているヴィータである。

シグナムは何時も通り、リビングでお父さんよろしく夕刊を読み、ザフィーラは蒼い毛並みの体を床に伏せている。

大体こんな所が今の八神家の役割分担?であった。

腹ペコなヴィータと、キッチンの様子にそっと視線を送るシグナム。
そんな時、一旦後片付けの手を止め、何かをしていたシャマルが、

「ヴィータちゃんとシグナムはこれでも食べて繋いでてね?はいっ」

お皿に盛られた料理を差し出した。結構美味しそうである。
ヴィータは直ぐに反応し、シグナムもキッチンにやって来た。彼女もお腹が空いていた様だ。

「これは…?」

シグナムの質問に、シャマルは少々自慢気にニッコリと笑って、

「私が作った和え物よ、ワカメとタコの胡麻酢和え」

それを聞いた、シグナムとヴィータの表情が明らかに引きつった。
ヴィータは疑わしそうな目で和え物を睨み一言、

「…大丈夫…?」

「大丈夫ってぇっ！？」

ヴィータの身も蓋も無い一言にシャマルは思わず叫んでいた。追い討ちを掛ける様にシグナムが、

「お前の料理は、たまに暴発と言うか…深刻な失敗の危険が…」

「見た目に騙されんだよな…」

ヴィータはため息を吐いた。今までシャマルの微妙料理で、数々の被害を被った身としては、信用しろと言う方が無理がある。

「あああ～酷い～っ！」

シャマルは、今までの自分の事は棚に上げて涙目になった。そんな彼女を、疑いの目で見るシグナムとヴィータにはやては、

「シャマルのお料理も大分上達してるし平気やよ、さっき私とゼロ兄が味見したし…」

「美味かったぞ、大丈夫だって」

ゼロも頷いて同意する。シグナムとヴィータはホッとして、

「なら安心です…」

「いただきま～す」

既にはやてとゼロがチェック済みと分かって、2人は箸を取って料理に手を付け始めた。現金なものである。

この2人戦闘能力は高いが、はっきり言って生活能力は低いのに、文句だけはしっかりと付けるのであった。

「ううう…ザフィーラ、うちのリーダーとアタッカーは酷いと思わない？」

シャマルは何事かと、キッチンにのそりと入って来たザフィーラに同意を求めた。

「聞かれても困る…」

ザフィーラもどう答えたものか判断に迷ったので、素っ気ない返事

をしておく。

「ザフィーラも…酷おい…」

ザフィーラに同意して貰えなかったシャマルは、更に凹み気味になったが、

「シャマル大丈夫だって、言わせて置け、これから見返してやればいいだけだろ？」

「そうやよシャマル、そんな細かい事で落ち込んだらアカンよ？」

「確かに、そうですねっ」

ゼロとはやての励ましに、シャマルはすっかり機嫌を直した様である。そこで彼女は、はたと思い出した顔をし、

「さて…お風呂の準備そろそろいいかしら？」

そう言うと、浴室にパタパタとスリッパの音を立てて向かって行った。

シグナムとヴィータは特に悪びれた様子も無く、シャマルの料理を

口に運ぶ。

「う～ん…んっ、主はやてやゼロの調理と比べるべくも無いが…シャマルのコレも悪くはないな…」

「うんっ、モグモグ…とりあえず腹には入る」

悪口なのか誉めているのか、微妙な物言いで食べる2人であるが、一応誉めているつもりらしい。

「あかんで、シャマルかて努力してるんやから…」

はやてはそんな2人をたしなめつつ、自分もシャマルの料理に箸を伸ばし一口食べてみる。その顔に笑みが浮かんだ。

「うん…う～んっ、美味しいやんっ、ほらザフィーラも、あ～ん？」

はやては和え物を箸に取ってザフィーラに進める。

彼は正直恥ずかしいものを感じたが、ニコニコ顔で進めるはやてには勝てず、

「あーん…」

と鋭い牙の生えた口をぱかりと開いた。その時である。

「きゃあああああっ！！」

浴室から、絹を引き裂く様なシャマルの悲鳴が聞こえて来た。

「シャマル？」

「何だ！？」

「シャマルどないした？」

これはシグナムにヴィータ、はやての声。ちなみにゼロは、

「どうしたシャマル？風呂から『コスモリキッド』でも出たのかあっ！？」

「何やのそれは…？」

はやての質問に、ゼロは浴室に駆け出しながら、

「液体怪獣だ！体を液体状にして、川なんかに隠れる宇宙怪獣だ、でけえぞ身長７０メートル以上は有る！」

浴室にバタバタと向かいながら、ゼロ以外の全員は、

（（（（（それだけは絶対に無い…！））））

と思った…

さて浴室にたどり着くと、別に異常は無く、コスモリキッドも居らず、シャマルが半べそかいて立ち尽くしていた。

「ふあああ～、ごめんなさい～っ、お風呂の温度設定間違えちゃって、冷たい水が湯船いっぱいに～っ」

シャマルの分かり易い状況説明に、ヴィータはげんなりして、

「えええええ～」

「沸かし直しか…」

シグナムが呆れてため息を吐く。はやては浴室の操作パネルを見て困った顔をし、

「せやけど…このお風呂の追い炊き、時間掛かるからなあ…」

シグナムは表情を厳しくして、シャマルを見ると、

「シャマル…しっかりしてくれ…」

「ごめんなさい…」

シグナムの責める響きの言葉に、シャマルはしょんぼりしてうなだれるしか無い。
ヴィータは何やら考えていたが、何か思い付いた様で、厳しい表情のシグナムに、

「シグナムさあ…レヴァンティン燃やして、水に突っ込めば直ぐ沸くんじゃね？」

「断る…！」

「即答かよ…」

ヴィータは冗談半分で言ったのだが、シグナムは取り付く島も無いといった感じである。

「んん…『闇の書』のマスターらしく、私が魔法で何とか出来たらええねんけど…」

はやてが首を捻り、百パーセント水の冷え切ったバスタブを眺めるが、シャマルは慌てて、

「いえっ、そんな、やはり此処は私が何とか…」

「ふっ…此処は俺に任せろ…」

その時不敵な表情を浮かべたゼロが、一歩前に踏み出して来た。自信満々な感じである。
イヤな予感を覚えたはやては、

「…ゼロ兄…どないする気や…？」

「おうっ、変身して足を湯船に突っ込んで、そのまま『ウルトラゼロキック』の要領で足を赤熱化すれば一発で沸くぞ」

どや顔のゼロを見て、はやてはため息を吐き、

「却下や…あんなん水に突っ込んだら、お風呂が吹き飛んでまうわ…」

「あっ…」

ゼロは間抜けな声を出した。勢いで言ってみたが、確かに風呂を沸かす様な細かい調整に自信は無い。
シグナムは少し考え込んだ後に、

「…炎熱系なら私だが…私も微妙な調整は難しいな…」

「火事とか起こしたら洒落になんねえぞ」

ヴィータが偉そうに言う。言い出しっぺなのだが…
収集がつかなくなって来たので、はやては話を切り上げる事にする。

「と言うか、ええって、良う考えたら、こんなしょうもない事で力使ったらアカンやん、そこゼロ兄アカンよ！」

はやてはついでに、湯船の前で両腕をクロスさせて『ウルトラ念力』を試そうとしているゼロを注意しておいた。

とりあえずみんなを引き連れて、リビングに戻るはやてだが、う～んと考え込む。

何かいい手は無いかと考えていた時、ふと思い出した事が有った。

「そうや！」

はやては思わず声を上げる。ゼロ達は何事かと注目した。

「シャマル、ポストに入ってたチラシの束取って置いとるか？」

「はい…今週の分だけですけど…」

「じゃあ、ちょう持って来て」

「は…はい…」

はやての言葉にシャマルは、纏めてあったチラシの束を持って来て、
はやてに手渡した。
彼女は早速チラシをめくり、しばらく何かを探していたが、

「ん～と…あっ、これや！」

はやてが取り出したチラシを、又しても全員で注目する。

「海鳴…スパラクーア…新装オープン記念…？」

「記念大サービス…？」

シャマル、シグナムが順番にチラシの内容を読み上げる。

「何これ…？」

不思議そうに、チラシを覗き込むヴィータに、はやては言い聞かせる様に、

「みんなで入るおっきなお風呂屋さんやね」

「みんなで…ですか…？」

シャマルは興味深そうにチラシを読むゼロを見て、湯気が出そうな程顔を真っ赤にした。
シグナムもヴィータも固まってしまう。はやては悪戯っぽく笑い、

「ふふふ…その通りや…」

「「「えっ！？」」」

更に固まる3人だが、はやてはテヘッとばかりに笑い、

「と言うのは冗談で、男女は別々や」

3人はホッと胸を撫で下ろす。つくづくこの人にはかなわないと苦笑してしまった。ゼロは訳が解らず怪訝な顔をした。

チラシを見るはやて達は、お風呂種類の多さに驚いた。温泉や、滝の打たせ湯に、紅茶風呂、１２種類のお風呂が有るらしい。

「それは又…素晴らしいですが…」

そんな中、一番のお風呂好きのシグナムの表情が優れない。

「あはっ、新装サービスで安い、しかも三名様以上やと更に割引やて、これはもう行っとけぇ、言う事ちゃうか？行ってみたい人？」

「「はいっ！」」

直ぐ様ヴィータとシャマルが手を上げる。シグナムがまごついた時、ゼロがその背中をポンと叩き、

「おしっ、シグナムも行きたくてしょうがねえってよ」

「ゼロっ！？」

シグナムが何か言おうとした時、思念通話回線に、

《シグナム、身内のへまを主にフォローして貰うのは申し訳ない、私は留守を守りますってえのは無しな…？》

《うっ…》

図星を突かれて振り返るシグナムに、ゼロは表面上は至って普通にして、テレパシーを送る。

《シグナムは俺と違って真面目だからな…見当はつく、はやても気付くぞ、はやてはこういうの気にするからな…》

《しかし…》

まだ言い張るシグナムを、ゼロはやれやれという顔をし、

《シグナムの考えを通すと、かえってみんな気を使っちまうぜ…じゃあ行かないなんて話になるかもしれねえ…そんなの嫌だろ？はやてが見たいのは、シグナム達の笑ってる顔だ…堅いのも大概にな？》

シグナムは苦笑してしまった。まさかゼロに指摘されるとは…

《…分かった…詮無い事を言う所だった…礼を言う》

彼女はシャマル達に分からない様に、そっと頭を下げた。

《…そーいうのは止めろ…》

照れて早々にシグナムから離れ様とするゼロに、シグナムは感心していた。朴念仁の塊だと思っていたからだ。

《しかし…意外だな…ゼロに見抜かれるとは…》

少し悔しげなシグナムに、ゼロはニヤリと笑い掛け、

《なーに、他にもシグナムみてえに、クソ真面目な奴を知ってるからな…何となくだ…》

《ほ、ほう…その人とは、どのような人物なのだ…？》

何か気になったシグナムは、その人物の事を追求したくなった。ゼロは少し天井を見上げ、

《目と口と鼻が無くて、顔が十字になってる銀と緑の巨人だ》

《はっ…？》

シグナムは、どう反応したらいいのか分からなくなってしまう。『ミラーナイト』の事であった。

改めてチラシを見るゼロの服を、誰かがちょいちょい突っついた。振り向くとはやてである。

「どうした、はやて？」

ゼロがはやての前にかがみ込むと、彼女は微笑んで、

《ゼロ兄…ありがとうな、私も言おうとしてたんや…》

思念通話でお礼を言う。やはりはやても気付いていたようだ。それ

で大分様になった思念通話でコッソリ語りかけて来たのだろう。
嬉しくなったはやては、ノリノリで全員に声を掛ける。

「ほんならみんな、タオルと着替えを持ってお出掛けの準備やっ」

「「「おお～っ！」」」

リビングに楽しそうな掛け声が響いた。

そんな訳で、海鳴スパラクーアにやって来た八神一派である。
さすがに新装開店、大きい上にピッカピカだ。バリアフリーにも気を配られていて、はやての車椅子もスムーズに入る事が出来た。

ザフィーラは留守を守ると言い張ったが、ゼロに押し切られて結局来る事になった。人間形態で普通の服を着ている。
それぞれ男湯と女湯に別れ、いそいそと中に入って行った。

「おお～っ、でけえなあ～っ、ザフィーラ早く来いよ！」

早速タオル一丁になったゼロは子供の様にハシャいでザフィーラを手招きする。地球での初銭湯体験なので無理も無いが…

中は出来たてだけあって、タイル一つ一つまで綺麗な上に、だだっ広い。さすがに１２種類も風呂が有るだけの事はある。

「…あまり…風呂は得意では無いのだが…」

ザフィーラは、異様にテンションの高いゼロに着いて行きながら、ため息を吐く。

今日も深夜から『蒐集』に出掛けるので、その前にコンディションの回復にもいいと無理矢理連れて来られたが、あの調子では逆に疲れるのでは無いか？とザフィーラは思った。

その頃女湯の脱衣場で、はやてとシャマル、シグナムとヴィータの二手に別れて服を脱いでいる所である。

はやてが一通り脱ぎ終わった所で、言い争いをするシグナムとヴィータの声が聞こえて来た。

早く風呂に入りたかったヴィータが、服を脱ぎ散らかした所を、シグナムに注意されたのが始まりだった。

「こら、家じゃ無いんだぞ、服を脱ぎ散らかすな…」

「ちゃんと片付けるんだから、いいじゃんよ」

「公共の場でのマナーを言っている…」

シグナムのいちいちごもっともな小言に、ヴィータはウンザリした顔をし、

「ったく…うるせえな…ウチのリーダーはよ…」

シグナムはヴィータの言いぐさに、少しカチンと来て、

「それ以前の人としての心構えだ…それにお前は日頃から、少々だらしない所が…」

「ああ～っ、もう！チクチクうるせえなあっ！」

シグナムの小言に、只でさえ短気なヴィータは非常に気に障った。

「うるさく言われる様な事をしなければいいだろう？」

更に小言を言う下着姿のシグナムの胸がブルンッと揺れ、更にヴィータをイラッとさせた。ペッタンコな彼女には密かなコンプレックスである。

「はんっ！ちょっとおっぱいがデカいからっていい気になるなよ！」

「うっ？何だそれは？何故そんな話が出て来る！？」

まったく別方向からの攻撃に怯んでしまうシグナム。止まらなくなったヴィータは更に、

「無闇に胸に栄養やってっから、そうやって心の余裕が無くなるって言ってんだよ、このおっぱい魔神っ！その胸揺らしてゼロを誘ってんのかあ！？」

「おっぱっ！？誘うっ！？」

シグナムは絶句してしまった。その額に青筋がピキッとばかりに浮かぶ。

「貴様其処に直れ！レヴァンティンの錆にしてくれる！！」

顔から火が出そうな程激怒して、ペンダント状のレヴァンティンをひっ掴むシグナムに、ヴィータもペンダント状のアイゼンを手にして、

「何だと？そっちこそ、グラーフアイゼンの頑固な汚れになりてえか！？」

売り言葉に買い言葉。本人も頑固なヴィータも引き下がれない。

「「ぬうううう～っ！！」」

火花を散らしてスッポンポンのヴィータと、下着姿のシグナムは激しく睨み合う。一触即発である。物凄く恥ずかしく不毛な光景だった。

「ああ～、これこれ…喧嘩する子には夕食後のデザートが出えへんよ」

見かねたはやてがシャマルに連れられて2人を止めた。ヴィータは頬を膨らませて、

「だって…このおっぱい魔神が…」

「誰がおっぱい魔神だ！誰がっ！！」

怒るシグナム。まだ揉めている2人を、はやてはシャマルとで何とかなだめ、お互いに謝らせてこの場を納めた。

さすがにシグナムもヴィータも、公共の場所で喧嘩をして反省した様である。

みんなで一緒に行こうと、まだ下着姿だったシグナムを待つ間、はやてはまじまじとシグナムの豊かに実った胸を見て、

「ふ～ん…そやけど、シグナムのは私も羨ましい…」

「なっ！？」

シグナムは顔を赤らめ、思わず胸をサッと隠した。

「あっ、隠した…」

ヴィータは滅多に見れないシグナムの恥ずかしがる姿を見てニンマリする。

「ああなたは、その…まだまだこれからですから…」

シグナムは動揺を押し隠して平静を装うが、あまり成功していない。

「まあ、そやねんけどな…シャマルもかなりナイスな感じやけど」

はやては自分をお姫様抱っこしているシャマルに話を振る。

「ウッフ～ン」

ノリ良くしなを作るシャマルであるが、少々リアクションがベタだ。

「シグナムのは、どないや？」

はやての問いに、シャマルは少し沈んだ顔をして、

「ええ…実は正直…随分前から微妙な敗北感と、密かなコンプレックスが…」

「うっ、シャマル！お前まで！！」

何故か自分の胸談義になってしまった上に、味方が誰も居なくなってしまい、軽く絶望感を覚えるシグナムである。

「私は後数年はかかるやろうからなあ…それまでゼロ兄が浮気せんように、シグナムにでも頼んどこうかなあ？」

「「「！？」」」

はやては真面目な顔をして、とんでもない事を言い出した。
シグナム達は思わず石化するが、はやては、

「冗談や、びっくりしたか？」

と悪戯っぽく笑うのだった。シグナム達は引きつった表情で、コクコク頷くしか無かった。

女湯ではやて達が怪しい会話をしている頃、ゼロとザフィーラは呑気に様々な風呂を満喫していた。

「…どうだザフィーラ…？なかなかのもんじゃねえか…」

「…うむ…確かに悪く無いものだな…」

温泉風呂に入りながら、まったりとするゼロとザフィーラである。

風呂嫌いのザフィーラだが、意外とお湯に浸かるのは気持ち良いと思った様だ。

風呂嫌いの犬を温泉に入れてみたら、意外と気持ち良いのに気付いて、満喫するのと同じかもしれない。

他にもサウナやら、電気風呂を試した2人はそろそろ上がる事にする。1時間程も入ったので充分だと思った。

汗が引くまでスパラクーアの浴衣に着替えたゼロとザフィーラは、風呂場を出て売店や食堂、マッサージの店がある広間に出てみる。こういうスーパー銭湯は何でも揃っているのだ。

はやてより、風呂上がりに必ずしなければならないと厳命を受けていた、風呂上がりのフルーツ牛乳を、腰に手を当てて一気飲みする。

「ぶはあ～っ、染みる～っ、地球の文化はいいなあ～…」

銭湯の黄金パターンを体験し、ご機嫌なゼロである。そうなると他の体験もしたくなった。

やはり実体験は、テレビや読書では味わえない、本物の良さが有ると思うゼロである。

辺りをキョロキョロ見回すゼロに微苦笑するザフィーラだが、ふとマッサージの店に目を止めた。

「それならゼロ…マッサージを受けてみてはどうだ…？巨大化しての連戦はかなり体に負担が掛かるのだろう…？」

ザフィーラはゼロの体が心配だった。幾ら超人ウルトラマンだからといって、無理をし過ぎなのではないかと…

本人は隠しているが、少し体の動きが鈍い様にザフィーラには思えるのだ。

「そいつは面白そうだな、はやて達はまだ暫く出て来ねえだろうし、ちょっと行って来る」

ゼロは勇んでマッサージの店に飛び込んで行く。野次馬根性丸出しの観光客みたいであった。

一方の女湯のはやて達はゼロの予想通り、あちこちの湯をじっくりと巡っていた。

はやてはご機嫌である。女性陣のお陰で前に行ったレジャーランドの様に、こういう場所にも来れる様になった。彼女にとって数年振りの事である。

ヴィータはあちこちの湯を探索して周り、お風呂好きのシグナムは

態度にそれ程表れる訳では無いがご満悦な様子で、シャマルも楽しそうだ。

次は何処にしようかと４人で相談している時、はやてに声を掛ける人物が居た。

「はやてちゃん…？」

「あっ、すずかちゃんっ」

其処に立っていたのは、紫がかったロングの髪をした、はやてと同い年の少女『月村すずか』だった。はやては喜んでヴィータを呼ぶと、

「紹介するな、この子ウチの末っ子ヴィータ」

ヴィータだけ間が悪く、今まですずかと直接会った事が無い。

「あ…え～と…ヴィータです、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げた。意地さえ張らなければいい子なのである。

「こんばんは、月村すずかです。よろしくね、ヴィータちゃん…」

「はいっ」

すずかは微笑んで挨拶を返す。ヴィータはすずかに好感を持った。

「シグナムさんとシャマルさんもこんばんは、ゼロさんも一緒ですか？」

すずかの挨拶にシグナムは会釈し、

「はい…一緒に来ていますよ、もう出た頃かもしれません…」

「すずかちゃんもどなたかとお風呂ですか？」

シャマルも笑顔で会釈する。すずかはおっとり頷いて、

「ええ、そうなんです」

はやてはとても嬉しそうだ。思いがけない場所で友達と会えて、笑みが止まらない。

「んん…何や偶然とはいえ、運命的なものを感じるなあ…」

「凄いよねっ」

すずかも大喜びである。はやては嬉しくて、つい大袈裟な事を言ってしまい、内心すずかに引かれないかな…と少し思っていた。

しかし心底嬉しそうなすずかを見て、はやてはそんな心配は無用だったのを感じて、とても感激し、

「あっ、すずかちゃん、この後何か予定とかあるか？良かったら晩ご飯ご一緒にとか？」

「うん、友達の家族の皆さんと、外に食べに行こうって事になってるんだけど、もし良かったら」

すずかは嬉しそうに提案したが、

「ああ…残念…ウチはもう用意してしもてるんや…」

はやては申し訳なさそうに事情を話した。
家では鍋の中で特製おでんが待っている。今回は遠慮するしか無かった。

近い内に家に来て貰い、改めてご馳走しようと約束をした。立ち話も体が冷えるので、別れる事にする。

「すずかちゃんもお友達と来てるんやったら、あんまり引き止めてもアカンね、帰ったらメールするな」

名残惜しいが、はやては笑顔ですずかと顔を見合わせた。すずかも名残惜しい様子で、

「うんっ、友達も今度ちゃんと紹介するね」

「楽しみにしてる」

すずかは手を振って湯気の中へ歩いて行く。みんなで挨拶してすずかを見送った。

すずかが一緒に来ていた友達というのはアリサ、それになのはとフェイトであった。

はやて達よりも少しだけ早く来ていたのである。

もしもこの時すずかの誘いに乗っていたら、どんな事になっていたのだろう…？

「痛でででででえっ！？」

ゼロは耐え切れず、悲鳴じみた声を上げた。初体験のマッサージの洗礼は、なかなかにハードなものだった。

「ちょっ、ちょっとおばちゃん待っ！痛だだだだだっ！！」

「兄ちゃん男だろう？大して力入れてないんだから我慢しなっ！」

だみ声で叱る、６０歳程の丸々と太ったマッサージ師のおばちゃんは、容赦無くゼロにグリグリマッサージを施す。

ゼロは甘く見ていた事と、調子に乗って５０分コースにした事を心の底から後悔した。

コース前半が終了し、ゼロは施術ベッドで息も絶え絶えで朽ち果てている。
こんな事なら『ゴモラ』の超振動波を食らった方がまだマシな気がした。

「…地球人はすげえな…こんなのを治療で受けるとは…」

そう呟いた時、隣の衝立の向こうから若い男の悲鳴が聞こえた。

「ちょっと待って下さっ…痛いっ！痛いですってえっ！」

ゼロはその顔も知れない声の主に、非常に親近感を持った。
そういえばマッサージを受けている途中から、しきりに痛がる声が聞こえた気がする。

隣もゼロと同じ５０分コースの様で、しばらくしてから、白衣を着たマッサージ師のゴツイ髭のおっちゃんが、衝立の向こうから出て

来た。

衝立からゼエゼエ言ってる声がする。ゼロはつい声を掛けていた。

「初めてマッサージを受けたけど…結構…かなり激しいもんすね…」

すると衝立の向こうから若い男の声で、

「…まったく…僕も進められて初めてやって貰ったけど…恥ずかしい事にこの様で…」

幾分照れた響きの声だった。穏やかそうな声だなとゼロは思う。

「いや…こっちもみっともない限りで…痛くて悲鳴を上げちまって…とても家の者には見せらんねえです…」

「僕もですよ…」

笑いを含んだ声だった。ゼロも何だか可笑しくなってしまう。

「最近ちょっと無理が祟って…おばちゃんにも言われたけど…かな

り疲労が溜まってるらしくて…そっちもそんな感じで…？」

意地っ張りのゼロにしては珍しい台詞であった。
顔も見えない見知らぬ人間、という気安さのせいだったのかもしれない。

「ははは…そちらも若いのに大変ですね…こっちも似たり寄ったりで…結構ガタガタです…弱音を吐ける状況でも無いんで…」

同士を見つけた気がして嬉しくなったゼロは、

「…無理をしなきゃなんないなら、ほどほどって訳には行かねえか…じゃあ最後まで頑張って…！」

「ありがとう…そちらも頑張って…！」

励ます声が帰って来た。ゼロは他でも頑張っている人が居る、自分も最後までやり抜こうと改めて誓った時、

「さあ兄ちゃん、後半行くよっ」

だみ声が頭上でした。指をゴキゴキ鳴らしながら、マッサージ師のおばちゃんが目の前にそびえ立っている。

ゼロにはおばちゃんの台詞が逝くに聞こえた気がしたが、ゴクリと息を呑み、

「お手柔らかに…」

と強がった笑みを浮かべた。その後しばらくして、施術室に仲良く男2人の悲鳴が上がった。

漸くマッサージを終えたゼロは、まだ声を上げる隣の顔も知らぬ若い男性に挨拶をし、はやて達に合流しようと部屋を出て行った。

それから暫くしてから、2人の少女が男性を迎えにやって来た。男性はベッドからよろよろと立ち上がり、

「なかなかキツかったよ、フェイトちゃん、なのはちゃん…体の力が全部抜けたみたいだ…」

男性『孤門一輝』はフェイトとなのはに向かって苦笑を浮かべるのだった。

深夜の八神家、はやてはお風呂巡りで疲れたのか、ぐっすりと眠っていた。その寝顔は天使の様に安らかだ。

電気が消えた暗い家のリビングに、ゼロとヴォルケンリッター全員が集合している。

「じゃあシャマル、はやてを頼む…」

「ええ…」

ゼロの言葉にシャマルは頷いた。シグナムにヴィータ、ザフィーラもシャマルに声を掛け、外へ出て行く。

ゼロは暗闇の中に足を踏み出す。道路に出た所で、ふとはやてが寝

ている部屋に視線をやり、

（待ってろはやて…もう少しだからな…）

心の中で呟くと3人と共に、身を切る風が吹き荒ぶ夜の闇の中へ消えて行った。

つづく

第４０．５話　八神家の午後（後編）（後書き）

コスモリキッドは『ウルトラマンタロウ』に出た怪獣です。どうも引き合いに出す怪獣にタロウ系が多いのかと言いますと、変わった能力を持った奴が多いからです。

ゴモラは説明するまでも無いですが、ゼロが言っているのは『大怪獣バトル』のレイの使役するゴモラの事です。

では次回、Ａ'ｓ編冒頭で『ミッドチルダ』に現れた巨大な足跡の主の正体が明らかになるかもしれません？

では次回でお会いしましょう。

第４１話　再会ーリユニオンー（前書き）

毎度読んで頂きありがとうございます。時間が取れずいつもより短めです。

今回から試しに感想書き込みを制限無しにしてみました。お気軽に書いて頂ければ幸いです。

それでは第４１話です。

第４１話　再会ーリユニオンー

数ヶ月前

第一世界『ミッドチルダ』の首都『クラナガン』休日である今日は、親子連れやカップルなどで賑わっている。
その活気あふれる表通りを１人の青年が歩いていた。

１８歳程の穏やかな表情をした、人の良さそうな青年である。青年は街の様子が珍しいのか、しきりに辺りを興味深そうに見回していた。

田舎から出て来たばかりの、おのぼりさんなのかとも思われるが、それにしては反応が極端な気がするが…
天然さん、そんな言葉がピッタリの青年であった。

彼はクラナガンにやって来る道すがら、ミッドチルダと呼ばれるこの世界を色々と学んで来ていた。
青年にとって、ミッドチルダは全く未知の世界だったからである。
どうやらこの青年、田舎者どころでは無い程この世界の知識が無かったらしい。何とも妙な青年であった。

この世界は次元移動の技術が発達し、魔法と呼ばれる力が主流の様である。

彼なりに学んだ知識によれば、この世界は数多くの次元世界が連合し、ミッドチルダを中心に『時空管理局』という組織が、各次元世界に干渉するような出来事などを管理している世界らしい。

技術の発達が魔法に特化し、次元間移動などの技術は非常に発達している。

その代わり、彼の良く知る世界より明らかに遅れている分野などがあった。だがそれも仕方ない事なのかもしれない。

資料によると、この管理世界は大規模な戦乱の後にようやく今の形に落ち着いたらしい。失われた技術などもかなりあったのだろう。

魔法に特化したのも、質量兵器、核兵器や光学兵器などにより多数の命が失われた反省に因るものという事だ。

その代わり治安維持組織でもある『時空管理局』では、魔法を使える者の絶対数の不足から、慢性的な人員不足で色々と大変らしい…

しかし青年は別にミッドチルダに勉強に来た訳では無い。首都である『クラナガン』を訪ねたのには訳が有った。

彼がミッドチルダに来て、状況の把握に努めていた時である。

ふとした事から知り合った農家のお婆さんが、青年の顔を見て意外な事を言い出したのだ。

「あんたの顔…数年前に流されて来た『次元漂流者』の兄ちゃんにそっくりだねえ…」

青年は顔色を変えた。まさかその人は…彼にそっくりな人物に覚えが有った。

『次元漂流者』別の世界より流されて来た、次元世界の遭難者という所か。実はこの青年も似たようなものであった。彼自身も、この世界の人間では無い。

ある実験に志願した彼はその最中、予期せぬ事故に遭った。緊急措置で次元世界に退避しようとした時に妙に気になるものを感じ、この世界にやって来たのである。あれはやはり気のせいでは無かったのだ。

年代的に合わない気もしたが、次元移動によりズレが生じた可能性も有る。

その次元漂流者の情報を求めて、近場の管理局の分室に行ってみた所『ロストロギア』がらみの事故で半壊しており、その際データが消えてしまっていた。

仕方無く青年は色々と手を尽くした末、こちらに送られたらしいとの情報を得て、クラナガンまでやって来たのである。

それから彼はあちこちを捜し回った。ある理由から、表立って漂流者を捜す事が出来ない青年は、データバンクから取り出した情報を頼りに、施設などを訪ね歩くしかない。

しかし見知らぬ世界で人1人を捜し出すのは容易では無い。

しかし青年に諦めるつもりは微塵も無かった。彼が生きているかも

しれない可能性が有る、それだけで充分だった。

拭いきれない後悔の記憶…目の前で救えなかった青年…
差し伸べた手は後一歩届かず、彼は裂け目に消えてしまい、虚しく空を掴んだあの時…

再びその場所を訪れた時、残っていたのは古びた時計だけだった。

何回目かの空振りの後に、青年は公園のベンチに腰掛け、ため息を吐いた。

「…いったい何処に要るんですか……？」

青年は呟いていた。柔和な顔に焦りの色が濃い。本当に生きているのかも怪しくなってくる。

何しろ手掛かりは、そっくりな顔に別世界からの次元漂流者というだけだ。本人かどうかも定かでは無い。

しばらくの間座り込んでいた青年だが、このままじっとしても仕方が無いと気を取り直し、ベンチから立ち上がろうとした。その時である。

「あれ…？お前さん確か…こんな所で何をしてるんだ？」

男性の声がした。青年が顔を上げると、まだ幼い姉妹らしき子供を連れた、渋めの中年の男性が目の前に立っている。

青年は一瞬何を言われのか判らなかった。だがこの世界で彼を知っている人間はほとんど居ない筈だ。

目の前の男性にも、連れている紫がかった髪をした2人の女の子にも会った事は無い。それが意味しているものは…

「あなたは、僕と同じ顔をした人に会った事が有るんですね！？」

青年は興奮して立ち上がり、男性に向かって思わず叫んでいた。

その子連れの男性は管理局の局員だった。漂流して来た彼とは少し話をした事が有るそうだ。

一通りの話を聞いた青年はお礼を言う。ようやく掴んだ消息だった。

さすがに男性は、漂流者と瓜二つの青年が、何故彼を捜すのか疑問に思った様だが、その辺りは何とかはぐらかす。

自分も漂流者だとバレるのは隠した方がいいと、経験上知っていた青年は、嘘は苦手ながらも何とか誤魔化した。

別れ際、小さい方の妹らしきショートカットの女の子は人見知りなのか、男性の後ろに隠れて青年を陰から見つめている。

髪の長い姉らしき女の子は礼儀正しく、ペコリと頭を下げた。青年も親子に深々と頭を下げ、

「ありがとうございました…早速行ってみます」

青年は笑顔でその親子に挨拶すると、直ぐに教えられた場所に向かった。

最初は早歩き気味の足取りだったが、はやる気持ちを抑えられない。

青年は駆け出していた。いっそのこと飛んで行きたい位であった。

彼は風の様に駆け、目的地にたどり着いた。数十キロはフルに走っただろう。

息も絶え絶えな状態で、教えられた場所の宿舎にたどり着いた。

さすがに此処までの、勢いに任せた全力疾走で疲れきり、門の前にへたり込んでしまう。青年がゼイゼイ言っていた時だった。

「あの…大丈夫ですか？」

彼の後ろから心配そうな声がした。振り向くと、心配そうに此方を覗き込む若い男性が立っている。
青年はハッとして男性の顔をまじまじと見つめた。

「ぼ…僕の顔に何か…？」

食い入る様な青年の眼差しに、男性は若干引き気味な表情をする。
しかし、こっちを見上げている青年が自分と全く同じ顔をしている事に気が付き目を丸くした。
2人は背格好から声まで、まったく一緒であった。

「…き…君は一体…？」

男性は非常に困惑した様子である。その手を立ち上がった青年の手がしっかりと握っていた。

「！？」

男性は驚いた。目の前の自分そっくりな青年の両目から、止めどもなく涙が溢れ出て来たからだ。青年はガッチリと男性の両手を握り締め、

「生きて…生きていられたのですね…『バン・ヒロト』さん…！」

「ど、どうして僕の名前を…？」

困惑するヒロトの手を、青年は押し抱く様に握ったままその場に崩れ落ちた。

「良かった…本当に良かった…」

彼は子供の様に泣き出していた。大粒の涙がヒロトの手を濡らす。

ミッドチルダの砂漠地帯に舞い降りた巨大な足跡の主『ウルトラマンメビウス』こと『ヒビノ・ミライ』

彼は数百年近い年月を経て別世界にて、自らのモデルとした人物『バン・ヒロト』と再会したのである。

ミライの嗚咽は、何時までも止む事はなかった……

ーーー

る。

『蒐集』を終え、明け方に帰宅したゼロ達は早々に各自寝に入ったのだが、シグナムはリビングでそのまま寝入ってしまっていた。

それを部屋に戻る前のゼロが見付け、部屋まで抱いて連れて行き、その後リビングのソファーに一旦座った所で、前後不覚に眠り込んでしまったのである。

管理局の動きが本格的になり、以前より遠くの世界での『蒐集』を余儀なくされてしまった事。

更に『ウルトラマンネクサス』や『ダークメフィスト』との、エネルギーチャージの時間があまり取れないままでの連戦で、疲れが溜まっていた様だ。

はやてにはそこまでは分からなかったが、最近ガルベロスと戦って疲れたのだろうと思う。

毛布を持って来てゼロとザフィーラにそっと掛けると、起こさない様に朝食の支度を始めた。

しばらくしてキッチンに、包丁のトントンという音と美味しそうなお味噌汁の香りに、炊飯器でお米の炊けるフツフツという音がする。

それからもうしばらくして、

「ごめんなさいはやてちゃんっ」

寝坊をしたシャマルが慌ててやって来た。
その後から首を傾げながらシグナムも起きて来る。
部屋に戻って寝た記憶が無いからだろう。経緯を聞いたらどんな顔をするのだろうか…

その次に眠い目を擦りながらヴィータも起きて来た。
騒がしくなった周りに、ソファーで眠り込んでいたゼロとザフィーラも目を覚ます。リビングは何時もの賑やかさで溢れた。

同時刻・海鳴市桜台林道

結界を張ったその中で、フェイトとなのはは『カートリッジシステム』を搭載、強化された『バルディッシュ・アサルト』と『レイジング・ハート・エクセリオン』を完全に使いこなす為に、特訓を行っていた。

アルフもユーノも付き合っている。２人共それぞれ子犬にフェレットの姿だ。

こちらの世界では基本この姿で過ごしている。ちなみにアルフは、新開発した子犬フォームで見違える程小さい。

何故フェイトとなのはが早朝特訓をしているかと言うと、相手はカートリッジシステムの熟練者達。こちらも使いこなせなければ、遅れを取ると感じた故である。

もっとも『バグバズン』との戦闘のお陰で、良い実戦経験が出来たので心強い。後はカートリッジシステムに慣れる訓練である。

次々と砲撃魔法や近接魔法の訓練をするフェイトとなのはだが、どうもなのははにはフェイトが必要以上にムキになっている気がした。

一通りの訓練を終えたフェイトとなのはは、アルフとユーノのを膝に乗せ、近くの自販機前のベンチに腰掛け飲み物を飲んでいた。
そんな中アルフはフェイトを心配そうに見上げ、

「フェイト…ちょっと力み過ぎなんじゃないかい…？」

フェイトはアルフの頭を撫でながら薄く笑い掛け、

「…これくらい大丈夫だよ…それに…シグナムは強いからね…少しでも慣れておきたいんだ…少しでも早くゼロさんを解放してあげないといけないから…！」

最後の言葉に力が入る。無理も無いとなのはは、隣に座って遠くを見つめる友人を心配そうに見つめた。

恩人が犯罪者に、無理に加担させらているらしい今の状況では、焦る気持ちも分かる。しかしなのはには気になる事が有った。

「…あの人達…本当に悪い人達なのかな…？」

なのはの言葉に全員が呆気にとられる。その中でユーノは、小さな首でなのはを見上げて、

「なのは、どうしてそう思うんだい…？」

なのはは訝しげなフェイトとアルフをチラリと見た後に、

「あの赤い服の女の子…私を助けてくれた様に見えたんだけど…」

ヴィータが『旅の鏡』と同じ魔法から、なのはを助けた時の事を言

っているのである。ユーノは目を閉じて、あの時の事を思い出す。ヴィータと対峙していたのは彼である。

「確かに…あの時、僕にもそう見えた気がするけど…」

なのはとユーノを見て、アルフは馬鹿馬鹿しいと言う様に首を竦め、

「何言ってんだい？第一最初に襲って来たのは向こうだろ？あの態度からして有り得ないよ、勘違いだろ」

「…そうだよなのは…あの人達の嫌な笑い顔…私は忘れない…！」

フェイトはシグナム達の嘲笑う表情を思い出し眉をひそめる。彼女もアルフと同じ意見だ。

いささか感情的になっている様に、なのはには見える。

もっともなのはにも、それ程自信が有った訳では無いので、そう言われてしまうと返事に困ってしまう。だがやはりヴィータの行動は気になった。

「それよりもアタシは、フェイト達が戦ったって言う、黒い巨人の事が気になるけどね…孤門からの話からして…」

アルフの深刻な言葉に全員が、孤門から聞いたばかりの話を思い出した。

『ダークフィールド』の戦闘から戻った後、孤門はリンディやクロノらも含め、フェイト達にも『闇の巨人』について知っている事を話したのである。

今までの『スペースビースト』との戦いに、彼が出会った『デュナミスト』の事そして…

「彼ら闇の巨人は『冥王』によって作り出された人形です…時には死んだ人間や、闇に取り込まれた人間に闇の力を与えて先兵とする…スペースビーストも『冥王』の先兵に過ぎません…」

死んだ人間のくだりで、孤門は表情を歪めた。かつての恋人の事を思い出したのだろうか…

人間をあんな者に変えてしまう存在、魔法を遥かに超越した力だった。自然全員の口は重くなる。

「巨人達については分かったよ…しかし、その『冥王』というのは一体何者なんだい？」

そんな中、黙って話を聞いていたクロノは疑問を投げ掛ける。孤門は顔つきを険しくし、

「『冥王』…それは『ウルトラマンノア』のコピーとして作り出された人造のウルトラマン…間違い無い…『冥王ダークザギ』はまだ生きていて、復活を狙っている！」

『冥王ダークザギ』孤門の言葉が不吉に響く。その名は各自の胸に嫌なざわめきを立てた…

「…本物になりたかったウルトラマンのコピー……」

孤門の話を思い返したフェイトは、口の中でそっとその言葉を呟いていた。

しかしフェイト達は知らなかった。孤門が全ての事情を話してはいない事を…

そう彼は『闇の書』のマスターが誰なのかも、居場所も知っている筈である。

『冥王』がそれを狙っているらしい事も…孤門はどんな手段を取るつもりなのであろうか…？

つづく

第４１話　再会ーリユニオンー（後書き）

はい『ウルトラマンメビウス』『ヒビノ・ミライ』登場（変身してませんけど…）です。まあ変身はまだ先ですが…

本来は正体をはっきりさせるのは二回位に分けようと思っていましたが、こんな時なので一気にやりました。こんな事が１人でも多くあればと思います。

バン・ヒロトはメビウスの人間体のモデルになった人物です。宇宙で生まれた為、地球に一度も降りた事が無く、ようやく地球に行けるという時に宇宙船の事故に遭い、他の乗組員を助ける為、ただ１人船に残りウルトラゾーンという異次元空間に船もろとも吸い込まれました。

メビウスは現場に居合わせましたが、力及ばす救う事は出来ませんでした。

ヒロトの勇気に感動したメビウスは彼の姿をモデルに人間体になったのです。

その後ウルトラゾーンに入ったミライはヒロトを捜しますが、残っていたのは彼の時計だけでした。

当時見ていて、ヒロトは何処かで生きているんじゃないかと妄想した結果です。気に入らない方がいたらすいません。

ダークザギはウルトラマンネクサスに出た最強の敵です。本来はスペースビーストに対抗する為に、来訪者という異星人に作られた人造ウルトラマンノアという所でした。

しかし自我に目覚めコピーである自分に耐え切れなくなったザギは暴走し、逆にビーストを操って来訪者の星を壊滅状態にし、ウルトラマンノアを倒して自分が本物になろうとするのです。

それでは次回お会いしましょう。

第４２話　闇ーダークロプスー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
皆様色々とある方も居られるでしょうが、頑張って下さい。
それでは第４２話です。

第４２話　闇ー ダークロプスー

昼下がりの八神家、今日も比較的暖かい日だ。ゼロの様な寒がりにとっては有り難い。

ゼロはシグナムとシャマル、２人の部屋を訪ねていた。

「それじゃあゼロ君、はやてちゃんの病院への付き添いよろしくね」

ベッドに腰掛けるシャマルは、何かの作業をしながら、付き添いの件を頼んでおく。

「おうっ任しとけ、シグナムとヴィータとザフィーラは？『闇の書』も姿が見えねえな…」

「もう出掛けたわ…」

シャマルは脇に置いていた小箱を手に取って膝の上に置いた。

蓋を開くと、弾丸の様な物が詰め込まれている。彼女達の使う魔力カートリッジだ。

「カートリッジか…シャマル1人で魔力注入をやってんのか？大変だな…」

「ええ、昼間の内に作り置きするの、バックアップは私の役目だし…また何が起こるか分からないから…」

シャマルは何でも無いという風に微笑むと、カートリッジを一つ摘む。

不安要素は多い。『闇の書』の異変に、自分達を陥れた『闇の巨人達』用心に越した事は無いのだから。
作業に入ろうとしたシャマルは、ふとゼロを見て、

「私よりもゼロ君の方が大変じゃないの？お陰で1人も魔導師を襲わないで、かなりの頁数を稼げているけど…続けての変身大丈夫？」

ゼロは不敵に笑い、自分の胸をドンと叩き、

「ウルトラマンゼロがこれ位の事でへばるかよ、心配は要らねえよ」

自信満々で安心させる様に言っておく。シャマルは安心した様子だ。
ゼロに断言されるとそんな気がして来る。

実際はやせ我慢しているだけなのだが…昼間は何時も通り家の事を済ませ、夜は2、3時間の睡眠で明け方まで『蒐集』だ。

『管理局』の捜査で思う様に頁数を稼げない今、少しでも『蒐集』を進めたい所だ。

人を襲わない分はゼロがカバーしなければならない。弱音は吐けなかった。

シャマルはゼロの強がりを信じた様で、頼もしそうにゼロを見上げると、カートリッジを握り目を閉じる。

部屋を緑色の光が照らす。魔力注入の作業に入ったシャマルに片手を挙げ、ゼロははやての元へと向かった。

ーーーーーーーーーー

「う～ん…やっぱりあんまり成果が出てないかな…」

石田先生は、はやての検査結果のカルテを見て、独り言を喋る様に声を発した。

海鳴大学病院の診察室である。ゼロとはやては、検査結果を石田先

生から聞いている所だ。

先生はカルテをプラプラ振り、はやてに見えない角度で一瞬表情を曇らせるが、直ぐに穏やかな表情に切り替えた。

先生はここで患者に、自信の無い表情を見せる様な、二流所の医師ではない。先生は改めて、カルテの数値をチェックし、

「でも…今の所副作用も出てないし、もう少しこの治療を続けましょうか…」

努めて前向きに、これからの治療方針を提案する先生にはやては、

「はいっ、ええと…」

返事をした後に言葉を選んでいるのか、少し視線を落とす。いい返事の言葉が見つかったのか、先生を見て、

「お任せします」

「お任せって…」

先生は怪訝な顔をした後に目を細める。まさか諦めてしまっている

のだろうかと不安になった。
いくら原因不明の病気だからと言って、患者が諦めてしまってはどうしようも無いものである。

「自分の事なんだから、もう少し真面目に取り組もうよ…」

先生の少し叱る様な響きの言葉に、はやては困った様に何とも言えない表情をして、

「いや…その…」

捨て鉢になっていると思われたのを感じ、彼女は微笑んで、

「私先生を信じてますから…」

その笑顔に先生は無言になった。ゼロも微笑んでいるはやてを見つめる。
色々な意味が籠もっている言葉だった。

はやてにしてみれば、足に関しては諦めている部分も有る。だからと言って、先生に無駄な事はしないでと言うつもりは無い。

石田先生とは長い付き合いだ。人となりは知っている。

例え自分がどうなろうと、最後まで最善を尽くしてくれる人だと判っている。
だから最後までお任せする、そんな気持ちも含まれる言葉だった…

一種の諦観に似たものかもしれない。別に死にたい訳では無い。

しかし常に病気の不安を抱えて来たはやてにとっては、病気で死んでも仕方無いという、ぼんやりとした思いが有るのだろう…

何となく察したゼロは胸が潰れる様な気がした。

幼い身でそこまで自分を諦めて来たはやての心中…自分達が来るまでどうだったのか想像すると、泣きたい様な気持ちになってしまう。

ゼロは自然、はやての肩に手を置いていた。
はやてはそんなゼロを見上げ、照れくさそうな表情をするが、その手の感触を確かめる様にそっと手を重ねた。

はやてを先に診察室から退室させ、ゼロ1人で先生から話を聞いていた。

「ゼロ君はやてちゃん日常生活はどう…？」

「足の麻痺以外は健康そのものです…足の事を除けば、病気だなんて信じられない位に…」

「そうなのよね…」

先生は一瞬視線を落とすが、直ぐにゼロに向き直り、

「辛いと思うけど…私達も全力を尽くすわ」

「はい…お願いします…」

ゼロは深々と頭を下げた。無力さを痛感する。出掛ける前にシャマルに言った強がりを思い出して、自分に腹が立った。

（何がウルトラマンゼロだ…はやて1人助けられねえ役立たずだ…！）

心の中とは裏腹に、ゼロは表面上は静かに先生の話を聞いている。石田先生はゼロの心中を、知ってか知らずか説明を続け、

「今はなるべく、麻痺の進行を緩和させる方向で進めてるの…」

そこで先生は、ゼロを痛ましそうに見ると、

「これから段々…入院を含めた辛い治療になるかもしれないわ…」

「…本人と相談してみます」

ゼロはそう言うが、とても本人にありのままを伝えられそうになかった。ある程度ぼかして伝えなければならないだろう。

ゼロは先生に頭を下げてお礼を言うと診察室を退室する。

重くなりそうになる足取りに『蒐集』さえ終われば と気合いを入れ、廊下で待つはやての元に向かった。

病院の帰りにゼロははやてを連れ、図書館に立ち寄った。

茜色の空から、柔らかい夕日の光が射し込む図書館で、バッタリすずかと出会う。

「すずかちゃん今日は何借りたん?

「童話の本なんだけど、何だかちょっとジンと来る感じの本なの」

「あっ、童話私も好き、面白そうやね」

「読んでみる？一巻がまだ棚に有ったよ」

「うん、後で見てみる」

はやてはすずかと、本の話を楽しそうにしている。
ゼロはその様子を少し離れた場所で、微笑ましそうに眺めていた。
しかし車椅子の網ポケットの病院の薬袋を見て、表情をキツくするゼロであった。

ーーー

クロノの質問に孤門は肩を竦め、

「海鳴市街は車であちこち回ってみたけど、特に反応は無かったよ…」

ため息を吐くと、ソファーに腰掛けた。

管理世界にも現れた『スペースビースト』の黒幕に当たる『ダークザギ』の存在は管理局でも見逃せず、孤門はそちらの捜査を任されていた。

ビーストの反応を追えるのは、この世界で彼だけである。

基本管理外世界には不干渉の管理局であるが、ビーストの大元が関わっている以上放って置く訳には行かない。

ザギが存在するなら、また何時ビーストが管理世界に現れるか分からないからだ。

無論、孤門の役目はそれだけでは無い。ウルトラマンゼロや守護騎士達が現れた時は、現場に向かう手筈だ。

ゼロと守護騎士達の捜索は、アースラの武装局員とグレアム提督の口利きで手配出来た、武装局員一個中隊があたっている。

『ダークザギ』に関してクロノは『闇の書』の捜査の最中のタイミ

ングの良すぎる『闇の巨人』の出現に疑問を抱いていた。
今回の件に何か関わっている可能性が高い気がしてならない。
孤門もその考えに賛成した。一度体が消滅する程のダメージを受けた『ザギ』が、再び力を取り戻そうとしているのかもしれないと。

「それで…そっちの方はどうなんだい？」

今度は孤門からの質問に、エイミィは空間モニターを2人の前に浮かべ、

「昨日の夜もやられてるの…魔導師十二人に、野生動物が四十匹以上やられてる…」

モニターに『蒐集』を受けた、殆ど怪獣の様な野生動物のデータが映し出された。
クロノは、魔導師でなくても魔力を奪えるの事に驚きつつも、モニターを見つめる。
そんなクロノにエイミィは、普段の陽気さを脇に退け、真剣な表情でモニターに過去に記録された『闇の書』の映像を映し出し、

「『闇の書』のデータを見たんだけど…何なんだろうねこれ…？魔

力蓄積型の『ロストロギア』…魔導師の魔力の根源である『リンカーコア』を食って、その頁を増やして行く…」

クロノはモニター画像の、剣十字の付いた本を険しい目で見上げ、

「全頁である６６６頁が埋まると、その魔力を媒介に真の力を発揮する…次元干渉レベルの巨大な力をね…」

「それで、本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると、白紙に戻って別の世界で再生する…」

エイミィの言葉にクロノはコクリと頷き、

「様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護者によって守られ、魔力を食って永遠を生きる…破壊しても何度でも再生する危険な魔導書…」

「それが『闇の書』……」

孤門は独り言の様にその名を呟いた。その表情にわずかに複雑なものが混じるが、クロノとエイミィは気付かない。

「私達に出来るのは『闇の書』の完成前の捕獲…？」

エイミィの言葉にクロノは頷き、孤門に視線を向けると、

「そう…あの守護騎士達を捕獲して、更に主を引きずり出さないといけない…
それにはまず孤門に、ウルトラマンゼロを抑えて貰うしかない…
主を捕らえられれば彼も解放されるかもしれない…」

孤門はゆっくりと頷き、クロノとエイミィを見ると、

「彼は…ウルトラマンゼロは、僕が止めてみせる…！」

その言葉に熾烈なものを感じ、思わず息を呑むクロノとエイミィであった。

ーーー

こえて来る。
武装局員達が十数人地面に倒れ伏していた。

『闇の書』関連の探索をしていた一隊である。そしてその中に立つ、3つの人影が有った。

闇に光る目にカラータイマー、ウルトラマンゼロとシグナム、ヴィータの様だが…

「行くぞ」

ゼロが促すと、シグナムとヴィータは頭を下げ、その後に続く。その表情は暗くて良く見えない。

突如として、先を歩くゼロの体色が、赤と青から徐々に漆黒と橙に変わって行く。
『ダークロプスゼロ』であった。
ゼロの偽物の正体は久々に姿を現したダークロプスだったのだ。

しかしそうなると、ダークロプスに付き従う、シグナムとヴィータに良く似た2人は何者だろうか…？

ダークロプスはかったるそうに首を捻り、2人に紅い二つ目を向け、

「お前ら、殺す様なへまはしてないな…？まあ…何人死のうが知った事じゃないが、やりすぎると後々面白くなくなるし、アイツが文句を言うからな…」

「…手抜かりは有りません…」

「…はい……」

2人はかしづく様に深々と頭を下げる。その表情は相変わらず陰になり、どんな表情を浮かべているのか判らなかった。その時だ。

「手ぬるい事を…塵芥共などどうとでもなる、潰してしまえば良いものを」

上空から少女の声が降って来たかと思うと、六枚の羽を開いた何者かがダークロプスの横にフワリと舞い降りた。

まだ少女の様だが、闇に溶け込んだ姿は良く判別出来ない。ダークロプスはその声の主に、紅い目をギロリと睨む様に向け、

「俺に指図する気か…？」

低い声で淡々とした調子で言う。明らかに声の主は動揺してビクッと身を震わせる。しかし改めてダークロプスを見上げ、

「あなたが…あの様な下賤な紛い物の戯れ言を聞くのが納得がいかぬ！」

六枚羽の影は我慢ならないと言った感じでまくし立てた。
ダークロプスは可笑しくて堪らないという風に、クツクツと体を震わせ、

「いいか…？こいつは俺の楽しみだ。全ては後々のお楽しみの為ってヤツだ…
楽しみには、それなりの苦労と下準備が有ってこそ達成感が湧くんだぜ…？
まあ…黙って見てなフハハハハハッ…！」

狂気さえ感じられる声でダークロプスは笑う。その笑いは寒気を感じさせる程の凶々しさに満ちていた。

「無粋な差し出がましい事を…お許し下さい」

六枚羽の少女はダークロプスにうやうやしく跪(ひざまずい)いた。
シグナムとヴィータに良く似た2人は、その様子を無言で見つめている。
心なしかヴィータに良く似た少女が、その小さな手を強く握り締めた気がした。

ーーー

街の夜景を見下ろし呟いた。今頃はやて達は夕食の買い出しに出掛けている筈である。
屋上のドアを開けて下に降り様とした時だ。

《ゼロ聞こえるか！？》

突如頭の中にシグナムの念話が響いた。ただ事では無い様子である。

《どうしたシグナムっ！？》

《ヴィータとザフィーラが管理局に補足されたらしい！》

《何だとっ！分かった俺も直ぐそっちへ行く！》

《分かった、場所はビル街の中心部だ、手前で合流するぞ》

《分かった今行く！》

当然『ウルトラマンネクサス』も出て来る筈である。だからシグナムもこちらを呼び出したのだ。

ゼロは返事をするが早いが、内ポケットから『ウルトラゼロアイ』を取り出した。
何の躊躇も無く勢いを付けて、ビルの屋上から身投げの様に飛び降りた。

地上に向かって落下しながらゼロアイを両目に装着する。

「デュワッ！！」

目も眩むスパークに包まれ、ゼロの体がウルトラマンとしての強靭な体に変換される。

重力制御で落下から一気に上昇したゼロは、シグナムの指示した場所目掛け、矢の様に一直線に飛んだ。

海鳴市街地上空で、ヴィータとザフィーラは武装局員十数名に囲まれていた。

リンディは怪しいと思われる何ヶ所かに、あらかじめ探知網を張って置いたのである。

ヴィータ達は『蒐集』を終え、戻って来た所を補足され、捕獲用の結界に閉じ込められてしまったのだ。
円陣を組んでヴィータとザフィーラを包囲する武装局員達。

「管理局か…」

身構えるザフィーラに、ヴィータは忌々しげに局員達を見回し、

「でもチャライよコイツら、返り討ちだ！」

『グラーフ・アイゼン』を正面に構えるヴィータにザフィーラは、

「怪我はさせるなよ…包囲を突破出来ればいい…」

「判ってんよ」

ヴィータがそう切り返した時だ。周りを包囲していた局員達が一斉に距離を取った。

「あっ…？」

ヴィータが眉をひそめた時、

「上だ…！」

ザフィーラの声に上を見上げると、上空に青い魔法陣に立つクロノを中心に無数の青い光が広がっていた。
青い光は魔法で作られた刃である。クロノの砲撃魔法だ。

「スティンガーブレイド・エクスキュージョンシフトっ！！」

クロノの叫びと共に、魔力で精製された無数の光の刃が雨の如く一斉に、ヴィータとザフィーラに降り注いだ。

ザフィーラはヴィータを庇って光の刃の矢面に立ち、魔法障壁を展開する。

轟音と共に光の刃はザフィーラの障壁に激突し、爆発と爆煙が2人を包んだ。

「…少しは…通ったか…？」

魔力を消耗したのか、息を切らすクロノの前で、爆煙が晴れて行く。
中から無傷のヴィータと、防ぎきれなかった光の刃を腕部に数本突き刺したままのザフィーラが姿を現した。

「ザフィーラっ！？」

声を上げるヴィータにザフィーラは眉一つ動かさず、

「気にするな…この程度でどうにかなる程柔じゃ無い、ヤプールの時に比べれば…！」

そう言うと、腕の筋肉の力のみで光の刃を一気に跳ね飛ばした。凄まじい筋力である。

「上等！」

ヴィータは頼もしそうに微笑むと、ギロリと上空のクロノを睨む。
砲撃魔法が通用しなかったクロノは身構えるが、状況は不利である。

攻撃を仕掛け様としていたヴィータは、ふと強い気配を感じ地上に目をやった。

「アイツら！」

ヴィータの目に、ビルの屋上に立つ二つの人影が入った。なのはとフェイトである。

後方にアルフとユーノの姿も見えた。そしてもう1人、孤門の姿も…

ヴィータはその見た事の無い青年の姿を見て、

（アイツ…まさか！？）

思い当たったヴィータはザフィーラの方を見ようとした時、地上のなのはとフェイトが待機状態のデバイスを掲げた。

「レイジング・ハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「「セーット、アァァップ！！」」

桜色と金色の魔法光がそれぞれの体を包み込み、バリアジャケットがなのはとフェイトの体に装着される。

そしてレイジング・ハートとバルディッシュのコッキングカバーがスライドして、内部のリボルバーシリンダーを一瞬露出させた。

「アイツらのデバイス、あれってまさか!?」

『カートリッジシステム』を使うヴィータには直感で直ぐに分かった。なのはとフェイトのデバイスにも、同じものが使われていると。

だがそれに驚く間も無く、ヴィータが怪しんでいた青年、孤門は『エボルトラスター』を一気に引き抜いて、天高くかざした。

「うおおおおおおおおおおっ!!」

薄暗い結界の中が、真昼の様に照らし出される。光が収まると、銀色の超人がビルの屋上に立っていた。

胸部のY字に似た真紅のエナジーコアに光る両眼。人間サイズだがヴィータもザフィーラも目にした姿だ。

「やっぱりお前がネクサスかあっ!!」

叫ぶヴィータを、ウルトラマンネクサスはゆっくりと見上げた。

つづく

第４２話　闇ー ダークロプスー（後書き）

偽物はダークロプスです。バレバレだったとは思いますが…それ以前に忘れられている可能性が…

小劇場

ゼロはビルの屋上から何の躊躇もせず、身投げの如く飛び降りた。
内ポケットから『ウルトラゼロアイ』を…

「あれっ…？」

『ウルトラゼロアイ』を…

「無いっ！？」

パニクるゼロ。

その頃の八神家

洗濯物を畳んでいたはやては、

「あれ…？ゼロアイや、ゼロ兄ウッカリポケットに入れっぱなしにしとる」

「しまったあぁぁぁぁぁぁぁぁっ…」

ゼロは真っ逆様に落ちて行きました…

完

昔見たセブンの漫画で、クリーニングに制服出して変身出来ず、結局そのまま戦ったというのが有りました。（真面目な漫画です）

何かすんません…

それでは次回お会いしましょう。

第４３話　再戦ーリマッチー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

メディコムのウルトラマンゼロの出来に感動する今日この頃です。

それでは第４３話です。

第４３話　再戦ーリマッチー

はやてはシャマルと近所のスーパーに買い出しに来ている所だった。
今晩はすずかが夕食を食べに来るので、張り切って腕を奮うつもりのはやては、色々と食材を吟味している所である。
ふと彼女は、車椅子を押すシャマルを見上げ、

「今日はまだみんな帰っとらんの？早く戻って来れたらええんやけど…」

何気ない言葉だったが、シャマルは少しドキリとしてしまう。
あまり嘘を吐くのが上手くない彼女だが、とりあえずニッコリ笑って、

「ええ～その～念のためと言うか…」

「うん判っとるよ、ビーストがまだ何処かに隠れとらんか調べとるんよね？」

はやてはしどろもどろになるシャマルに笑いかけた。
念の為ビーストが居ないか調べていると、はやてには伝えてあるの

だ。

『蒐集』も管理局の目をかいくぐって、遠くの世界で行わなければならない今、そうでも言っておかないと、留守がちなのが不自然になって来ている。

ビーストの警戒は本当の事なので、嘘では無いと自分に言い聞かせるシャマルだが、後ろめたさが付きまとう。

しかしそのお陰で、鋭い所の有るはやてに怪しまれずに済んでいるのは皮肉であった。

ゼロ達は家に全く居ない訳では無いが、はやてはみんなと過ごす時間が少し減って淋しく感じ、つい口に出してしまった事を後悔した。

（あかん…みんな頑張っとるのに、私がこんなんやと…）

はやては自分の我が儘を振り払う様に、精肉コーナーで大量の肉のパックをまとめて手に取り、

「じゃあ今晩はすずかちゃんも来てくれるし、みんなお腹空かせて来るからお肉はこれ位…」

「はい」

何とか誤魔化せた事にホッとしながら、シャマルは相槌を打つ。一通りの材料を籠に入れてはやては、

「外は寒いし今晩はやっぱ温か、お鍋やね」

「はい」

楽しそうなはやてにシャマルは微笑んだ。

買い出しを終え外に出たはやては、シャマルが買い物カートに食材を詰め込む間、ブルッと寒さに身を震わせた。

この季節寒さが堪える。かじかむ手に息を吐きながら、ふと夜空を見上げ、

「みんなも外で寒ないかな…？」

冬の張り詰めた空に向かい、この場に居ない全員に思いを馳せた。

街中の一角を、丸々包み込む程の広い範囲に、ドーム状の結界が張られていた。
その結界を上空に浮かび見つめる二つの人影。人間サイズのゼロとシグナムである。

「強装型の捕獲結界…ヴィータ達は閉じ込められた様だ…」

冷たい夜風に八重桜色の髪を揺らしながら、シグナムはゼロに状況を説明した。

「ちっ…罠を張られていたって訳か…当然ネクサスの奴も居るだろうな…」

ゼロは夜空に光る目を結界に向ける。

《Ｗａｈｌｅｎ　ｓｉｅ．Ａｋｔｉｏｎ！》（行動の選択を！）

『レヴァンティン』がシグナムに次の行動の指示を求めた。彼女は古くからの相棒を見据え、

「レヴァンティン…お前の主はここで退く様な騎士だったか…？」

《Ｎｅｉｎ！》（否！）

シグナムはレヴァンティンを掲げ、

「そうだレヴァンティン…私は今までも、ずっとそうして来た…ゼロもいいな？」

「聞くまでも無え、速攻でヴィータとザフィーラを拾ってバックレようぜ！」

ゼロの即答にシグナムは不敵に微笑むと、カートリッジをロードしようとするが…

「カートリッジの無駄遣いは止めとけ、結界に穴を開けるのは任せろ…！」

ゼロがそれを押し留めた。現在度重なる『蒐集』と連戦でカートリッジの消耗が激しい。

時間が足りない上に、魔力注入作業はシャマルのみという状況だ。当然シグナムとヴィータが使えるカートリッジの数は限られる。

何が起こるか判らない状況の中、カートリッジの無駄遣いは避けるべきだとゼロは判断したのだ。

「済まないな…頼む…」

シグナムもここはゼロに任せる事にした。

ゼロは結界を見据えると、右足にエネルギーを集中させる。その足が炎の如く赤熱化した。

ヴィータは、なのはとフェイトに向かい『グラーフ・アイゼン』を構える。

フェイトは険しい表情で『バルディッシュ・アサルト』を構え様とするが、なのはがそれを止めた。

「なのは…」

不満そうなフェイトに、なのはは一歩踏み出し、

「フェイトちゃんまず私とあの子とで、話をさせて」

フェイトは何か言おうとしたが、なのはは首を横に振り、

「フェイトちゃんの気持ちも判るけど…クロノ君もまず話をしようって言ってたじゃない、お願い！」

真剣な目で頭を下げた。フェイトは思い当たる。
前回の戦いの時、助けられたのでは無いか？という疑問を抱えていたなのはは、確かめずにはいられなかったのだろう。
フェイトは最初、構わず攻撃しようと物騒な事を考えていたが、

「…判ったよ…でも相手が何かして来たら直ぐに反撃するよ…」

梃子でも退かないと言った様子のなのはに、フェイトは一旦は矛を納める事にする。他ならぬ友達の頼みだ。
しかしフェイトも退く気は無い。何か有れば直ぐに対応出来るよう

にしておくつもりだが…

「ありがとうフェイトちゃん」

なのははフェイトが我慢して自分を立ててくれた事に感謝する。彼女は改めてヴィータ達を見上げ、

「私達は戦いに来たんじゃ無いの、話し合いに来たの！」

そう語り掛けた。ヴィータは眉をひそめる。なのはは続けて、

「それに…この間は私を助けてくれたんじゃ無いの？『闇の書』の完成を目指しているのも、理由が有るなら聞かせてくれない？」

ヴィータは少し迷った。『ガルベロス』の催眠波動や偽物のせいで、こちらを完全に悪人だと決め付けていると思っていたからだ。

しかしだからと言って『蒐集』がバレた今、ハイそうですかという状況では無い。

ヴィータは管理局を信用出来なかった。過去他のマスターの元で、やり合った事も有る敵だったのだ。

例え信用出来たとしても、他がどう反応するのか疑問だった。
それになのはが何処まで本気なのか判らない。ゼロからの話と、フェイトに化けた時の出会いの印象しか無いヴィータには、完全になのはを信用出来なかった。

何よりはやてに類が及ばない保証は無い。ヴィータは、そこまで理論整然と考えた訳では無いが、ともかく相手にしないのが一番だと思う事にする。

そこで彼女は少し悪戯心を出した。こっちの都合も知らず、話し合いと言うなのはをからかってやりたくなったのだ。

「あのさあ…ベルカのことわざにこういうのが有んだよ…」

ヴィータは偉そうに腕組みして、なのはとフェイトを見下ろす。
ザフィーラは意外な様子でヴィータを見た。あまり彼女が言い出しそうに無い台詞だったからだろう。

「和平の使者なら槍は持たない…」

ヴィータは人の悪い笑みを浮かべて言う。ちょっとアタシカッコイイ事言ったみたいな様子である。

なのはとフェイトは困った様に顔を見合わせた。意味が解らないのだろう。小学生にはちょっと早かった様だ。

ヴィータは得意気に『グラーフ・アイゼン』をズイッと突き出して、なのはを指し、

「話し合いをしようってのに、武器を持ってやって来る奴が居るか馬鹿っ！て意味だよ、ば～かっ」

一瞬なのはは面白い顔になってズッコケかけるが、

「有無を言わさず襲い掛かって来た子がそれを言う！？」

ムッとして文句を付けた。それに続く様に、ヴィータの横でやり取りを黙って聞いていたザフィーラが、

「…それは、ことわざでは無く、小話のオチだ…」

冷静に間違いを指摘した。

「うっせえな、どうだっていいだろ？」

決まりが悪いヴィータは逆ギレ気味に開き直ろうとした時、頭上の

結界の壁が轟音を立ててスパークした。
そして2つの光が近くのビルの屋上に凄まじい勢いで落下して来た。
結界を抜いて来た余波で爆煙の様な煙が舞う。

『来たか…』

ヴィータとなのはのやり取りを黙って見ていた孤門・ウルトラマンネクサスが低く呟いた。
煙が晴れるとその中に、膝を着いて降り立ったゼロとシグナムが姿を現す。
ゼロの右足はゼロキックの余波で僅かに赤熱化している。2人は身を起こすと、なのは達を見据えた。

「ゼロさん…シグナム！」

フェイトは2人の姿を認め、それぞれに違った感情の籠もった視線を向け、ゼロに向かって叫んだ。

「ゼロさん、その人達と一緒に居てはいけない！理由が有るなら私達が手助けしますから、こっちへ来て下さい！」

フェイトの必死の叫びだ。彼女の呼びかけにゼロは申し訳ないと思

いつつも、

『済まねえな…だが、今の状況でそれは出来ねえ相談なんだ…このまま見逃してくれねえか…？』

更に偽物の件を言おうとしたゼロの肩に、シグナムが手をやり押し留めた。

「今の状況では何を言っても無駄だろう…今は此処を切り抜けるしか無い…」

その様子がまたフェイトの神経を逆撫でした。彼女の目にはシグナムがゼロをたぶらかしている様にしか見えない。

「なのは、やっぱりゼロさんを助けるには、シグナム達を倒すしかないよ…！」

フェイトの感情を露わにした言葉になのはは少し考えたが、コクリと頷く。
どの道話を聞くには相手に勝たなければならない様だ。

「ユーノ君、クロノ君、手出さないでね、私あの子と1対1だから

！」

なのははヴィータを見据えて対マン宣言をする。後方で合流していたクロノとユーノは少し退いてしまう。

その様子を見ていたアルフに、フェイトから念話が入った。

《アルフ…私も…彼女と…！》

フェイトはこちらを無感動に（少なくとも彼女には、そう見えた）見つめるシグナムを険しい目で見据えている。こちらも1対1の勝負を望んでいた。

アルフもフェイトの決意を感じ取って頷くと、

「ああ…アタシも野郎に、ちょいと話が有る…」

ヴィータの隣のザフィーラを睨み付ける。我慢ならないといった表情だった。

『当然貴様は俺相手って訳か…』

ゼロは先ほどから、こっちをジッと見ているネクサスを挑発する様に指差した。

（チッ…こちとらサッサと逃げてえだけなんだが…簡単には行かねえみてえだな…）

理想はこのまま全員で逃げてしまう事だが、そう簡単に逃がしてくれそうに無い。ネクサス達を退けない限り脱出は難しかった。

（敵の思う壺かよ…くそったれっ！）

自覚は有っても今は敢えて乗るしか無い。今捕まる訳にはいかないのだ。少なくとも『蒐集』を終えるまでは…

お互いの対戦相手は決まった様だ。互いの相手と視線を合わせるなのは達を見て、後方のユーノとクロノは、

《ウルトラマンゼロは聞いてくれないか…ユーノそれなら、僕と君で手分けして『闇の書』の主を捜すんだ》

《『闇の書』の…？》

此方を意外そうに見るユーノにクロノも視線を向け、

《連中は持っていない…おそらくもう1人の仲間か主かが何処に居る、僕は結界の外を捜す、君は中を》

《分かった》

ユーノは真剣な顔で頷いた。ゼロの方を一瞬見ると、

（待ってて下さい…何とか解放してあげますから…！）

ユーノは命を救われた恩を忘れない。そうゼロに誓うとその場を素早く離れた。

「レイジング・ハート、カートリッジロード！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

「バルディッシュ、カートリッジロード…！」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ》

なのはとフェイトの声にレイジング・ハートとバルディッシュが応える。

ヴィータの眼下で、ビルの屋上に立つ2人それぞれのデバイスが『カートリッジシステム』を起動させた。
以前とは比べものにならない量の魔力が湧き上がる。

「デバイスを強化して来たか…気を付けろヴィータ！」

「言われなくても！」

ザフィーラの警告にヴィータは突っかかった。何か言われると、つい反発してしまうのは彼女の仕様である。

シグナムはレヴァンティンを構え、油断無くフェイトを見据えた。
その表情は冷静そのものだ。

ゼロはネクサスに向かい、何時でも反応出来る様に全身の無駄な力を抜く。

変に体に力を入れ過ぎると反応や動きが鈍くなる。『ウルトラマンレオ』の教えだ。格闘技の基本でもある。

各自の戦意が高まる次の瞬間、８つの光がほぼ同時に空に飛び上がった。

先に飛び出したヴィータを、なのはが高速で追尾する。ヴィータは軽蔑した様に振り向き、

「何だよ口だけか…結局やんじゃねえかよ！」

ヴィータの挑発に、なのはは拳を握り締め、

「私が勝ったら話を聞かせて貰うよ、いいね！？」

ヴィータはその強引さに鼻白みながら、急制動をかけ空中で静止すると、鉄球を素早く取り出しアイゼンで打ち出した。

鉄球に魔力をプラスした射出魔法『シュワルベ・フリーゲン』だ。

４つの真紅の光の攻撃を、なのはは高度をとってかわす。
ヴィータはその隙を狙ってアイゼンを『ラーケテンフォルム』スパイクと噴射口が形成された形態に変化させた。
推進剤が勢い良く噴射し、ヴィータの体が独楽の様に回転する。

「でえええええええいっ！！」

その勢いで一気になのはに一撃をお見舞いする。以前の様に戦闘不能に追い込むつもりだったが、

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

レイジング・ハートの声と共に、なのはは右手を突き出す。
彼女の前面に張り巡らされた桜色の魔法障壁が、強固な盾となってアイゼンの一撃を受け止めた。

「硬え～っ」

火花を散らすアイゼンと魔法障壁だが、予想以上の頑強さだ。
会心の笑みを浮かべるなのは。彼女は障壁をバーストさせて離脱を計る。

中規模の魔力爆発が起こり、ヴィータとなのはは互いに吹き飛んだ。

「うわあっ！」

吹き飛ぶヴィータ目掛けて、素早く態勢を立て直していたなのはの目標追尾型砲撃魔法『アクセル・シューター』が襲う。
一度に十数発の桜色の魔力追尾弾である。

「！？」

不意を突かれるヴィータだが、彼女の周りを囲む様に飛び回る魔力弾を見て、

「アホかっ、こんな大量の弾、全部制御出来る訳がっ！」

恐れるに足りずと思ったヴィータは再びシュワルベ・フリーゲンをなのはに打ち出した。
なのはの四方から同時攻撃する様にコントロールする。

《Ｉｔ　ｃａｎ　ｂｅ　ｄｏｎｅ．ａｓ　ｆｏｒ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．》（出来ます。私のマスターなら）

レイジング・ハートの声と共に、制御仕切れないと思われた魔力弾が、なのはに迫る鉄球を同時に粉々に打ち砕いた。
破片と化してしまう鉄の塊。

「ああ…」

ヴィータは思わず息を呑む。もちろん徹底的に、カートリッジシステムに慣れる為に特訓を重ねた成果だが、恐るべき才能であった。
これで魔法と出会ってから、1年と経っていないというのだから驚きである。

「約束だよ、私達が勝ったら事情を聞かせて貰うって！」

なのははそう宣言すると、周囲を飛び交う桜色の魔力弾をヴィータ目掛けて一斉に向かわせた。

「くっ…！」

ヴィータはとっさに自分の周囲に魔力障壁を張り巡らした。
真紅のクリスタル状の障壁に、桜色の魔力弾が嵐の様に何度も激突

を繰り返す。
強固なベルカ式の防御壁にひびが入って行く。

「このお～っ」

ヴィータは攻撃を繰り返すなのはを睨み付けた。

紫と金の光が、空中で何度も激突し合う。

「はあああああああっ！」

フェイトがバルディッシュを振り被り、高速で上昇する。

「うわあああああああっ！！」

シグナムが降下しながら、レヴァンティンを大上段から両断せんばかりの勢いで振り下ろす。
鋭い金属音を立てて2人のデバイスが打ち合わされた。
競り合うシグナムとフェイト。さすがに不利と見たフェイトは次の瞬間弾かれる様に離脱し、距離を取った。
フェイトの周りに金色の魔力スフィアが次々と出現する。砲撃魔法の態勢だ。

「プラズマランサー…ｆｉｒｅ！」

雷の様な轟音を上げ、シグナムに迫る電光の槍の群れ。フェイトの得意魔法『フォトンランサー』の強化版だ。
シグナムは動じず、炎の魔剣と化したレヴァンティンを構え迎え撃つ。

「ふわああっ！！」

気合い一閃、レヴァンティンの一撃で金色の槍の一団を弾き返した。
しかしフェイトの操作で、弾き返したプラズマランサーが空中で向きを変え、再びシグナムに襲い掛かる。

厄介な攻撃であった。フェイトの攻撃にも一切の容赦が無い。憎しみが籠もっている様だった。

とっさに上空に逃れるシグナムだが、外れたプラズマランサーは再び向きを変え、シグナムを追撃する。

「えええいっ！！」

素早くカートリッジをロードしたシグナムは、再びレヴァンティンを業火の剣と化し、炎の斬撃波『疾風』で金色の槍の一団をまとめて消滅させた。

しかし息つく暇も無い。隙を狙ってフェイトがバルディッシュを『ハーケンセイバー』電光の大鎌に変化させ、切りかかる。鬼の様な連続攻撃だ。

研ぎ澄まされた反射神経で反応したシグナムも、レヴァンティンを『シュランゲルフォルム』蛇腹状にして迎え撃つ。
ぶつかり合った魔力が空中で爆発を起こした。

爆発前に一瞬早く離脱していたシグナムとフェイトは、間合いを取って対峙する。

シグナムは胸の部分の騎士甲冑が切り裂かれていた。フェイトも腕部分には痣が浮いている。

バリアジャケットは、素肌を晒している部分も含めて全身を防御している。フェイトも防御を破られたのだ。

シグナムはこんな時にも関わらず高揚するものを感じた。

確かに此方は連戦続きな上に、カートリッジの使用も控えなければならず、不利な状態で戦っている。

フェイトは支給品なのか、カートリッジを惜しげもなく使って来るが、それでも彼女の実力に感心する。

並みの魔導師なら、とうにシグナムに倒されている筈だ。自然彼女は笑みを浮かべていた。

「フッ…強いな…テスタロッサ…それにバルディッシュ…」

レヴァンティンを剣形態に戻しつつ、賞賛の言葉を掛ける。

《ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ》

バルディッシュが光栄とばかりに返事をした。フェイトは暫く黙っていたが、

「あなたとレヴァンティンも…シグナム…」

と賛辞の言葉を返す。何故か返さなければいけない気がした。理由は分からなかったが…

《ｄａｎｋｅ》

レヴァンティンも感謝の意を現した。シグナムはレヴァンティンの鞘を出現させ、レヴァンティンを一旦収めながら、

「この身に成さねばならぬ事が無ければ心躍る闘いだった筈だが…仲間達と主の為、そうも言ってられん…悪いが眠っていて貰おう」

シグナムの足元に紫色のベルカ式の魔法陣が展開され、彼女は居合い抜きの構えを取る。

正直殺さずに済ませる自信は無い。それ程フェイトは力を着けていた。だがゼロとの誓いを破る訳にはいかない。

自信が無くてもやるしかない。例え自分が不利になろうと…それが八神はやての騎士たる誇りだった。

フェイトは、何故シグナムを誉める様な事を言ってしまったのか、少し混乱していたが、直ぐにゼロに助けられた事を思い返し、

「勝つのは私です…ゼロさんを解放する為に、あなたを倒します…！」

戦意を紅い両眼に込め、バルディッシュを下段に構えた。

ゼロとネクサスは色の無い結界の空を超音速で飛ぶ。ネクサスはゼロに向かい、

『お互い巨大化は止めておこう、結界が壊れたら僕達の戦闘で被害が出る』

『言われるまでも無え！！』

ゼロは怒鳴りつつ牽制で、額のビームランプから『エメリウムスラッシュ』を放つ。

ネクサスは青白い光のラインを右腕の『アームド・ネクサス』で光線を吸収してしまう。

アームド・ネクサスは相手の光線の類を吸収してしまう事も可能なのだ。

『此方も行かせて貰うよ！』

ネクサスは飛行しながらアームド・ネクサスを発動させる。青い光がその全身を包み込んだ。

『何だ！？』

ゼロがネクサスの異常に声を上げた。ネクサスの体が青を基調としたものとなり、生体甲冑も形を変える。『ジュネッス・ブルー』形態だ。

（また姿を変えやがった？アイツ単独で何種類のフォームチェンジが出来るんだ！？）

ゼロはネクサスの特殊能力に驚いていた。ゼロが知っているフォームチェンジ出来るウルトラマンは2人。『ウルトラマンメビウス』と『ウルトラマンダイナ』である。

メビウスは単独で『バーニング・ブレイブ』と言う強化形態をとる事が出来、他のウルトラマンや人間と合体する事で『インフィニティ』『フェニックスブレイブ』という形態になる事が可能だ。

ダイナは状況に応じて『ミラクル』『ストロング』の二種類にフォ

ームチェンジする事が出来る。
こちらはスピード特殊能力型と、パワー型に能力を特化させたものだ。

対するネクサスの能力はどのようなものか？ゼロは頭部の『ゼロスラッガー』を両手に持ち、先手必勝とばかりに突撃した。

対するネクサスは右腕の『アローアームド・ネクサス』を発動、右腕の甲部分から光の剣が出現した。『シュトローム・ソード』である。

『シェアアアッ！』

シュトロームソードを構えたネクサスが、重力を無視して急激に空中で反転すると、ゼロに斬り掛かった。

『野郎っ！！』

ゼロもゼロスラッガーを手に、迎え撃つ。

シュトロームソードとゼロスラッガーが、火花を上げて打ち合わされる。互いのエネルギーがスパークした。

『うおっ！？』

シュトロームソードの強烈な一閃に、スラッガーを持った両腕が跳ね上げられる。
ソードの追撃を避け、ゼロは後方に飛び退いて距離を取った。

（コイツ…！姿が変わって、明らかに赤い時よりパワーアップしてやがる！？）

ゼロはどんどん力を増して行くネクサスに正直脅威を感じたが、だからと言って退く様なタマでは無い。
反撃に出るべく、スラッガー2本を前方にゆっくりと繰り出した。

その頃ユーノは結界内部を探索魔法で探り、クロノは結界周辺をしらみ潰しに捜索していた。
2人共魔力反応を捜すのに気を取られ、他の存在が結界内部に入り込んだ事に気付いていなかった。

結界内部に侵入した人影は3つ有った。
まるで闇が凝固して人の形をとった様な影達は、激戦を繰り広げるゼロ達を見上げる。影の1人が前に踏み出し、

『儀式は順調の様だ…』

そう呟いたのは骸骨の様な生体鎧に、漆黒の黒と血塗られた様な紅の体、人間大の『ダークメフィスト』であった。もう1人の影が続いて、

『全ては『冥王』の御心のままに…』

三本の角に赤と銀の体『ダークファウスト』が続ける。

『……』

無言の影は漆黒の体に異形の三つ首『ダークルシフェル』であった。

『…では我らも行くぞ…』

メフィストが指示をすると、闇の巨人3体は一斉に前に踏み出した。

つづく

第４３話　再戦ー リマッチー（後書き）

ウルトラマンメビウスは様々な形態が有ります。何故メビウスだけ？と思いましたが、インフィニティーが他のウルトラマンと合体して出来たのを見るに、他のウルトラマンもインフィニティー形態をとれるのかもしれません。

ダイナはストロングが好きでした。ムキムキどころか、ガチムキって感じで。素手で怪獣を倒して行くのもパワフルでした。（確か劇場版以外無敗）

原作ではなのは達は、戦闘経験もカートリッジシステムの熟練度も遥かに及ばない（というか、ぶっつけ本番…）のにシグナム達と互角に戦っていたのが非常に気になった覚えがあります。

それでこれなら仕方無いかなという風にしてみましたが、どうなんでしょうね…駄作者のやる事ですから。

それでは次回お会いしましょう。

第４４話　共闘ー ジョイント・ストラグル ー（前書き）

読んで下さりありがとうございます。

けっこうな長さになって来ました。飽き性の私が続けて来れたのも皆さんのお陰です。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

第４４話　共闘ー ジョイント・ストラグルー

色の無い無人の表通りが次々と魔力の余波で吹き飛び、店のショーウインドのガラスが粉々に砕け散る。

「うわあああああっ！！」

アルフの魔力で強化された拳が、ザフィーラに叩き込まれた。腕をクロスさせ魔法防御で対抗するザフィーラ。
互いの魔力が真っ向からぶつかり合う。

「デカブツ、アンタも誰かの使い魔か！？」

アルフが叫ぶ。憤りを覚えている様だ。以前の自分を見ている様に感じたのかもしれない。ザフィーラはその拳を凌ぎながら、

「…ベルカでは騎士に仕える獣を使い魔とは呼ばぬ…、主の牙、そして盾…守護獣だあっ！！」

「同じ様なもんじゃんかよおっ！！」

アルフが更に拳に力を込めた。ザフィーラも防御を強化する。次の瞬間魔力が対消滅を起こして、爆発が起こった。

素速く爆発から離脱したザフィーラは後方に跳んで距離を取る。その頭上を戦闘を継続中のヴィータとなのはが飛ぶのが見えた。

《…状況はあまり良くないな…》

ザフィーラは、応援で駆け付けていたシャマルに中の様子を伝える。

《ゼロやシグナム、ヴィータが負けるとは思えんが…此処は退くべきだろう…シャマル何とか出来るか？》

結界の直ぐ近くのビルの屋上で、周りの状況をチェックした騎士甲冑姿のシャマルは難しい表情で、

《何とかしたいけど…局員が外から結界を維持してるの、私の魔力じゃ破れない、シグナムのファルケンか、ヴィータのギガント、ゼロ君の光線級の力が出せなきゃ…》

シャマルは悔しげに目を伏せる。後方支援を主とする彼女には無理な話だった。

《3人共手が離せん…やむを得んアレを使うしか…》

《分かっているけど…でもっ》

其処まで言った時、シャマルの真後ろで金属音が鳴った。

「あっ…！？」

後頭部に突き付けられるデバイス。クロノであった。結界の外を捜索していた彼に発見されてしまったのだ。

《どうしたシャマル？》

ザフィーラの念話にも応えられない。クロノはシャマルの動きに注意しつつ、

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いであなたを逮捕します」

シャマルは愕然とした。此処で捕まってしまったら、はやてを助けられない。絶望感が襲った。

「抵抗しなければ弁護の機会があなたには有る…同意するなら武装の解除を!?」

クロノは背後の気配に気付き、とっさに振り向いた。しかしもう遅い。

「うわっ!?」

痛烈なキックの一撃が襲った。向こう側のビルまで吹き飛ばされ、屋上のフェンスに叩き付けられるクロノ。

「…仲間…?」

クロノはかろうじて防御が間に合ったので、ダメージは少ない。何とか立ち上がり顔を上げる。その目に映ったのは白い仮面を着けた男だった。

『オラアアアッ！！』

『シェアアアッ！！』

ゼロの『ゼロスラッガー』と、ネクサスの『シュトロームソード』が火花を上げて激突する。一進一退の攻防だ。

まともに行くとパワー負けすると判断したゼロは、手数の多さと『いなし』武道で言う、相手の力を受け流す技術で、シュトロームソードと渡り合う。

ネクサスはビーストをも一撃で倒す斬撃を次々と繰り出した。
ゼロは後方に素速く飛びすさりソードの攻撃を避ける。追撃を掛け様とするネクサスだが、光線を警戒して此方も一旦後方に退がった。

スラッガーを構えるゼロと、シュトロームソードを前に繰り出し、間合いを計るネクサス。
再び両者がぶつかり合おうとした時だった。

『フハハハハハッ！！』

突如として嘲笑う声が、ゼロとネクサスの頭の中に響き渡った。

『この声は！？』

『むっ？上か！』

ゼロとネクサスは戦闘を一旦中断して、頭上を見上げる。
2人の上空で、暗黒の雲の様な空間異常が起こっていた。その中心から稲妻が走っている。

『コイツはまさか！？』

『ダークフィールド！？』

気付いた時にはもう遅く、ゼロとネクサスは空間異常に巻き込まれ、かき消す様に姿を消した。

「ゼロ！？」

いち早く気付いたシグナムは呼び掛けるが返事は無い。フェイトはその隙を見逃さず斬り掛かる。

（くっ…！）

シグナムはその斬撃をレヴァンティンの一閃で弾き返した。
フェイト達の目にはネクサスが『メタ・フィールド』内にゼロを引き込んだ様に見える。

（ゼロさんの事は孤門に任せるしか無い、私はシグナムを…！）

フェイトはシグナムへの攻撃に集中した。一方シグナム達にはゼロが『メタ・フィールド』に引きずり込まれた様に見えていた。

（ゼロ気を付けろ…！）

シグナム達はそう思いながら、それぞれの相手と相対した。

ゼロとネクサスは、捻くれた異様な空間ゲートを通過し、異形の大地に落下して行く。

『デリャアアッ！』

ゼロは地上に降り立ちながら巨大化する。３万トンを超える巨体が土砂を巻き上げて、赤茶けた大地に着地した。

続いて少し離れた位置に、同じく巨大化したネクサスが大地を揺らして着地する。

ゼロはとっさにネクサスに向かって身構えた。

『貴様っ、ダークメフィストの仲間だったのかあっ！？』

ネクサスはゆっくりと体を起こし、一点を見ると、

『何を馬鹿な事を…！』

その時、三日月型の光刃が飛来した。ネクサスは左腕の『アローアームド・ネクサス』で光刃を弾き返す。

『貴様らはっ！？』

ゼロは光刃の飛んで来た方向に向かって怒鳴る。３体の巨人が姿を現していた。

骸骨の様な姿の『ダークメフィスト』に、異形の道化師を思わせる『ダークファウスト』三つ首の威容『ダークルシフェル』闇の巨人3体の揃い踏みである。

『残念ながら…僕の敵でも有る！』

その声に強い戦闘意欲を込め、ネクサスは闇の巨人達と相対する。
ゼロも闇の巨人達に構えをとり、

『アイツら一体何者だ？何故襲って来やがる！？』

ゼロの疑問に、ネクサスは闇の巨人達から目を離さずに、

『奴らは『ダークザギ』の操り人形…この名を聞けば理由なんて些細な事だろう…？』

『ダークザギ！奴がこの世界に来ているのかっ！？』

ゼロは驚きの声を上げた。
『ダークザギ』直接の関わり合いは無いが『光の国』を襲撃した事の有る、黒い巨人の事は彼も知っている。

ウルトラ兄弟の総力と『ウルトラマンノア』により、時空の狭間に

閉じ込められた筈だったが…

最もザギがその後狭間から脱出した事。元居た宇宙に舞い戻り、様々な策謀を巡らした末に『ウルトラマンノア』に倒された事まではゼロも知るよしも無い。

『冥王復活の為、儀式を始めるとしようか！ファウスト！ルシフェル！！』

メフィストが片手を上げる。それを合図に3体の闇の巨人は地響きを上げて、一斉にゼロとネクサスに襲い掛かった。

『来やがれ！貴様ら全員返り討ちにしてやるぜぇっ！！』

『シェアッ！』

ゼロとネクサスも大地を砕いて、闇の巨人達に向かって飛び出した。5体の巨人が赤茶けた大地を揺るがして激突する。

ルシフェルの豪腕が唸りを立ててゼロに飛ぶ。

素速く身を沈めて一撃をかわしたゼロは、上体を起こすと同時にルシフェルの中央の首の顎目掛け、強烈なアッパーを放った。

響く炸裂音。しかしルシフェルは平然とその一撃を受けた。

『何っ！？』

微動だにしない相手に驚くゼロの前で、ルシフェルは首を軽く振ったかと思うと、その豪腕でゼロの側頭部を殴りつける。

『グワッ！！』

弾かれた様にゼロは、横っ飛びに吹き飛んだ。

（クソっ！）

吹き飛んだゼロは空中で姿勢を変え、足から大地に着地するが、ルシフェルのパワーの余波で数十メートル程地面を削ってから漸く停止する。

恐るべきパワーであった。ネクサスをも上回るであろう。最強の闇の巨人がダークルシフェルなのだ。

『へっ…やるじゃねえか…なら手加減は無用って訳だな！！』

ゼロはゆっくりと立ち上がり、上唇を親指でチョンと触る。彼の何時も癖だ。強敵と戦う時自然に出てしまう。

『行くぜぇっ！三つ首野郎！！』

ゼロは猛然とルシフェルに向かい突っ込んだ。ルシフェルも雄叫びを上げて迎え撃つ。

『オラアアアッ！！』

ゼロの回し蹴りが、唸りを上げてルシフェルに叩き込まれる。しかしルシフェルは左腕で蹴りをブロックすると、右腕の『ルシフェルクロー』を繰り出す。

『甘えぜっ！！』

だが読んでいたゼロは、ブロックされた右足を戻す反動を利用して、独楽の様に回転し、ルシフェルの側頭部にローリングソバットに近い、後ろ回し蹴りを叩き込んだ。

『ゴハアアッ！？』

さしものルシフェルも吹き飛ばされた。大地を抉って倒れ込む。
ゼロは更に追撃を掛け様と右足を振り上げた。

『グワッ！？』

その時後方から紫の光刃がゼロを襲う。背中に直撃を受けたゼロは、たまらず膝を着いた。

ダークファウストの援護攻撃だ。立ち上がったゼロはファウストを睨む、

（野郎！アイツは何してやがる！？）

毒づいてネクサスを見ると、ダークメフィストと戦いの真っ最中だった。

メフィストが右腕の『メフィストクロー』を連続して繰り出す。ネクサスも『シュトロームソード』でクローの攻撃を跳ね返した。

『フンンッ！！』

メフィストは、ネクサスがクローを跳ね退けた瞬間を狙い、砲弾の様な前蹴りを放った。

腕をクロスさせ蹴りを防御したネクサスは、そのまま力任せにファウストに体当たりし、巨体を弾き飛ばす。

『ヌウウウッ！』

バランスを崩し後退るメフィストに、ネクサスはソードを突き刺そうと間合いを詰めた。

『オオオオオオッ！！』

その時ファウストが横合いから猛烈なキックを放つ。

肩口にキックを食らい、大地に転がるネクサスは、直ぐに起き上がってファウストに反撃しようとする。

だがその隙に、メフィストの光刃『ボードレイ・フェザー』がネクサスの体を切り裂いた。

『ウオオオッ！』

火花を上げて倒れ込んでしまうネクサス。息の合ったコンビネーションであった。

闇の巨人3体の連携が速さを増して行く。

メフィストが、ネクサスに追撃を仕掛ける。その間に、ルシフェルと戦うゼロの元に、ファウストが加勢する。見事な連携だ。

『クソッ！』

ルシフェルとファウストの『ダーク・ジュビローム』紫色の破壊光線の連射がゼロを襲った。

『ウオオオッ！』

ゼロはすかさず後方に跳んだ。地響きを上げて連続して後転し、光線の雨から逃れる。

ゼロの周りを外れた光線が炸裂し、火の海と化す異形の大地。

炎に巻かれたゼロを狙い、間髪入れずルシフェルが襲い掛かった。その間にファウストは、ネクサスと戦うメフィストの援護に回る。

ネクサスにダークレイ・フェザーを撃ち込み、怯んだ所をメフィストとの同時攻撃ダークレイ・ジュビロームを同時に放つ。

（チイッ！）

辛うじて『アローアームド・ネクサス』で光線は防いだが、その背後からメフィストクローの一撃を受け、崖に突っ込んでしまった。

そして再びルシフェルと戦うゼロに、ファウストが攻撃を掛けて来る。見事に息が合っていた。

1対1でやり合っている時は、残った1人が絶妙のタイミングで援護攻撃を行う。

更にダメージを与える時は必ず2対1に持ち込み、集中攻撃でゼロ達に必ずダメージを与える。

地味だが、着実に相手にダメージを与える戦法である。
ゼロとネクサスは翻弄されていた。なかなか集中して相手にダメージを与えられない。

相手は息の合った連携攻撃を仕掛けて来るが、此方はお互い協力する気も無い敵同士だ。
個人で何とかしようとしか思っていない。

其処に穴が有った。連携は上手く機能させられれば戦力を数倍に引き上げる事が出来るのだ。今の2人には望むべくも無い。

苦戦するゼロの『カラータイマー』が点滅を始めた。ダークフィールド内ではゼロの活動時間は極端に短くなる。

（クソッ！やばいぜ…！）

焦るゼロを余所に、無情にもカラータイマーの点滅音が響く。一方のネクサスの『コア・ゲージ』も点滅を始めていた。

ゼロもネクサスも体が重くなって来ていた。

ダメージの積み重ねと、ダークフィールドの影響に、エネルギーの不足に因るものである。

完全に向こうのペースに巻き込まれていた。長期戦に持ち込み、確実に此方を倒しに来ているのだ。

（まずいぜ…このままだと後1分も保たない…）

ルシフェルの猛攻を捌きながら、焦るゼロ。此処で変身が解けたら間違いなく殺されるだろう。

カラータイマーの点滅が断末魔の様に速くなる。はやての顔が浮かんだ。シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、闇の書も…

（今死ぬ訳にはいかねえ！今の状況で、俺がやられたら、みんなはどうなる！！）

ゼロは決意した。同じく戦っているネクサスに向け、修羅の如く叫

んだ。

『ネクサス！此処で殺られたくなかったら、力を貸せっ！！』

叫ぶと同時に、ルシフェルとファウスト目掛け『エメリウムスラッシュ』を手当たり次第にぶち込んだ。
あちこちで爆発し、土煙がもうもうと舞う。

相手が怯んだ隙に素早く飛び上がると、ネクサスとやり合っていたメフィストを勢いを付けて殴り倒す。

吹き飛ぶメフィストを尻目にゼロは、ネクサスの直ぐ隣に降り立った。背中合わせに立つ2人の巨人。ネクサスは頷いて、

『僕もこんな所で死ぬ訳にはいかないからね、その話乗るよ！』

『上等！今だけだ！』

ゼロも頷いた。3体の闇の巨人は直ぐ態勢を立て直し、2人を包囲する。

対してゼロは左腕を前に突き出したレオ拳法の構えをとり、ネクサスも拳を握り、独特の半身の構えをとりながら、

『付け焼き刃の連携だと、奴らには及ばない…』

『ああ…だからシンプルに行くしかねえな…後は好き勝手だ！』

狙いは一つ。2人共数々の戦闘をくぐり抜けて来た戦士、このコンビネーションの中心を見抜いていた。

一斉に襲い掛かる闇の巨人達。ゼロとネクサスも同時に飛び出した。

地響きを立てて、再び5人の巨人がぶつかり合う。

『狙いは！』

ネクサスが右腕を繰り出した。その指先から青白い光の帯がメフィストに向かって伸びる。敵の拘束や、救助に主に使用する光のロープ『ゼービングシュート』だ。

『ウオッ！？』

ゼービングシュートはメフィストの腕に絡み付いた。慌てて外そうとするが、直ぐには外れはしない。

ネクサスは光の帯を凄まじいパワーで引いて、メフィストの動きを

抑えた。そこにゼロが疾風の速さで突撃する。

『メフィスト！指令搭の貴様だっ！！

ファウスト達もゼロ達の狙いに気付き、光線を滅茶苦茶に乱射して来るが、ゼロは被弾覚悟で爆発の中を弾丸の如く走る。

更にネクサスも、ゼービングシュートを引きながら後に続く。

2人は爆発の中を疾走し、ゼロは『ゼロスラッガー』を手にし、ネクサスはシュトロームソード振りかざして、一気にメフィストに迫る。

『デリャアアアッ！！』

『シェアアアッ！』

ゼロスラッガーの二連撃とシュトロームソードが火花を上げて、メフィストの体を切り裂いた。

『グアアアアアアッ！！』

絶叫するメフィスト。すんでの所で致命傷は免れた様だが、相当のダメージを負ったらしくふらつき膝を折った。

『おのれえええっ！！』

『ガアアアアッ！！』

ファウストとルシフェルが怒りの声を上げ、ゼロとネクサスに襲い掛かる。

ルシフェルクローで嵐の如くゼロに攻撃を仕掛けて来るルシフェル。ゼロはその猛攻を紙一重で避ける。凄まじいパワーだ。やはりルシフェルのパワーは脅威だ。だが！

『確かに貴様はパワーは桁違いだが、技術が甘いぜえっ！！』

ゼロは繰り出されたルシフェルの右腕を掴み、勢いを利用して巻き込む様に懐に入り跳ね上げる。柔道で言う一本背負いだ。

『デリャアアアアッ！！』

ルシフェルの巨体が、頭から大地に叩き付けられた。衝撃で土砂が

爆発した様に舞い上がる。
受け身の取れない、急角度の実戦の投げ技だ。
呻くルシフェルの後方で、ファウストにネクサスの大砲の様な『ジュネッススキック』が叩き込まれた。

『おのれえええっ！！』

辛うじてブロックしたファウストは、一旦後方に退がると『ダークレイ・フェザー』を乱射する。
しかしネクサスは光刃の雨を跳ね退けて、拳にエネルギーを集中『ジェネレイド・ナックル』をファウストの胸部に叩き込んだ。

『グアアアアアッ！！』

吹き飛ぶファウスト。メフィストが漸く立ち上がって来るが、ダメージが色濃い。
やはりメフィストが指令搭だったのだ。見違える程ファウストとルシフェルの連携が鈍くなる。
ここぞとばかりにゼロとネクサスは、それぞれ、ルシフェルとファウストに肉迫し、

『ディヤアアアアッ！！』

『シェアアアッ！！』

音速を超える強烈なキックで、ルシフェルとファウストを、メフィスト目掛けて蹴り飛ばす。

だがルシフェル達は、メフィストに激突する寸前で態勢を立て直し、大地に着地する。

『一斉掃射だ！！』

メフィストの叫びと共に、３体の闇の巨人はエネルギーを集中させる。必殺光線を放つ気だ。

だが遅かった。ゼロとネクサスは、既に光線発射の態勢を整えていたのだ。

ゼロは左腕を水平に伸ばしてエネルギーを集中し、ネクサスは右腕を突き出し、『エナジーコア』のエネルギーを集中、光の弓が形成させる。

どの道ゼロもネクサスも、変身リミットは後僅かである。後そう何発も光線を撃てない。

それでメフィスト達を、一カ所に追い込む様に誘導しながら戦っていたのだ。

2人共今まで何度も修羅場を乗り越えて来たのだ。お互いやるべき事は心得ていた。

『食らえええっ！！』

『シェアアッ！！』

ゼロのL字型に組んだ右腕から、青白い光の奔流がほとばしり、ネクサスの右腕から、くの字型の光の弓が撃ち出された。

『ワイドゼロショット』と『アローレイ・シュトローム』の同時発射だ。

ワイドゼロショットとアローレイ・シュトロームが3体の闇の巨人に炸裂する。

『グワアアアアアアアアアッ！！』

聞くもおぞましい絶叫が上がり、メフィスト達はかき消す様に姿を消した。

『退却したか…』

ネクサスはコア・ゲージを点滅させながら呟いた。

『チッ…しぶてえ奴らだ…』

ゼロは膝を着いて、忌々しそうに吐き捨てた。カラータイマーの点滅が速い。

闇の巨人達の退却と共に、ダークフィールドが解除され始める。周りの空間がボロボロと綻びる様に崩れて行った。

ーーーーーーーーーーー

ダークフィールドの崩壊と共に、現実空間へと戻るゼロとネクサス。エネルギー残量が少ない2人は人間サイズに戻っていた。

気が付くと、元の結界内のビルの屋上の上だ。上空に目をやると、全員戦闘を継続中である。

実質ダークフィールド中では3分も経過していない。

ゼロは立ち上がろうとするが、そのままガクリと倒れ込み、両手を着いてしまった。カラータイマーの点滅が更に速くなる。

想像以上にエネルギーを消耗していた。ネクサス以下巨人達の張る戦闘用亜空間は、ゼロのエネルギーを極端に消耗させる。

（くっ…！）

膝に力を込め立ち上がろうとしたゼロに、突然何かが突き付けられた。

いつの間にか、直ぐ傍に移動していたネクサスが、ゼロに、シュトロームソードを突き付けている。

『どうやら君の方が消耗が激しい様だね…』

ネクサスの白色に光る目が、ゼロを冷たく見下ろす。まだエネルギーに余裕が有る様だ。

ゼロよりはダークフィールド内での消耗が軽かったらしい。

（くそったれ…！）

一難去ってまた一難。ゼロはシュトロームソードを突き付けるネク

サスを睨んだ。

クロノを蹴り飛ばした仮面の男、魔導師であろう。バリアジャケットと思しい服を身に纏っている。
クロノを吹き飛ばした手並みを見ても、相当な手だれの様だ。ゆっくりとシャマルの方を振り向く。

「あ…あなたは…？」

シャマルは警戒しつつも声を掛けた。助けてくれたのは間違い無さそうだが…

仮面の男はそれに答える気は無いのか、結界の方向を見て、

「使え…」

「えっ？」

不審そうなシャマルに仮面の男は、

「『闇の書』の力を使って結界を破壊しろ…」

「でもアレは…」

シャマルはいきなり勝手な事を言う仮面の男に反発を覚える。
みんなで苦労して、人を1人も襲わずにここまで『蒐集』して来た。
何より、はやてを救う為の大事な頁だ。
それに未完成のままで魔力を使うと、その分頁が減ってしまう。仮面の男はそんなシャマルの考えを察した様に、

「使用して減った頁は、また増やせばいい…仲間がやられてからでは遅かろう…？」

「あっ……」

ハッとしたシャマルは、小脇に抱えている『闇の書』に目をやるが、決意を固めた様に顔を上げた。

《みんなっ！》

一進一退の戦闘を続けていたヴォルケンリッター、それに絶対絶命の危機に陥っていたゼロに、シャマルからの思念通話が入った。

《今から結界破壊の砲撃を撃つわ、極力外して撃つけど気を付けて、その隙に脱出を！》

《《《《おうっ！》》》》

全員同時にシャマルに応答する。ゼロは砲撃のタイミングに合わせる為、残りのエネルギーを集中し始めた。

クロノは結界外の上空で、仮面の男と対峙していた。

「何者だ!?アイツらの仲間かっ!!」

何時も冷静なクロノだが、感情を露わにして仮面の男に怒鳴る。
『闇の書』に複雑な思いの有る彼の内心が零れたのだろうか？

「……」

しかし仮面の男は無言だ。話すつもりなど無いという事か。

「答えろおっ!!」

激興したクロノが、デバイスを仮面の男に向けた時、シャマルの居るビルの屋上に、緑色の光を放つベルカ式の魔法陣が現れた。
それに伴う強力な魔力の気配。

「あれは!?」

クロノが一瞬気を取られた隙に、仮面の男の強烈な蹴りが彼を襲う。
吹っ飛ばされるクロノだが、地上に激突する前に態勢を立て直す。
上を見上げるクロノに仮面の男は、

「今は動くなっ！時を待て、それが正しいと直ぐに判る…これが全てを解決する…」

「何いっ！？」

クロノは男が何を言っているのか判らない。仮面の男とクロノは睨み合った。

一方のシャマルは『闇の書』を開き、砲撃態勢に入っていた。

「『闇の書』よ…守護者シャマルが命じます。眼下の敵を打ち砕く力を、今此処に！」

シャマルの詠唱に『闇の書』から凄まじい光が稲妻の様に天に翔昇って行く。

それに伴い暗雲が空に渦巻く。強大な力が結界上空に満ちた。

強大な魔力が結界上空で黒い球を形作り、紫色の魔力雷がスパークする。
ぐずぐずしてはいられない。シャマルは最後の詠唱を唱えた。

「撃って！破壊の雷！！」

《Ｇｅｓ　ｃｈｒ　ｉｅｂｅｎ.》

『闇の書』の表紙の剣十字が輝き、女性の声が響いた。

ゼロのカラータイマーが喘ぐ様に点滅を繰り返す。
残念だが今のゼロにネクサスに対抗出来る力は残っていない。

『悪いが…事情が有ってね…君を必ず止めなければならない！』

ネクサスはシュトロームソードに力を入れる。

『事情だと…？何だそれは！？』

ゼロは時間稼ぎも兼ねて問いただすが、ネクサスは首を横に振り、

『君が知っても仕方ない…場合によっては殺してでも止める！！』

シュトロームソードの刃先に殺気が籠もった。

（やべえっ！）

ゼロが息を呑んだ時、轟音と共に強力な魔力砲撃が結界に炸裂した。

つづく

第４４話　共闘ー ジョイント・ストラグル ー（後書き）

ダークザギの光の国襲撃は、雑誌展開のみで、実は私も読んだ事はありません。
何でも次元を越えて、光の国の在る世界にザギがやって来て、それを追ってウルトラマンノアが来た事が有ったそうです。

ネットで読んだのみで、実際ネクサス本編でも一切語られませんので知らなくても本編には殆ど関係ないです。

昔こういう事が有ったらしい位で捉えてもらえればと思います。

それでは次回お会いしましょう。

第４５話　小さな願い ―アイセイア・リトルプレイヤー―（前書き）

読んで下さりありがとうございます。
それでは第４５話です。

第４５話　小さな願い―アイセイア・リトルプレイヤー―

『闇の書』の落雷の如き凄まじい魔力砲撃が、強装結界を大きく揺るがした。
強固な結界にみるみる亀裂が生じて行く。圧倒的な破壊力であった。

「まずい…！」

結界内を捜索していたユーノは危険を感じ、直ぐさま防御結界の準備を開始した。
恐らく後数分と保たず結界は破壊される。

紫色の魔力光が射し込む結界内で、戦いを中止したフェイトは上空に目をやる。一目で砲撃を受けたのを悟った。そんなフェイトにシグナムは、

「済まんテスタロッサ…この勝負預けるが…」

そこで彼女は一旦言葉を止め、フェイトを哀しげな目で見ると、

「…私の事は信じなくていい…だがゼロの事は信じてやれ…」

「シグナムそれは一体！？」

意外な言葉を聞いたフェイトは、思わず叫んでいた。
その目の前を砲撃の余波の魔力光が遮る。シグナムはそのまま光に紛れ飛び去った。

「ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータだ。覚えとけ…」

砲撃魔法の光の中、ヴィータは対峙するなのはに向かって静かに名乗る。
彼女なりに白い魔導師を認めたのだ。なのはも負けじと、

「なのは…高町なのは！」

「高町なにょは、勝負は預けた！」

なのはを指差し宣言するヴィータだが、認めた割にまだ彼女の名前を覚えていなかった。

「なにょはじゃ無いってば！間違ってるよおっ！？」

ヴィータは抗議するなのはに、殺す位言ってやろうかと思ったが、はやての騎士としてそれは止めておこうと思い直し、

「まあいい勝負は預けた。次はそのケツ『アイゼン』でぶっ飛ばして、十倍のでかさにしてやるからな！絶対だ！ぜってえだっ！！」

「えええ～っ！？」

さすがにドン引くなのは。殺すという言葉よりはマシでも大概酷い。捨て台詞を残しヴィータは退却する。

「あっ…ええと…ヴィータちゃん？ひゃっ！？」

呼び掛けるなのはの直ぐ側で破壊音が響く。もう結界は限界の様だ。

「仲間を守ってやれ、直撃を受けると危険だ！」

空中戦を繰り広げていたザフィーラは、追って来ていたアルフに忠告する。

「あっ…ああ…？」

アルフは予想外の忠告に、ポカンとしながらも返事をした。

確かにこの状況はまずい、彼女はザフィーラを追うのを辞め、直ぐにフェイト達の居る方向へと向かった。

『!?』

突然の攻撃にネクサスの気が一瞬逸れた。
ゼロはその隙を逃さず、弾丸の如き勢いで『シュトロームソード』をかい潜って一気に離脱する。

『あばよネクサス!残念だったな!ざまあ見やがれ!!』

殆ど悪役の捨て台詞を残して紫色の光に紛れるゼロ。

『クッ…!』

一瞬追おうとしたネクサスだが、思い直した様に動きを止めた。

(…今日の所は見逃すよ…)

ゼロの後ろ姿を見つめながら、ネクサスは呟いた。

その時『闇の書』の砲撃が遂に結界を貫く。
内部に着弾した光は広範囲に爆発的に広がり、結界を粉々に破壊して消え失せた。

魔力爆撃なので街に被害は無い。後に残ったのは、夜空に浮かぶ防御結界の中に退避していたフェイト達の姿だけだ。

ゼロ達は爆撃に紛れ、既に逃げ去った後であった。
後には何事も無かった様に、静かな夜の街並みが在るだけだった…

ーーーーーーーーーー

シャマルの妨害工作により『アースラ』の探査センサーの追跡を逃れたゼロ達は、八神家にようやく帰宅していた。
戻った家にはやてや、遊びに来ていた筈のすずかの姿は無く、鍋の準備がしてある。

「はやてもすずかも居ねえな…」

ゼロはやり切れない様子で無人のリビングを見渡す。
約束を破ってしまったという済まなさでいっぱいだった。

みんなも同様の様子だ。今日は初めてすずかが遊びに来ると、はやてはとても楽しみにしていたというのに…

「私が出て来る時に一応、見回りは異常無く終わっていて、少し用事を済ませてから戻るとは言っておいたから、何か有ったとは思ってないと思うけど…」

「そうか…用事で遅くなったと思ってくれてるなら…」

ゼロは幾分ホッとする。今回はシャマルが上手く誤魔化してくれた様だ。

これで何か有ったのではと、心配まで掛けていたら申し訳ない。

シャマルは多分すずかの所かと見当を付け、はやての携帯に掛けてみる事にした。

その頃はやてはすずかの家、月村家にお邪魔していた。

すずかの家の沢山の猫と戯れながら、すずかと談笑している所だ。

その途中、車椅子のポケットに入れていた、はやての携帯が鳴る。

すずかに渡されて電話に出てみると、やはり家からだ。

《もしもしシャマルです。はやてちゃん…本当に、本当にごめんなさいっ》

開口一番、シャマルは本当に申し訳なさそうな様子で謝って来た。
今にも泣き出しそうな声だ。更に遅れた理由を話すシャマルにはやては、

「ほんなら良かった。全然怒ってへんよ、すずかちゃんと2人で鍋はちょう寂しかったし…すずかちゃんが誘ってくれて…」

はやての言葉にシャマルは申し訳なさでいっぱいになり、かえってはやてに慰められてしまった。

「じゃあヴィータに…」

シャマルは子機を持って、ソファーで此方を気にしていたヴィータに電話に出る様促す。

「もしもし…」

はやてと話すヴィータの声を背に、シャマルは庭に出て冷たく星が瞬く冬の夜空を見上げた。

「寂しい思いをさせてしまったな…」

「情けねえ…俺がもっとしっかりしてればな…」

シグナムとゼロも庭に出て来て、シャマルの横に立つ。
落ち込んだ様子のゼロにシグナムが、

「お前のせいでは無かろう…気に病むな…」

シャマルも頷いた。感謝こそすれ、誰もそんな事は思っていない。
ゼロは気負い過ぎだと感じた。

そんなゼロに苦笑いしながらシグナムも夜空を見上げたが、横に居るシャマルに目をやり、

「それにしてもお前を助けた男、何者だ…？」

「メフィスト達の仲間なのか？」

2人の質問にシャマルは首を横に振り、

「解らないわ…でも魔導師なのは確かよ。魔法関係なのは間違い無いわ…少なくとも当面の敵では無さそうだけど…」

シャマルの分析にシグナムは眉を寄せる。また新たなる勢力の可能性があった。

「ゼロの言う『ダークザギ』の事も気になる…何が目的なのか…？『闇の書』の力を欲していると考えるのが妥当だが…」

「それにしては、やり方が回りくどい様に感じるんだよな…」

ゼロは頭を捻る。ザギ達にしても偽物を暴れさせ、管理局と敵対する様に仕向けて、襲撃を繰り返す。

正直『闇の書』の力が欲しい割にはぴんと来ないやり口だ。

「どの道アイツらが襲って来たなら俺が迎え撃つ、絶対に邪魔はさせねえよ！」

ゼロが安心させる様に不敵に笑う。シグナムは心強そうに微笑み、

「済まないが奴らはゼロが適任の様だな…あちらは頼む…管理局の連中も、これでますます本腰を入れて来るだろう…厳しくなるが…」

「あの砲撃で大分頁も減っちゃたし…」

シャマルが少ししょげた様子で呟いた。せっかく集めた頁が数十頁は減ってしまっている。また集め直しだ。

「だがあまり時間も無い…一刻も早く主はやてを闇の書の真の所有者に」

「そうね…」

「おお…」

シグナムの強い決意の籠もった言葉に、シャマルとゼロは頷く。

「シグナム、ゼロ、はやてが代わってって」

「ああ…今行く」

「おうっ」

ヴィータの呼ぶ声にシグナムとゼロは、リビングに戻って行った。

ーーーーーーーーーーー

所は変わって、アースラチームが駐屯所にしているマンションに、クロノ以下全員が戻って来ていた。

リビングに集まった戦闘に参加していたメンバーは、リンディとエイミィを交え、報告とミーティングの最中だ。

「問題は彼らの目的よね…」

ソファーに腰掛けているリンディは、頬杖を着きながら疑問を浮かべる。

「ええ…どうも腑に落ちません…彼らはまるで自分の意思で『闇の書』の完成を目指している様にも感じますし…」

クロノも納得が行かないという風に首を捻った。そんなクロノをアルフは不思議そうに、

「それって何かおかしいの？闇の書ってのも要は『ジュエルシード』みたく、スッゴい力が欲しい人が集めるもん何でしょ？だったらその力が欲しい人の為にあの子達が頑張るってのも、別におかしくないと思うんだけど…？」

顔を見合わせるクロノとリンディ。フェイト達も不思議そうだ。クロノは理由を説明する。

『闇の書』の性質上『ジュエルシード』と違って、その力は自由に制御出来るものでは無く、純粋な破壊にしか使えない。

少なくとも他に使われたという記録は無いという事を説明する。

「それからもう一つ『闇の書』の守護者の性質だ…彼らは人間でも使い魔でも無い…『闇の書』に合わせて魔法技術で作られた疑似人格…主の命令を受けて行動する…只それだけの為のプログラムにすぎない筈なんだ…」

意外な事実を聞き、フェイト達は息を呑んだ。その中でフェイトは暗い表情をし、

「…あの…使い魔でも無い疑似生命っていうと…私みたいな…？」

「違うわ！」

リンディがハッとして声を上げた。

「フェイトさんは、生まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと命を受けて生み出された人間でしょ！」

普段は温和なリンディが珍しく厳しい声を出した。
もっともそれは、叱責する様なものでは無く、心配しての言葉だった。

「検査の結果でも、ちゃんとそう出てただろう?変な事を言うものじゃ無い…」

クロノも諭す様に続けた。
フェイトはプレシアの娘である事に誇りを持っているが、クローン体である事に少し引け目を感じている部分が有る。

リンディ達はそれを見越したのだ。良く見ているな…となのはは思った。

リンディがフェイトに家の子にならないかと、養子の話を持ち掛けているのは聞いている。フェイト自身は色々迷っている様だが…

「はい…ごめんなさい…」

フェイトは自分が自虐的な事を言ったのを反省して頭を下げた。
その中で只一人、事情を知らない孤門が何とも言えない表情をする。
それに気付いたフェイトは、

「ごめんね…孤門にはまだ話してなかったよね……」

少し言いにくそうに口を開いたが、心を決めて、

「私はクローン人間なんだ…母さんが亡くなった私のお姉さんアリシアの代わりとして…」

フェイトは努めて淡々と一通りの事情を孤門に話した。
プレシアの想いを知らなかったら、まだ口に出す事も出来なかったかもしれない。

「……」

孤門は無言で話を聞いていた。酷く驚いた様子が伺える。さすがに重い話だが…

暫く無言だった孤門だが、フェイトを真摯な目で見据えると、

「フェイトちゃんはフェイトちゃんじゃないか、クローンだからと言って恥じる事は無いよ。誰の代わりでも無い。今生きているフェイトちゃんが本物なんだ！」

フェイトにはその言葉が嘘偽りの無いものだという事が何故か判った。孤門の人柄故だろうか…

「ありがとう孤門…」

フェイトは嬉しくなって、微笑を浮かべた。その様子にみんなはホッとする。

ここで孤門が下手な反応をしてしまったら、フェイトは落ち込んでいたかもしれない。

「じゃあ話を戻そっか、モニターで説明するね」

エイミィが空間モニターを広げ、ミーティングの続きを再開した。全員気持ちを切り替えてモニターに目を向ける。

モニターには『闇の書』以下、シグナム達の映像が映し出された。

ヴォルケンリッターが『闇の書』のプログラムが実体化したもので、何代もの主を渡り歩いている事。

自らの意思は殆ど無く、主の守護と魔力の蒐集のみを行い、主の命令だけを忠実に遂行するだけの者達。

『闇の書』の外部戦闘ユニットに近いものである事。

対話能力は過去の事例で確認されているが、今回の様に感情を見せたのは初めてである事などだ。

「あの帽子の子、ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてた…」

なのはが感じた事を言う。フェイトも複雑そうな顔をして、

「…シグナムからも確かに人格を感じました…成すべき事が有る…主の為、仲間の為だって…」

「主の為か…」

フェイトの言葉を最後に全員が黙ってしまった。みんな何か違和感の様なものを感じたからである。

「まあ、それについては、捜査にあたっている局員からの情報を待ちましょうか？」

場の雰囲気を変えるようにと、リンディが声を出して話を進める事にする。

再び話し合った結果、転移頻度から主がこの付近に居るのは確実な事。

『闇の書』完成の前に主を確保するのが確実という結論が出た。

「それにしても…『闇の書』に関して、もう少しデータが欲しいな…」

クロノはそう呟くと、ふとなのはの肩に乗っている、フェレット姿のユーノに目を留めた。ツカツカと歩み寄り、

「ユーノ、明日から少し頼みたい事が有る」

ユーノは丸い目をきょとんとさせたが、

「いいけど…？」

と返事をした。フェイトはそんなやり取りを横目に、シグナムの言葉が頭を離れなかった。

（私の事は信じなくてもいい…ゼロさんを信じてやれ…どういう意味なんだろう…？）

フェイトは自分の手を見た。シグナムの斬撃を受けた痺れがまだ残っている。

（…悪い人の筈なのに…どうしてあの人の剣はあんなに、真っ直ぐなんだろう…？）

フェイトはぼんやりとそんな事を思った。

ーーーーーーーーーーー

ゼロ達は、はやてが作って置いてくれた鍋を感謝していただき、栄養の補給を済ませると、休む間も無く『蒐集』に出掛ける。

減ってしまった頁を早く埋めなくてはならない。
はやては今日はすずかの家に泊まるので、ある意味都合がいい。

戦闘からさほど時間は経っていないが、それぞれ管理局に発見されにくい遠くの世界へと転移を開始した。

ーーーーーーーーーー

２つの太陽が容赦なく地表を照り付ける。
広大な砂漠のみの荒れ果てた異世界に、軋む様な吠え声が轟く。

人間サイズのウルトラマンゼロと、ヴィータの周りを巨大な竜を思わせる魔法生物が多数取り囲んでいた。

砂漠を揺るがせて、長大な体をぐねぐねとくねらせ、砂の中を泳ぐ様に動き回り更に包囲を狭める。

周りには既に戦闘不能にした仲間の魔法生物が、何匹か倒れていた。

ヴィータは騎士甲冑の所々が破れている。カートリッジも残り少ない。なかなか厄介な相手だ。

（長引くと不利だ…一気に片を付ける！）

そう判断したゼロは、両腕を組み合わせると巨大化を行う。
砂漠に巨人となったゼロがそびえ立つが…

「おいゼロっ、大丈夫なのかよ！？」

ヴィータがその巨体を見上げて心配そうに声を上げた。
ゼロの『カラータイマー』が既に赤く点滅しているのが見える。

ルシフェル達との戦闘から幾らも経っていない。エネルギーチャージの時間など、あったものでは無い。

太陽光線が強いこの世界のお陰で、とりあえず巨体を維持している状態だ。

おそらく今の状態では、巨大化も後1分保つかどうかという所だろう。

『誰に言ってやがる！俺はウルトラマンゼロ！セブンの息子だぜ！！』

ゼロは雄叫びと共に竜の如き魔法生物の群れに立ち向かう。

「チッ…強がりやがって！」

ヴィータは苦笑いを浮かべた。自分と性格が似ているゼロの考えなどお見通しだ。

彼女もこんな時、絶対に弱音を吐いたり退いたりはしない。

小さな騎士はゼロに続いて、地を蹴って空に飛び上がった。

「さっさと片付けんぞ！帰ったらはやての美味しいご飯と、温かいお風呂だ！」

『そいつは最高だなあっ！！』

応えながらゼロは、魔法生物の巨体に正拳突きを叩き込み吹き飛ばす。

ヴィータの『グラーフ・アイゼン』が唸りを立てて炸裂する。

2人は同時に一際大きな群れに向かって突撃した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

次の日の午前中、はやては月村家をおいとまし、メイド長のノエルに車で送られて自宅に向かっている所だ。

我が家へと向かう道すがら、はやてはノエルと世間話をする。

その際自然ゼロ達家族の話題になり、はやては一部誤魔化しながらもみんなの事などを話していた。

「そうですか…ご親戚の皆さんが一緒だと、賑やかでいいですね」

「はいっ、何やこう…毎日無闇に楽しいです」

ノエルの言葉に、はやては噛みしめる様に返事をする。
改めて話すと、今までのみんなとの日々が思い起こされた。
必ずしも平穏無事とはいかない時もあったが、はやてにとって大変な時も含めて宝石の様な日々だった。

（そっかー…みんなが来てから結構経つんやな…）

はやては流れる景色に目をやりながら、しみじみと思う。それだけで心が温かくなる気がした。

シグナムはリビングのソファーに座り込み、休息をとっている所だった。
同じくリビングの床で休息をとる狼形態のザフィーラの姿もある。
先程『蒐集』を終え、家に戻って来たばかりだ。

そこに同じく帰って来たシャマルが身支度を整えて入って来た。目

を閉じているシグナムに、

「シグナム、はやてちゃんもうじき帰って来るそうよ」

「そうか…」

顔を上げたシグナムの顔に僅かに笑みが浮かぶ。シャマルはエプロンを着けながら、

「ヴィータちゃんとゼロ君はまだ？」

「かなり遠出らしいが…一通りは終わったらしい、もうじき帰って来る…」

シグナムはそう説明しながら、頭をスッキリさせようと冷蔵庫に歩み寄る。

「あなたは？シグナム…」

「何がだ…？」

シャマルの言葉に、冷蔵庫を覗き込みながら疑問を浮かべるシグナムに、

「大丈夫？大分魔力が消耗してるみたいたけど…」

シグナムはシャマルに向かって少しからかう様に微笑し、

「お前達の将はそう軟弱には出来ていない大丈夫だ…」

安心させる様に言いながら、冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを取り出した。

「あなたも随分変わったわよね…」

シャマルはそんなシグナムを感慨深そうに見つめながら、しみじみと続ける。

「昔はそんな風には笑わなかったわ…」

昔はもっと堅苦しく、笑う事はあっても敵に対する戦鬼の笑みを浮かべる所しか見た事のなかったシャマルにしてみれば、新鮮であった。

一見判りづらいが、表情が柔らかくなって来たと思う

「そうだったか…？」

意外そうなシグナムに、シャマルは床に付しているザフィーラに目をやり、

「私達全員随分変わったわ…みんなはやてちゃんが私達のマスターになって…ゼロ君と出会ってからよね…」

「そうだな……」

シグナムも感慨深く応えた。温かさと安らぎの日々と、かつて経験した事の無い主以外にも誰かを救うという、正に騎士として誇るべき戦いの数々…

（…主はやてとゼロのお陰か……）

そう今は此処に居ない2人に思いを馳せた時、ゼロとヴィータが帰って来た。

「帰ったぞーっ、間に合ったか…、はやてはまだ帰ってねえな？」

「うう～っ、砂でジャリジャリする～っ」

ゼロとヴィータは砂っぽい出で立ちで、玄関前でしきりに砂を払っている。

一通り砂を払い、玄関前を掃き終わった頃、高級車が家の前に静かに停車した。はやてが帰って来たのである。

ーーーーーーーーーーーー

「ああ～、落ち着いたあ～っ」

「お疲れ様でした主はやて…」

「あはは…遊び行っといて、お疲れゆうのもアレやけど…」

はやては、シグナムの丁寧なねぎらいの言葉に苦笑する

全員に迎えられ、はやてはリビングのソファーに座らせて貰いくつろいでいた。

「シグナム、夕べとか何か不自由なかったか？」

はやての心遣いにシグナムは微笑して、

「いえ…何一つ、夕食も美味しく頂きました…」

「大丈夫だよはやて、鍋もギガ美味だったよっ」

と続けて、はやてに飛び付こうとしたヴィータだが、まだ砂っぽかったので我慢する。

はやてには砂場で派手に暴れたからと言って誤魔化した。

シャマルに言われて風呂場に走って行くヴィータを見送っていると、不意に『闇の書』がはやての前に転移して来た。

「あれ？『闇の書』が…」

はやては人恋しげに自分の周りをふわふわ浮いている『闇の書』を見上げる。

「どうしたの？急に現れたりして…？」

「起動はしていませんね…待機状態のままです」

シャマルとシグナムも不思議そうに『闇の書』を見上げる。

「んん～…、一晩家開けたん久しぶりやから、もしかしたら寂しかったんかな…？おいで『闇の書』よしよしっ」

子犬の様にはやてにまとわり付く『闇の書』その様子はほぼペットと飼い主の様だった。

「前よりもはやてに懐いてるな…」

微笑ましそうに見ていたゼロだが、此方にも寄って来たのを見て慌てて逃げに入る。こちらにもそうとう懐いていた。

「バカお前っ、今俺は風呂待ちなんだぞ。背表紙が汚れるだろうが？」

『闇の書』を汚すまいとあたふたするゼロと、その様子を見てクスクス笑うはやて。

シグナムとシャマルはやれやれという風にその光景を眺めた。

「あははは～ふああ～っ…」

そんな事をやっている内に、はやては可愛らしい欠伸をした。目がトロントして来ている。

「あら…？」

シャマルが気付いて声を洩らす。はやては大きな目をしょぼしょぼさせ、

「あはは…アカン…夕べは話し込んでもおて…ちょう睡眠時間が足りてない…」

「あらら…」

シャマルが小さな子供に掛ける様な声を出す。

「すずかちゃんちのベッド、ごっつフカフカで何や緊張したし…」

はやては眠い目を擦った。それなら休んだ方がいいと言うシグナムの進めに、ご飯支度時に眠くなっても困るなと思い、休ませて貰う事にする。

もうコクりコクリと船を漕ぎそうな程眠そうだ。

初めての友達の家へのお泊まりで少し気を張っていたのかもしれない。

それが家に帰って来て、気が抜けたのだろう。

はやてはシグナムに抱っこされて部屋に連れて行って貰い、二度寝する事になった。

シグナムがはやてを連れて行った後、ゼロはシャマルにはやての体に異常が無いか聞いてみた。

本当に只の寝不足なのか気になったのだが、シャマルがさっき調べてみても特に変わりは無いそうだ。

麻痺の進行具合が少しずつ進んでいる事も含めて…

暫くしてはやてを寝かしつけたシグナムが戻って来た。

何か釈然としない様子だが、ゼロは気付かない。

何故なら急に力が抜けた様に床に尻餅を着いてしまったからである。

「どうしたゼロっ！？」

「ゼロ君！？」

慌てたシグナムとシャマルが助け起こそうとするが、ゼロは何でも無い様に笑い、

「いけねえいけねえ…砂で滑っちまったぜ…」

そう言って立ち上がろうとするが、シグナムは気付いた。今の転び様、相当な疲労が溜まっている事に。

無理も無かった。ここの所エネルギーチャージの時間も殆どとれないまま、無茶な連続戦闘を続けて来たのだ。

ルシフェル達との戦闘でさすがに無理が祟ったのである。

しかしゼロは、助け起こそうとする2人の手を、やんわりと断って立ち上がり、

「大げさだなお前ら…たかが足を滑らしただけだろうが…」

いかにも大した事が無さそうに笑うが、

「やっぱりかよ…この強がり！ゼロお前デカくなるのも1分も保たなかっただろうが！」

風呂から上がって来たヴィータだ。丁度今のやり取りを聞いていたのである。

「あっ、ヴィータてめえっ！あれは今日はタイマーを赤く光らせたい気分だったからだと言っといただろうが！」

慌てるゼロだが、ヴィータは呆れ顔で、

「阿呆かっ！タイマーの事は前に自分で説明しただろうが？そんな下手な嘘幼稚園児でも信じねえよっ！」

もっともな事を言われてゼロは怯む。その時シグナムはシャマルに視線を送り、

「シャマル頼む…」

「はーいっ」

シャマルはニッコリ笑うと、暗緑色の空間ゲートを作り出し、右手を突っ込んだ。『旅の鏡』である。

「うおっ？」

するとゼロの胸の辺りから、シャマルの右手がニョッキリ生えて、内ポケットから『ウルトラゼロアイ』を素速く抜き取ってしまった。

「うわあっ！何すんだ？返せ！」

以前の件で少々トラウマ気味のゼロは焦って抗議する。シャマルからゼロアイを受け取ったシグナムは、

「これは預かって置く…お前は少し休め、それ以上消耗するとルシフェル達が出て来ても対抗出来んし、主にも怪しまれるぞ…！」

「うっ……」

そう理を持って諭されるとゼロも反論のしようが無い。渋々ながらも休む事を承知した。

結局飛び出さないようにと、ゼロアイは取られたままである。

すごすごと風呂場に向かうゼロの後ろ姿を見ながらシグナム達は、ゼロに甘え過ぎていた事を痛感した。

「せめて…エネルギーチャージが終わるまでは休んでいて貰おう…」

今まで床に伏せていたザフィーラがゆっくりと歩いて来て、みんなに言い聞かせる様に言った。

「ああ…そうだな……」

シグナムは頷くと、手のひらのゼロアイをポケットに仕舞った。そして顔を上げると全員を見回し、

「それと、実は一つ気になる事が有る…」

シグナムの様子に一同は只ならぬものを感じた。

「夕べ主はやてと電話でお話している時に、主が私の事を烈火の将と呼ばれた…」

「ん…？」

一瞬何の事か分からないシャマル達だが、シグナムは更に続け、

「ヴォルケンリッター烈火の将ともあろう者が、そんなに落ち込んではいけないと…」

「その二つ名って！」

漸くその名が何を意味するのか悟ったシャマルが声を上げた。

「私達の間でわざわざ使う名では無い…私をそう呼ぶのは闇の書の管制人格だけだ…」

「…しかし…前に『闇の書』の記憶を垣間見られた時に、その事が含まれていたのではないのか…？」

ザフィーラは以前の出来事を持ち出してみるが、シグナムは首を振り、

「いや…以前気になってゼロに問いただした事が有ったが…あの時の記憶に管制人格の事は一切含まれてはいなかった…」

一同は黙ってしまう。不安感がヴォルケンリッター全員の胸を締め付ける。八神家を覆う闇はまだ深い……

つづく

第４５話　小さな願い―アイセイア・リトルプレイヤー―（後書き）

おまけ

ゼロが休んだ後の事である。

「シグナム、ゼロアイちょっと貸して」

ヴィータが手を差し出して来た。

「何に使うのだ…？」

シグナムは？という顔をしながらも、スカートのポケットからゼロアイを取り出してヴィータに渡す。

「へへへ…ちょっとな…」

ヴィータはニンマリ笑うと、二つ折りになっていたゼロアイを開き、

「デュワッ！」

と両目に装着したが、何も起こらない。ヴィータは詰まらなそうにゼロアイをシグナムに返し、

「変身出来ねえじゃん…」

「当たり前だ…これはゼロが元の姿に戻る為のデバイスだぞ、他人が使っても意味が無い」

シグナムはゼロアイを受け取りながら、ヴィータに説明してやる。

「まあいいや、一辺やってみたかったし、じゃあなっ」

ヴィータはリビングをスタスタ出て行った。無人になった部屋で暫くシグナムはゼロアイを見ていたが、辺りをキョロキョロ見回すと、

「デュワ…」

小声で呟きながらゼロアイを着けてみた。当然何も起こらない。

「まあ…そうだろう…」

照れた様子でゼロアイを外した時、ふと視線を感じ振り向くと、

「なっ！？」

ドアの陰から頭半分だけ出して、こちらを生暖かい笑顔で見守っているヴィータとシャマルの姿が…

瞬間湯沸かし器の様に真っ赤になったシグナムの手から、ゼロアイがカラリと床に落ちた。

という事があったとか無かったとか…？

それでは次回お会いしましょう。

第４６話　記憶ーメモリーズー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

サウンドステージ話でございます。それでは第４６話です。

第４６話　記憶ーメモリーズー

ベッドに寝かしつけられたはやては、ゆったりとしたまどろみの中に居た。
深く墜ちて行く様な感覚。

現実とも夢うつつともつかない曖昧な世界の中を、彼女は海の中に沈んで行く様に眠りに落ちて行く。

その中ではやては、うっすらとした意識に何かを感じた。

「…ん……？…」

《…主……》

何処かで声が聞こえる。

「ん～……」

はやてはぼんやりと、誰かが自分を読んでいるのかと思った。

透き通る様な、それでいて憂いが感じられる女性の声…

《我が主……》

女性の静かな声が更に続く。声のみで姿は見えない…

「ん～…何や…？…ご飯まだやで……」

はやてはそんな返事を返す。

今の彼女は殆ど眠りについている。

夢の中で受け答えしている様に現実味が無い。
憂いを秘めた声が話し掛けて来る。

《昨夜は失礼しました…騎士達が用意したセキュリティーの範囲外においでしたので、私の備蓄魔力を使用して探知防壁を展開していました…睡眠のお邪魔だったかもしれません……》

「ふあ…そんな事無いよ…何や守られてる感じがしてた……」

はやては無意識にそう答える。

優しい守護天使が守ってくれている…そんな感覚を意識の何処かで感じ取っていた。

《この家の中は安全です…烈火の将に紅の鉄騎、風の癒やし手、蒼き狼に、ウルトラマンゼロもついていますし、私からの精神アクセスを一時解除します…予定の時間までごゆっくりお休み下さい…》

「うん…了解や…お休みな……」

《はい…我が主……》

その声を聞いたのを最後に、はやての意識は深い眠りの中へと落ちて行った……

ーーーーーーーーーーー

「つまり…今『闇の書』の本当の人格が目を覚ましたって事なのか…？」

ゼロはリビングで、シグナムとシャマル、ザフィーラに怪訝そうな表情を向けた。

風呂から上がったゼロは、話が有るとシグナム達に呼ばれたのだ。

ヴィータは自室で仮眠をとっている。

「今まで黙っていて済まなかった…言えば主もゼロも気に病むと思ったのでな…」

シグナムが済まなそうに顔を伏せる。ゼロは少なからずというか、大いに驚いた。

「…そうか…『闇の書』の中に、お前達の仲間がもう1人居たのか……」

「あの子が起動するには規定頁の蒐集と、はやてちゃんの起動許可が無い限り目覚めない筈なんだけど…」

シャマルの説明にゼロは、何故今まで『管制人格』の事を自分達に黙っていたのか察する事が出来た。

『蒐集』を行わなければ目覚める事が出来ない存在。
『闇の書』の完成を望んでいないはやてにとっては、非常に気に病み悩むであろう。

ゼロも申し訳ない気持ちになってしまった。
『闇の書』を1人だけないがしろにして来た…そんな風に感じてしまう。

こうなる事を見越して、シグナム達は『管制人格』の事を秘密にしていたのだ。

「無論実体具現化までは行っていないだろう…だが少なくとも人格の起動はしている…そして主はやてとの精神アクセスを行っている」

シグナムの説明にゼロは、

「それではやてに影響は有るのか…？」

心配そうに尋ねるが、シャマルは安心させる様に横に首を振り、

「大丈夫、まあ…それ自体は悪い事じゃないから…」

「そうか……」

ゼロはホッと胸を撫で下ろした。何か異常の前触れかと思ったからだ。
そんなゼロにザフィーラは、

「管制人格は我らより上位に配置されたプログラムだ…彼女の行動について現状で我らが直接干渉する事は出来ん…」

「要するに、あいつは最強でお前らの頭になる訳か…」

ゼロは妙な納得の仕方をして頷く。シグナムはその解釈に少々首を

捻りながらも、

「そういう事だ…正規起動するまでは対話も出来ない…」

「そうか…身振り手振りと、何となくじゃ、細かいやり取りは難しいしな…」

そこでザフィーラが重重々しく口を開く、

「…彼女も我らも想いは同じ筈だ…アクセスだけなら害は無いだろう…そして意識の底で出会えたなら、主は彼女の事も労って下さる筈だ…」

「そうだな…それは間違いねえよ。そうか…夢の中ならはやてと話せるかもしれねえんだな……」

ゼロははやての部屋の方向を見て呟いた。何だか哀しかった…

ふと『闇の書』の中で只一人うずくまって泣いている女性を思い浮かべた。

「今は現状維持しか無いって事か…」

ポツリとこぼす。ザフィーラはそこでリビングに居る全員を見上げ、

「それでだ…不要な不安を与えない為…ヴィータには伏せておく事を提案する…」

「そうね…私も同意見…というか…それしか出来ないんだけど…」

シャマルは賛成した。ゼロもシグナムも同意して頷く。

ヴィータは一見がさつそうに見えるが、根は優しくデリケートで、精神的に幼い部分が有る。黙っていた方が本人の為だろう。

話はそれで纏まった。ゼロは直ぐ休む気にはなれず、ソファーに腰掛ける。

何とも無く静まり返ったリビングで、シャマルは表情を曇らせ、

「何も出来ないのは心苦しくて不安ね…」

ポツリと洩らす。ゼロも同感だった。シグナムはそんな彼女を元気づける様に、

「そうだな…何も出来ないのなら…せめていい方に考えよう…」

「そうね…」

シャマルは不安を押し隠して同意の返事をした。今はそう自分に言い聞かせて進むしか無い。

黙って聞いていたゼロも、床に座り込んでいるザフィーラも頷いた。

その時リビングの電話が鳴る。シャマルが素速く出て応対した。後方支援しか出来ない彼女なりの気遣いである。

どうやら海鳴大学病院からららしい。ひとしきり話し、受話器を置いたシャマルにシグナムは、

「石田先生か…？」

「うん…明日の予約の確認だって…明日は私が付き添うから」

シグナムは少し思案して、ゼロをチラリと見た後に、

「出来ればゼロとヴィータも連れて行ってくれ…2人は無茶をし過ぎる…もう少し休ませないといけない」

「おいっ、俺は平気だぜ」

抗議して来るゼロにシグナムは悪戯っぽく微笑し、

「休まんと『ゼロアイ』は返さんぞ。それでもいいのか…？」

「…チッ…分かったよ…」

ゼロは渋々ながらも言う事を聞く事にする。

「じゃあ明日の事は了解っ」

シャマルは努めて明るく返事をし、

「さて今日はいいお天気でお洗濯日和ね、２人共洗濯物出してある？」

「ああ…」

「おう…出してあるぜ」

シャマルはウンウンと、満足そうな表情をする。良く出来ましたと子供を誉めるお母さんのノリだ。

「私はお洗濯をしちゃうから、シグナムあなたも少しは休んでおいてね」

「ああ…そうだな…」

シグナムは苦笑しながら返事をする。
長い付き合いだ。シャマルは、ヴォルケンリッターの将も無理をしがちなのはお見通しである。

リビングを出て行く、シャマルの後ろ姿を見送りながら、シグナムはゼロに、

「考えるべき事は多い様で少ない…今は只『闇の書』の完成を目指すのみ…闇の巨人に管理局…誰が相手でも戦って切り抜けるしか無い…」

「今出来るのはそれ位しか無いのか……」

ゼロは哀しげに呟いた。闇の巨人達だけならまだしも、フェイト達と戦うのは正直辛い。

「……」

そんなゼロの心情を見越したシグナムは無言になるしかなかった。

暫く黙っていたゼロだが、ふと思い付いて、

「…なあ…シグナム、ザフィーラ…『闇の書』ってどんな奴だ…？」

シグナムとザフィーラは顔を見合わせた。シグナムが懐かしそうな表情をし、

「…そうだな…優しい奴だ…銀色の髪と赤い瞳が美しい女性だ……」

「…そうか……」

ゼロは噛みしめる様に呟き、朝日が射し込む窓に目をやった。

ーーーーーーーーーー

次元の海に浮かぶ、都市程の巨大さを誇る建造物。通称『海』と呼ばれる『時空管理局・本局』である。

其処をクロノ、エイミィ、ユーノ、なのは、フェイトの5人が訪れていた。

クロノ、エイミィ、ユーノは『闇の書』の調査を行う為の手続きその他で、フェイトは『嘱託魔導師』の書類の提出。なのははフェイトへの付き合いだ。

孤門とアルフは緊急事態に備えて、留守番である。

フェイトとなのはは書類提出に行き、クロノ以下はある人物達を訪ねに別のブロックに向かった。

「わあああ～っ!?やっ止めろおおっ!!」

訪ねた先の部屋で、クロノは熱烈過ぎる歓迎を受け悲鳴を上げた。

クロノはソファーに押し倒され、キスの嵐を受けている。

それをおっとり笑って見守る２０歳程の女性。

クロノに熱烈歓迎をしている女性と良く似ている。頭に付いている猫耳に猫の尻尾まで一緒だ。

２人は『グレアム提督』の双子の使い魔であり、クロノの師匠でもある。

穏やかそうな方の女性が魔法教育担当の『リーゼアリア』クロノに熱烈歓迎をしていた女性が、近接戦闘教育担当の『リーゼロッテ』だ。

２人共、相当な使い手であり、武装局員の指導もしている凄腕であるという。

素体は見ての通りの猫で、ユーノの事を鼠っ子などと呼び、怪しい目つきを向けて来るので、ユーノは気が気では無い。

まあ…それはともかく全員ソファーに座り、やっと開放されたクロノは、襟元を正して本題を切り出した。ユーノに目をやり、

「…彼の『無限書庫』での調べものに協力してやって欲しいんだ」

リーゼロッテとリーゼアリアは顔を見合わせ、ユーノに改めて視線を送る。

ユーノは引いてしまいそうになったが、何とか踏み留まった。

その頃フェイトとなのはは、恐ろしく広大な本局の中を歩いていた。
まさに一つの独立した大都市である。

フェイトは既に何度も来ている所なので特に迷う事は無いが、それでも全て把握している訳では無い。

それ程の規模なのだ。多数の管理世界を管轄している本局なのだから、当然なのかもしれない。

最もこの規模でも、なかなか手が足りてないのが現状の様だ。

なのはは2回程来た事があるだけな上、じっくり見学をした訳でもないので、1人だったら確実に迷子になっている所である。

2人が色々と話をしながら歩いている時、ふと気になる光景を見かけた。

1人の青年が、制服姿の管理局員に道を尋ねている。
目についたのは青年がフェイト達と同じく私服姿であったからであるが…

フェイトとなのはは、何となく足を停めてそのやり取りを見ていた。

暫くして青年は丁寧に頭を下げて、局員にお礼を言うと、2人の居る方向に歩いて来る。

失礼にも、じろじろ見ていた事に気付いたフェイトとなのはは、慌てて目を逸らした。

青年は気にした風も無く、人懐っこい笑みを浮かべて、2人に会釈すると向こうの方に歩いて行った。

「…行こうか…なのは…」

「うん…」

その後ろ姿をチラリと見た後、フェイトはなのはを促して再び歩き出す。

2人は何となく青年に、知っている人物と似た様なものを感じた気がしたのだが、気のせいだと思った。

何故なら2人が知っている人物は、どちらかと言うと不良っぽい雰囲気だったからだが…

フェイトとなのははそのまま書類申請の手続きに、取扱い部署へと

向かって行った。

暫く歩いた所で、先程の青年は足を停めた。振り返り、小さくなって行く2人の少女の後ろ姿に興味深そうに視線を送る。

「…あの子達がゼロと……？」

そう呟く青年は誰であろう。『ウルトラマンメビウス』こと『ヒビノ・ミライ』であった。
彼は何の目的で本局に現れたのであろうか…？

ーーー

検査は時間が掛かる上に、ジッとしていなければならないので暇つぶしも出来ず、はやてはあまり好きでは無い。

3人に見送られ、はやては溜め息混じりに検査室に入った。

ヴィータははやてに言われた事もあり、時間潰しでゲートボール仲間のおじいちゃん、おばあちゃんが来ていないかと、1階の待合室に行く。

ゼロはシャマルと、廊下のソファーに腰掛けて、検査が終わるのを待つ事にする。ついでにと、

「悪いシャマル…少し寝とくわ…」

「…うん…ごめんねゼロ君…あんまり休ませてあげられなくて…」

シャマルが申し訳なさそうに謝った。

魔導師を襲わずに、今の蒐集ペースを維持するのは無理がある。ゼロに長く抜けられのはキツイのだ。

「気にすんな、みんなも疲れて来る頃だ、お互い様だ。じゃあ時間になったら起こしてくれ」

そう笑うとゼロは目を閉じた。また今日から『蒐集』に戻るつもりである。

少なくともエネルギーチャージは完了した。後は溜まった疲労を出来るだけ抜いておく。ゼロは直ぐに眠りに落ちた。

毎回の事とはいえ煩わしいものだと、検査室に入ったはやては思った。

石田先生に手伝って貰い、検査機器のベッドに横になる。

少し時間を置き検査室が暗くなる。静かな駆動音を立てて検査機器が動き始めた。

はやては暫くの間、身じろぎもせず横たわっていたが、

（う～ん…相変わらず退屈やあ～、眠ったらアカンと思う程…眠なるなあ……）

そうぶつぶつと愚痴る。検査中は動いてはいけない。

ウッカリ寝てしまい、寝返りでも打ったならやり直しになってしまう。

暫くの間、くっ付きそうなまぶたと戦っていたが、はやては睡魔に勝てなかった。
うつらうつらと意識は、心地良い眠りの中に、ゆっくりと溶けて行く。

眠りに落ちる中、はやては妙な感覚を感じた。
何かに入り込んで行く感触、まどろみの世界が姿を変えて行く。

はやてが気が付くと、紫色の何も無い闇の中にポツンと座り込んでいるのに気づいた。
何処か知らない場所が、いきなり目の前に現れる。

まるで中世代ヨーロッパの戦場を思わせる風景。鎧を着込んだ兵士の姿が見えた。

（…ん…？あ…またこの夢…最近良く見る…何処かで見た事のある

不思議な夢……）

はやてはぼんやりとそんな事を思った。

今までハッキリとはしなかったが、妙な夢を見続けているという実感があった。

「うるせえっつってんだっ！！」

はやては怒鳴り声を聞いてハッとした。ぼんやりしていた意識が覚醒する。

夢の中で覚醒するというのもおかしな話だが、その声は良く聞き慣れている筈の声だった。

（ヴィータ…？）

はやての目に映ったものは、ゴツゴツした無骨な鎧を着たヴィータ

だ。

荒んだ目をして、シグナム達に食ってかかっている。

自分と会う前のヴォルケンリッターのみんなだ。

歴代のマスター達の命令で、戦闘マシーンとして扱われていた時の……

（これは…前に見た事のある『闇の書』の記憶……？今までの不思議な夢は『闇の書』の記憶やったんか…？）

はやての目の前で、ヴォルケンリッターの戦闘が繰り広げられている。

はやてはそれを映画の場面を見る様に、次々と見る事が出来た。

中には明らかに相手を殺害している場面もある…

はやても以前に見た光景。普通なら恐怖を感じる所だが、あの時はやてはひたすら哀しかった。

みんなそれを望んでなどいない事が判るから……

ヴィータなど虚無感に包まれ、心が壊れてしまう寸前だった。

だから自分はあの時、記憶を見ても尚シグナム達を受け入れた。
みんなの過去も含めて全部受け入れようと思ったからだ。それがごく自然であるかの様に。

考えてみれば異常な事かもしれないが、はやては決めたのだ。必ずみんなを守ると…
それはゼロも同じ事であろう。

そんな事を考えていた時、不意に場面が切り替わった。
紅蓮の炎に包まれ破壊され尽くし、倒壊した建物が見える。しかしはやては違和感を感じた。

（何や…此処は？今まで見て来た所と違う…？）

はやてが見た光景、それは明らかに今まで見たどの世界とも違っている。

（何や光が溢れとる…それに…）

建物も見た事も無いものだった。シグナム達が辿った別世界のものとも違う、ＳＦに出てきそうな超未来都市。

だが今は無残に破壊され尽くしている。

そして炎の中に不気味な嘲笑うかの様な大音声が響き渡った。そして現れた影、

（なっ…何やアレは？）

はやてはギョッとしてしまう。炎の中から、異形の人影が続々と現れたからである。

そいつらは人に近い姿をしていた。最も印象が似ているだけで明らかに人間では無い。

両手が巨大な鋏になっており、不気味な頭部は何となくセミを思わせた。

そして足元に転がっている死体…それは銀色の顔に赤や青い体をした者達。

そして目の前に、まだ幼さを残す体つきをした、１人の銀色の顔の人物が此方を心配そうに覗き込み、

『ゼロっしっかりしろっ！』

そう声を掛けて来た。はやては気付く、今自分はゼロの目線で周りを見ていると。

（ま…まさか…これはゼロ兄の記憶なんか…？）

はやてが確信した時、映像はフッとかき消えた。そして…

「その通りです…主はやて…以前リンクした事で、魔法プログラムを記憶していたゼロが、無意識の内に此処に入り込んでしまったと思われます…」

はやての後ろから女性の声がする。

後ろを振り返ったはやての前に現れたのは、流れる様な長い銀髪と赤い淋しそうな瞳をした、美しい女性だった。

つづく

第４６話　記憶－メモリーズ－（後書き）

最後にゼロの記憶に出ていた連中判りますかね？

まあ…鳴き声？がフオッフオッフオッという奴と言えば…

ところでＤＶＤでベリアル銀河帝国を見られた方も多いと思います。

大体は映画とＤＶＤに合わせて修正しましたが、見た方は判ると思いますが、デカい矛盾が２つばかり残っております。

今だにどうするか決めかねてます。人間の事を良く知らないという点はヘ理屈を考えてますが、もう一つが…

冬に続編映画も出るそうなので、悩ましい所です。

それでは次回お会いしましょう。

第４７話　慟哭ーワイニーー（前書き）

どうも読んで頂きありがとうございます。
ＳＳ話の続きです。それでは第４７話をどうぞ。

第47話　慟哭ーワイニーー

「…んん～…何だ…？此処は……？」

ゼロは紫色の闇の中で目を覚ました。確か病院に居た筈だと辺りを見回すと、はやてが隣に座り込んでいるのが見える。

「ゼロ兄っ」

「はやてか…、ん…？」

ゼロの目に映ったのは、2人の前に佇んでいる銀色の髪をした女性の姿だった。
その銀髪の女性は、はやてを少し驚いた様子で見て、

「驚きました…こんな場所までご自分で入って来られたのですか…？」

「えっ…？」

はやては混乱していた。ゼロもサッパリ状況が掴めない。

「えっ…あっ…あなたは…？」

はやては戸惑いながらも質問してみるが銀髪の女性は、

「現在の覚醒段階で、此処まで深いアクセスは、あなたにとっても危険です…安全区域までお送りしますので、お戻り下さい…」

はやてには女性の言っている事はチンプンカンプンで解らなかったが、どうやら此方を気遣っている事だけは分かった。

それにはやては不思議な感覚を覚えていた。まるでずっと前から知っている人と会った様な、懐かしい感覚。

「待って…ちょう待って……」

はやては今の状況と、感じた感覚を良く考えてみる。一つの考えが浮かび上がって来た。

「…私あなたの事…知ってる…？」

「知り合いなのか？はやて…」

と言うゼロも、目の前の女性と既に会っている気がした。つい最近聞いたばかりの特徴にも合致している。
銀髪の女性ははやてにゆっくりと頷き、

「はい…あなたが生まれて直ぐの頃から…私はあなたの傍に居ましたから……」

その言葉ではやては確信を得た。思わず手を叩き感激して、

「やっぱり…『闇の書』…！」

「お前…『闇の書』かあっ！」

ゼロも続いた。女性は少し淋しげに目を伏せたが、直ぐに目線を上げ、

「…そう呼んで頂いても結構です…私は本魔導書の管制プログラムですから……」

「あはっ、そっかそっかあ～、…と、そやない。その前に現状の説明して貰ってもええか？」

はやてが至極まともな質問をする。さすがに今の状況は、訳が分からな過ぎた。

ちなみにゼロは感激のあまり、この状況の事をすっかり忘れていたので頭をかく。

「はい…」

銀髪の女性はゆっくりと淋しげな瞳で返事をした。

再び『闇の書』の過去の映像が流れる。様々な時代、場所、歴代のマスター達が次々と映画の様に映し出されて行く。

「…これは私と騎士達が共有する記憶…『闇の書』の歴史であり過去です…

『蒐集』と第二の覚醒を終え、真の主となって頂いた際、我らの真

実を理解して頂く為のものなのですが…
あなたはそれより随分と早く此処にいらしてしまった様です…」

「俺の場合は、前にお前の記憶と接触した時や『クラール・ヴィント』のデータ入力で、魔法プログラム変換を記憶してたから、影響を受けやすくなったって所か…？」

「はい…それに、たまたま同時期にお休みになった主に引かれたと思われます…あなたの様な特殊な一族故でしょう…本来なら決してあり得ない事です…」

ウルトラマンはデータ生命体の様な一面を持っている。
以前『ウルトラマンメビウス』が電脳空間の敵を倒す為に、自身を電気信号と化して戦った事があるくらいだ。

ゼロも戸籍を作るのに、官公庁のデータベースに侵入した事がある。
彼らならではの影響を受けてしまったらしい。

何とも妙な事になったものだと、首を捻るゼロとはやての目前で、過去の映像が次々と映し出されて行く。

映像でシグナム達が、力への欲望に狂った主に叱責を受けている。
今のみんなと、まるで様子が違う痛々しい日々…

ゼロは、はらわたがねじ繰れる様な気がした。二度目とは言え、胸

の痛みが収まる訳では無い。

かえって今の方が哀しく、やり場の無い怒りを感じた。あれから半年以上。共に過ごし生死を越えて来たのだ。

出来る事ならあの場に飛び込んで、歴代のマスター達を全員殴り倒してやりたいと思う。

はやてを見ると、肩が小刻みに震えている。彼女も思いは同じだった。

「既に過去の出来事です…お心を乱されませんように…」

2人の様子に銀髪の女性は、気を落ち着かせる為か淡々とした様子で語り掛ける。

「せやけど…やっぱり許せへん…！」

珍しく語気を荒げ、肩を震わせるはやての肩をゼロはそっとさすってやる。やっと震えが収まって行く。

「彼女達の過去は、優しいあなた方には刺激が強い様ですね…一旦映像を消します…」

女性がそう言うと、映像はフッと消え去り、辺りには紫色の闇の世界が戻った。
銀髪の女性は、まだ憤りを持て余しているはやてとゼロに、

「今現在の騎士達は幸福です…あなた達の元で暮らせるのですから…」

「え～と…何やら…」

改めてお礼を言われて照れくさいのか、はやては口ごもってしまう。
ゼロは何か申し訳ない気持ちになってしまい、

「…何か俺のせいで、みんなを戦いに巻き込んでしまっていると思うんだが…？」

やり切れない表情をするゼロに、銀髪の女性は静かに横に首を振り、

「いいえ…今までの戦いは、全てあの子達自身が望んだ事…初めてなのですよ…主以外の多くの人々を救うという事は…あの子達も誇りに思っています…」

「そ…そう言って貰えると…助かる…」

ゼロは照れくさそうな様子で女性に頭を下げた。

「ありがとうございます…私からも改めてお二人には感謝の言葉を述べさせて頂きます…」

銀髪の女性は深々と、感謝に絶えない様子で2人に頭を下げた。

「うん、いえ…こちらこそ…そっか…あなたが『闇の書』の意思なら、私らをあの子らと会わせてくれたのはあなたなんやね…」

はやては感慨深く感じたままを口にする。確かにな…とゼロは頷いた。

しかし女性は言いにくい様子で、

「…残念ながら私が自らの意思で選んだ訳ではありません…私の転生先は乱数決定されますから…」

「そんなんええねん。あなたが私の所に来てくれたから、私らはあの子らと会えた…」

はやては言い聞かせる様な調子で嬉しそうに女性に説明する。

「で…今はあなたとも会えた…素直に嬉しいし、感謝したいと思う…あかんか…？」

「感謝させてくれよな…？」

2人の言葉に女性はコクリと頷いて、

「いいえ…それでしたら、何も問題はありませんね…」

そこで初めてはにかむ様に微笑を浮かべた。
冷たい印象を与える整った顔に人間味が宿る。はやてはそんな女性の表情を満足げに見て、

「ええ子や…そやけどごめんな…私ら今まで、あなたの事気付かんで…シグナム達も言うてくれたらええのに…なあゼロ兄？」

「そっ…そうだなっ、全くアイツら水くせえなあ…」

最近聞いて知っていたゼロは何とかすっ惚ける。女性は少々淋しげ

な表情のはやてに、

「頁の蒐集が進まないと、私は起動出来ないシステムですから…頁蒐集を望まないあなた達への、烈火の将と風の癒やし手の気遣いです…汲んでやって下さい…」

それははやてにも良く分かった。コクリと頷いて、

「うん…頁蒐集しないと、あなたは外に出られへんの…？」

「対話と情理精神アクセスの機能起動に、４００頁の蒐集と主の承認…
私の実体具現化と融合起動に依る全頁を完成させて、あなたが誠の主とならなければ無理です…」

誠の主になるには、様々な条件が必要な様だ。はやては少し考え込んで、

「う～ん…そっか…、実体具現化いうのをすると、シグナムやヴィータ達みたいに一緒に暮らせるん？」

「ええ…この姿で実体化出来ますから…そして必要に応じてあなた

と融合し、魔導書の力の全てを使用する事が出来ます…」

「そおか…私が真のマスターになれたらええんやけど…」

はやてにとっては魔導書の力などどうでも良い。只もう1人の家族をこのままにして置きたくなかった。
女性は葛藤するはやてを気遣い、

「…望まぬ蒐集を命じる事もありません…」

「んん～…」

納得行かないはやては唸るしか無い。黙って『蒐集』をしているゼロは、ボロを出さない様に沈黙しておく。

「現状で此処まで深層へのアクセスは危険です…目覚めのタイミングで表層までお送りします…
以降間違って入られる事の無い様システムにロックを掛けておきます…」

女性の言葉に、まだ納得が行かないはやては表情を曇らせた。何も出来ない自分がもどかしい。

「すいません……」

女性は再び申し訳なさそうに、深々と頭を下げた。

「謝らんでもええけど…淋しいな…せっかく会えたのに……」

「ああ…こんな時しかお前に会えないのか……」

はやてとゼロの飾り気の無い心からの言葉…

「私もです……」

それが分かる銀髪の女性は、淋しそうに表情を曇らせた。
心の奥底からの2人の想いが嬉しかっただけに尚更…

そんな彼女の想いを察したはやては、両手を小さく広げてゼロに視線を送る。ゼロはなる程と頷いた。

「ほんならお別れまでの時間、ちょう主としてのお願いをしてええか…？」

「はい…？」

急に主のお願いと言い出したはやてに、女性は居住まいを正した。

「シグナム達にはもうしてるお願いで、私の騎士になるには絶対にやらんとあかん事や…」

はやては少し芝居がかった調子で、もっともらしく説明する。ゼロは澄まし顔だ。

「はい…何なりと…」

女性は嬉しそうに応える。自然顔の表情が綻んでいた。

「ほんなら…はいっ」

はやては両手を女性に差し出してニッコリ笑う。

「えっ…？」

訳が分からず、不思議そうな顔をする女性にはやては、

「抱っこや」

手を差し出したまま悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「あっ…はい…分かりました…」

女性はどんな儀式が…？と少し緊張していたのだが、どうやら引っ掛けられた事に気付き、苦笑しながらはやてを抱え上げる。

「では…烈火の将がする様に、膝の上にお乗せすればすればよろしいですか…？」

そのまま座り込んで、はやてを膝の上に乗せて抱きかかえる。丁度幼い子供を抱きかかえる形になった。

「うんっ、後は仕上げやな。ゼロ兄っ」

「おうっ！」

ゼロは心得たとばかりに威勢良く返事をすると、はやてを抱えている女性ごと、軽々と抱き上げてしまう。

「えっ？」

驚く女性に構わずゼロは座り込むと、自分の膝の上にポンと乗せてしまった。２人同時抱っこという所か。

「これぞ八神家名物『みんな纏めて抱っこ』や。ゼロ兄は巨大化すれば全員同時抱っこも可能なんや」

戸惑い気味の女性にはやては笑って説明する。

「こうして抱っこして貰うとな…顔が近いやろ？瞳の奥が良く見えるやろ？」

「はい…良く見えます…」

はやての顔が直ぐ近くで微笑む。しかし問題はゼロである。さすが

に男性と密着するのは落ち着かない。
はやては戸惑う銀髪の女性の顔を間近で見つめ、

「深い紅で綺麗な目ぇしてるな…」

「ありがとうございます…」

「銀の髪もサラサラや…」

はやては愛でる様に女性の輝く銀色の髪を撫でる。

「本当だ…それにいい香りがするな…」

ゼロは顔の前の銀髪の香りをそっとかぐ。普通なら生臭いものを感じそうな言葉だが、彼は純粋に感じた事を言うのみだ。

暫くして、女性は落ち着かなかった気持ちが段々と安らかで、心地良いものになって行くのに気付いた。
温かさに包まれ、ひどく安らいだものを感じる。

「そんでおっぱいも結構大きい」

はやてのセクハラっぽい感想にも女性は何だか嬉しそうに、

「烈火の将程恥ずかしがる気はありません…ご自由に触れて頂いても構いませんが…？」

「う～ん…ほんなら後でなっ？ゼロ兄は二番目で」

「分かりました…」

「いいのか…？」

女性の返事にゼロは真面目に質問する。女性は思わずクスクスと笑ってしまった。

「やっぱり笑うと、もっと綺麗やで…」

はやてはその陶器の様に白い頬を撫でながらニッコリと笑って誉める。

「ありがとうございます…」

女性ははにかみながらも目を閉じてお礼を言った。
体に感じる2人の体温、実体では無く意識体だが、それでも確かなものを感じる。
更に言葉のやり取り2人の笑う顔、全てが安らぎを彼女に与えてくれた。

「時間まで…色々お話聞かせてくれるか…？」

「俺も聞きてえな…」

はやてとゼロのリクエストに女性はゆったりと微笑む。こんな気持ちは初めてだった。

「はいっ…何をお話しましょう…？」

「ん…と…昔話、出来れば悲しくないやつで…」

はやての要望に女性は少し思案し、

「そうですね…それではこんな話が有ります…」

「うん…」

「おおっ…」

はやてとゼロの顔が、お話をせがむ子供の表情になる。彼女はそんな2人の顔を愛おしそうに見ながら、

「これはかなり昔の話なのですが……」

銀髪の彼女はぽつぽつと昔話を語り始めた…

ーーーーーーーーーーーー

クロノ達は『無限書庫』での調査を始めたユーノ1人を『本局』に残し、海鳴市の駐屯所に戻って来ていた。

丁度今なのはを送り出した所である。他のクルーは出払っていて、駐屯所に居るのは、フェイトとクロノだけだ。

2人はソファーに腰掛けて、お茶を飲みながら他愛も無い会話を交

わしていた。

『アースラ』で半年ばかり共に過ごした2人は、兄妹の様に気安い関係になっている。

話の合間にクロノは、何かに思い当たった表情をし、

「…そう言えば、あの携帯電話ってデバイスは、こっちの世界では結構便利だな…」

「クロノは念話距離凄く長いんだし…そんなに要らなくない…？」

フェイトは疑問に思う。念話はかなり便利なものなので、クロノが携帯に関して言い出すのも妙な気がしたのだ。

「いや…例えば僕から君に通信をする時は、プライバシーの問題も有るからな…あまり不躾なのも良くないだろ…？」

「気にしなくていいのに…」

フェイトは可笑しくなった。この年若い執務官は少々気を使い過ぎる帰来があるなと思う。

「まあ…気にさせてくれ…学校の友達と話す時も有ると便利だろう

しな…あれは普通に店で売ってるんだろう…？」

兄妹の様に気安いとは言っても、なかなかこの年頃の少女には気を使っているらしい。

フェイトは少し考え、なのは達に聞いていた事を思い出し、

「え～とね…未成年はね…親の承認が無いと駄目な筈…」

「そうなのか…それなら艦長に頼もう」

クロノの提案にフェイトは申し訳なさそうな様子になり、

「嬉しいけど…いいのかな…？」

「駄目な理由は何も無いだろ…？」

「うん…クロノ…ありがとう…」

クロノの気遣いにフェイトは微笑んでお礼を言う。

ありがたい事だと思った。リンディもクロノも天涯孤独になったフ

ェイトを気遣ってくれる。

親か…とフェイトは最近の立て続けの出来事の中で、忘れていた事を思い出す。

リンディに養子にならないかと誘われている件だ。

納得行くまで考えればいいと言われてはいるが、まだ迷っている今、少し申し訳ない。

しかし今は自分の事は後回しだと思った…

リビングを出て、自分の部屋に戻ったフェイトは、直ぐに部屋の勉強机の引き出しを開けた。

引き出しに仕舞っていた綺麗な小箱を取り出す。

もう一つ、彼女には忘れていたというより、ずるずると先延ばしにしていた事が有った。

「……」

無言で小箱を開けると、中には何かの切れ端らしい紙が入っている。

フェイトはそっと紙片を取り出した。紙には番号が書いてある。

「…ゼロさんと会わなくちゃ……」

フェイトは紙片を見つめて呟いた。誰にも…なのはにも言っていない事。
以前ゼロから貰った携帯の番号であった。

ーーーーーーーーーーーー

そろそろはやての検査が終わる頃なので、石田先生は検査室と隣接している控え室にやって来た。

「失礼します…」

「あっ石田先生」

ドアを開けて入ると、中にはシャマルとヴィータが待っており、シャマルが挨拶をして来た。
戻って来ていたヴィータもペコリと頭を下げる。

「検査続いてます？」

「はい、もう直ぐみたいですけど…」

シャマルの言葉を聞きながら、先生は覗き窓から検査室の様子を見てみる。

「そうですか…はやてちゃん眠っちゃってます」

「おっ本当だ」

ヴィータも覗き窓から検査室を見て、はやての寝顔を楽しそうに眺めた。

「あら？ゼロ君は？」

先生はゼロの姿が見えないのに気付く。シャマルは笑って、

「まだ廊下の椅子で寝てますよ…」

ゼロは廊下で居眠り中…というか、完全に横になって絶賛爆睡中で

ある。

先生に夜更かしが過ぎたの？などと笑われてしまった。

シャマルは苦笑しながら、そろそろゼロを起こした方がいい頃合かなと思った。

ーーーーーーーーーー

「何だ？体が？」

「あっ…あれ？な…何や？体が光って？」

銀髪の女性『闇の書』の昔話に聞き入っていた、ゼロとはやての体が光を放っていた。

「目を覚まし始めている様です…ゼロもそれに引かれています…お別れですね…」

「ん…もっと話したい事有るのに…」

「もう終わりかよ…」

ガッカリした様子の2人に、女性も淋しげに目を伏せ、

「私もです……」

「ん～、私はあなたの事もっと知らなあかんのに…」

「どうか、あまりお気になさらず…」

残念がるはやてをなだめて、女性は彼女の肩をさする。
はやては彼女の真紅の瞳を見据え、

「それに名前も付けたげなあかん…」

「えっ…？」

意外な言葉を聞き、彼女は戸惑う。はやてはそんな彼女の銀髪を優しく撫で、

「『闇の書』はあなたの本当の名前とちゃうし…

夜天の魔導書って呼ぶのも何や違うし…綺麗な瞳と髪によう似合う、優しくて強い名前、私考えたげなあかんと思って…」

「そうだな…格好いいの頼むぜはやて」

女性は思いがけない言葉に、自分達を抱っこしているゼロと、目の前のはやての顔を交互に見た。微笑んで頷く2人。

彼女は心無し目を潤ませ、光っているはやての手を押し抱く様に取り、

「ありがとうございます…お心だけ何よりありがたく受け取っておきます…」

女性は震える声で頭を下げ、光るはやての小さな手をしっかりと握りしめた。

「ほんならまた会おうな…」

「またな…」

光りが強くなり、はやてとゼロの姿が徐々に拡散する様に消えて行く。

「お気を付けて…どうかお体をお大事に…」

「うんあなたもな…」

はやては微笑んで手を振った。女性はすがる様に、

「騎士達をよろしくお願いします…」

「うん…きっと…」

はやては微笑みを浮かべる。慈母の様な優しい笑みだった。

「ゼロっ…主を騎士達をどうか…どうか頼みます！」

「命に代えても約束する！」

ゼロは彼女に力強く誓う。その言葉には強い決意が込められている様だった。

はやてはふと最初に見た、ゼロの過去らしきものを思い出す。

（あの人がゼロ兄が言っとった友達なんやろうか…？）

銀の顔の少年を思い出したものの、聞くのは止めておいた。本人が話してくれるまでは聞かないでおこうと思う。何故かそんな気がした。

はやては銀髪の女性に改めて手を振る。ゼロも名残惜しそうにブンブンと手を振った。

そして2人は、光の粒子を残して幻の如く消える。

後には何も無い、紫の無明の闇だけが残った。

「行ってしまわれたか…」

長い間彼女は2人が消えた場所を見つめていた。

ふと両目が熱くなっているのを感じ、指をあててみる。
熱い液体が目から零れ、頬を濡らしているのに気付いた。

「これは…涙か……？」

「私はまだ泣けるのだな…」

自分以外誰一人居なくなってしまった闇の中で、彼女は茫然と立ち尽くす。

先程までの賑やかさが更に寂寥感を誘う。

永い年月をたった1人で過ごし、既に慣れた筈の空間が、耐え難い程の孤独感を彼女に与えた。

自然彼女は崩れ落ちていた。久しくなかった感情の波が一気に押し寄せる。

気が付くと声を出して嗚咽していた。止める事は出来なかった。

（こたびの主は一体どれほど温かくどこまで心優しいのか…）

止めども無く溢れる涙は、彼女の心のままに頬を濡らす。泣きながら彼女は思う。

（主が目を覚ませば、今の逢瀬も私の事も全て忘れてしまわれる…ゼロも例外では無い…）

（夢の外で私を思い出される事は無いだろう…それは構わない…だがそれ故に遠からず訪れる破滅を救う術が私には何も無い…）

（夜天の光は闇に堕ちた……）

（私は主を救う事も騎士達を止める事も…何も出来ない…）

彼女の嗚咽だけが何も無い闇に木霊す。

（…どんな手段でもいい…この絶望の輪廻を断ち切っては貰えないか…？）

（あの優しい主と一途な騎士達だけでいい…救っては貰えないか…？）

（烈火の将…風の癒やし手…紅の鉄騎…蒼き狼…そして我が主八神はやて…）

（今まで神に祈っても悪魔に祈っても何も変わらなかった…）

（私には感じられる…このままでは…今までと比較にならない程の破滅が訪れ様としている…）

彼女は叫ぶ。それは助けを求める魂の悲鳴でもあった。

「ゼロ…！ウルトラマンゼロよ…！お前の様な存在は今まで居なかった…私はそれに賭けるしか無い…！」

「どうかあの子らを救ってくれ…頼む…ゼロっ！！」

彼女の魂の慟哭は止む事は無く、闇の中に虚しく溶けて行った…

「はやてちゃん？」

「はやてちゃん！」

「はやて、はやて、大丈夫？」

自分の名を呼ぶ声にはやては目を開けた。元の通り、検査室のベッドに横たわったままの自分を自覚する。

此方を心配そうに此方を覗き込む3人の顔が見えた。

「ヴィータ…シャマル…石田先生…どないしたん…？」

眠い目を擦りながらはやては体を起こした。ヴィータが心配そうにはやての顔を覗き込み、

「だってはやて…泣いてるから…」

「あれ…？ホンマや…」

はやてはヴィータに言われて、初めて自分が泣いているのに気が付いた。ヴィータはまだ心配そうに、

「はやて、どっか痛い？大丈夫…？」

「平気どこも痛ないし…眠ってただけやから…何や夢でも見たんやろか…？」

はやては怪訝な顔で首を捻るが、夢を見たのかすら定かではない。
何も記憶に無かった。

はやては、とりあえずシャマルからハンカチを借りて、涙を拭っていると、廊下で寝ていたゼロが入って来た。
その顔を見たヴィータが妙な顔をし、

「ゼロお前何泣いてんだ…？」

「はっ…？何だこりゃあっ！？」

言われて初めて気付いたゼロは、不思議そうにしながらも慌てて涙を拭うのだった。

ーーー

異常を心配した石田先生の、検査検査で2時間追加コースを何とか逃れたはやては自宅に帰っていた。

今日は誰一人欠ける事無く全員で夕食を食べ、レンタルＤＶＤの映画などを見て盛り上がったりしている所だ。

映画も見終わり、みんなまったりしている。
ヴィータなどは、はやてに寄りかかってスウスウ可愛らしい寝息を立てて熟睡していた。

ヴィータをシグナムに任せ、はやては『闇の書』を抱え、夜気が冷たい庭に車椅子を漕ぎ出した。
何となく夜空を見たくなったのだ。

冬の澄んだ夜空を見上げると、宝石の様な一面の星空が広がっている。

はやては空を見上げながら『闇の書』に語り掛けた。

「今夜も星が綺麗やな…『闇の書』は、ずっと昔から生きてて、色んな星空を見て来たんやろ…？
この世界の星空はどないや？昔と同じくらい綺麗か…？」

はやての言葉に『闇の書』は膝の上で応える様に僅かに動いた。そんな背表紙を撫でながらはやては、

「なあ…私の中で『闇の書』の存在が少しずつ大きくなって来るのが分かるんよ…だんだん…だんだん…一つになってく気がしてる…」

『闇の書』は手の中で動かずにいる。黙って話を聞いている様だ。

「そやけど頁は埋まってへんのにな…？当たり前や、シグナムと約束したからな…」

不思議そうなはやて。彼女はシャマルが『闇の書』に偽装スキンを施している為に、白紙に見える事を知らない。

はやては膝の上の『闇の書』に視線を向ける。今日は妙に気になった。

「なあ…私はな…この足も体も別に治らんでもええんよ…と言うか、ゼロ兄や石田先生には悪いけど…治ると思ってない……」

それは哀しい達観だった。八神はやてという少女は自分に降りかかるものを全て受け入れるつもりなのだろう…

「…そんなに長くは生きられんでもええ…みんなが居らんかったら私はどうせ独りぼっちやしな…」

はやては『闇の書』をしっかりとかき抱く様に抱き、

「約束する…みんなが私を必要としてる間は、それまで私は絶対に死んだり壊れたりせえへんで…これは絶対の絶対や！」

それははやての誓い。達観した彼女の最後の誓い…

「私はあなたとみんなのマスターやから……」

「じゃあ…はやてはばあちゃんになるまで死ねないな…？」

不意にはやての頭に手が載せられた。

「ゼロ兄…」

振り返ると、悲しげな目のゼロが立っていた。決まりが悪くなったはやては、俯いて無言になってしまう。

「…みんなはやてが好きなんだよ…1日でも長くはやてに生きていて欲しいに決まってるだろうが……」

ゼロは酷く悲しそうだった。はやてはおずおずと顔を上げた時、ゼ

ロがしっかりとはやてを抱き締めていた。

「馬鹿野郎…そんな事二度と言うんじゃねえっ…！」

叱りつける声には深い優しさが込められているのがはやてには分かる。

今にも失われ様としているものを繋ぎ止める為に、必死になっている姿に見えた。

ゼロの温もりが、冷たい夜気に晒されたはやての体をじんわりと暖める。

「…ごめんな…ゼロ兄……」

はやてはゼロの胸に顔を埋めてそっと呟いた。

「戻るか…」

「うん…」

ゼロは車椅子を静かに押して家の中に向かう。

はやては家の中に入る前に、もう一度星空を見上げた。

「…星の光は幾年遥か…今は遠き夜天の光……」

はやてはポツリとそんな事を呟いていた。ごく自然に口を吐いて出て来た言葉…

聞いていたゼロは、その言葉が心に染み入る気がするのだった…

つづく

第４７話　慟哭ーワイニーー（後書き）

ＳＳ話は長かったです。これでなのはサイドの登場人物はあらかた出揃いましたか…

Ａ'ｓ編もこれから後半、ラストシーン目指して頑張ります。
それでは次回お会いしましょう。

第４８話　密談ー クランディスティン・ミーティング ー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

A' s編も後半に入りました。ラスト目指してがんばりますので、
よろしくお願いします。
それでは第４８話をどうぞ。

第４８話　密談ー クランディスティン・ミーティング ー

その場所は、底が見えない程の長い縦穴式の部屋であった。
部屋の空気には、紙特有の匂いが混ざっている。

古い紙の匂いから新しい紙に、様々な種類の紙の匂い、それらが複雑に混ざり合って、その部屋独特の空気を形作っていた。

部屋の中は薄暗い。見ると、壁という壁が全て本棚になっており、中には隙間無く本がギッシリと詰まっている。

此処は『時空管理局・本局』の奥に位置する『無限書庫』

管理局の管理を受けている世界の、書籍や情報の全てが集められている次元世界最大のアナログデータベースである。

正に管理世界の記憶そのものと言った所で、その数は日を追う事に更に増えて行く。

その中でユーノは、無重力状態に保たれている室内に1人浮かんでいた。

周りには彼を取り巻く様に、数冊の本がふわりと浮かび、独りでに頁がめくられて行く。魔法の一種であるらしい。

ユーノはこんな調子で、1人黙々と『闇の書』関連の情報を探して

いた。既に此処に来て数日が経過している。

『リーゼロッテ』と『リーゼアリア』も出来る限り手伝うと言ってくれてはいるが、他の仕事も有る2人はそう何時もという訳には行かない。

基本ユーノ1人で検索する事になる。『無限書庫』の情報量は確かに凄いのだが、あまりの量にお手上げなのか、殆どが未整理状態だ。

本来なら目当ての情報を得る為に、チームを組んで年単位の調査が必要とされている。

しかしユーノには今使用している魔法、検索魔法という、こんな時にぴったりの魔法が有る。

魔法を使用して、書籍の中身を瞬時に読み取れる魔法だ。それを駆使して調査を効果的に行っているのである。

本人の才能に加え、遺跡発掘を生業にしている『スクライア一族』出身のユーノなら、その行程を大幅に短縮出来る筈だったのだが…

「…おかしいな……？」

ユーノは眉をひそめた。何故か『闇の書』関連の情報が見付からない。

そろそろ何かしらの情報に行き当たってもおかしくない筈なのに、

今だに欠片も発見する事が出来なかった。

何か不自然な気がした。誰かが全て関係書籍を持ち出した？
などと一瞬考えてしまったが、有り得ない事なので直ぐにその考えを打ち消す。

探すだけでも大変な上に、持ち出そうとすれば凄まじい量になる筈だからだ。

「…疲れてるのかな僕は…」

ユーノはため息を吐く。休憩して頭をシャキッとさせようと一旦検索を切り上げた時、誰かが室内に入って来たのに気付いた。

「調子はどう？」

入って来たのはリーゼアリアだ。隣にはユーノが会った事が無い青年が一緒に居るのが見える。若い１８歳程の青年だ。

リーゼアリアは青年と共に、無重力状態の室内をふわふわ浮いてユーノの傍に来ると、

「今日は助っ人を連れて来たよ」

「助っ人ですか…？」

ユーノは意外そうな顔をする。人手不足の管理局にしては珍しいと思った。
リーゼアリアは青年に目をやり、

「この人、ユーノと同じ様に『無限書庫』の閲覧の手続きに来てた民間の人なんだけど、こっちの事を小耳に挟んで是非手伝いたいって」

青年はユーノに礼儀正しく頭を下げて、

「『ヒビノ・ミライ』と言います。是非お手伝いをさせて貰いたくて」

青年、ミライは人懐っこい笑みを浮かべて手を差し出して来た。

「どうも、ユーノ・スクライアです」

ユーノもその手を握って握手を交わす。何かほんわりした、優しそうな人だなと思った。リーゼアリアはミライに目をやり、

「私達が忙しくてあまり手伝えないから、せめてと思ってね…身元はしっかりしてるよ。魔力は無いけど凄い頭脳を持っているから、きっとユーノの力になれると思うよ？」

リーゼアリアの紹介にユーノは笑顔を浮かべ、

「それでしたら是非お願いします。丁度困っていた所で…なかなか目当てのものが見付けられなくて…助かります」

「こちらこそ…お願いします」

ミライも笑顔を浮かべ頭を下げた。しかし彼は挨拶をながらも、ユーノの言った事に関して考えを巡らせていた。

（やはり…此処の施設の人達全ては、精神コントロールの影響下に有るのか…）

と謎の言葉を心の中で呟くミライであった。

ーーーーーーーーーー

「父様…」

『無限書庫』を後にしたリーゼアリアは、マスターである『グレアム提督』の元に赴いていた。

執務室のソファーに腰掛けているグレアムはリーゼアリアを見上げ、

「その青年に怪しい点は無いのだなリーゼ…？」

「はい…身元はしっかりしている様ですし、局員の紹介状も持ってました。魔力も無いですし、此方に不都合はありません父様…」

グレアムは頷くと、眼光鋭くリーゼアリアを見つめ、

「気を付けて掛かるのだぞ…特に孤門には…全てはこれからだ…」

「はい…父様、孤門はゼロを何とかすれば、全て片が付くと思っていますから…」

リーゼアリアはグレアムの鋭い眼光に、同じく目に鋭い光を宿して

頷き返した。

ーーーーーーーーーーーー

海鳴市の中央に位置する大型デパート。その中の携帯ショップ前で、フェイトはそわそわした様子で中を伺っていた。

少し経ってから、緑色の髪をした女性が紙袋を持って出て来る。リンディである。

今日は前にクロノと話していた、フェイトの携帯電話を買いに来ているのだ。

リンディはフェイトに近寄ると、微笑んで携帯の入った紙袋を渡し、

「フェイトさん、はいっ」

「ありがとうございます。リンディ提督…」

フェイトは頬を染め、紙袋をひしっと抱き締めお礼を言う。やはり嬉しいのだろう。

あまり大げさに感情を表に出すタイプでは無い彼女だが、その様子はプレゼントを買って貰い、嬉しくて仕方無い年相応の子供の様だ。

リンディに頭を下げると、待っていたなのは、アリサ、すずかの所にいそいそと向かう。待ち構えていたアリサが早速、

「いい番号有った？」

「うん…」

「え～っ、何番？」

ハシャぐなのはに、フェイトは早速箱から黒い携帯を取り出して、番号をみんなに見せた。歓声を上げるなのは達。

楽しそうに盛り上がるフェイト達を見て、リンディは笑みを浮かべる。

（フェイトさん、妙に気合いが入ってるわね…そんなに使いたかったのかしら…？）

何時もより張り切っている様に見えるフェイトに、少しリンディは可笑しくなってしまった。

ーーーーーーーーーー

駐屯所のマンションに帰って来たフェイトは、夕食を済ませ部屋に籠もっていた。
アルフは子犬モードでベッドで丸くなって寝ている。

フェイトは無言で勉強机に座り、机の上の『バルディッシュ』と、その予備弾倉と一緒に置かれている、買ったばかりの黒い携帯をジッと見つめていた。

長い間穴が開く程そうしていたが、漸く決心が着いたらしく、携帯を手に取り登録したばかりの番号のキーを押そうとする。
しかしその手は寸前でピタリと止まった。

「はあ～っ…」

フェイトは携帯を手に持ったままため息を吐いた。決心したものの、なかなか踏ん切りが着かないらしい。

（…明日にしようかな…考えてみればウルトラマンのゼロさんと、ゼロさんが同じ人かもって事は私の思い込みかもしれないし…）

などと弱気な事を考えていた時、

「フェイト何してるんだい？」

「ひやっ！？」

思わず変な声を出してしまうフェイト。
何時の間に起きたのか、アルフがベッドから降りて来て声を掛けて来たのである。
ゼロの正体への疑問は、アルフにもまだ言っていない。

「なっ…何でも無いよ…？」

当然慌てたフェイトは、内心焦りまくって取り繕おうとするが、慌て過ぎて変なポーズを取ってしまう。そして更に…

「あっ…」

フェイトは、手に持ったままの携帯のキーをしっかり押してしまっていた。勿論今表示していたゼロの番号へ…

「おう、分かった。じゃあ明日な？電話どうもな」

そう言ってゼロは携帯を切った。
丁度今ゼロは、ザフィーラの散歩とトレーニングと偽って『蒐集』に出掛ける為に、家の外に出た所である。

「管理局の黒い魔導師からか…？」

狼の姿のザフィーラがぼそりと聞いて来る。

「ああ…こっちに暫くの間越して来る事になったから、挨拶したいんだと…」

ゼロは電話内容を説明する。明日街中のファミレスで待ち合わせする事にしたのだ。只随分フェイトの声が慌てていた気がしたが…

「最近フェイト達とはアレだったからな…つい受けちまったが、不味かったかな…？」

現在敵対関係のフェイトから連絡が来て、余程嬉しかったのだろう。勢いでついＯＫしてしまった様だ。ザフィーラは暫く考え込み、

「…向こうはゼロの正体に気付いていないのだな…？」

「その辺は大丈夫だ。はやて直伝の説明をしておいたから、ウルトラマンの俺とは別人だと思ってる筈だ」

ゼロは毛ほども、自分の正体を疑われているとは思っていない。

ザフィーラはそこまで楽観視はしないが、罠では有るまいと思った。状況から鑑みるに、素知らぬ顔で普通に接するのが良いと判断したザフィーラは、

「…どの道ここで下手に断っても不自然かもしれん…なら普通に会って話の一つでもした方が無難だろう…念の為後を着けられない様に気を配っておけばいい…」

「そうか…分かった…悪いな終わったら直ぐに、そっちに合流する」

ゼロはホッとしてザフィーラに感謝する。少々先走った感が有ったからだ。

明日の方針が決まった所で歩き出す2人だが、ふとゼロが、

「一応みんなに言っておいた方がいいか…？」

「…無用な心配を掛ける事も無いだろう…俺も黙っておく…」

何となくザフィーラは、シグナム達に言わない方が良い気がしたので、そう応えておいた。

ーーーーーーーーーーーー

次の日、フェイト・テスタロッサは待ち合わせのファミレスに、約束の時間の1時間にやって来ていた。

窓際の席に座り、そわそわと落ち着かない様子である。

昨晩は目が冴えてあまり寝付かれず、少し眠そうだ。

それでもみっともない様は見せられないと、身だしなみには気を使った。

お陰で駐屯所を出る時、リンディ達に少し変な目で見られてしまったが…

フェイトの目的は、ゼロという少年と『ウルトラマンゼロ』が同一

人物かどうかを確かめる事だった。

そして同一人物であったなら、苦境に居るゼロの力になれればと思ったのである。

自分が間に入って、管理局と話し合いの手助けなりが出来るれば…そんな決意を秘めて、フェイトはやって来たのだ。

暫くの間じっと席に座っていたフェイトは、さすがに同じ姿勢でいるのに疲れ、ホオッと姿勢を崩して背伸びをした時、

「おおっ、フェイトもう来てたのか。悪い待たせたか？」

頭上でゼロの声がした。慌てて見上げると、着膨れ気味の格好をしたゼロがテーブル横に立っていた。

思いっきり油断した姿を見られたフェイトは、顔が熱くなる程赤面してしまう。

固まってしまったフェイトを、ゼロは不思議そうに見ている。

彼女は黙っているのもいけないと、グルグルする頭で必死に考え、何とか言葉を絞り出す。

「いえっ…そんな事無いです。1時間しか待ってましぇんかりゃっ！」

馬鹿正直に待っていた時間を言ってしまい、オマケに思いっきり噛んでしまった…

「悪かったな。もうちょい早く来れば良かったぜ」

席に着いたゼロは、ドリンクバーのジュースを飲みながら、気さくにフェイトに話し掛けた。

「…いえ…私が勝手に早く来てしまっただけなので…」

フェイトは俯きながらも照れくさそうに応える。
此処に来るまで色々緊張していたのだが、さっきのやり取りで、何か気持ちが軽くなった。

「こっちに暫く居るんだって？色々有ったみてえだな…」

ゼロがしみじみとした様子で聞いて来た。フェイトはごく自然に、

「母さんが亡くなったので、今はアルフと一緒にある人達の所でお世話になってます…此処にはその関係で…」

フェイトは言ってしまってから、しまったと思った。最初にこんな重い話を…と後悔したが、ゼロは特に引いた様子も無く、

「…大変だったな…その…大丈夫だったか…？」

相変わらずの言葉遣いだが、その言葉は温かみの籠もった心から気遣うものだ。フェイトは微笑んで、

「大丈夫です…と言ったら嘘になるんでしょうけど…支えてくれる人達が居ますし…母さんの為にも頑張ろうと思います」

しっかりとした口調だった。あれから数ヶ月…色々な事を乗り越え、周りの助けも有り、この様に笑える様になったのだろうとゼロは感慨深かった。

（人間は逞しいな…）

つくづくそう思い、嬉しくなったゼロは、

「周りの人達は良くしてくれるか…？」

「はい、みんなとっても優しい人達です…」

応えたフェイトの語尾が、少しトーンダウンしていた。それに気付いたゼロは、

「何か気になってるのか…？」

「あっ…いえ…」

歯切れの悪い返事をするフェイトのおでこに、ゼロの人差し指が当てられていた。

「え…？」

戸惑うフェイトにゼロはやれやれという顔をし、

「ガキのクセに、何でもかんでも1人で抱え込むと良くねえぞ」

悪戯っぽく笑うと、フェイトのおでこを軽くパチンと弾いた。

「あうっ」

フェイトは軽く顔を仰け反らせて小さく呻く。その表情が面白くて、ゼロは少し吹き出したが、

（全く…はやてといい、フェイトといい…抱え込む奴が多いな…）

などと思ってしまうが、自分もそのタイプなのには自覚が無い様だ。

フェイトは恥ずかしそうに、おでこを押さえている。図星を指されて恥ずかしくなったらしい。

暫くもじもじしていたが、意を決した様に顔を上げ、

「…そのお世話になっている人に…養子にならないかって言われてるんです…」

「そうなのか…」

ゼロは意外な言葉に少し驚きながらも、多分リンディの事だろうな…と見当を着けた。

直接顔を合わせた事は無いが、念話で話した感触で、誠実な人間だとは感じていた。

「その人の子供になるのが嫌なのか…？」

「いえっ、そんな事は全然無いです！優しいし、何時も私を気に掛けてくれるし…なかなか決められない私に待ってくれるって言うし…その人の息子さんも良くしてくれるし…」

最後の方は殆ど呟きに近かった。ゼロは再び俯いてしまったフェイトに、

「なら…何で悩む…？」

「それは……」

ゼロの問い掛けに口ごもるフェイトだったが、ゼロの見守る様な眼差しの温かさに、この人になら聞いて貰いたいと思った。

「…私だけ…幸せになってしまっていいのかなと思って……」

ほつれる様に思っていた事を吐き出していた。

「…母さんも…姉さんもリニスも死んでしまったのに…私だけ幸せになるなんて…それにテスタロッサの姓を捨てなきゃいけないかも…」

それがフェイトがリンディになかなか返事が出来なかった理由だった。

姉にあたるアリシアは僅か5歳で事故で亡くなり、魔法の師匠で親代わりだったリニスもフェイトが魔導師として完成した時に、契約を終え消滅した。
母親であるプレシアは『ヤプール』に体を乗っ取られて無惨に殺された。

そんな中で、只1人生き残った自分だけが幸せになっていいのか？という後ろめたさ…

そして、死して尚自分を守ってくれた母の姓、テスタロッサの名を捨てる事になるかもしれないという事が、フェイトに躊躇わせていたのだ。

「いいんじゃねえか…？フェイトが幸せになってもよ…」

ゼロがポツリと呟いた。

「えっ…？」

フェイトは顔を上げてゼロを見上げる。

「いいじゃねえか…幸せになったってよ…お前のお袋さん達はフェイトが不幸だと喜ぶ様な連中なのか…？」

「いえっ！」

フェイトは頭が千切れそうな勢いで頭を横に振って否定する。そんな彼女にゼロはとても暖かな笑みを浮かべ、

「だろう？だったらフェイトがそんなザマだと、却ってお袋さん達に怒られちまうな…？」

「…はい……」

漸くフェイトは、自分が自虐的な考えに凝り固まっていた事に気付いた。

人は周りで不幸が立て続けに起こると、妙なバランス感覚が働く事が有る。

自分も不幸でいなければいけないという感情だ。彼女は知らぬ間に

その感覚にはまり込んでいたのだ。

「姓の事も1人で悩むより、リンディさんとトコトン話してみればいい…話すのは大事だぞ…俺は親との話が足りなかったクチだから、こんなにひねくれ者になったからなっ」

最後に少々おどけてみせるゼロに、フェイトは自然笑顔になっていた。

「分かりました…私の気持ちも全部聞いて貰おうと思います。ありがとうございました」

フェイトは深々と頭を下げる。また助けて貰った…フェイトはそう感じたが、肝心な事を思い出した。

（ゼロさん力になろうと思ってたのに…何時の間にか私の悩み相談に乗って貰ってる…何やってるんだろ私…）

最初の目的と大きくズレてしまっている事を自覚したフェイトは赤面してしまった。

だが何時までもこんな調子じゃ駄目だと思ったフェイトは、ジュースを美味しそうに飲んでいるゼロの目をしっかりと見つめ、

「ゼロさん…あのっ…、何か困っている事は無いですか…？」

「へっ…？」

間抜けな声を出してポカンとするゼロに、フェイトは自分の話の切り出しの下手さにガッカリしながらも、

「何か悩みが有れば、わっ私で良ければ聞きますよ…？」

これでも彼女なりに考えた切り出しである。もし本当にウルトラマンゼロであるなら、自分が何を言っているのか解る筈だと。

つまりフェイトが、ウルトラマンゼロがあなただと気付いている、という事を匂わせたのである。

本人なら何かしらの反応が有ると思ったのだ。

息を呑んでゼロの答えを待つフェイト。ゼロはキョトンとしていたが、

「ありがとよ…気持ちだけ受け取っとくぜ…」

ゼロはフェイトの肩をポンと叩いて苦笑を浮かべた。不自然な様子は無い。

フェイトは拍子抜けしてしまった。

（全然反応が無い…？）

そう思うフェイトの前のゼロは、至って普通だった。
嘘を吐くのが下手な筈のゼロが何故平然としているのか？答えは簡単である。

ゼロは自分の正体を疑われている事にまるで気付いていない。
フェイトが今言った事も、純粋に彼女の善意から出た言葉だと思ってしまったのだ。

ザフィーラは、万が一でも疑われている可能性が有る事をゼロに全く話さなかった。

嘘の下手なゼロに取り繕わせるより、素で話させた方が却って良いと判断したからである。
読みがどうやら功をそうした様だ。

自分の勘が外れたのかと首を捻るフェイトに、

《フェイト聞こえるかい？》

アルフからの思念通話がいきなり入って来た。

「…すいません…ちょっと…」

フェイトは携帯を掛ける素振りをして席を立つと、一旦店の隅に移動した。

《どうしたのアルフ…？》

《一応伝えておいた方がいいと思って…さっきウルトラマンゼロの姿が監視装置に捉えられたんだよ！》

《えっ…？》

フェイトは声を上げる。こうなるとウルトラマンゼロとゼロは別人なのかと思わざる得ない。

《じゃあ…直ぐにそっちに戻るよ》

《あっ…でも直ぐに見失ったんだけどね…だから今の所は別に戻らなくても大丈夫だよ。フェイト今ゼロと一緒なんだろ？》

電話にはアルフも出ている。誤魔化しが効かないので彼女には言ってあるのだ。疑惑の件までは言っていないが…

《でも一応戻るよ。何が有るか分からないし…》

《分かったよフェイト》

思念通話を終えたフェイトは、テーブルに座っているゼロを見つめ、ホッとする反面、残念な気持ちが入り混じった複雑な気持ちになってしまった。

（…やっぱり私が勝手に思い込んでいただけだったのかな…？）

そう思いつつも急用が出来たので、おいとまする事をゼロに告げる。

「すいません…呼び出しておいて…」

「なあに気にすんな。車には気い付けて帰れよ」

申し訳なさそうに頭を下げるフェイトに、ゼロは特に気にもせず屈託無く笑う。

フェイトは子供扱いが少し不満だったがその笑顔を見て、この人が酷い目に遭ってないのが分かっただけでも良かったと思った。

「では失礼します…今日はありがとうございました」

「じゃあなっ」

2人はその場で別れ、それぞれの目的地に向かう。ふとフェイトは帰り際に引っ掛かるものを感じた。

（…何だろう…？）

立ち止まり、違和感が何かをフェイトは暫く考えた。

「あれ…？」

漸く思い当たったフェイトは小さく声を洩らす。

（私…リンディ提督の名前出したっけ…？）

フェイトが振り返ると、ゼロの姿は何処にも見当たらなかった。

（…やっぱり私提督の名前一言も言ってない…）

冷たい北風が彼女の金髪をなぶる様に巻き上げた。フェイトは困惑して、その場に立ち尽くした…

ーーー

《フェイトちゃん…ここの所ちょっとぼーっとしてますよね？やっぱりウルトラマンさんの事気になってるんでしょうか…》

《この間１人で出掛けてから、ああなんだよね…多分…おおっと、後は本人に聞いておくれっ》

アルフはニヤニヤしながら途中で答えるのを停めてしまった。

《えっ、何の事ですか？》

なのは達がこっそり見当違いな話をしていると、エイミィは周りを見回して、

「艦長もう本局に出掛けちゃった？」

「うん…『アースラ』の武装追加が済んだから、試験航行だって、アレックス達と…」

気を取り直したフェイトは、カボチャを持ったままで応える。エイミィは少し思案顔をし、

「武装ってえと…『アルカンシェル』か…」

エイミィはため息を吐いた。心配そうな様子で、

「あんな物騒なもの…最後まで使わずに済めばいいんだけど…」

「クロノ君も居ないですし…戻るまではエイミィさんが、指揮代行だそうですよ」

なのはがクロノから聞いていた伝言を伝える。

「責任重大っ」

床に寝そべっている子犬アルフの冷やかす様な言葉に、エイミィはフェイトが持ったままのカボチャを撫でながら、おどけた口調で、

「それもまた物騒な…まあ…そうそう非常事態なんて起こる訳が…」

フェイトからカボチャを受け取った瞬間だった。
赤い警告灯と共に非常事態を告げるアラーム音が鳴り響いた。

「！？」

呆然としてカボチャを床に落としてしまうエイミィだが、直ぐに気持ちを仕事モードに切り替え、

「孤門さんに連絡を、直ぐにこっちに来て貰って！」

「うんっ」

フェイトは直ぐに孤門を呼び出す為に携帯を取り出した。

つづく

第４８話　密談ー クランディスティン・ミーティング ー（後書き）

補足事項として、ミライの身元は、ゼロと同じ様に、データ改ざんにより手に入れた捏造記録です。

ちなみにゼロとフェイトの会う場所は、最初に行ったラーメン屋にしようかと思いましたが、どう考えてもギャグにしかならないので止めました…

それでは次回お会いしましょう。

第４９話　死闘の幕開け－ドーンオブバトル－（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
第４９話をどうぞ。

第４９話　死闘の幕開け－ドーンオブバトル－

強烈な日差しが降り注ぐ砂漠のみの無人の異世界。
無数の巨大な竜の如き魔法生物が、砂の中を蠢きながらシグナムを取り巻いていた。

「厄介な相手だな…少し集め過ぎたか…」

息も荒くシグナムは周りを見回して呟いた。
纏めて『蒐集』を行おうと魔法生物の群れを誘き出したまでは良かったが、予想外に数が集まってしまった様だ。

共にゼロとザフィーラが来ているが、自在に砂の中を移動する相手に翻弄され、どうやら分断されてしまったらしい。

相手の数の多さと連続攻撃に、さすがのシグナムも疲労して来ている。
只でさえ連日の戦闘で消耗が激しい。

包囲を狭めて迫る魔法生物達に、シグナムは牽制を掛けようと左手をかざした時、魔法生物の触手が彼女を襲う。

「！？」

気付いた時にはもう遅く、数本の鞭の様な触手がシグナムの全身をがんじがらめに縛り付けてしまった。

「しまった…！」

不意を突かれて捕らわれてしまったシグナムの柔肌に、触手が更に食い込んで行く。

「うわあっ…！」

彼女はたまらず声を洩らした。豊満な胸や太股がおぞましい触手にきつく締め上げられ、艶めかしく胸の形が変形する。

このまま引き裂いて捕食するつもりなのか、魔法生物がおぞましい巨大な口を開けて迫る。
その時銀色に光る物体が高速で飛来した。

『シグナムゥゥッ！！』

ゼロの声が響くと同時に、銀色の物体『ゼロスラッガー』がシグナムを捕らえていた触手を一度に切り裂いた。

『大丈夫かっ！？』

「ゼロ済まん、大丈夫だ」

拘束から脱出したシグナムが礼を言った時、怒った様子の人間大のゼロが魔法生物を指差し怒鳴る。

『てめえっ！はやてと俺のおっぱいに何してやがる！！』

「ななな何を言っているのだお前は！？」

顔を真っ赤にして叫ぶシグナムの後ろから、先程の魔法生物が再び迫っていた。

『シグナム後ろだ！』

「ちいっ！」

ゼロの叫びに、シグナムがレヴァンティンを構えて振り向いた時だ。

《ｔｈｕｎｄｅｒｂｒａｉｄ》

十数発に及ぶ金色の槍が、シグナムに襲い掛かろうとしていた魔法生物に次々と突き刺さった。

更に光の刃がゼロ達の周りで牙を剥いていた、魔法生物の群れに降り注いだ。光刃が魔法生物の群れを切り裂く。

巨体が砂塵を上げて倒れ込み、体液が飛び散り砂漠を揺るがした。

『！？』

ゼロが上空を見上げると、光る魔法陣の上に立つフェイトと、人間サイズの『ウルトラマンネクサス』の姿が有った。

「ｂｒｅａｋ！」

フェイトの声と共に魔法生物に突き刺さっていた金色の槍が更に体にめり込み、一斉に大爆発を起こし巨体が崩れ落ちた。

その頃分断されていた人間形態のザフィーラが、シグナムの居る方向に目をやった時、挑発する声が耳に入った。

「ご主人様が気になるかい？」

「お前か…」

ザフィーラが声の方を見ると、人間形態のアルフが宙に浮かんでいる。彼女は鋭い視線をザフィーラに向け、

「ご主人は1対1…こっちも同じだ…ゼロを利用しようとしても、孤門が抑えてくれる…」

ザフィーラは厳しい表情で拳を掲げ、

「シグナムは我らの将だが…主では無い！」

「アンタの主は『闇の書』の主って言う訳ね？」

アルフは不敵に笑い、同じく拳を構えてザフィーラに相対した。

状況をモニターしていたエイミィから、フェイトと孤門・ネクサスに連絡が入る。

《ちょっと2人共、助けてどうすんの?捕まえるんだよ!》

エイミィの慌てた様子の注意にフェイトは苦笑する。ネクサスは頭をかき、

『つい…つられちゃったよ…』

などと言っている。シグナムは上空のフェイトを見上げ、

「礼は言わんぞテスタロッサ…お陰で『蒐集』対象を潰されてしまった…」

シグナムは『レヴァンティン』にカートリッジをセットしながら、
静かに言い放つ。
フェイトは真剣な目で白い女剣士を見据え、

「お邪魔でしたでしょうが…私には確かめなくちゃいけない事が有りますから…」

その瞳には強い決意が宿っていた。つい助けてしまったという訳では無い様である。

『ネクサス…どういうつもりだ？』

ゼロの問いにネクサスは軽く肩を竦め、

『何…たまたまさ…それよりも、今日は決着を着けようか！』

ネクサスの白色に輝く両眼が、ギラリと輝きを増した。

ーーーーーーーーーーーー

時間は少しだけ巻き戻る。『アースラ』の試験航行の為『本局』に戻っていたリンディは『ギル・グレアム提督』の元に挨拶に訪れていた。

「久しぶりだね…リンディ提督…」

グレアムはリンディに執務室のソファーを進め、お茶をもてなしながら静かに挨拶をした。

「ええ…」

リンディも頭を下げる。僅かに2人の間にはギクシャクしたものが有った。
それもグレアムの方が一方的に気を使っている、そんな雰囲気である。

「『闇の書』の事件にビースト…進展はどうだい…？」

「なかなか難しいですが…孤門さんも居ますし、上手くやります」

リンディはグレアムにあまり気を使わせない様に、敢えて何でも無い様に答える。

お茶を美味しそうに飲むリンディにグレアムは自嘲を込めて、

「君は優秀だ…私の時の様な失態はしないと信じているよ…」

それを察したリンディは改まった様子で、

「夫の葬儀の時申し上げましたが…あれは提督の失態ではありません…あんな事態を予測出来る指揮官なんて居ませんから」

リンディは励ましの意味も含めてニッコリと微笑んだ。

11年前『闇の書』事件で『闇の書』を押さえ、次元航行船で搬送中だったリンディの夫『クライド』

突如として想定外の暴走を起こした『闇の書』暴走体の被害を抑える為、他のクルーを脱出させ、1人船に残り犠牲となった。

その際直接の責任者であったグレアムは『アルカンシェル』で、クライドもろとも『闇の書』を消滅させるという、苦渋の決断をしなければならなかったのである。

止むを得ない措置であった。クライドも暴走体を抑える為、覚悟の上で船に残ったのだ。誰が悪い訳でも無い。

しかしグレアムは、そう簡単には割り切れないのだろうとリンディは思う。

私はあなたを恨んでなどいません。そんな想いも込めリンディは微笑む。

グレアムは無言でその微笑みを見つめた。
その瞳には何時もの温厚な光以外に、別のものが混じっていた…

「ミライさん…これ何処に有ったんですか？」

『無限書庫』で検索作業を続けていたユーノは、ミライから渡された本を見て驚きの声を上げた。

「たまたまその辺りを探していたら出て来たんだよユーノ君」

ミライは努めて何でも無い風に下方の本棚を指差した。

彼が持って来た本は、そのものズバリの本という訳では無かったが、捜索のヒントにするには十分なものだった。

ユーノは妙な顔をしてミライが指差した方向を見て、

「…おかしいなあ…あそこは前に調べたと思ったんですけど…見落としちゃったんですかね…？」

「あっ、でも結構奥の方に紛れ込んでいたからじゃないかな…？僕も偶然目に入ったから…」

ミライの説明にユーノはそういう事も有るかと気を取り直し、

「でもこれで取っ掛かりが出来ました。此処からドンドン行かないと」

「うん頑張ろう。それらしい本を持って来るね」

ミライは早速本棚から何冊も本を取り出し持って来る。

ユーノは俄然張り切った。早速魔法陣を発動させ検索魔法を開始する。

ミライも本を調べ始めた。凄まじいスピードで頁を捲って行く。ユ

ーノはその様子を見て、

（ミライさん…リーゼアリアさんの言う通り凄いや…魔導師のマルチタスクより凄いんじゃないか…？）

などと感心していた。マルチタスクとは、２つ以上の事を同時に思考・進行させる戦闘魔導師には必須のスキルである。
ユーノにはミライの頭脳がそれ所では無い様に見えた。

一方のミライはユーノの尊敬の眼差しに苦笑したが、

（ユーノ君が見落としていた訳じゃ無いよ…ユーノ君の能力なら、もっと探索を進められていた筈なんだ…）

ミライは凄まじいスピードで本をチェックしながら、一瞬見えない誰かに対する様に鋭い視線を送る。

（ユーノ君…いや…君だけじゃ無い…この『本局』中の人達全てが無意識の内に『闇の書』関連と、恐らくもう一つの事に関して抑制が掛けられているんだよ…）

ミライはどうやら見えない敵に対抗する為に『管理局』に潜り込んだらしい。

彼はまだ動けない。今敵に存在を知られていないのは『ウルトラマンメビウス』のみ。

（ゼロ…今は耐えてくれ…後で必ず！）

ミライは苦闘を続けている筈のゼロに、心の中で激励を送るのだっ

た。

クロノは試験航行を終えた『アースラ』に向かう為、リーゼアリアと本局内の通路を歩いていた。

「結局…封印手段は『アルカンシェル』になっちゃったな…」

「仕方ないよ…他に無いもんねぇ…他にあんな大出力が出せる武装…」

気が進まない様子のクロノにリーゼアリアはそう言うが、クロノは険しい表情で、

「あれは周辺への被害が大き過ぎる…撃たずに済めばいいんだが…『ダークザギ』の事も有る…どうなるか…」

「『ダークザギ』か…『闇の書』だけでも大変なのに…せめて主が見つかるといいんだけどね…」

リーゼアリアはそこで一旦言葉を止め、クロノを少しの間意味有りげに見つめ、

「…まあ…例え主を押さえた所で『闇の書』には転生機能もあるから…新しい主に渡るまで、ほんの数年ばかり問題を先送りにするだけなんだよね…」

「それでも…その場で大規模な被害が出るよりずっといい…」

「まあね…」

クロノらしい言葉にリーゼアリアは同意の返事をしておいた。

ドックに着いた2人の前に、大型魔導砲『アルカンシェル』を船体下部に取り付けられたアースラが鈍く光を放っていた。

ーーーーーーーーーー

熱砂の中、シグナムとフェイトは静かに対峙していた。

ゼロとネクサスは巻き添えを出さない為、離れた場所で同じく対峙している筈である。

照りつける灼熱の陽光の中シグナムは、

「預けた決着は、出来れば今暫くは先にしたいが…速度はお前の方が上だ…逃げられないなら、戦うしか無い…」

「はい…私もそのつもりで来ました…この戦いで私は答えを見つけます…！」

「答え…？」

フェイトの強い決意を感じさせる言葉に、シグナムは疑問を覚えるがフェイトは、

「全てはシグナム…あなたと全てを出し切って戦ってからです…！」

「面白い…」

シグナムはシンプルなフェイトの答えに微笑を浮かべた。

2人は同時に互いのデバイスを構える。暫くの間沈黙が続く。2人の間の空気がひしひしと張り詰めて行く。

次の瞬間、均衡を破ってフェイトは猛スピードで先に飛び出した。シグナムも瞬時に反応し素速く飛び出す。戦いが始まった。

フェイトは突撃すると同時に、遠心力を利用してバルディッシュの一撃を打ち込む。シグナムも負けじとレヴァンティンでの斬撃を繰り出した。

火花を上げる互いのデバイス。すれ違い様に一撃を入れ合うが、互いに防御し合い決定打には至らない。

フェイトはそのスピードを生かし、シグナムの背後に素早く回るとバルディッシュを叩き込むが、シグナムは神速の反射神経でその一撃を受け止める。

「くわあっ！」

間髪入れずレヴァンティンでフェイトを吹き飛ばした。

砂塵を上げ制動を掛けるフェイトに、蛇腹状に変化したレヴァンティンが生き物の如く襲い掛かる。

「ハーケン・セイバァァッ！」

フェイトはバルディッシュを電光の大鎌に変え、包囲する様に狭まるレヴァンティンの長大な陣の隙間をぬって、刃先をブーメランの

様に飛ばした。

「ちぇすっ！」

ハーケンセイバーを剣撃の一閃で弾き返すシグナム。
それと同時にレヴァンティンの包囲陣が、大蛇が締め上げるかの如くフェイトに襲い掛かる。

彼女の居た場所が爆発した様に砂の柱が舞い上がった。
しかし爆発の直前に放たれた二撃目のハーケン・セイバーがシグナムを襲う。とっさに上空に飛んで逃れたシグナムだが、

「あっ！？」

更に上空に移動していたフェイトが、バルディッシュを振りかざし、高速で降下して来た。

砂塵を目眩ましにしたフェイント攻撃。シグナムは完全に虚を突かれた。

レヴァンティンはまだ蛇腹状態で防御は間に合わない。行ける！フェイトはバルディッシュを振り下ろす。

しかしその斬撃はシグナムの目前で、しっかりと受け止められていた。

「鞘っ！？」

フェイトはハッとして声を洩らす。
防御が間に合わないと瞬時に判断したシグナムは、左手に携えていた鞘で攻撃を受け止めたのだ。

並外れた戦闘センスであった。鞘で高速で打ち込まれる斬撃を受け止めてしまったのだから。

「うわああっ！」

一瞬動揺したフェイトに、シグナムの強烈な回し蹴りが炸裂する。
とっさに防御したフェイトは、砲撃魔法で牽制して距離を取った。

互いに砂漠に降り立った2人はカートリッジをロードする。
フェイトの周りに金色の魔法陣が展開され、左手に電光が集中して行く。

「プラズマ…」

シグナムはレヴァンティンを大きく振り被る。その足元に紫色の魔法陣が現れ渦を巻いた。

「飛竜…」

フェイトが右手を突き出し叫ぶ。

「スマッシャアァァッ！！」

金色の砲撃魔法が砂漠を抉りながら発射された。
シグナムは再び蛇腹状態に変化させたレヴァンティンを螺旋を描く様に振る。

「…一閃っ！！」

彼女の気合いと共に、紫色の斬撃波が唸りを上げて金色の砲撃魔法と激突した。
２つの魔力がぶつかり合い爆発を起こす。

爆発と共に上空に飛び上がっていたシグナムとフェイトは、素早くカートリッジをロードする。

「はあああああっ！！」

「あああああああっ！」

レヴァンティンとバルディッシュが激突し強烈な光を放つ。嵐の様な斬撃の応酬が再び始まった。

空中で互いの拳をぶつけ合うザフィーラとアルフ。戦いはもう何合にも及んでいた。

全力でぶつかり合った2人はさすがに肩で荒く呼吸をしている。それでもアルフは怒りの表情でザフィーラに向かって叫んだ。

「アンタも使い魔…守護獣ならさ、ご主人様の間違いを正そうとしなくていいのかよ!?ゼロまで道具にして…恥ずかしくないのか！！」

その言葉には彼女の深い想いが込められていた。

以前、おかしいと思いつつも命令に従った結果を思い出す。

『プレシア』の体を乗っ取った『ヤプール』にいいように利用された挙げ句、フェイトは追い詰められ、絶望の中死を迎える所だった

のだ。

アルフにはザフィーラが、以前の自分とダブって見えるのだろう。
それ故ザフィーラの行動が我慢ならないのだ。

ザフィーラは一瞬眉をひそめた。憤るアルフをキッと見据え、

「『闇の書』の『蒐集』は我らが意思…！そして我らが主は我らの『蒐集』をご存知無い…！」

「何だって！？そりゃ一体…？」

予想外の言葉を聞いてアルフは混乱してしまう。

「そしてこれだけは言っておく…ゼロは恥じる様な真似は何一つしていない！我らもだ…主に誓って…！」

ザフィーラは拳を強く握り締めていた。自分達はいい…過去にそれだけの事をして来た…信用されるとは思っていない。

しかし何も知らない優しいはやてと、あの真っ直ぐなゼロが悪人扱いされるのだけは我慢出来なかった。

寡黙な戦士にも、これだけは言っておきたかった事だったのだろう。

「恥じる様な事はしていない…？それが本当なら…何で話をしないんだい！？」

「我らは元々追われる身…存在が知られた時点で既に遅いのだ…我と同じ守護の獣よ…我らは何が有ろうと、主の為前に進むしかない…お前もまたそうでは無いのか…？」

アルフの疑問にザフィーラは再び拳を構えて応える。

「そうだよ…でも…だけどさっ！」

アルフの困惑した声が砂漠に虚しく木霊す。ザフィーラはこれ以上の問答は無用とばかりに、アルフに向かって飛び出した。

シグナムとフェイトが戦っている場所から遥かに離れた砂漠に二体の巨人、ゼロとネクサスが相対していた。

複数の太陽の光に、互いの銀色の顔が光をギラリと反射する。

『…本気で掛かって来て貰おうか…』

ネクサスがおもむろに、挑発を掛ける様に催促する。

『何だとっ！？』

いきり立つゼロに構わず、ネクサスは話を続ける。
その様子は突っかかる不良に言い聞かせる教師に見えなくもない。

『君が今まで僕との戦いに躊躇いがあったのは分かっている…でも本気を出さないと、君は此処で死ぬ事になる！』

『何故俺を目の仇にする！？こうしてる事自体、敵の思う壺だぞ！！』

ゼロはたまらず叫んでいた。こんな状況は馬鹿馬鹿しい限りだと思うしかない。本当の敵は影でほくそ笑んでいる筈だ。

『どういう意味だい…？』

さすがにネクサスはゼロの言った意味が解らない様だ。

『最初っから今まで全部罠なんだよ！俺達は誰一人襲ってなんかいねえ！俺達の偽物が居やがるんだ！！』

『偽物だって…？』

ネクサスは不審そうに首を捻った。ゼロは身を乗り出し、

『そうだ！何が目的か知らねえが、俺達を戦わせて何か企んでる奴が居やがるんだ！きっと『ダークザギ』の仕業だろうぜ！！』

『…ザギ……？』

ネクサスは意外そうに首を傾げる。

『そうだ、本当ならやり合う必要はねえ！敵の思う壺だ！！』

ゼロの必死の叫びに、ネクサスは暫く考えている様子だったが、訴えかけるゼロを見据え、

『それが例え本当だったとしても…僕は君を倒さなければならない！』

『なっ！？』

強い拒絶が込められたネクサスの宣言にゼロは声を洩らす。
やはり信用されなかったかと思ったが、ネクサスは両眼の光を強め、

『君が人を襲っていなくとも僕のやる事は変わらない…君の存在自体が災いをもたらし最悪の破滅を招く！』

『そ…そんな馬鹿な話が有ってたまるかあっ！！』

理不尽なネクサスの言葉に、ゼロは思わず叫んでいた。
そんな漠然とした事で死ねとでも言うのかと怒りが込み上げる。ネクサスは拳を握り締め、

『そうだ…君にとっては理不尽な話だ…とても納得は出来ないだろうし、無抵抗で殺されるつもりも無いだろう…？』

『当たり前だ！そんな馬鹿が居てたまるか！！』

『ならその手に運命を打ち砕き、大事な者達を守り抜く力があると言うならば戦え！僕は君を倒す！此処で死ぬ様なら君は誰一人救えない！！』

ネクサスの体に身を刺す様な鋭い殺気が満ちた。本気でゼロを倒すつもりの様だ。

（やるしかねえっ！！）

ゼロも覚悟を決めた。ネクサスはこちらを殺す気らしい。はやて達を置いて今死ぬ訳には行かない…

左手を突き出しレオ拳法の構えをとる。ネクサスも拳を突き出し半身に構えた。

『ディヤアアアッ！！』

『シェアッ！』

爆発した様に砂塵が舞い上がる。２体の巨人は砂漠を揺るがして激突した。

ぶつかり合うゼロとネクサスの戦いを、高みの見物とばかりに見下ろしている者達が居た。

遥か上空、複数の太陽に紛れて空中に浮かぶ漆黒と橙色の巨人の姿。真っ赤に輝く単眼。『ダークロプスゼロ』であった。

その巨大な手のひらに立つ2つの人影。その内の1人は、赤い両眼で地上を見下ろし、

『…そろそろ挨拶と洒落込まねえとな…』

赤い両眼、もう1人のダークロプスが隣に立つ人物に話し掛ける。その様子は楽しくて仕方ないと言った様子だ。

『はい…我が主…』

上空の強い気流に八重桜色のポニーテールをなびかせて、白と赤の騎士甲冑を身に纏った女性は頷いた。

つづく

第４９話　死闘の幕開け－ドーンオブバトル－（後書き）

7月からテレビ東京系でウルトラマンの紹介番組みたいなのをやるそうです。ナビはゼロで。

映画に向けてウルトラマンも盛り上がって欲しいものです。

それでは次回お会いしましょう。

第５０話　鏡像－ミラーイメージ－（前書き）

読んで頂き本当にありがとうございます。

思った以上の評価を頂きただ感謝です。

まだまだお話は続きますが、お付き合いして頂ければ嬉しいです。

それでは第５０話をどうぞ。

第５０話　鏡像ー ミラーイメージー

唸りを上げて巨大な拳同士が激突した。

『ウルトラマンゼロ』と『ウルトラマンネクサス・ジュネッスブルー』互いの強靭な拳がぶつかり合い火花を散らす。

『オラオラオラオラオラオラオラァッ！！』

『シェアアアアアアアッ！！』

ゼロとネクサスの暴風雨の如き拳のラッシュの応酬だ。まるで砲弾をぶつけ合う様な激突音が砂漠に木霊す。

互いの体に、ビルをも一撃で粉々に砕く凶器と化した拳が打ち込まれる。

いくら超人とは言えど、痛覚の無い機械でもロボットでも無い２人は痛みを感じている筈だが、退く事など考えの外とばかりに一歩も退かない。

互いの譲れないものの為であろう。

荒々しい攻撃を繰り出すゼロに対し、ネクサスも普段の穏やかさをかなぐり捨てて、嵐の様なラッシュを叩き込む。

破壊の鎚（つち）と化した拳が双方の腕、胸部、腹にぶち抜けと言わんばかりに叩き込まれる。

更に大きくモーションをとった、ゼロとネクサスの痛烈な右ストレートが、同時にお互いの顔面に打ち込まれた。

ゼロコンマ1秒にも満たない一瞬の静寂。

次の瞬間血の如き火花を上げて、爆発した様に巨人達は後方に吹き飛んだ。

互いの凄まじいパワーの余波で、砂塵を巻き上げ砂漠を後退り制動を掛ける。

しかし怯む事無く距離を置いた2人は、砂漠を揺るがして一気にジャンプする。

巨体が重力の枷を振り切って矢の如く宙を翔けた。

ゼロの赤熱化した右足と、ネクサスのエネルギーが込められた右足が繰り出される。

『ウルトラゼロキック』と『ジュネッスキック』の打ち合いだ。空中で火花を散らして交差する巨人。

更にすれ違い様にネクサスの『パーティクル・フェザー』くの字型の光刃の連射がゼロを襲う。

『これしきぃっ！』

ゼロは額のビームランプから、緑色の光のラインを連続して撃ち出す。

破壊光線『エメリウムスラッシュ』の掃射で光刃を次々と叩き落とし、砂丘を更地にして砂漠に着地する。

ネクサスもほぼ同時に地面に降り立った。

逸れた光刃とスラッシュの流れ弾で、周囲の砂地が弾けた様に連続して吹き飛ぶ。

着地と同時に2人は電光に勝る動きで向かい合い、必殺光線の構えを取る。

ゼロは両腕をL字型に組み、ネクサスは右腕に光の弓を形成した。

『デリャアアアッ!!』

『シェアアアッ!!』

青白い光の奔流と光の弓が真っ向からぶつかり合う。『ワイドゼロショット』と『アローレイ・シュトローム』が真っ向から激突し、エネルギー波が大爆発を起こした。

爆発の余波で辺り一面の砂丘が吹き飛び、巨大な窪地が出来る。

人知を超えた戦いであった。

これが市街地であったら既に街が消し飛んでいるレベルである。

ゼロは爆発をものともせず頭部の『ゼロスラッガー』を両手に構え、

『どうした？今日はお得意の『メタ・フィールド』は使わねえのか！？』

『此処は無人の世界だ必要無いだろ？それにハンデ抜きの方が君も納得すると思ってね』

一見余裕に満ちた態度に思えたが、そうではあるまいとゼロは判断する。

『メタ・フィールド』はネクサス本人に非常に負担を掛けるらしい。両刃の剣という訳だ。

被害を与える心配の無い今、エネルギーの無駄使いを避けたのだろう。

ネクサスも『アローアームド・ネクサス』を発動、光の剣『シュトローム・ソード』を構える。

『後悔すんなよ！手加減抜きってほざいたのは貴様だ！』

言うが早いがゼロは2本のスラッガーをピタリと空中に静止させた。

『デリャアアアッ！！』

強烈な回し蹴りで、静止状態のスラッガーを一気に蹴り飛ばす。

スラッガーにキックのパワーを上乗せした『ウルトラキック戦法』だ。ゼロ流の『ウルトラノック戦法』という所か。

化鳥（けちょう）の如くネクサスに襲い掛かるその速度は、通常のスラッガーの投擲速度の比ではない。

『シェアッ！』

ネクサスは初撃をシュトローム・ソードの一閃で跳ね返そうとするが、スラッガーのパワーに押され、右腕ごとソードを跳ね上げられてしまった。

（ちいっ！）

怯むネクサスに2撃目のスラッガーが襲い掛かる。その時左腕の『アームドネクサス』のクリスタル部分が青く光を放った。

アームドネクサスが変化し、右腕のみの装備だったアローアーム

ドネクサスが左腕にも出現、その腕からもう一振りの光の剣が形成された。

『ウオオオッ！！』

ネクサスは雄叫びを上げ、2撃目のスラッガーを2本のシュトローム・ソードで跳ね返す。

『シュトローム・ソード二刀流』

ネクサスはソードを胸の前でクロスさせガッチリと構える。その姿は古代の闘士を思わせる勇猛さを連想させた。

光の剣が合わさり、スパークした余剰エネルギーが空中に雷の様に放電される。

（コイツ…底が知れねえ…）

弾かれたスラッガーを手にしたゼロは、ネクサスの潜在能力に脅威を感じた。

（出し惜しみしてたら殺られる！）

腹を決めたゼロは、2本のスラッガーを一つに組み合わせる。スラッガーは眩い光を放ち、見る見る内に大きく形を変えて行く。

そしてゼロの手の中スラッガーは、半円状の長大な両刃の剣と化

した。

『ゼロ・ツインソード』『ベリアル』や『ダークロプス』を倒した『プラズマスパーク』のパワーを秘めた必殺剣である。

ネクサスも二刀のシュトローム・ソードを剣豪の如く構えた。

ゼロとネクサスは、同時に砂漠すれすれの高度で飛び出す。

次の瞬間音速を超え、腹に重く響く衝撃波を響かせながら、巨人達はマッハの速度で激突する。

ギャキイイィィィンッ！！

耳をつんざく激突音が激しいスパークと共に響き渡った。

弾き飛ばされた様にゼロとネクサスは、後方に放物線を描いて吹き飛び、同時に地響きを立てて砂漠に背中から落下する。

『ぐはっ！』

衝撃に思わず呻き声を洩らしてしまうゼロ。ツインソードの結合が解け、元のスラッガー状態に戻ってしまっていた。

同じく砂漠で呻くネクサスの二刀のシュトローム・ソードも消滅している。極限を超えた激突に一時的に解除されてしまった様だ。

しかし2体の巨人は立ち上がる。共にかつては世界を救った事の有る筈の戦士同士の死闘…

無意味で虚しい戦いであった。

ゼロはネクサスに向かい、2本のゼロスラッガーを放熱板の様に胸部にセットする。

ネクサスも右腕をゼロに向け、光輝く巨大な弓と矢を同時に形成した。

ゼロの胸にセットされたスラッガーが光を放ち、ネクサスの右腕の光の弓矢が更に輝きを増す。

互いの必殺光線『ゼロツインシュート』と『オーバーアローレイ・シュトローム』の発射態勢だ。

『食らえええええっ！！』

『シェアアアアアッ！！』

叫びと共にゼロの胸部から、青白い光の激流がほとばしった。

同時にネクサスの右腕から、光の弓矢が空間を切り裂かんばかりの勢いで撃ち出される。

直視した者の網膜を焼き尽くす程の閃光を発し、ゼロ達が居た場所一帯に巨大な爆発が起こった。

ーーーーーーーーーーーー

澄み切った蒼天に複数の惑星が点在して見える無人の異世界。

ヴィータは1人、生い茂った森林地帯の上空を、紅い騎士甲冑をはためかせて飛行している所だった。小脇には『闇の書』を抱えている。

人工的なものが一切含まれていない、濃厚な大気を切り裂いて、蒐集対象を探していたヴィータに、シャマルからの思念通話が入って来た。

《ゼロ達が!?》

《うん…砂漠で交戦してるの…ネクサスにテスタロッサちゃんと、その守護獣の子と…》

一通りの状況を聞いたヴィータは眉をひそめ、自分が今やるべき事を考える。

《長引くと不味いな…助けに行くか…》

時間を掛ければ、此方が不利である。『管理局』も続々と応援を送り込んで来る筈だ。

此方はゼロを併せても４人きり…切り抜けて離脱するのが無難だろう。

ヴィータはそう判断し、ゼロ達の元に向かおうときびすを返そうとした時、

「あっ！」

ヴィータはハッとして急制動を掛け空中で停止した。

《ヴィータちゃんどうしたの？》

ヴィータの只ならぬ様子に、シャマルの心配そうな声が響く。

《クソ…こっちにも来た…例の白服…》

ヴィータの前に浮かんでいるのは、純白のバリアジャケットに身を包んだ、高町なのはであった。

「高町なまこっ、お前か！！」

ヴィータはまだ、なのはの名前をちゃんと覚えていなかった…

「うあっ！？なまこじゃないよっ！なのはだってばあっ！な・の・は！」

なのはは前の様に再び面白い顔で、両手をバタバタさせて言い間違いを指摘する。しかし諦めたのか、ため息を吐くと気を取り直し、

「ヴィータちゃん…やっぱりお話聞かせて貰う訳にはいかない…？」

なのはは自分を睨み付けるヴィータに真摯に語り掛ける。

『レイジング・ハート』もペンダント状態のままで、争う気は無いと言う態度を示していた。

「もしかしたらだけど…手伝える事とか有るかもしれないよ？」

そう言って微笑むなのはに一瞬はやてを思い出したヴィータだが…

「うるせえっ！管理局の言う事なんて信用出来るか！！」

ヴィータはその考えを振り払う様に怒鳴った。しかしなのはは臆さず両手を差し伸べ、

「私…管理局の人じゃないもの…民間協力者…」

その態度にヴィータは、なのはが本気で話し合いをしたいという心意気は確かに伝わった。

だが、だからと言って今の状況は話し合っている余裕は無い。少しでも早くゼロ達の助太刀に行き、全員で離脱しなければならないのだ。

「そのケツぶっ飛ばすのはまた今度だっ！！」

なのはの言葉を振り払い、ヴィータは真紅の魔力球を手のひらに発生させる。

「吼えろ『グラーフ・アイゼン』！！」

ヴィータはアイゼンの一撃で魔力球をバーストさせた。

「きゃあああああっ！？」

凄まじい光と耳朶を打つ轟音が辺りを覆う中、なのはは目を閉じ耳を塞いで縮こまってしまう。目眩ましの一種である。

「脱出…」

その隙にヴィータはその場を離脱する。なのはが目を開けた時、既にその紅い姿は数キロは離れ、豆粒の様に小さくなっていた。

「よしっ、此処まで離せば攻撃も来ねえ」

一旦停止したヴィータは足元に魔法陣を展開、次元転送の魔法を発動しようとする。

魔法にも射程距離があり、離れれば離れる程攻撃は届き辛くなる。

今までの経験上、この距離で攻撃を届かせる事の出来る魔導師は、まず居ない筈とヴィータは思っていた。しかし…

なのははレイジング・ハートを構え、砲撃態勢に入っていた。桜色の光のリングが砲身に形成される。

「まさか撃つのか？あんな遠くから！？」

驚くヴィータの目の前で、なのはに桜色の光が集中する。

「ディバァイイン、バスタアァァァッ！！」

なのはの叫びと共に、桜色の凄まじい光がヴィータ目掛けて発射された。

「うあっ！？」

次元転送魔法の発動中だったヴィータは動けない。棒立ちのまま、桜色の光に飲み込まれてしまった。

（やられた…）

ヴィータがそう思った時、襲って来る筈の衝撃は来なかった。

「……？」

前を見ると白い仮面を着けた男が爆煙の中、ヴィータの前に盾になって立ち塞がっている姿が目に入る。

ディバイン・バスターはこの男が防いだ様だ。

「ア…アンタは…？」

ヴィータの質問に仮面の男は答えずに、

「行け…『闇の書』を完成させるのだろう…」

男の言葉にハッとしたヴィータは直ぐに次元転送にかかる。

（コイツ…シャマルが言ってた奴だな…？何が狙いか知らねえが、今は乗っといてやる）

転移を開始するヴィータを逃がすまいと、なのはは2射目のディバイン・バスターを放とうとする。
しかし仮面の男が何かする仕草を見せたと同時に、なのはの体は『バインド』リング状の魔法拘束に身動きを封じられていた。

「バインド？あんな距離から一瞬で？」

長距離からバインドを決めるには、高度な技術を必要とする。
相手の技量に驚きながらも、なのはが力づくで拘束を引きちぎった時、ヴィータの姿も仮面の男の姿も既に消え失せていた。

ーーーーーーーーーーーー

照りつける灼熱の太陽の下、『レヴァンティン』と『バルディッシュ』の激突音が響く。
砂漠に降り立ったシグナムとフェイトは、距離を保ったまま対峙した。

両者共息が荒い。防護服も数カ所が裂け、かすり傷だが鮮血がポタポタと砂に滴り赤い染みを作る。

本来なら地力と経験で勝るシグナムが有利なのだが、連戦による魔力の消耗に加え、残り少ないカートリッジで戦わなければならな

い。

それに対しフェイトは暴発の危険性もあったが、カートリッジを湯水の様に使って対抗しているのだ。

しかしそれを差し引いても、フェイトの驚異的なねばりにシグナムは舌を巻く。

（ここに来て尚速い…目で追えない攻撃が出て来た…早めに決めないと不味いな…だが…大した気迫だ…）

自然笑みが湧くシグナムは敬意を表する様に、肩で息をするフェイトに、レヴァンティンを突き出して構える。

（…強い…クロスレンヂもミドルレンヂも圧倒されっぱなしだ…今はスピードで誤魔化してるだけ…まともに食らったら叩き潰される…でもやはりシグナムあなたは……）

フェイトも苦しい中笑みを浮かべ、バルディッシュを大きく振り被った。

（『シュツルム・ファルケン』当てられるか…？）

（『ソニックフォーム』やるしかないな…）

互いの切り札を出すべく間合いを計る2人。ぎらつく太陽の下、沈黙が場を支配する。

気が極限まで満ちた時、両者は同時に飛び出していた。その瞬間だった。

「あっ！？」

フェイトが声を洩らす。彼女の胸を背後からズブリと貫いて、腕が突き出ていた。

「なっ！？」

急制動をかけて停止したシグナムの目前に現れたのは、フェイトの体を背後から腕で串刺しにしている仮面の男であった。

「テスタロッサ…！」

シグナムの呼びかけに反応は無く、フェイトは蒼白な表情をしているが、まだ意識は有る様だ。

物理的に貫かれている訳では無く、シャマルの『旅の鏡』の様に空間をねじ曲げる魔法らしい。

「うわあああああああっ！！」

光がフェイトの体を貫き、彼女は悲鳴を上げる。

「貴様っ！！」

シグナムが怒りの表情で止めさせようとした時、仮面の男はフェイトの体を貫いていた手を開いた。

その手の中に金色に輝く光の球が有る。フェイトの『リンカーコア』だ。彼女は気を失ってしまっている。

「さあ…奪え……」

仮面の男は静かに感情を感じさせない声で促す。その時シグナムの怒りは頂点に達した。

「黙れ下衆があっ！」

レヴァンティンを振りかざし、仮面の男に斬り掛かる。男は慌てた様にフェイトから腕を抜き、後ろに跳んだ。

「愚かな……」

忌々しそうに言い放つと、その姿は瞬時に消え去ってしまった。

「ちいっ…逃げたか！」

舌打ちしたシグナムだが、フェイトの身が心配になり、背後を振り返ろうとした時だった。

（何だ？この凄まじい剣気は！？）

それは永い間戦いの日々を生きて来たシグナムに、振り返るのを躊躇させる程のものだった。

「…後はこちらがやろう…今のこ奴らがそんな事をする訳が無いからな…」

ひどく押し殺した、暗い響きの声が背後からする。シグナムはその声に覚えがあった。

「貴様っ！？」

振り向いたシグナムの目に映ったのは、八重桜色の髪をポニーテールにし、白い騎士甲冑を身に纏った、シグナムと瓜二つの女剣士であった。

ーーーーーーーーーーーー

熱砂に轟音が響いていた。爆発で窪地となった大地を揺るがして、ゼロとネクサスの戦いは続いている。

双方共に胸のランプが赤く点滅を始めていた。エネルギーの消耗が激しい、限界は近い。戦いは消耗戦の様相を見せていた。

『オラアアアッ！！』

ゼロの正拳突きがネクサスの顔面に炸裂する。ぐらつくネクサスだが、砂塵を上げて持ちこたえる。

そこを狙って追撃を掛けようと踏み込むゼロの顔面に、反撃の痛烈なフックを叩き込んだ。

（野郎っ！）

首を持って行かれそうな衝撃に耐えたゼロは、大量の砂を砂嵐の様に巻き上げ、鉞（まさかり）の如き回し蹴りを繰り出す。

ネクサスも青い巨体を独楽の如くスピンさせ、強烈な回し蹴りを放つ。

赤と青の巨木の様な足が激突し、ゼロとネクサスは衝撃に耐え切れず後退った。

互いの胸のランプの点滅が早くなって行く。ゼロは自分と同じく満身創痍のネクサスを睨み、再び左手を前に突き出した。

ネクサスも半身で拳を構える。どちらも退く気は無い。

『俺は此処で倒れる訳には行かねえんだあああああっ！！』

ゼロは獣の如く叫んだ。長く生きられなくていいと呟いていた少女を想い……

『はいはい立派立派っ』

その時天空から、そんなゼロを嘲笑うかの様な声が降って来た。

『なっ！？』

反射的に空を見上げたゼロの視界を黒い影が覆う。影はゼロと相対するネクサスに、影の悪魔の如く襲い掛かった。

『お前はっ！？』

驚くネクサスに向かい、影から2つの物体が飛び出した。その物件は鋭利な刃となって、青い巨体を切り裂く。

『ウオオオッ！？』

不意を突かれたネクサスの巨体は、数十メートルは吹き飛び、砂塵を上げて大地に倒れ込んだ。

そして砂漠に地響きを上げ降り立つ黒い巨人。その頭部にネクサスを襲った2つの物体が装着された。それはゼロスラッガー！

『貴様はっ！！』

その姿を見たゼロは驚きの声を上げる。　漆黒と橙のボディー、紅く光る単眼『ダークロプス・ゼロ』であった。

『貴様！まだ生きていやがったのか！？』

確かに倒した筈の強敵の出現。驚きを隠せないゼロの耳に、またしても嘲りを含んだ声が響く。

『まったくよ…派手にぶっ壊してくれたから、修理するのにドクターが苦労してたぜ…』

『！？』

声と共にもう一体の黒い巨人が、ゆっくりとゼロの前に降り立った。やれやれと言った風に肩をすくめる。

そいつは一見ダークロプスとまったく同じ姿をしていた。唯一の違いは単眼では無く、ゴーグル状の顔面部分の奥から、ゼロの様に２つの鋭い目が覗いている事である。

（何だ…コイツは……？）

ダークロプスとほぼ同じ姿をしているにも関わらず、ゼロはそいつに対し強い嫌悪感と不吉なものを感じた。

『貴様…ダークロプスなのか…！？』

ゼロが言い掛けた時、ネクサスが身を起こす。チラリと其方を見た２つ目のダークロプスは、

『ＩＩ（ツヴァイ）ソイツと遊んでやれ…』

２つ目の命令に即座に反応したダークロプスは起き上がろうとしているネクサスの首をむんずと掴んだ。

『グオッ…』

呻き声を上げるネクサスは、ダークロプスの腕を掴み反撃しようとするが、黒い巨人は揉み合った体勢のまま一気に空に舞い上がった。

『ウオオオオッ！？』

ダークロプスはネクサスを押さえ付け、高速でこの場を離れる。

ネクサスと１対１で戦うつもりなのか、その姿が地平線に消えて行く。

それを確認した２つ目のダークロプスは、油断無く身構えるゼロにふざけた態度で片手を上げ、

『さて…邪魔者が居なくなった所で、初めましての挨拶だウルトラマンゼロ…』

『誰だ貴様は！？』

人を食った態度に不快感を覚えゼロは怒鳴る。

『そうだな…『グリーンモンス』や『シーゴラス』の飼い主と言ったら分かり易いか…？』

『貴様が！？』

心底楽しそうに肩を揺らすそいつの言葉を聞き、ゼロの頭にカーッと血が昇った。

遊び半分で大量の人間を殺そうとしたやり口を思い出す。

『ウオオオオオオオッ！！』

ゼロは怒りの感情のままに、黒い巨人に殴り掛かった。

ーーーーーーーーーーー

「誰だお前は！何故そんな姿をしている！？貴様だな我々の紛いものは！！」

シグナムはフェイトのリンカーコアを再び抉り出している、自分そっくりな女を睨み付けた。

フェイトを盾にされている状況なので、迂闊に手が出せない。女は冷めた目でシグナムを見つめ、

「…紛いものとは無礼だな……」

女は笑みを浮かべる。それは形だけ笑みの形に口を歪めた、そんな印象を抱かせる歪なものであった。

「どう言う意味だ紛いものが！テスタロッサを離せ！」

シグナムの怒声に女は暗い瞳を向け、

「これが私の本当の姿だ…紛いもの呼ばわりされる筋合いは無い……」

「何だと？貴様ふざけているのか！？」

「…言葉通りの意味だ…他に意味など無い……」

話が噛み合わない。だがそれ以前にシグナムは女の目が気になった。

（何という暗い目をしているんだこ奴は……）

シグナムは女の瞳に底冷えする程の闇を感じ、思わず身震いする。
こんな事は初めてであった。超獣やビースト相手にも一歩も退かなかった女剣士がである。

「代わりに私が奪ってやろう……」

女が声を発すると共に、かざした手の上にシグナムが見慣れたものが現れた。

「馬鹿な！それは！？」

女の手の上に現れたもの…それは、表紙に剣十字の飾りが付いた『闇の書』だった。

「何故貴様が持っている！？」

驚愕するシグナムを後目に、シグナムそっくりの女はその本に目をやり、

「…これは『闇の書』では無い…『夜天の魔導書』だ…最もこの世界の『闇の書』と同一のものだがな…」

女は謎の言葉を吐くと、夜天の書と呼ぶ本を開いた。

「止めろっ！」

シグナムが止めようとした時には既に遅く、フェイトの『リンカーコア』が魔導書に吸収されて行く。

意識を失っているフェイトの体が無意識にビクッビクッと痙攣する。

『リンカーコア』が半分以下まで小さくなった時、女は『蒐集』の手を止めた。

そして女はフェイトの体を、壊れた人形の様に地面に投げ捨て、

「転送……」

女が呟くと同時に『夜天の魔導書』は紫の魔法光を放ち、虚空に消え失せた。

「何をした…？」

「今『闇の書』にテスタロッサの魔力を転送してやった…感謝するのだな…綺麗事では埋まらない頁を埋めてやったのだから……」

「貴様ぁぁぁっ！！」

クールなシグナムが激高して飛び出していた。全てを否定された気がして血液が沸騰しそうな程怒りを感じる。

八神はやての騎士として、綺麗事を貫くと決めた誓いも、ゼロの想いも全て…

「紫雷…一閃っ！！」

レヴァンティンが業火の剣と化し、シグナムは女目掛けて必殺の斬撃を唐竹割りに振り下ろす。

超獣やビーストをも葬り去って来た一撃だ。

「何ぃっ！？」

シグナムは驚きの声を上げた。何と女は、指2本のみで炎の斬撃を受け止めたのだ。刃先は女の指に挟まれ、びくともしない。

「ば…馬鹿な…」

「微温いな…今のお前はその程度か……？」

茫然とするシグナムを侮蔑する様に見た女は、電光の速さで拳を繰り出した。レヴァンティンの腹に強烈な一撃が打ち込まれる。

鋭い破壊音が響き、レヴァンティンの刀身が拳の一撃で、真っ二つにへし折られていた。

ーーーーーーーーーーーー

ダークロプスの顔面に、ゼロの鋼鉄をも貫く正拳突きが叩き込まれた。確かな手応え。

しかしゼロは瞬時に悟っていた。

（コイツわざと受けやがった!?）

微動だにしないダークロプスは、ゼロの拳を顔面に食らったまま、

『まあ…今のお前はこの程度だろうな…』

まるで蚊にでも刺されたかの様に、涼しげな台詞を吐いた。

それと同時にゼロの打ち込んだ拳から、ダークロプスの全身に亀裂が入って行く。

（やはりコイツ、ダークロプスじゃねえ!?）

どうやら何者かが、ダークロプスのアーマーを着込んでいたらしい。

背筋が凍る程の危険を本能的に察知したゼロは、思わずその場を飛び退いていた。

ダークロプスの亀裂が広がり、黒い外装が鈍い音を立て砂漠に剥がれ落ちる。

その下から現れたのは、ゼロとまったく同じ銀色の顔、頭部の二対のスラッガー、胸肩部の太陽エネルギー吸収アーマー。

だが全身が燃え盛る炎の様に赤い。その真紅のボディーに『ウルトラセブン』に似た銀のラインが走っている。

その姿は真紅のウルトラマンゼロと言うに相応しいものだった。

『誰だ貴様はあっ！？』

尋常ならざる鬼気を感じゼロは叫んでいた。真紅の巨人は解放された様に首を軽く捻り、

『『ウルトラセブンアックス』とでも呼んで貰おうか…？』

そう名乗る巨人の口元が、歪にニヤリと笑った様にゼロには見えた。

『ウルトラセブンアックス』宿敵とゼロとの初対面であった。

つづく

第５０話　鏡像－ミラーイメージ－（後書き）

『ウルトラセブンアックス』はゼロのＮＧデザインです。

ウルトラ銀河伝説のＤＶＤに設定が載ってますが、姿と能力以外はオリキャラになります。彼には色々と有りますんで。

ある矛盾と絡めた存在です。

『ウルトラノック戦法』は、セブンが対ガッツ星人戦で使用した技です。

空中に固定したアイスラッガーに光線を叩き付けて破壊力を増す攻撃法で、ガッツ星人の円盤に止めを刺しました。

ゼロの『ウルトラキック戦法』はＤＶＤで使用していた技です。メカゴモラに対し使用しました。非常にゼロらしい技です。

それでは次回お会いしましょう。

第５１話　宿敵ーアックスー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

これでA-　s編も原作8話にあたる所まで来ました。（遅っ！）後半戦気合い入れてきます。

それでは第５１話をどうぞ。

第５１話　宿敵ーアックスー

「『レヴァンティン』！？」

砕かれたレヴァンティンを驚愕の目で見つめるシグナム。

彼女そっくりな女は何の事は無いと言った風に、追撃も掛けず不敵に立ったままだ。

「くっ…レヴァンティン！」

《ｅｓ　ｒｅｐａｒｉｅｒｅｎ！》（再生）

シグナムはレヴァンティンを即座に再生させ、静眼の構えで女に対峙する。容易ならざる相手だ。

必殺の斬撃をいとも容易く受け止めるなど並の腕ではない。だがそれ以前に女の技が気になった。

今の拳による攻撃はシグナムの体術の一つだ。それも自分より遥かに洗練されていると感じた。『夜天の魔導書』といい、あまりに不可解である。

「貴様は何だ？何が目的だ？お前が言う『夜天の書』が『闇の書』と同じものとするなら『闇の書』が狙いではないという事になる！」

当然の疑問をシグナムは口にした。

出自は不明だが、以前の魔力転送の事も踏まえると『夜天の魔導書』が少なくとも『闇の書』と同系統の魔導書と言うのは嘘ではなさそうである。

しかし同じものを持っているなら、わざわざ『闇の書』を狙う理由が分からない。

（…しかし…『夜天の魔導書』だと……？）

シグナムはその名を何処かで聞いた様な気がした。自分の心の内に妙な違和感を感じてしまう。当惑するシグナムに女は、

「…我らには『闇の書』などどうでも良い…主の気まぐれだ…」

女は淡々とした調子でそう言うが、抑揚に乏しい表情に一瞬感情の揺れが垣間見えた。本当にごく僅かなものだったが…

「主だと…？貴様も守護プログラムだと言うのか！？」

「…私は強いて言うなら…もう1人のお前だ……」

「なっ！？」

女の言葉はシグナムには意味不明だった。戸惑うシグナムに女は、

「…今日はあくまで顔見せだ…もっと腕を磨いておく事だな…今のお前では主を護りきる事は出来ん……」

「……」

シグナムは無言だった。無表情な女の言葉に、ひどく暗い感情が込められている様に思えたからである。

「…せいぜい精進するがいい……」

そう言い残すと、女の姿が不意にぼやけた。

「待て！」

シグナムが気付いた時には既に遅く、女の姿は砂漠の蜃気楼だったかの様に、こつ然と消え去ってしまった。

（…もう1人の私だと……？）

シグナムは砂漠に立ち尽くした。女の言葉が頭にこびり付きなかなか離れようとはしなかった。

ーーーーーーーーーー

ゼロの前に現れた『ウルトラセブンアックス』と名乗る真紅の巨人は、傲然と砂漠にそびえ立っている。

灼熱の太陽に熱せられた砂漠の陽炎が、真紅の体を炎の如く揺らめかせた。

『ウルトラセブンアックスだと…？何で親父の名が入っている！貴様ウルトラ族なのか！？』

怒鳴るゼロに、アックスは小馬鹿にした様に腰に手を当て、

『フフフ…、そんなチンケなもんじゃねえぜ？言ってみりゃあ、俺はお前の併せ鏡さ…ウルトラマンゼロの業（ごう）そのものだ！』

『訳分かんねえ事ほざくはあっ！』

ゼロは闇雲にアックスに殴り掛かっていた。恐怖に近い感情に背中を押されてしまったのだ。

巨大な拳が空を切る。赤い巨人は鼻歌交じりとでもいう風に、軽々と攻撃を避ける。

（コイツ！？）

ゼロは触れる事すら出来ない。一見ふざけている様に見えるが、まるで動きに無駄が無いのだ。

遊ばれている。そう悟った時ゼロは、感じていた恐怖心も嫌悪感も、コケにされた怒りの激情で強引に押し流した。

今まで数々の強敵と戦って来たゼロにとって、ここまで軽んじられるなど我慢出来ない。

それは若さ故の蛮勇に近いものだ。得体の知れない敵に対して、自分が恐怖を感じたのを認めたくなかった事も有る。

『舐めんじゃねえっ！！』

跳び退いたゼロはスラッガーを素早く胸部にセットした。至近距離からの『ゼロツインシュート』！

エネルギー残量の事などまるで考えない攻撃だ。

だがエネルギーの事を気にして勝てる様な相手では無い事を、本能的に察していたのかもしれない。

『くたばれえええええっ！！』

青白い光の激流がアックスに放たれた。
その威力に体が後ろに持って行かれそうになるのを、砂漠を踏み締めて堪える。

赤い巨人は光の激流を避けようともせず、楽しそうに肩を揺らし、

『…その体でがんばるじゃねえか…それじゃあサービスだ…少しだけ相手をしてやる…『バーンダッシュ』…』

その瞬間アックスの胸部プロテクターが眩い光を発し、その体が炎の如く燃え上がった。

炎の化身と化したアックスから、凄まじいばかりのエネルギー波がほとばしる。桁違いのパワーであった。

ツインシュートはアックスを覆うエネルギー波にあっさり打ち消され、炎の様な光は更に拡大しゼロをも呑み込んだ。

『グワアアアアアアッ!?』

ゼロは強烈な光の嵐の前に、なすすべなく弄ばれる。全身がバラバラに砕け散りそうな程の衝撃だ。

炎の如き光はそれだけでは収まらず、天空を貫く程の火柱を上げ、アックスを中心に直径数キロの範囲で、砂漠に巨大なクレーターを

穿った。

焼け焦げた砂漠に、全身から白煙を上げて、ゼロが仰向けに倒れている。

『おいおい…生きてるか？これでも手加減してやったんだぜ…』

クレーターの上空に、腕組みしながら浮いているアックスがゼロに声を掛ける。

『クソッタレが……』

ゼロは頭を振り立ち上がろうとするが、力が入らない。『カラータイマー』の点滅も限界を告げていた。

そんなゼロを見下ろして、アックスは愉しげな調子で、

『まあ…今日はあくまで顔見せだ…ここらで止めといてやるぜ…』

『貴様…ふざけんな…！』

ゼロは嘲笑う様に此方を見下ろす、赤い巨人に手を伸ばそうとするが、最早エネルギーは残っていない。

『そんだけエネルギーを消耗していながら、さっきの攻撃はまあま

あだったぜ…もっと強くなって俺を楽しませろよ…』

そう言い残すとアックスは上昇を始めた。

『待て…！』

立ち上がろうと、もがくゼロの前から赤い巨人の姿が消えて行く。
消え去る前にアックスはゼロを見下ろし、

『さて…お前達はこれからどうなって行く……？』

そう呟くと、その巨体は太陽の光に溶け込み、完全に姿を消した。

「何だ…？アレ…」

ヴィータが砂漠世界に到着した時、砂漠地帯が広範囲に渡って焼け焦げ、クレーターが出来ている場所を見付けた。

不審に思って近寄ってみると、その範囲から少し離れた場所に、巨人が倒れた様な跡が有る。

「ゼロっ！？」

その跡の中央で、人間の姿のゼロが倒れているのを見付けた。直ぐに降り立ったヴィータは、ゼロを助け起こそうと近寄り、

「ゼロ大丈夫か…？」

と声を掛けた所でハッとした。ゼロは目を見開いて、空の一点を睨んでいたからである。

「アックス…覚えてやがれ…！」

ゼロはそう呟き、アックスが消えた空を見上げ、再戦を誓う。ヴィータはその気迫に、思わず息を呑んだ。

ーーー

ドッグに係留中の『アースラ』ミーティングルームに、リンディ、クロノ、なのは、孤門、アルフにリーゼ姉妹他、主要クルーが一同に会していた。
リンディは席に着いている全員を見回し、

「フェイトさんは『リンカーコア』に酷いダメージを受けているけど、命に別状は無いそうです」

それを聞いてなのは達はホッとした表情をする。

砂漠世界での戦闘中魔力を『蒐集』されてしまったフェイト。
アースラが既に稼働状態であったので、彼女は速やかに本局に搬送され、適切な治療を早く受ける事が出来たのだ。

今フェイトは意識こそまだ回復してはいないが、大きな怪我も無くベッドで昏々と眠っている。
今リンディ達が問題にしているのは、フェイトとなのはが出動した後に起こった不可解な出来事に関してであった。

エイミィはフェイト達を送り出した後、駐屯所で戦闘の様子をモニターしていた。

その最中突如として、管制システムが何者かによってクラッキングを受け、全てのシステムがダウンしてしまうという事件があったのである。

その為現場で何が起こったのか把握出来ず、唯一残されたものは、仮面の男の姿を一瞬捉えた画像のみであった。

責任を感じたエイミィは、沈んだ表情でうなだれてしまっている。しかしおかしな事態であった。

駐屯所で使用している機械類は全て、管理局で使われているものと同じ高性能なものである。

それを外部からの操作で、システムをダウンさせるというのは、有り得ない事なのだ。

凄腕のハッカー説から、組織だっての犯行説など様々な意見が出されたが、どれも決め手に欠ける。

只でさえ『ザギ』達闇の巨人の暗躍がある中、謎のシステムダウンによって事態は混迷していた。

そんな中クロノは、隣の席で考え事をしている様子のアルフに、

「君の方から聞いた話も、孤門が戦ったという言う４体目の闇の巨人の事も…状況や関係が良く判らないな…」

「ああ……」

アルフはフェイトの元に駆け付けた時の事を思い出す。

「アタシが駆け付けた時にはもう…仮面の男は居なかった…けどアイツが…シグナムがフェイトを抱き抱えてて…」

そこでアルフは一旦言葉を切り全員を見回し、

「『言い訳は出来ないが…守れなくて済まないと伝えておいてくれ…』って……」

彼女はシグナムの悔しそうな表情と、守護獣、ザフィーラの真っ直ぐな瞳を思い出しながら事実を述べる。

孤門を除く全員が眉をひそめた。その言葉は敵対する者に対してあまりに相応しくない。

孤門は無言で何も無い空間をジッと見つめている。ゼロの言った言葉が気になっているのだろうか？

クロノは今までの状況を頭の中で整理してみる。どうも腑に落ちない。

孤門にいきなり襲い掛かって来た４体目のゼロに似た黒い巨人は、ネクサスを遠くまで引っ張り出した挙げ句、何処かへ姿を消してしまったそうだ。

仮面の男と言い不可解な出来事ばかりである。
自分達が何か重大な事を見逃している気がしてならない。しかしそれが何なのかが解らなかった。

ミーティングはさして進展を見せぬまま、各自の胸に疑問だけを残し終了した。

『アルカンシェル』の実装を終えたアースラに司令部を戻し、クルー達は本格的に事態にあたる事になる。

なのはフェイトの事が心配だったが、リンディに諭され自宅に一旦戻る事になった。

ーーーーーーーーーーーー

早朝の八神家、ヴィータと合流し、砂漠世界から脱出したゼロ達は自宅にたどり着いていた。
はやてもそろそろ起きて来る頃合いである。

そんな中シグナム達はリビングに集まり、昨晩の事について話し

合っていた。

ゼロは軽度の火傷を負っていたので、シャマルの治癒魔法を受けながら話を聞いている。

「『夜天の魔導書』……」

事の顛末を聞いたシャマルは訳が分からず、困った様子で首を捻るしか無い。

「有り得ねえよ『闇の書』と同じものが有るなんて！」

ヴィータが怒った様に声を荒げた。彼女達を作った『古代ベルカ』は既に滅びている。

今の管理世界の技術で、同じものを作るのは不可能だ。

万が一同系統の魔導書が遺跡として残っていたとしても、魔力転送などという真似が出来るものだろうか？

他と繋がっている訳では無い。『闇の書』はそれ一個で完結したシステムなのだから。

シグナムは砂漠での出来事を思い返し、

「…何にせよ…我らを陥れたのは奴らだろう…口振りからして『闇

の書』を狙っている訳では無さそうだが……」

「では…そいつらは今の所は直接行動には出ないという事か…？」

ザフィーラの質問にシグナムは厳しい表情で頷き、

「…恐らく顔見せのつもりだったのだろう…あの女並大抵の腕では無い…！」

ギリッと屈辱で奥歯を噛み締める。自分と瓜二つの女の「その程度では主を守り抜く事は出来ない」という言葉が蘇った。

そんなシグナムを見て、治療を終え行儀悪く足を投げ出していたゼロは、赤い巨人の事を思い出す。

（『ウルトラセブンアックス』…舐めやがって…！）

気味が悪い存在だった。こちらがエネルギーを消耗していたのを差し引いても、底知れぬ力を感じた。

それも全く本気を出していないとゼロは思う。今の所はあれ以上ちょっかいを掛けて来るつもりは無い様だが…

「ゼロ…その『アックス』という奴に関して覚えは無いのか…？『

夜天の魔導書』だけならまだしも、お前と似たウルトラマンが居るとなると…」

「…いや…全く覚えはねえ…『光の国』にあんな奴は居ない…居たら直ぐ判る筈だ、あんなに俺に似てるんだからな…」

シグナムの問いにゼロはそう返すしか無い。まるで覚えが無かった。

ネクサスと同じく、他の世界から来たウルトラマンなのかと、見当を付けてはいるが…

共に戦ったダイナの存在や、メビウスが平行世界に飛ばされた際の話を聞く限り、他の世界にもウルトラマンが居る事は確認されている。

ネクサスに関しても、その様なウルトラマンの1人なのだろうとは思っているが『アックス』の様に悪意の塊の存在は初めてだ。

ネクサスはゼロに戦いこそ挑んで来るが、明らか他に被害が出ない様に気を配っているのに対し、アックスは全く頓着していない。

アックスやシグナムそっくりの女は、平行世界から来た自分達なのだろうか?とゼロは思ったが確証は無い。

シグナムの話を聞く限り、アックスは仮面の男に協力している様にも思えるのだが、詳細は解らない。

立て続けに起こった予想外の出来事に押し黙ってしまう面々の中、シグナムは思量深く腕を組み、

「…確かに不可解な出来事ばかりだが……まずは『闇の書』を完成させねばならない…」

「…狙われるとすると、完成した直後辺りという所か……」

狼形態のザフィーラは、床に伏せたまま敵の出方の予想を口にする。

魔法関連の仮面の男はともかく『ザギ』は何か手を打っている可能性も無視は出来ない。

どんな力を持っているか解らないからだ。

「家の周りには厳重なセキュリティーを張ってるし、いざという時は直ぐ転送魔法で避難させる手筈だから、はやてちゃんに危害が及ぶ事は無いと思うけど…」

シャマルはもたげる不安を紛らわそうと、緊急対応の手筈を改めて口にする。

万が一、闇の巨人達の襲撃に遭った場合の対応も考慮してあるの

だ。今は必ずシャマルがはやての傍に居る様にしている。

（結局…まずは『闇の書』の完成が先か…後はそれから考えるしかねえな…）

ゼロが改めてそう思った時、黙って話を聞いていたヴィータが、浮かない顔で口を開いた。

「…ねえ…『闇の書』を完成させてさ…はやてが本当のマスターになってさ…それではやては幸せになれるんだよね…？」

「何だいきなり…？」

「『闇の書』の主は大いなる力を得る…守護者である私達はそれを誰より知っている筈でしょう？」

シグナムとシャマルは、ヴィータの意外な言葉を訝しむ。

「そうなんだけど…そうなんだけどさ……」

ヴィータは口にすべきか迷っていた様だが意を決して、

「…アタシは何か…何か大事な事を忘れてる気がするんだ……」

上手く説明出来ないもどかしさと、正体の知れない不安感に彼女は戸惑う。何故自分がこう感じるのかも分からない。

そんなヴィータの様子が、やけにゼロの胸に引っ掛かった。

「詳しく話してみろ…」

ゼロは俯いてしまったヴィータに先を促した。

「…ん…うん……」

はやてはベッドの中で目を覚ました。目覚まし時計を見ると、丁度鳴る数分前である。

体内時計が少し早めに活動を始めた様だ。

ふと隣に目をやると、一緒に寝ていたヴィータの姿は無く、のろいウサギが彼女の代わりとばかりに、こちらと向かい合って置かれ

ている。

寝ぼすけのヴィータにしては珍しいと思った。はやては眠い目を小動物の様にこしょこしょ擦り、ゆっくりと身を起こす。

リモコンで部屋のカーテンを開けると、眩しい朝日が彼女の目に入って来た。今日も爽やかな朝である。

（さて…早く朝ご飯の支度をせんと…みんなお腹空かせてまうな…）

はやては上半身と腕の力のみで、自分の体をベッド脇の車椅子の所まで持って行く。

乗り込もうとベッドから身を乗り出した時だった。

「あっ……？」

はやては違和感を感じた。意識の何処かで何かが弾け飛ぶ感覚。ドクンッと心臓の音がやけに大きく体中に木霊す。

「あ…ぐ……？」

次の瞬間はやての胸に千切れそうな程の激痛が走った。乗り掛けていた車椅子が、ガシャンと大きな音を立てて倒れてしまう。

バランスを崩したはやての体は床に崩れ落ちた。

「!?」

ゼロに言われ、ヴィータが口を開いた時、二階から大きな音がした。はやての部屋からだ。

ただ事では無いと駆けつけたゼロ達が目にしたのは、胸を押さえて床に倒れているはやての姿だった。

「「はやてっ!?」」

「はやてちゃん!」

ゼロ達の呼び掛けにも、はやては苦しんで返事も出来ないらしい。脂汗で額が濡れている。一目で不味い状態だと分かった。

「はやて?はやて!?」

今にも泣き出しそうな表情で、ヴィータははやてを揺すり呼び掛ける。だがはやての苦しみは収まりそうに無い。

「病院!救急車!!」

「ああ!」

「動かすな!」

ヴィータの悲痛な叫びにシグナムが電話を掛けに走る。

「はやてしっかりしろ！」

「はやてちゃんしっかり！」

ゼロとシャマルは救急車が来るまでと、それぞれ『メディカルパワー』と治癒魔法をはやてに当てる。

しかし症状は収まらない。

（はやて…！）

ゼロは祈る様な気持ちで、はやてにメディカルパワーを当て続けた。懸命に…

ーーーーーーーーーーーー

「…ん……？」

明るい光の中フェイトはアースラの医務室で目を覚ました。

ゆっくりと目を開けると、見慣れた緑色の髪の女性が、優しくこちらを覗き込んでいるのが見える。

「フェイトさん…目が覚めた…？」

「…リンディ提督……？」

まだボーっとしていたフェイトはとりあえず体を起こしてみる。

力が上手く入らず、リンディに支えて貰い、ようやくベッドで上体を起こす事が出来た。

ふと目線を足元にやると、少女の姿のアルフがベッドに突っ伏して眠っている。ずっと着いていた様だ。

まだ状況が解らないフェイトにリンディが説明してくれた。

砂漠での戦闘中、自分は背後から襲われ魔力を奪われてしまい、『本局』に運び込まれた事などを聞かせて貰う。

そこでようやくフェイトは砂漠での事を思い出した。最後に薄れる意識の中で聞いた、シグナムの最後の声が蘇る。

疑惑が確信に変わった。考え込むフェイトを見て、心配そうにしていたリンディに、

「提督…気になる事が有るんです…」

「何フェイトさん…？」

いきなりのフェイトの真剣な眼差しに、リンディも居住まいを正

す。

「…私…ゼロさんも、シグナム達も…何も悪い事はしてない気がするんです…」

フェイトの言葉を聞いて、リンディは意外そうに目を見開いた。

「どうしてフェイトさんは、そう思ったのかしら…？」

「私は今まで何度かシグナムと戦いました…最初はゼロさんを利用している悪い人だとばかり思ってました…」

リンディの問いにフェイトは、今まで感じていた事を話し始める。

「…でも…何度も戦って思ったんです…悪い人の筈なのに、何であの人の剣は、あんなに真っ直ぐなんだろうって……私には、とてもゼロさんを脅してる様な人達に思えないんです…」

「……」

「そして…私がやられた時、シグナムは私を助けようとしていたと思います…！」

ハッキリと覚えている訳では無いが、フェイトはそう確信していた。

リンディは真剣な表情で彼女の話を考えてみる。直接ぶつかり合った者にしか分からない生の感想だ。

「どう思いますか…？リンディ提督…」

「そうね……」

状況を最初から整理してみたリンディの頭に、一つの考えが浮かんで来た。

ウルトラマンゼロの不可解な変節。守護騎士達のまるで真逆の行動…

「私の考えが当たっているとすると…私達は全員誰かの手のひらで、踊らされていた事になるかもしれないわ…」

リンディの言葉にフェイトはゴクリと息を呑んだ。

今まで腑に落ちなかった事が、リンディの中でようやく繋がった気がした。

（ウルトラマンゼロや、守護騎士の子達の偽物が存在している可能性がある……？）

リンディは対策を一から練り直す必要があると感じるのだった。

つづく

第５１話　宿敵ーアックスー（後書き）

アックスの『バーンダッシュ』本当の使い方は、あのままエネルギーを纏って敵に突撃する技です。
ウルトラダイナマイトに近いかもしれません。
要するに技の発動だけでやられてしまった訳であります。

ゼロの活動時間ですが、映画を見るに『『ウルティメイト・ブレスレット』の力でエネルギー切れが無くなったぽいのですが、それだと弱点が無くてつまらないのです。

それでこの話では、ＤＶＤのダークロプス戦を参考に、普通のウルトラマンよりは長く活動出来るが、やっぱり制限時間有りとしていますので。

太陽エネルギー補充に関しては、なのは世界がラン達が居た世界よりゼロの居た世界に近く、太陽エネルギーの補充も充分可能としています。

それでは次回お会いしましょう。

第５２話　壊れ行く未来ーフューチャーブレイクー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。

いきなり暑くなりましたが、お体にはお気をつけ下さい。

それでは第５２話をどうぞ。

第５２話　壊れ行く未来ーフューチャーブレイクー

「うん大丈夫みたいね、良かったわ…」

石田先生は病室のベッドから身を起こしたはやてに、ホットした様子で話し掛けた。

「はい、ありがとうございます」

はやては屈託の無い笑顔でお礼を言う。海鳴大学病院に担ぎ込まれた彼女は処置を受け、今は落ち着いた様子である。

今は処置室から個室に移された所だ。ゼロ達は心配そうに、ベッドの脇ではやてを見守っていた。

基本狼の姿のザフィーラは、周囲の見張りも兼ね病院の外で待機している。

「はあ…ホッとしました…」

心底安堵した表情をするシャマルに、はやては少し不満そうな様子で、

「せやから、ちょう目眩がして、胸と手ぇがつっただけやって言うたやん、もう…みんなして大事にするんやから…」

心外だと言わんばかりに石田先生へ力説する。しかしそうは言われても、まだ心配なシャマルとシグナムは、

「でも…頭を打ってましたし…」

「何か有っては大変ですから…」

ゼロは複雑そうな様子で、はやての顔を見てため息を吐き、

「いや…普通に焦るだろアレは……寿命が百年縮んだぜ…」

「大袈裟やなあ…」

はやては周りの反応に困った様に頭をかいた。

「はやて…良かった」

安堵した声を出すヴィータ。傍を離れようとしない小さな騎士の頭を、幼い主は優しく撫でてやる。

そんなはやての様子を苦笑して見ながら石田先生は、

「まあ、来て貰ったついでに…ちょっと検査とかしたいから、少しゆっくりして行ってね？」

「はい…」

予想はしていたはやてだが、少々元気無く返事をする。石田先生はシグナム達の方を見て、

「さて…シグナムさん、シャマルさん、ゼロ君ちょっと…」

「はい…？」

シグナムは不穏なものを感じながらも返事をした。

ゼロ達3人は先生に着いて廊下に出た。子供の泣き声や、通院患者が行き交う中、石田先生はゼロ達3人に、

「今回の検査では何の反応も出てないですが…つっただけ…という

事は無いと思います…」

「はい…かなりの痛がりようでしたから…」

シグナムが腕組みの姿勢で、はやてが倒れた時の様子を話す。

ゼロははやての苦しむ様子を思い出し、身が竦む気がした。先生はゼロ達を改めて見回すと、

「麻痺が広がり始めているのかもしれません…今までこういう兆候は無かったんですよね…？」

「そう思うんですが…はやてちゃん痛いのとか、辛いのとか、隠しちゃいますから…」

シャマルは俯いて答える。はやては性格上、少し調子が悪くても黙っていた可能性もあった。

自分達がそれで気付かなかっただけなのかもしれない。

先生は自分を責める様子のゼロ達を、痛ましそうに見ながら、

「発作がまた起きないとも限りません…用心の為にも入院して貰った方がいいですね…大丈夫でしょうか？」

「はい…お願いします…」

ゼロは深々と石田先生に頭を下げた。

はやてが倒れてから、かなりの時間が経過していた。気が付くと日が傾く時間帯になっている。

「入院…？」

柔らかな夕日が白い病室内を橙色に染める中、入院の話を聞いたはやては、不安そうに声を出した。

「ええ…そうなんです…あっ、でも検査とか念の為とかですから、心配無いですよ、ねっ？シグナム、ゼロ君」

シャマルは至って何でも無い事を説明する。

少し心許なかったのか、丁度花瓶に花を生けて来たシグナムと、飲み物を買って来たゼロに同意を求めた。

「はい…」

「用心に越した事はねえだろ…？」

シグナムもゼロも内心はともかく微笑んで応えた。

「じゃあ…私が居らん間のご飯は……」

はやては病室内の女性陣を一通り見回してみる。
シャマルはやる気だけは有りそうな表情で、シグナム、ヴィータは何とも言えない表情だ。はやてはゼロの方を向き、

「ゼロ兄頼むな…？」

「おう、任せとけ」

ゼロは頼もしげに返事をした。結局ゼロ以外に、まともに料理が出来る者は1人も居ない。

まあ…これで、自分が居ない間の家の食事は大丈夫だろうと、胸を撫で下ろしたはやてにヴィータは、

「毎日会いに来るよ…ちゃんとお手伝いもするから…大丈夫…」

身を乗り出して、心配させないように約束した。はやてはそんなヴィータの頭を、再び愛おしそうに撫で、

「ヴィータはええ子やな…せやけど、毎日やのうてもええよ？やる事無いし、ヴィータ退屈や」

ヴィータは、う…うん…と力無く返事をしながらも、今はその言葉に甘えるしか無いのが哀しい。
その間に一刻も早く『蒐集』を完了しなければならないからだ。
本当ならずっと傍に居たいというのに…

「ほんなら私は、３食昼寝付きの休暇を、のんびり過ごすわ」

おどけるはやてに一旦別れを告げ、シグナム達は、彼女の着替えと本を取りに、自宅に戻る事にする。
ゼロは病室に残ってみんなを待つ事にした。
シグナム達を見送ろうとしていたはやてはふと、

「アカン、すずかちゃんがメールくれたりするかも…」

彼女の携帯は家に置いたままだ。どちらにせよ病院では携帯の使用が出来ない。

すずかとは頻繁にメールのやり取りをしている。返信が無ければ心配を掛けてしまうと思い当たったのだ。

「ああ、私が連絡しておきますよ」

シャマルは、心配そうに身を起こしたはやてに、安心させる様に微笑みかけた。

改めて入院に必要な物の確認をとったシグナム達は、挨拶をして家へと戻って行った。

病室のドアが静かに閉じられた後、ゼロはベッドのはやてに向き直り、ひどく優しく微笑んだ。

「はやて…もう我慢しなくてもいいんだぞ…」

「なっ…何言っとるんゼロ兄…？」

ゼロは、焦った様子のはやての肩を優しく掴み、そっとベッドに

横たわらせる。

「まだ痛みが残ってるだろ…？じっとしてろ…」

「…気付いてたん……？」

はやての先程までの笑みが途端に崩れた。まだ残る痛みを堪えて、今まで受け答えをしていた様だ。

「当たり前だ…1年以上はやてを見て来たんだぞ…それ位判る…」

「…ゼロ兄にはかなわなんな…」

我慢を見抜かれて気が緩んだのか、苦痛の表情を浮かべるはやての胸に、ゼロは右掌を当て『メディカルパワー』を照射する。

ほのかな光に包まれ、彼女の体の強張りが徐々にだが解けて行く。

はやては深く息を吐いた。相当に我慢をしていたのであろう。額に汗が光っていた。ベッド脇のゼロを気だるそうに見上げ、

「…ゼロ兄…ありがとうな…楽になったわ……」

儚げに微笑み、当てられている手を力無く握った。その弱々しさにゼロは泣きたくなってしまう。

先生の言う通り、明らかに病状が悪化しているのを感じ、暗たんたる心持ちになるが、おくびにも出さず、

「…はやては我慢し過ぎだぞ…辛い時は言え…水くせえ…」

少し怒った様にたしなめるゼロに、はやては薄く笑みを浮かべ、

「…私はみんなの前では笑っていよう決めとるんや…」

何か言おうとするゼロにはやては、判っていると言う風に頷き、

「…前にゼロ兄に叱られたけど…私はずっと1人ぼっちやったから…病気で死んでまう事自体はそんなに怖くないと思ってた……」

ゼロは哀しそうな顔をして、熱に浮かされた様に喋り続ける少女を見つめる。

「…もちろん今は違う…守りたい日々があって、大切に幸せにしてあげなあかん子達が居る…だから決めたんや……」

ゼロの手を握るはやての小さな手に、ほんの少しだけ力が籠もる。

「みんなの為に私は生きてよう…笑顔でいよう…強くいよう…そう思った…私はみんなのマスターやから…」

弱々しい中にも確かな意思を秘め、少女は静かに誓いを口にした。

「…そうか……」

胸が詰まったゼロはやっとそれだけを口にする。はやては泣き笑いの様な表情のゼロを見上げ、

「…私が死んでもうたら…またあの子達が酷いマスターの元に行く事になるかもしれんし…ゼロ兄も1人ぼっちになってまう…だから私はがんばるわ…」

少女は笑みを浮かべる。心配無いと言う様に、

「…はやては凄えな……」

ゼロはしみじみとはやてを見下ろす。だが少女は不意に表情を曇らせた。

「違う…凄くなんか無い…そんなんや無い…そんな綺麗事だけや無い…！」

感情が激したはやては、今の言葉を打ち消す様に、激しくかぶりを振った。

「はやて……？」

はやてはゼロの右手を、両手で押し抱く様にぎゅっと握り締める。その手が震えていた。

「…私がみんなとお別れしたくないんや……シグナムとヴィータとシャマルとザフィーラと…もっと一緒に居たいんや……何時からこんな欲張りになってもうたんやろう…」

堰を切った様にはやては心の中の想いを吐露していた。最早止められなかった。

「…ゼロ兄…ゼロ兄達とお別れしたくないよ…ずっと一緒居たいよゼロ兄ぃっ」

彼女は大粒の涙を溢れさせて泣き出していた。助けを求める幼子の様に泣きじゃくる。

「死にたくない…死にたくないよゼロ兄ぃっ…！」

はやてが初めて口にした死への恐怖だった。
ゼロは震える少女を強く抱き締めてやる。はやては震える体を預けむせび泣いた。

不安や心の中に溜め込んでいた様々なものを吐き出す様に…

「…大丈夫だ…絶対何とかしてやる…絶対にだ…！」

ゼロは泣きじゃくる少女の背中を、赤子をあやす様にさすってやる。

「…うん…うん…」

はやては泣きながら何度も頷いた。この温もりに包まれると恐怖が和らいで行くのを感じる。

（私は大丈夫や…みんなとゼロ兄が居る……）

心地良い圧迫感の中、彼女は二度と離れないと言わんばかりに、しがみつく手に力を込めた。

窓から怖い程の茜色の夕日の光が、闇に沈む前の最後のあがきの様に強く2人を照らす。

病室の白い壁に、ゼロとはやての黒ぐろとした影が、別の生き物の様に長く長く伸びていた。

ーーー

判明した事は『闇の書』の本来の名前が、古い資料によれば正式名称は『夜天の魔導書』である事。

本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を蒐集し、研究する為に作られた主と共に旅する魔導書であった事。

破壊の力を振るう様になったのは、歴代の持ち主の誰かがその力に目を付け、プログラムを改変してしまったせいである事などだ。

何時の世にも『ロストロギア』を使って、莫大な力を求める輩は後を絶たないらしい。モニターのユーノは更に、

《その改変のせいで旅をする機能と、破損したデータを自動修復する機能が暴走してるんだ…》

「転生と無限再生はそれが原因か…」

話を聞いたクロノは呟いた。現在失われた古代魔法なら、それ位は有りえるものらしい。ユーノはコクリと頷いて、

《一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化…
一定期間『蒐集が無いと、持ち主自身の魔力資質を侵食し始めるし、完成したら持ち主の魔力を際限なく使わせる…無差別破壊の為に…だから今までの主は完成して直ぐに……》

力を得る為のものなどでは無い。まさしく死の魔導書であった。

クロノは停止や封印方法が有るかを聞いてみるが、完成前の停止は難しいとの事だった。

『闇の書』が真の主と認識した人間でないと管理者権限を使用出来ない。つまりプログラムや改変が出来ない。

無理に外部から操作をしようとすると、主を吸収して転生してしまうシステムまで入っている。

質の悪い呪いの様なものだった。

それ故今まで『闇の書』の永久封印は不可能とされている。

「元は健全な資料本が何と言うか…まあ…」

リーゼロッテが呆れ顔で感想を述べる。孤門は痛ましそうな様子で、

「…結局は何時の世も原因は人と言う事か…勝手に作り出され、害悪とされるか…作られた方はどう感じるんだろう……？」

孤門の人間を断罪する様な言葉に全員は言葉も無い。

人の力への欲望に翻弄され、呪いの器と化してしまった作られし

存在。憐れであった。

しばらく重々しい沈黙が続く中、ようやくクロノは口を開いた。

「それで見えて来たよ…ウルトラマンゼロの行動の意味が…」

モニターのユーノもエイミィも頷いた。リンディの推察、偽物が存在する可能性については、既に全員が聞き及んでいる。クロノは全員を見回し、

「多分…ウルトラマンゼロは『闇の書』の主を助ける為に守護騎士達に協力しているんだろう…そして状況からして、ゼロも守護騎士達も『闇の書』が壊れている事実を知らない…」

「それにつけ込んだ何者かが、何が目的かは解らないけど、ウルトラマンや守護騎士達になりすまして、私達とかみ合わせる様にし向けた…」

エイミィがようやく腑に落ちた表情をする。ここまで確信を持てたのには理由があった。

偽物などという存在が、思いもよらなかったせいで調べていなかったのだが、出現頻度をチェックしてみると、明らかに不審な点が見つかったのだ。

例えば他の世界で『蒐集』を行っていた筈のゼロが、同時に別の世界で人を襲っていたという具合である。

それは喜ばしい事の筈だった。ゼロが何も悪事を働いていない証拠になる筈なのだから。

ご丁寧に監視映像に捉えられたものまで有る。

しかしクロノはふと思う。まるで誰かの質の悪い悪戯につき合わされた様だと。それもバレる事が前提の…

気付いたら気付いたで、自分達の迂闊さを痛感させる。そんな悪意を感じさせる気もする。

（考え過ぎだろうか……？）

クロノは少し引っ掛かるものを感じるが、まずは目の前の事を片付けるのが先と、一旦保留にして置く。もう一つ気になる事も有った。

クロノは引き続きユーノに調査を頼み、通信を切った所で、

「エイミィ仮面の男の映像を」

「ほいっ」

エイミィは直ぐにコンソールを操作し、仮面の男の映像をモニターに映し出した。

「何か考え事？」

「まあね…」

リーゼロッテの質問に、クロノは何時もの気難しい顔で答える。

「…君も気になるんだね…」

孤門はクロノの傍に歩み寄り、モニターに映し出された映像を見上げそっと呟いた。

クロノは傍の孤門をハッとした様に見上げ、

「…そうか……」

とだけ呟くと納得した表情をし、モニターに目を戻した。

ーーーーーーーーーー

通信を切ったユーノに、今まで何処に居たのかミライがふわりと浮いて近付いて来た。

「何処に行ってたんですかミライさん？みんなに紹介しようと思っ

てたのに…」

「ごめん…ちょっと集中し過ぎて、奥の方に行ってたものだから…」

ミライは済まなそうに頭をかき苦笑を浮かべる。

「この次は皆さんにちゃんと挨拶するよ」

「約束ですよ、それじゃあ続きを始めましょう。出来れば他に停止や封印方法を見付けられたらいいんですが…」

「がんばろうユーノ君」

ミライは笑顔で応えると、早速関係資料の捜索に掛かる。本を手に取りながら、先程見た人物を思い浮かべた。

（彼が孤門一輝…ウルトラマンネクサス…か……）

モニターに映っていた青年の姿を、改めて脳裏に焼き付ける。

彼はワザと姿を現さず、物陰から孤門達の様子を見ていたのだ。

（…どうやら事態はユーノ君の仲間の人達のお陰で、良い方に向かっているみたいだけど……）

ミライは浮かない表情をする。どうにもまだ不穏なものを感じるのだ。まだ敵の全貌を掴みきれていない。

（『ダークザギ』…何処に潜んでいるんだ……）

ミライの何時も穏やかな表情が、戦士としての鋭いものになっていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

学生や会社員達が慌ただしく行き交う朝の通学路。その中に混じって学校へ通学する、フェイトとなのはの姿があった。

「体調大丈夫？」

なのはは少し心配そうに、隣を歩くフェイトに声を掛けた。

「うん、魔法が使えないのはちょっと不安だけど、体の方はすっかり」

なのはの気遣いにフェイトは微笑んで答える。

当面の間フェイトとなのはは、呼び出しがあるまで此方の世界で待機という事になっている。

『闇の書』捜索は、武装局員を増員して、追跡調査をメインにする事になったのだ。

「でも…せっかくウルトラマンさんとヴィータちゃん達が、何も悪い事をしてないかもって判って来たのに…お話して、仲直りって訳には行かないんだね…」

「…色々難しいらしいから…直ぐには無理みたい…」

なのはとフェイトは残念そうにため息を吐く。偽物の件はまず間違いないと思われるが、百パーセント確実とまでは行かない。

疑り深い様たが、推測が外れている可能性もゼロでは無いのだ。

それに偽物と遭遇した場合、今の所見分けがつかない現状では、武装局員達の警戒態勢は解除されないままである。

まだ油断は出来ないという訳だ。当然と言えば当然の事であった。
管理局も組織である以上、事は慎重に進めなければならない。

「でも…本物のウルトラマンさん達だったら、ちゃんと話し合いをする事になったから大丈夫だよね」

「うんっ」

それは2人にとってとても嬉しい事であった。

色々とハードルは多そうだが、きっと良い方向に話が進むに違いないと、フェイトもなのはも信じた。

2人は顔を見合わせると、足取りも軽く学校へと向かうのだった。

「入院…？」

「はやてちゃんが？」

予鈴の鳴り響く中、教室に入ったフェイトとなのはは、すずかか

らの話を聞いて、心配そうに声を出した。

「うん…昨日の夕方に連絡があったの…そんなに具合が悪くないそうなんだけど、検査とか色々あって暫く掛かるって…」

すずかは心配そうに下を向いた。そんなすずかを見てアリサが、

「じゃあ放課後みんなで、お見舞いとか行く？」

「えっ…いいの…？」

申し訳なさそうなすずかに、アリサは任せなさいとばかりに胸を張り、

「すずかの友達なんでしょ？紹介してくれるって話だったしさ、お見舞いもどうせなら賑やかな方がいいでしょ？」

フェイトとなのはにも同意を求める。

なのはは大丈夫かな？とは思ったが、フェイトも賛成したので、はやての都合さえ良ければ、みんなでお見舞いに行く事で話は纏まった。

ーーー

《何？テスタロッサ達がどうしたって…？》

シャマルからの緊急の思念通話を聞いたシグナムは、眉をひそめた。

周りには赤茶けた大地と険しい崖地帯が広がっている。

今ゼロと異世界に『蒐集』に来ているところであった。ゼロも只ならぬ様子に、銀色の顔に緊張の色を強める。

《だからテスタロッサちゃんとなのはちゃん、管理局魔導師の2人が今日はやてちゃんに会いに来ちゃうの！すずかちゃんのお友達だから！》

どうしようどうしようと、シャマルはかなり取り乱している様だ。ゼロも動揺を隠せない。

《落ち着けシャマル！大丈夫だ、幸い主はやての魔法資質は殆ど闇の書の中だ、詳しく検査されない限り、バレはしない》

焦るシャマルに、シグナムは理路整然と大丈夫な旨を説明してやる。

永い間リーダーとして事にあたり、場慣れしているだけあって、彼女の判断は的確だ。

戦闘一辺倒のゼロは、この様な時どうしたらいいか解らず、ひたすら困惑してしまう。

《それは…そうかもしれないけど…》

まだ心配そうなシャマルに、シグナムは言い聞かせる様に、

《つまり…私達と鉢合わせる事がなければいいだけだ…》

《うん…顔を見られちゃったのは失敗だったわ…出撃した時ゼロ君を見習って、変身魔法でも使ってれば良かった…》

《今更悔いても仕方ない…御友人のお見舞いの時は、私達が外そう

…後は主はやて、それから石田先生に我らの名を出さぬ様にお願いを…》

《はやてちゃん…変に思わないかしら…？》

《仕方あるまい…頼んだぞ…》

そう念を押してシグナムは通信を切った。

『…全く…世の中狭いって地球じゃ良く言うが…何て偶然だ…』

「全くだな…」

プロテクター状の肩をすくめ愚痴るゼロに、シグナムは苦笑を浮かべる。

『それなら見舞いの時は、俺がはやてに着いてれば問題ねえか…？』

「いや…テスタロッサは、人間のゼロの顔を知っているのだろう？万が一を考えて、ゼロも顔を出さない方が無難だ…少しでも主はやてへの危険は避けたい…」

『…そうだな…判った…』

ゼロは納得して頷いた。ここで見つかってしまっては元も子もない。

（…しかし…嫌な雲行きだぜ……）

『蒐集』に戻りつつ、ゼロは不吉な気配を感じずにはいられなかった。

ーーーーーーーーーーーー

女は虚ろな目をして、薄暗い部屋の中何かを抱きかかえ、２つあるベッドの片方に、じっと座り込んでいた。

部屋の中には日用品や、赤ん坊の紙オムツの袋などが、手付かずのまま乱雑に転がっている。

ガランとした調度品の少ない部屋の様子から、何処かの施設の一室の様に見えた。

少なくともこの女が住んでいる筈なのだが、まるで人が暮らす生活臭というものがしない。荒れ果てた雰囲気が漂っている。

ドロリとした光彩の少ない目で、何も無い空間を見つめていた女が、人形の様に不自然にドアに目を向けた。

それと同時に微かな音を立ててドアが自動で開き、男が1人音も無く入って来た。

男はかつては女の夫だった『もの』だ。いや女自身も…

男は女を感情の無い暗い目で見下ろし、

「…『冥王』からの最後の命令だ…お前達はウルトラマンゼロ達との最後の戦いに向かい儀式を進めよ…俺はネズミの排除と、この『本局』を墜とす…」

抑揚の無い声で、恐るべき事を淡々と伝えた。女は無言で頷く。

女の腕の中で抱きかかえられていた何かがずるりと蠢いた。

つづく

第５２話　壊れ行く未来ー フューチャーブレイク ー（後書き）

A-ｓ編もいよいよ佳境に入ってきました。やっぱり纏めに入る辺りが一番悩みます。
大丈夫なのか俺ぇ？ちゃんとあのシーン目指して整合つけられるのか？と不安に思いつつもラストに向けて頑張ります。

ちなみに最後に出た人達…既に本編に出ていますので。

それでは次回お会いしましょう。

第５３話　焦燥ーイリーティションー（前書き）

遅くなって申し訳ありません。しかし気持ち悪い程の暑さ…体調管理にお気を付け下さい。

それでは第５３話をどうぞ。

第５３話　焦燥ーイリーティションー

コンコンとドアを軽くノックする音が、静かな病室に響く。

「はーいっ、どうぞ」

はやては元気良く返事をした。すずかが友達を連れて、お見舞いに来るのは既に聞いている。

「「「「こんにちはーっ」」」」

挨拶をして、すずかにアリサ、それにフェイトとなのはが、それぞれお見舞いの花やケーキを手に、病室に入って来た。

「こんにちは、いらっしゃいっ」

はやては頬を綻ばせてすずか達を出迎える。

紹介してくれるという友達の中に、フェイトとなのはが居た事に、はやては最初驚きを禁じ得なかった。

今まで2人の事をゼロから聞き、憧れの感情を抱いていた事もあるが『闇の書』と守護騎士達の事がバレないかが少々心配になったものだ。

しかし詳しく検査されない限り、はやての魔法資質の事や『闇の書』の事がバレる心配は無いとの説明を受けていたので、気楽にする接する事が出来た。

ゼロ達が同席しないのも、名前を出さない様にと念を押されたのも、管理局にバレる危険を少しでも防ぎたいからだと、はやては納得している。

だが本来の彼女なら、話の不自然さに気付いた可能性は高い。しかし今のはやては気付く事が出来なかった。

それだけ精神的にも、肉体的にも余裕が無かったと言えよう。

しかしそれら細々した事はともかく、はやてはフェイトとなのは、2人の魔法少女と話をしてみて思った。

（アリサちゃんもええ子やし、なのはちゃんもフェイトちゃんも、話に聞いてた通りのええ子達や…）

はやてはすっかり嬉しくなってしまう。3人共それぞれタイプは違うが、優しい子達なのは話してみて直ぐに分かった。それに自分と非常に気が合うのだ。

波長が合うというか、ずっと以前からこの5人で友達として過ご

して来た様な、そんな錯覚を覚える程の楽しい時間であった。

（みんな、ホンマにありがとうな…）

はやてはすずかと、今日出来た新しい友達に心の中で感謝した。

楽しそうな話し声が洩れる病室の前で、ロングコートに大きめのサングラスを掛けたシャマルがスパイよろしく、中を窺っていた。

はっきり言って不審者以外の何者でもないが、シャマル本人は大真面目である。

「シャマルさん…何やってるんですか…？」

通りかかった石田先生に声を掛けられてしまった。

「はっ…その…ちょっと気になって……」

シャマルは決まりが悪そうにサングラスをずらし、照れ笑いを浮かべた。

あっという間に楽しい時間は過ぎ、すずか達は時間も遅いので、はやてに別れを告げ自宅へと帰って行った。

頃合いを見計らって戻って来たシャマルは、お見舞いの花を花瓶に生けながら、まだ友達との会話の余韻に浸っているはやてに、

「お友達のお見舞いどうでした…？」

「うんっ、みんなええ子やったよ、楽しかったぁ…また時々来てくれるて…フェイトちゃんもなのはちゃんも、聞いてた通りの子達やったし…」

満面の笑みを浮かべるはやてに、シャマルもニッコリ笑って、

「それは良かったですね…」

頷いたはやては、持って来て貰った本の中から、クリスマス関係の本を手に取り、

「そやけど、もう直ぐクリスマスやなあ…みんなとのクリスマスは初めてやから、それまでに退院して、パーッと楽しく出来たらええねんけど…」

「そうですね…出来たらいいですね…」

無邪気に微笑むはやてを見て、シャマルは思わず涙が零れそうになった。

辛い事全てを押し隠して笑う少女、それは子供に心配を掛けまいとする慈母を思わせた。

茜色の夕日に照らされた卓上カレンダーの、１２月１３日の日付がやけにはっきりとシャマルの目に入る。

「あははっ」

はやては夕日に透かす様に本をかざして、楽しそうに笑い声を上げた…

荒野が広がる異世界で『蒐集』を終えたシグナムは、息を乱して膝を着いていた。

直ぐ近くに戦闘不能にした、巨大な魔法生物群が倒れ込んでいる。

《闇の書のはやてちゃんを侵食する速度がだんだん上がって行ってるみたいなの…このままじゃ保ってひと月…もしかしてもっと短いかも…》

シャマルのはやての容態を知らせる悲痛な声が、冷静な筈のシグナムの胸をぎゅっと締め付ける。猶予はあまり残されてはいない。

剣の女騎士は消耗した体に鞭打って、再び立ち上がる。その目には隠しきれない焦燥感が浮かんでいた。

闇の様な分厚い雲に覆われた暗鬱とした空から、稲妻と共に叩き付ける様な雨が、荒れ狂う海に降り注いでいた。

その降りしきる雨の海上を飛行する、人間サイズのウルトラマンゼロとヴィータの姿が有った。

ふとゼロは、前を見据えて魔力反応を探している、ヴィータの複雑そうな表情に目を留めた。

『どうした…？考え事か…ひょっとして、こないだ言ってた事か…？』

ヴィータはハッとした顔をし、ゼロの顔をまじまじと見て、少し躊躇していた様子だったがコクリと頷き、

「…うん…何かがおかしいんだ…」

雨の中ヴィータは表情を曇らせる。以前に見せた、もどかしそうな様子。ゼロは黙って先を促す。

「こんな筈じゃないって、アタシの記憶が訴えてる…おかしいって

…何でだ?何でアタシはこんな事を考えるんだ…?」

『ヴィータ…』

ヴィータ本人が一番混乱している様だった。ゼロは考える。彼女が訴える不安とは何なのだろう?

はやてが倒れ、ゴタゴタしていたのでそのままになっていたが、妙に気になる話だった。

シグナム達は覚えが無い様子だったが…

ヴィータはその考えを振り払う様に大きく首を振り、『グラーフ・アイゼン』を頭上に振り被った。

その両目から止めども無く流れるものは雨では有るまい。

「でも…今はこうするしかないんだよな…?はやてが笑わなくなったり、死んじゃったりしたら…ヤダもんな!」

海上に巨大な異形の物体が浮かび上がって来た。蛸を思わせる頭部に、複数の目とおぼしきものを付けた奇怪な魔法生物だ。

「やるよゼロ!アイゼン!!」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ》

『おおっ！！』

アイゼンが巨大な角柱状のハンマー形態ギガントに変化し、ゼロも右足にエネルギーを集中させる。

２人は雨を真横に切り裂いて同時に飛び出す。ヴィータのギガントと、ゼロの飛び蹴りが怪物に炸裂した。

海上に巨大な姿がプカプカと島の様に浮かんでいる。強烈な打撃を受け、意識を失っているのだ。

『蒐集』を完了し『闇の書』を閉じたヴィータの頭をゼロはポンと叩く。涙の跡がまだ頬に残っていた。

「…誰にも言うなよ……」

ヴィータは目をゴシゴシ擦りながら、決まりが悪そうに頬を赤くする。

『仕方ねえなあ…黙っといてやるよ…』

ゼロはポンポンと子供をあやす様にヴィータの背を優しく叩いた。

「子供扱いすんな…ゼロだって前に大泣きしてたクセに…」

『ソンナ昔ノ事ハ忘レタ…』

「そんな昔じゃねえし、台詞がカタカナになってるぞっ」

ヴィータはぶつぶつ文句を言いながらも、ようやく笑顔を浮かべた。

別の個体を求めて、ゼロとヴィータは近くの島へと向かう。降りしきる雨が、岩場だらけの荒涼とした大地を強く叩いていた。

『やけに何も無い島だな…』

ゼロは島を見渡してみる。島の中央に幾何学的な模様を組み合わせた様な、鋭く尖った異形の山がある以外に、特に目立ったものは無い。

『ん…？』

ゼロは何かの気配を感じ、視線を異形の山に向けた。ヴィータもつられてゼロの視線の先を辿る。

叩き付ける雨と厚い雷雲のせいで視界が悪い中、稲妻がカッと辺りを真昼の様に照らし出す。

雷光に照らされて巨大な人影が、不気味に浮かび上がった。

『ダークルシフェル！ダークファウスト！！』

ゼロは巨大な影を見上げ、拳を握り締める。

雷鳴轟く島にそびえ立つのは、異形の三つ首ダークルシフェルと、紅き死の巨人ダークファウストであった。

『ケリを着けようか…ウルトラマンゼロ…！』

ファウストはゼロを指差し、死刑を告げる様に不吉に宣告する。

『貴様らに構っている暇は無え！速攻で叩き潰してやるぜ！デャアアッ！！』

ゼロの気合いと共に、その体が膨れ上がる様に４９メートル巨人と化す。

足元の岩場が、その急激な質量の増加に耐えきれず、爆発した様に砕け散った。

「邪魔する奴はぶっ潰してやる！アイゼン！！」

ヴィータもアイゼンを、自分の身の丈以上はあるギガントモードに変化させ、闇の巨人達に対峙しようとする。

しかしファウストはヴィータを見下ろし、

『慌てるな…お前の相手はそいつだ！』

ファウストがヴィータの後方を指差すと同時に、大地が大きく揺れ動く。

岩を砕き土煙と土砂を巻き上げて、異形の巨体が地上に出現した。生皮を剥がれて皮下組織が剥き出しになった、ドブ鼠の様なおぞましい姿。

スペースビースト『ノスフェル』であった。奇怪な吠え声を上げ、鋭い爪を振りかざしヴィータに迫る。

「こっちはアタシに任せろっ！」

ヴィータは叩き付ける雨の中、宙に舞い上がりノスフェルと対峙する。

『気を付けろヴィータ、そいつは確か！』

ゼロがその小さな後ろ姿に注意を促そうとした時、ルシフェルが両手を振り上げて吠えた。

『グルオオオオオ～ッ！！』

おぞましい様な赤子が哭く様な響きの叫び。それが合図だったか

の様に、ルシフェルとファウストは、豪雨の中ゼロに襲い掛かる。

『このクソッタレ共がっ！邪魔すんじゃねえっ！！』

ゼロは忌々しそうに吐き捨てると、突っ込んで来る2体の巨人を迎え撃つ。

ルシフェルの鋭いルシフェルクローと、ファウストの速射砲の如きパンチが唸りを上げた。

一方のヴィータはノスフェルの爪の攻撃を避け、アイゼンの一撃をお見舞いしようとするが、

（ビーストの事も、だいたい聞いてっけど…アタシと相性が悪いんだよな…）

一旦攻撃を止め距離を取る。ノスフェルは異常に生命力が強いタイプのビーストだ。

口内部の再生機関を破壊しない限り、例え粉々にされようと、何度でも復活してしまう。

バラバの時の様に頭を叩き潰しても倒せない。再生機関をピンポイントで攻撃する事が重要だった。

ヴィータの射出魔法では威力が足りない。カートリッジの残りは3発。彼女に不利であった。

射出魔法で牽制しようと鉄球を取り出した時、ノスフェルの凶悪な口から、毒々しいピンク色をした物体が勢い良く伸びた。

獲物を捕らえ、武器にもなるノスフェルの舌だ。

「しまった！？」

弾丸並みの速度の舌にヴィータは意表を突かれ、反応が一瞬遅れてしまった。

『ヴィータ！！』

ゼロはルシフェル達の猛攻をしのぎつつ、ヴィータの援護に向かおうとするが、

『他に気を取られている場合か！？』

ファウストの紫色の光刃がゼロを直撃する。その間にヴィータは、

ノスフェルの舌にガッチリと捕らえられてしまった。

そのおぞましい、赤黒い肉の紐がメジャーの様に、ノスフェルの凶暴な牙の生えた口部に、ずるずると巻き取られて行く。

ヴィータは完全に捕らえられ、アイゼンを振る事も出来ない。不気味に脈打つ触手状の舌が、彼女の小さな体をギリギリと締め上げる。

「クソォォッ！離せえええっ！！」

ヴィータが絶叫を上げた時、一瞬視界を燃え盛る炎が掠めた。

「紫雷…、一閃っ！！」

聞き慣れた掛け声と共に、大人の腕程は有る舌が真っ二つに切断された。

舌からどす黒い血を撒き散らして絶叫するノスフェル。

「シグナム！？」

拘束から脱出したヴィータは声を上げた。燃え盛る愛刀『レヴァ

ンティン』を携えて彼女の前に浮かんでいるのはシグナムであった。

怒り狂ったノスフェルは鋭い爪を振り上げて、2人に襲い掛かろうとするが、

「縛れ、鋼のくびき！」

深みのある声が響くと同時に、地面から槍状の無数の鋭い刃が次々と突き出し、ノスフェルの脚部に突き刺さる。

『ザフィーラかっ！』

ゼロの視線の先に拳を組み合わせた、褐色の肌の青年ザフィーラが立っていた。ヴィータも驚いて、

「シグナムもザフィーラも何で此処に…？」

「フッ…シャマルから、何度呼び掛けても返事が無いと知らされてな…もしやと思ったが、間に合った様だな…」

シグナムは何でも無い様に微笑を浮かべた。ヴィータは少しむくれた様子で、

「ちぇっ…余計な事…と言いたいとこだけど助かったよ…そんじゃあアイツをぶっ潰してやるか！」

照れくさそうに礼を言うと、照れ隠しに大声で叫びアイゼンを構える。

シグナムはルシフェル達と戦り合うゼロに、

「ゼロ、ビーストは我らが引き受けた、存分に戦れ！後れを取ったら承知せんぞ！」

『誰に言ってやがる！』

シグナムのからかう様な言葉に、ゼロは楽しそうに返答を返した。

尚も襲い来るルシフェル達に、強烈な正拳突きの二連打を叩き込み、吹き飛ばした。

『コイツらに構っている時間は無え！一気に片を付けるぞ！！』

「承知！」

「そっちこそぐずぐずすんなよ！

「おおっ！！」

三者三様の返答をし、シグナム、ヴィータ、ザフィーラは降りしきる雨の中、ノスフェルを囲む様に陣形をとった。

ノスフェルは脚に突き刺さった鋼のくびきの刃を強引に砕いて前進する。血しぶきが舞い、刃の破片が3人に降りかかる。

「アイゼンッ！」

《ｓｃｈｗａｌｂｅ　ｆｌｉｅｇｎ》

ヴィータは破片を巧みにかわしながら鉄球を取り出し、アイゼンの一撃で一気に打ち出した。

魔力付与された鉄球が真っ赤に輝き、次々にノスフェルの巨体に炸裂するが、怪物は動じない。

その強靭な前脚を振り上げ、鋭い爪で切り裂かんとする。

「飛竜…、一閃っ！」

その前脚にシグナムの紫色の光を帯びた斬撃が打ち込まれる。
皮膚がばっくりと裂け、その傷は深く肉まで達していた。どす黒い血が噴水の様に飛び散り雨に溶ける。

ネズミの断末魔の様な耳を塞ぎたくなる叫びが、降雨でずしりと重い大気に木霊した。

「超獣程、防御力は高くないようだな…」

シグナムはレヴァンティンを蛇腹状から剣に戻しながら、不敵な微笑を浮かべる。

弱って来たと見た3人は、追撃を掛けようと飛び出した時、シグナム達は目を見張った。

「傷がっ！？」

ヴィータが驚いて急制動を掛け空中で停止した。たった今シグナムに切り裂かれたばかりの、前脚の深い傷がみるみる塞がって行く。

「こちらもか…！」

ザフィーラが先程傷を負わせた後ろ脚の傷も、影も形も無い。

「再生能力が高いとは聞いていたが、これ程とはな…多少防御力が低くても、補って余りある…これが粉々にされても復活する再生能力か…」

そう呟くシグナムに、ヴィータはノスフェルを忌々しそうに睨みながら、

「どうする？下手に攻撃しても、片っ端から治っちまうんじゃキリが無えぞ！弱点突こうにも簡単には行かなそうだけどな…」

シグナムは一瞬目まぐるしく頭脳を回転させた。歴戦の戦士は、ほんの数瞬で即座に作戦を立案する。

「簡単に行かないのなら、こちらでそう仕向けてやればいいだけの話だ…ヴィータも私もカートリッジは残り少ない…波状攻撃で一気に倒す！ザフィーラもいいな！？」

「判った…！」

心得たとばかりにザフィーラは頷き、地面スレスレの高度で、ノスフェルの脚元に飛ぶ。シグナムの一言でヴィータもザフィーラも、己の役割を即座に理解していた。

お互い、伊達に永い時を共に戦い抜いて来た訳では無い。
牽制でヴィータは、身の丈を上回る大きさのアイゼンを振り上げてノスフェルに殴り掛かる。

その隙にザフィーラが怪物の足止めをするのだ。シグナムはレヴァンテァンにカートリッジを補充し、後方でまだ動かない。

「ギガントォォォッ！！」

紅い騎士服姿が弾丸の如くノスフェルに突撃する。
数瞬遅れて、ノスフェルの足元に近付いたザフィーラが、鋼のくびきを発動させた。地面から無数の槍状の刃が伸びる。

「何っ！？」

「！？」

ヴィータとザフィーラは、攻撃がことごとく空を切った事に声を洩らす。ノスフェルの巨体が降雨の中、不意に消失してしまっていた。

「そんな馬鹿な？あんなデカい奴が何処へ！？」

注意深く辺りを見渡すヴィータに、後方で控えていたシグナムの鋭い声が飛んだ。

「ヴィータ後ろだ！」

ハッとして振り向いた彼女の目に映ったのは、人間サイズまで縮小して此方に爪を振り上げる、ノスフェルの姿だった。

一方ゼロに殴り倒されたルシフェルとファウストは、素速く態勢を立て直し、流れる様な動作で起き上がりながら、エネルギーを集中する。

ゼロに対峙すると同時に、既に光線技の発射態勢に入っていた。ゼロコンマのタイムラグも無く、紫色の破壊光線が同時に発射される。『ダークレイ・ジュビローム』の一斉掃射。

『チイッ！』

ゼロは寸での所で横っ飛びに連続して側転し、光線の掃射から逃れる。外れた光線に抉られて、島の一部がごっそりと消失していた。

降りしきる雨と立ち込める爆煙の中、ゼロが油断無く構えをとっ

た時、不意にファウストが空に舞い上がった。
右拳を天高く突き出す。『ダークフィールド』を発生させる気だ。

『させるかああっ！！』

ゼロは猛然と、異相空間を発生させようとする、ファウスト目掛けて飛び出した。

つづく

第５３話　焦燥－イリーティション－（後書き）

ノスフェル、ルシフェルと並べると字が似ていますが、それはともかくノスフェルの特殊能力幾分誇張気味で書いてます。

最後の場面のノスフェルは、大きさを自在に変える事が出来るという設定を使ってますが、ネクサス本編ではあんな使い方はしてません。

前と同一個体では無いので、パワーアップした別個体と思って下さい。
それでは次回お会いしましょう。

第５４話　人形ーマリオネットー（前書き）

読んで下さってる皆さんありがとうございます。
うだるような暑さが続きます。体調管理に気を付けましょう。
それでは第５４話をどうぞ。

第５４話　人形ー マリオネットー

天高く伸ばされたファウストの両手から、闇色の光が稲妻轟く雨天に放たれた。
ゼロは猛然と飛び出しながら左腕を水平に伸ばす。

『何度も同じ手を食うかよ!』

両腕をＬ字型に組み、水に墨が混ざる様に空間に干渉し始めていた暗黒波動目掛けて『ワイドゼロショット』を放った。
青白い光の奔流がうねうねとした紫色の混沌にぶち当たる。

『何だと!?』

ファウストが驚きが入り混じった声を上げた。広がって行こうとする空間異常が、青白い光を浴びて鋭くスパークし、元の雨天の空に戻って行く。

『ダークフィールド』がワイドゼロショットのエネルギーにより、拡散消滅してしまっていた。

『貴様らがネクサスと同じく、自分の体を使って位相を反転させ、戦闘用亜空間を作り出していた事はお見通しだ…』

ゼロはダークフィールドを破られ、怯むファウスト達を不敵に指差す。

『なら、その干渉を俺のエネルギーを使って、妨害拡散させててやればいいだけの話だ！ダークフィールド敗れたりだな！！』

得意気にゼロは親指で口元を弾いた。幾度に及ぶ戦闘用亜空間での戦い。

更に封鎖領域などの、結界魔法を使うシグナム達に相談を持ち掛け、彼はダークフィールドの対抗手段を考えていたのである。

『さすがはウルトラマンゼロと言う事か…だが、我ら2人に勝てるかな！？』

『グルロオオオオオ～～～～！！』

ファウストに応える様にルシフェルは、漆黒の両腕を振り上げ、三つの首の口で獣の如く吼えた。

『俺を舐めるなよ！貴様らまとめて叩きのめしてやるぜえっ！！』

ゼロは闘争本能を剥き出しにして叫ぶ。雷光がビカビカと辺りを照らす中、豪雨を跳ね退けて3体の巨人達は激突した。

ヴィータにノスフェルの死の爪が、降雨を切り裂いて振り下ろされる。

「ちいっ！」

ヴィータはとっさに横に回転する様にひらりと体をかわし、その回転の勢いでノスフェルに身の丈を上回るサイズの『グラーフ・アイゼン』を叩き込む。

読んでいたノスフェルは、その爪でアイゼンの一撃を弾き返した。

強靭な爪だ。初代ファウストを串刺しにした程の威力がある。しかしヴィータも弾かれるのは想定済みだ。

「うおおおおっ！！」

弾かれたアイゼンを更に振り回して独楽の如く回転し、遠心力をプラスして、ノスフェルの脇腹に痛烈な一撃をお見舞いした。

「何っ！？」

ヴィータは思わず声を上げる。ノスフェルが突如として膨れ上がる様に巨大化したのだ。

硬いゴムを殴った様な感触。巨体に打ち込まれたアイゼンが、その強靭な肉体に跳ね返される。

ノスフェルは雄叫びを上げ、その巨大な爪をヴィータ目掛けて再び振り下ろした。爆発した様に大地が抉られる。

潰したと確信した怪物は、その不気味な鼠に似た顔に愉悦の表情らしきものを浮かべたが、

「へっ、ばーかっ！」

人を食った様な声が耳元でしたかと思うと、ノスフェルは強烈な打撃を横っ面に浴びてぐらついた。首が水平になる程の打撃である。

頭を振り顔を上げたノスフェルの目に、アイゼンを肩に載せてふんぞり返ったヴィータが映った。
攻撃が当たる寸前に加速魔法を発動させ、素速く上空に逃れていたのである。

「お返しだあっ！うおおおおおっ！！」

グラーフ・アイゼンが唸りを上げた。鈍い打撃音を立てて、アイゼンがノスフェルの顔面に次々とヒットする。

ヴィータの嵐の如きラッシュだ。だが怪物はぐらつきこそするものの、決定的なダメージには至らない。

ダメージを負う度に体組織が再生しているのだ。これではキリがない。
しかしヴィータは承知の上だ。あくまで彼女の役割は敵の目を引き付ける事。

その間にザフィーラがノスフェルの足下に降り立った。怪物は完全にヴィータに気を取られている様子だ。

「縛れ！鋼の…」

両腕をクロスさせ術式を発動させようとした時、ノスフェルはその異様に輝く眼球をグルンとザフィーラに向け、笑う様な軋み声を上げた。

どうやらヴィータ達の狙いを読んでいたらしい。この知能の高さがノスフェルの強みである。

間髪入れず、額の水晶体の様な器官から、鋭い光のラインが発射された。ザフィーラはとっさに魔法障壁を張り巡らすが、

「うおっ！？」

魔法障壁ごと光に絡め取られてしまった。そのまま牽引される様に宙に引っ張り上げられる。

ノスフェルのトラクタービーム（牽引光線）だ。獲物を引き込み、額の器官部に捕らえる事も出来る。

「この野郎ぉぉっ！！」

ヴィータがトラクタービームを止め様と殴りかかるが、ノスフェルの額から更にもう一条の光が伸び彼女を捕らえた。

「しまっ…！？」

2人同時にトラクタービームに拘束されてしまった格好だ。さすがにノスフェルは手強い。だが…

「飛竜…、一閃っ！」

紫色の斬撃波が空を疾り、ノスフェルの額の器官を深々と貫いた。シグナムの必殺の斬撃だ。

この為の三段構えの布陣である。それぞれが互いのフォローに回るのだ。

絶叫を上げる怪物から光のラインが途絶え、ヴィータとザフィーラの体が自由になる。シグナムが叫んだ。

「今だザフィーラッ！」

「応っ！縛れ鋼のくびき！でやあああああっ！！」

ザフィーラの鋭い雄叫びと共に、フルパワーの鋼のくびきが次々と地面から飛び出し、長大な槍状の棘がノスフェルを下から串刺しにする。

全身を貫かれ口も長大な棘に縫い止められていた。ビクンビクンと不気味に脈打つ、弱点の再生器官が剥き出しになっている。

大量のどす黒い血がサアアアと辺りに飛び散った。だが怪物はしぶとく動いている。

憎しみの籠もった声をゴボゴボと上げ、棘を砕こうと巨体に力を込めた。

「シグナム！長くは保たんぞ！今だ！！」

ザフィーラが叫ぶ。全身の筋肉が張り詰め血管が浮き上がる。ノスフェルの巨体を押さえ込む為、全魔力を極限まで振り絞っているのだ。

ここで逃がしてしまっては直ぐに再生され、振り出しに戻ってしまう。カートリッジの少ない今2度目は無い。

「任せろ！レヴァンティン！」

《Ｂｏｗｇｅｎ　Ｆｏｒｍ》

シグナムがレヴァンティンと鞘を組み合わせると、剣と鞘は姿を変え白色の弓と化す。

更に矢をつがえ、ぎりぎりと一気に引き絞った。その鏃（やじり）に魔力が集中して行く。

狙いは串刺しにされて、バクリと開かれた口内の再生器官！

「翔けよ！隼っ！！」

《Ｓｔｕｒｍ　Ｆａｌｋｅｎ！》

シグナムの裂帛の気合いと共に、鋭い光を放つ矢が衝撃波を上げて放たれた。
それは弓などと言う甘いものでは無い。矢の形をした砲撃であった。

音速を超える速度で打ち出された矢は魔力光に包まれ、ノスフェルの口内部に一直線に命中する。

矢が再生器官を見事に貫いていた。後頭部まで達した矢はその威力で、爆発した様に口内に風穴を開ける。絶叫を上げるノスフェル。

「止めだ！轟天！爆砕！ギガント・シュラァァクゥッ！！」

ヴィータの叫びと共に、足下に真紅の魔法陣が展開され、アイゼンが数十メートルのサイズまで巨大化する。アイゼンのフルドライブ・バーストモードだ。

「ぶっ潰れろおおおおおおっ！！」

巨大なハンマーが真っ向からノスフェルの頭に、砕け散れとばかりに振り下ろされる。

その一撃に頭蓋骨を西瓜の如く叩き潰され、怪物は完全に頭部を破壊された。

更に再生器官を失い脆くなった体の胸部までアイゼンがめり込んだ。噴水の如く血が肉片が辺りに飛散する。

息の合った見事なコンビネーションであった。以前の彼女達なら、こうは行かなかったであろう。

幾度にも及ぶ怪獣達との死闘が、ヴォルケンリッター達を大きくレベルアップさせていた。

巨体がぐらりと後ろに崩れ落ち、地響きを立てて大地に倒れ込む。大爆発を起こしたノスフェルは、跡形も無く吹き飛んだ。

ルシフェルがその剛腕にものを言わせ、ルシフェルクローを次々と繰り出す。ゼロはその攻撃を体を僅かに逸らして紙一重でかわして行く。

そこにファウストの大砲の如きキックが跳ぶ。しかしゼロはとっさに体を低くく落とし蹴りをかわす。

更に地面に沈み込んだ体勢のまま、腕の力と全身のバネを利用し、ファウストの軸足目掛けて地を這う様な足払いを掛けた。

足を刈られ、大きくバランスを崩したファウストは、足場の岩を盛大に砕き地面に倒れ込む。

ゼロは数万トンの体重を感じさせない、曲芸の様な身軽さで素速く起き上がった。

後ろから襲い掛かる、ルシフェルのクローをかわしながら勢い良く側転し、回転の勢いとカウンターで、浴びせかける様な蹴りを三つ首に叩き込んだ。

『グガアアアアアッ！！』

顔の一つに亀裂が入り、たまらず倒れ込むルシフェル。

あれだけ苦戦していたルシフェルを圧倒している。度重なる死闘で、ゼロも確実に成長を遂げていた。

倒れたルシフェルに手刀を振り上げた時、立ち上がったファウストが『ダークレイ・フェザー』を乱射して来た。

素速く反応したゼロは飛び退くと同時に『ゼロスラッガー』を投

擲する。2対のスラッガーが、紫色の光刃の乱舞を叩き落とした。

しかしその攻撃はゼロの目を逸らす為のものだった。ルシフェルがその隙に必殺光線の態勢に入っる。

その両腕の『アームド・ルシフェル』に膨大なエネルギーが集中していた。

『死ネッ！ウルトラマンゼロッ！！』

クロスされた両腕と三つ首の計6つの目から、同時に凄まじい光の激流が発射された。ルシフェルの最強光線『オーバーダークレイ・シュトローム・バースト』

『ウオアアッ！？』

ゼロは飛び退いて離脱しようとしたが間に合わず、光の激流の掃射が彼を襲う。消し飛ぶ大地の中、ゼロの姿は爆発の中に消えた。

「ゼロッ！？」

ヴィータの悲鳴に近い声が雨天の湿った大気に響く。ノスフェルを倒したヴィータ達の目に、爆発に巻き込まれて行くゼロの姿が映った。

爆発は天高く火柱を上げ、島の三分の一がごっそりと消失してし

まった。

『グガハハハハアァッ！！』

げたげたとルシフェルの奇妙な笑い声が爆煙の中に木霊した。

「てんめえええええっ！！」

怒りのあまりヴィータの瞳孔が開く。我を忘れてルシフェル達に向かって飛び出そうとした時、シグナムがその肩を押さえ押し留めた。

「離せ！ゼロが！！」

「慌てるな…見ろ！」

憤るヴィータに、シグナムは微笑を浮かべ上空を指し示した。空を見上げたヴィータの目に映る、火柱と爆煙が吹き上がる雨天の空に舞う巨大な影。間一髪で上空に逃れたゼロであった。

『当たらなけりゃ、どうって事は無えぜえっ！！』

空中に舞い上がったゼロは急加速し、ルシフェル達に向けて一気に降下した。

2体の闇の巨人はゼロを叩き落とさんと、同時に光線を連続発射して迎撃する。

闇色の破壊光線に、無数の破壊光線の散弾が天駆ける超人を襲う。

ゼロは宙を自在に飛び、光線の雨をことごとくかわす。そして右足を突き出し、蹴りの姿勢をとった体が独楽の如く高速回転を始めた。

回転は勢いを増し雨を跳ね飛ばして、周囲に突風を巻き起こす程のものになって行く。まるで巨大なドリルであった。

『クソッ食らえええっ！！』

更に撃ち込まれたファウストの『ダーク・クラスター』の散弾がゼロに次々と炸裂するが、全てきりもみ回転のエネルギー場に跳ね返される。

そして突き出された右足が燃え上がる様に赤熱化した。

『ディヤアアアアアアッ！！』

激烈なきりもみキックが、僅かな時間差でルシフェルとファウストに連続して炸裂した。

『ぐわあああああっ！！』

『ギャベゴオオオオオッ！！』

ゼロが大地に着地すると同時に、胸部に痛烈な一撃を受けた闇の巨人達は、轟音を立てて大地に崩れ落ちた。

師匠である『ウルトラマンレオ』直伝『きりもみキック』かつて父『ウルトラセブン』をも倒した、双子怪獣『レッドギラス』『ブラックギラス』を同時に葬り去ったレオ最初の必殺技である。

「やったぜゼロっ！」

ヴィータが子供の様に歓声を上げた。ザフィーラも力強く頷く。シグナムも満足気な様子で、

「完全に決まったな…」

大地に倒れ込んだ2体の巨人は、ヨロヨロとかろうじて身を起こすが、胸部がボコリと陥没しエネルギーの余波で、白煙が立ち上っている。

さすがは闇の巨人、止めを刺すには至らなかったが、相当のダメージを負った様だ。ルシフェル達を倒すのは今だった。

『止めだああっ！！』

ゼロは両腕をL字型に組んだ。右腕に集中したエネルギーが青白いスパークを放つ。

必殺の『ワイドゼロショット』の構えだ。光線が放たれ様とした時、ゼロは不意にその動きを止めてしまった。

「どうしたゼロ？何故止めを刺さない！？」

シグナムが不審に思って声を掛けるが、ゼロは固まった様に動かない。

巨人達を見ると、ファウストがルシフェルを庇う様にその体を抱き締め、ゼロに背を向けていた。ヴィータはその様子を見てふと、

「シグナム…何かアイツ…ファウスト…母さんみたいだな…」

「母親…？」

シグナムはヴィータの台詞に不思議そうな表情を浮かべる。
プログラム体である彼女達に、母親という概念は無い。しかしヴィータには自然とそんな想いが湧き上がっていた。

彼女にはルシフェルを庇うファウストが、母親そのものに思え、自分達を慈しんでくれるはやてと重なって見えた。

一方攻撃の手を止めてしまったゼロは困惑し、

(何をやってんだ俺は?今なら2体同時に倒せるってのに!?情けなぞ敵に掛けて堪るかあっ!!)

ゼロは再び両腕をL字型に組もうとする。ファウストはルシフェルを抱えたまま懇願して来た。

『お願い!この子だけは見逃して下さい!』

声がか細い女の声に変化していた。ゼロは動揺した様に叫ぶ。

『うるせえっ!騙されねえぞ!!』

だが叫びとは裏腹に止めを放つ事は出来なかった。どうしても体

が動かない。彼には母親の記憶は無い。

しかしファウストの姿は心の奥底に眠る、懐かしく温かい感情をぼんやりと思い起こさせた。

『…駄目だ…俺には…出来ねえ……』

強がっても無駄だった。ゼロはガックリとうなだれてしまう。自然両腕を下ろしていた。

降り注ぐ雨が2体の闇の巨人達を濡らす。ルシフェルのすがりつく姿は赤ん坊の様であった。

その口から赤子の泣き声の様な声が洩れて、静かに辺りに木霊す。

ゼロは無言で立ち尽くした。とてもこれ以上攻撃を加える事は彼には出来なかった。その時である。

雷光轟く空に突如として空間の歪みが発生した。

『何だアレは!?』

明らかに雷雲などではない。不気味な黒雲が吹き荒れる異相空間。その中央から鋭い光がファウスト達に向けて発射された。

『不味い、逃げろおおおっ！！』

危険を察して飛び出したゼロは手を伸ばすが、それも虚しく鋭い光が、ルシフェルとファウストの体を貫いた。

『うあああああああああああああっ！？』

断末魔の叫びを上げ、光を浴びた2体の巨人達は、光の粒子を血の様に撒き散らして、かき消す様に消滅してしまった。

ルシフェル達の消滅の後、異相空間は雷雲に溶け込む様に姿を消す。後には元の暗鬱な空が広がっているだけであった。

ゼロは等身大に縮小し、ルシフェル達が消滅した辺りを探していた。

ひょっとして生きているのではないかと思ったのだ。シグナム達もゼロの周りに集まって来ている。

『あれは…？』

するとゼロの目に、降りしきる雨の中淡い光が見えた。

近寄ってみると何かを庇う様な姿勢で、ずぶ濡れの女が地面にうつ伏せに倒れている。まだ若い女だ。

その体が少しずつ光になって分解して行く。おそらくこの女がフアウストの正体…

『おいっ、大丈夫か！？』

「ゼロ危険だぞ！」

シグナムが近付こうとするゼロに注意を促すが、彼は首を横に振り、

『もう戦う力は残ってねえよ…』

振り返って言うと女に駆け寄った。抱き起こそうとすると、女の体の下で何かがもぞりと動く。見てみると、1歳にも満たない赤ん坊の姿があった。

ゼロは壊れ物を扱う様に赤子をそっと抱き上げてやる。その子の

体も光になって拡散して行く…この赤ん坊がルシフェルの正体だったのだ。

ゼロ達は預かり知らぬ事であったが、この母子はかつて『ウルトラマンネクサス』により『ペドレオン』から救われた筈の家族であった。

何故こんな事になってしまったのだろうか…

『おいっ、あんたしっかりしろ！』

ゼロに抱き起こされた女はうっすらと目を開けた。焦点の定まらぬ目で辺りを見回し、

「…坊や…は……？」

それだけをやっとの事で口にする。ゼロは腕の中で、眠る様な表情で光になって行く赤ん坊を見ると、無言で女に渡してやった。

赤子を受け取った女は一瞬悲し気に表情を曇らせたが、

「…ああ…でも…これで良かったのかもしれない…やっと私も…この子も解放される……」

ひどく安らいだ表情で赤ん坊を抱き締めると、噛み締める様に呟

いた。

『…あんた達は…人間だったのか……？』

ゼロの言葉に女は雨で濡れた顔を僅かに傾け、

「…私達は死人…家族揃って適合者だった為に…殺され作り替えられた人形…『冥王』の為に手足となって動く…只の道具……」

『…そんな事が…』

「…生前の記憶を思い出し…役目を終えた…私達は…もう用済み……」

女は息も絶え絶えでそれだけを言った。体の消滅も進んでいる。もう2人共長くない様子だった。

「何でこんなひでえ事を…？済まねえ、そうとも知らず俺は…！」

うなだれて謝罪するゼロの言葉も、女にはもう聞こえていない様だった。

「…願わくば…あの人にも…人としての最後が訪れますように……」

女は最後にそう呟いた。かつて夫だったものに向けたものか…

最後に眠る様な表情をして、母子は光の粒子となり蛍の様に儚く、雨の中に拡散して消えた。

ゼロは座り込んだまま、茫然として母子が消えた空を見上げる。その銀色の顔を雨が濡らし、まるで泣いている様だった。

『俺は……』

その打ちひしがれた姿に、胸を締め付けられる想いに駆られたシグナムは、雨に打たれるゼロに歩み寄る。

「ゼロ…」

『俺がやった事は、被害者に拳を向けただけだったのかよおっ！ちくしょおおおおっ！！』

シグナムの言葉も届いていないのか、ゼロは力の限り叫び、拳を足元の岩場に思い切り叩き付けた。岩が粉々に砕け散りクレーター

が出来る。

再度拳を振り下ろそうとした時、その手がピタリと止まった。その肩をシグナムがしっかりと掴んでいる。

「ゼロ…あまり自分を責めるな……」

ゼロはノロノロと顔を上げた。シグナムが慈しむ様にゼロを見つめている。

『でもよお…俺はあの親子にこいつをぶつけちまった…何にも無ければ、あの赤ん坊も両親に囲まれて、笑っていられたろうに…』

ゼロは自分の青い拳を忌々し気に一別した。やり場の無い感情が込められた言葉に、シグナムは黙って相槌を打つ。

『今まで相手の事情なんぞ考えた事も無かった…被害者相手に何が叩きのめすだよ…馬鹿じゃねえか俺は…！』

今まで明白な悪とばかり戦って来たゼロにとって、初めて感じたやり切れない戦いであり想いであった。

「…お前は本当に、今まで己に恥じぬ戦いを続けて来たのだな……」

シグナムは静かに語り掛けると、一瞬その瞳に羨望の色を浮かべた。

ゼロの憤りは、以前の彼女達ならば甘いと切り捨てていた筈のものだ。

だが今のシグナム達にはそんなゼロが眩しく、そしてその憤りも年若いウルトラマンの少年と同じく、胸に深く響いていた。

「ならば…その想い、母子の無念…胸に秘めて決して忘れぬ事だ…ウルトラマンたる戦士ならば……」

シグナムは雨に濡れるゼロの顔を見据え、言い聞かせる様に語り掛ける。それは不器用な女騎士なりの精一杯の励ましであった。

「…ゼロ敵は我らの手で討ってやろう…それが我らに出来る唯一の手向けだ…」

想いは同じだったザフィーラも言葉を発した。静かではあるが確かな怒りを感じさせる声だ。

「あたしもすんげえムカついた…『ダークザギ』そいつにアイゼンをぶち込んでやる…！」

ヴィータもやり切れない様子でアイゼンを握り締めた。

永い間、戦いの道具としてのみ扱われて来たシグナム達にとって、ルシフェル達の末路が他人事とは思えない。

自分達もはやてと出会っていなければ、同じようなものだった筈だと痛感する。

ゼロはそんなシグナム達をしばらく無言で見つめていたが、何事か心に決めたらしくキッとばかりに立ち上がった。

『みんなに話が有る…』

雨が濡らすその目には強い決意の光が宿っていた。

つづく

第５４話　人形ー マリオネットー（後書き）

ブラックギラスとレッドギラス。レオの故郷を滅ぼした、マグマ星人に使役される双子怪獣です。

２匹が組んで発動させるギラススピンにセブンは敗北し、変身出来なくなったセブンから特訓を受けたレオが体得した技が、きりもみキックです。

ゼロも修行中に教わっていたのではないかと思ったので使ってみました。

ファウストとルシフェルは、タイプ的に初代ファウストだったリコと同じく、殺害した適合者を作り替えた操り人形と言った所です。

それでは次回お会いしましょう。

第５５話　決意ーディティムネィションー（前書き）

たいへんお待たせしました。第５５話をどうぞ。

第５５話　決意ーディティムネィションー

『時空管理局・本局』

『無限書庫』から少し離れた場所に、滅多に人が立ち寄らない区画が在った。

新たに部署が立ち上げられる予定だった場所だが、立ち消えになってしまい、今は何室かの空部屋だけが残っている。

打ち捨てられたように、デスクと椅子が数個置かれているだけのガランとした部屋。

その無人の一室から、不意に眩い光が辺りを照らした。光は壁に設置されている情報端末機器から飛び出して来たようだ。

光は意思を持っているかの様に一つに集合し、人の姿を形作って行く。光の中に一瞬、銀と赤色の姿が浮かんだが、直ぐに人間の青年の形を取った。

穏やかな人懐っこい表情『ヒビノ・ミライ』であった。彼は運動の後の様に深く息を吐く。左腕の変身アイテム『メビウムブレス』が体内に収納された。

情報端末から自らをプログラム体に変え、本局のデータベースに潜り、現実世界に帰還したところである。

「あれは一体どういう事なんだ…？」

ミライは今発見した事実について眉をひそめた。彼は今まで『ダークザギ』の痕跡を求め、データの海を何度も探っていたのである。そして今日何度目かの侵入で、妙なデータ群を見付けたのだ。

それは複数の『ロストロギア』関連の事件に関する事だったが、さすがに専門的過ぎて細かい所が解らず、判断が下せなかった。

（これは…管理局の専門家に協力して貰わないと駄目だ…それも信用出来る人間じゃないと…）

ミライは考える。彼が入手した情報は、本来民間人が手に入れられるものではない。提出しても、まず怪しまれるだろう。

ザギの精神操作の件も有る。逆にミライが疑われる恐れもあった。

データを提出するのは信用が置ける人物でなくてはならない。更に本局内にザギの手が伸びている今、迂闊な人物に提出するのは考えものであった。

場合によっては自分の正体を明かす必要も、考慮しなければならないかもしれない。

ミライは更に思案するが、おそらく時間はあまり無い。

考えを巡らす彼の脳裏に、共に資料を探した間柄の少年と、モニター越しに見た黒衣の年若い執務官が浮かんだ。

ミライは決心する。彼らがゼロと関わりがあり、共に戦った事もある事はデータベースの情報から分かっている。

その後の対応からゼロを何とか助けたいという、彼らの想いを確かに感じる事が出来た。救われた事を忘れていないのだ。

この世界の人間も、ミライが良く知る人々と同じく、心に光を持っているのだと確かに感じる事が出来た。

（なら…僕も彼らを信じよう！）

ミライらしい決断であった。まずは信じてみよう。信じなければ何も始まらないというのが彼『ウルトラマンメビウス』のモットーである。

それは何百年経とうが変わらない、彼いや…ウルトラマンなりのやり方なのだ。例え何度裏切られようとそれは変わらない。

（まずはユーノ君に…）

ミライは部屋を出ると、急ぎ足で『無限書庫』へと向かった。

ーーーーーーーーーーーー

異世界から戻ったゼロ達はリビングに集まっていた。シャマルも重要な話と言う事で、病院から駆け付けて来ている。

はやてに何か有った場合の対応は出来ているので、問題は無い。いざという時には直ぐに駆け付けられる態勢である。

リビングには張り詰めた空気が漂っていた。

ゼロはあの後直ぐには話を切り出さなかった。

自宅に戻ってから改めて話すと言ったきり、一言も言葉を発していない。

ゼロの様子に、守護騎士達は只ならぬものを感じ、敢えて追求はしなかった。

ザフィーラは狼の姿で床に伏せ、他はソファーにそれぞれ腰掛けて、中央に立ち尽くすゼロが言葉を発するのを待っている。

ゼロはそんな全員を見渡すと、重い口をやっと開いた。

「恐らく…今の俺達は『ザギ』か『アックス』かは解らねえが、いいように引っ張り回されているだけだと思う…みんなも感じてるよな…？」

「ああ…それは強く感じている…我らの行動は誰かの筋書き通りに動かされている…忌々しいがそれが現状だ…」

ソファーに腕組みで座すシグナムが、表情を険しくし感じた事を口にした。ゼロは頷き、

「このまま行けば…はやても俺達も自滅するんじゃねえかと思っている…また被害者も出るだろう…」

ゼロは顔を伏せた。ファウスト達の事を想ったのだろう。少年は奥歯をギリッと食いしばると顔を上げ、

「それで今までの状況から、色々と考えてみた…何か見落としてる事が有るんじゃねえかってな…
色々解らねえ事を整理すれば、敵の狙いも見えて来ると思ったんだが…ある事に思い当たったんだが……」

そこで言葉を濁した。ひどく言い辛そうである。

「どういう事だ…？」

煮え切らない態度のゼロに、シグナムは先を促した。少年は覚悟を決めた様に口を開く。

「言い辛いが…『闇の書』が完成しても、はやてが助からない可能

性がある…」

「そんな事が有る訳無いわ！」

唯一の希望を打ち砕く言葉に、シャマルは悲鳴に近い声を上げてしまう。

「落ち着けシャマル…まずは聞いてくれ…ヒントはヴィータの不安感だった…」

ゼロはシャマルをなだめると、不安げな顔でこちらを見上げるヴィータを見て言う。

「アタシの何かが違うってアレか？でもアタシにも何だか解らないんだぞ？」

ヴィータは自分の言い出した事が、最悪な結論に至った事に、顔色を青ざめさせた。ゼロはコクリと頷き、

「それを聞いて俺は一つ思い出した事がある…みんなが来てから、俺とはやてが『闇の書』の記憶を見た時があったろう…？」

「その時に何が有った…？」

シグナムの質問にゼロはゆっくりと首を横に振り、

「特に何も無い…いや…無さ過ぎだったんだ…」

意味が解らない守護騎士達は疑問を浮かべる。ゼロは深呼吸すると、改めて全員を見据え、

「この二つの事を併せて考えてみると…俺は『闇の書』がおかしくなっていて、完成するとはやてにとって不味い事になる可能性が有るんじゃねえかと思う…」

「何だと!?」

「そんな馬鹿な事が!?」

即座に否定するシグナムとシャマルだが、ゼロは言い聞かせるように、

「考えてみてくれみんな…『闇の書』が完成した後の記憶が有るか

…？歴代のマスター、誰か1人でも完成した『闇の書』の力を使ったのを直接見た事があるか？」

「何度も立ち会っていたのだ。そんなものは有るに決まって……？」

反論しようと口を開いたシグナムの言葉がピタリと止まる。シャマルもザフィーラも、今まで何度も立ち会った筈の『闇の書』の完成した時の状況を思い出そうとした。

「…何で…？何も覚えてない……？」

シャマルは愕然として頭を抱え込んで呻く。ザフィーラも低く唸った。

不自然なくらい、その部分の記憶がごっそり抜け落ちていた。何故今まで疑問に思わなかったのか。

ゼロは混乱する守護騎士達を痛ましそうに見つめ、

「俺が見た記憶の中にも一つも無かった…一応俺はウルトラマンだ、頭の中に流れ込んだ記録は全部覚えている…

完成してからの事を誰一人覚えてもいねえし、記録にも無い…これっておかしくねえか…？」

「そうだよ、おかしいんだ！」

ヴィータが立ち上がって叫んだ。ようやく自分の抱えて来た不安感の正体が解り掛けて来た気がする。

「ヴィータちゃん…」

シャマルが困惑した面持ちでヴィータを見上げる。ゼロはヴィータの頭を優しくポンと叩き、

「多分ヴィータはほんの少しだけ、その事が頭の中に残っていたんだろう…ヴィータの話を聞いてなかったら、解らなかったぜ…」

実感を込めてヴィータの不安感の正体を推察した。しかしそれ以外にも何か気付いた理由があった気がする。
夢の中で誰かが訴え掛けて来たような感覚…

「そんな事が…？『闇の書』が壊れていて、そのせいで我らにも記憶が無いと言うのか…？」

シグナムは自問する様に呟く。出来る限り冷静に状況を判断しようとするが、さすがに動揺していた。

「……」

狼の姿のザフィーラも床に伏せたまま、考えを巡らせている様だったが、動揺は隠せない。物事を一番冷静に判断出来る彼にも想像外であった。

守護騎士達は混乱していた。無理も無い。記憶…自分達の依って立つもの、存在意義、全てが否定されるに等しい事だからだ。

出来れば認めたくないところであろう。だがシグナムにも一つ思い当たる事が有った。

「夜天の魔導書…」

自分そっくりの女が言っていた言葉が蘇る。何故か懐かしく感じていたのは、あれが『闇の書』の本当の名だったからかもしれないと思った。

「シグナム…どう思う…？」

シャマルは不安気にリーダーに判断を仰ぐ。信じたくない話だったが、自分達が本来知っている筈の事が思い出せなくなっている以上看過出来ない。

しかし正直シグナムにも、どうしたらいいのか解らなかった。

永い時をリーダーとして守護騎士達を纏めて来たが、こんな自分達の根幹を揺るがす様な事は今まで無い。初めて心細いと感じてしまった。

（しっかりしろ…今私が動じる訳にはいかん…動揺は皆に伝わる…こんな事では主を助ける事も出来ないぞ…！）

守護騎士の将としてシグナムは動揺する自分を叱咤する。その時ふと肩に優しい感触を感じて顔を上げた。

見るとゼロが彼女の肩に手を置き、元気付ける様に頷いて、

《大変だな…リーダーもよ…すげえキツイ話だと思うが…あまり気負うな…俺も居るからよ…》

シグナムの念話回線にゼロがテレパシーで話し掛けて来た。彼女の気持ちを察したのだろう。

シグナムはフッと肩が軽くなった気がした。この少年色々と鈍い所はあるが、妙に細かい事に気付く事がある。

《…済まないな…少し弱気になっていたようだ…》

シグナムはゼロに念話でひっそりと礼を言う。ゼロは少し照れくさそうに顔を逸らしたが、再び全員を見渡し、

「そこで聞きたい事がある…お前らにも解らない『闇の書』の異常…それが解りそうな所が他にあるんじゃねえか…？」

ゼロの確認するような質問に全員が戸惑う。自分達より正確な『闇の書』の情報が有りそうな所…

「そんな所有る筈が……あっ！」

思い当たったシャマルが声を上げた。シグナムも思い当たり、

「時空管理局だな…？管理局には、管理世界の古今東西の書籍、資料が全て集められている施設があると聞いた事がある…」

「『闇の書』のデータが有る可能性も高いな…」

ザフィーラも顔を上げ低くく呟いた。ゼロはよしっとばかりに、手のひらに拳を打ち付け、

「やっぱりな…そこなら『闇の書』の異常の事が解る可能性が高い…そこで提案だ、俺は管理局のデータを見せて貰おうと思ってる…」

ゼロの言葉に一同は唖然としてしまった。ヴィータが呆れたように、

「どうやって…？アタシら追われる身だぞ…殴り込みでもかける気かよ？」

もっともな質問にゼロは一瞬表情を曇らせたが、直ぐにニヤリと笑い、

「なーに、簡単な事だ…俺が管理局に出頭するのを条件に、教えて貰えばいいだけの話だ」

「正気かよ！？」

ヴィータは目をまん丸に見開いて驚いた。みんなも唖然としてゼロを見上げる。

「1人犠牲になるつもりなの？ゼロ君の力は脅威なのよ。無実の証拠が無い今捕まったりしたら、封印されてしまうかもしれないわ！」

顔色を変えて詰め寄るシャマルにゼロは微笑み掛け、

「そうでも無いぜ…クロノ達は話が判る筈だ…そう悪い事にはならねえよ…
証拠が無い代わりに俺が身柄を預ける形で、何とか情報を貰えるように交渉してみようと思う…
勿論はやてやみんなの事は一切喋らない…」

確かにゼロの話や、今までの対応からクロノ達がそう冷酷な手段を選ぶとは思えなかったが…
ザフィーラが立ち上がってゼロの傍に寄り、

「だが…向こうにはゼロを目の敵にしている『ネクサス』が居るのだろう…？大丈夫なのか？」

痛い処を突いて来るが、ゼロはしゃがみ込んでザフィーラの蒼い毛並みを撫で、

「心配ねえよ…ネクサスも無抵抗な奴を攻撃して来るような野郎には見えなかった…端っから話し合いをしようって言うなら大丈夫だろ…？」

努めて大した事は無い事を強調する。ネクサスの話しぶりから、問答無用で襲い掛かって来る可能性も有るが、今はやるしかない。

「そんな訳だ。ハッキリした事が解らない内に『闇の書』を完成させるのは危険だ…今ははやてを助ける事が重要だろ？なーに、やばくなったら上手い事逃げて来るからよ、頼む…俺を信じてくれ！」

ゼロは頭を深々と下げた。全員無言のまま頭を下げ続ける少年を見つめている。

「…仕方の無い奴だ…頭を上げろ…」

シグナムが苦笑を浮かべて声を掛けた。恐る恐る顔を上げるゼロに、

「やってみるがいい…ただし必ず無事で帰って来い…戻らなかったなら承知せんぞ！」

「ああっ！」

嬉しそうに応えるゼロに、ヴィータがトトトッと駆け寄り、そのお腹に頭突きをお見舞いした。

「うげっ…！ヴィータお前…」

不意を突かれて呻き声を洩らすゼロに、ヴィータは服の裾を握り締めて、拗ねたように少年の顔を見上げ、

「へますんじゃねえぞっ、戻らなかったら殴り込みに行くかんなっ！」

「分かったよ…」

苦笑してその頭をワシワシと撫でてやる。少しは希望が湧いて来たようだった。

予断は許されないが、今はゼロに賭けるしかない。シャマルは心配そうに、

「気を付けてね…」

「おうっ」

頼もしく即答するゼロに、ザフィーラは気になった事を聞いてみる。

「『蒐集』はどうする…？俺は念の為に、完成寸前まで魔力を集めておいた方が良さそうに思えるが…」

「確かにな…必要になるかもしれねえ…行く前にもう一踏ん張りだな…出向くのはそれからだ！」

自分を奮い立たせるように気合いを入れるゼロに、シグナムは微笑んで、

「主の事、闇の書の事を頼む…必ず無事で帰って来い。待っているぞ」

「ああ…、必ずな…！」

ゼロは握り拳をかざし頼もしく応えた。その様子を見てシグナムは、ふと不安感が胸をよぎった気がしたが、弱気は禁物だとその考えを振り払った…

ーーー

「ユーノからか…？」

通信先を見ると『無限書庫』からである。画面を切り替えると、緊張の面持ちのユーノが映し出された。

「どうしたユーノ…？何か新しい情報でも判ったのか…？」

ユーノは戸惑ったような表情をして視線を自分の隣に向け、

《クロノに…紹介したい人が居るんだ…正直僕じゃ判断に困る…》

「紹介…？判断に…困る…？」

不審そうな顔をするクロノの前の正面モニターに、人懐っこい表情の青年が顔を出した。

《初めましてクロノ君。ヒビノ・ミライです無限書庫でユーノ君のお手伝いをさせて貰ってます》

礼儀正しくぺこりと頭を下げるミライにクロノも会釈し、

「どうも…お話はかねがね…色々と助かっています…」

挨拶を返すクロノ。ミライは顔を上げると、

《クロノ君に一度こっちに来て欲しいんだ…》

《何故ですか…？》

クロノは言葉を濁した。いきなり民間人に呼び出されて、ハイと出向く訳にはいかない状況なのだが…

《重要な話があるんだ…》

「なら今話せばいいのでは…？」

もっともな質問にミライは苦悩の表情を浮かべ、

《通信で話すのは危険過ぎる…どうしても直接会って話をしたいんだクロノ君…それに僕が今此処を離れるのは不味い気がする…》

謎めいた事を言うが、必死な様子であった。クロノはミライに真

摯さを感じた。だが同時に疑問を感じる。

一民間人に過ぎない彼の重要な話に、離れる訳には行かない理由とは何だろうかと。

だが彼の執務官として磨いて来た勘に、何か引っ掛かるものが有った。少しなら大丈夫かと判断する。

「判りました…そちらに出向きます」

その返事を聞いたミライは、ホッとして表情をほころばせた。

ーーーーーーーーーーーー

同日・日が傾き橙色の日が射し込む病室で、はやては1人ベッドに、横たわっていた。

シャマルは彼女の着替えを取りに、一旦自宅に戻ったところである。

静まり返った病室で、はやては枕元の味気ない収納ボックスに置いてある、卓上カレンダーの日付をチラリと見る。

（みんなに盛大なクリスマスパーティーを開いてあげたかったのに…アカンかったな…ごめんな…こんな頼りないマスターで…）

自分の病気の事も不安だったが、今の彼女の頭を占めるのは、みんなに対する済まなさだった。

「去年の今頃は…ゼロ兄とクリスマスの準備で忙しかったのになあ…」

はやては肌身離さず付けているペンダントをそっと取り出し、淋し気に語り掛けた。

ーーーーーーーーーー

夜も更けた夜道を、フェイトはなのはの姉美由希と、子犬モードのアルフとで連れ立って歩いていた。

先程までなのはの家にお呼ばれして、夕食をご馳走になった帰りである。

喫茶翠屋はクリスマス時は書き入れ時である。夜遅くまで営業するので暇が無い為、１日早いクリスマスパーティーにフェイトは招

待されたのだ。

夜道は危険だからという事で、美由希が散歩がてらマンションまで送ってくれているところである。

実際のところ魔導師であるフェイトにその心配は無いのだが、魔法の存在を知らない高町家の人達には至って普通の対応だ。

美由希と歩きながら話していたフェイトは、メール着信音に気付き、ポケットから携帯電話を取り出した。

見てみるとすずかからである。明日の終業式の帰りに、みんなではやてにクリスマスプレゼントを持って行く件の、確認のメールだった。

サプライズなので無論彼女には内緒だ。あれから何度も全員ではやての元を訪れ、今ではすっかり気安い間柄になったフェイト達である。

フェイトは了解の返事を返した。同時にメールを受け取ったなのはが、黙ってお邪魔する事に少し難色を示す。

しかしもし都合が悪くても、石田先生にプレゼントを預け、後ではやてに渡して貰えば問題は無いという事で、話は纏まった。

携帯を仕舞ったフェイトは、はやての驚く顔を想像して少し可笑しくなってしまうがふと、違和感を感じる。

何だろうと少し首を捻るが思い当たった。はやての家族と一度も顔を会わせていない。

（たまたまタイミングが悪かったのかな…？）

フェイトは特に深くは考えず、明日会えるかもしれないな、などと思いながら、先を歩くアルフと美由希の後を追った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

12月24日

「何なんだ…これは…？」

人気の無い待機室に、クロノの呻くような声が響いた。

朝一番で本局にやって来たクロノは、ミライから受け取ったデータを見せられる事になったのである。

ユーノも詳しい話は聞いていなかったので、クロノと同時にデータを見て声を無くした。

「ば…馬鹿な…こんな大量の人死にと失踪者が…？」

クロノは目前の空間モニターに映し出されたデータを見て、絶句してしまう。
隣りのユーノも顔色が真っ青になっている。ミライは痛ましい目でデータを見つめた。

無理もなかった。その記録は複数の『ロストロギア』の消失事件と、それに関わった関係者の失踪。

更にある事件で連続して起こっていた、大量殺戮と失踪者の記録であった。

「何故だ…何故これだけの事件が表に出なかったんだ…！？」

クロノは青い顔で被害者の記録を見つめる。おびただしい数であった。

「何者かによって管理局のデータが全て改ざんされていたんだ…更に無意識の内にその事件に目が行かないように、精神コントロールがこの本局に張られている…」

ミライは一旦言葉を切りクロノを見据え、

「クロノ君なら、これらが何を指しているか解ると思う…どうかな…？」

「クロノ…解るかい…？」

「少し…時間をくれ…」

心配そうに尋ねるユーノを宥めると、クロノは椅子に腰掛け、それぞれの事件のデータを改めて見直した。

ミライに聞きたい事は山程あったが、今はデータの方が気になる。

しばらくの間部屋にはモニター操作の電子音だけが響く。その額に汗が浮かんでいた。何か湧き上がって来る不安感と戦っているように…

数時間クロノは休まずに、一心不乱に手を動かし画面をチェックしていた。ユーノもミライも椅子に腰掛け、黙って作業を見守っている。

かなりの時間が経った時、不意にクロノの手が弾かれように止まった。

「解ったのかクロノ！？」

勢い込んで聞いてみたユーノは、クロノの青ざめた表情を見てハッとした。

「全部…最初から最後まで全て奴の手の内だったのかっ！！」

クロノは立ち上がって、憤りのあまり絶叫していた。

「一体何が解ったんだ？」

ユーノはクロノの様子に驚きながらも尋ねてみるが、クロノの耳には入っていないらしい。クロノはミライに視線を向け、

「一つ聞きたい…確かにこのデータは本物のようだ…だがそれなら尚更、民間人どころか局員いや…改竄前のデータなら上層部すら手に入れる事は不可能な筈だ…君は一体何者なんだ…？」

もっともな質問であった。データが本物だという事は確認してある。紛れもない事実だ。

だがそうなると、こんなデータを持っているミライが何者なのか、気にしない訳には行かない。

「僕は…」

ミライが言い掛けた時だった。

『やはりネズミが入り込んでいたか…』

突然エコーが掛けられたような、野太い声が部屋に響き渡った。
クロノ達は驚いて声のした方向を見る。

其処には漆黒と血に濡れたような紅の体をした、骸骨の如き異形の姿が扉の前に立っていた。

「ダッ、ダークメフィストっ！？」

クロノは驚くが、素速くカード状のデバイスを起動させ、杖状のデバイスをメフィストに向ける。ユーノも防御魔法を何時でも発動出来る態勢を整えた。

ミライは無言でメフィストを睨む。どうやら彼の潜入は既にバレてしまっていたようだ。

「貴様っ、何故此処に居る！？」

クロノはメフィストに向け怒鳴った。黒き魔人はゆっくりとクロノを見下ろし、

『無論、知ってはならない事を知ってしまった、愚かなネズミ共を消す為と、本局を墜とす為よ！』

「なっ、何だって！？」

驚愕するクロノ達を尻目に、メフィストは辺りを見上げ、

『『冥王』の望む世界に管理局など邪魔でしかない…如何に巨大な本局と言えど、内部からメイン駆動炉を破壊されれば、ひとたまりもなかろう？フハハハッ！』

確かに既に内部に侵入されていては、本局の迎撃武器は使用出来ない。

巨大化されて駆動炉に乗り込まれたら、強力な戦闘力を持つメフィストを止められる魔導師は居ないだろう。

「そんな事させるかっ！」

叫びながらもクロノは、何時でも砲撃魔法を放てるように密かに態勢を整える。

『ククク…闇の巨人に立ち向かおうと言うのか？とんだ身の程知らずだ…！？』

メフィストが最後の台詞を言い終わる前に、クロノは全力で砲撃魔法を至近距離から撃ち込んだ。
不意打ちを狙ったのである。こうでもしないと闇の巨人に太刀打ち出来ないと瞬時に判断したのだ。
こちらも巻き添えを食いかねない一撃。砲撃の衝撃で壁が粉々に吹っ飛び、クロノにも衝撃が及ぶ。だが爆煙と粉塵の中に平然と立つ影。
『ククク……』
嘲るような含み笑い。無傷のダークメフィストの姿が現れる。黒と紅の姿には傷一つ付いておらず、砲撃に微動だにすらしていない。
『愚かな…我らウルティノイドにそんな攻撃が通じるとでも思ったか…？』
メフィストは馬鹿にしたように肩を揺らすと、右腕を軽く振った。その先から三日月型の光の刃が繰り出される。『ダークレイ・フェザー』の一撃。
「危ないクロノっ！」
とっさにユーノはクロノの前に飛び出し、防御魔法の盾を張り巡らすが、
「うわあああっ！？」

光の刃は紙でも切るように易々とユーノの強固な防御魔法を切り裂き、ユーノとクロノを両断しようと迫った。その時である。

光の盾が2人の前に張り巡らされ、ダークレイ・フェザーを跳ね返した。鋭い火花が飛び散る。

「ミライさん!?」

ユーノは驚いて声を上げた。2人を庇い、メフィストの前にミライが左腕を全面にかざして、立ち塞がっていた。

ダークレイ・フェザーを防いだ光の盾は、ミライの左腕に出現した、赤いデバイス状の物体から発せられている。

『やはりウルトラ族か…!』

ミライはメフィストには応えずバリアーを解除すると、左腕の『メビウスブレス』中央のトラックボールを右手で勢い良く回転させる。

普段は穏やかなミライの表情が戦士の顔になっていた。

唸りを上げるトラックボールから、溢れる光の粒子が飛び散る。

輝くメビウスブレスを天高くかざしたミライは雄々しく叫んだ。

掛け替えのない友に貰った名を。

「メビウゥゥゥス！！」

その瞬間目も眩む光が∞の文字を宙に描き、ミライの体を包み込んだ。そして∞の光の残像の中から現れる、銀と赤の超人の姿。

「き…君は……？」

クロノはその銀色の後ろ姿に呆然とする。メフィストの前に雄々しく立ち塞がるその姿。『ウルトラマンメビウス』参上であった。

つづく

第５５話　決意ーディティムネィションー（後書き）

お待たせしました。何とか投稿です。ようやくメビウス変身であります。

余談ですが、テレビ東京系で放送しているウルトラマン烈伝でメビウスが出ないのは、メビウスを放送していた他局が、今年いっぱいメビウスの権利を持っているので、テレビ東京で放送出来ないそうです。残念…（あれ？８０、ネクサスは…？

８月はちょっと立て込んでまして、更新の間隔が数日何時もより空くかもしれません。（最近これぱっかりな気が…すいません

それでは次回『無限大ーメビウスー』でお会いしましょう。誰得なえげつないノクタもよろしくお願いします（笑）

第５６話　無限大ー メビウス ー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
洒落にならないくらい暑いですが、体調管理にはお気をつけて。
それでは真夏なのにクリスマスで、男祭りな第５５話をどうぞ。

第５６話　無限大ーメビウスー

電飾が施され、賑やかにクリスマスソングが流れる街中を、ゼロは１人歩いていた。時刻はもう夕刻に近い。

ゼロはふと茜色に染まって来た空を見上げてみる。

（最近は暖かい日が続いてたが、今日辺り雪でも降るか…？）

そんな事を思った。彼の鋭敏な感覚に湿った空気が感じられる。寒さが苦手なゼロには少し困るが、あの雪の結晶が舞い降りる光景は好きだ。

それに地球人にはホワイトクリスマスというヤツで、良いものだと以前に覚えた知識を引っ張り出してみる。

街はクリスマスイブで華やいでいた。空気にもどこか弾んだものを感じるのは、人の楽しい感情が溢れ出ているのか？とゼロはぼんやりと思う。

街のあちこちにクリスマスツリーや、クリスマスフェアの看板が目立ち、サンタクロースの格好をした呼び込みの姿も見える。

楽しそうな親子連れやカップルが行き交う中、ゼロは小脇に抱えた包みを大事そうに持ち直した。

カラフルな包み紙に包まれ、目に鮮やかな赤いリボンを付けられ

た包みに視線をやったゼロは、

「喜んでくれっかな…」

と微笑して呟いた。はやてへのクリスマスプレゼントである。『蒐集』は昨晩で、後少しで完成という所まで漕ぎ着ける事が出来た。後はこのプレゼントをはやてに渡したら、そのまま『アースラ』に出頭するつもりだ。

きっと上手く行く。いや、行かせてみせるとゼロは心の中で自分を奮い立たせ、病院へ向かおうと足を早める。

そんな彼の前に、二十歳半ば位の青年が立ち塞がった。

「…？」

ゼロは店の呼び込みか何かだろうと思い、横をすり抜けようとする。すれ違い様に青年は、おもむろに口を開いた。

「待つんだ…ウルトラマンゼロ…」

ゼロはハッとして、思わず足を止めてしまった。青年は鋭い視線をゼロに向け、

「僕は君の正体を知っている…そして君も僕の事を知っている筈だ…」

青年の物言いにゼロは緊張の色を表情に浮かべ、

「お、お前…まさか…？」

「そう…僕は孤門一輝…ウルトラマンネクサスだ…！」

驚くゼロの前で、孤門は超然として名乗りを上げた。

ーーーーーーーーーー

「おっかしいな…？」

『アースラ』ブリッジで、コンソールを操作していたエイミィは不審げに首を傾げた。

「エイミィ、どうかして？」

丁度ブリッジに入って来たリンディは、エイミィの独り言を聞き留め聞いてみる。
エイミィは困ったような顔で振り返り、

「それが…『本局』に出向いているクロノ君に連絡が取れないんですよ…」

「それはクロノが捕まらないって事…？」

リンディはごく普通に浮かんだ常識的な事を口にするが、エイミィは困ったように眉をひそめて首を振り、

「違うんです艦長…本局自体と連絡が取れないんです」

「アースラの通信機器が故障してしまっているって事なの…？」

リンディは訝しげな表情をした。整備点検を終え『アルカンシェル』の取り付けなどで、完全な筈のアースラに不備が有ったのかと思ったのだ。

「いいえ…アースラに不備はありません…本局とだけ連絡が取れな

いんです。他の基地局も混乱し始めているみたいですし…何か有ったんでしょうか？」

エイミィは深刻な表情でモニターを見直すが、画面には通信不能の表示が出ているだけだ。

「本局に限って、それは無いと思うけど…」

リンディも首を傾げて反応しない画面に見入る。

本局は各管理世界に有事の際には、局員を派遣する『次元航行部隊』の本拠地だ。

その性質上相応の予算に人員、更には最新科学の塊でもある。その本局と連絡が取れないという事態は、普通なら有り得ない。

「何が起こってるって言うの…？クロノ…」

リンディは胸騒ぎを覚え、無意識の内に息子の名を呟いていた。

ーーーーーーーーーー

クロノとユーノを庇って、『ダークメフィスト』の前に立ち塞がる超人。
赤と銀のボディーの数カ所に金色の縁取りが付き、特徴的な胸部と一体化している『カラータイマー』が青い光を放つ。

『『ウルトラマンメビウス』ゼロと同族のウルトラマンだよ』

メビウスは右手の手刀を全面に突き出す独特の構えで、メフィストに対峙しながらクロノの質問に答えた。

「ウルトラマンメビウス…？ゼロと同じウルトラマン…！？」

クロノは立て続けに襲う、予想外の出来事に唖然としてしまうが、メビウスの後ろ姿にゼロと同じものを感じた。

理屈ではない、必ず守り抜くという信念の背中を。そしてそれを実際に貫いて来た者だけが纏うものを。

何の縁もゆかりもない筈の世界を「人間が好きだから」というだけで守り抜いたゼロと同じ温かさを。

『掛かって来い！メビウスとやら。ウルティノイドに勝てるかな！？』

メフィストが挑発するように轟と吼えた。悪魔の雄叫びだ。

『こっちだ！付いて来い！』

メビウスは宙に舞い上がると、壁をぶち抜いて部屋の外に飛び出した。

このまま戦っては被害が大きくなる。内部で巨大化されたら大惨事だ。

『フハハハッ！面白い！！』

メフィストも宙に舞い上がると、メビウスを追って壁の破壊口に飛び込んだ。クロノとユーノも後を追って走り出す。

通路を駆けながらクロノは端末を取り出し、中央センターに緊急事態を告げる。直ぐに本局内に、非常警報のアラーム音が鳴り響いた。更にクロノは対応に出たオペレーターに、

「それとグレアム提督と、リーゼ姉妹は何処に居るか調べてくれ！」

そう頼むが、オペレーターからの返事は外出中との事だった。歯噛みするクロノは、アースラと回線を繋ぐように頼むが、

「何だって!?」

焦って叫んだ。尋常ではない様子のクロノにユーノは、

「何があった!?」

「外部との連絡が取れない!転移ポートも原因不明の空間異常で、なのは達の居る世界に転移不能だそうだ!メフィストの仕業だろう…このままだとみんなが危ない!」

焼け付くような焦燥感を覚えるクロノだが、此方も事態は深刻だ。本局が墜ちるかどうかの瀬戸際である。メフィストを倒さない限り、アースラと連絡すら取れそうにない。

2人は爆音が轟く方向にひたすら駆ける。メビウスとメフィストが行ったと思しき通路は酷い有り様だった。

吹き飛び切り裂かれ、瓦礫が転がる通路を走りながらクロノは、

「ユーノ…あのメビウスというウルトラマンは信用出来ると思うか…?」

「クロノ…?」

ユーノは訝しげに声を発するが、確かに執務官のクロノにしてみれば、今日出会ったばかりの得体の知れない者を、いきなり信じるというのは無理があろう。

だが理由はそれだけでは無かった。ユーノはクロノが弾き出した真相を聞いて絶句してしまう。

しばらくの間無言で通路を駆けていたユーノは、隣を走るクロノを見て、

「僕はメビウス…ミライさんを信じるよ…！」

「何故そう、言い切れる…？」

しっかりと断言するユーノに、クロノは疑うような眼差しを向けるが、ユーノは笑って、

「そっちの方は僕には良く解らないけど…ミライさんに関してはそうだよ…ここの所僕はずっと、ミライさんと一緒だったんだ。凄くいい人なのは間違いないよ」

「ずっとユーノを騙していた可能性だってあるんだぞ？」

ユーノはその言葉を聞いて、ひどくおかしそうな顔をし、

「それだけは無いよ…こうなってみると、ミライさん色々と怪し過ぎたよ…あの人隠し事が、凄く苦手なんだもの」

やはりミライには、かなり不自然な言動があったようだ。ミライはミライという事か。

「クロノは難しく考え過ぎだよ。本当はクロノも判ってるんだろ？ミライさんがゼロさんと同じ、信用出来る人だって…僕はさっき助けられた時、ゼロさんに最初に助けられた時の事を思い出したよ…」

ユーノはあの時の事を思い出し、目を輝かせる。2人を守るあの確固とした背中は、少年が一度は憧れる正義のヒーローそのものであった。

クロノはため息を吐き苦笑いを浮かべ、

「判ったよ…たまには、自分の感じるままに動いてみるとしよう！」

吹っ切れたようにクロノは応える。互いに頷き合った2人はメビウス達を追った。

一方通路を飛行するメビウス目掛けて、メフィストの光の刃『ダークレイ・フェザー』が飛ぶ。

メビウスは光刃の攻撃をかわし、次の角を左に曲がる。外れた光刃が辺りの壁床を問わず切り裂き、通路内をズタズタにした。

『どうした？逃げるだけなのかメビウスとやら！』

嘲笑いながらメフィストは更に光刃の攻撃を乱射する。メビウスは辛うじて光刃の追撃を逃れながら、不意に急制動を掛けた。

（今だっ！）

ハッとするメフィストに、激突する勢いで猛烈なタックルを掛ける。

『何ぃっ！？』

その勢いでメフィストに組み付いたまま、壁をぶち抜いた。

分厚い壁に風穴を開け、２体の超人は更に立ち塞がる壁を次々と破壊しながら進む。

まるで人間大のブルドーザーが荒れ狂っているようだった。

更に壁を破壊した２人は、広い空間に飛び出していた。どうやら次元航行船の整備ドッグらしい。

今は使われていないようで、船も人の姿も無く。機械類だけが置かれている。。

『ククク…そういう事か…下らん奴よ』

メフィストは揉み合うメビウスに、軽蔑したような笑い声を浴びせた。

メビウスが被害を最小限に抑える為に、メフィストを此処まで誘導して来た事に気付いたのだ。

メビウスとしては、このまま船の発進口からメフィストを叩き出して、本局の外で戦うつもりであった。しかし…

『そう思うように行くと思っているのか!!』

メビウスの腕の中、メフィストの体が急激に膨れ上がる。強引に巨大化を行ったのだ。

とっさに離れたメビウスの目の前で、骸骨の如き威容がドッグを揺るがして仁王立ちする。

『クッ!』

こうなってはメビウスも巨大化するしかない。光に包まれて赤と銀の巨体が、メフィストの前にそびえ立った。

『セアアァッ！』

巨大化と同時にメビウスは、メフィストに連続してパンチを放つ。
何としても闇の巨人を外に叩き出すつもりだ。

それを見越しメフィストは、体をかわしてメビウスの脇腹を狙い、
強烈な回し蹴りを放つ。

凄まじい激突音が響く。メビウスが右腕でその一撃を受け止めていた。
数万トンの質量を持つ2体の巨人同士の激突に、本局が揺らぐ。
その振動の中、本局警備の局員達がドッグに駆け付けて来た。

「撃てえっ！！」

還暦近い仏頂面の隊長の命令に、武装局員達の砲撃魔法が一斉に、
メビウスとメフィストに打ち込まれる。

彼らにしてみれば、メビウスもメフィストと同じアンノンウン、
仕方無い事ではあったが…

だが2体の巨人には、蚊に刺された程にも感じていないらしく、
揺るぎもしない。局員達の間に動揺が走った。

「化け物共がっ！！」

隊長が攻撃続行を指示しようとした時、

「待って下さい！！」

やっと追い付いたクロノとユーノが、警備隊長の元に駆け付けた。

「クロノ執務官か…何を言っている！？あの化け物共が見えないのか！？」

クロノとは顔見知りらしい隊長は苛立ったように叫ぶが、年若い執務官は闇の巨人と戦うメビウスを指し、

「細かい説明は後で。あの銀と赤の巨人は味方です！黒い巨人の方に攻撃を集中して下さい！」

「馬鹿な！あんな巨大なものが味方だと！？」

隊長は当然の反応をする。ゼロの時のように、管理外世界に現れた時とは訳が違う。本局に直接乗り込まれている状況では無理もないが…

こうしてる間にも、メビウスとメフィストの戦いは続いていた。

（このままじゃ…）

メビウスは攻撃を避けながら、何としてもメフィストを外に叩き出そうと奮戦していたが、焦りが見える。

本局内でこれ以上暴れたら被害が大きくなる。『メビュームシュート』などの、威力の高い光線技など論外であった。

メフィストもそれを見越して、メビウスの思惑には乗って来ない。このまま長期戦になったらメビウスが不利であった。

『下らん奴よ！守ろうとする人間に攻撃されては世話は無いなあっ！？』

嘲笑うようにメフィストは、右腕の『メフィストクロー』を展開し、メビウスに叩き込む。

クローの一撃を腹部に受けたメビウスの体が吹っ飛んだ。巨体に潰された機械類が、玩具のように粉々になる。

『五月蝿い虫ケラ共がっ！死ねいっ！』

砲撃を続ける武装局員達に、メフィストは繰り出した右腕から、

紫色の破壊光線を放つ。『ダークレイ・ジュビローム』！

局員達の砲撃魔法を豆鉄砲のように蹴散らし、破壊光線が迫る。防御魔法などで防げる代物ではなかった。

パニックを起こし逃げ惑う局員達。その時銀色の巨体がその前に盾となって立ち塞がった。

『させるかっ！』

破壊光線が盾となったメビウスの体に炸裂する。とっさに光の盾『メビウス・ディフェンスサークル』を張り巡らすが、間に合わずメビウスの体にもダメージが及ぶ。

『ウゥッ…』

メビウスの体から白煙が上がり、ガクリと膝を着いてしまった。胸の『カラータイマー』が赤く点滅を始める。

『フハハハッ！愚かな奴よ！』

メフィストはうずくまるメビウスを見下ろし嘲笑った。クロノはその様子を歯噛みして見上げ、

「やっぱり被害が出るから、本局の中で思うように戦えないんだ！

ユーノこうなれば僕達だけでもやろう！君はバインドでメフィストの動きを一時的にでも抑えるんだ！」

「判った！」

クロノは砲撃魔法の態勢を整えながら、メビウスに念話を送る。

《聞こえるかい？今メフィストの目をこちらに逸らす。その隙に奴を外に！》

《判った。ありがとう！》

メビウスは頷くと、何時でも飛び出せるように体をバネのようにたわめた。

クロノは魔力を集中させた。青い魔法陣が足元に展開される。
それに合わせてユーノは、チェーンバインドをメフィストの足元目掛けて繰り出した。光の鎖が闇の巨人の足に絡み付く。

『虫ケラが…』

メフィストは一顧だにせず、チェーンバインドを引きちぎろうと

する。

「クロノそんなに保たない！早く！！」

悲鳴に近い声を上げるユーノ。クロノは砲撃魔法の照準を合わせる。

巨大な質量の巨人を怯ませるには、顔面を狙うのが一番だと判断する。

普通の攻撃では揺るぎもしまい。怪獣とは桁が違う。その時クロノの隣でも魔法光が輝いた。

「隊長！？」

見ると警備隊長以下の局員達が、一斉にメフィスト目掛けて砲撃魔法の態勢に入っていた。

「どうして…？」

唖然とするクロノに、隊長は仏頂面を僅かに緩め、

「アイツを信用した訳じゃない…だが奴が居なければ、さっきの攻撃で殆どの部下は死んでいただろう…借りは返す！」

「ありがとうございます。奴の顔面を狙って下さい！」

クロノは心強そうに頷き、砲撃魔法のチャージを終えた。

「スティンガーブレイド・エクスキューション！！」

「一斉射撃！撃てえいっ！！」

数種類の魔法光の束が、纏めてメフィストの顔面に炸裂した。

『グッ！？』

バインドを外そうとしていたメフィストは、完全に虚を突かれた形になった。

大してダメージは無いようだが、メビウスにはその隙で充分であった。

『セアアアッ！！』

メビウスはバネ仕掛けのように、素早く立ち上がると、猛然とメフィストに突っ込んだ。

『ウオオオッ！？』

メビウスの体当たりを受け、メフィストの巨体が吹き飛び、ぶち当たったゲートの扉が、２体の巨人の質量に耐え切れず弾け飛んだ。

そのまま２体の巨人は次元の海に投げ出される。しかし直ぐに態勢を立て直したメフィストは、本局の外壁に降り立った。

『虫ケラ共が…許さんぞ！！』

怒り狂うメフィストは、同じく外壁に降り立ったメビウスを闇色の目で睨み付けた。

右腕のメフィストクローが、ジャキリと再び展開される。

メビウスも左腕の『メビウスブレス』から光の剣『メビュームブレード』を形成し身構えた。

『ヌオオオッ！！』

『セアッ！』

２体の巨人は同時に飛び出した。メビュームブレードとメフィストクローがぶつかり合い、火花を散らす。

目にも留まらぬ超高速の剣劇だ。しかしメビウスの変身リミットはあまり残されていない。カラータイマーの点滅が激しくなって行く。

メフィストは勝利を確信していた。このウルトラマンは自分と互角のようだ。ならば実質エネルギー切れが殆ど無いこちらが勝つ。

だがメビウスは怯まず、ブレードでクローを弾き返すと、強烈なパンチをメフィストの顔面に叩き込んだ。

『おのれえええっ！』

顔面に一撃を食らい、怯んだメフィストが怨叉の声を上げた時、メビウスの巨体が宙に舞い上がった。急降下の勢いを利用したキック。

『そんなものが通じるかあっ！！』

メフィストは闇色の光の盾を展開し迎え撃つ。メビウスのキックと盾がぶつかり合いスパークが走った。

闇の巨人の防御は堅い。メビウスが押されている。だが！

『何ぃっ！？』

メビウスの体が、独楽の如く高速回転を始めた。回転のエネルギーでキックに更なる力が上乗せされる。

『メビウススピンキック』光線技の効かない『リフレクト星人』を倒す為に生み出した必殺キックだ。

『セアアアッ！！』

裂帛の気合いと共に、高速回転するメビウスの体が燃え盛る炎と化し、メフィストの防御を打ち砕いた。

とっさにかわしたメフィストだが、肩口に食らってしまう。肩がキックで抉られていた。

しかしメフィストは物ともせず、両腕を上げ光線技の態勢に入る。いかれた筈の右肩が、メリメリと嫌な音を立てた。痛みを感じていないのだ。

『外したな…？ならば今度はこちらの番！？』

メフィストの台詞が途中で途切れた。何故なら、外壁に降り立ったメビウスの体が、スピンキックの炎に包まれ、変化を起こしていたからである。

胸と背中に、金色のファイヤーシンボルが描かれたその姿。『バーニングブレイブ』だ。全ての能力が強化された、パワーアップ形態である。

メビウスブレスから発生した炎が胸部に集中して行く。一瞬怯ん

だメフィストも『ダークレイ・シュトローム』の態勢で迎え撃つ。

お互いのエネルギーが頂点に達する。一瞬早く、紫の光の奔流が放たれた。ダークレイ・シュトロームがメビウスを襲う。

メビウスは動かず、作り出した巨大な火球をダークレイ・シュトロームに真っ向から放った。必殺の『メビュームバースト』！

『セアッ！！』

巨大な火球が凄まじい勢いで飛ぶ。紫色の奔流を桁違いのパワーで押し返し、メフィストに炸裂した。

『ぐわあああああああっ！！』

メフィストの絶叫が上がる。メビュームバーストの余波で本局が揺らぎ、外壁の一部が高熱で融解した。

必殺光線を受けた闇の巨人は、白煙を上げ轟音を立てて外壁に崩れ落ちた。仰向けに倒れ、ピクリとも動かない。

（倒したのか…？）

メビウスは油断無くメフィストの様子を窺うが、立ち上がる気配は無い。

その様子を同じく外に出て来たクロノとユーノ、武装局員達が見

ていた。凄まじいエネルギー同士のぶつかり合いに、とても近付けなかったのだ。

ホッとその場に居た全員が気を抜いた瞬間だった。

倒れていたメフィストが突然起き上がり、最後の力を振り絞って、超スピードでクロノ達の方向に飛んだ。

『しまった!?』

メビウスが気付いた時にはもう遅い。メフィストは両手にクロノとユーノをガッチリと捕まえていた。

「うわあっ!?」

「はっ離せえっ!!」

絶叫する2人をメビウスの前に晒し、ボロボロのメフィストは苦しげに笑う。最早メビウスと戦う力は残っていないのだろう。

『フフフ…貴様のような甘ちゃんには…手が出せまい…』

『クッ、卑怯なっ!』

メビウスは悔しそうに拳を握り締める。カラータイマーの点滅が速い。残された時間はもう僅かだ。

『このまま本局をぶっ飛ばしてやる！！』

『何だって！？』

驚くメビウスを尻目に、メフィストの体に、異様な程のエネルギーが集中して行く。残りのエネルギーを１ヶ所に集めて自爆する気だ。

『もう遅い！今の俺は爆弾と一緒だ！『ダークフィールド』を形成する異相の反転を利用した、空間破砕爆弾！この位置からでも本局を半壊させられよう！！』

最悪の事態であった。迂闊に動けないメビウスをせせら笑い、メフィストは両手に力を込める。用済みとばかりに、２人を殺すつもりだ。

『止めろおおっ！！』

メビウスは一気に飛び出した。賭けに出たのである。自爆される前にクロノ達を助け、メフィストを本局から遠くに吹き飛ばすしか手は無い。

『遅いっ！！』

だが非情にもメフィストは両手に力を入れようとする。少し力を入れるだけで、2人はぐしゃぐしゃに潰れてしまうだろう。

（子供の体は脆い…）

メフィストがそう思った時、不意に体の動きが止まった。

『子供……？』

メフィストは呟くと、握り潰そうとしている少年達の苦しそうな表情を見た。その瞬間びくりとしたように体が動く。

『ウワアアアアアアアアアアアッ！！』

メフィストが叫えた。それは最早凶悪なものでは無い。絶望に満たされた慟哭だった。

メフィストの急変に、唖然とするメビウスだが、メフィストはメビウスに向き直ると、黙って2人を差し出した。

メビウスは戸惑いながらもクロノとユーノを受け取る。2人共怪我は無いようで、不思議そうにメフィストを見上げていた。

『何故…？』

メビウスの問いにメフィストは混沌とした次元の海を見上げ、

『…思い出した…俺にも…子供が居た…生まれたばかりの男の子……』

メフィストは愛おしそうに両手を握り締めた。既に居ない者をかき抱くように…

『君は…人間だったのか……？』

メビウスの痛ましげな質問にメフィストは頷き視線を落とすと、

『俺達は『冥王』の道具…妻も…息子も逝ってしまったか……』

胸が潰れそうな哀しみの込められた言葉であった。メフィストはメビウスを改めて見ると、

『早く…ウルトラマンゼロの元に向かうんだ…俺の使命は最低でもお前を此処に足止めする事だった…『冥王』の好きにさせてはいけない…俺達家族の…敵を…討ってくれ…』

血を吐くような言葉…それは遺言だった。メフィストは頭を下げると、フワリと空に舞い上がった。メビウスはメフィストを見上げ、

『どうする気なんだ…？』

『俺の自爆は、もう止められん…出来る限り此処から離れる…』

そう言い残すと、次の瞬間音速を超え、猛スピードで本局から離れて行く。

クロノにはその背中が、死んだ父親と重なって見えた。

メビウスは黙ってその後ろ姿を見送る。その姿が見えなくなる程小さくなった頃、次元の海に強烈な光が輝いた。

次の瞬間、凄まじい爆発が巻き起こる。爆発は急速に拡大し、次元の海を閃光で照らし出した。

爆発の衝撃は、巨大な本局をも揺るがせる。あのまま自爆していたら、多くの人々が死んでいただろう。

ダークメフィスト…名も知らぬ男は最期は人として散った…

メフィストの最期の行動に、局員達は隊長以下無意識に敬礼を捧げていた。

メビウスは願った。彼が無事、妻と子供の元に辿り着けるようにと……

ゼロと孤門は賑やかな喧騒の中、静かに対峙していた。張り詰めた緊張感が漂う。

暫く無言で睨み合う2人だったが、ゼロがフッと表情を緩め先に口を開いた。

「俺は…抵抗はしない…殺してえなら好きにしろ…」

笑みさえ浮かべてそう言った。孤門は訝しげな顔をし、

「いい覚悟だな…何が目的だ…？」

「俺の命はくれてやる…だから『闇の書』の情報をこちらに渡してくれ、頼む！』

ゼロは深々と頭を下げていた。土下座せんばかりの勢いだ。既に覚悟は出来ている。

孤門は無言で頭を下げたままのゼロを見つめた。何か考えているようだが…

「判った…」

孤門は頷くとゼロの肩に静かに手を置いた。ゼロはガバッと顔を上げ、

「恩に着る…」

と礼を言おうとした時、突然シグナムからの念話が頭の中に響いた。

《済まんゼロ…緊急事態だ…！主はやての事が、管理局魔導師の２

人にバレた！≫

「何だと！？」

ゼロは予期せぬ事態に思わず叫んでいた。

つづく

第５６話　無限大ー メビウス ー（後書き）

何故か男祭りの今回でした。女性キャラで出たのはエイミィとリンディのみ、しかも少しだけ。
まあ偶にはこんな話もと言う事で。
隊長は後で再登場するかもしれません。

それでは次回クリスマスイブの決戦編でお会いしましょう。

第５７話　欠片ー カヒィンー （前書き）

読んで頂きありがとうございます。クリスマスイブ決戦、第５７話始まりです。

第57話　欠片ー カヒィンー

12月24日　PM4：25　海鳴大学病院

「はやて…ごめんね、あんまり会いに来れなくて…」

柔らかい夕日が射し込む病室で、ヴィータはベッドから身を起こしたはやての顔を見上げ、申し訳無さそうに謝った。
はやてはニッコリと笑顔を浮かべ、

「ううん…元気やったか？」

と優しくヴィータの頭を撫でてやる。ヴィータは猫のように喉を鳴らしそうな顔をし、

「めちゃめちゃ元気っ」

満面の笑みを浮かべる。そのやり取りをシグナムとシャマルは、微笑ましそうに眺めていた。
ザフィーラは警戒の為、海鳴市周辺を見回りに出ている。

『闇の書』の『蒐集』はほぼ完了していた。後はほんの数頁分の魔力があれば完成だ。

直ぐでも完成させなければならない場合は、シグナム達の『リンカーコア』から少しずつ魔力を出し合えば、完成させられる状態である。

「ゼロ兄は…？」

はやてはゼロの姿が無いので尋ねてみた時、遠慮がちにドアをコンコンとノックする音が聞こえた。

「こんちは…」

すずかの声だ。シグナムとシャマルはハッとした。他にも数人の気配がする。まさか…と2人は思った。

はやてはすずかの声に嬉しそうに、

「あっ、すずかちゃんや、はいっどうぞーっ」

「「「「こんちはーっ」」」」

数人の声と共に、ドアがゆっくりと開かれた。

「あっ…！」

振り向いたヴィータの表情が険しくなる。次々と病室に少女達が入って来た。

「あっ、今日はゼロさん以外、皆さんお揃いですか？」

「こんちは、初めまして」

すずかとアリサが屈託ない様子で、部屋に入るとシグナム達に挨拶をする。

「あっ…！」

続いて病室に足を踏み入れたなのはは、ヴィータ達の姿を認め思わず声を洩らした。

同じくフェイトもシグナムの姿を認め、固まってしまう。間違えようが無い。

シグナムは身を乗り出し、今にも掴み掛からん勢いで、フェイトとなのはを睨み付けた。

シャマルは事態の急変にオロオロして、シグナムにチラチラと視線を送るしか無い。

落日の淡い光が照らす病室に、ピンと張り詰めた空気が流れた。

はやては困惑して、シグナム達とフェイト達を交互に見回すしか無い。

バッタリ顔を逢わせたシグナム達が、必要以上警戒してしまった

のかと思ったのだ。

「あ…済みません、お邪魔でした…？」

不穏な空気に、都合の悪い時に来てしまったのでは、と思ったアリサが聞いて来た。

シグナムは此処で事を荒立てるのは、得策では無いと判断し、

「あ…いえ…」

と何でも無い風を装い返事をしておく。シャマルも合わせてとっさに笑顔を浮かべ、

「いらっしゃい、皆さん…」

「何だ、良かった…」

すずかはホッとした様子だ。フェイトとなのはは唖然としてシグナム達を見つめている。

シグナム達が平静を保ったのを見て、はやてはホッとしてすずか達に、

「ところで、みんな今日はどないしたん？」

すずかとアリサはニッコリと笑うと、キョトンとするはやての前で、抱えていた物に被せていたコートを一斉に外す。

「「サプライズプレゼント」」

笑顔で一抱えは有る、リボンを掛けた箱を差し出した。

「うわあっ、あははっ」

はやては嬉しさのあまり頬を高揚させ、言葉にならない声を上げた。

「今日はイブだから…はやてちゃんに、クリスマスプレゼント」

すずかとアリサからプレゼントを受け取ったはやては、

「わああ～ホンマかあ～っ、ありがとうなあ」

感激してお礼を言う。本当に嬉しそうだった。友達からのクリスマスプレゼントなど、何年振りだろうとはやては思う。

微笑ましいやり取りを見ながらシグナムは、シャマルに目配せした。

察したシャマルは直ぐに『クラール・ヴィント』を密かに起動させる。

それに気付かないフェイトとなのはは、困惑して顔を見合わせた。まだ人生経験が少ない2人には、この状況はいささか厳しい。

そのなのは達を、ベッドの脇に座り込んでいるヴィータは、鬼気迫る目つきで睨み付けていた。

気まずい中、フェイトとなのはも表面上は何とか平静を装う。

コートを預かると言われたフェイトは、シグナムの後を付いてロッカーに向かう。コートを受け取るシグナムにフェイトは小声で、

「念話が使えない…通信妨害を…？」

「シャマルは、バックアップのエキスパートだ…この距離なら、造作もない…」

ハンガーにコートを掛けながら、シグナムは同じく小声で応える。既にシャマルがクラール・ヴィントで念話の妨害を行っていたのだ。

フェイトは状況に困惑して、いささか慌てていたのを自覚した。
そう…前とは状況が違うのだ。
フェイトは意を決してシグナムを見上げ、

「シグナム…あなた達の無実はほぼ証明されました…もう逃げる必要はありません…」

「それは本当か…？」

予想外の言葉に、さすがにシグナムは驚きの表情を浮かべた。

ヴィータは先程からずっとなのはを、噛み付かんばかりに睨み付けていた。さすがに耐えきれなくなったなのはは、

「…あの…そんなに睨まないで…」

「睨んでねーです。こういう目つきなんです」

ヴィータは、相変わらずなのはを睨み付けながら取り付く島もな

い。なのはがほとほと困り果てていると、

「ヴィータっ、嘘はアカンっ、悪い子はこうやで？」

はやてが聞き分けの無い妹を叱るように、ヴィータの鼻を摘んでたしなめた。

鼻を摘まれてうーうー唸って謝るヴィータを、なのははポカンとして見た。今までとのギャップが激しすぎる。

そんななのはにフェイトが近寄り耳打ちした。

「なのは…無実の事伝えたよ…判ってくれたみたい…」

「本当…？」

なのはの表情がみるみる明るくなった。それを認めたヴィータは鼻を押さえながら、不審そうな顔をした。

ーーーーーーーーーー

《おいっ、シグナムどういう事なんだ?》

予期せぬ事態にゼロは焦って状況を問い詰める。

《それがだな…主の見舞いに来たテスタロッサ達と鉢合わせしてしまったのだ…》

済まなそうなシグナムだが、一通りの状況を聞いたゼロも、自分の迂闊さを恥じた。

今日はクリスマスイブ、すずか達なら気を利かせてこういう事態になるのは予想出来た筈だった。だがシグナムは、

《それが悪い事ばかりでは無い…我らの無実が証明されたらしい…》

《本当かよ!?》

意外な言葉にゼロは勢い込んで尋ねていた。

《ああ…、本当らしい…そういう訳だ此方に戻れ、お前も交えて今後について話し合う…念の為通信妨害を継続するから一旦切るぞ、後は直接話す…》

そう言い残すと念話はプツンと切れた。ゼロは立て続けに起こった、予想外の出来事に頭がぐるぐるし掛けるが、確かに悪い事ばかりでは無いと思った。

（そうなると問題は…）

ゼロは目の前の孤門を見る。すると孤門は何もかも見通しているように、

「どうやら…『闇の書』の主、八神はやてちゃんと、フェイトちゃん達が鉢合わせしてしまったようだね…？」

「なっ！？」

ゼロは絶句してしまった。その言葉は明らかに此方の事を知っている者しか吐けない台詞だった。

「お前…何ではやての名前を知っている！？」

牙を剥かんばかりのゼロに、孤門は落ち着いて態度を崩さず、

「簡単な事さ…彼女は何年も前から、ずっとマークされていたんだ

…」

「何だと!?じゃあ俺の事も最初から知っていたって事か!?馬鹿な、監視の目なんか有ったら俺に判らない筈がっ!?」

ゼロは有り得ないと否定する。幾ら魔法と言えど、四六時中監視されていたならば、彼の超感覚や、守護騎士に感づかれる筈だ。

「勿論そんな事はしていない…魔力センサーによる観測のみだった。だから大ざっぱに『闇の書』の覚醒を察知出来る程度さ…」

「むう…」

孤門の言葉に納得はしたが、まだ腑に落ちない様子のゼロに孤門は、

「それともう一つ…『ギル・グレアム』という人物に心当たりがあるね…?」

ゼロは顔色を変えた。はやてから何度か聞いた名だ。
はやての父親の友人で、財産の管理をしてくれている人物。ゼロは感謝さえしていたくらいだ。

「グレアムの…おっちゃんが…？」

「そう…彼は『時空管理局』の提督だ…『闇の書』覚醒を待つ為に今まで援助を続けて来たんだ…彼女もろとも封印する為にね…！」

「そんな…おっちゃんが……？」

信じられない様子でゼロは顔を青ざめさせる。どんなに悪ぶっても根が善良な彼に、グレアムの裏切りは衝撃だった。

そんなゼロの内心を余所に孤門は話を続ける。

「僕は『ダークザギ』を追ってこの世界にやって来た…そこで色々と調べるには管理局に協力を頼むしかなかった…」

「思い切ったもんだな…」

ゼロは皮肉じみた感想を口にしていた。孤門は特に気にした風も無く苦笑し、

「仕方ないさ、切羽詰まっていたからね…そこで協力を申し出て来

たのがグレアム提督だった…そして色々と調べる内に、ザギが完全に復活する為に『闇の書』を狙っている事を察知した…」

話の核心が近付いたのを感じ、ゼロは息を呑む。孤門は少年を改めて見ると、

「だが…僕はそこで気付いてしまった…グレアム提督が、『闇の書』もろとも、八神はやてちゃんを凍結封印しようとしている事に…！」

「何故そんな回りくどい事をする！？」

ゼロは激興してゼロは怒鳴った。通行人が何事かと2人をジロジロ見るが、それどころでは無かった。

「『闇の書』の完全封印は完成直後の僅かな時間のみに可能だそうだ…だから今まで手出だしせずに、機会を待っていたんだろう…僕にも秘密にしてね…」

そこで孤門は視線を落としたが、顔を上げると険しい表情をし、

「勿論僕にはそんな事は納得出来ない！だから何とか裏をかいてやろうと、色々と動き回ったんだけど…おかしな事に気付いた」

「おかしな事…？」

不審そうに眉をしかめるゼロに孤門は頷いて、

「そう…グレアム提督は『闇の書』の封印などする気は無い…彼の目的は『闇の書』の力と、最強のウルトラマン…ゼロ君の力を使って完全復活を果たす事…！」

「ま…まさか…」

孤門の言葉の意味を理解したゼロの拳が、わなわなと震えた。

「全ては復活の為の布石…グレアム提督こそが『ダークザギ』だと僕は睨んでいる！」

「…！」

ゼロは今までの事を思い出し慄然とした。『ダークロプス』の襲撃から、はやての元に流れ着いたのも、全てザギの計略の内ではないかと思ったのだ。

沈黙して立ち尽くすゼロに孤門は、

「そういう訳だ…まずは僕達も病院に向かおう。提督…ザギが何か仕掛けて来るかもしれない…フェイトちゃん達も心配だ」

「解った…」

ゼロはコクリと頷き走り出した。孤門も後に続く。

どの道はやての事はバレている。少なくとも孤門はその事を他に漏らしてはいないのは間違いない。

漏らしていたら、とうの昔にはやての元に管理局員が現れている。

少し釈然としない部分も有ったが、今はみんなの事が気になる。

少なくとも孤門がはやてに危害を加える心配は無さそうだとゼロは判断した。

2人は通行人の間をぬって、海鳴大学病院に向け疾走した。

一方、同じく念話を受け取ったザフィーラも空を飛び、病院を目指していた。妙な胸騒ぎを感じながら…

ーーーーーーーーーー

冬の短い日は沈み、辺りはとっぷりと暗くなっていた。

身を切るような風が吹き付ける病院の屋上で、シグナム、ヴィータ、シャマルの3人は、フェイトとなのは2人と向かい合っていた。

「話を聞こう…ただし…主はやての事を今管理局に知らされては困る…問題が解決するまで、身柄を押さえさせて貰うが…？」

シグナムは静かに口を開き条件を出す。フェイトとなのはは頷き合うと、しっかりとシグナムの目を見て、

「それで戦わずに済むのなら…」

「私達は構いません…」

そのきっぱりとした返事に、シグナム達は内心胸を撫で下ろした。場合によっては、力付くで拘束しなければならなかったからだ。

出来ればそれはしたくないと思った。フェイトはシグナム達の態度が軟化したのを察し、

「シグナム…あなた達の偽物が確認されたのは間違い無いです。あなた達は誰1人襲っていない…そうですね…？」

「たりめーだ！アタシ達ははやての騎士だぞ。ゼロと約束したんだ、誰1人襲わないってな！」

ヴィータは当然と言わんばかりに堂々と言う。その返事にフェイトとなのはは、ホッとして顔を見合わせた。

「それで…そちらの掴んでいる『闇の書』の情報を聞かせて貰おう…」

質問して来るシグナムに、なのはは一歩前に踏み出し、

「駄目なんです！今のまま『闇の書』を完成させたら、はやてちゃんの命が…」

気張り過ぎたのか、上手く説明出来ないなのはに続きフェイトが、

「『闇の書』は悪意ある改変を受け壊れてしまっている…今の状態で完成させたら歴代のマスター同様はやての命が危ない…」

「やはり…そうだったか……」

呟いたシグナムは奥歯を噛み締め、沈痛な表情を浮かべる。ゼロ

の推測が当たっていたのだ。
覚悟していた事とは言え、やはり事実は厳しいものだった。
ゼロの話が無ければ、きっと信用したりはしなかっただろう。

「もう少しユーノ君達に調べて貰えば、はやてちゃんを助ける方法が解るかもしれません。だから少し時間を下さい」

なのはは深々と頭を下げた。フェイトも習って頭を下げる。
シグナムは頭を下げたままの2人をしばらくの間無言で見つめた後、

「判った…信用しよう…2人もいいな…？」

「こうなったらそれしか無いわね…」

「アタシは、はやてが助かるなら…」

シャマルもヴィータも頷いた。後はゼロとザフィーラにも了解を取ればいい。話は纏まったようだ。

フェイトとなのは良かったと息を吐いた。もう争う必要は無くなったのだ。
全員の張り詰めたものが解け、ホッとした空気が流れた。
はやての事をしばらく秘密にしてくれるという言葉も、信用出来

るとシグナムは思った。
何度もぶつかり合った者達の間に特有の、奇妙な信頼関係が芽生えつつあった。しかし…
「とっころが、世の中そう甘くは無いんだなあっ！」
不意に無邪気な調子の少女の声が辺りに響いた。
「！？」
「えっ！？」
少女の声と共に、フェイトとなのはに絡み付く光のロープ。拘束魔法バインドだ。
次の瞬間2人の足元に魔法陣が浮かび、その姿が光に包まれ消え失せてしまった。
何者かの転移魔法によって、何処かに跳ばされてしまったのだ。
「何者だ！？」
不意を突かれたシグナム達は、声のした方向に目を向ける。
其処には何時現れたのか、屋上にゆったりと立つ、デバイスを携

えた2人の少女の姿が有った。

「テスタロッサ！？」

「高町なんとか？」

シグナムとヴィータはその姿を見て声を上げた。その少女達は、フェイトとなのはに瓜二つだったからである。

しかし良く見てみると色々異なっていた。

2人共顔立ちや体型、バリアジャケットのデザインはフェイト達と全く同じだが、なのはに似た少女はバリアジャケットは暗い紫で、髪がショートカットだ。

フェイトに似た少女は、髪型こそフェイトと同じツインテールだが、髪の色が青くバリアジャケットの各部も青色である。

そして何より決定的に違うのは、2人共フェイトとなのはが決してしない表情を浮かべている事だった。

「聞いておどろけ！強いぞ！凄いぞ！かっこいーっ！雷刃の襲撃者『レヴィ・ザ・スラッシャー』とは僕の事さ！」

フェイトと瓜二つの少女は、やんちゃな笑みを浮かべて、『バル

ディッシュ』に酷似したデバイスを振り上げ高らかに名乗った。

「そちらのおチビさんとは二度目ですね…？『理』を司る『マテリアル』『シュテル・ザ・デストラクター』以後お見知り置きを…」

シュテルと名乗る少女は、ヴィータを冷たい眼差しで見やり、慇懃無礼という言葉のままに静かに頭を下げた。

その言葉使いに思い当たったヴィータはハッとして、

「お前っ！あの時の偽物か！？」

「その通りです…良くも見事に踊って頂けたものです…」

ニコリともしない、シュテルの冷徹極まりない言葉に、ヴィータは全身の血が逆流する程の怒りに襲われた。

「ふざけんなあああっ！！」

激興したヴィータは、弾丸の如く飛び出し『アイゼン』の一撃をシュテルに叩き込む。

シュテルはその場を動かず、前面に魔法障壁を張り巡らした。

アイゼンと、シュテルの防御魔法陣がぶつかり合い、火花が散る。

勢いを殺しきれなかったのか、シュテルンは後方に勢い良く跳ばされた。

しかし直ぐに空中で姿勢を整え、ふわりと屋上に降り立つ。ワザと跳ばされて、威力を殺したようだ。

ヴィータは瞳に憎しみさえ浮かべシュテルを睨み、

「何なんだよお前ら…？何で邪魔すんだよ…はやてが助かるのがそんなに気に喰わないってのか…？」

話している内に感情が激して来たヴィータの目から、一筋光るものが流れる。

寄ってたかってはやてを殺そうとしていると思うと、アイゼンを掴む手が怒りでカタカタと震えた。その身を真紅の騎士服が包む。

「誰にも迷惑を掛けないように、みんな必死でがんばって来たんだぞ…誤解も解けて、いい方に進んで…もう少しではやてを助けられるってのに……」

ヴィータの頭の中で今までの出来事が渦を巻いた。

八神はやての騎士として、恥じぬ行いをすると皆で誓った時の事。

身を削って綺麗事を貫かせてくれた不器用な少年の事。

シュテルはヴィータの想いを一顧だにせず、無機物でも見るよう

に紅い騎士を見据える。ヴィータには、その無表情な顔に嘲られた気がした。

「邪魔すんなあああああっ！！」

ヴィータは絶叫して『グラーフ・アイゼン』を振り上げる。アイゼンは彼女の激情のままに、勢い良くカートリッジを吐き出した。

次の瞬間、屋上の一部が爆発したように吹っ飛び、真っ赤な炎が燃え上がった。ヴィータ渾身の一撃がシュテルに撃ち込まれたのだ。

燃え盛る炎の前でヴィータは、怒りのあまり忘れていた呼吸を繰り返す。激した彼女は炎に包まれた一角を睨んだ。

コツコツと中から靴音がする。炎の中からゆっくりと無傷のシュテルが現れた。眉一つ動かさず平然としている。

「悪魔め…」

ヴィータは悔し涙で頬を濡らし、炎の中に立つ姿に憎しみの言葉を投げ掛ける。

「悪魔…そう…私達は、本物の悪魔でしょうね…」

シュテルは悪びれる様子も無く、ゆっくりとデバイス『ルシフェリオン』を優雅に掲げ、

「全てを血と怨叉の暗黒に…」

ヴィータを見つめるその冷たい瞳に、燐光の如き光が灯った。

「シャマル退がっていろ…！」

シグナムはレヴィと名乗る少女に『レヴァンティン』を起動させ刃を向けた。

「あの女の仲間か…？外道がっ！」

その目が怒りに染まる。さすがに冷静なシグナムも怒りを抑えられなかった。

その怒りに呼応するように、シグナムの体が炎に包まれ、騎士甲冑が装着された。足元に魔法陣が展開される。

「シグナム気を付けて！その子おかしいわ！」

シャマルも素早く騎士甲冑を纏い、油断無く後退った。

「へへーん、『力』のマテリアルの僕と『バルニフィカス』に勝てるかな！？」

言うが早いが、レヴィは楽しそうに笑いながら、シグナム目掛けて突進して来た。凄まじい速さだ。

飛び出すと同時にバルニフィカスが変形した電光の大鎌を振り下ろす。

シグナムはレヴァンティンで大鎌の一撃を受け止め弾き返した。

「わわわっ！？」

弾かれたレヴィは宙に跳ばされるが、楽しそうに宙で一回転すると、トンと屋上のフェンスの上に着地した。

シグナムは油断無くレヴィに対峙する。フェイトより遥かに重い一撃だった。

（コイツ、強い…！）

警戒するシグナムを見下ろすレヴィは、納得いかない様子で自分の体を眺め、

「やっぱり、このちんちくりんサイズだと打ち負けるよね～？」

そう呟くとその姿が突如として光を放った。

「目眩ましか！？」

身構えるシグナムの目前でレヴィの体が変化して行く。体型が早回しの映像のように、成人女性のそれに変わって行く。

「そーんなセコい真似、僕はしないぞ！」

一瞬でフェイトを１０年程成長させたような女性と化したレヴィは、マントをなびかせ、目にも留まらぬ速さでフェンスから飛び降りた。

凄まじい斬撃がシグナムを襲う。

レヴァンティンと、電光の刃が火花を上げて打ち合わされる。力

比べの形になった。

（ちいっ…！）

ぎりぎりとレヴァンティンに力を込めながら、シグナムは相手のパワーに舌打ちする。

初撃を受け止めた腕が痺れていた。先程とは桁違いだ。

レヴィと名乗る少女…女性は、楽しそうに笑ってバルニフィカスに力を込め、

「どうした？こっちのシグナムは、この程度かい？そんなんじゃ僕には勝てないぞ！」

「舐めるな！紛い物があっ！！」

シグナムは一気にデバイスを跳ね退け、レヴィのがら空きになった脇腹に、痛烈な回し蹴りを叩き込む。

「遅いっ！」

しかしレヴィは蹴りをフワリと側転宙返りでかわし、電光の刃を逆に打ち込んで来た。

シグナムも負けじと体をかわして斬撃を避け、その反動でレヴァ

ンティンを横殴りに叩き付ける。

レヴィは楽しそうに笑みを浮かべながら攻撃を弾く。剣舞の如く2人は激突した。

「この野郎ぉぉおっ！！」

ヴィータはアイゼンの一撃をシュテルに叩き込む。しかし強固な魔法障壁に阻まれ、攻撃が届かない。

一旦距離を取ったヴィータだが、シュテルは隙を与えず、朱色の魔力弾を次々と放つ。

「うわああっ！！」

ヴィータはとっさに魔力障壁を張り巡らせるが、魔力弾に易々と打ち砕かれてしまった。魔力弾が次々と爆発する。

「この程度ですか…？燃え足りませんね…」

爆煙の中、シュテルの冷徹な声が響く。

（コイツ…高町なんとかより、ずっと強えっ！？）

爆煙を目眩ましに、辛うじて魔力弾の攻撃を凌いだヴィータは、シュテルの戦闘能力に舌を巻くが、

（でも…こんな奴らに好きにさせてたまっかよっ！必ずぶっ潰してやる！）

ヴィータは改めて決意すると、爆煙を突っ切って急上昇する。頭上からアイゼンを叩き込む気だ。だが…

「うわっ！？」

突如としてヴィータの体が光のリングに捕らえられた。両腕ごとガッチリと拘束され、身動き出来なくなってしまう。

フェイト達を襲ったバインドと同じものだった。

「何っ！？」

「きゃあああっ！？」

ほぼ同時に、レヴィと打ち合っていたシグナムとシャマルは、同

じく光のリングにその身を拘束されていた。

シグナムはバインドを振り解こうと魔力を込めるが、魔法以外の力が働いているらしく、ビクともしない。

その時暗鬱な雲が広がる夜空に、何者かが不意に姿を現した。

「お前らは…！」

空中で身動き出来ないヴィータの目に映ったのは、白い仮面を被った2人の男達であった。

つづく

第57話　欠片ー カヒィンー（後書き）

レヴィが大きくなっても、バリアジャケットのデザインは9歳の時と一緒です。
何故なら大人フェイトが着ているバリアジャケットは制服っぽくてレヴィには似合わない気がするので。
大人であのデザインのバリアジャケットなので、かなりこっぱずかしい事になってると思いますが、阿呆の子なんで平気かと。

前に出たなのはの偽物はシュテルでした。言葉使いでバレバレだったとは思いますが。当然偉そうな6枚羽根はアレです。

それでは次回お会いしましょう。

第５８話　喪失ー モアニング ー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
最終決戦編第５８話をどうぞ。

第５８話　喪失ー モアニングー

辺りが暗くなる中、ゼロと孤門は海鳴大学病院目指し、人気の無い路地裏をひたすら駆けていた。
人間形態でも並外れた体力と身体能力を誇るゼロの疾走に、孤門も遅れずに着いて行く。

走るゼロの目に建物と建物の間から、病院が見えて来た。更に足を速めようとした時、何かを認めて２人は急停止していた。

「何だお前ら!?」

ゼロの目つきが険しくなる。人気の無い狭い路地裏を通せんぼするように、帽子を目深に被り、顔が見えない程大きなマスクを掛けた一団が立ち塞がっていた。

少なく見積もっても、数十人は居るようだ。掛けているマスクが、まるで中で虫でも這い回っているように、ぐねぐねと不気味に蠢く。

「気を付けろ、こいつら小型のビーストだ…」

孤門は注意を促しながら、懐から専用武器『ブラスト・ショット』を取り出す。人間サイズのビースト『バグバズン・ブルード』の群

れだった。

「退けえええっ！！」

怒鳴るが早いが、ゼロはブルードの群れに猛然と突っ込んでいた。
鋭い爪で襲い来る怪物達に、岩をも砕く正拳突きを纏めて叩き込む。

帽子とマスクが弾け飛び、昆虫のような異形の顔がグシャリと砕け、おぞましい体液を撒き散らしてブルード達は崩れ落ちた。

仲間がやられても怪物達は怯まず、ギチギチと異音を発しながらゼロと孤門に殺到する。

「避けるんだ！」

孤門は接近戦を挑んでいるゼロを避け、連続して真空衝撃波動弾をブルード達に叩き込む。
空を引き裂く衝撃波の弾を食らい、爆発四散するビースト。

群れの中ゼロは素早く離脱すると、『ウルトラゼロアイ』を取り出した。
ガンモードにしたゼロアイから破壊光線が放たれ、ブルード達が次々と砕け散る。

「貴様ら、其処を退きやがれえっ！！」

ゼロは焦りと憤りで獣の如く叫んでいた。

ーーーーーーーーーー

宙に浮遊し、捕らえられたヴィータ達を見下ろすのは、まったく同じ姿をした2人の仮面の男達であった。

1人が片腕を振ると『闇の書』が現れる。

「何時の間に！？」

驚くシャマル達に向かい、仮面の男は『闇の書』を開く。頁が紫色の光を放った。

「うあぁっ！うあああああああっ！！」

「うあっ…！うあっ！」

「ああっ！あああああっ！」

苦悶の声を上げるヴィータ、シグナム、シャマルの体からそれぞれ紅、紫、緑色の光球が抜き出された。彼女達の『リンカーコア』だ。

「最後の頁は…不要となった守護者自らが差し出す…これまでも幾たびか、お前達もそうだった筈だ…」

仮面の男の低い呟きの言葉と共に、『闇の書』から黒い力場のラインが3人に伸びた。

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ.》（蒐集）

『闇の書』の音声が響くと同時に、シャマルとシグナムの体が足元から光の粒子となって消滅して行く。

「あぁぁぁあああああああっ…！」

「うわあああああああぁぁ…！！」

悲痛な叫びだけを残し、シャマルとシグナムは呆気なく、本当に呆気なく跡形も無く消滅してしまった。

パサリと2人が着ていた服だけがコンクリートの床に落ち、空っぽの中身を虚しく夜気に晒した。

「シャマルっ！シグナムぅぅッ！！何なんだ…何なんだよ、てめえらっ！！」

1人残ったヴィータは身動き出来ないまま、仮面の男達に食ってかかるが、強烈な痛みが彼女を襲った。

彼女の体も光の粒子となって消滅して行く。

「いずれ判る…感謝するがいい…お前達を…」

「でやあああああああっ！！」

言い掛けた仮面の男の上空から、ザフィーラが猛スピードで一直線に降下し、拳の一撃を繰り出した。

しかし仮面の男はザフィーラを見もせずに、魔法障壁を張り巡らす。障壁にぶち当たったザフィーラの拳が弾かれ、鮮血が飛び散った。

「お前が最後だ…」

仮面の男が呟くと同時に、ザフィーラの体からも光るリンカーコアが抜き出された。苦悶の声を上げるザフィーラ。

「奪え…！」

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ.》（蒐集）

『闇の書』が蒐集を開始する。ザフィーラは激痛に耐えて拳を握り締め、最後の力を振り絞った。

「でやりゃあああああああっ！！」

ザフィーラの渾身の力を込めた拳が障壁をガラスのように打ち砕き、仮面の男の顔面に炸裂した。

しかしその一撃は僅かに仮面を掠っただけであった。白い仮面が宙を舞う。

「お…お前は！？」

ザフィーラの目が驚愕で見開かれる。仮面の下から現れた顔はザフィーラ本人のものであった。

「はっ…？」

病室のはやては異様な気配を感じ、ハッと身じろぎした。体の奥底でくすぶっている何かが、ムクリと頭をもたげた気がした。

「ゼロ兄っ！？」

はやては思わず悲鳴を上げていた。彼女の周りを光る魔法陣が取り囲んでいた。

屋上の宙にヴィータは磔状態で拘束され、グッタリと意識を失っていた。
ザフィーラも屋上の床に意識を失って転がされている。仮面の男達の姿はもう無い。

「最後の仕上げだね？」

レヴィは自らの姿を子供のフェイトに変え、コロコロと楽しそうに笑う。
状況が状況なだけに、その異様なまでの明るさは却って不気味だった。
そんな彼女とは対照的なシュテルは、冷たい眼差しで空を見上げ、

「…此方の世界のオリジナル達は大丈夫でしょうね…？」

其処には球体状のエネルギー障壁に捕われた、フェイトとなのはが懸命に脱出しようともがいていた。

「ええと…マグネ何とかエネルギーのバリアーと…魔法の複合バリアーだから…後数分は大丈夫だよっ」

つっかえながらもレヴィは自慢げに胸を張る。

「では…仕上げを…」

シュテルも自らをなのはの姿に変えると片手を掲げた。

「はやてぇっ!!」

バグバズンブルードの群れを蹴散らしたゼロと孤門は、はやての病室に駆け込んだ。

しかし既にはやての姿は何処にも無い。たった今まで誰かが寝ていたように、ベッドが乱れていた。

「はやて、何処に行ったんだ!?みんなあっ!!」

取り乱して叫ぶゼロを余所に、孤門は冷静にベッドのシーツに手を当て、

「温かい…たった今まで此処に居たんだ…」

「クソォッ！一体何処に！？」

焦ってそこら中をキョロキョロ見回していたゼロの超感覚に、引っ掛かるものがあった。

「この感じは結界か？誰かが結界をこの辺り一帯に張り巡らしやがった！」

辺りが通常空間とずれた、異相空間へと入れ替わって行く。そんな中ゼロは、微かなはやての声を聞きつけた。

「上だ！一番上にはやてが居る！」

言うが早いが、ゼロは病室を飛び出し階段に向かう。孤門も後に続いて駆け出した。

「あ…？」

妙な感覚の中はやては、冷たい夜気を感じて顔を上げた。屋上に転移魔法で運ばれてしまったようだ。

困惑して辺りを見回すはやての目に映ったものは、宙に磔にされてグッタリしているヴィータに、倒れ伏して動かないザフィーラ。それに宙に浮き、冷たい目ではやてを見下ろしている、なのはとフェイトの姿だった。

「なのはちゃん…フェイトちゃん…？何なん…何なんこれ！？」

はやては尋常ではない状況にオロオロするしか無い。そんな彼女をシュテル…なのはは無表情で冷たく見据え、

「これは…通過儀礼なんだよ…マスターを楽しませる為の…」

「結局君は助からないんだけどね」

フェイトは悪戯っぽくニヤリと笑う。はやては2人の豹変に声も

出ない。
普段の彼女であったなら、違和感に気付いたかもしれないが、今のはやてにそんな余裕は無かった。
今の彼女にはそんな事より大事な事が有った。

「ヴィータを放して…ザフィーラに何したん…？」

ヴィータ達に駆け寄る事も出来ないはやては、なのは達に問うしか無い。動かない脚が今程忌々しいと感じた事は無かった。
なのはは嘲笑うように、

「この子達ね…もう壊れちゃってるの…私達がこうする前から…」

「とっくの昔に壊された『闇の書』の機能がまだ使えると思い込んで、無理…無駄な努力を続けてたんだ…」

「無駄って何や！シグナムは？シャマルは？」

なのはとフェイトの嘲るような物言いに、はやては思わず叫んでいた。
何が何だか解らなかったが、ヴィータ達の必死の努力を嘲笑っているのだけは判った。そして姿が見えない2人の行方。

なのはゆっくりと、はやての後ろを指差す。恐る恐る振り向いた彼女の目に、シグナムとシャマルの服だけが夜風に揺れているのが映った。

まるで中身だけ消え去ってしまったかのような…

「！」

察したはやての瞳が驚愕で見開かれた。２人の末路に茫然と固まるはやてに、なのはデバイスを振り上げ、

「壊れた機械は…役に立たないよね…？」

「だから、壊しちゃお」

フェイトもデバイスを掲げて笑う。２人が何をしようとしているのかは明白だった。

「駄目！止めてええっ！！」

はやては必死で叫んでいた。大事な家族が消えて行く。大事に幸せにしてあげなければならない、悲しい目にばかり遭って来たみんなが。

シグナムもシャマルも消えてしまった。今またヴィータとザフィーラが消されようとしている。涙が溢れていた。
必死で手を伸ばし、動かない脚を引きずって前に進もうとする。しかし悲しい程に不自由な体は遅々として前に進まなかった。

「止めて欲しかったら…」

「力付くで止めてみな」

なのはとフェイトはゆっくりと、それぞれのデバイスをヴィータとザフィーラに向けた。

「何で…何でやねん？何でこんなああっ！？」

はやてはずるずると脚を引きずりながら、なのは達に向かって叫ぶ。しかし2人のデバイスは容赦なく振り上げられた。

「駄目！止めてえっ！止めてえええええええっ！！」

はやての悲痛な叫びが響くと同時に、勢い良く屋上の扉が開かれた。

「みんなあっ！！」

階段を駆け上がって来たゼロが飛び出して来た。
だが時既に遅く、デバイスがヴィータとザフィーラに無慈悲に振り下ろされた。
轟音と鋭い閃光が走り、はやてとゼロの目の前でヴィータとザフィーラは声も無く、光の粒子になって消滅した。

「ヴィータ…ザフィーラ…シグナムにシャマルまで…」

近くで床に投げ出された、シグナムとシャマルの服を認めたゼロは、茫然と立ち尽くした。
みんなが全員消えたとは信じられなかった。いや…信じたくなかった。だが現実は無慈悲に少年に事実を突き付ける。

（またか…またなのか！？また俺は大事な者を守れなかったのか！？）

ゼロの中で何かがブツンと切れた。凄まじい怒りが業火となって燃え上がった。

「貴様らあああああっ！ぶっ殺してやる！！」

憎しみを込めてシュテル達が化けたなのは達を睨んだ。ゼロの超感覚には、目前の2人が人間で無い、本人達で無い事は判っていた。

怒りのままに『ウルトラゼロアイ』を取り出そうと内ポケットに手を入れた時、はやての叫びが耳に届いた。

「ゼロ兄ぃっ！みんなが、みんながあ！！」

「はやてぇっ！」

ゼロは反射的にはやてに駆け寄っていた。

涙で顔をくしゃくしゃにした少女を抱き上げようと手を伸ばした時、ゾブリッと、刃物が肉の塊を突き刺すような嫌な音がした。

「えっ…？」

はやては唖然として、手を伸ばして来たゼロを見上げた。ゼロの胸から光る剣の切っ先が生えていた。

ゼロは訳が判らないといった表情で、不思議そうに胸から生えているものを見ると、壊れた人形のように後ろを振り返った。その目に映ったものは…

「貴様…っ？」

背後に立ちゼロを『シュトローム・ソード』で貫いているのは『ウルトラマンネクサス』であった。
ネクサスはその青い体を返り血で朱に染め、

『済まない……』

それだけを沈痛な様子で呟き、シュトローム・ソードを一気に引き抜くと、屋上から飛び降り姿を消した。

「がふっ…！」

ソードを引き抜かれたゼロの胸から、大量の血が噴水のように噴き出し、吐血した血がはやての顔を濡らした。

ゼロは壊れた人形のように、彼女の目前に崩れ落ちた。

「いやあああああっ！ゼロ兄ぃぃぃぃっ！！」

はやてはビクビクと痙攣を繰り返すゼロに泣きながら這いよった。
寝巻きが血で染まるのも構わず、うつ伏せのゼロを仰向けに抱き寄せる。
貫かれた胸から大量の血が流れ出し、少女の足元に血溜まりを作

っていた。

はやては必死でゼロの胸の血を止めようと傷口を押さえるが、血液の流出は止まらない。

「止まらへん…！ゼロ兄ぃ、ゼロ兄ぃっ！しっかりして、しっかりしてや！」

はやては痙攣するゼロに泣きながら力一杯しがみついた。喪われ行くものを、必死で繋ぎ留めようとするかのように。

だが少女の願いも虚しく血は流れ続け、痙攣も徐々に弱くなって行く。

「嫌やゼロ兄…」

はやては駄々をこねる子供のように首を振った。ゼロの血塗れの顔にポタポタと涙が零れ落ち、血糊を僅かに洗い落とす。

「ゼロ兄ぃ…言ったやないか…私が死ぬ時までずっと、傍に居るって！」

はやてははゼロの血塗れの顔を押さえて叫んだ。しかし願いも虚しく、虚空を見つめる目が閉じて行き、痙攣が止まった。

ゼロはそのままピクリとも動かなくなった。はやてはいやいやと首を振る。

「冗談はアカン…ゼロ兄は不死身のウルトラマンゼロやないか…死ぬ訳が無いんや…せやろ?ゼロ兄…!?」

彼女は涙で濡れた顔に、無理矢理笑みを浮かべながら、動かないゼロをしきりに揺すり呼び掛ける。

血糊でズルリと少年の体がはやての手から滑り落ち、首がゴトリとコンクリートの床に落ちた。

それでもゼロは動かない。まるで命の無い人形のように…

「いやあああああああああっ!!」

その光景を見た瞬間、少女の身を引き裂くような絶望が包んだ。

涙腺が決壊したかのように、止めども無い涙が頬を濡らした。

みんないなくなった

ぜろ　にいはころされてしまった

わたしのだいじなものはぜんぶな
くなってしまった

動かないゼロを抱えるはやての頭の中を、色々なものが飛び交いぐるぐると駆け巡った。
ゼロとの出会い、守護騎士達との出会い、様々な思い出が次々と浮かんでは消えて行った。

生まれてから一度も抱いた事の無い、どす黒い感情がムクムクと頭をもたげた。それに呼応し、彼女の中の何かが爆発的に増殖した。

血塗れのゼロを抱えるはやてを中心に、光る魔法陣が展開される。ベルカ独特の三角形の魔法陣。そして彼女の目前に『闇の書』が現れた。

《Ｇｕｔｅｎ　Ｍｏｒｇｅｎ，Ｍｅｉｓｔｅｒ，》（おはようございます、ご主人様）

はやてを中心に強大な力が辺りに満ち、『闇の書』の無機質な合成音声だけが響く。

その様子を見届けたシュテルとレヴィは、元の姿に戻ると忽然と姿を消した。

その頃ようやくバリアーを砕く事に成功したフェイトとなのはは、はやての元に向かおうとする。

ネクサスがゼロを刺した場面こそ、脱出に集中していた為見逃してはいたが、遠目でもシグナム達が謎の敵と戦って消滅した一部始終は見ていた。

「はやてちゃん！」

「はやて！えっ？ゼロさん！？」

そこでようやく2人は、はやてが血塗れで横たわるゼロを抱えて俯いているのに気付く。

2人の呼び掛けに、俯いてすすり泣いていたはやては顔を上げた。その見開かれた紅い瞳は、怒りと悲しみと絶望に満ちていた。

「うわあああああああああああああああああああああああああ！！」

肺腑を抉るような慟哭が、夜の闇に木霊し長く尾を引いた。
僅かな静寂の後に、爆発的な魔力が天高く放射された。天を突く闇色の光の柱の中心に、ゼロを抱き上げた全裸のはやてが浮かび上がっていた。

白い裸身を鮮血で染め、血塗れのゼロを抱える様は凄惨であった。

「我は『闇の書』の主なり…この手に力を…封印解放…」

《Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ.》（解放）

感情を失ったかのようなはやての命令に従い、『闇の書』から得体の知れない何かがムクムクと湧き上がった。

それに伴い、はやての体が成人女性の体つきに変化して行く。ショートカットの髪がザワザワと長く伸び、栗色の髪が星明かりを反射する銀髪と化す。

拘束具のようなベルトが全身を覆い、黒い騎士甲冑が身を包んだ。鮮血のような紅いラインが顔や手足に、浮き出るように刻まれる。

その姿は、はやてでは無かった。真紅の切れ長の瞳を見開き、漆黒の6枚羽根を化鳥（けちょう）の如く広げるその姿は、『管制人格』の女性の姿そのものであった。

フェイトとなのはは、その圧倒的な魔力の気配に息を呑む。桁違いの魔力であった。

「ああ…また全てが終わってしまった…一体幾たび、こんな悲しみを繰り返せばいい…？」

はやて…『闇の書』は静かに目を閉じ天を仰いで、哀しげに独白した。

「はやてちゃん！」

「はやて…」

なのはとフェイトの呼び掛けにも応える様子は無い。完全にはやては管制人格に乗っ取られているようだった。

その閉じた両眼からは、涙が流れ続けている。闇の書は腕の中で動かないゼロを見ると、

「我は闇の書…我が力の全ては…」

最後にゼロを抱き締めると、そっとその体を床に横たわらせた。

「お前でも駄目だったか…ならばせめて…主の願いのままに…」

《Ｄｉａｂｏｌｉｃ　ｅｍｉｓｓｉｏｎ》

広げられた書物の闇の書の合成音声が響くと同時に、高く掲げられた彼女の手のひらに、蒼い稲光に包まれた蒼い球が発生した。
球は瞬く間に巨大化し、直径十数メートルまで膨れ上がる。

「主よ…あなたの願いを叶えます…愛おしき守護者達を傷つけ…ゼロを主から永遠に奪った者達を…破壊します…」

闇の書は流れる涙をそのままに、攻撃目標を茫然とするフェイトとなのはに合わせた。

つづく

第５８話　喪失ー モアニング ー（後書き）

バグバズンブルードは、テレビ未放映のＤＶＤ収録、詩織ー ロストメモリーズ ー に出た人間大のビーストです。

多数で人間社会に紛れ込み、人間を捕食して栄養を蓄え、親にあたるバグバズングローラーに喰われる事で栄養源になるという働き蜂以下のビーストです。

特殊な機関を持ち、ビースト振動波を抑える事が出来る為、感知されにくい特色を持っています。
一匹は巨大化させられて、ネクサスと戦いました。

ちなみに住んでいる所では、シュタゲをやった次の日にウルトラマン列伝をやっているので、中の人繋がりでまとめて見ると、ゼロかっこつけちゃってと微笑ましくなります。

それでは次回お会いしましょう。誰特なあだると版もよろしくお願いします。（笑）

第５９話　諦めるな！ドォ・ノット・ギヴイット・アップ！（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
まだまだ暑い日が続きますが、体に気をつけて下さい。

それでは第５９話をどうぞ。

第59話　諦めるな―ドォ・ノット・ギヴイット・アップ―

フェイトとなのはの目前で、巨大な凶々しい球が膨れ上がった。

「デェアボリック…エミッション…」

闇の書の呟きと共に、巨大な球が上昇して行く。フェイトは息を呑んだ。

「空間攻撃…！」

「闇に…染まれ…」

闇の書の発する声と同時に、巨大な球が爆発的に拡大して行く。空間ごと相手を破砕する強力な魔法攻撃だ。

なのはとフェイトは防御魔法の盾を前面に展開させる。凄まじい衝撃が2人を襲った。

破砕空域は急速に拡大し、数百メートルの範囲を飲み込んだ。建物に被害は無いようだが、生物にはひとたまりも無い。

何者かにより、結界が張られていなければ、大惨事になっていただろう。破壊の球は更に拡大し、辺り一帯を飲み込んだ。

破砕空間が晴れた後、闇の書は暗鬱な空を見上げた。２人のズタズタになった死体は見当たらない。

（隠れたか…）

辺りをサーチする彼女は、今だに流れ続ける涙に気付きグイと涙を拭った。

その頃フェイトとなのはは間一髪で攻撃を逃れ、ビルの陰に潜んでいた。そこに異常を察知したアルフが駆け付けて来てくれた。

２人の無事を喜ぶアルフだが、その時闇の書を中心に、大規模な空間異常が辺りを包んだ。

「何！？」

空間異常にフェイトは声を上げた。アルフは直ぐ様周囲の状況を

サーチし、

「前と同じ、閉じ込める結界だ！」

「やっぱり、私達を狙ってるんだ…」

やはりはやては守護騎士達を消しゼロを傷付けたのは、自分達だと思い込んでいるとフェイトは思う。

（ゼロさん…大丈夫かな…？）

血塗れのゼロを思い出し、フェイトは不安感に襲われる。遠目で怪我の具合が良く判らなかったのが不安を煽った。

フェイトは頭を振って不吉な考えを振り払う。ウルトラマンゼロが死ぬ訳が無いと、自分に言い聞かせた。

こちらも危機的状況である。まずはこの状況を切り抜けなければ、助けにも行けない。

「こっちも不味い状況なんだよ…本局に出向いてるクロノやユーノとも連絡が取れないどころか、本局とも連絡が取れないんだ…さっぱり状況が掴めない…」

考えを巡らすフェイトに、アルフが今の状況を教えてくれた。
地上で彼女の帰りを待っていたアルフだけが、いち早く駆け付けて来る事が出来たのである。
フェイトは表情を引き締め、

「私達で何とかするしかないか…そういえば、孤門に連絡は？」

「それが…連絡が取れないんだよ…」

アルフは表情を曇らせる。こんな時、孤門が居れば頼りになるのにと恨めしく思った。
そんなやり取りを聞きながらなのは、闇の書の悲しそうな顔が頭から離れなかった。

誰一人逃がすまいと『封鎖領域』をほぼ街全体に張り巡らした闇の書は、ネクサスの反応こそ捉えられなかったが、フェイト達らしき魔力反応を捉えた。

「スレイプニール…羽ばたいて…」

《Ｓｌｅｐｎｉｒ》

闇の書の漆黒の羽根が一回り程大きさを増して、バサリと羽ばたき、その体を空に舞い上げる。
夜空を黒い怪鳥のような影が、獲物目掛けて隼の如く翔けた。

闇の書が飛び出した後、屋上に仰向けに寝かされたゼロの姿だけが、ポツンと残されていた。

血溜まりの中に目を閉じるその肌は血の気を失い、死人のそれに近い。

しばらくたった後だった。死んだと思われた少年の指が微かに動いた。

ーーーーーーーーーー

『ダークメフィスト』自爆の余波が収まった頃、『ウルトラマンメビウス』の巨大な姿は、跡形も無く消え失せていた。
クロノとユーノは辺りをキョロキョロ見回していると、物陰から2人を手招きする者が居る。人間形態を取ったミライであった。

他の武装局員達は、あんな巨大なものが人間になっているとは夢にも思ってもおらず、気にしている者は居ない。
走り寄った2人にミライは、

「ありがとう、みんなのお陰で此処を守れたよ」

「いや…此方こそ感謝します、あのままだったらどれほどの被害が出ていたか…」

頭を下げるミライにクロノも感謝の意を述べる。ユーノも頭を下げた。

「これからゼロ達の所へ向かうんだね?クロノ君、僕も連れて行ってくれないか?」

「分かりました…あなたを信用します、着いて来て下さい」

クロノはミライを促す。メビウスの行動に彼は信頼に足るものを

感じていた。３人は直ぐ様転移ポートに向かって走る。しかし…

「何だって!?」

転移ポートに着いたクロノは、空間モニターに向けて焦りの声を上げた。

管制オペレーターから、爆発の影響で本局周囲の空間が異常をきたし、余波が収まるまで転移ポートはおろか、通信まで使用不能だという事だった。

「一刻も早くみんなに合流しなければならないのに!」

「手は有るよ…」

歯噛みするクロノにミライは右腕の裾を捲り上げた。

「何か手が有るんですか?」

ミライは頷いて、右腕にはめているブレスレットを2人に示す。それはゼロの『ウルトラゼロ・ブレスレット』に似た形状のものであった。

「これは僕の故郷で開発された次元転移装置なんだ。試作品だけど、何とか跳べると思う…」

クロノとユーノはその小ささに、しげしげとブレスレットに注目する。

以前にメビウスが志願した実験とは、次元移動の実験であった。

ゼロの次元移動からヒントを得て開発された、次元移動用ブレスレットの試験運用が今回の目的だったのだ。

今まで次元移動技術を持った宇宙人がさほど居なかった事も有り、あまり重要視されていなかった技術である。

ゾフィーのように、単体で次元転移能力を持つ者も居た事もある。

しかし別世界からの『ベリアル銀河帝国』の『ダークロプス軍団』の大規模な襲来。

更にはサロメ星人の事件などから、必要性を痛感した『光の国』は、本腰を入れて次元転移技術の開発を進めていたのだ。

ゼロの時のように『光の国』の全エネルギーを使う力押しでの転移は効率が悪い為、別系統の技術を確立したのである。

実験に志願したメビウスは、その運用試験中にトラブルに遭い、ミッドチルダに緊急避難して来たという訳だ。

「敵は君達の次元転移装置を使わせない為に手を打ったんだろう…

でも僕達の転移装置は別系統だ、何とか行けると思う…でも試作品だから、保証は出来ない…」

幾分自信の無いミライの説明にクロノとユーノは、

「今は一刻も早くみんなの所に向かいたい…頼みます！」

「こんな所でぐずぐずしてられませんよ！」

即答であった。ミライは頷くと左腕をかざす。『メビウスブレス』が浮き出て来た。

ミライはふと右腕のブレスレットに目をやる。３つ付いているクリスタル部分が一つだけ発光していた。

（連続変身に…ブレスレットの予備エネルギーもこれが最後…向こうに着いてもどれだけ保つだろう…？）

次元転移のブレスレットは試作品の為３回しか使用出来ない。２回目は別の事にエネルギーを使ってしまった為、後一度しか使用出来ないのだ。

このままでは戦闘になり、巨大化出来たとしても１分と保つまい。

不利であったが仕方がない。ミライはトラックボールに手を掛けた。

（あれが届いていれば…！）

ミライはそう呟くとトラックボールを勢い良く回転させ叫んだ。

「メビウウゥゥス！！」

ミライの体は再び∞（無限大）の形の光に包まれた。

ーーーーーーーーーーーー

その頃フェイトとなのは、アルフは、追って来た闇の書と空中での激戦を繰り広げていた。

闇の書は、次々と繰り出される3人の攻撃を物ともしない。

アルフのバインドを易々と砕き、フェイトの新型砲撃魔法と、な

のはの新型バスターの同時攻撃をも、あっさり防がれてしまう。桁違いの魔力と戦闘力であった。

闇の書はフェイトとなのはの同時砲撃を片手で防ぎながら呟くように、

「刃を持って血に染まれ…穿て…ブラッディー・ダガー…」

彼女の体から無数の真紅の刃が繰り出される。その目にも留まらぬスピードに、3人は反応する事が出来ない。

刃は飛来すると同時に大爆発を起こす。誘導式の炸裂弾だ。なのは達は爆発に巻き込まれてしまった。

辛うじて直撃を免れた3人は爆煙を切り裂いて距離を取る。

闇の書にもそれは判っていたらしく、ゆっくりと右手を前面に翳し、

「咎人達に…滅びの光を…」

翳された手の前に桜色の円形をした魔法陣が展開された。

それに伴い、封鎖領域内に漂っていた魔力の残滓が、流れ星のように闇の書の前に収束されて行く。

「まさか…あれは!?」

アルフが顔色を変えた。なのはも目前で収束され膨れ上がって行く桜色の光球を見て、

「スターライト・ブレイカー！？」

その通りであった。闇の書の前面に膨大な魔力が収束されて行く。なのはのスターライト・ブレイカーであった。

それも本家を遥かに上回る魔力量だ。闇の書は蒐集した魔導師の魔法を全て使用する事が可能なのである。

しかもオリジナルを遥かに上回る威力で。

「アルフ！」

「はいよっ！」

危険を感じたフェイトはアルフに指示を出し、なのはを抱えると猛スピードで闇の書から離れた。

アルフも散会して最大スピードで離れる。

「フェイトちゃん、こんなに離れなくても…」

不思議そうななのはにフェイトは更に速度を速めながら、

「至近で食らったら防御の上からでも墜とされる。回避距離を取らなきゃ…！」

それだけのものをフェイトは感じていた。只でさえなのはのスターライト・ブレイカーは凄まじい威力を持っている。

そのオリジナルを遥かに上回る砲撃が迫っているのだ。少しでも距離を稼ぐ為、速度で上回るフェイトがなのはを抱えて飛んでいるが、それでも不安な程である。

なのはは不安げに後ろを振り返る。後方の桜色の光球は更に膨れ上がっていた。薄闇の中更に輝きを増して行く。

色の無い街をひたすら飛ぶフェイトのバルディッシュのコアが不意に光った。

《Ｓｉｒ，ｔｈｅｒｅ ａｒｅ ｎｏｎｃｏ ｍｂａｔａｎｔｓ ｏｎ ｔｈｅ ｌｆｔ ａｔ ｔｈｒｅｅ ｈｕｎｄｒｅｄ ｙａｒｄｓ．》（左方向３００ヤード、一般市民がいます）

「！？」

「えっ？」

フェイトとなのははは思いがけない事態に驚いた。

２人の左方向。色を失いゴーストタウンと化した街中で、戸惑って辺りを見回している、２人の少女の姿があった。

それは病院で別れた筈の、すずかとアリサだった。

ーーーーーーーーーーーー

「ゴボッ…」

生命活動を停止したと思われたゼロの口からむせるような音がした。

（…はや…て……）

ゼロは薄れ行く意識の中で少女の名を呼ぶ。彼はまだ生きていた。刺される瞬間僅かに身を捩り、心臓直撃を避けたのだ。

それでも『シュトロームソードはゼロに致命的な傷を与えていた。心臓は大きく裂けその機能の殆どは失われようとしている。

常人ならば既に死んでいてもおかしくはない重傷であった。ゼロの超人的な体力が辛うじて命を繋いでいる状態だ。

（ゼロ…アイを…）

消え入りそうな意識を振り絞ってゼロは、内ポケットの『ウルトラゼロアイ』を取り出そうとする。

ウルトラマン形態をとる事が出来れば、変身の際の体組織の変換で、ある程度の傷の修復が見込めるのだ。

完全な治癒は望めないだろうが、少なくとも死にかけの身から、復活する事は出来る筈であった。

だが変身出来なければ、人間の身のまま死んでしまうだろう。

ゼロは必死でコンクリートに投げ出された自分の右腕を動かそうとする。

胸の深手は既に何も感じない。それ程までに痛覚が麻痺していた。感覚が半ば死んでいるのだ。

それでもゼロは腕に力を込める。朦朧とする意識の中腕がピクリと動いた。だがそれだけの作業が酷く重労働に思える。

腕が重い。まるで鉛のようだった。既に致死量の血が失われている。呼吸もままならない。

顔色が真っ青になっていた。チアノーゼを起こしている。血が気管につまり、ゴヒュウ…ゴヒュウ…と壊れた笛のような音が鳴る。

それでもゼロは懸命に右腕をゆっくりと、もどかしい程ゆっくりと動かす。

今の彼を支えているのは救うという想いだけであった。

震える指がノロノロと、血塗れの内ポケットに差し込まれる。

硬い手触り。血で濡れたゼロアイを掴もうとする。

（クソッ…力が…）

血で指が滑った。

（このポンコツが…動け……）

言うことを聞かない体に悪態を着きながら、再びゼロアイを震える指で掴む。

（いいぞ…もう…少しだ……）

ようやくゼロアイを引っ張り出すと、服に引っ掛けて開こうとする。何度も失敗しながらも開く事に成功した。

（こ…これで……）

装着しようと持ち上げたところで、ゼロアイが無情にも指から滑り落ちた。乾いた音を立て、ゼロアイは血溜まりの床に落ちてしまう。

（…何…やってんだ……）

落ちたゼロアイに手を伸ばそうとする。しかし伸びた手が力無く床に落ちた。目が霞む。視界が暗くなって行く。

（…泣いて…るんだ……此処で死ぬ訳には……今度は…助ける……誰を……？…俺は……）

思考が纏まらない。抗い難い眠気と倦怠感が襲った。最早気力も尽きつつあった。

ゼロは黄泉路を転げ落ちる寸前だった。彼の体は今まさに生命活動を停止しようとしている。

（…は…や……て……）

少女の顔が遠くなった。意識が深い闇の中に堕ちて行く。ゼロの最後に残った僅かな意識は、暗黒の中に落下した。

《……¢…》

（……？）

消え行くゼロの意識に何かが引っかかった。

最初は雑音のようだった。何か別の電波に邪魔されて聞き取れな

いラジオのノイズのような…

誰かの声のようにも聞こえたが、何を言っているのか解らない。

《……§…き…》

しかしそれは邪魔する何かを潜り抜け、ほんの一瞬だが奇跡的にゼロの中で一つの意味有る言葉となって、頭の中に響き渡った。

《諦めるなあああっ！！》

力強い声であった。若い男性の声。

魂に響く声。怒り、憎しみ、悲しみ、絶望…色々なものを乗り越えて来た者だけが発せられる魂の激励であった。

その声は深遠に墜ちて行こうとしていた少年に差し伸べられた、力強い救い手のようだった。

ゼロは声の主が辿って来た道を垣間見た気がした。

そしてその言葉は息絶えようとしている少年に、最後の力を蘇ら

せた。

ゼロの閉じ掛けていた目がカッと見開かれる。

（俺は…死ねない…まだ死ぬ訳にはいかない…！）

投げ出された手に力が籠もる。その手がゼロアイをしっかりと掴んだ。

（はやて…！）

ウルトラゼロアイが両目に装着された。

「ウオオオオオッ！！」

眩いスパークに包まれたゼロは叫んだ。細胞が唸りを上げる。全細胞がＭ７８星雲人ウルトラマンゼロに置き換えられて行く。膨大なエネルギーが全身を駆け巡った。

六角の鋭い目に光が灯り、カラータイマーが光を放つ。頭部のスラッガーがその光をギラリと反射した。

『ヌウッ…！』

ウルトラマンゼロは両脚に力を込め、修羅の如く立ち上がった。
遠くで瞬く光が目に入る。戦闘が行われているのだ。

『はやて…』

ゼロは少女の名を呟くと飛び立とうとするが、苦しそうに胸を押さえた。

（クソッ…やっぱり完治は無理だったか…）

更に傷の修復で相当な量のエネルギーを消耗してしまっていた。
それでもゼロは拳を握り締めると、一気に光の方向目掛けて飛び上がった。

ーーーーーーーーーー

取り残されたらしい人影を求め、地上に降り立ったなのははは辺りを見回し、フェイトは信号機の上から辺りを見下ろしていた。
するとなのはの目に駆けて行く2人の姿が入る。

「あのうーっ、すいませーん、危ないですから、其処でじっとしてて下さいっ！」

声を掛けると2人はハッとした様子で此方を振り返った。すずかとアリサであった。

なのはとフェイトに気付いた2人は驚いた様子だが、闇の書は容赦なく4人が居る場所目掛けて、スターライト・ブレイカーを発射した。
凄まじい桜色の光の奔流が迫る。

《フェイトちゃん、アリサちゃん達を！》

《うん！》

フェイトはアリサとすずかにドーム型の防御魔法を施し、2人の前面に降り立つと更に自分の前に防御壁を形成した。

更にその前でなのはがレイジングハートを構え防御壁を張り巡らす。三重の防御でスターライト・ブレイカーからすずか達を守ろう

というのだ。

防御壁の展開を終えると同時に、怒涛の勢いで押し寄せる光の奔流が４人に襲い掛かった。凄まじい圧力の中、フェイトとなのはは懸命に攻撃を凌ぐ。

辛うじて攻撃を耐えきった２人の連絡を受け、エイミィがすずか達を別の場所に転移させる。

魔法陣が展開され、２人は町外れまで一旦転送された。

しかしまだ封鎖領域内から通常空間に転移させるには時間が掛かる。フェイトはアルフに２人の護衛を任せた。

「フェイトちゃん…どうしよう…？」

すずか達を安全圏に脱出させ、一息吐いたなのははフェイトを振り返った。

「呼び掛けてみよう…」

フェイトはなのはの隣に立ち空を見上げた。黒い影が向かって来るのが見える。

「そうだね…闇の書さんは、私達がヴィータちゃん達を酷い目に遭わせたと思っているから…」

なのははコクリと頷く。誤解を解くのが一番良い方法に思えた。

《大丈夫2人共?》

エイミィが心配して通信を送って来るがやるしかない。闇の書は此方に迫っている。

現在闇の書とやり合える魔導師はアースラには居ない。応援が来るかどうかも定かでは無い今、戦えるのはフェイトとなのはしか居ないのが現状だ。

上空に現れた闇の書に向かい、なのはは呼び掛けた。

《はやてちゃん、それに闇の書さん、止まって下さい!ヴィータちゃん達を傷つけたの私達じゃないんです!》

《シグナム達と私達は話し合いで…》

フェイトが続けようとするが、闇の書はそれを遮るように、

「我が主は…この世界が…自分の愛する者達を奪った世界が…悪い夢であって欲しいと願った…我は只…それを叶えるのみ…」

まるで聞く耳を持たないと言うように、淡々とはやての願いを語った。

「主には穏やかな夢の内で永久の眠りを…」

慈しむように胸に手を当てる。まるではやてが其処に居るとでも言うように…

「そして…愛する騎士達を奪い…ゼロを殺した者達には…永久の闇を…」

闇の書は紅い瞳を見開き手を翳す。彼女の足元に魔法陣が展開され、凶々しい闇の気配が濃くなった。

「闇の書さあん！」

なのはが叫ぶ。闇の書はひどく哀しげな瞳でなのはを見据え、

「お前も…その名で私を呼ぶのだな……」

なのはがその言葉に名状し難い哀しみを感じ取った時、突如として周りのアスファルトが次々と砕け、無数の奇怪な触手や蔦が這い出て来た。

蒐集された魔法生物達の力を利用したものだ。

触手が周囲の建物を目くら滅法に破壊し、蔦が蛇のようにフェイトとなのはを絡み取った。

「あっ！？」

「きゃああっ！」

四肢を拘束され、空中に巻き上げられた2人の体を蔦が絞め殺さんばかりの力で締め付ける。

闇の書はもがくフェイトとなのはを見下ろし、

「それでもいい…私は主の願いを叶えるだけだ…」

「願いを…叶えるだけ…？そんな願いを叶えて…それではやてちゃんは本当に喜ぶの！？言われたままに願いを叶えるだけであなたは本当にそれでいいの！？」

なのはは締め上げられながらも叫ぶ。言わずにはいられなかった。

「私は主の願いを叶える魔導書…只の…道具だ…」

そう言い切る彼女の両眼から再び涙が零れ落ちていた。

「だけど言葉を使えるでしょう!?心が有るでしょ!?そうでなきゃおかしいよ…本当に心が無いんなら…泣いたりなんかしないよ!!」

なのはは続けずにはいられない。闇の書に心が無いとは到底思えなかった。

その姿は深い悲しみに絶望している人間そのものだった。

「この涙は…主の涙…私は道具だ…悲しみなど…無い……」

滂沱の涙を流しながら、闇の書は静かに目を閉じる。

「ゼロさんが死ぬものかあっ！バリアジャケット、パージ！」

フェイトのバリアジャケットが弾け飛んだ。その衝撃波で2人を拘束していた蔦が切断される。
バリアジャケットに回していた分の魔力を炸薬のように使ったのだ。

フェイトは最小限の薄いボディースーツ状のバリアジャケットを残した、ソニックフォームを取った。

防御を捨て、極限までスピードに特化した、捨て身に近い形態である。
なのはも拘束から逃れ地面に降り立った。

「悲しみなど無い…？そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって、誰が信じるもんか！」

フェイトは叫ぶ。哭きながら攻撃して来る闇の書の姿は、とても物悲しく孤独に見えた。

「あなたにも心が有るんだよ、悲しいって言っていいんだよ！あなたのマスターは、はやてちゃんはきっとそれに応えてくれる優しい子だよ！」

「だから…はやてを解放して、ゼロさんは死なないよ…あの人なら必ず立ち上がる！だから武装を解いて、お願い！」

なのはとフェイトの説得に闇の書は応えない。無言のまま2人を見下ろしている。
フェイトは間近でゼロを見ていないから、そんな事が言えるのだと彼女、闇の書は思った。最後の希望は潰えたと…

その時突き上げるような強い振動が大地を揺らした。あちこちから火柱が上がり凄まじい勢いで天を突く。

「早いな…もう崩壊が始まったか…私も直に意識を無くす…そうなれば、直ぐに暴走が始まる…」

自嘲の笑みを僅かに浮かべ、自らの手を見る。

「意識の有る内に…主の望みを叶えたい…あの男…ネクサスも逃がしはしない……」

魔導書が光を放つ。闇の書が手を振り下ろすと、真紅の無数の刃がフェイトとなのはを瞬時に取り囲んだ。

最早闇の書はまともな状態ではなかった。2人の声も届かない。聞こうともしない。

はやての願いを妄執的に叶えようとしているように見えた。

「闇に…沈め…」

ブラッディー・ダガーが炸裂し爆発が起こった。爆煙が舞う。

「…？」

今度こそと見下ろす闇の書の目に人影が映った。２人は無事だった。爆煙の中から、背中合わせのフェイトとなのはが、闇の書をキッと見据えている。

なのはが薄い装甲のフェイトをカバーし、ダガーの攻撃を耐えきったのだ。

間髪入れずフェイトはバルディッシュを構え、最大スピードで飛び出した。今までより格段に速い。

「この…駄々っ子！言う事を聞けええっ！」

闇の書は避ける様子も無く、突っ込んで来るフェイトに向け魔導書を開いた。

「お前も、我が内で眠るといい…」

「はあああああっ！」

振り下ろされたバルディッシュの一撃は、張り巡らされた魔法障壁に阻まれた。びくともしない。

「あ…？」

その時フェイトの体が金色の光を放ち始めた。光は強さを増し、彼女の体が拡散するように薄くなって行く。

「フェイトちゃん！？」

なのはの叫びも虚しく、フェイトは光と共に吸い込まれるように消え去ってしまった。

《Ａｂｓｏｒｐｔｉｏｎ》（吸収）

魔導書がまるでフェイトを飲み込んだようにパタリと閉じられた。

「全ては…安らかな眠りの内に……」

驚愕するなのははその圧倒的な力の前に身を震わせた。しかし退く訳にはいかない。友人を救わなければならない。

今戦えるのは彼女1人だけだ。不退転の覚悟を決め、レイジング・ハートを構えた時であった。

『はやてぇぇっ！！』

闇を切り裂く雄々しい声が上空から響いた。なのははハッと空を見上げる。

夜天の空を切り裂いて、赤と青の超人が降下して来るのが見えた。

「ウルトラマンさん！？」

『待たせたなっ！』

ゼロは、なのはの隣に降り立つ。なのはは心強さで目を輝かせた。

ゼロはフェイトの姿が見えないのに気付き、

『フェイトはどうした？』

『いきなり闇の書さんの前で消えてしまったんです！どうすれば…？』

『何だって！？』

なのはの言葉にゼロが声を上げた時、エイミィからなのはに連絡が入った。

《フェイトちゃんのバイタル、まだ健在！闇の書の内部空間に閉じ込められただけ、助ける方法を現在検討中！》

それを聞いたなのはの表情が明るくなる。助けられる可能性が出て来たのだ。

なのはから状況を聞いたゼロは、彼女を庇うように闇の書の前に浮かび上がった。

『はやて俺は大丈夫だ…お前は嵌められたんだ戦うのを止めろ…』

しかし闇の書はまるでゼロを認識していない様子で、

「我が主もあの子も…醒める事の無い眠りの内に終わり無き夢を見る…生と死の狭間の夢…それは永遠だ…」

『何を言ってる…？お前はあいつだろ？俺だ、ゼロだウルトラマンゼロだ！俺が判らないのか！？しっかりしろ！！』

ゼロは懸命に呼び掛けるが反応が無い。どうやら闇の書『管制人格』が、はやての体を支配しているらしいとゼロは推測した。
しかも闇の書自体も正気を失っているようだった。

（呼び掛け続けるしかねえ！）

ゼロは決意すると闇の書に向かう。彼女と戦うなど彼には出来ない。

『俺だ目を覚ませ！』

しかし闇の書は、接近して来るゼロを敵対者と認識したのか、彼女の周りに再び真紅の刃ブラッディー・ダガーが出現する。

「闇に…沈め…」

無数の刃の嵐が、一斉にゼロ目掛けて襲い掛かった。

『グワアアアアッ!?』

次々と真紅の短剣がゼロの体に炸裂し、凄まじい爆発を起こす。
無抵抗でまともに攻撃を食らってしまったゼロは、苦しげに胸を押さえ、爆発に吹き飛ばされた。

つづく

第５９話　諦めるな！ドォ・ノット・ギヴイット・アップ！（後書き）

諦めるなあ！！はネクサスを代表する台詞だと思います。ブレスレットは捏造設定です。

今住んでいる所で、ジャンボーグエースをやってます。ジャンボットの元になった作品です。セスナ機から変形？します。

ちなみにエースは、会社のセスナ機を宇宙人が勝手に改造したものなので、事情を知らない社長に一回売り飛ばされてました。（オイ…

そんな愉快なエースですが、今だにエースのあの顔に馴染めません。（笑）

でも２号機のジャンボーグ９（ナイン）が何気に良いです。重装甲、重武装、高出力、格闘戦型で戦闘能力は遥かにエースを凌ぐ。

でも飛べないので、空からの攻撃には無力というのが陸戦兵器っぽくて良いのです。

しかもジャンカーＺ（軽自動車！）から変形（変身か？）質量保存の法則もへったくれも無いのがまた…操縦は車と一緒でハンドル操作。（どうやってんだ…？

ゼロの新作ＤＶＤでは９のリニューアル版のジャン９が出るので楽しみです。メチャクチャ格好いいですよ。あれで新番組を作って貰いたいです。

誰に乗って貰うか？でも完全に質量兵器だなあ…リニューアル版も軽自動車から変形するなら、黙ってればバレないと思います。

車持ちのシグナムやフェイトの愛車が知らない内に、ジャン9にすり替えられてしまっていたら笑えます。

フェイト「私の愛車がああああっ！？」みたいな。

それでは次回お会いしましょう。

第６０話　迷路－ラビリンス－（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
今回切るに切れなかったので、今までで最長です。

それでは第６０話をどうぞ。

第６０話　迷路ーラビリンスー

『ブラッディー・ダガー』をまともに受けたゼロは、爆発と共に後方に吹き飛ばされてしまった。

「ウルトラマンさん！？」

なのはは慌ててゼロに近寄ろうとするが、

『…大丈夫だ！これ位どうって事はないぜ！』

ゼロは爆煙の中態勢を立て直し、再び『闇の書』に向き直った。しかし近寄ったなのはは心配して、

「でも…今胸を押さえて苦しそうでしたよ…？」

『…気のせいだ…俺は今調子がいいんだ…』

心配する少女にゼロは、自分の唇を指でチョンと弾き不敵に答えた。無論強がりである。傷はかなり重い。

だがゼロは痛みに耐え、闇の書に向かって飛び出した。

「闇を沈め…」

闇の書は再びブラッディー・ダガーをゼロ目掛けて連射する。次々とその体に短剣が炸裂し、爆発がゼロを襲うが…

「!?」

闇の書は僅かに眉をしかめた。ゼロは攻撃をまともに食らいながらも、構わず正面から彼女に突っ込んで来たのだ。

『しっかりしろ!はやて目を覚ませ!!』

突っ込んだゼロは闇の書の両肩をしっかり掴むと、声を張り上げて呼び掛けた。

「私の…邪魔をするな…」

次の瞬間ゼロは、胸部に強烈な打撃を食らった。体が浮き上がる程の衝撃だ。闇の書の魔力が込められた痛烈な拳の一撃だ。

しかしゼロは肩を掴んだ手を離さない。

『…俺だ…目を覚ませ…はやて…！しっかりしろ！はやてぇっ！！』

呼び掛けるのを止めない。だが闇の書はまるで反応せず、立て続けにゼロのボディーに拳の連打を放つ。

『グアアッ！！』

衝撃で手を離してしまったゼロは苦悶の声を上げ、弾丸のようにビルの壁面に叩き付けられた。壁が砕け散り、ゼロはビルにめり込んでしまう。

「ウルトラマンさん！！」

なのはが宙を飛び近寄ると、ゼロは何でも無いように壁を砕いて飛び出した。

『大丈夫だ！…くっ…』

威勢良く応えようとしたが、胸を苦しそうに押さえた。

「ウルトラマンさん、やっぱり怪我をしてるんですね？」

それに気付いたなのははは心配して声を掛けるが、ゼロは何でも無いとばかりに肩を竦め、

『なあに…かすり傷だ…それより気付いた事が有る…』

「気付いた事…？」

怪訝な顔をするなのはにゼロは、此方を見下ろしている闇の書を見上げ、

『今のはやて達は多分、相手に反応する自動防御機構みたいなものが働いているようだ…だがそれだけじゃ無い…』

「それだけじゃ無い…？」

『他にも別の力が働いているようだ…外部から何かの遮断波のようなものが、はやて達を包んでやがる…クソッ、どうすりゃいいんだ！？』

苦悩するゼロになのは、アースラで聞いた闇の書についての報告を思い出し、

「ユーノ君達に調べて貰って解ったのは…闇の書さんのプログラムを書き換えるには、はやてちゃん自身がやらないと駄目みたいなんです…」

なのはなりに噛み砕いて理解していた事を伝える。

『そうなのか？やっぱり管理局にあいつのデータが有ったのか…！それならはやてを起こす事が出来れば！』

ゼロは思わず拳を手のひらに打ち付けていた。

「どうするんですか？誰かの邪魔が入っているなら、呼び掛けても届かないんじゃ…？」

最もな疑問を浮かべるなのはに、ゼロは何事かを決意したように拳を握り、

『それなら一つだけ手は有る！俺自身を魔法プログラムに変え、は

やて達の中に侵入して手助けするんだ！』

「そんな事出来るんですか！？」

驚くなのはだが、ゼロは今まで何度となく魔法プログラムと接して来た。

量子コンピューターの如き頭脳を持つ彼は、魔法プログラムの大体のところは理解している。

仕組みを理解出来れば自身を魔法プログラムと化して、闇の書に入り込む事が出来る筈だ。

しかし危険な賭けであった。ぶっつけ本番で自らをプログラム体に変え、侵入するなどという事は無茶である。

一歩間違えば闇の書に飲み込まれてしまう可能性が高い。だがゼロの心は既に決まっていた。

「じゃあその間、闇の書さんを抑えるのは任せて下さい！今度は私が恩返しする番ですね？」

なのはは頼もしい微笑を浮かべゼロを見た。

『無茶だ！無理する事はねえんだぞ！？』

ゼロは反対するが、なのははその瞳に強い意思を込め、

「大事な人達なんですよね…？はやてちゃんも、闇の書さんも…見ていれば分かります…
やらせて下さい！私だってフェイトちゃん達を、友達を助けたいんです！必ず助けましょう！」

なのははニッコリ笑うと、レイジング・ハートを構えた。
勿論恐怖も有るであろう。しかし彼女は大切な人達を助けたいという想いと、恩人の為に戦い抜くと固く決意したのだ。
そんななのはを見てゼロは、心から関心して頷いた。

『分かった…やっぱりどの世界でも人間は凄えな…任せる、無理はすんなよ時間を稼いでくれればいい！』

「任せて下さい！」

心を決めた2人は闇の書に正面から対峙した。

フェイトは穏やかな光の中で目を覚ました。
何時の間にかベッドに寝ている自分を自覚し、困惑して隣を見ると子犬のアルフともう1人、金髪の少女が眠っていた。

「えっ…？」

フェイトは少女の顔を見て驚いた。彼女より何才かは下だが、フェイトと瓜二つの容姿、彼女のオリジナル『アリシア』であった。
更に混乱して部屋の中を見回すと、見覚えの有る部屋だ。フェイトが昔使っていた、アリシアの部屋であった。

「此処は……」

呟いた時、部屋のドアがコンコンと軽やかな音を立てノックされた。

「フェイト、アリシア、アルフ朝ですよ」

懐かしい声が耳に入って来た。

「まさか……」

驚愕するフェイトの隣で、もぞもぞとアリシアが動く気配がする。

「おはよう…フェイト…」

眠たげな目を擦りながらアリシアは、フェイトに笑い掛ける。
そしてドアを開け、ショートカットの山猫の耳と尻尾を生やした若い女性が入って来た。

「リニス……？」

それは数年前に亡くなった、フェイトの魔法の師で親代わりでもあった、プレシアの使い魔リニスであった。

「…眠い……眠い……」

はやてはぼんやりと、そんな事を繰り返し呟いていた。まるで泥の中に沈むように強い睡魔が襲う。

彼女は上も下も解らぬ奇妙な闇が支配する空間で、車椅子にもたれ掛かっていた。

心地良い眠りに体中の力が抜けて行く。はやては抗い難い睡魔に身を任せようとした時、ふと人の気配を感じ目を開けた。

ぼんやりとする視界の中で、誰かがはやてを見つめている。良く見ようと目を凝らすと、また睡魔が襲って来た。もう今が現実なのか夢なのかも判然としない。

そんなはやての耳に、静かな女性の声が聞こえた。

「そのままお休みを…我が主……あなたの望みは、全て私が叶えます……」

優しく懐かしいような、しかし哀しい響きの女性の声。

「…目を閉じて心静かに夢を見て下さい…」

視界がまたぼやけて行く。瞼が鉛のように重くなって行った。

なのはは一気に闇の書の上空に上昇すると、素早くエクセリオンバスターを放った。

桜色の光の軌跡が闇の書に炸裂する。彼女は特に避けるでも無く、易々と防御魔法で砲撃を跳ね返した。

「そんなものが通じるか…」

反撃を食らわせようと右手を上げた闇の書は、ハッとして紅い瞳を見開いた。

ゼロが彼女に再び突っ込んで来るのが見える。なのはの攻撃は囮だったのだ。

『待ってろおおおおっ！！』

ゼロは叫びながら闇の書をしっかりと抱き締めていた。

「排除…」

闇の書は直ぐ様魔法を発動させようと、魔法陣を展開させる。
ゼロは避けようともせず彼女を抱き締め、今だに涙を流したままの彼女の顔を見ると、

『泣くな……』

ひどく優しい声で囁いた。闇の書は一瞬動きを止めるが、直ぐにゼロを冷たく見やると、

「排除……」

無感情な声に合わせて再び無数の刃がゼロを取り囲む。だがゼロは怯まない。その両眼がカッと輝きを増した。

『今その涙を止めてやる!!』

「!?」

闇の書を抱き締めていたゼロの体が、眩い光を放った。その体が光の粒子になって行く。
粒子は拡散し、全て闇の書に吸い込まれて行った。

「プログラム内に侵入された…？愚かな……」

彼女の紅い瞳が鈍く光を放った。

『うわあああああああぁぁぁっ！？』

ゼロは渦巻く闇の激流に翻弄され、暗黒の渦の中を墜ちていた。
渦は悪意有る者のように、ゼロの魔法プログラムと化した体を苛む。
異物と判断されて排除行動に出ているのだろう。闇に体が侵食されて行く。意識が遠くなり掛けた。

『負けてたまるかあああああっ！！』

ゼロは気力を振り絞って闇の渦を跳ね退ける。

『うっ！？』

だがゼロは急速な目眩を感じた。何かが精神に入り込んで来るのが感じられる。

（しまった！別の奴の力に…）

ゼロの意識がフッと遠のいた。

光が在った。眩いばかりの光が溢れる世界。空も大地も光で満ちていた。

クリスタルのように光を反射する巨大な建築物。その中を行き交う赤や銀、青い体をした人々。

ゼロが育った『光の国』であった。

（何故俺は此処に…？何時戻って来たんだ……？）

ゼロは光の国に帰って来た理由を思い出そうとするが、霞が掛かったように、頭には何も浮かんでは来なかった。

しばらくの間行き交う人々の中、その場に立ち尽くしていたゼロに、声を掛けて来る者が居る。

『ゼロ、何ボーっとしてるんだ？』

聞き覚えの有る声にゼロが振り返ると、1人のシルバー族に近い姿をした少年が立っていた。

銀色の割合が多い体だが、一つだけ他のウルトラ族と違う部分が有る。目が宝石のエメラルドのように、緑の輝きを放っていた。

『カインッ！？』

ゼロは思わず叫んでいた。忘れられないその姿は、無二の親友の少年そのものだった。

『おかしな奴だなあ…何をビックリしてるんだよ？』

カインはクスクスとおかしそうに肩を揺らすと、ゼロの手を引く。何時の間にかゼロ自身も、幼い子供の姿になっていた。

『早く行こうよ、ゼロの父さんだって待ってるよ』

『親父が…？』

言われるがままに着いて行こうとしたゼロだったが、不意に脚を止めた。

『どうしたんだよゼロ？』

不思議そうな少年には応えずゼロは俯いた。肩が震えている。

『どうしたって言うんだ…？』

心配した様子で覗き込むカインに、ゼロはひどく悲しげに顔を上げ、

『お前は…既に死んだ筈だ……』

血を吐くような悲痛な呻きだった。だがその衝撃が、ゼロに正気を取り戻させた。

（そうか…此処ははやての中でも有り、闇の書の中でも有る…精神に侵食を受けたのか……）

彼が正気に戻った事で周りの風景はぐにゃりと歪に歪み、再びゼロは渦巻く闇の濁流の中を翻弄されている自分を自覚した。

…ゼロ……

死んだ筈の友の声が、闇の渦から追って来る。

いいじゃないか…辛い事もみんな忘れたらいい…

安らかに眠ればいい…みんなと一緒に…

『黙れえええええええっ！！』

ゼロは力の限り叫んだ。黒い渦が弾かれたように周りから離れる。

『忘れろだと…？夢だと？ふざけるな！！そんな軽いもんじゃねえんだよぉぉっ！！』

気迫に押されたように渦がサアア…と潮のように後退る。ゼロは背後に居る筈の敵に向かって叫んだ。

『貴様の好きにはさせねえ！！』

すると闇の奥から嘲笑う声が響いて来た。

《お前に何が出来る…？例え我の干渉を絶てたとしても…それがお前の限界だ…
人は弱い…手にしたかったものを与えられて…それを手放せるかな…？》

『何だと！？人間を舐めるんじゃねえ！！』

反論するゼロに、再び闇の渦がまとわり付いた。身動きがとれなくなってしまう。

『クソオオオオオオッ！！』

ゼロの叫びに体の一部が光となって拡散して行く。光は粒子となって二手に別れ、渦をすり抜けた。

（今の俺に出来る事は、奴の影響を遮断するぐらいだ…後は自分の力で覚醒するんだはやて！お前なら出来る！）

ゼロは襲い来る攻撃に耐えながら、少女をひたすら信じた。

空中で激しくぶつかり合う2つの光。闇の書となのはの死闘は続いていた。舞台は市街地を離れ海上に移っている。

なのはは闇の書の圧倒的な力に押されていた。体力の消耗も激しいが退く気は無い。

海中に叩き込まれながらも立ち上がる彼女は、アースラに状況を送り、戦闘を海の付近に移した事と、市街地の火災の鎮火を頼む。

結界内とは言え、闇の書暴走の火柱は放って置くと、現実世界にも影響が出るようだ。

《それと今闇の書さんの中に、ウルトラマンさんが助ける為に飛び込んでます。もう少しやらせて下さい！》

そう報告すると再びなのはは、闇の書に向かう。リンディは直ぐに、災害担当の局員を向かわせるが、

「無理しないでねなんて、言える雰囲気じゃ無かったわね…」

リンディはため息を吐くしか無い。本局と連絡が取れない今、なのは達に賭けるしか無かった。

（嫌な予感がするわ……）

リンディは呟いて手にした『アルカンシェル』の起動キィーを見つめた。

「…私の…本当の…望みは……」

はやては睡魔に抗いながら必死で考えていた。このまま眠ってはいけないと、心のどこかが訴えている気がする。

（私が…欲しかった…幸せ……）

目前の銀髪の女性が、優しく囁くように語り掛ける。

「健康な体…愛する者達との、ずっと続いて行く暮らし……」

（そうなんかな…？）

上手く思考が纏まらない。本当にそうなのかすら思い出せなかった。優しい声が誘うように、心地良く頭に響く。

「眠って下さい…そうすれば夢の中であなたは…ずっと…そんな世

界に居られます……」

周りの闇が姿を消し、気が付くとはやては自宅のリビングに立っているのに気付いた。

（私自分の脚で立っとる…？）

ぼんやりと床を踏みしめる脚を見てそう思った。

「はやて、のんびりしていると学校に遅れるわよ？」

懐かしい声に振り返ると、亡くなった筈の母がキッチンで朝食の支度をしながらはやてに、優しく微笑み掛けていた。

その隣では悪戦苦闘して支度を手伝っているシャマルの姿もある。

「もうシグナムさんもゼロ君もヴィータちゃんも、みんな食べ始めているぞ、はやても早く食べてしまいなさい」

食卓では父が、朝刊を読みながら笑っている。そして一緒にゼロにシグナム、ヴィータが朝ご飯を食べていた。

「はやて早く早くっ」

食欲旺盛にご飯をもりもり食べているヴィータが、顔にご飯粒をくっつけたまま、はやてを手招きしている。

「はやて何ボーっとしてんだ？遅刻するぞ。今日は学校でマラソン大会だろ？しっかり食っとかねえと倒れるぞ」

ゼロがお代わりをしながら笑う。シグナムがそんなゼロをたしなめて、

「はやてが遅れを取る筈が無かろう？一位を取れるか取れないかだ…すずかは強敵だからな…」

とても和やかな光景だった。気が付くと子犬姿のザフィーラが、ちょこちょこと寄って来て彼女の手をペロリと舐める。

はやてはザフィーラを抱き上げ、蒼いもふもふの毛並みをゆっくりと撫でてやった。

無くしたと思ったものが全て其処に在った。立ち尽くしたままのはやてに声が聞こえて来る。

《其処で何時までも…心穏やかにお過ごし下さい…辛い事も…悲しい現実も無い永遠の夢を……》

優しい声が子守歌のように、はやての思考を鈍化させて行く。心がゆっくりと沈み込んで行く気がした。

（あれ……？）

その時はやては、体に何か温かいものが入って来た気がした。

（温かい……）

そう思った瞬間何かのイメージが、はやての中に流れ込んで来た。

フェイトはぼんやりと、穏やかな日差しの中木陰に座り、草原に

寝転んで本を読むアリシアと周りの風景を眺めていた。

白い雲がゆったりと流れ、優しい風が彼女の頬を撫でる。

フェイトが目覚めた場所は、時の庭園に改造される以前の、かつて彼女達が暮らしていた土地だった。

あの後リニスに連れていかれたフェイトの前に現れたのは、アリシアの記憶通りの優しい母プレシアだった…

困惑して立ち尽くすフェイトをプレシアは招き、

「怖い夢を見たのね…でももう大丈夫、母さんもリニスもアリシアも、みんなあなたの傍に居るわ…」

優しくフェイトの頬に触れ微笑み掛けた。生前には決して無かった事だった。

判っていた。プレシアは殺され、アリシアもリニスも既に亡くなっている。みんなで過ごすなど有り得ない事だ。

しかしみんなとの穏やかな暮らしは、フェイトがずっと欲しかった時間だった。何度も夢に見た…

雨が降り出して来た。アリシアははしゃいだ様子でフェイトの隣に座り、突然の雨を楽しんでいる。

フェイトは雨にけぶる景色を見つめながら、ポツリと呟いた。

「ねえ…アリシア…これは夢…なんだよね……？」

それは出来れば言い出したくない言葉だった。だがフェイトはあえて口にする。

このまま夢の世界に身を委ねるには、大事なものが増え過ぎていた。

アリシアは無言だった。言葉を続けようとしたフェイトはふと、どんよりと曇った空が凶々しい気配を発した気がした。

「そうだね…さすが私の妹だ…そう此処は闇の書が作り出した夢の中だよ…」

「アリシア…？」

突然のアリシアの大人びた言葉に、フェイトは傍らに座る小さな姉を見つめた。アリシアは微笑んでフェイトを見ると、

「ねえフェイト…母さんを酷い人だと思う……？」

アリシアの質問に、フェイトは静かに首を横に振り、

「母さんは死んだ後でも私を守ってくれた…最期に言葉をくれた…私がこのまま夢の中に沈んでしまったら…母さんもアリシアも、リニスも喜ばない…そうだよね…？」

「うん…フェイトならそう言ってくれると思った……少し淋しいけど、私はお姉さんだから……」

少し淋しそうに微笑むと、手を差し出した。その手のひらには、装飾品状態のバルディッシュが載っている。

フェイトはバルディッシュを受け取りながらも、

「何故…？」

問わずにはいられなかった。闇の書が作り出した夢の存在ならば、何故フェイトの手助けをしてくれるのか解らなかった。

「私はフェイトのお姉さんだもの…どんな事になっても、お姉さんだよ…

あの子が悪い奴から守る為にフェイトに力を分けてくれたんだよ…

お陰でフェイトに逢えた…」

「あの子…？」

「フェイトも感じるでしょう…？」

アリシアはそう言うと、フェイトをふわりと抱き締めた。温かかった。春の日溜まりの匂いがする。

そして優しく温かいものが何処からか流れ込んで来るのを感じた。以前にも感じた温かさ。

（ゼロさん……？）

頭の中にある光景が浮かんだ。それは1人の少年の辿った道…一瞬流れ込んだ光景は直ぐに消えた。

キョロキョロするフェイトにアリシアは、満足そうに頷き、

「そういう事だよ…待ってるんでしょう…？優しくて強い子達が…」

「うん……行かなきゃ…」

フェイトは自然にアリシアを抱き締めていた。夢などでは無く、本当の姉のような気がした。知らぬ間に涙が零れていた。

フェイトの胸に顔をうずめながらアリシアは、

「じゃあ…行ってらっしゃいフェイト…」

「行ってきます…」

フェイトはアリシアを抱き締めながら、何度も頷いていた。

「ずっと見守ってるよ…」

穏やかに微笑むとアリシアは光となって消えて行く。

「現実でもこんな風に居たかったな…」

その言葉を最期にアリシアは、フェイトの腕の中からそよ風のように消えた。まだ体に温もりが残っている気がした。

「…アリシア……」

フェイトは姉の名を呟きながら、今のは本当のアリシアが逢いに来てくれたのではないかとふと思った。

はやての前に在る温かな朝の団欒。失ったもの全てが其処には有った。

両親もゼロも守護騎士達も全員が居る。自由に立って歩く事も出来た。

欠けるものの無い、完璧な世界だった。泣きたいような懐かしいものが込み上げて来る。

（ほんまだったら…どんなにええんやろ……）

だがはやてはゆっくりと首を横に振っていた。手をしっかりと握り締める。

「せやけど…これは只の夢や！」

はやての言葉と共に、周りの風景は崩れ去った。気が付くとはやては再び闇の中に居る自分を自覚した。

目の前には『管制人格』の女性が困惑した様子で、立ち尽くしている。
今のはやてには全てが、自分の事のように解っていた。

「私こんなん望んで無い！あなたもおんなじ筈や、違うか？」

はやては銀髪の女性を見上げ真摯に語り掛ける。女性は親愛の眼差しではやてを見下ろし、

「私の心は、騎士達の感情と深くリンクしています…だから騎士達と同じように、私もあなたを愛おしく思っています…だからこそ…」

管制人格は哀しげに目を伏せ、

「あなたを殺してしまう自分自身が許せない……」

女性の表情を見て、はやては思った。彼女は永い時の中、こんな想いを1人で背負って生きて来たのだと。

「自分ではどうにもならない力の暴走…あなたを侵食する事も…暴走してあなたを食らい尽くす事も止められない……」

深い苦悩が込められた言葉であった。言葉尻が震えていた。はやてはそれを感じ、泣き出したい気持ちになった。

「覚醒の時あなたの事、少しは判ったんよ…」

はやては、みんなが来る以前の自分を思い起こしながら、静かに語り掛ける。

「…望むように生きられんへん悲しさ…私にも少しは判る…シグナム達と同じや…ずっと悲しい想い、寂しい想いして来た……」

両親を亡くしてからの事が頭をよぎった。身寄りも無い身で脚は動かず、何時も寂しさを抱えて来た孤独な自分…

「せやけど忘れたらアカン！」

目を伏せていた女性は、少女のしっかりとした声に目を開けた。はやては乗っていた車椅子から身を起こすと、女性の頬に優しく触れ、

「あなたのマスターは今は私や…マスターの言う事はちゃんと聞かなアカンよ？」

真っ直ぐに女性を見つめるはやての言葉は、命令する高圧的なものでは無い。優しく子供に語り掛ける母親のそれであった。

その足元に闇を照らすように、光る魔法陣が現れる。

はやてはその光に照らされながら、跪いた女性の頬を諭すように両手で触れ、

「名前をあげる…もう闇の書だとか、呪いの魔導書なんて言わせへん、私が呼ばせへん！」

女性の目から涙が溢れていた。はやてはそんな彼女に慈しむように微笑み、

「私は管理者や…私にはそれが出来る」

「無理です…自動防御プログラムが止まりません…それに外部からの正体不明の干渉で、満足に私も機能出来ない状況です…ゼロも管理局魔導師も戦っていますがそれも…」

女性は絶望の声を洩らす。闇の書完成時に、主が目覚めているという、改変されてから初めての状況だが、外部からの干渉が彼女の活動を阻害していた。

このままではいずれ、はやて共々暴走に飲み込まれてしまうだろう。

しかしはやては頬もしささえ感じられる笑顔を浮かべ、

「大丈夫や…周りを見てんか…」

「…？」

女性は言われた通り、はやて越しに闇に閉ざされた周りを見てみる。無数の光が辺りを舞っていた。

その様子は闇夜を照らす、夜空の星のようであった。

「これは…？」

驚く女性に、はやては星空のような辺りを見上げ、

「ゼロ兄が干渉を抑える為に、私らに力を流してくれとるんや…あなたも感じるやろ？」

「ああ…これは…？」

女性は声を上げた。温かな力強いものが体に入って来る。

《目が覚めたようだな…？俺の声が聞こえるか…？》

不意に声が響き渡った。ゼロの声である。

「ゼロ兄ぃ、聞こえとるよっ」

はやては嬉しそうに応えたが、ゼロの声が苦しそうなのに気付き、

「ゼロ兄やっぱりキツイんか…？」

《ちと慣れてないもんでな…脱出するにははやて達の力が必要だ…外では、なのはが頑張ってる頼む！》

ゼロは体の一部を融合させた状態で、はやて達を干渉から守っていたが、それで手一杯だった。そう長くは保ちそうに無い。

「任しといて、後は私が！」

ゼロの状況を理解したはやては目を閉じると、足元の魔法陣が輝きを増した。闇の書本体から、コントロールを切り離す。

魔法には詳しくは無いが、思考するだけでその作業が出来る。前から知っていたかのように、はやてはそれをやってのけた。

「ゼロ兄っ、魔導書本体とコントロールを切り離した！」

《判った！》

侵食に耐えていたゼロは最後の力を振り絞った。体が眩いばかりに光を放つ。

『ウルトラゼロレクター』闇を浄化する神秘の光。その光が闇に輝く恒星の如く辺りを照らし出した。

辺り一面が星空の如く瞬く空間。その中で、跪く女性に手を差し伸べる車椅子の少女は、一枚絵のようだった。

はやては女性に優しく語り掛ける。

「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る…」

それはまるで、以前から考えていたかのように、はやての口から自然に発せられた。不思議とは思わなかった。

既に無意識の内に決めていたものだったのだろう。以前に意識の底で出逢った時から…

「強く支える者…幸運を呼ぶ風…祝福のエール…リイン…フォース」

その瞬間2人は白い光に包まれた。

庭園に戻ったフェイトはバルディッシュを構え、静かに佇んでいた。周囲が光を放っている。

《フェイト脱出を!》

ゼロの声がフェイトの心に語り掛ける。コクンと頷いたフェイト

はバルディッシュに、

「バルディッシュ…此処から出るよ…『ザンバーフォーム』行ける…？」

《Ｙｅｓ　ｓａｒ》

「いい子だ…」

フェイトは微笑むと、バリアジャケットを纏い、バルディッシュを構えた。

カートリッジを連続して排出したバルディッシュの形が組み替えられ、巨大な電光の大剣を形成する。

「疾風迅雷！ジェット・ザンバァァァァッ！！」

電光の大剣が雷を纏い唸りを立てる。空間がガラスのようにひび割れた。

『ウルトラゼロレクター全開っ！ウオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

ゼロの雄叫びと共に光が急速に拡大して行く。光は闇を払い更に広がって行く。

「あ…？」

闇の書と激戦を繰り広げていたなのはは、不意に動きを止めた彼女を不審そうに見上げた時、闇の書から強烈な光がほとばしった。

「何！？」

あまりの光量に目を庇うなのはの目前で、光は更に増大し、爆発の如く一気に弾けた。

光が収まった後、なのはが空を見上げると、宙に浮かぶフェイトの姿が有った。

「フェイトちゃん！」

「なのは…」

フェイトはなのはに笑い掛ける。アルフもすずか達の転送を見届けて来てくれた。

「あれは何だい…？」

アルフは空に浮かぶ光の球を見て警戒するが、フェイトは首を振り、

「あれは大丈夫…それよりも…」

フェイトは海上を見るように促す。海鳴湾の沖合に、巨大な球体状の物体が出現していた。

その中で蒼黒い、得体の知れないものが這いずり回っているように、おぞましく蠢いている。

そして球体の周りからはうねうねと、異形の触手群が球体を守るように、海水を掻き分けてうねっていた。

闇の書の防衛プログラムそのものが形を成したものであった。

光球の中、ゼロはガクリとうずくまっていた。人間大にも関わらず、カラータイマーが赤く点滅している。エネルギーは殆ど無い。

そのゼロの前に、一糸纏わぬ姿のはやてと、『夜天の魔導書』が浮かんでいた。

『はやて…』

状況が解らないゼロは心配して浮かぶはやてに声を掛けるが、

《私は全然大丈夫やよ？今色々やっとるところや…》

目の前のはやては目を閉じたままだが、ゼロの頭の中に彼女の念話が響く。

《管理者権限発動…防衛プログラムの進行に割り込みを掛けました…数分程度ですが、暴走までの遅延が出来ます…》

魔導書…リインフォースの報告にはやては微笑し、

《リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復…》

はやてから光る４色の球が分離して行く。

《おいで私の騎士達…》

はやての声と共に、周りの光る空間が輝きを増した。

「!?」

「うあっ!?」

光る球体から、突如として光の柱が天と海を貫いた。
発する衝撃波にフェイト達が目を庇った後、空中に光る魔法陣が浮かんでいた。

その中央に小さくなった光球が鎮座し、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラの４人が光球を守るように魔法陣の上に立っていた。

シグナムが静かに言葉を発する。

「我ら夜天の主の元に集いし騎士…」

シャマルが続く。

「主在る限り、我らの魂尽きる事無し…」

ザフィーラが紡ぐ。

「この命有る限り…我らは御身の元に有り…」

「我らが主…夜天の王八神はやての名の元に…ウルトラマンゼロと共に…」

ヴィータは最後に誓いの言葉を発し、静かに目を開けた。

それを光球から出たゼロは、呆けたように見上げる。

『お前ら…』

「ゼロの馬鹿でけえ声がうるさくて、おちおち寝てもいらんねえよ」

ヴィータが悪戯っぽくゼロに笑い掛けた。

「まったくだ…」

シグナムが苦笑を浮かべる。

『バカ野郎…心配かけやがって…』

ゼロが感極まっていると、光球がガラスのように弾けた。
中から黒いアンダースーツのような服を纏い、金色の剣十字の杖を携えたはやてが姿を現す。
見開かれた瞳が、透き通るマリンブルーの海のように変化していた。

『はやて…』

うずくまるゼロに、はやてはニッコリ笑い掛けると、金色の杖を

天に掲げた。

「夜天の光よ我が手に集え！祝福の風リインフォース、セーットアーップ！」

杖の剣十字が光輝き、はやての体に黒と金を基調とした騎士甲冑が装着される。

黒に映える白いジャケットに、綿帽子のような純白の帽子が亜麻色に変化した髪に被さった。

６枚の漆黒の羽根を広げたはやては軽やかに舞うと、ふわりと家族達の中央に降り立った。

その姿は小さいながらも凛々しく、解き放たれ空に羽ばたこうと羽根を広げる、若鳥のようであった。

「はやて……」

その姿を見たヴィータは目を潤ませる。はやては何も言わず優しく微笑んだ。

「済みません…」

シグナムは沈痛な様子で頭を下げた。シャマルも申し訳なさそうに、

「あの…はやてちゃん…私達…」

『悪かった……』

ゼロも決まりが悪そうにぼそりと謝った。ザフィーラも不忠の極みとばかりに頭を下げる。

「ええよ…みんな判ってる…リインフォースが教えてくれた…そやけど細かい事は後や、今は…」

はやては申し訳無い様子でいる全員を改めて見回し、

「お帰り…みんな…」

にっこりと慈母のように笑った。ヴィータは我慢仕切れず、泣きながらはやての胸に飛び込んでいた。

「はやてぇはやてぇ、はやてぇっ！」

何度も名を呼ぶ小さな騎士を、はやてはしっかりと抱き締めた。
守護騎士達はその様子を温かく見守っている。

（戻って来た…）

その光景をゼロはただひたすら感動して見入っていた。人間形態だったなら、号泣していた所である。
そこにフェイトとなのはが降りて来た。それに気付いたはやては顔を上げ、

「なのはちゃん、フェイトちゃんもごめんな、ウチの子達が色々迷惑掛けて…」

謝罪するはやてに、なのはは首を横に振り、

「ううん…」

「平気…助けて貰ったし…」

フェイトははやてに微笑んだ。

穏やかな空気が流れる。様々な苦闘を乗り越え、ようやく此処までたどり着いたのだ。感慨もひとしおだった。

その時である。巨岩が海に落下したように、派手な着水音が響いた。

『ネクサス！』

ゼロは鋭く叫んだ。異様に蠢く防衛プログラムの前に、盛大な水柱を上げ『ウルトラマンネクサス』がその巨体を現していた。

「孤門…？」

フェイトがネクサスに連絡を取ろうとした時、

「遅かったか！？」

後方で声が聞こえた。転移魔法の魔法陣が輝く。誰かが封鎖領域内に転移して来たようだ。

振り向くと、その人物は良く知った人物であった。

「クロノ！」

「ユーノ君！」

フェイトとなのはは2人の名を呼ぶ。それは駆け付けて来たクロノとユーノであった。

次に現れた人物を見たゼロは、ひどく驚いてしまう。

『ウルトラマンメビウス！？』

ゼロが驚くのも無理は無い。クロノ達と共に姿を現しのは、ウルトラマンメビウスその人であった。

『メビウス何で此処に？どうやって来たんだ！？』

嬉しさと驚きのない交ぜのゼロは、更に質問しようとするが、メビウス達が人を抱えているのに気付いた。

初老の外国人らしき男性と、猫耳に尻尾を生やしている、そっくりな姿形をした双子らしい若い女性である。

3人共ひどく消耗しているようで、グッタリしているが、意識は有るようだった。

クロノは海上に立つネクサスを指差し、

「奴はウルトラマンなんかじゃ無い！最初からウルトラマンに成りすましていた、奴こそ『ダークザギ』だ！！」

『ククク……』

クロノの衝撃的な暴露に声も無い中、銀色の巨人は含み笑いを洩らした。

さもおかしくてたまらないと言うように肩を揺らす。揺れは大きくなり、遂には狂ったように両腕を広げた。

『フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！』

巨人の哄笑が辺りに木霊す。それは正に悪魔の笑いであった。

つづく

第６０話　迷路－ラビリンス－（後書き）

『ウルトラゼロレクター』映画２作目で、ベリアルの闇に侵されたミラーナイトの闇を取り除いた光です。

最初から使えよと言いたくなるかもですが、万能過ぎても詰まらないので、ゼロレクターだけでは闇の書の闇は払えず、はやてが覚醒した事で手助けが出来たという感じです。

え～…ネクサスですが、そうです真っ赤な偽物です。ザギ本人です。今までの偽孤門の描写で、かなりギリギリのヒントをアチコチにばらまいてました。
読み直してみると、明らかにおかしい点や、ザギとして話している箇所があります。（フェイトの所とか）

ネクサス最終回を見る限り、とても孤門・ノアは他の世界に行く余裕など無いと思います。

一応最初からの予定通りです。推理小説の探偵が犯人だったオチという訳で。ネクサス本編の石堀とかけてます。

次回予告

はやて
「遂に復活してしまった冥王ダークザギ、更に出現するスペースビーストの群れ…」
「エネルギーが無いゼロ兄達はビーストに翻弄され、次々と倒れて行きます…その時…」

「夜天のウルトラマンゼロ『冥王ーダークザギ』に、リリカルマジカル」

第６１話　冥王ーダークザギー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。第６１話をどうぞ。

第６１話　冥王ーダークザギー

ネクサス…いや、『ダークザギ』の巨大な拳が『闇の書・防衛プログラム』の活動を抑えていた、蒼黒い球体に振り下ろされた。

球体はザギの一撃で液体のように弾ぜ、中から異形の姿をした巨大な怪物が現れた。

６枚の巨大な羽根を持ち、硬い甲殻に身体を覆われた四つ脚の怪物である。

四つの角を生やした巨大な頭部中央に、異形の女性の上半身を埋め込んだおぞましい姿だ。

闇の書の改変された防衛プログラムが、形を成したものである。

ザギを敵と認めたのか、周囲を蠢いていた触手群が一斉に襲い掛かった。偽の銀色の巨人は煩そうに片手を振る。

『小賢しい…！』

瞬時に切断された触手群の肉片の中、ザギは防衛プログラムに掴み掛かった。

張り巡らされた、幾重もの魔法障壁を無理矢理こじ開け、防衛プログラム本体をガッシリと掴む。

頭部中央の女性が金切り音のような声を上げた。

ザギに攻撃しようと巨腕を振り上げようとするが、突如として痙

攣したように巨体を揺らしてもがき始める。

『来い、我が内に！』

ザギの言葉と共に、苦しそうに防衛プログラムがビクビクともがく。するとその巨体が、闇色の粒子に分解され始めた。

「バ…馬鹿な…！」

クロノが驚愕の声を漏らす。防衛プログラムがザギの身体に吸収されて行く。

《ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ア〝ッ！！》

防衛プログラムはおぞましい断末魔の叫びを上げる。

巨体は崩れ落ちるように粒子となり、瞬く間に銀色の巨人に吸い込まれた。

『復活の時だあっ！！』

粒子を一身に浴び巨人は天を仰いだ。銀色の身体が変化して行く。身体に紅いラインが浮かんだ。

身体の各部がゴリゴリと盛り上がり、銀の身体が闇に塗り潰されるように、黒く染められて行く。

闇より深い漆黒の身体の各部に、血のように紅いラインが血管のように疾り、紅い両眼がギラリと光を放った。

その瞬間、衝撃波を伴った凄まじい閃光が輝いた。

『うおっ！？』

ゼロ達は思わず目を庇う。閃光が収まり目を開けた全員の目に、漆黒の巨人の姿が映った。

『ウワアアアアアアアアアアッッッ！！』

狂ったように巨人は天に向かって吼えた。その叫びは解放された悪魔の、歓喜の叫びそのものに聞こえた。

空気が空間がびりびりと震える。世界そのものが、悪魔の復活に怯えているようだった。

『ウルトラマンノア』を闇に染め上げたような姿が、凶々しい気配を放った。

冥王ダークザギ再び顕現す。

防衛プログラムを全て喰らい尽くした漆黒の巨人は、帝王の如く傲然と暗い海にそびえ立った。

『貴様…ダークザギだったのかあっ！！』

怒りの声を上げるゼロに、ザギは悠然と構え、

『フフ…愚か者が…ネクサスは、ウルトラマンノアの不完全形態…ノアは自分の世界で、ビーストの大群と戦い続けている…他の世界に来ている余裕など無い！』

『ネクサスがノアの！？』

ゼロは腑に落ちた。ノアには『ウルティメイト・イージス』を授けられている。

ネクサスが本物だったなら、最初に逢った時点でブレスレットが反応していた筈なのだ。

ノアの詳細を知らなかったばかりに、まんまと騙されてしまった。

グッタリとしてメビウスに抱えられていた、初老の男性グレアムはヨロヨロと顔を上げ、

「貴様…最初からずっと…騙していたのか…！？」

グレアムの憤りの声にザギは、歯牙にも掛けないと言うように紅い目を光らせ、

『その通りだギル・グレアム…最もお前も我と似たり寄ったりだろう？
八神はやてを闇の書もろとも永久に凍結する為に、ずっと監視して来たのだからな…』

「えっ？グレアムのおじさん！？」

「グレアムのおっちゃんなのか！？」

顔を見た事が無かったはやてとゼロは驚いて、メビウスに抱えられているグレアムを見上げた。

クロノは驚いているはやてに、やり切れない表情を向け、

「提督とリーゼ達はこの近くで、結界の中に閉じ込められていた…君を封印する為に自ら出向いたところを、土壇場で裏切られたんだろう…」

少し逸れた場所に転移したクロノ達は、此方に向かう途中でグレアム達を発見し救出したのだ。

「……」

はやては無言であった。ゼロはジッとグレアムを見上げている。

「そ…そんな…孤門が……？」

フェイトはあまりの裏切りに愕然とするしか無い。なのはも顔が真っ青になっていた。

閉じ込められた際に、深いダメージを負ったらしいグレアムは、沈痛な表情をはやて達に向けるが、ザギをキッと睨み、

「…何故…管理局に入り込み…こんな回りくどい事をした…？」

「それはロストロギアですよ…」

クロノがそこで重々しく口を開いた。メビウスに視線を向けると頷いて、

「ウルトラマンメビウス…彼のお陰で、改竄される前のデータを発見する事が出来ました…
奴は管理局に潜り込んで、ロストロギアを着服していたんです…多くの関係者を皆殺しにして…」

『その通り…この身体を新しく造る為に、都合のいいロストロギアがかなり有ったからな…』

ダークザギは自らの漆黒の身体を誇らしそうに見下ろし、

『あの暴走の日からこの身体を造り上げ、ビーストを出現させ戦う事で、戦闘データを蓄積して来た…全てはウルトラマンノアを倒す為に！！』

「暴走の日だと…？まさか……！」

グレアムがその言葉に思い当たり顔色を変えた。ザギはグレアムを嘲笑うように見上げ、

『そうだ…ノアに敗れ光量子情報体のみとなった我は時空の狭間を漂い、気が付くと闇の書暴走の瞬間に立ち会っていた…
そこで思ったのさ、コイツを使えば再び元の身体を造り上げる事が出来るとな…』

「貴様もあの場所に居ただと……？」

表情を苦しげに歪めるグレアムにザギは、さもおかしそうに肩を揺らし、

『情報体の身では、逆に闇の書に取り込まれてしまう…それならそれに耐えうるだけの身体を造り出せばいい…
そこで我は、ある男を手始めに乗っ取る事にした…誰だと思う…？』

ザギの不吉な声が響くと同時に何かが頭の中で弾け、クロノやグレアムにリーゼ姉妹、更には『アースラ』のリンディまでもが、同時に驚愕の表情を浮かべた。

「ク…クライド！」

ザギの記憶操作を解かれたグレアムは驚愕して、血を吐くように呻いた。

「父さん…！？」

クロノはわなわなと肩を震わせる。孤門と認識していた青年の顔は、幼き頃に見た父そのものであった。

『アッサリ信用出来ただろう…？クライドの身体に、ノアの『デュナミスト』孤門の人格と記憶…
信用させるのにこれほど向いたものは無かったよ…誰一人疑いもしなかった』

グレアムもリーゼ姉妹も、あまりの事に声も出なかった。今まで自分が死なせた筈の人間と、顔を突き合わせていたのだから。

ザギはそんなグレアム達を嘲るように肩をゆったりと揺らし、

『闇の書の闇に飲み込まれる前にわざわざ我の寄代（よりしろ）としてやったのだ感謝するがいい…

最もこの男は既に死に、我の一部でしか無いがな！見当違いの敵討ち、なかなか見ものだったぞ、フハハハハッ！！』

グレアムは絶句した。敵討ちどころか、敵に言いように利用されていただけだったとは…

『貴様！今までの事も全部嘘っぱちかあっ！！』

ゼロは我慢仕切れず怒鳴った。細かい事までは解らない。だがザギが、人の想いや色々なものを踏みにじった事だけは、はっきり判った。

『…その通り…我はその娘…八神はやての元に闇の書が転生する事を予知していた…

ルシフェルやビーストを造ってぶつけたのは、自らの強化と闇の書に更なる戦闘データを蓄積させ強化する事…

本来ならそいつらごとデータを吸収する筈だったが、お前が要らぬ

手出だしをしたお陰で吸収し損ねた…
しかし充分だ…全ては我が元の姿を取り戻す為の…』

ザギはそこで一旦言葉を切り、八神家の面々を冷たく見ると、

『道具だ…！』

その言葉と共に、ザギの背中がボコリと無気味に盛り上がった。

『フハハハハッ！見ろ！『ヤプール』から奪った『ヤプールコア』から生み出した我の翼を！！』

ザギの背をメリメリと突き破り、鋭いデルタ型をした漆黒の２つの機関が出現した。
ザギを造り上げた『来訪者』の超技術でも再現出来なかった、時間と空間を自在に操る『ノア・イージス』に酷似している。

同じく時間と空間を操る『ヤプールコア』からザギは、自らのイージス『ザギ・イージス』を造り上げたのだ。
やはり『アックス』にコアを奪うよう依頼したのはザギだったようだ。

『貴様ああっ！！』

瞬時に巨大化したゼロは怒りの雄叫びを上げ、ザギに拳を振り上げ突進した。

『馬鹿め…』

ザギの真紅の両眼が鋭い光を発した瞬間、不可視の力場が冥王の周りに張り巡らされ、ゼロを弾き飛ばした。

『グワッ！？』

ゼロの巨体が盛大に水柱を上げ海に叩き込まれた。ザギは微動だにしていない。

『クソッタレがあっ…！』

立ち上がろうとするゼロだが、ガクリと膝を着いてしまった。身体に力が入らない。エネルギーが絶対的に不足していた。胸のカラータイマーが限界を示し点滅を繰り返す。

『ゼロッ、退がるんだ！』

ゼロを庇って巨大化したメビウスが、飛沫を上げてザギの前に立ち塞がる。しかしメビウスのカラータイマーも既に赤く点滅を繰り返していた。

『詰まらんな…』

ザギは心底詰まらなそうに首を捻ると空を見上げ、

『ポンコツ共では、再生した身体のウォーミングアップにもならん…お前達の相手はこれで充分だろう…？』

その言葉と共に、背中のザギイージスが闇色の雷光を放った。

『何だ！？』

『空間が歪む？』

ゼロとメビウスは異様な気配に辺りを見回した。ザギの雷光が周囲に空間異常を発生させている。

『あれは！？』

メビウスは身構えた。空間が歪み、次々と巨大な影がザギの周りに現れる。無数の奇怪な吠え声が轟いた。

『スペースビースト！』

ゼロは拳を握り締めた。ザギの周囲におびただしい数のビーストの群れが出現していた。

巨大な悪魔の如き翼を広げ宙に浮かぶ『ザ・ワン』を筆頭に、最強ビースト『イズマイル』や『ガルベロス』『ペドレオン』『ゴル

ゴレム』などと言った、無数のビーストが唸り声を上げている。

優に５０を超える数だ。海鳴湾が異形の怪物の群れで溢れていた。

凶暴極まりない眼光が薄闇に光り、聞くだにおぞましい唸りや軋み音が大音唱となって辺りに木霊する。正に悪魔の軍団であった。

時間と空間を操るザギイージスで、他の世界から呼び寄せたビーストの群れである。

『お前達…アイツらの相手をしてやれ…片付けた後は結界を出て好きに暴れるがいい…』

そう言い残すと、ザギの巨体がフワリと宙に舞い上がった。

『待ちやがれ…！』

ゼロは身体に鞭打って、ザギを追おうと辛うじて立ち上がる。

『死に損ないはそいつらと遊んでいろ。我は復調具合を確かめんとな…』

ザギは眼中に無いとばかりに吐き捨てると、一気に上昇した。結界をすり抜け、凄まじいスピードで上空へと飛んで行く。

「まさか…アースラに…？」

クロノは衛星軌道上で待機している筈のアースラに思い当たった。

「アースラは『アルカンシェル』を積んでいる…まさか真っ向からやり合うつもりか！？」

だがそれなら勝ち目は有る。クロノは急ぎアースラに通信を送った。

「艦長、高エネルギー体接近！物凄い速度で近付いて来ます！後2分足らずで本艦と接触します！」

エイミィの緊張した声がアースラブリッジに響く。クロノからの連絡を受けたアースラでは、ザギにアルカンシェルを撃ち込むべく準備を整えていた。

とても地上で使える代物では無いが、わざわざ相手が宇宙空間まで来てくれるとなれば、遠慮無く使用出来る。

「どんな存在でも、アルカンシェルの直撃を受けて無事に済む訳に

は行かないわ！」

リンディは確信していた。アルカンシェルは発動地点を中心に、百数十キロメートル範囲の空間を歪曲させながら、反応消滅させる管理局最大の破壊力を持つ切り札だ。

地上に向けて撃ったなら、地図を書き換えなければならない程の威力がある。いくら闇の巨人とは言え、まともに食らえばひとたまりも有るまい。

さすがにリンディも死んだ筈の夫まで利用され、心穏やかでは居られなかった。

「艦長、ザギ来ます！アルカンシェル、バレル展開！」

エイミィの操作で、アースラの二股に別れた船首の先に、魔法陣のリングが展開される。それとほぼ同時に、漆黒の巨人がアースラの前に悠然と姿を現した。

「アイアリング・システムオープン…」

リンディの声紋に反応し、拳大のボックス型の起動装置が彼女の前に現れた。そのボックスに起動キーを差し込む。

自分の力を過信している、リンディはザギを見てそう思った。チ

ヤンスは今だ。

「命中確認後、反応前に安全距離まで退避します…準備を」

アースラの船首に魔力が集中し、強大な魔力が形成された。ザギは動かず撃って来いとばかりに、アースラに対峙する。

（クライド…）

リンディは正面モニターに映る漆黒の巨人を見据えると、自らの感情を込めて一気に発射キーを回した。

「アルカンシェル発射!!」

アースラから凄まじい魔力砲撃がザギ目掛けて発射された。光の束が宇宙空間を翔ける。その一撃は狙い違わず、一直線にザギに炸裂した。

宇宙空間を揺るがして、凄まじい閃光と衝撃波が轟き、ザギの姿は光の中に消えた。

やった!クルーの誰もがそう思った。しかし次の瞬間、その表情が驚愕に変わった。

《フハハハハッ!この程度か…!?》

ザギの嘲る響きの声が艦内に響く。モニターに片手を突き出した無傷のザギが、微動だにせず浮かんでいた。
アルカンシェルの砲撃を片手で跳ね返してしまったのだ。

（あ…悪魔……）

その人知を超えた力の前に、リンディ以下アースラクルーは本能的な恐怖に身を震わせた。
暗黒の宇宙に浮かぶ漆黒の巨人は、正に悪魔を超えた冥府の王『冥王』であった。

『このままでは慣らしにもならんな…』

ザギはそう呟くと、背中のザギイージスが再び雷光を発し始めた。

「艦長！ザギから測定不能な程の高エネルギーが発せられています！大規模な次元干渉が発生しつつあります！」

エイミィはセンサー数値を見て悲鳴に近い声を上げた。有り得ない程にエネルギーが上昇して行く。空間が悲鳴を上げているようであった。

「一体何が…？急いでザギから離れるのよ！」

リンディは後退指示を出しながら、空恐ろしい不吉なものを感じ、雷光を発する漆黒の巨人の姿から目が離せなかった。

『ぐわあっ！』

ゼロはゴルゴレムの、巌のような身体の体当たりを食らって跳ね飛ばされた。

吹き飛ばされた所にペドレオン数匹の火球が襲う。ゼロは成す術も無い。

『ゼロッ！』

メビウスはゼロを救うべく『メビュームブレード』を形成し、ビーストの群れに斬り込んだ。

光の剣にペドレオン数匹が身体を両断されるが、背後から無数の触手が素速く伸び、メビウスを絡め取ってしまう。

海洋生物を無理矢理混ぜて、こねまわしたようなおぞましい姿、クトゥーラはそのままメビウスをギリギリと締め上げる。
間髪入れずビースト群からの一斉射撃がメビウスに炸裂した。

『ウアアッッ！』

メビウスは海水を巻き上げて倒れ込んでしまう。カラータイマーが激しく点滅していた。

『クソッ…』

ゼロは白煙を上げながら、ヨロヨロと身を起こそうとするが、身体に力が入らなかった。

そこにバンピレラが昆虫のような外殻を軋ませて、糸を吐き掛ける。ゼロは動けない。

「デアボリック・エミッション！」

少女の凛とした声が響くと同時に、吐かれた糸とバンピレラ、更にゼロの周りのビースト群に、闇色の巨大な球が炸裂した。

空間破砕魔法。糸は切断され、バンピレラや他のビーストも衝撃に弾き飛ばされた。
倒すまでには至らなかったが、ダメージを負ったようだ。

『はやて！？』

ゼロは目の前に浮かぶ少女に驚いた。ゼロの前に、６枚の漆黒の羽根を広げたはやてが、金色の杖を掲げて立ち塞がっていた。

「ゼロ兄は戦える状態や無い！今は私に任せて！」

はやてはそう叫ぶと、ビーストの大群と対峙した。ゼロは焦って叫ぶ。

『無茶だはやて！数が多すぎる、俺に構わず逃げるんだ！』

「そないな事出来る訳無いやろっ、大丈夫や！」

はやては肩越しに頼もしく応えると、再びビーストに向き直った。彼女の前に蠢く異形の怪物の群れ。

凄まじい害意と悪意の渦が自分に向いているのを彼女は感じた。

（アハハ…想像以上に怖いな……）

はやては自分を鼓舞しようと、笑みを浮かべるが引きつっているのが判る。

更に自分の身体がカタカタ震えているのに気付いた。初の実戦でおぞましいビーストが相手では無理も無い。

だが彼女にはゼロを置いて行く事の方が遥かに怖かった。先程の血塗れの少年の姿が脳裏をよぎる。
はやては震えを止めようと深呼吸をしようとした時、ふと温かい気配を周囲に感じた。

（そうや…私だけや無かったな…）

隣に目をやるはやての目に、守護騎士ヴォルケンリッター全員の姿が入った。

ゼロの前にはやて以下ヴォルケンリッター全員が、庇うように浮かんでいる。自殺行為にしか見えないゼロは焦り、

『馬鹿何やってる!?逃げろ!!数が…』

「ふざけた事を言うなゼロ！」

シグナムが言葉を遮って、本当に怒ってゼロを怒鳴りつけた。

「何カッコ付けてんだよゼロ!!」

ヴィータがアイゼンを構えてニヤリと振り向いた。

「出だしはさせません！」

シャマルも盾を前面に張り巡らせて、キッとビーストの大群を睨む。

「楯の守護獣の名に賭けて、一歩も通さん！」

ザフィーラも拳を握り締め、ビーストの群れに向かって雄々しく吼えた。

『お前ら……』

感極まったゼロだが、そんな事を思っている状況ではないと思い直す。しかしはやて達に続く者達が居た。

「はああっ！」

「やらせない！！」

フェイトとなのはは倒れたメビウスを助ける為、砲撃を周囲のビーストに叩き込む。

着弾する砲撃に怯む怪物達の隙をメビウスは見逃さず、ビーストの群れから逃れた。

追撃を掛けようとしたビーストに、光る鎖が巻き付き動きを封じる。

「恩人を置いて逃げるようなスクライアの人間は居ない！！」

「アタシらも居るよ！」

ユーノとアルフもバインドで力の限りビーストを抑える。誰1人退こうとする者は居ない。

クロノも安全な場所に、グレアムとリーゼ姉妹を寝かせると、戦いの場に向かおうとする。

だが状況は絶望的だった。あまりにビーストの数が多い。集中攻撃すればはやて達もビーストを倒せる。しかし魔力が保たないだろう。

不気味な唸り声を上げビースト群はじりじりと包囲を狭める。おぞましい姿がゼロ達に迫った。

宙に浮かぶザ・ワンが空気を震わせて大音量で吠えた。それを合図に、ビーストは一斉にゼロ達に殺到した。

「ブラッディー・ダガー！」

「エクセリオンバスター！」

「トライデント・スマッシャアアッ！」

各自の砲撃魔法が炸裂する、しかしビーストの怒涛の勢いを止める事は出来ない。

『ちくしょう…！』

ゼロは立ち上がろうとするが、既に限界の身体は全く言う事を聞かなかった。

『クッ…！』

メビウスも立ち向かおうと拳を握り締めるが、エネルギーがもう無い。カラータイマーが激しく点滅する。海を揺るがしビーストが迫る。

「キャアアアっ！？」

凄まじい勢いで突進して来たバグバズン・グローラーの火球に魔法障壁を破られたはやてに、グローラーの鋭い爪が振り下ろされた。

『はやてえええっ！！』

動けないゼロの悲痛な叫びが木霊した。シグナム達も間に合わない。その一撃は少女の身体を原型も留めずに引き裂くであろう。

はやては思わず目を瞑った。その時である。

闇を切り裂いて白銀の光が夜天の空を翔けた。

光ははやてを斬り裂かんとしていたグローラーの頭部を、鋭利な刃物の如く両断した。

どす黒い体液を噴き出し、声も無く崩れ落ちるグローラーから、切断した光がブーメランのように飛来した元の場所に戻って行く。

はやての目に一瞬だけ見えたその形は、ゼロスラッガーとまったく同じ形をしていた。

闇夜に真紅の巨大な姿が一瞬浮かび上がる。その姿を認めたゼロは驚愕した。

『まさか…あれは…？』

鋭い光は天に浮かぶ真紅の巨人の頭部に、ガッシリと装着された。

『アイスラッガーッ！親父いっ！！』

天空にそびえる真紅の巨人。ゼロの父『ウルトラセブン』の姿が其処に在った。

『イヤアアアッ！！』

『ハアアアッ！！』

裂帛の気合いと共に2つの赤い影が宙を舞うと、ビーストが次々と首を吹き飛ばされ大爆発を起こした。

水柱を上げ、海面に降り立つ良く似た姿を持つ2人の巨人戦士、ゼロの師匠『ウルトラマンレオ』に『アストラ』であった。

予期せぬ事態に焦ったのか、ガルベロスは近くのフェイトとなのは目掛け、火球を次々と発射した。

巨人の出現に気を取られ、不意を突かれた2人は反応が遅れてしまう。

連続して火球が命中し爆発が起こった。しかしフェイトとなのはに何の衝撃も無い。

「…？」

「えっ…？」

気が付くと2人の目の前に、攻撃にびくともしない巨大な白銀の背中が在った。

『しゃらくせえ！俺の体は全身が鎧、そんなもの通じん！！』

白銀の鎧を身に纏い、西洋の騎士のような兜と、笑みを浮かべた人間の顔を模した黒い仮面を着けた巨人は、不遜に啖呵を切った。

『ウルトラマンメロス』参上。

『間に合った…』

メビウスは集結した戦士達の姿を認め呟いた。それは駆け付けたウルトラ戦士達の勇姿であった。

つづく

第６１話　冥王ーダークザギー（後書き）

実はザギの化けた孤門の姿も孤門ですら無かったという事で。クライドの身体を乗っ取っていました。（石堀と一緒）

ウルトラ戦士…セブンやレオ、アストラは外せないだろうとは思いますが、何故メロス?誰?とか思った方も居るでしょう。

ウルトラマンメロス（本名アンドロメロス…こっちを使うと緑のヤツと混じってややこしいので…）ウルトラ漫画の第一人者、内山まもる先生執筆の『ザ・ウルトラマン』に登場した鎧を着たウルトラマンです。

何となく声のイメージ的に、かっこいい声を出してる若本紀夫さんっぽいイメージ?（もしくはヴァイスの中の人…?

好きなんですよメロス…微妙ですんません（笑）

それでは次回お会いしましょう。

第６２話　決戦ーフェアウエルー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
ひたすら登場人物が多い、第６２話をどうぞ。

第６２話　決戦－フェアウエル－

『ウルトラの星作戦だ！！』

上空のセブンの合図の元、レオ、アストラ、メロスの３人のウルトラ戦士は、周囲のビーストを蹴散らして、一斉に飛び上がった。

空中で４体の巨人が交差し、眩いばかりのスパークが天空を疾る。その閃光は光のシャワーとなって、ゼロとメビウスに降り注いだ。

『ありがてえ！』

ゼロは全身に力が漲（みなぎ）るのを感じ、拳を握り締めた。

限界寸前だった２人の身体が、光のシャワーを浴びて、みるみる回復して行く。カラータイマーの点滅が緩やかになり、再び元の青の状態に戻った。

『ウルトラの星作戦』（スパークロック）

ウルトラ戦士達のエネルギー回復の為の共同技である。

互いの身体をスパークさせる事により、強力なエネルギー波を作り出し、仲間のエネルギー回復を行うのだ。

以前『ナックル星人』と『ブラックキング』に敗れ、処刑寸前の

『ウルトラマンジャック』を復活させたものと同一の技である。

回復したゼロとメビウスは力強く立ち上がり、ビーストの大群に対峙した。

怪物の群れは予期せぬ新手の敵を警戒し、ウルトラ戦士達と睨み合う形になった。

「ゼロ兄ぃっ！」

『わりい…心配掛けたなはやて…』

ゼロは嬉しそうに呼び掛ける6枚羽根の少女に、自分の不甲斐なさを詫びた。

「ううん……」

はやては照れたようにはにかんだ笑顔を浮かべ、コクコクとただ頷いた。

『ゼロッ！』

そんなゼロ達の隣に、真紅の巨体が降り立つ。父『ウルトラセブン』である。

『親父…何で此処に…？』

胸がいっぱいなのか、若干照れくさそうに聞いて来るゼロに、セブンは心無し目の光を軟らかくし、

『メビウスが次元転移用ブレスレットのエネルギーを使って、『ウルトラサイン』を送って来たのだよ…お陰でどうやら間に合ったようだな…？』

メビウスがブレスレットのエネルギーを使ってしまったのは、この為だったのだ。メビウス様々である。

『大体の状況は今メビウスから伝えられた…『ダークザギ』は今衛星軌道上で、管理局の船と戦闘中らしい。大規模な空間異常も起こっている』

セブンの説明に、ゼロも確かに異常な空間異常を感じ取った。

『不味い、このままだとアースラがやられちまう！奴め何をするつもりだ！？』

ゼロは憤りで拳を握り締める。その腕に輝く白銀のブレスレットが目に入った。ノアから授けられた『ウルティメイト・イージス』

『親父ビーストを頼む！俺はまずアースラをザギから守る！！』

『単独でザギと戦うのは無茶だ！』

セブンは難色を示した。彼は以前ザギともやり合った事がある。冥王の恐ろしさは良く判っていた。心配する父親にゼロは、ブレスレットを示し、

『俺には『ウルトラマンノア』から貰った力『ウルティメイト・イージス』が有る！無理はしねえよ。まずはアースラを助けて来る！！』

言うが早いが宙に舞い上がった。彼なりに考えた結果である。この場はイージスを持っている自分が適任だと思ったのだ。

ザギを抑えている間にビーストを全滅させれば、全員でザギに当たる事も出来る筈である。

ふと此方を見上げるはやて達を見下ろすと、

『気を付けろよ…此処は任せる！』

「任せてなゼロ兄ぃっ、そっちも気い付けてな？」

はやて以下全員は頼もしく応えた。ゼロも満足そうに頷く。
父セブン達とみんなが居ればビーストを倒せるとゼロは確信していた。

これが初陣になるはやてが少し心配だが、リインフォースがサポートしてくれる上シグナム達が居る。はやても退く気は全く無い。

心配するのは却って失礼だと思った。彼女も今まで直接戦ってこそいなかったが、間違い無く共に戦って来たのだ。

『待ってろザギィッ!!』

ゼロは高速で一気に暗い空へと上昇した。その姿がテレポートで掻き消える。結界を突破して行ったのだ。

ビースト達に後を追う気配は無い。まるで冥王に手助けなど必要無いと言うように。

『ゼロ…』

セブンは満足に再開の言葉も交わさなかった息子を想い、ひっそりと呟いた。
しかし久し振りに再開した息子は、随分成長して見えた。きっと様々な経験をしたのだろう。今はそれを信じて任せるしか無い。

今は目前のビーストの群れを倒すのが先決だった。放って置けば結界を破り、街に上陸されてしまう。セブンは両拳を構えビースト

に対峙した。

「あっ…なのはちゃん、フェイトちゃん…シャマル？」

ウルトラ戦士達が、ビーストと一触即発の睨み合いを続ける中、フェイト達の消耗に気付いたはやてはシャマルに声を掛けた。察したシャマルは微笑んで、

「はい２人の治療ですね？」

シャマルは『クラール・ヴィント』の能力で、戦闘で消耗したフェイト達の回復を行う。

緑の柔らかい光に包まれると、２人の傷が癒えバリアジャケットが修復された。魔力もある程度回復したようである。

「湖の騎士シャマルとクラール・ヴィント。癒やしと補助が本領です」

ニッコリ笑うシャマルに、フェイトとなのはは感謝した。ゼロも何度もお世話になった癒やしの風である。

此方の態勢が整った所ではやては思案した。少し躊躇していたが決心すると、睨み合いを続けるセブンに念話で話し掛ける。
話に聞いていた特徴にアイスラッガー間違いないと思った。

《あのう…ウルトラセブンさん…ゼロ兄のお父さんですよね？私は八神はやて言います。お話が有るんですが…》

《その通りゼロの父だよ。息子が世話になっているらしいね感謝するよ…それで話しとは何かね…？》

はやての頭に渋みの有る、何処か優しげな声が響いた。油断無く身構えながらも、テレパシーで応えてくれたのだ。
はやては何だか少しホッとし、歴戦の勇士に気になった事を聞く。

《お父さん達もゼロ兄と同じく、地球上ではあまり長くは戦えないんですよね…？》

《その通りだよ…ブレスレットの予備エネルギーを使っても、そう長くは動けない…メロスはかなり長く動けるが、他の者はそれ程保たない…》

《ほんなら最初は私に任せて貰えませんか？》

セブンの巨大な顔の隣に移動したはやては、デバイスを構えてビーストを臨みながら提案した。

《ほお…？》

セブンは感心したように声を洩らす。小さな少女がこんな提案をして来るとは思わなかったのだろう。

メビウスとレオの2人にも、感心したような様子が伺える。

はやては少し緊張したが、今の状況では臆してる場合では無いと自分を奮い立たせ、

《私はかなり広い範囲を纏めて攻撃出来ます。ビーストは再生能力が高いから、倒すまでには行かへんでしょうけど、かなりのダメージを与えられる思います。

ウルトラマンの皆さんとシグナム達は、その弱った後に攻め込むのはどないでしょうか…？》

遠距離攻撃で敵のＨＰを削り、その後に主力を投入して全員でタコ殴りという訳だ。

シミレーションゲームの要領と言うか、戦術の基本の戦法である。

味方の被害を少なく、戦力を効果的に使うと言う訳だ。

提案にセブンはチラリと少女を見た。はやては内心馴れ馴れしかったなか？と思いヒヤッとしてしまった。

どうもゼロのイメージが強く、つい親しげに提案してしまったが、戦闘のプロに向かって失礼だろうか？と思ったのである。
だがそんな心配は無用だった。セブンは頷いて、

『ハハハッ、頼もしいお嬢さんだ。どうだみんな？』

『良い手段だと思います…ザギも居る以上、出来るだけ余力は残して置いた方がいい…』

『レオ兄さんと同じく、いい判断だと思います』

『僕も賛成です』

レオとアストラ、メビウスが揃って賛成した。3人は人間と何度も共闘している。人のがんばりを舐めてはいない。
人との共闘経験が無いメロスも、臆せずに意見を言うはやての姿勢が気に入ったらしく、

『フッ…なかなか面白いな嬢ちゃん、乗ったぜ！』

話は決まった。前面に出るはやての周りを守護騎士達が固める。広域魔法を使用する時、はやては無防備になってしまうのだ。

「それなら僕が最初に行こう…」

はやて達の前にクロノが乗り出て来た。グレアム達を安全圏に置いて戻って来たのである。

「時空管理局・執務官クロノ・ハラオウンです。広域型の氷結魔法を使います。かなりのダメージを与える筈なので、全員退避を！」

自己紹介をして皆を退がらせ、クロノは杖状に変化させた『デュランダル』を頭上に構えた。

本来ははやてを、闇の書ごと永久凍結する為に、グレアムが製作させていたデバイスである。

戦闘に向かおうとしたクロノに、グレアムが託したものだ。本来の目的とは違い、本物の悪魔のような存在相手に使われる事になるとは皮肉であった。

動きを見越したビースト群はザ・ワンの吠え声に従い、海を揺るがして一斉に押し寄せて来る。

クロノは恐れず魔法を発動させた。魔法陣が輝き、超低温の冷気が光る結晶となって、ビーストに雪のように降り注ぐ。

「永久なる凍土、凍てつく柩の地に永遠に眠りを与えよ…凍てつけっ！！」

冷気は急速に広がり、海上の無数のビーストを海水ごと、たちまちの内に凍らせた。見渡す限りの範囲が極点の海のように凍り付いている。

だがやはりビーストはしぶとい。凍り付いていたビースト群は、氷を砕いて動き出した。

上空に浮かぶビーストにまで凍結範囲は届かず、再び怪物群は進撃を始める。しかし確実に進撃速度が鈍っていた。

凍結した身体から復活するのに、手間取っているビーストも居る。クロノは消耗し荒く息を吐いた。

その間にはやては、広域魔法の呪文の詠唱を終えていた。天に向かって掲げられた杖の剣十字に、闇色の魔法光が煌めく。

リインと融合しているはやてには、コントロールが難しい魔法も難なく使う事が出来た。リインが細かい調整などをしてくれるお陰である。

はやては初戦闘の恐怖を超え高揚していた。漸くみんなと一緒に戦える。誰かを守る為に…

その想いのありったけを込めて、はやては叫んだ。

「響け終焉の笛…ラグナロク！」

雷のような光と音を発して魔法光が輝き、前面に展開されたベルカ式の三角形の魔法陣から、凄まじいばかりの光の砲撃が、次々と発射された。

撃ち出された砲撃は、ビーストの大群に豪雨の如く降り注ぐ。着弾し陣形を崩してしまう怪物達の、おぞましい声が轟いた。

「すっげーはやて！」

視界を埋め尽くす砲撃の雨にヴィータは歓声を上げた。

「お見事です…主はやて…」

シグナムは目の前のはやてを見つめ、感慨深く呟いた。

「はやてちゃん…」

シャマルは涙ぐみ、ザフィーラも無言の中に確かな感動を滲ませていた。その凛とした姿は、まさしく彼女達の主であった。

フェイトとなのはは、友人の凄まじい魔力に感嘆している。

二度に渡る広域攻撃に、かなりの数のビーストの動きが明らかに鈍くなった。負傷し流血している個体も居る。

大した火力であった。都市破壊レベルの破壊力である。

砲撃が止んだ。はやては大きく息を吐いた。大掛かりな魔法を使

い『夜天の魔導書』の頁が一時的に白紙になっていた。
暫く回復時間を置く必要がある。しかし成果は充分であった。

『良くやったはやてちゃん！良し今だっ！！』

セブンの合図と共に、ウルトラ戦士達は阿云の呼吸で一斉に飛び出した。

「シャマルは主を一旦後方に！我らも行くぞ。テスタロッサ着いて来れるか！？」

「勿論です！」

シャマルに指示を出し、敵陣に突撃するシグナムに並び、フェイトは笑みを浮かべた。シグナムは不敵に笑い返す。

2人は目前の『クゥトーラ』目掛けて高速で突っ込んだ。

「遅れんなよ高町なのは！」

同じくビースト群に突入するヴィータは、隣を飛ぶなのはに発破を掛ける。初めてまともに名前を呼んでいた。

「ヴィータちゃんこそ！」

それに気付いたなのはは、嬉しさに表情をほころばせながらも、しっかりと返しておいた。

「アタシ達はサポート班だ！足止め行くよぉっ！！」

「おおっ！！」

「判った！」

アルフの指示に、ザフィーラとユーノも飛び出した。アルフとユーノが繰り出した光の鎖『チェーンバインド』が、前衛のビーストの脚に絡み付く。

続いてザフィーラが、両腕をガッチリとクロスさせた。その前面にベルカの魔法陣が輝く。

「縛れ、鋼のくびきぃっ！デイヤアアッ！！」

放たれた魔法障壁は刃となり、ビースト群の両脚を斬り裂きダメージを負わせる。進撃が停まった。

そこを狙い、間髪入れず踊り込んだセブンのハンマーパンチが『バグバズン・グローラー』２匹に砲弾の如く打ち込まれる。

吹き飛ばされ、海に倒れ込むバグバズンにセブンは『アイスラッガー』を投擲した。

死の刃と化したアイスラッガーは、ビースト２匹の首を僅かな時間差で切り落とす。

止めとばかりに額のビームランプから緑の光のライン『エメリウム光線』が発射され、ビーストを粉微塵に吹き飛ばした。

流石に歴戦の勇士ウルトラセブンの動きは、流れるように無駄が無い。

「ガアアアアアアッ！！」

怒り狂った叫び声を上げ『ザ・ワン』が悪魔の如き羽根を羽ばたかせ、セブンに向け急降下して来る。

そのおぞましい口から青い火球が連続して発射された。

火球はセブンごと海面に次々と着弾し、爆発したように海水が飛び散った。水蒸気がもうもうと立ち込める。

海面ギリギリで上昇を掛けたザ・ワンは仕留めたと確信していた。

しかし次の瞬間その醜悪な顔に驚いたような表情が浮かぶ。

セブンがザ・ワンの直ぐ背後にピタリと平行して飛行していた。

火球の攻撃を素早く避けて飛び上がり、背後に回っていたのだ。

背後のセブンは反撃の隙を与えず、ザ・ワンの巨大な羽根を強引に鷲掴みにする。

腕の中で翼が荒れ狂い必死に羽ばたこうとするが、セブンはその強靭な腕に力を込めた。両腕の筋肉がミリミリと瘤のように盛り上がる。

『ダアアアアアッ！！』

ザ・ワンの両羽根が、怪力で根元から引き千切られた。

どす黒い血を撒き散らしながら怪物は、真っ逆様に海面に落下する。盛大な水柱が上がった。

しかし流石にザ・ワンはしぶとい。落下の衝撃に耐え、牙を剥き出しにして猛然と立ち上がる。

だが時既に遅し。目前に両腕をＬ字形に組んだ、セブンの姿が在った。それがザ・ワンがこの世で最期に見た光景となった。

セブンの右腕から放たれる光の束。『ワイドショット』が怪物の巨体を分子レベルにまで分解する。文字通り跡形も無く、ザ・ワンは崩れ去った。

盛大な飛沫を上げ疾走するメロスに、空中から飛行形態の『ペドレオン・フリーゲン』２匹が降下して来る。頭上に火球を形成していた。爆撃を仕掛ける気のようだ。

メロスは迫る敵を不敵に見上げ、肩部にセットされている、一対のサスペンダー状パーツのロックボタンを解除した。

『おっと、攻撃はこっちが先だ！』

サスペンダー状のパーツがバーのように跳ね上がり、その先端部の二門の発射口から鋭い光が放たれる。

その光の砲撃を浴びたペドレオン２匹は、一撃で粘液状の身体を蒸発させられてしまった。

『見たか！アンドロレーザーＮ７５！！』

不敵に笑みを浮かべるメロスの仮面が、本当に笑っているかのようだ。

隙有りと見たのか、背後から『ゴルゴレム』が体当たりを仕掛けて来る。

メロスは突進を軽くいなし、電光の速さで腹部のＷ形の着脱武器を取り外し投擲した。

『アンドラン！』

着脱武器アンドランは鋭いブーメランとなり、ゴルゴレムの岩石のような強固な身体を、バターのように真っ二つにする。
別の異相空間に逃げ込む暇も無い程の鮮やかな早業だ。

内部の破壊光線精製器官をも切断され、粉々に吹き飛ぶゴルゴレム。
その爆煙を突き破り『イズマエル』が奇声を上げてメロスに襲い掛かる。

その身体に合体している無数のビーストの頭から、一斉に破壊光線と火炎砲撃がメロスを襲った。凄まじいばかりの火力である。

攻撃をまともに食らい、メロスは爆発の中に消えてしまった。辺りを爆発が包む。
周囲のビーストも何匹か巻き添えを食らい、消し飛んでしまった。

『フフフ……』

爆煙の中から不敵な含み笑いが響いた。煙が晴れると無傷の白銀の鎧姿が現れる。ビクともしていない。驚くべき防御力であった。

『俺には通じないぜ！今度はこっちの番だな！？』

メロスは両腕を斜めに広げた。その身体にエネルギーが集中する。更に鎧の強化システムにより、エネルギーが強化増幅されて行く。

らちが開かないと思ったのか、イズマエルがメロスに突進して来た。

身体の各部のビーストの頭が牙を剥き、砲弾のように触手が放たれる。
メロスは動かず、両手を静かに前面でクロスさせた。
『レーザーショット…』
イズマエルの触手が牙が、メロスに襲い掛かろうとした瞬間。
『アンドロメロスッ!!』
クロスした両手から、竜巻状の凄まじいまでの勢いの光線が、イズマエルに叩き込まれた。
光線の嵐に全身をバラバラに引き裂かれ、イズマエルは跡形も無く吹き飛んだ。
メビウスが光の剣『メビュームブレード』を振るう。
肩口を切り裂かれた『リザリアス』は、とっさに牙のビッシリと生えた口から熱線を吐く。
メビウスは側転して素早く熱線をかわし、両腕にエネルギーを集中させた。
エネルギーが無限大の文字のような光を発し、メビウスは両腕を十字に組む。

『セアアッ！！』

組んだ両腕からほとばしる光の奔流。メビウスの得意技『メビュームシュート』がリザリアスを焼き尽くした。

『エイヤアアッ！！』

『ハアアアッ！！』

レオとアストラの巨体が宙を舞う。重力を無視したかのような、アクロバティックな動きだ。

降下したレオの手刀が赤熱化する。レオの得意技『ハンドスライサー』だ。

振り下ろされた手刀が『バンピレラ』の昆虫のような外骨格の身体を真っ二つに切り裂く。

アストラも負けじと両手刀を赤熱化させ『グランテラ』に『アストラチョップ』を叩き込む。

グランテラは肩口から身体を3つに切断され崩れ落ちた。

『アストラ行くぞ！』

『おおっ、兄さん！』

レオの合図にアストラは片膝を着き、両手を頭上に伸ばす。その背後に素早く降り立ったレオは、アストラの両手に自分の手をクロスさせた。

2人のクロスした手から稲妻形の光線が放たれ、正面の3匹のペドレオン達が纏めて大爆発を起こす。

レオ兄弟の合体光線『ダブルフラッシャー』である。

目前の敵を撃破したレオは、コンマ1秒の遅れも無く海水を巻き上げて、素早く宙に飛び上がった。

『イヤアアッ！！』

レオの真っ赤に赤熱化した脚が闇夜を翔ける。『レオキック』

その強烈極まりない蹴りの前に、ビーストが次々と上半身を首ごと叩き潰され爆砕する。

その動作には一切隙が無い。まるで剣豪のように研ぎ澄まされた、技と動作であった。

「あの動き…なる程…ゼロの師匠のウルトラマンレオとは彼か…凄みさえ感じられる技だな…」

フェイトと共に『レヴァンティン』を振るうシグナムは、レオの戦闘スタイルにゼロと共通点を見付け感嘆していた。

（相当な修羅場を潜り抜けて来たと見受けられる…世の中は広い…私もまだまだだな！）

自然シグナムは戦鬼の笑みを浮かべていた。まだまだ自分は強くなってみせると、静かな闘志が湧き上がった。

（見ているがいい！必ず主は守り抜く！）

シグナムは軽く自分をあしらった女を思い出し心の中で誓う。その闘志のままに前方のクトゥーラに向かった。

「テスタロッサ、狙いは奴の頭部だ！」

「ハイッ！」

フェイトは即座に応えると、クトゥーラの頭部に注目した。度重なる広域攻撃に頭部からどす黒い血を流している。

「レヴァンティン、カートリッジロード！」

《Ｓｔｏｒｍ　Ｆａｌｃｏｎ！》

クトゥーラの触手をかい潜り、シグナムはレヴァンティンを洋弓の形をした、『ボーゲンフォルム』に変化させ弓を引き絞る。

「疾風迅雷っ！」

フェイトも大剣ザンバーフォームに変化させた『バルディッシュ』を後ろに大きく振りかぶった。

「翔けよ、隼っ！！」

「ジェットザンバァァァッ！！」

シグナムとフェイトの、最大級の破壊力を誇る砲撃魔法が頭部に炸裂し、クトゥーラの頭は爆発したように砕け散った。

「轟天！爆砕！ギガントシュラァァクッ！！」

ヴィータの掲げた『グラーフ・アイゼン』のハンマー部が、数十メートルまで巨大化する。

その大きさは、ウルトラマンが持った方が丁度いい程の巨大さだ。

「うおおおおっ！！」

振りかぶった巨大なハンマーが『メガフラシ』に叩き込まれた。

脆くなっていたオウム貝のような外殻に亀裂が入る。

「行っけえっ、高町なのはぁっ！！」

ヴィータは後方で魔力を収束していたなのはに合図を送る。

「行くよヴィータちゃん！全力全開！スターライト・ブレイカァァァッ！！」

凄まじい桜色の砲撃がメガフラシに炸裂し、怪物は外殻を粉々に砕かれ中身ごと砕け散った。

ーーーーーーーーーーーー

「か…艦長！ザギの測定不能な量のエネルギー波により、各次元空間に歪みが発生しています！」

一方、アースラブリッジで正面のザギを見据えるリンディに、エイミィの緊張した響きの報告が入る。

リンディは握り締めた手が、震えてしまうのを感じながらも、

「次元断層が発生する前触れなの！？」

「いえっ…それとはまた違います…まるで管理世界が何処か別の世界と繋がって行くような…」

リンディの問いにエイミィはハッキリと答える事が出来なかった。
こんな現象を見たのは初めてである。有り得ない数値を示す計測器を見て息を呑む。
強いて言うなら、管理世界に巨大なゲートが出来つつある。それが一番近い気がした。

「ザギに更なるエネルギー反応！」

オペレーターの恐怖の入り混じった報告に、リンディがモニターのザギを再び見た。
宇宙空間に浮かぶ、漆黒の巨人の突き出した拳が歪んで見える。
何かの力場を形成しているようだった。

《フハハハハッ…これで管理世界は彼方の世界と繋がった…流石は『ヤプール』の遺産だな、エネルギー効率がいい…
これで管理世界は無数の宇宙人と怪獣が跳梁する戦乱の世界と化す！》

「なっ、何ですって!?」

艦内に響き渡るザギの不吉な宣言に、リンディは顔色を無くす。
ザギは『ザギ・イージス』の力を使い、ゼロ達の世界と管理世界を繋ぐゲートを作り出したのだ。

「何故そんな真似を…!?」

リンディは問わずにはいられなかった。つまりこれから先、管理世界に続々と今まで現れたような、常軌を逸した怪獣達が出現する

と言う事だ。

《限り無き進化の為…より強き敵と戦い更に力を増す…『ウルトラマンノア』を今度こそ倒し、我こそがオリジナルとなる為よ！！》

ザギは元々スペースビーストに対抗する為に造られた人造兵器だ。

生物に取り憑き進化するビーストに対抗する為、戦闘経験を積んで更なる自己進化を遂げる事が可能なのである。

その為に管理世界を、己の戦闘経験値稼ぎの為の狩り場にしようと言うのだ。

「狂ってる…そんな勝手な理屈！」

憤るリンディはザギを睨むが『アルカンシェル』すら通用しない怪物にどう対抗すればいいのか、見当も付かない。

ザギはリンディ達の無力を嘲笑うように、拳をアースラに向けた。

その拳の先に重力波が集中し空間が歪む。

超重力波動を撃ち出し対象を押し潰す『グラビティ・ザギ』だ。

アースラの防御フィールドなど、船ごと容易く押し潰してしまうだろう。

『沈め…！』

常軌を逸した重力波動がアースラに向け発射された。回避も間に合わない。

いや…回避出来たとしても、重力波の余波だけで撃沈されてしまうだろう。

アースラに迫る死の一撃。リンディは死を覚悟した。しかしその時！

『させるかあああっ！！』

いずこからか発せられた、強烈な光の激流が重力波に命中した。光と重力波は対消滅を起こし、宇宙空間に花火のように眩しい閃光と衝撃波をぶちまける。

『ワイドゼロショット』の一撃がグラビティ・ザギを防いだのだ。

『ほう…？生きていたか……』

ザギはアースラの前に盾となって浮かぶ巨人を認め、少し感心したように呟く。

『貴様だけは絶対に許さん！！』

巨人ウルトラマンゼロは、炎のような怒りを込めて漆黒の巨人に啖呵を切った。

つづく

第６２話　決戦ーフェアウエルー（後書き）

一応メロスについて書いておきます。

身長４５メートル、体重４万５千トン

全身を強固な鎧で覆っている。目鼻口が有る黒い仮面を着けている。鎧はブラックホールの高重力に耐え、装着者の力を強化するらしい。両肩のアーマーが特に堅牢。製作者不明。最近神秘の鎧という追加設定が加わった。

腕のブレスレットで自在に脱着可能。役職はアンドロメダ星雲支部隊長。

中身はウルトラマンゼノンに似ている。ゼノンのデザイナーさんが、メロスを意識してデザインした為である。（最初メロスを出す予定もあったらしい）

小劇場

駆け付けたウルトラ戦士達。心強い援軍である。しかしそれを見たはやては、

「大変やゼロ兄ぃっ！」

『どーしたはやて？』

「明らかに偽物が１人混じっとる！」

『誰が偽物だ！餓鬼ぃっ！これは鎧だ！鎧！！』↑メロス

完

失礼しました。1人だけあんまり違うから、こう思われも仕方ないかも？という事で。
それでは次回お会いしましょう。

第６３話　夜天一ゼロ一（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
ウルトラマン列伝で、ベリアル銀河帝国を丸々やるそうでめでたいです。

１１月はビートスターも発売ですから、ウルトラ盛り上がって欲しいです。
（なのはの映画の情報は無いなあ…）

それでは第６３話をどうぞ。

第６３話　夜天ー ゼロ ー

ゴーストタウンと化した色の無い街に、得体の知れない笑い声が響き渡っていた。

『闇の書』暴走に因る火柱は、ザギが防衛プログラムを吸収してしまった事と『アースラ』局員達に消し止められ、今街には無気味な笑いだけが木霊している。

そんな中、海辺で肩を寄せ合って震えている、２人の少女の姿があった。すずかとアリサである。

まだ空間が安定せず、結界の外に転送出来ない為、一旦街中から離れたこの場所に転送されていたのだ。

２人はその異様な笑い声に震えが止まらなかった。

２人の生存本能が近付いてはならないものに対し、警告を発しているようだった。

まるで悪魔が、歓喜の哄笑を上げているような声。

哄笑は無人の街に銅鑼のように響き、わんわんと鼓膜に、いや…頭の中に直線響いた。

声が響いて来るのは沖合いの方らしかった。２人は恐る恐る、沖合いに視線を向けてみる。

凶々しい気配が漂っていた。叫びとは別に無気味な吼孔が、潮風に乗って微かに流れて来る。

それは2人の少女を恐怖に陥れるには充分だった。

「逃げようすずか！」

アリサがすずかの手を引き、沖合いから出来るだけ離れようとする。

手を引かれるすずかは、憑かれたように沖合を見続けていたが、ふと沖合いを指差し、

「見てアリサちゃん！」

アリサも釣られて足を止め沖合いに視線をやる。眩いばかりの光が沖合いを照らし出していた。

「綺麗……」

暗い海に、闇を祓うような暖かな光が溢れていた。天空からの光が、雲間から射し込む太陽の如く海に降り注いでいる。

光が収まると、一直線に天空を駆け上る光が見えた。そして沖合いで無数の光と音が響く。腹に響く振動が2人の足下を揺らした。

彼処になのはとフェイトも居るのだろうか？とすずかは先程逢った友人2人を思い浮かべる。

ふと彼処に、はやてや八神家の人々も一緒に居る気がした。

ーーーーーーーーーー

青い地球をバックに、ゼロは『ダークザギ』と対峙していた。光の戦士と闇の化身が宇宙空間に浮かぶ様は、幻想的ですらあった。

ゼロは左手を突き出し『レオ拳法』の構えを取る。怒りに任せて突撃するのは簡単だ。しかしそんな生易しい相手では無いという事は判っている。

相手は『光の国』を一度は危機に陥らせた程の強敵だ。向かい合っているだけで、凶々しく圧倒的な圧力を感じた。

冷静さを欠いては、あっという間に叩き潰されてしまうだろう。時間稼ぎにもならない。

それでは意味が無い。ザギを必ず仕留めなくてはならないのだ。此処で倒せなければ、一体どれほどの犠牲が出るか見当も付かない。

ゼロは全ての感覚を研ぎ澄ます。己を一振りの刀のようにイメージした。そして怒りの全てを拳に込める。

『ウルトラマンレオ』の教えを胸に拳をザギに向けた。

『ククク…千年程しか生きておらぬ小僧にしては、大した気迫だ…あ奴がお前に拘るのも判る気がするな……』

ザギは超然としてゼロの姿勢を評価した。あくまで上から目線の評価ではあるが……

『あ奴…？アックスの事か！？やっぱり野郎も貴様の仲間だったのか！！何者だ奴は！？』

ゼロは思わず激昂していた。アックスを思い出すと、嫌な胸のざわめきを覚えてしまう。

『仲間か……あ奴も妙な奴よ…ある日不意に我の元に現れて、協力を持ち掛けて来よった…
得体は知れんが、交換条件も取るに足りんものであるし、手駒にと思ったが…得体の知れん奴よ……』

ザギもアックスの事は良く知らないらしい。しかし気にも留めていないようだ。今の自分に自信が有るのだろう。

『まあ…奴の事はどうでも良い…どの道お前は此処で死ぬ…奴の出した条件は貴様を殺す事だからな！』

ザギの真紅の両眼がギラリと光を放った。爆発的にその身を包む圧力が増大する。

『やれるもんなら、やってみやがれっ！！』

ゼロの叫びが戦いのゴングとなり、2体の巨人は激突した。
ゼロの巨大な剛腕が、漆黒の巨人に連続して飛ぶ。無音の宇宙空間に衝撃が疾った。

しかし繰り出されるゼロの正拳突きの嵐を、ザギは紙一重で避けてしまう。攻撃が当たらない。

まるであらかじめ、ゼロの動きを読んでいるかのような動きだ。
しかしゼロも、そんな簡単な相手とは思っていない。

突きをかわして、ザギの動きが大きくなった所を狙って、右脚を赤熱化させ『ウルトラゼロキック』の回し蹴りを放つ。

突きはこの為のフェイントだ。炎となったキックが唸りを上げた。

『慣らしには丁度いい…付き合ってやろう！』

ザギは側頭部を狙ったゼロキックを片手で軽々と弾き返し、カウンター気味の拳を繰り出した。

重力波を纏った『ザギ・ナックル』の一撃。真空を切り裂く攻撃を、ゼロは後方に飛び退き、辛うじて避ける。

衝撃波だけで身体を持って行かれそうになる威力。桁違いの破壊力であった。

ゼロは後退しながら『ゼロスラッガー』を連結させ、巨大な半月

刀を形成する。
『ゼロツインソード』出し惜しみをしていられる相手では無い。
『デリャアアアッ！！』
ゼロはツインソードを構え、最大速度でザギに突進した。その刃が眩い光を放つ。『プラズマスパーク・スラッシュ』の斬撃が漆黒の巨人に振り下ろされた。
ザギは動じず、無言で拳に炎を纏わせた。1兆度の炎を纏った拳を叩き付ける『ザギ・インフェルノ』
光の斬撃と地獄の業火の拳が、まともにぶつかり合った。
宇宙空間を、網膜を焼く程の閃光と衝撃波が翔け巡る。
『ウオッ！？』
ゼロは身を襲う衝撃に呻く。ツインソードが、ザギの燃え盛る拳に跳ね上げられる。
その凄まじい威力の前に、ゼロはツインソードごと吹き飛ばされてしまった。
ゼロの巨体が、弾かれたように無重力空間を飛ばされる。
ゼロは辛うじて体勢を立て直し、力場を形成させて制動を掛け踏み止まった。
ツインソードのお陰で直撃は避ける事が出来たが、まともに食らっていたら、こんなものでは済まなかっただろう。
腕が痺れている。ツインソードも今の一撃で元に戻ってしまっていた。以前と状況は同じだが、プラズマスパーク・スラッシュを片

手で破られてしまった事になる。

流石は『冥王』並ではない。地球でノアと戦った時とは確かに比べものにならない。恐るべき戦闘能力であった。完全にゼロを圧倒している。

『貴様との戦闘データは取得済みだ…何をしようと我には通じん…』

ザギは声色に喜色さえ込めて、首をズイッとばかりに突き出した。嘲笑っているかのようだった。

ゼロとの戦闘データを取る為に、偽ネクサスとして何度もぶつかったのだ。完全に動きを見切られている。

『ならばコイツだぁっ！！』

ゼロは怯まず両腕をL字形に組んだ。右腕からほとばしる光の奔流『ワイドゼロショット』をザギに放つ。

ともかく攻撃を続け、自分のペースに巻き込む算段である。嵩に掛かって攻め込まれたら最期だ。

しかしザギの前面に張り巡られた闇色の光の盾に、ゼロショットが遮られてしまう。揺るぎもしない。

『まだまだあっ！！』

ゼロは間髪入れず、頭部の『ゼロスラッガー』２本を胸部に放熱板のようにセットする。

『ゼロ・ツインシュート』！

ザギの防御盾目掛けて、胸部のスラッガーから凄まじい光の激流が放たれた。青白い光が宇宙空間を切り裂き唸りを上げる。

集中しての光線の連続攻撃。リミッター抜きのツインシュートだ。惑星上ではとても撃てない程の威力の一撃。

だがザギは敢えてツインシュートに対し、真っ正面から突っ込んで来た。その身体が漆黒の光を放つ。

『フハハハッ！冥王を見くびるな！』

漆黒の光がオーラのように、ツインシュートを遥かに上回るパワーで放射された。

ツインシュートはあっさり打ち消され、星が煌めく宇宙空間を漆黒の闇が覆って行く。『ダークネス・ザギ』がゼロを直撃した。

ゼロは闇に飲み込まれてしまう。周囲を漂う隕石群も暗黒波動の巻き添えを食い、瞬時に消滅してしまった。

余波は退避中だったアースラにも襲い掛かった。防御シールド越しでも振動が船体を揺さぶる。恐るべき威力だ。

地上で使用していたなら、どれ程の被害になる事か。　リンディは揺れ動くブリッジで、懸命に艦長席に掴まりながら、ザギの影響でノイズだけが走る正面モニターを見上げる。

（やられてしまったの？ウルトラマンゼロ…？）

リンディの心配を余所に漸く余波が収まり、モニターが復旧する。
正面には悠然と宇宙空間に浮かぶ、ザギの後ろ姿が見えた。

「ウルトラマンゼロは！？」

ゼロの姿を探すリンディの目に、白銀の翼のようなものを纏った巨人の姿が映る。
ゼロ最強の姿『ウルティメイト・ゼロ』であった。

『フフン…それがノアから授かった力か…？』

ザギはウルティメイト・イージスを纏ったゼロを、不遜な態度で見下ろした。

『そうだ！最期だダークザギ！！』

ゼロの右腕に装備されている白銀の剣が光を放った。
ザギは来いとばかりに両腕を広げる。正面からゼロソードを迎え撃つつもりだ。

『くたばりやがれえええっ！！』

ゼロソードの切っ先が光の速度を超える。空間をも斬り裂く、必殺の斬撃がザギに振り下ろされた。

スパークが飛び散り、放射線状にソードの衝撃波の余波が広がる。

だが…

『ば…馬鹿な……？』

ゼロの目が驚愕で輝いた。ゼロソードはザギの両腕によって、ガッチリと受け止められている。

漆黒の巨人の両腕の紅いラインが光を放っていた。両腕にパワーを集中させ、ソードを耐えきってしまったのだ。

『フハハハッ！どうやらノアと等しくなった我に、ノアの力の一部を授けられただけの貴様は、及ばなかったようだな！？』

ザギは勝ち誇った雄叫びを上げた。同時にザギ・イージスが、宇宙空間に轟くばかりの稲妻を放つ。

強烈な電撃波がゼロの身体を貫いた。常識を越えた数千億ボルトの電撃が全身を焼いて行く。

『クソォッ！！』

ゼロは激痛に耐え、電撃の射程範囲から辛うじて脱出した。

（歯が立たねえ！こうなれば、最後の手段に賭けるしか…だが……）

ゼロは最後の手段に望みを託そうとする。ソードを破られてはそれしか無い。　今の彼には、最大の破壊力を持った武器『ファイナルウルティメイト・ゼロ』が残されている。

その威力は、体長数百メートルの『アーク・ベリアル』を、惑星サイズの巨大宇宙船ごと消滅させた程だ。

今のダークザギを倒せるのはそれしか無い。しかしファイナルを放つには、相応のエネルギーチャージの時間が必要であった。

以前ベリアルに放つ事が出来たのは『ミラーナイト達』が発射までの時間稼ぎをしてくれたお陰である。

（親父達はまだ来れない…逃げ回りながらチャージするしかねえ！）

そう思い定めたゼロはザギと距離を取りながら、周囲を高速で飛び回り始めた。

その速度は音速を遥かに超える。高速移動しながらゼロは『ウルティメイト・イージス』を脱着させた。

分解されたイージスが、デルタ型の白銀の盾のような形に組み合わされる。

持ち手を掴むと光の弦が発生した。イージスを弓矢のように構え、

その弦を引き絞る。

その先端に光が集中し始めた。最終武器ファイナル・ウルティメイト・ゼロを放つ形態である。

『フン……』

ザギはおもむろに片手を掲げた。それに惹かれるように、周囲の隕石が一斉にゼロに襲い掛かる。

大小様々な隕石群が、暴風雨の如くゼロに向け突っ込んで来た。

（クソッ！エネルギーチャージがっ…）

ゼロは高速で飛来する隕石群の中、必死で発射に集中しようとするがままならない。

『フハハハ！どうしたどうしたっ！？』

ザギの嘲る声と共に、直径数十メートルは有る隕石がゼロの背後から迫って来ていた。

辛うじて身をかわす彼の目前に、不意に漆黒の巨人が現れる。瞬時にテレポートを掛けて来たのだ。

『しまっ…？』

『遅いっ！』

次の瞬間、1兆度の炎の拳がゼロの腹部に炸裂した。

『グハアアッッ!?』

ゼロは、内臓がバラバラになりそうな衝撃に苦痛の声を上げてしまう。

内臓が捻くれる。骨も何本かやられていた。しかしそれでもイージスを構えるのを止めない。

今諦めたら終わりだ。みんなの必死で足掻く姿が浮かんだ。光になって消えて行った母子の間際の顔が浮かぶ。

気力を振り絞り、ザギの攻撃範囲から離脱した。

(後少し…!)

ゼロは身体を苛む激痛を堪え、地球を背に再びザギにイージスを構えた。だが時は既に遅かった。

『遊びは終いだ……』

死刑を告げるような低い声が響く。ザギは左腕に右拳をガッチリと打ち付けていた。その右腕に凄まじい量のエネルギーが集中する。

ザギ必殺の『ライトニング・ザギ』の発射態勢!

『散れ…!!』

空間を焼き尽くしながら放たれる破壊の激流に、ゼロは成す術も無く飲み込まれた。

死の光が少年の身体をズタズタに焼き尽くす。ゼロは声を上げる暇も無く火達磨になった。

真っ逆様に地球に向かって墜ちて行く。空気の無い宇宙空間に炎が煌めいた。

最早身体はピクリとも動かない。完全なる敗北であった。ゼロの巨体は大気圏に突入し、真っ赤に燃え上がる。

意識が遠のいた。両眼の光が風前の灯火のように弱くなり、遂には消えてしまう。

ゼロは一筋の流星となって、地上に落下して行った。

＊　＊

「ゼロ兄っ！？」

はやてはハッとして上空を見上げた。ヴォルケンリッターも同じく上空を見上げる。

はやての目に、火達磨になって落下して来るゼロの姿がハッキリと映った。結界の外の光景の筈が、彼女の目には確かに見えた。

考えるより先に、はやては夢中で飛び出していた。いや八神家全員が同時に飛び出していた。

全員の目には、今にも燃え尽きようとしているゼロの姿が鮮明に映っていた。

「ゼロ兄っ！」

《ゼロッ！》

「ゼロッ！」

「ゼロォォッ！」

「ゼロ君っ！」

「ゼロォッ！」

はやてがリインフォースが、シグナムがヴィータがシャマルが、ザフィーラが叫んだ。

一斉に手を伸ばす。まるでその巨体を全員で受け止めようとでもするように。

その時であった。はやて達に呼応するように、ブレスレット形態に戻ってしまっていた『ウルティメイト・ブレスレット』が眩いばかりの光を放った。

ゼロは遠のく意識の中声を聞いた。黄泉路から自分を引き戻してくれた人物と同じ声それは……

《光は絆…ネクサス……》

ゼロの両眼に再び力強い光が灯った。

「ゼロ兄……」

はやては少年の名を呼んだ。６人の目に、ゼロの身体が光になって行くのが見える。

暖かな黄金の光。その光ははやて達にもしずしずと降り注いだ。

（これは……？）

はやては眩い光の中、上空の光を見上げる。身体が光にゆっくりと溶けて行く気がした。

恐怖は無い。その光は暖かく優しかった。そして次の瞬間黄金色の光に包まれ、はやて達は光になった。

『おおっ！アレは！？』

最後のビーストを撃破したセブンは、上空の光の塊を見上げて声を上げた。

『あれはまさしく……』

メビウスは感慨深く呟く。それは彼に最も馴染み深い光景だった。

眩い光が巨人の形を取る。光が晴れると其処には、ウルトラマンゼロらしき姿が在った。

『あの姿は……』

レオはその姿を見上げ思わず唸る。アストラもその戦士の姿を見上げた。

『あの嬢ちゃん達全員と……』

メロスも驚きの声を洩らした。宙に浮かぶ、神々しささえ感じさせるゼロの姿。

背に6枚の光の羽根を広げ、胸のカラータイマーを中心に黄金色の剣十字が描かれていた。

身体の各部に黒と紫、緑のラインがそれぞれ疾っている。

それははやてと、ヴォルケンリッター全員の特徴が浮かび上がっ

ていた。

はやては眩いばかりの光の中に存在している自分を自覚した。隣を見ると、シグナム達全員が同じく光の中に存在している。

「私らゼロ兄になっとる……？」

《はい…我が主……》

はやてはゼロとの確かな繋がりを感じた。融合しているリインも応える。途方も無い一体感。

「これが……」

シグナムは静かに目を閉じた。閉じた筈の目から、周りの光景がハッキリ見える。

ゼロが見ているものを、彼女も直接感じ取る事が出来た。

「すっげー……」

ヴィータも目を閉じ、合一感に身を委ねた。ゼロの巨大な腕はヴィータの腕でもあった。

「私達…ゼロ君そのものになっているのね……」

「力が漲って来る…！」

シャマルもザフィーラも感嘆の声を洩らした。自らが光の巨人となった感覚だった。

今はやてがゼロであり、シグナムがゼロであった。ヴィータがゼロであり、シャマルがゼロであり、ザフィーラがゼロであり、リインフォースがゼロであった。

《行くぜみんな！》

ゼロの声が全員の心に直接響く。声を出すまでも無い。はやては心で応えていた。

（最後の決戦や！）

そうこれこそが、八神家全員が合体した姿。

『ナハトヒンメル・ゼロ』『夜天のウルトラマンゼロ』であった。

つづく

第６３話　夜天一ゼロ一（後書き）

『ナハトヒンメル・ゼロ・夜天のウルトラマンゼロ』は、メビウスの『フェニックスブレイブ』と似たイメージです。

ウルティメイト・イージスの力で、八神家全員が合体した姿になります。

唯一のオリジナルフォームです。最もフェニックスブレイブのように、奇跡の合体なので出番はフェニックスと同じくらい…？

一応作品タイトルと掛けてあったのです。

それでは次回ザギとの最終決戦でお会いしましょう。

第６４話　絆ー ネクサス ー（前書き）

読んで頂きありがとうございます。
やっとここまで辿り着く事が出来ました。続けて来れたのは読んで下さる皆さんのお陰です。

それでは最終決戦の第６４話をどうぞ。

第６４話　絆ーネクサスー

「最後の決戦や！」

はやてが叫ぶと共に、一つとなった八神家『ナハトヒンメル・ゼロ・夜天ゼロ』は、６枚の光の翼を広げ天空へと舞い上がった。

その光の翼を羽ばたかせる姿は、雄々しい戦いの天使のようであった。

セブンは飛び去って行くゼロを見上げ、

『そうか…お前は…それ程の絆を見つける事が出来たのだな……』

感慨深く嬉しそうに呟いた。

＊　＊

＊

『ダークザギ』はゆっくりと地上に降下しようとしていた。

『アースラ』には目もくれない。ザギにとって路傍の石のように、

取るに足りない存在なのだろう。
ウォーミングアップとばかりに、残りのウルトラ戦士達を片付けるつもりなのだ。

『何だ……？』

降下して行くザギはふと、大きな力を感じ降下を止めた。その目に6枚の光の翼が映る。

『ザギッ！貴様の相手はこの俺達だ！！』

ザギの前に光の翼を広げた、雄々しい巨人戦士が姿を現わす。『夜天ゼロ』は敢然とザギの前に立ち塞がった。

『フン…まだ生きていたか…そのしつこさだけは誉めてやろう…』

ザギは見下した態度で傲然と夜天ゼロを見下ろした。背中の『ザギ・イージス』が鋭い雷光を放つ。
雷光は凄まじい雷となって夜天ゼロを降り注いだ。夜天の騎士は動じず、ゆっくりと右手を掲げる。その前面に輝く三角形の魔法陣が展開された。

『何ぃっ！？』

驚くザギの目の前で『ザギ・スパーク』が容易く跳ね返されていた。

『「守護の盾！」』

ゼロとザフィーラが共に叫ぶ。

「なら…次は私だ！」

シグナムが不敵に叫ぶ。その意思のままに左腕のブレスレットが変化し、白銀の鎧『ウルティメイト・イージス』が夜天ゼロの身体に装着された。

右腕の白銀の剣『ウルティメイト・ゼロソード』に紫の魔法光が満ち、燃え盛る業火の剣と化す。

『「紫電…一閃っ！！」』

夜天ゼロは凄まじいスピードでザギとの間合いを一瞬で詰め、業火の剣を袈裟掛けに振り下ろす。

業火の剣が灼熱の刃となって、冥王の身体を斬り裂いた。

『グオオオオオッ！？』

その身体から血のように火花が飛び散り、漆黒の巨体が初めてぐらついた。

「次はアタシだ！」

ヴィータはここぞとばかりに勢い込んで叫んだ。夜天ゼロが拳を

力強く握り締める。

『「ラケーテンッ！」』

夜天ゼロが拳を握り締めると共にその拳に光が集中し、巨体が竜巻の如くスピンした。

まるで拳から、ロケット推進剤でも噴き出しているような勢いだ。

『おのれええっ！！』

迎え撃つべくザギも、その拳に超高熱の炎を纏わせた。『ザギ・インフェルノ』の一撃。巨大な２つの拳が激突する。

『「ハンマアアアアアアッ！！」』

夜天ゼロの遠心力をプラスした拳が白熱化し、凄まじいまでの勢いでザギの拳にぶち当たった。

真っ正面から夜天ゼロの拳がザギ・インフェルノを弾き返し、その一撃がザギのボディーに深々と叩き込まれる。

同時に拳に込められたエネルギーが、ゼロ距離で一挙に爆発した。

『グハアッ！！』

強烈極まる打撃に、ザギの巨体が吹っ飛んでいた。自らが呼び寄せた巨大隕石に激突し、その勢いで隕石が粉々に砕け散る。桁違いのパワーであった。

「ざまあみろ！言った通り、叩き込んでやったぜ！！」

ヴィータは良し！とばかりに歓声を上げた。
しかしザギもそのまましてやられはしない。直ぐ様態勢を立て直し、怒りに肩を震わせながら夜天ゼロを睨み付けた。

『いい気になるな！虫けらがあっ！！』

左腕に右拳を激しく叩き付ける。必殺の『ライトニング・ザギ』の発射態勢！

その左腕から放たれる、赤黒い光の超絶の破壊光線。先程ゼロに放ったものより遥かに出力は上だった。

夜天ゼロは地球を背にしている。空間を焼き尽くして迫る光線は、一撃で地球を吹き飛ばすだけの威力を秘めていた。避ける訳にはいかない。

『「そうはさせません『旅の鏡』！」』

シャマルとゼロの声が同時に響く。夜天ゼロの突き出された右手の前面に、暗緑色の巨大な空間ゲートが形成されていた。
赤黒い光の激流は、ゲートに呑み込まれるように吸い込まれ、その勢いを保ったままザギ目掛けて反転された。
空間をねじ曲げ、ライトニング・ザギをそっくりお返ししたのだ。

逆に自らの破壊光線を浴びせられたザギは、とっさに両腕と防御シールドでガードするが、全てを殺し切れない。衝撃に怯み後退し

てしまった。

夜天ゼロはその隙を見逃さない。はやてとゼロが同時に叫んだ。

『「響け終焉の笛…ラグナロク・ゼロショット！！」』

夜天ゼロは両腕をガッチリとL字形にクロスさせた。その前面に魔法陣が展開されると同時に右腕がスパークし、凄まじいまでの光の激流が放たれる。

『ワイドゼロショット』とラグナロクが合わさった合体光線だ。

ザギはとっさに前面に円形の防御シールドを張り巡らし対抗するが、

『馬鹿なあっ！？』

ラグナロク・ショットが防御シールドを容易く突き破り、ザギに炸裂した。苦しみもがく漆黒の巨人は、恐ろしい程の爆発の閃光の中に消え失せる。

「やった！！」

「いや…まだだ…！」

思わず喜びの声を上げるヴィータに、シグナムが注意を促した。閃光が晴れると、身体中の紅いラインを不気味に発光させたザギの姿が現れる。

無事とまではいかなかったらしく表皮が破損し、装甲があちこち

剥がれ掛け、その隙間から血のように紅い光が漏れていた。

「あの一撃を食らって、持ち堪えたのか……」

「何て怪物なの！」

シグナムとシャマルは、驚愕の目で漆黒の巨人を見た。今の夜天ゼロの驚異的な力は判っている。

ザギは惑星破壊レベル以上の攻撃を堪え切ってしまったのだ。

『赦さん…赦さんぞ虫けらがあっ！！』

ザギは怒りに身を震わせて吼えた。その怒りに呼応するように、背中の『ザギ・イージス』が放電現象を起こし始める。

『何だ？奴にとんでもない量のエネルギーが集中して行くぞ！』

ザギの只ならぬ様子に警戒するゼロに、シャマルは顔色を変え、

「嘘！次元震…いえ、これは次元断層を引き起こす程のエネルギーが発生しつつあるわ！」

「まだ切り札を隠し持っていたのか？あんなものを撃たれたら……」

ザフィーラもその破滅的なエネルギー量に焦りを隠せない。目前のザギは狂ったように両腕を掲げた。

『この世界ごと貴様らを消し飛ばしてくれるわあっ！！』

ザギの漆黒の身体から闇色の波動が発生し、パワーが上がる毎に真紅の両眼が更にギラリと光を放つ。

空間が冥王に怯えたように震えた。放電現象と闇の波動により、世界そのものが揺れ動いている。

『ザギ・ザ・ファイナル』闇の波動により、全てを消し去るザギの究極の技。

ザギ・イージスを手に入れた事により、その威力はこの世界ごと、周囲の次元世界をも破壊してしまう力を秘めていた。

『そんな事させるかあっ！ウオオオオッ！！』

夜天ゼロの雄叫びと共に、装着されていた『ウルティメイト・イージス』が弾かれたように分解し、巨大な白銀の弓を形成した。

イージスの最終攻撃形態『ファイナルウルティメイト』だ。

夜天ゼロはそれを弓矢のように構え、下部の光の弦を引き絞り、

ザギに狙いを定めた。
イージスに黄金色の光が集まり、５つ有る青いエネルギーランプの１つに光が灯る。

宇宙空間に黄金の光と闇色の光が浮き上がった。夜天ゼロとダークザギ、共に雌雄を決すべく、お互いの身体に莫大なエネルギーが集中して行く。しかし……

『不味い！奴の方が速い！！』

「先に撃たれてまう！？」

ゼロとはやては焦りの声を洩らした。ザギの方が先にエネルギーチャージを終えつつある。
此方はまだランプが３つまでしか点いていない。必殺技はまだ撃てない。絶対絶命であった。

『フハハハッ！遅い！！』

ザギが勝ち誇って嘲りの声を上げた時だ。

『そうはさせんぞ！ダークザギ！！』

頼もしい声と共に、青白い光の束がザギに炸裂した。『ワイドショット』の一撃。
其処には両腕をＬ字形に組んだ『ウルトラセブン』の姿が有った。

『待たせたねゼロ！セアアッ！！』

目に鮮やかなファイヤーパターンの身体が舞う。『ウルトラマンメビウス・バーニングブレイブ』が、必殺の『メビューム・バースト』を放った。

巨大な火球がエネルギーチャージ中のザギに撃ち込まれ、その身体を炎が包む。

しかしザギは物ともせず怒りの声を上げた。

『おのれ小癪なウルトラ戦士共があっ！！』

『こっちにも居るぜ！レーザーショット、アンドロメロス！！』

白銀の鎧姿の超人が腕をクロスさせた。メロスの必殺光線が連続してザギに命中する。

『貴様の勝手にはさせん！アストラ行くぞ！！』

『おおっ、兄さん！』

両手を組み合わたレオ兄弟から、稲妻の如き光線『ダブルフラッシャー』が更にザギに炸裂する。

ウルトラセブン、メビウス、レオ、アストラ、メロス、駆け付けて来てくれたウルトラ戦士全員が集結していた。

《ゼロがあれを撃つには時間が要るようだ。その間ザギを撹乱するぞ！》

瞬時に状況を察したセブンの指示に、全員は一斉にザギに向けて必殺光線を放つ。

宇宙空間を流星の如く飛び交う光線の嵐。

だがザギは連続攻撃にビクともしない。先程夜天ゼロにやられた傷も修復されつつあった。防衛プログラムの無限再生力だ。

『フハハハ！そんな攻撃では、我を倒す事など出来ん！貴様らもこの世界と共に滅ぶがいい！！』

ザギは高笑いし、再びエネルギーチャージを始めた。

『いかん！休まず撃ち込むんだ！！』

セブンは再びワイドショットをフルパワーで放つ。各自も必殺光線を漆黒の巨人に雨あられと撃ち込んだ。

それでもザギのエネルギーチャージを止める事が出来ない。

『不味い！ザギの方がまだ速い！？』

光線を撃ち続ける中メロスは危機を感じ、特攻覚悟でザギに突っ

込もうとする。
鎧を盾にすれば少しは持ち堪える事が出来る筈。それしかチャージを止められそうに無い。
突っ込もうとしたその時、全員に女性の声が聞こえて来た。

《これで聞こえますね？『アースラ』艦長リンディ・ハラオウン』です。『アルカンシェル』を奴の背後に撃ち込みます！》

それは退避したと見せかけて、エネルギーチャージを行っていたアースラからの念話であった。
密かにザギの背後に回り込んで、チャンスを窺っていたのである。
二股に別れた艦頭にリング状の魔法陣が展開される。リンディは狙いを定め、再び発射キーを回し込んだ。

「アルカンシェル発射！！」

ザギの背後に衝撃が走った。アルカンシェルが漆黒の巨人に炸裂する。
しかし砲撃は、ザギ・イージスの放つ放電に無効化されてしまう。
だが思わぬ攻撃に、ザギのエネルギーチャージが僅かに遅れてしまった。その僅かな時間が命取りとなる。
夜天ゼロの構えるイージスの、５つのランプ全てに光が灯った。
それに伴いイージスが眩いばかりの光を放つ。発射大勢は完了した。

『跳ね返してくれるわあっ！！』

対抗するザギの身体も一際鋭く輝いた。その漆黒の巨人の中の存在をはやては哀しそうに見つめ、

「ごめんな…お休みな……」

それは『闇の書の闇』に対するたむけの言葉だった。

人間に翻弄され続け、今また悪魔の一部になってしまったリイン達の一部だった者への……

『はやて……』

ゼロの優しい響きの声が心の中に直接聞こえる。

『解放してやろう…俺達で……』

その言葉にはやてはコクリと頷いた。彼女を囲み、守護騎士達は円陣を組むように一斉に中心に手を伸ばす。

真の主となった少女は、決意を秘めた瞳で目前のザギを見つめ、守護騎士達の伸ばされた手に、自らの手を重ねた。

その瞬間夜天ゼロの光の翼が勢いを増す。夜天ゼロは光の弦を力の限り引き絞った。

『受けてみろダークザギ！これが俺達の光だ！『ファイナル・ナハトヒンメル・ゼロ！！』』

超速で打ち出されたイージスは七色の光に包まれ、あらゆる因果事象を超え、フェニックスの如く宇宙を翔けた。

押し寄せる暗黒波動を突き破り、ザギの身体に凄まじい勢いで激突する。しかし僅かな所で、身体に食い込む寸前で止められていた。切り札のファイナルを破られてしまったのか！？

『フハハハ！この程度か…？うおっ！？』

勝ち誇ろうとしたザギの目前で、イージスがドリルのように高速回転を始めた。イージスが漆黒の巨人の身体にめり込んで行く。回転は勢いを更に増し、ザギの巨体が発生した光の竜巻に飲み込まれて行く。

『グアアアアアアアアアアッ！！』

絶叫を上げるザギ。無限再生力を遥かに上回る衝撃が細胞を砕いて行き、冥王の身体をイージスが一気にぶち抜いた。　漆黒の巨人は七色の光の嵐に巻き込まれ、ボロボロと崩れ去り消滅して行く。

『馬鹿なあっ！この冥王がああああああっ！！』

断末魔のおぞましい叫びを上げ、ザギは宇宙空間を太陽のように明るく照らし、大爆発を起こした。

《ダークザギ完全消滅…防衛プログラムも再生反応有りません…》

エイミィの報告にリンディは、爆発の様子をモニターで確認しながら頷いた。超新星爆発の如き閃光であった。

「準警戒態勢を維持…ゲートの件も有るので、もう暫く反応空域を観測します……」

《了解っ》

通信を終えたリンディは、感慨深くザギが消えた空間を見つめる。

（クライド……）

夫の名を呟いてリンディは静かに目を閉じた。

＊
＊

「フハハ…ゼロ…お前はそう来たか……」

天空に咲いた、巨大な花のような閃光を見上げ、ゼロに良く似た青年は凄惨な笑みを浮かべた。

『ウルトラセブン・アックス』の人間体である。彼はさも愉快そうに肩を揺らした。

街中の高層ビルの屋上に、アックスは行儀悪く脚を投げ出して座り込んでいる。周りには数人の男女が静かに立っていた。

「主様楽しそうだね？」

その中の1人、青い髪をツインテールにした少女『レヴィ』が無邪気に聞いて来た。

「当たり前だ…楽しみがまた増えたんだからな……」

アックスはニヤリと笑うとゆっくりと立ち上がった。ズボンの埃を払うと、屋上のフェンスの上に軽々と飛び乗り、

「さてと…引き上げるぞ…お楽しみはこれからだ…」

無造作にズボンのポケットに手を突っ込むと、一気にビルから飛び降りた。

「わ～いっ、楽しみ楽しみっ！」

はしゃぐレヴィも後に続いて飛び降りる。彼女以外の男女も無言で後に続いた。

アックス達は色の無い街に、吸い込まれるように消え失せてしまう。後には寂漠とした風だけが渦を巻いていた。

＊

＊

ザギの爆発は、地上のフェイト達の目にもしっかりと捉える事が出来た。

閃光が薄れて行く。気が付くと白いものが、天からはらはらと、舞い降りて来るのが見えた。今年最初の雪が降り始めていた。

エイミィからの連絡を受けたフェイトとなのはは、思わず手を叩き合っている。全員の表情にも安堵の色が浮かぶ。

凄まじい戦いであった。全員極限まで魔力と体力を消耗している。

「見てあれ！」

空を指差すアルフに釣られて、全員が空を見上げた。
6人の巨人戦士達が降りて来るのが見える。ゼロ達であった。

地上に降り立った夜天ゼロが眩い光を放つ。
光が晴れると其処にははやてを始めとする、守護騎士達全員の姿が有った。

同時にゼロ達も人間サイズに縮小している。流石にもう巨体を保てないのだろう。
フェイトとなのははやての元に、文字通り飛び寄っていた。

「はやてちゃん！」

「はやて凄かったよ」

「なのはちゃん、フェイトちゃん」

ニッコリ笑うはやてと2人は、ハイタッチを交わしていた。
その光景を微笑ましく全員で見つめている。和やかな空気が流れた。

飛び散ったビースト細胞の始末は、セブン達が既に終えていた。
その為駆け付けるのが遅れてしまったのである。（こちらも後回

しにすると、大変な事になってしまう）

『闇の書』暴走時の建物の修復作業が残ってはいるが、概ね状況は終了していた。

すずかとアリサも元の場所に無事転送され、一安心という所である。

もっともなのはは、訳が解らずキレているアリサの姿を容易に想像出来たが…

シャマルはユーノやアルフと笑顔で顔を合わせ、シグナムとヴィータは思わず安堵の息を吐いていた。

そんな中クロノと話していたフェイトはふと、ザフィーラと拳を合わせているゼロに目をやった。

何か胸に有るランプのようなものが、赤くチカチカ光っているなと思っていると、不意にゼロがガクリと崩れ落ちた。

「ゼロ！？」

慌てて海に落下しそうになるゼロを捕まえるザフィーラの声に、全員が振り返った。

その目前でゼロの姿が光のリングに包まれる。リングが消え去ると其処には、服を血まみれにした少年の姿が有った。

「ゼロ兄ぃっ！？」

「ゼロッ！？」

はやて達が翔け寄る中、ゼロは完全に意識を失っていた。オロオロするはやて達に、ゆっくりとセブンが近寄り、

『心配要らない…息子はタフだからね、怪我はしているが命に別状は無い…限界まで力を使い果たしたんだよ……』

安心させるような温かな声だった。その言葉にはやては安堵の息を吐く。

フェイトはそんな中、食い入るように少年の顔を見つめていた。

（ああ…やっぱり……）

間違えようも無くあの少年だった。隣でアルフもハッとして、ゼロの顔を凝視している。

「フェイト…あの子って…まさか……」

アルフが表情を引きつらせて、フェイトに言い掛けた時、

「はやて！？」

「はやてちゃん！？」

ヴィータとシャマルが血相を変えて、はやてに呼び掛けていた。

はやてもいきなり倒れてしまい、シグナムに抱き抱えられている。

呼び掛けにも反応しない。完全に意識を失っていた。

その時心配するヴィータ達の耳に声が聞こえて来た。

「大丈夫だ…心配は無い……」

倒れたはやてから抜け出るように、何者かがゆらりと現れる。輝く銀髪をなびかせた紅い瞳の女性『リインフォース』であった。

ーーーーーーーーーー

意識を失ったゼロはふと、眩しい光の中で目を開けた。

目を覚ました訳では無い。自分の深層意識の中で、意識の一部のみが覚醒している。そんな夢うつつな状態だった。

意識の中で目を開けたゼロの前に、光り輝く翼の白銀の巨人が彼を見下ろしているのが見える。

（ウルトラマンノア……）

ゼロは安らぎさえ感じる神々しい姿に、かつて出会った巨人の名を口にしていた。

（そうか…今まで俺を助けてくれてたのは、本物のアンタだったのか……）

ゼロは今までの事を思い出し、漸く腑に落ちた。最初に『闇の書』の記憶を見せたのも、死に掛けていた自分を呼び戻してくれたのもノアだったのだ。

ノアは無言で頷いた。言葉こそ発しないが、ゼロにはノアが何を伝えたいのか判る気がした。

以前聞いた青年の言葉が思い出される。あの言葉が自分を救ったのだ。

（ありがとうノア…アンタもガンバレよ……）

ゼロが微笑んで礼を言う。ノアもきっと別の世界で戦い続けている。彼にはそんな確証があった。

その言葉に白銀の巨人も微かに笑ったような気がする。そんな事を思っていると、再び意識が薄れて行く。

《ウルトラマンゼロ…君もね……》

完全に意識が途絶える前にゼロは、確かに以前聞いた青年の声を聞いた……

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「孤門隊員……」

女性の自分を呼ぶ声に、『孤門一輝』は閉じていた目をゆっくりと開けた。

目の前には、慣れ親しんだ計器類やコンソールが見える。そして此方を振り向いている、黒いヘルメットにダークブルーの戦闘スーツの女性。

顔面までスッポリと覆うヘルメットのフェイスカバー部分から、とりあえず中の人物の顔が判別出来た。

凛とした甘さを削ぎ落としたような鋭い美貌の女性。『ナイトレイダー』和倉隊の副隊長『西条凪』である。

（そうだった……）

孤門は自分の今居る場所を思い出す。此処はナイトレイダーの誇る大型戦闘機『ストライクチェスター』の復座式コックピットの中だ。

そしてキャノピーから見える光景は無限に広がる宇宙空間である。背後には青い地球が望め、辺り一面に輝く星の光が満ち、計器類のパネルのみが照らす、ほの暗いコックピット内をほのかに照らしていた。

「ザギは消滅しました…あの世界のみんなが頑張ってくれたようです……」

孤門はカバー越しに笑みを浮かべ、凪副隊長に結果を伝えた。

「そう……」

凪副隊長もその表情に感慨の色を浮かべた。彼女もザギには色々と含むものが有る。

《どうやらザギは滅んだようだな……》

渋みの有る男性の声で通信が入って来た。同じくストライクチェ

スターの別コックピット内の『和倉英輔』隊長である。

「はい…此方の手が離せないばかりに、彼らには迷惑を掛けてしまいました……
ザギが妨害波動を発していた為に、満足に助言も出来ませんでしたし……」

済まなそうな表情をする孤門に、和倉隊長は元気付けるように、

《仕方あるまい…この状況ではな……》

苦笑いを含んだ声に孤門は周囲に目をやった。其処には無数の同型のストライクチェスターが編隊を組んで、宇宙空間に静止している。

宇宙戦闘用に改修を受けた、ストライクチェスターの大編隊であった。
世界各国のナイトレイダー支部から、選りすぐって集められた精鋭部隊である。

《ビースト振動波キャッチ！月の裏側の『奴ら』が動き出しました！》

何処か陽気な響きの女性の声で報告が入って来る。『平木詩織』

隊員だ。

孤門は前方の、青白く輝く月に視線を向ける。拡大モニターに、おびただしい数の異形の群れが次々に飛来するのが見えた。

月の裏側で大量発生したスペースビーストの大群である。数年前にザギが滅んだ後、弱体化していた筈のビーストが近年謎の強化を遂げていた。

孤門はウルトラマンノアとして、現在までずっと強化されたビースト群と戦い続けて来たのである。とても他の世界へ行く余裕などなかったのだ。

ビーストは今だに正体が解らない敵である。何処で産まれ、どんな存在なのかも解ってはいない。

（ビーストの根源的なものが近付いているのかもしれない……）

孤門は大きな戦いの予感を感じながらも、変身アイテム『エボル・トラスター』を取り出す。最近戦闘での疲労度もかなりのものになって来ていた。

「孤門隊員…済まないけど任せたわ……」

凪副隊長は、操縦桿に力を込めながら僅かに表情を曇らせる。そんな孤門の状態が解っているのだろう。

孤門は凪に、心配ないとばかりに微笑み掛けると、頭上に翳したエボル・トラスターの鞘を一気に引き抜いた。

『うおおおおおおおっ！！』

エボル・トラスターの刃先が眩いばかりの光を発し、孤門の身体が光に包まれる。

そしてストライクチェスターの編隊の中央に、光り輝く巨人が姿を現した。

翼持つ銀色の巨人。ウルトラマンノアがその神々しい姿を顕現させる。

迫る岩石のような身体のビーストの大群が此方に突っ込んで来た。迎え撃つストライクチェスターから、一斉砲撃が始まる。

ストライクパニッシャーの一斉砲火だ。次々と撃墜されて行くビースト。しかしその数は一向に減らない。

次々と月面から新手が押し寄せて来る。月がビーストの巣になっているのだ。その数は億に迫る勢いであった。

孤門・ノアは右腕に、ガッチリと拳を組み合わせる。その右腕に凄まじいばかりのエネルギーが集中した。

『シェアアアッ！！』

次の瞬間放たれる超絶の破壊光線。次々とビースト群が光の激流『ライトニング・ノア』を受け、爆発四散して行く。辺り一面が真昼のように明るく照らし出された。

その光の中ノアは、ビースト群目掛けて飛び出した。迫り来る敵を蹴散らし、その速度は光の速度を超える。
ビーストをなぎ倒しながら孤門・ノアはふと、ゼロ達に思いを馳せた。

（これからも君達には数々の困難が待ち受けているだろう…）

迫り来るビーストに『グラヴィティ・ノア』が炸裂し、異形の群れの中に道が出来る。

（でも君達なら必ず打ち破る事が出来る…どんな事が有っても最後まで諦めるな！！）

ノアは別世界の戦士達に心の中でエールを送り、月の裏側に向かって敢然と、ビーストの大群の中に突入して行くのだった。

つづく

第６４話　絆ー ネクサス ー（後書き）

孤門のその後は妄想です。スペースビーストはネクサスの話の中でも、設定の中でも一切正体が知れない存在なので、本編終了後こうなるかも?みたいなノリで書いてみました。

次回でA'ｓ編も最終回。これからもお付き合い頂ければ嬉しいです。

それではA'ｓ編最終話でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6966m/

夜天のウルトラマンゼロ

2011年11月17日17時48分発行